

浅井三姉妹のバカな日常外伝 仮面ライダーボマー

門矢心夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キャッチコピー「見えるのは、頂点のみ。その生徒会長、元ヤンで仮面ライダー！」

浅井三姉妹のバカな日常の物語から少し時が経ち、新学期。

高校三年生になった六角美咲は、蘇我高校からの果たし状を受け取り、

生徒会メンバーからの反対を押し切って戦う事を決意する。

それを止めようと現れる、蘇我高校教師の福沢裕太。

その制止すらも押し切って、六角美咲は戦いを挑むが、狩野遥の技術によって怪人化した蘇我高校の生徒達に苦戦を強いられる。

特別な力を持つ者「突然変異体」のみが使用出来るドライバーである『ボマードライバー』を裕太から受け取り、爆発による死でのみそこから蘇生が可能な力を持つ六角美咲は、仮面ライダーボマーへと覚醒する……！

こちらは、なろうやカクヨムにて投稿した『浅井三姉妹のバカな日常』の外伝作品です。

特に読まなくても話が分かる構造にはなっていますが、読んでからの方がより物語を楽しめます。

カクヨム版 <https://kakuyomu.jp/work/s/1177354054888511220>

なろう版(美咲は出ません) <https://ncode.syosetu.com/n4518dl/>

目次

第一章

プロローグ

1

第一話

3

第二話

6

第三話

9

第四話

12

第五話

17

第六話

20

第七話

26

第八話

29

第九話

32

第十話

36

第十一話

39

第十二話

42

第十三話

46

第十四話

49

第十五話

52

第十六話

55

第十七話

58

第十八話

61

第十九話

64

第二十話

67

第二十一話

70

第二十二話

73

| | |
|-------|-----|
| 第四十六話 | 154 |
| 第四十五話 | 151 |
| 第四十四話 | 148 |
| 第四十三話 | 145 |
| 第四十二話 | 142 |
| 第四十一話 | 138 |
| 第二章 | |
| 第四十話 | 134 |
| 第三十九話 | 131 |
| 第三十八話 | 128 |
| 第三十七話 | 125 |
| 第三十六話 | 122 |
| 第三十五話 | 118 |
| 第三十四話 | 114 |
| 第三十三話 | 110 |
| 第三十二話 | 105 |
| 第三十一話 | 102 |
| 第三十話 | 99 |
| 第二十九話 | 96 |
| 第二十八話 | 92 |
| 第二十七話 | 89 |
| 第二十六話 | 86 |
| 第二十五話 | 83 |
| 第二十四話 | 80 |
| 第二十三話 | 76 |

| | |
|-------|-----|
| 第七十一話 | 230 |
| 第七十話 | 227 |
| 第六十九話 | 225 |
| 第六十八話 | 222 |
| 第六十七話 | 219 |
| 第六十六話 | 216 |
| 第六十五話 | 213 |
| 第六十四話 | 210 |
| 第六十三話 | 207 |
| 第六十二話 | 204 |
| 第六十一話 | 201 |
| 第六十話 | 198 |
| 第五十九話 | 195 |
| 第五十八話 | 192 |
| 第五十七話 | 189 |
| 第五十六話 | 186 |
| 第五十五話 | 183 |
| 第五十四話 | 179 |
| 第五十三話 | 176 |
| 第五十二話 | 173 |
| 第五十一話 | 170 |
| 第五十話 | 167 |
| 第四十九話 | 163 |
| 第四十八話 | 160 |
| 第四十七話 | 157 |

| | |
|-------|-----|
| 第九十五話 | 301 |
| 第九十四話 | 298 |
| 第九十三話 | 295 |
| 第九十二話 | 292 |
| 第九十一話 | 289 |
| 第九十話 | 286 |
| 第八十九話 | 283 |
| 第八十八話 | 280 |
| 第八十七話 | 277 |
| 第三章 | |
| 第八十六話 | 274 |
| 第八十五話 | 271 |
| 第八十四話 | 268 |
| 第八十三話 | 265 |
| 第八十二話 | 261 |
| 第八十一話 | 258 |
| 第八十話 | 255 |
| 第七十九話 | 252 |
| 第七十八話 | 249 |
| 第七十七話 | 246 |
| 第七十六話 | 243 |
| 第七十五話 | 240 |
| 第七十四話 | 238 |
| 第七十三話 | 236 |
| 第七十二話 | 233 |

| | |
|--------|-----|
| 第九十六話 | 304 |
| 第九十七話 | 308 |
| 第九十八話 | 311 |
| 第九十九話 | 314 |
| 第一百話 | 317 |
| 第一百一話 | 320 |
| 第一百二話 | 323 |
| 第一百三話 | 326 |
| 第一百四話 | 329 |
| 第一百五話 | 331 |
| 第一百六話 | 333 |
| 第一百七話 | 336 |
| 第一百八話 | 339 |
| 第一百九話 | 342 |
| 百十話 | 344 |
| 第一百十一話 | 346 |
| 第一百十二話 | 349 |
| 第一百十三話 | 352 |
| 第一百十四話 | 354 |
| 第一百十五話 | 357 |
| 第一百十六話 | 359 |
| 第一百十七話 | 362 |
| 第一百十八話 | 365 |
| 第一百十九話 | 368 |
| 第一百二十話 | 371 |

| | |
|---------|-----|
| 第四百四十四話 | 429 |
| 第四章 | |
| 第四百四十三話 | 426 |
| 第四百四十二話 | 423 |
| 第四百四十一話 | 421 |
| 第四百四十話 | 419 |
| 第四百三十九話 | 417 |
| 第四百三十八話 | 414 |
| 第四百三十七話 | 411 |
| 第四百三十六話 | 409 |
| 第四百三十五話 | 407 |
| 第四百三十四話 | 405 |
| 第四百三十三話 | 403 |
| 第四百三十二話 | 400 |
| 第四百三十一話 | 397 |
| 第四百三十話 | 395 |
| 第四百二十九話 | 392 |
| 第四百二十八話 | 389 |
| 第四百二十七話 | 387 |
| 第四百二十六話 | 384 |
| 第四百二十五話 | 381 |
| 第四百二十四話 | 379 |
| 第四百二十三話 | 377 |
| 第四百二十二話 | 375 |
| 第四百二十一話 | 373 |

| | |
|---------|-----|
| 第四百三十五話 | 432 |
| 第四百三十六話 | 434 |
| 第四百三十七話 | 437 |
| 第四百三十八話 | 440 |
| 第四百三十九話 | 442 |
| 第四百五十話 | 445 |
| 第四百五十一話 | 447 |
| 第四百五十二話 | 450 |
| 第四百五十三話 | 452 |
| 第四百五十四話 | 455 |
| 第四百五十五話 | 458 |
| 第四百五十六話 | 461 |
| 第四百五十七話 | 463 |
| 第四百五十八話 | 465 |
| 第四百五十九話 | 467 |
| 第四百六十話 | 470 |
| 第四百六十一話 | 472 |
| 第四百六十二話 | 474 |
| 第四百六十三話 | 477 |
| 第四百六十四話 | 480 |
| 第四百六十五話 | 483 |
| 第四百六十六話 | 485 |
| 第四百六十七話 | 488 |
| 第四百六十八話 | 490 |
| 第四百六十九話 | 492 |

| | |
|--------|-----|
| 第百九十四話 | 553 |
| 第百九十三話 | 551 |
| 第百九十二話 | 548 |
| 第百九十一話 | 545 |
| 第百九十話 | 542 |
| 第百八十九話 | 540 |
| 第百八十八話 | 537 |
| 第百八十七話 | 535 |
| 第百八十六話 | 533 |
| 第百八十五話 | 531 |
| 第百八十四話 | 528 |
| 第百八十三話 | 526 |
| 第百八十二話 | 524 |
| 第百八十一話 | 522 |
| 第百八十話 | 520 |
| 第百七十九話 | 517 |
| 第百七十八話 | 514 |
| 第百七十七話 | 512 |
| 第百七十六話 | 509 |
| 第百七十五話 | 506 |
| 第百七十四話 | 504 |
| 第百七十三話 | 502 |
| 第百七十二話 | 499 |
| 第百七十一話 | 497 |
| 第百七十話 | 494 |

| | |
|---------|-----|
| 第二百十九話 | 617 |
| 第二百十八話 | 615 |
| 第二百十七話 | 613 |
| 第二百十六話 | 610 |
| 第二百十五話 | 608 |
| 第二百十四話 | 605 |
| 第二百十三話 | 602 |
| 第二百十二話 | 599 |
| 第二百十一話 | 597 |
| 第二百十話 | 595 |
| 第二百九話 | 592 |
| 第二百八話 | 590 |
| 第二百七話 | 587 |
| 第二百六話 | 584 |
| 第二百五話 | 581 |
| 第二百四話 | 578 |
| 第二百三話 | 576 |
| 第二百二話 | 573 |
| 第二百一話 | 571 |
| 第二百話 | 568 |
| 第一百九十九話 | 565 |
| 第一百九十八話 | 562 |
| 第一百九十七話 | 560 |
| 第一百九十六話 | 557 |
| 第一百九十五話 | 555 |

| | |
|---------|-----|
| 第二百四十四話 | 681 |
| 第二百四十三話 | 678 |
| 第二百四十二話 | 676 |
| 第二百四十一話 | 674 |
| 第二百四十話 | 671 |
| 第二百三十九話 | 668 |
| 第二百三十八話 | 665 |
| 第二百三十七話 | 662 |
| 第二百三十六話 | 660 |
| 第二百三十五話 | 657 |
| 第二百三十四話 | 655 |
| 第二百三十三話 | 653 |
| 第二百三十二話 | 651 |
| 第二百三十一話 | 648 |
| 第二百三十話 | 645 |
| 第二百二十九話 | 642 |
| 第二百二十八話 | 640 |
| 第二百二十七話 | 638 |
| 第二百二十六話 | 635 |
| 第二百二十五話 | 632 |
| 第二百二十四話 | 630 |
| 第二百二十三話 | 627 |
| 第二百二十二話 | 624 |
| 第二百二十一話 | 622 |
| 第二百二十話 | 619 |

| | |
|---------|-----|
| 第二百六十九話 | 741 |
| 第二百六十八話 | 738 |
| 第二百六十七話 | 736 |
| 第二百六十六話 | 734 |
| 第二百六十五話 | 732 |
| 第二百六十四話 | 729 |
| 第二百六十三話 | 726 |
| 第二百六十二話 | 724 |
| 第二百六十一話 | 722 |
| 第二百六十話 | 719 |
| 第二百五十九話 | 716 |
| 第二百五十八話 | 714 |
| 第二百五十七話 | 711 |
| 第二百五十六話 | 708 |
| 第二百五十五話 | 706 |
| 第二百五十四話 | 704 |
| 第二百五十三話 | 701 |
| 第二百五十二話 | 699 |
| 第二百五十一話 | 697 |
| 第二百五十話 | 694 |
| 第二百四十九話 | 692 |
| 第二百四十八話 | 690 |
| 第二百四十七話 | 688 |
| 第二百四十六話 | 686 |
| 第二百四十五話 | 683 |

| | |
|---|-----|
| 第二百七十話 | 744 |
| 第二百七十一話 | 746 |
| 第二百七十二話 | 748 |
| 第二百七十三話 | 751 |
| 第二百七十四話 | 753 |
| 第二百七十五話 | 755 |
| 第二百七十六話 | 757 |
| 第二百七十七話 | 759 |
| 第二百七十八話 | 762 |
| 第二百七十九話 | 765 |
| 第二百八十話 | 767 |
| 第二百八十一話 | 770 |
| 第二百八十二話 (最終回) | 774 |
| キャラ設定 (完成したら載せるもの) | |
| キャラ設定 1 六角美咲 / 仮面ライダーボマー | 778 |
| キャラ設定 2 福沢裕太 (ネタバレ有り) | 789 |
| 仮面ライダーグングニル & クリーチャーズ 学校の怪談!? | |
| グングニル 第一話 | 796 |
| グングニル 第二話 | 799 |
| グングニル 第三話 | 802 |
| グングニル 第四話 (とヴィーダのキャラ設定、グングニルのス ペック等) | 805 |
| グングニル 第五話 | 808 |
| グングニル 第六話 (+山内成音キャラ表) | 811 |
| グングニル 第七話 (+岸本優香キャラ表) | 814 |

| | | |
|-------------|-------------------|-----|
| グングニル | 第八話 | 817 |
| グングニル | 第九話 | 820 |
| グングニル | 第十話（＋蒲生恵 キャラ表） | 823 |
| グングニル | 第十一話 | 826 |
| グングニル | 第十二話 | 829 |
| グングニル | 第十三話（＋ α ） | 832 |
| グングニル | 第十四話（最終回） | 835 |
| 足利明人とアイドル剣士 | | |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第一話（＋明智兄妹のプロフ） | 839 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第二話 | 844 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第三話 | 849 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第四話（＋足利明人プロフ） | 854 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第五話 | 859 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第六話 | 864 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第七話 | 869 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第八話 | 874 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第九話 | 879 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第十話（＋ α ） | 884 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第十一話 | 889 |
| 足利明人とアイドル剣士 | 第十二話 | 894 |

第一章 プロローグ

新学期が始まる数日前。

一人の科学者が、とある私立高校に教師としてやってきた。

校名は蘇我高校。

滋賀でも有名な、実力者……所謂強い不良達の巣窟だと聞いている。

県外からも、この高校に入るために引っ越してくる者がいるらしい。

そしてこの高校で強い者は、喧嘩が人間離れしているそう。

そうだとするならば、自分の研究にうってつけ。

そう思っ、この高校に就職を決めた。

「……」

彼女の研究は、主に人間の進化に関するものだ。

突然変異体と呼ばれる人間が、千人に一人の確立で生まれる事がある。

特徴として、そう呼ばれる人間は大抵、何かしら常識から外れた力を持つて生まれてくるという事だ。

その突然変異体は、大体は先天的な素質によって生まれてくる。

実際この滋賀では、そう呼ばれる人間が多数存在するらしい。

そういう噂をよく耳にする。

情報を得ると言っても、この研究は公に明かしてはいない為、情報

元は大抵都市伝説のサイトなどではあるのだが。

確かそのサイトでは、四人の人間が紹介されていた。

某漫画の宇宙人の如き戦闘力を持つ少女。

手にした銃器によって、戦闘力が左右される少女。

木刀から魔法を放つ少女。

身体がバラバラ死体に変化しようと、元に戻る再生能力を持つ少女。

実を言うと、彼女は一つ目の少女を探している。

それが何故なのかというと、彼女にある悲劇をもたらしたとされる少女と特徴が同じだからだ。

その悲劇は、今より数週間前に遡る。

端的に言うなら、彼女は自分の幼馴染を突然変異体と思しき者に殺された。

少し歳の離れた、優しい男の子。

それなのに、誰かに殺されてしまったのだ。

未だに幼馴染が誰に殺されたのかは分かっていないが、その理由は幼馴染の死体にあった。

刺し傷でも、銃で撃たれたわけでもなく、幼馴染の身体には大きな穴が空いていた。

それも、拳骨一つ分の。

凶器も特定出来ず、どう考えても拳で貫かれて殺されたとは思えない、あり得ない死にざまだったのだ。

そうになると、一つ目の少女の可能性が高い。

彼女がしたいのは、復讐だ。

もしもその少女がこの街のどこかの生徒なら、ここの強者達の誰かがそれを知っているかも知れない。

幸い、この高校の生徒達は、他校生をも自分達の支配下に置こうとしているらしい。

不良漫画のような高校だが、その方が好都合だ。

もうある程度、自分の研究は完成に近づいている。

あとは誰かに実験台になってもらうのみだ。

「私が必ず、そいつを地獄に送るから」

そう言って……彼女は蘇我高校の門をくぐった。

第一話

五月中旬。

仕事に行きたくないというのは、日本国民共通の感情であつて欲しい、などと考えながら俺は自分の部屋のベッドで目を覚ました。

「……」

アラームの音が鳴り、今日も地獄の始まりだ。

※※※

朝食を済ませてから、俺はリュックを背負つて自転車でマンションを後にする。

この瞬間から、俺をどんよりとした重い空気が襲う。

理由はあとで説明するが、俺の仕事に行きたくないは、世の中の平凡な社員が言う嫌だ嫌だのレベルを遥かに上回っていると思う。

何故なら、そこで働いていると、万が一死ぬ可能性だってあるからだ。

怪我ではない。

死ぬのだ。

「うろうろ……」

お腹が痛い。

さつき食つたもの全部吐きそうだ。

働き始めて一か月近く、俺の体重がガクンと落ちた。

それもこれも職場環境のせいだ。

「はあ……」

このまま仕事サボろうかな……いや、だつてそうしないと心が潰れそうだし。

神も許してくれるだろう？

「きゃあー！」

ドン！

「なんだなんだ……？ あ……」

アア……オワツタ。

ありのまま今起こった事を話すと、暗い顔で自転車を漕いでいた

ら、何かにぶつかつたような衝撃が走り。

それに気付いて確認すると、目の前で女の子が倒れていた。何を言っているのか分からないと思うが、俺もよくわからなかった。

「警察呼ばないと」

仕事行く前に自転車で事故を起こしてしまふとはなんという番狂わせだ。

ただこのままひき逃げで捕まるわけにはいかない。

俺は携帯を取り出したが次の瞬間。

「えっ?」

さつき轢いた少女に睨まれながら、俺は腕を掴まれた。

そんな事を考えている場合ではないが、彼女はかなりの美少女に見える。

黒髪を両サイドで三つ編みにし、紫の切れ長の瞳に、眼鏡を掛けた真面目そうな感じの子。

赤いブレザーに赤いスカート。リボンの色は黒で……よくよく見ると胸が大きい。

左腕には、生徒会長と書かれた金色の腕章。

「ぐっ、ぐっもーにん」

次の瞬間、そんな美少女に俺は思い切り殴られた。

※※※

「てて……何するんだよ」

「貴方、人を轢いておいて何携帯いじってるんですの!?!」

「いや警察呼ば」

「黙りなさい犯罪者の言い訳なんて聞きたくないですわ!」

君が聞いて来たのに何でここまで言われてんだ……。

しかも朝からうるさい。

「いやあの携帯使わせてくれないとホントの犯罪者に

「もう良いですわ! こうなったらこの爆弾で貴方をバラバラにしますわ!」

ば、爆弾!?

あ……いや流石に冗談だよね。

「さあ……」

あ？　なんでなんで!?

そんな危ないもの……え、女子高生だよねこの子。

「死になさい!」

い、いやあああああああッ!

「アレ?」

「あ……」

……。

今起こった事を説明させてくれ。

爆弾は俺に向かって投げられた。

のだが……すぐ後ろにあった電柱にぶつかり、跳ね返って、彼女の
目の前で爆発した。

「ひいひいひいひいひいひいッ！」

「なんですの？ 私がゴーストとでも言いたいんですの？」

何言ってるのかは分からないけど、取り敢えずお化けなのかな？

「私が見ての通り生きてますわよ。ただ私を爆風で殺す事は出来ませんわ」

「いや！ 全く信じられない！」

第一こいつが言ってる事が本当なら、目の前で死者蘇生が行われたって事？

「言われましても、私も望んでこんな体質になったわけじゃありませんわよ。まあでも、この能力のおかげで私は爆弾が当たっても生き返れますが」

いや確実に当てようよ……てか爆弾なんて物騒な物を携帯するな！

「は、はあ……」

「もう良いですわ。私は生徒会長ですし、遅刻するわけにはいきませんわ」

美咲は溜め息を吐いてから、俺に背を向けて去っていく。

振る舞いこそ変な奴だが、立ち姿だけは本当に綺麗だ。

あんな人が職場にいてくれたら……俺の人生はどんなに輝いているか……。

「……職場？ 遅刻？ ああああああッ！」

すっかり忘れていた。

俺もそろそろ出勤時間じゃないか。

「やべえ遅刻だアッ！」

あんなクソな職場でも、俺は一度も遅刻や欠勤した事がないのだ。今更遅刻など出来ない。

「うおおおおおおおおおッ!!」

少しだけ、胃が軽くなった気がする。

多分着けば元に戻るかも知れないが、あの少女に勇気を貰えたからだろう。

※※※

さて……何だかんだ言っても、やはりここに着くと胃が痛い。
職場に到着だ。

「私立蘇我高校……この門で既に吐きそうだ……」
そう。

俺の勤務先は私立高校。

それもただの高校ではない。この高校は、この世の地獄と形容してもおかしくない。

「おはようございます……」

俺は職員室の扉を開き、タイムカードを押す。

ギリギリ遅刻は免れた。

「……」

まず……この学校の職員室がやばい。

面接官の殆どにそういう雰囲気が無かったせいで気付かなかつたが、まんまここの雰囲気はドラマとかで見る暴力団の事務所っぽい。何せ髪を染めたり、強面の男や一部女性がここの教師として働いているからだ。

まあでも、この人達にそこまで罪はない。

怖い人達だし、当然嫌な奴もいるが、割と優しい人もいる。

だが話してる時以外の顔は……やはり怖い。

これも訳があるのだが。

「はあ……」

ここまではまあ、別に怖い見た目の人がいるだけだから問題にはならない。

この学校の真の恐ろしさは、生徒達にあるのだから。

第三話

準備をしていると、丁度チャイムの音が聞こえた。

「時間か……」

早速一時間目が始まる。

胃の痛みが更に激しさを増す。

「……嫌だあ……教室行きたくないあ……」

もうだめだ……おしまいだ……。

『何を寝言言ってる!?! 不貞腐れてる暇があったら戦え!』

『何? 授業に出たくない? それは出ようとするからだよ。逆に考

えてみるんだ。出なくてもいいさと』

天使と悪魔が俺にささやきかける。

「うう……どうしよう……」

『金を貰う喜びは何よりも……何よりも強い!』

『やみくもに出かけるのは危険です! もっと情報を集めてからでも

!』

『そこまで性根が腐っていたとは……』

「だアアツ! もううるせえ! 行きや良いんだろ行けば!」

「いや君がうるさいよ」

すみません俺の中の天使と悪魔が失礼しました。

『俺達のせい!?!』

おう。

※※※

ガラガラ……。

「失礼し

「おうフク! よく来たな。今日も自習にしてくれるよな? あん

?」

怖いよお……。

「もう好きにしてください」

「フクは話が分かってて良いな。よし!」

俺は……こいつらには逆らえない。

前まで何とかまともに授業をやろうと試みたが、こいつらに妨害されてしまった。

こいつら……蘇我高校の生徒は、全国トップクラスの不良達。卒業後は有名企業……ではなく、暴力団からスカウトがあるのかなとか。

まあ暴力団行きの奴がそんな沢山いたら、廃校にされかねないから、多分噂程度なんだろうけど。
てかマジなら怖い。

その内俺も何かされてしまうんじゃないだろうか。

「……」

自習という事もあり……やはり皆好き放題やり始めた。

というかこんな狭い室内でボールを投げる奴がいる。

危ないからやめてほしい。

ドン！

「いて……」

顔面に当たった。

「あ、フク！ こっちに投げ返してよ」

大して可愛くもない女子生徒が俺に手を振る。

女子だが、こいつも不良だ。

「……」

上等だクソアマ。

俺は今ストレスが溜まってる……胃が重くなるくらいにはな。

「うおあああああああッ！」

俺は叫びながら、その女子生徒に向かって全力でボールを投げた。

「当たれエエッ！」

普通に最低な行いだが、相手は自分から自由を奪う不良生徒。

慈悲はない。

——当たれ……当たってくれ！

ドン！

「……」

俺の顔は青くなった。

ボールは女子生徒ではなく、すぐ近くのヤクザみたいな男に当たってしまった。

「おい」

「ひいっ！」

「誰に向かってこいつ投げてんだアアン!？」

怖い怖い怖い……。

「いやそのこれには

「うるせえ！」

「あああッ!!」

殴られた。

第四話

痛い……。

もう何で皆顔ばっか殴るの？

「顔面の痛さがフタエノキワミだわ……」

職員室で一人、もう自分でも何言ってるのか分かんない。

こりや顔面と同時に頭もやられたかも知れない。

「福沢先生、この書類を

「はい？」

「すみません何でもないです」

先輩が逃げていく……え？　もしかして、今の俺の顔そんなに酷いのか？

「はあ……もう嫌だ」

まだ三時間目と四時間目と六時間目授業だし……。

もう嫌だ早く帰りたい。

※※※

授業が終わった……。

達成感も何もあつたもんじやない。

ただただ胃が重く、辛いだけの一日が過ぎた。

「……」

昼飯は何も食べられず、飲み物すら喉を通らない。

胃はそれなのに重い……。

そして顔が痛い……。

「うう……」

もう行きたくない。

毎日こんな事ばかり考える。

こんな時、俺が正義のヒーローだったら、あの不良達をボコボコにして……分かせてやるのに。

体育すら苦手な俺は、それすら出来ない。

「あの子は凄かったなあ……」

朝の事を思い出す。

発言や行動こそ変だったが、事実彼女は、俺が何といおうと自分の意見を通していた。

俺にもあんな勇氣や強さがあれば……もしかしたら……。

「いや、考えても仕方ないか」

あの子はあの子。

俺は俺だ。

誰かの真似をした所で、その誰かにはなれっこ無いんだから。

俺に出来るのは、俺に与えられた立場をこなすだけ……。

「先生、出来ました」

※※※

「え？」

女の声が聞こえて、少し驚いた。

生徒の声だろうか……ただそれにしては、この学校の生徒には似つかわしくない……落ち着いた声だ。

俺が驚いたのは、その落ち着いた雰囲気のことだ。

「ま……まさか」

こんなクソみたいな高校にも、もしかしてまともな生徒がいるのか？

なら見るしかない。

いや見るべし。

「……ただドアは半開きのね」

どうりで声が聞こえるわけだ。

まあ良い……覗くだけ覗いて。

「ちらっ……」

取り敢えず中を見てみたが、何をやっているのだろうか。

扉には科学部と書かれていたが、実験というよりは、ものづくりをしているように見える。

もう一度よく見てみると、何か機械……いやベルトか？

「ん？」

ベルトに取り付けられた何かを外して操作し、また取り付けている。

すると……。

「えっ……っ？」

声を殺したが、それでも出るのまでは防げない。

ただの男子生徒が……そのベルトの力かどうかはわからないが、急に兵隊姿の怪人へと変化した。

まるで……何とかライダーみたいに。

「いや……えっ……科学部ってよりショッカー本部？」

ライダーあまり見た事ないからそれしか出ないけど。

「こちらです」

最初に声を聞いた女子生徒の方は、男子生徒が使っていたベルトとはまた違う形のそれを、顧問と思しき教師に渡す。

「あの人は……」

俺も見覚えがあるし、お互い顔も名前も知っている人だ。

名前は、狩野遥《かのうはるか》。

俺の同期で、俺より少し年上の女性教師だ。

前職は科学者だったと聞いた事がある。

それなら科学部の顧問も領ける話だ。

初めて会った時も思ったが、かなりの美人だ。

アッシュブラウンの髪を三つ編みにした、落ち着いた雰囲気。

何となく女医にも見える。

この学校の保健室の先生を彼女にやって欲しいくらいにはと思ったが、これでちよつと印象が変わったかも知れない。

恐らくだが、この科学部の製作している物の製法を知るのは、彼女しかありえないからだ。

「これが……」

「はい。突然変異体に使用する事で、更にその力を増幅する効果もあります」

聞きなれない単語だ。

何となくだけど、ほにやらライダーで言う改造人間の事だろうか。

「ところで先生、まずはどちらに攻め入る気ですか？」

攻め入る!?

何? もしかしてこれ聞いちやいけない奴?

怪人側がどんな悪さをするか決めてる奴だろ?

「決まっている……まず〇×女子高を支配下におく。噂によれば、そこに突然変異体が数名ほどいるらしいからな」

あ……改造人間の事じゃないらしい。

でも……ん?

てことはそもそも突然変異体って何……?

「完成した事だ。今日はもう終わりにしよう」

あ……もう終わりか。

え?

「まずい」

流星にここはまずい。

俺はすぐ近くのトイレまで駆け足で移動し、隠れる。

「ふう……」

それにしても恐ろしいものを見た。

まさかシヨツカー本部が実在するなんて。

てことはこの世界にも何とかライダーが存在したりするのだろうか。

「……」

たださつき彼女らは、攻め入ると言っていた。

ここは最凶の不良達が集まる学校だ。

そうなる……放置しておくのは危険かも知れない。

彼女らが言う突然変異体が見つかる前に、俺が隠しておくべきだろう……泥棒だけど。

う……泥棒だけど。

泥棒かも知れないが、これは俺のやるべき事だろう。

「これ以上奴らの好きにはさせない」

それに俺へのイキリに更に拍車が掛かったら、胃潰瘍になるかも知れない。

それだけは絶対阻止だ。

※※※

俺は職員室に戻ってから、遥先生にバレないように科学部部室の鍵を入手。

そしてこつそり歩いて、部室の前に立つ。

「お父さん。お母さん。ごめんなさい。俺は他人を巻き込まない為に泥棒になります……」

反省もしません。

後悔もしません。

死んでもお断りします。

「……」

俺は扉を開けた。

暗くてよく見えない……が、探し求めていたものは意外と近くにある。

「これか……」

変身した男子生徒が使っていたものと似ているが、細部が違うベルトだ。

男子生徒の使っていたベルトの中心には、迷彩帽を被った兵士の紋章があったが、このベルトには紫色の爆弾の紋章がついている。

この紋章らしきものが端末になっていて、これ进行操作する事で変身していた。

実際取り外して、ひと昔前のガラケーのように開いてみると、数個のキーと、ディスプレイが姿を現す。

「意外とカッコいいけど……」

俺は見た事ないが、やはりこういうのを見るとほにやららライダーしか頭に浮かばない。

俺が幼稚園の頃に、どこかで見た事あるくらいだ。

確かこんな感じの端末で変身する奴がいたような気がするが、やはり俺の記憶に正確な記憶はない。

「つと……」

いけないいけない。

仮にも正義の為とは言え、今の俺は泥棒だ。

急いで逃げなければ。

第五話

その数日後。

滋賀県立〇×女子高。

滋賀の公立高校にしてはかなり、いや全国的に見てもかなり異色な、ヤンキー女やギャルが多く集う女子高。

蘇我高校程ではないが、そこそこ強者がいる。

「……」

そんな学校の三年三組に、生徒の代表たる生徒会長の姿がある。

六角美咲。

一見真面目にも見えるが、そんな事はない。

中学時代は元ヤンで、爆弾をよく作っては自分に当たって爆死していた。

ただ喧嘩は割と強い……それは今でも健在だ。

「皆からの信頼を得て、私は頂点に立ちますわよ……ソウジ」

ソウジは中学時代に付き合っていた彼氏の名前だ。

卒業を機に別れたが、今でも美咲の心の支えである。

生徒会長になったのも、彼との約束からだ。

約束を果たして、再び会う為に。

「失礼しますわよ」

美咲は生徒会室の扉を開ける。

新生徒会役員と、新副会長等が既に集まっている。

美咲は最後だった。

そもそも今日は本来……生徒会で集まる行事というものは無かった。

その証拠に顧問の姿もそこにいない。

そんな今回の議題は……。

「んじゃ……前置きは無しにして始めるっすよ。今回生徒会役員に集まって貰ったのは、この果たし状を全員で読んでもらう為っす」

軽いノリの副会長が、ブレザーの内ポケットから果たし状を取り出す。

ひと昔前の不良漫画とかでありそうなそれだ。

外の文字も中身も、筆で書かれている感じの字だ。

「私が読みますわよ」

そこにはこう書いてある。

『○×女子高生徒会……お前達に五対五での決闘を申し込む。明後日に河川敷に來い。負けたり逃げたりすれば、学校を支配させてもらう。蘇我高校生徒』

「至ってシンプルですわね……って貴女方、何を狼狽えていますの？」

「だ……だって、こんな勝負……無理っすよ」

副会長が言う。

「はい？」

「蘇我高校……あいつらと喧嘩して無事で帰れる奴なんていない……こんなの無視して警察に……」

「させませんわよ」

美咲は止める。

「挑まれた勝負から逃げるなんて……弱い人のする事ですわよ」

「でも！」

「会長……」

近くにいた書記の一人が呟く。

まだ入って間もない一年生だ。

「この一か月間……アンタの仕事ぶりは見てただけどき、自分がやれるからって下に対して強引過ぎない？」

「なんですって？」

「あたしは中学ん時会長やってたけどさ、アンタのやり方は何かと雑なんだよ。アンタに人の上に立つ資格はない」

その言葉に……美咲は拳を震わす。

「アンタらもそうだろう？ 副会長も……」

「そうだそうだ」

「言う通りだ」

「皆さん……」

「もうアンタにはついてかない。一人で蘇我高校の連中とでも喧嘩し

て、勝手に一人で怪我でもしてなよ。さよなら」

その書記を筆頭に、美咲以外の生徒会役員が出ていく。

「……良いですわ。一人でもやれますわ、私は」

美咲は果たし状を握りしめ、一人そう呟く。

第六話

「あそこにいる人こっち見てるよ」

「キモい」

「はあ……俺はこいつらを助ける為に行動してるつてのに、なんでこんな言われ様なんだ。」

「……」

果たし状をこの学校の生徒に渡しているのを、俺は遠目で見た。科学部の作ったベルトの件も考えると、悪い予感がして仕方ない。俺がする事は一つ。

その果たし状の中身を見せてもらい、自分が数日前に盗んだベルトを使って、蘇我高校の連中を倒す事。

何とか仕事を早く切り上げて来たが、もう下校時刻は過ぎている。もう帰ってしまったのだろうか。

「何をしていますの?」

聞き覚えのある声。

「美咲……」

「女子高の近くで男一人で立ってるなんて、不審者の極みですわよ」

「ふ……不審者じゃねえし」

「立っている……いや、違いますわね。もしかしてた

「下ネタ言う気なら俺が全力で止めるぞ」

そして俺は女子高生で興奮しねえし。

「はあ……そんな事より、今度は何ですの? 人轢く次は誘拐ですの?」

「犯罪から離れてくれよ……そうじゃなくて、実は……」

※※※

「なるほど……果たし状なら知ってますわよ。生徒会宛でしたし」

「ホントか?」

「今も私が持ってますわ」

「ならそれを俺に渡してくれ」

俺は手を伸ばすが、美咲は渡すのを拒否。

「渡しませんわよ。大体……中身を見てどうする気ですか？」

「決まってるだろ。俺はそいつらの学校の先生だ。お前を巻き込むわけにはいかない」

「へえ……貴方はこの学校を支配させる気ですか？　ここが支配されれば、私が誰かに支配されるも同然。そんなの私は耐えられませんわよ？」

「違う。俺がそいつらを止める」

俺は拳を握る。

「貴方にそれが出来るとは思えませんし……それに、私は自分の運命を誰かに委ねる気はありませんの。私はいつか頂点に立ちたい。だから、そんな事させませんわよ」

「美咲……」

「話はそれだけですわね？　とにかく、手出しは無用ですわ」

美咲は眼鏡のブリッジを上げて立ち去る。

「……諦めない。俺はあいつを助ける……そしてこの学校の連ち

「あのーすみませんそのお兄さん」

「あー？」

警察官？

俺なんかしたか？

「お……俺に何か用ですか？」

「用？　何とぼけてんの？　女子高の前でそんなそわそわしてるとか怪しすぎるよ？　ちよつと職質させて？」

なんでどいつもこいつも……俺を犯罪者扱いするんですかね？

※※※

俺はあれから再び職質されるのを覚悟で……美咲の行動を監視した。

そして時が来た。

美咲は河川敷で、蘇我高校の生徒五人と向き合っている。

それを俺は遠くで見ている。

「約束通り来ましたわよ」

「五対五……の筈だけどな。お前みたいな雑魚眼鏡一人か」

蘇我高校の生徒五人は、確か全員一年生の筈だ。

まずは実験の為に、まだ経験の浅い者から向かわせたのだろう。

「雑魚眼鏡？　口の利き方に気を付けた方が良いでしょうよ。私はいずれ頂点に立つ女。貴方達はその前座に過ぎませんの」

「……笑わせないで欲しいな。仲間一人連れて来れない奴に、そんな事言われてもね」

生徒達がベルトを取り出す。

兵士の頭の紋章型の端末を取り出し、操作する。

『ARMY DRIVE READY?』

「変身」

『COMPLETE』

五人が兵士型の怪人へと姿を変える。

「これは……」

流石の美咲も少し動揺した。

だが……後ずさりもせず、まず金属バットを取り出す。

「武器は金属バットだけか？」

「やあッ！」

美咲は勢いよく、怪人に向かってバットを振るう。

だがバットの方から折れてしまった。

「これで終わりか？」

「いや……まだですわ。勝負はここからですの！」

このままではまずい……早く変身しないと。

「……ッ！」

俺はバグからボマードライバーを取り出し、腰に装着。

ドライバーからベルトが飛び出し、俺の腰を覆う。

爆弾型の紋章を取り出してから、その端末を操作する。

『BOMER DRIVE』と書かれたボタンを押す。

『BOMER DRIVE READY?』

何とかライダーっぽくポーズを決めて、叫ぶ。

「変身！」

端末を中心に取り付ける。

しかし……。

『ERROR』

ベルトから拒否されるように、俺は吹き飛ばされてしまう。

「そんな……」

俺はボマードライバーを拾い直し、今度はベルトを使わずに何とかしようと駆け出す。

「やめろお前らー!」

そして階段の途中で叫ぶ。

その声に気付いた生徒達が止まり、俺の方を向く。

美咲は既にボロボロで、地面にうつ伏せで倒れている。

「うぐ……」

「フクか。俺達に何の用だ?」

「止めに来たに決まってるだろ……こんな事、もうやめるんだ」

「お前程度に何が……ほう、そのドライバーを使う気か?」

「……」

「別に奪い返すつもりはない。お前が持っていた所で役に立たないしな……。返すしか方法はない」

「お前達には渡さない。その子も俺が守る!」

「待ちな……さい。裕太さん……そいつは……私の敵ですわ……」

傷だらけの美咲が立ち上がる。

荒い息を吐き、拳を握った。

「貴方方……本当にこんなやり方で私達を支配して楽しいんですの?」

「何だと?」

「貴方方は私が一人で来たにも関わらず、五人で……しかもそのベルトを使って戦いを挑みましたわね……それって、貴方方が私より弱い事を認めている……そういう事になりませんか?」

「減らず口を……そんなものは仲間一人連れて来れなかった言い訳に過ぎない」

美咲が笑って告げる。

「私は勝つ為に手段は選びませんが、集団で寄って集って一人を倒す

のは嫌いですの」

「知らないのか？ お前のそういうのを、負け犬の遠吠えって言うんだ」

リーダー格が近付いて、美咲の腹を殴る。

もう黙って見るなんて……出来ない。

「美咲！ これを使え！」

俺はボマードライバーを美咲に渡す。

前に聞いた言葉を思い出した。

そのベルトは、突然変異体と呼ばれる者の力を増幅する為のものだと。

美咲は爆発に巻き込まれて死んでも、すぐに蘇る体質の筈。

それなら……試してみる価値がある。

「無理だ。お前には使えない」

舐め切った表情で美咲を見る。

「このベルト……なるほど、そういう事ですよ……」

美咲は何かを理解したかのように笑う。

「今から証明しますわ。私の言っている事が負け犬の遠吠えじゃないって事を……貴方方よりも少し数の面で不利ですが……これで力の面では平等ですわよ」

美咲は腰にベルトを装着する。

見た目の割に、妙に手慣れた動きだ。

まるで初めてじゃないかのような。

「……これですわね」

『BOMER DRIVE READY?』

端末を閉じてから右手を顔の左側近くまで移動させて構え、大きな声で叫ぶ。

「変身ですわ！」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

天から一個の紫に発光する爆弾が降り立ち、美咲はそれを右手で掴んで握り潰す。

爆風が巻き起こり、美咲はそれの中へ。

「美咲……」

「まさか……」

怪人達はそれを驚いた顔で見ている。

爆風が止み、煙が立ち込めるそこから……その戦士は現れた。

第一印象を言うなら、あの彼女の見た目の印象とは正反対だが……性格にはマッチした姿だった。

黒を基調とした……彼女の肉感的なボディラインが強調されたライダースーツの上から、紫色の長ランを羽織ったその姿は……まさに番長。

あの端末の形のような、紫色の爆弾型の頭の頭頂部からは火が灯されており、複眼は金色に輝いている。

顔のデザイン的には、俺も知っているあの何とかライダーのような感じだ。

武器はヒーローには似つかわしくない金属バット。

そして背中に、ダイナマイトの形をした飛行武器が六つ。

所謂ボムビットだろうか。

「私はボマー……仮面ライダーボマーですわ!」

美咲は自分の戦士としての名を、高らかに名乗りあげた。

第七話

「何故お前が……」

動揺を隠せない怪人達。

ボマーはバットを相手に向けて叫ぶ。

「最初からクライマックスですわよ！」

そのまま駆け出す。

リーダー格の怪人の脳天に向かってバットを振り下ろし、見事命中。

一撃で怪人を戦闘不能に。

「そ、そんな……」

一撃で倒した事もそうだが何より……。

「戦い方がムゴ過ぎる……」

頭ばかりを狙っていて、凄く痛そうに見える。

殺しはしていないだろう……と信じるしかない。

見ていると……その後すぐに変身が解除され、人間の姿に。

「さっきまでの威勢はどうしましたの？　もしかしてビビってますの？」

言つちや悪いかもだけど言わせてくれ。

うぜえ。

「や……やるぞー！」

「倒すわよ！」

何とか他の生徒達も、怪人としての力を活かして立ち向かう。

「はあっ！」

「えいっ！」

二人同時に、美咲に対するが……最早他の怪人と同じ、いやそれよりも強い力を手に入れた美咲には及ばない。

美咲が恐らく喧嘩慣れしているのもあるかも知れないが、とにかく

あの変身以来、まともに攻撃が入らず……形勢逆転。

ボマーがバットを薙ぎ払うと、それに吹き飛ばされた二人の怪人が、すぐに人間の体へと戻る。

「あと二人ですわね」

「ちよ、調子に乗るな！」

今度は兵士らしく、どこからか銃を召喚。

発砲するが、ボマーは金属バットで全て防いで駆ける。

「はっ！」

そして脳天へバットを叩きつけた。

あっという間に最後の一人へ。

「貴方を止められるのはただ一人……私ですわ！」

右手を残り一人に指さしてから、すぐに親指を自分に向ける。

「凶に乗るな！」

今度は怪人自ら、ボマーへと立ち向かう。

「無駄ですわ！」

背中の六本のボムビットが、複雑な軌道を描いて怪人へ。

強力なボムビットを前に、怪人は成す術もなく全て喰らい、ダウン

してしまう。

立ち上がるとうとするのを見たボマーが、端末を外す。

「行きますわよ」

『FINAL DRIVE!』

端末から音声が。

ボマーの脛をボムビットが囲い、そのまますぐにボマーが飛び上がる。

「とうっ！」

ビットを纏った方の足を前に突き出して叫ぶ。

「ライダーボムキック！」

勢いに乗って、美咲は怪人の顔面へと飛び蹴りを放つ。

所謂ライダーキックだ。

「うわあああああッ！」

怪人は断末魔を上げて、爆発に巻き込まれる。

人間体へと戻った生徒が爆風の中から姿を現すが、ボマーの姿はまだ現れない。

「……アレ？」

こういうのって……倒してから爆風の中から現れるのがセオリー
なんだけど、まさか。

「ここですわよ」

美咲が俺の後ろで、何故か人差し指を天に向けて構えていた。

「あの……もしかしなくても今のって……」

「また死にましたわよ」

ですよね……てか死ぬと傷治るのね。

「いや普通自分の技で死ぬか!？」

第八話

数時間後。

蘇我高校科学部部室。

「六角美咲……それがボマードライバーを使った突然変異体の名前か」

遥がアーミードライバーを、科学部部长兼副生徒会長の女子生徒から回収しつつ呟く。

「はい。そして恐らくですが、先生が探している例の突然変異体に特徴が近いかも知れないです」

「それは何故だ？」

「量産型とは言え、変身せずとも……アーミー五体の攻撃に気絶せず耐えていたそうです。ボマードライバーだけの力とは思えません」

「確かにそうだな」

異常なまでの打たれ強さは、突然変異体全てに共通する特徴だ。

だが……ボマードライバーの使用でそこまでの力を出せるなら、遥の幼馴染を殺害した犯人に当てはまるかも知れない。

「良いだろう。一旦その六角美咲をターゲットに戦う事にする。今作成中のベルトを完成させるぞ」

「はっ」

※※※

あの騒動の後、取り敢えず俺は一年達を適当な場所で寝かせ、美咲の頼みでファミレスに来ていた。

腹減ったから飯奢れ……シンプルにそう頼まれて。

「美味しいですわ」

目の前でハンバーグを美味しそうに食べる美咲。

こういう所は、普通の女の子って感じた。

あそこの生徒達に、そんな可愛げは一切ないしな。

「……あ、そういえば明日からどうするつもりですか？」

「えっ」

なんかちよっと心配されている。

どういう意味なんだろうか。

「だって貴方、相手方が許可したとは言え、もう私に味方したわけですから、蘇我高校にいるのはキツイんじゃないやありませんの？」
「……」

確かにな。

「それにもし蘇我高校全体がああ空気なら、貴方自身の身も危険ですし、もうまともに働かずに辞めた方が良いでしょう」

「そうだよね……丁度ストレスで胃もやられてたし……辞めるしか……いや待てよ。そんな事したら……」

「無職になりますわね」

ノーツ!!

「ど、どうすんだよ俺……なんであんな事を……」

女の子を助けた挙句、無職になるか死ぬかしら選べないなんて……。

「男が女に泣きつくんじゃないですわよ……みつともない……」

「いや……だって俺の人生クソ過ぎて泣けてくる……」

「はあ……。まあ私も一応貴方の行動に助けてもらったわけですし、何かしない事ありませんわよ」

美咲はスマホを取り出す。

「どうする気?」

「うちの父が玩具屋で働いてますの。親に頼んで採用させて貰えないか聞いてみますわ」

「え、え?」

「あ、もしもし……」

美咲は父親に頼む。

通話終了後、スマホをしまい。

「取り敢えず面接代わりに家に来い、だそうですわよ」

「あ、うん……あ?」

※※※

まずい事になってしまった。

父親に面接目的で会うとは言え、女の子の家に上がらないといけな

い。

学生時代、教師になる為に真面目に勉強していて、全然女の子と関われなかった俺にはキツイ話だ。

「うう……お腹が」

「いちいち緊張してお腹を痛める癖……何とかしなさいの。これから貴方に私のお供をしてもらおうわけですから」

お供……？

「いやお供になった覚えないけど」

「私かなれと言ったんですからなるんですの」

なんて強引な。

「着きましたわよ」

表札に六角と書かれた、そこそこ裕福そうな家が一軒。

ついに彼女の家に着してしまった。

「アア……オワツタ……」

「何オタオタしてますの？ ビシツと入りなさい」

「は、はい……お邪魔します……」

俺は覚悟を決めてドアを開ける。

その先では、父親らしき男の人が腕を組んで立っていた。

「おう、いらっしやい」

あれ……？

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「あ……いえ違います」

何で倉〇てつをがここにいるんだ……？

「違いますわ。私の父親の光太郎ですわ」

「旧姓南光た

「ごめんそれ以上は危険な臭いするから言わなくて良いですよ……」

第九話

取り敢えず普通に面接を終え、採用が決まった。
俺は美咲の部屋にお邪魔して、座布団で正座していた……。

「いやよく考えたらあり得ねえ……」

知り合って間もない女の子の部屋にいるなんて。

性格はともかく、一応美咲は美人だし。

「今性格悪いとか考えましたの?」

「アレ? 思考を読まれた?」

女の子の勘という奴だろうか。

まあ良い。

取り敢えず部屋を見回していたが……。

「女の子の部屋にしては凄い光景だね……」

ライダーには詳しくないが、美咲の部屋にはライダーグッズらしきものが沢山ある。

ベルトに小物……ソフビにフィギュアまで。

赤いカブト虫のような見た目のライダーのグッズが多い気がする。
恐らく一番好きなライダーなのだろう。

「これなんだろう」

黒いUSBメモリのものがある。

触って確認していると、ボタンを見つけ、試しに押してみた。

『ジョーカー!』

キエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「す………凄い」

劇中っぽくちゃんと光ったり音が鳴るのね……。

「何驚いてますの?」

「俺正直こういうので遊んだ事ないから、ちょっと驚いてて」

「勿体ないですわね。楽しいですわよ」

他のも手にとってみる。

「これは……?」

青いUSBメモリだ。

『トリガー!』

声優がどつかの無職を彷彿とさせる声だな……。

「全然なってますせんわね」

「へ?」

「これはですね……こういう事すると面白いんですよ」

美咲がメモリを手に、スイッチを。

『トリガー! トリガー! トリトリガー! トトトトトトトリ

ガー!』

連打。

「……」

「ナズエヒイテルンデス!」

「いや、予想以上にくだらな過ぎて……」

※※※

「そういえばさっき言ったな」

「何ですか?」

「俺はお前のお供だって……どういふ事をすればいいんだ?」

「そうでしたわね。実は……」

かくかくしかじか。

「なるほど……生徒会メンバーが全員辞めた、と」

「はい……」

「言ってもいいかな?」

「?」

「完全に自業自得だろ」

「そこまで言いますの!?!」

「だって俺がその場にいたとしたら、辞める以前に、戦わせようとしたお前をぶん殴るもん」

「みつともない男ですわね貴方……」

「みつともなくて悪かったな……で、その生徒会の件を俺にどうしろと?」

「単刀直入に言いますわ……生徒会の仕事を手伝って欲しいですの……」

はあ!?

※※※

「いやいや無理だろ！俺はお前の生徒会の仕事内容どころか、そもそも生徒会の仕事なんてやった事ないし……」

「会社の書類仕事よりも楽ですわよ……多分」

多分!?

「それって給料出ますか……?」

「何言ってるんですの？生徒会の仕事に給与なんて出るわけないじゃないですの」

生徒会はブラック企業なのか……?

「私は頂点に立つ者ですわ。頂点に立つ為なら、お金など二の次ですわ」

「そんなん言ってるられるのも学生の内だけだぞ……」

まだ初給料しかもらってないけど。

「とにかく、さっきも言った通り……これから貴方は私のお供。しっかりこきつかわせてもらいますわよ」

……ちよつと殴って良いかな？

変し

「やめて」

死んでしまいます。

「とにかく！戻ってこない可能性の方が高い今、私達が何とかすべきですのー!」

「だから俺がやる必要あるのかな……」

「強制わいせつの冤罪で警察に通報しても良いですよ」

「やめろ馬鹿」

冤罪、ダメゼツタイ。

※※※

取り敢えずマンションの自室へ。

何というか……今日まで忙しすぎて疲れた。

「はあ……」

あの地獄のような高校と、半ば強制的に決別したわけだが……急す

ぎて胃痛はまだ収まりきっていない。

というか……これから大丈夫だろうか。

お金の面は美咲の父親の所で働けば何とかなるだろうが、美咲のお供をしなければならぬのが気がかりだ。

……。

「仮面ライダーボマー……か」

美咲の名乗っていた、戦士としての名。

突然現れて、俺の人生を破壊して、新たな人生をくれた。

あいつは爆弾使いどころか……あいつ自身が爆弾なのかも知れない。

第十話

次の日。

玩具屋での就業前に暇を貰い、俺は両親の墓参りに来ていた。折角教師としての道を選んだのにも関わらず、それをすぐにやめなければならなかった事を詫びる為だ。

「……」

俺は墓の前で手を合わせる。

両親が死んだのは、数年前。

大学生になる前、俺は友達と高校の卒業旅行に行っていた。

両親も夫婦水入らずで旅行へ行くと告げていた。

丁度俺と両親の戻る予定の日は同じで、両親は先に帰って料理を用意すると約束していた……。

だが家に、両親の姿はなく。

その数日後、両親が旅行先で事故に遭って亡くなった事が判明した。

「……ごめんよ」

これで詫びるのは二回目だ。

俺が卒業旅行ではなく、両親の傍にいる事を選べば……こんな事はならなかった。

それに頑張つて教師になるという夢も、一年も経たないうちに辞めてしまった。

これでは浮かばれない……。

「ここにいましたのね」

美咲の声。

聞こえた方に顔を向けると、私服姿の彼女がいた。

春用の薄紫のコートに白いシャツ、そしてロングスカート。

そこそこお洒落な姿の彼女が、そこにいた。

「ここまで来るんなら、せめて制服着て花くらい持ってきて欲しかったな」

「別にお墓参りが目的じゃありませんわよ」

そう言いつつも、美咲もお墓の前で手を合わせる。

「誰が眠ってますの？」

「俺の両親」

「そうですの……」

「教師になったけど、すぐ辞めちゃった事を謝りたくてさ」

「ふーん……」

凄く不満そうな顔だ。

「だ、ダメなの？」

「何故謝る必要がありますの？」

「だって……頑張ってたのにすぐ辞めちゃったから、申し訳なくて……」

「確かに貴方は夢を掴んで手放す道を選んだかも知れませんが、もう一度掴む事だって出来ますわ」

「美咲……」

「この戦いが終わってから、別の高校の教師になっても良いですし、何なら夢を変えて一生私のお供……でも良いんですわよ」

それだけは断固拒否したいなあ。

「ま、まあ色々考えておくよ」

「それが良いですわ」

なんだ、美咲も結構良いこと言うじゃないか。

「言っておきますが、私のお供は楽じゃありませんわよ」

だからやる気ないって……

「あはは……」

「さあ、ご飯でも食べに行きますわよ。勿論貴方の奢りで」

「おいおい、俺まだ給料貰えて無いんだぞ……」

呆れながらも、仕方ないと思いつつ立ち上がる。

その時。

「……っ」

少し、頭が痛む。

寝不足だろうか……いや。

「あれ……っ」

急に記憶が呼び起せなくなる。

——俺は誰の墓参りに来ていたんだ？

何故、見知らぬ人の墓に花を……？

「うっ……」

「大丈夫ですか？」

美咲に声を掛けられて我に帰る。

混乱した記憶が安定する。

そうだ……俺は両親の墓参りに来ていた筈だ。

「なんでもないよ」

……なんだったんだ。今の。

第十一話

二日後の月曜日。

美咲は無人の生徒会室に足を運んでいた。

「……やはり、誰もいませんわね」

いつもなら、たまに残った書類を片付けるメンバーもいるが、それすらない。

あの時のノリではなく、彼女達は本当に辞めたのだ。

「……」

美咲はここまで、頂点に立つ為に色々な事を努力してきた。

勝てない勝負もあったが、それだって勝つ為に全力を尽くした。

でも他の人は、そんな美咲についてこれなくなった……。

「ソウジ……どうしたらいいのですの？」

美咲が昔、彼氏と一緒に撮った写真が入ったロケットを見て呟く。

自分が弱くなってしまおうと、ついやってしまう。

でも決まって、すぐに我に返る。

「いけませんわー！」

美咲は約束した。

頂点に立って、美咲に見合う者と一生を送って欲しいというソウジの願いを叶える事を。

そしてもう一度会った時、美咲にはソウジしかありえないとちゃんと伝えたい。

だから今は泣かない。

ソウジとの約束を果たす為にも。

「……ホントに迷惑つすよ」

後ろから聞こえた声。

副生徒会長のものだ。

「会長のせいで、こんなものをまた受け取らなきゃいけないんですからね」

睨みつけながら、副生徒会長は果たし状を置いていく。

「もういい加減、やめたらどうすか？」

「……私はやりますわよ。いずれ頂点に立つ者として、売られた喧嘩は全て買いますの」

「勝手にするっす。じゃあ、今度こそさいなら」

副会長が手を振って去っていく。

美咲は果たし状の中身を見る。

「これは……」

そこに書かれていた内容は……。

※※※

玩具屋の店員として働き始めて二日目。

「いらっしやいませー」

初日は少し大変だったが、何とか慣れてきていた。

他の先輩達も優しいし、何より自分に暴力を振るう生徒達もいないし。

「働くって良いな……」

あの学校で働いていたら、一生出てこなかった台詞だろう。

「俺は幸せだ！」

「ようフク！ 何が幸せだった？」

「は……」

その呼び方……まさか。

「科学部から泥棒した上、無断で辞めたらしいじゃんよ。んで？ 何盗んだんだ？ 言ってみろよ」

「え、えーつと……」

「黙ってたらどうなるかわかってんだらうな？」

「まずいますまずい……殴られる殴られる殴られる……」

「盗品ならここにありますがわよ」

「？」

「美咲！」

美咲がベルトをした状態で、蘇我高生に告げる。

「何盗んだのかと思えば、変身ベルトか。丁度いい、面白そうだから俺にくれよ」

「貴方に渡すわけにはいきませんわね」

バットすら構えず、素手で立ち向かう。

「上等だ！」

大きく振りかぶって、拳を突き出す蘇我高生。

だが美咲は軽く受け止める。

「この程度ですの？」

攻撃を受け止めた美咲が、相手の腹に拳を叩きつける。

蘇我高生は嘘のように大きく吹っ飛ばされ、地面に激突して気絶した。

「まったく……ベルトすら使わない蘇我高生なんて大した事ありませんわね」

それ言えるのは君くらいだと思っけどね。

「と、取り敢えずありがとう……どうしてここに？」

「貴方の仕事ぶりを見に来たのと、これを読んで欲しいですの」

美咲は果たし状を手渡した。

第十二話

仕事終了後に美咲の家へ。

果たし状を見つつ、対策を考えていた。

「にしても……今度は〇×女子高の生徒を味方に、なんてね……」

果たし状にはこう書かれていた。

『〇×女子高生徒会の六角美咲へ　〇×女子高のある生徒に新しいベルトを渡した。三日後にどんな手を使ってもお前を倒すよう指示してある。負けた時は今度こそ〇×女子高を支配下に置かせてもらう』
「うちの生徒の誰か……という事は……」

急に、あまり動じない筈の美咲が青い顔に変わる。

「どうした美咲、恐ろしいもの見た的な顔してるぞ」

「だだだ大丈夫ですよ！　わわわわ私に怖いもののなどありませんせせせんのー！」

何にビビってんだ……？

「どう見てもビビってるだろ……一体何にビビってんだ？」

「まあ貴方になら良いですわね……うちの生徒で最も恐ろしい人の話」

「それって……蘇我高生よりヤバいのか？」

「ええ。多分彼らが束になっても勝てませんわね……」

「どんな人？」

美咲は眼鏡のブリッジを上げて、その生徒の話始めた。

「その生徒にカツアゲされた人数は万を超え、超人的戦闘力と摩訶不思議な肉体を持つ女子生徒……浅井淀子（あざいよどこ）ですわ……」

そいつ見た時にスカウターが破損しないかどうか心配な話だな。

「淀子……あーなんか聞いた事ある名前だな。どんな関係？」

「同級生……と言つてもただの同級生ではありませんわ……。浅井淀

子……いや、そもそも浅井三姉妹は私のライバルですよ！」

「ライバル？」

しかも三人いるのか。

「ええ。私がいつか絶対超えなければならぬ相手ですよ。今は彼女

達に勝つ事は出来ませんが、最後は勝ちますわ！」

「はあ……」

だが美咲がすぐに落ち込み顔に変わり、

「でももしベルトを渡されたうちの生徒が、淀子さんなら、今の私には勝てませんわ……」

「そ、それじゃあどうするんだよ」

「こればかりはそうでない事を祈るくらいしかありませんわ」

ぶつちやけ何とか説得して、そいつに蘇我高校襲わせれば全て解決しそう。

蘇我高校と協力関係で無かったというのが条件だけど。

「とにかく決まったわけじゃないし、もしかしたらその淀子さんに協力してもらえば、蘇我高生の野望を打ち碎けるかも知れないじゃん」
今の考えを告げるが、美咲に睨みつけられる。

「協力してもらうのだけは絶対勘弁ですわ」

「なんでよ」

「浅井家の手だけは絶対借りませんの」

「いやそんな事言ってる場合か？」

「言ってる場合ですわ！ 浅井家に私の負けというようなものですわ！」

「な、なるほど？」

俺としてはビビってる時点で負けな気がするけど。

「とにかく！ いつかは浅井家に勝ちますの！ とにかく渡されていいかは気になりますし、明日確かめにはいきますわよ」

「おう」

※※※（美咲視点）

という事で美咲は、淀子がいるクラスに向かったが……。

「いませんわね……」

淀子の姿がない。

風邪も引かなそうな彼女が来ない理由が見当たらない……。

「何やってんだあいつ……」

後ろから聞こえた声。

それも聞き覚えがある……いやそれどころの話ではない。

美咲が最もライバル視している浅井家の人間の声だ。

「はあつうさあん!？」

「な、なんだよ」

黒髪ロングに、黄色の三白眼を持つ貧乳。

浅井家の三つ子の次女……浅井初（あぎいはつ）だ。

学年一位の成績を持つ生徒……そして二位である美咲のライバル。

淀子やあともう一人相手なら、勝てる分野があるというのに、こい

つにだけは一つも勝てないのだ。

「今から勝負しますわよ」

「いやしねえよ。てかお前こそ姉さんのクラスなんか覗いて、何して

んだよ」

「ライバルの貴女に説明する必要はありませんの。今日こそ私が倒し

ますわ!」

美咲はハンドメイド爆弾を取り出す。

そして初へと投げつける。

「危ねえ!」

しかし初は爆弾を避け、壁に跳ね返ったそれが美咲へと激突。

「ぎゃあああああああああッ!!」

廊下で死んだ。

※※※

「はあ……もう、何で勝てませんの……?」

「それは良いから、何で覗いてたか説明だけしてくれ。そして二度と

その面見せるな」

——嫌ですわよ。

「淀子さんを探してましたの。少し緊急事態で」

「姉さんならばらく家帰らねえって言って旅に出たぞ。ジャーズのアイドルにエンカするまで諦めねえとか、何なら私が芸能人になれるまで頑張るとか……ホントあいつ馬鹿だな」

「良かったですの……」

淀子を相手にする必要がない事が明らかになった。

第十三話

数時間後、六角家の美咲の部屋。

「どうだった？」

「淀子さんはいなかったですわ」

「いない？ それって……どんな理由で？」

まさか気付かれないように、蘇我高校で拉致されたとかないよな。

「妹の初さんが言っていましたわ。東京に行っていないと」

「……へ？」

「だから、アイドルに会う為に旅をしていないって話ですよ」

んな馬鹿な話あるのか……？

「あら、蘇我高校の教師なのに今更そんな事で？」

「いや……蘇我高生に不登校の奴……しかもそんなオバカな理由で休む奴とかいなかったからさ」

態度こそ悪いけど、逆に喧嘩出来る時に喧嘩したいから……不登校になる奴とかいないんだよなあ……。

いつそ来ない方が俺の胃には良かっただろうけど。

「そうですね。こちらはギャルとかもいますわよ。そこそこ真面目な人もいますが……裏が恐ろしい人とか」

○×女子高の方が恐ろしくないか……？

あ、でもギャルは好きかも……。

「すけべ……」

「はあ!？」

べ、別にそんな事考えてないのに……。

ただ金髪女は割と好きかなって……。

「破廉恥ですわ」

「偏見だ！ てかたまに俺の思考読むのやめてくれ!」

「無理ですわ」

「……うう、胃が痛い」

好きな女の子のタイプを想像しただけなのに。

「そこは良いとして、今の段階では淀子さんでない事が分かっただけで、誰が犯人なのかはつきり分かりませんわね」

「確かに……」

何とかして一気に全員を調べられる方法とかがあれば良いんだけど……。

「あ……良い事思いつきましたわ」

「本当か？」

「少し職権乱用にはなりますが……」

「はいはいはいよ。」

「え……本気か？」

「本気ですわ」

「しかも俺もこの作戦に参加？」

「当たり前ですわ」

まあ……一応恩もあるし、無下に出来ない……。

「分かったよ……」

「じゃあ決定ですわ」

大丈夫かなあ……。

※※※

二日後。

俺は何とか○×女子高の敷地内に潜入し、作戦が開始されるのを待っていた。

「にしても……この学校すげえな」

美咲の作戦はこうだ。

生徒会長の権限を使い、臨時の全校集会を開き、敢えて果たし状の中身を読み上げる事で怪しい動きをした生徒を見つける……というオーソドックスな作戦。

なのだが……そもそも生徒会長の権限で全校集会が出来るのがおかしい気がする。

他校だし、気にしたら負けかも知れないけど。

「ただいまより集会を始めます」

それに……わざわざバレそうな奴を選ぶとも思えない……。

「まず、生徒会長の話。六角美咲さん、お願いします」
「はい」

俺は体育館の外からバレないように見ていたが……中々佇まいだけはそこそこ良かった。

姿勢もちゃんとしているし、何より真面目に見える。

あれが中身にも反映されていればよかったのに……。

「今日は皆さんに、お話がありますわ」

美咲は果たし状を手に、話し始めた。

第十四話

「これは蘇我高校からの果たし状……そこにはこう書かれていますわ。『新しいベルトを○×女子高の生徒に渡した』。そして明日、私をどんな手を使っても倒しに来ると書いてありましたわ」

——蘇我高校？

——嘘でしょ？ あの不良達の巣窟の……。

——まさかウチに来るとかマジあり得ない。

「期待はしてませんが、この場を借りてお願いします。蘇我高校の生徒からベルトを貰った……という者がいれば、今すぐここで名乗り出なさい」

——いやいや、仮にいたとして名乗り出るの？

——無理っしょ。いくら不良の学校の連中でも、馬鹿正直に名乗り出る人なんて選ばないって。

それは俺も思った。

どうやって名乗らせる気だろうか。

「あくまで名乗り出る気はないみたいですね。なら……こんな手は使いたくありませんでしたが……」

ボマードライバーを装着し、爆弾型の端末を外す。

『BOMER DRIVE READY?』

端末を閉じてから右手を顔の左側近くまで移動させて構え、大きな声で叫ぶ。

「変身ですわー！」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

天から一個の紫に発光する爆弾が降り立ち、美咲はそれを右手で掴んで握り潰す。

爆風の中から、仮面ライダーボマーが現れた。

——え？ 何あれ。

——生徒会長……仮面ライダーだったんだ。

——アレ玩具じゃないの!?

「さて、これでこの場の全員が私の正体が仮面ライダーだという事は分かってもらえたと思います。そして……」

ボマーは武器の金属バットで、マイクが乗った演台を真っ二つに割る。

ほぼ全員が悲鳴を上げた。

「私がライダーである以上、まず変身してしまえば暗殺は不可能ですわ。大人しく名乗り出なさい。そしたら正々堂々叩きのめしますわ」
仮面ライダーらしくない態度だなあ……ライダーオタクの癖して。

「まったく……本当に雑だね。会長」

その声を上げる生徒の姿。

「名乗らせる為に脅す……そんなんで会長が務まるこの学校は本当に救えない」

遠目で見ていてよく分からないが、その生徒はベルトを装着した。

「……貴女でしたのね……山内（やまうち）さん」

「どうせこうでもしないと、アンタじゃ見破れないと思ったし。それに……暗殺なんてするわけがない。あたしはあくまで正々堂々とアンタのそのプライドも、自信もへし折るよ」

『FLAME THROWER DRIVE READY?』

「変身」

『COMPLETE』

上空から現れた火柱に飲み込まれる山内。

火炎放射器を模した、炎の怪人へとその姿を変えた。

「随分舐められたものですね。でも、これで正々堂々戦えますわ」
ボマーがバットを構える。

「明日……私が証明しますわ。私が頂点に立つ器だという事を」

「自惚れないですよ。どうせアンタじゃ、あたしに勝てない」

——明日あの二人が戦うのか！

——面白そうだし見に行ってみようよ！

——賛成！

あれ、俺要らなくね？

「おい君、何してるんだこんな所で」

「あ、いや……その……」

「不審者が我が校にいます。至急来てください」
何でこうなるんだアアアアアアツ!!

第十五話

「はあ……はあ……」

「どうしましたの？」

「どうしましたのじゃない！ お前が学校に潜入させたせいで、俺警察に捕まるとこだったんだぞ！」

しかも俺がいる意味無かったし。

「ああすみません。もし逃げ出したら捕らえてもらうつもりでしたの」

尚捕まる確率上がる奴だ……しかも不法侵入どころか、痴漢として。

もう何を言われても絶対に学校潜入系はやらない……。

「んで、ホントに明日戦う気かよ」

「ええ。勿論ですわ」

「もし何か仕掛けられていたとしてもか？」

真剣なまなざしで問いかける。

相手は勝つ自信が十分にありそうだった。

山内の事は知らないが、もしもの事があれば、美咲は蘇我高校に○×女子高を明け渡す事になってしまいかも知れない。

でも美咲の答えは一貫していた。

「相手の出す手に恐れていては、頂点に立つ資格なんてありませんわ。それを正々堂々打ち破ってこそその頂点。だから戦いますわ」

「淀子とやらにビビらなきゃカッコいいんだけど……」

「それを言わないで欲しいのです！ いつかは淀子さんにだって負けない力を付けますわよ！」

「そうか」

「その前に、まずは明日の山内さんとの戦いですわ！ 最後に頂点に立つのは私って事を証明しますわよ！」

美咲はビシッと外に向かって指をさして、意気込んだ。

※※※

次の日の放課後。

沢山の人が見物に来る中、ついに決闘が始まろうとしていた。不良の喧嘩とは言え、仮面ライダーと怪人の戦いだからか、生徒から話を聞いてきた一般人や特撮ファンも観客として来ている。

勿論……蘇我高校の連中もいる。

何なら記者まで、メモやカメラを手にガン見。

俺も一般客として来ていた……ただし、黒子として。

「バレないように……」

バレたらまた前みたいにいじめられる……。

「頑張れ！ 仮面ライダー！」

仮面ライダー対怪人なら、大抵仮面ライダーがホーム、怪人がアウェイになりがちだが、生徒達には彼女らの性格を知っている者がいるのもあって、敢えて怪人側である山内を応援するコールも。

「あたしがアウェイか……でも、勝てば良いだけの話」

「あら、他の人の応援を気にするなんて……貴女も意外と小さいですね」

「……」

山内が黙り込む。

お喋りは終わりだと言いたげに、山内はベルトを装着。

「……」

火炎放射器の形をした端末を操作する、彼女の瞳には……美咲に対する敵意が込められているのを感じる。

淡々とボタンを押した彼女。

『FLAME THROWER DRIVE READY?』

「変身」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

上空から現れた火柱に、山内は飲み込まれる。

火炎放射器を模した、炎の怪人へとその姿を変えた。

「では、私も……」

『BOMBER DRIVE READY?』

端末を閉じ、端末を掴んでいる右手を顔の左側に移動させる。

「変身ですわ」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

上空から一つの爆弾が降り立ち、美咲はそれを握り潰す。

そこから生まれた爆風の中から、一人の戦士が登場する。

紫の長ランに身を包む、仮面ライダーボマー。

「タイマン張らせて貰いますわよ」

バットを構え、ボマーは自信満々にそう告げた。

第十六話

かくしてルール無用、先に倒れた方が負けのタイマンがスタートした。

「先手必勝ですわ!」

バットを構えたボマーが、火炎放射器怪人に向かって全速力で駆け出す。

金属バットを大きく振りかぶり、そのまま脳天に向かって。

「……」

怪人には間一髪で躲される。

ベルトの能力もあるかも知れないが、何とか勘で回避された感がある。

「あたしは多分、アンタに力勝負じゃ勝てない。でも、アンタを一か月ずつと見てきた。あたしはアンタのやりそうな事なら見通せる……」

「たった一発避けた程度で……よくそこまでイキれますわね」

すかさず第二撃。

しかし……彼女の言う通り攻撃は躲されてしまう。

「攻撃を当てる必要なんてない。それ以外でも倒す方法はある」

火炎放射器の怪人はフィールドから、サッカーゴールの上へと飛ぶ。

確かに場外負けのルールはないが、敵前逃亡ともとれる行動。

それも背中ブースターの影響で、ジェットエンジン並みの速度を出している。

「なるほど……私が疲労したその時に叩くって事ですか? 上等ですわ!」

ボマーは火炎放射器怪人を追いかける。

ただいくらボマーでも、あの速度は……。

「まだ使ってなかった機能……試させてもらいますわ」

端末を取り出し、あるボタンをクリック。

端末から音声が流れる。

『ACCELERATE DRIVE』

加速……を意味する単語。

名の通り、ボマーの動きが、あの火炎放射器怪人とほぼ同等に。眼にも止まらぬ……という程ではないかもだが、それでも車なんかより全然速い。

「これならどうです？」

心なしか、加速出来る事が凄く嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「やるね……でもこちらにはこれがある」

飛行し始める火炎放射器怪人。

だがボマーには強力な飛び道具がある。

「ボムビット！」

ボマーの意思のまま、何も無い所から彼女の背中に、ダイナマイト型のビットが出現する。

複雑な軌道を描き、火炎放射器怪人へと飛んでいく。

「……」

それも読まれていた。

火炎放射器怪人は両手から炎を生み出し、ボムビットを跡形もなく消し去ってしまう。

「あ……当たりにませんの」

「何度も言わせないで。あたしはアンタのやりそうな事は分かる。蘇我高校の連中も、それが分かっててあたしにやらせた筈」

「ぐぬぬ……」

そうこうしているうちに、頼みの綱のアクセラレートも終了してしまふ。

『ACCELERATE END』

ボマーは加速した世界から引き離される。

「しまった……」

「切り札をそう簡単に使うなんて、何も考えてないのが見え見えね」

ボマーの凶星を指す火炎放射器怪人。

これで終わりだと言わんばかりに、火炎放射器怪人は右掌に巨大な

炎の弾を生成する。

「消し飛ばしてやる……」

「あ、あれはまずい……」

流石に止めないと！

「山内、そんな事したら俺達に当たる！」

黒子衣装なのも忘れて、俺は大声で叫ぶ。

「だから何？ 見学者が勝負に口出ししないで！」

余った左手で火の弾を生成し、俺に投げつける。

「ぐあっ！」

上着が焦げる。

俺は脱ぎ捨てて、何とか止めようと走り出す……が。

「やめなさい、裕太さん」

ボマーが止める。

「美咲……」

第十七話

「山内さん、その攻撃受けますわ。貴女の全力を受けても立ってられないようなら、私は貴女の上である資格はない……だから全力で来なさい」

ボマーが火炎放射器怪人に呼びかける。

「何言ってるんだ！ あれを受けたらお前どころか俺達まで！」

「ジャンプして軌道をずらしますわ。それなら貴方達には当たらない……」

「けどそれじゃお前が！」

「私がやると言ったらやりますの！」

ボマーは力強く宣言した。

「私を……信じなさいな」

「覚悟は決まったの？」

「ええ。受け止めてみせますわ」

ボマーは高く飛ぶ。

「これで終わり！ はあっ！」

火炎放射器怪人が火炎弾を放つ。

火炎弾は見事命中し、ボマーの全身を飲み込む。

「美咲！！」

※※※

炎は止んだ……。

死人はおろか、建物は一切損傷していない。

あの火炎弾は、ボマーの宣言通り……全て彼女が受け止めた。

「……」

火炎放射器怪人が笑う。

「やっぱり死んだか……まあ、分かっていた事だけど……」

「……まだ……ですわ……」

あの炎の中に消えた、そう思うしかなかった筈の美咲の声。

「！」

変身こそ解除されていたが、何とか体育館の屋根の上に立っていた。

制服の一部が焦げ、肌の一部が露出している。

だがボマードライバーは無事のようなのだ。

「どうして……」

「私は貴女より上に立つ人間……だから、あの攻撃くらい……受け止めて当たり前ですわ」

「ッ……」

「私は確かに、強引ですわ。勝つ為なら手段など選びませんし、受けた勝負は片っ端から受けて立ちますわ。ですが、誰にも認められずに勝っても……それはただの自己満足。私は貴女に負けを認めてもらうまで、何度だって攻撃を受け止めますわ」

美咲はもう一度、ボマードライバーを操作する。

『BOMER DRIVE READY?』

「変身ですわ」

構えてから、端末を取り付けた。

『COMPLETE』

ゆっくりと降ってくる爆弾を、美咲は握り潰す。

爆風の中から、再びボマーが現れる。

「ふざけるな……あたしは認めない！ 絶対にアンタを認めない！」

火炎弾を放つ怪人。

しかし外してしまう。

「認められないのなら、もう一度撃ちなさい。今度は狙いなさい。そして貴女が私の上に立てばいい……でも、それを私が認めませんわ」
「くっ……あああああああッ！」

怪人がボマーと距離を詰め、得意の炎攻撃を何度も浴びせる。

ボマーは避けない。

次の攻撃からは、むしろ外れる筈のものすら当たりに行っているように見える。

「山内……さん……それで終わりですか？」

「あああああああッ！」

炎攻撃から、拳に切り替える。

ボマーの顔面に、重い一発が入った。

だが彼女は怯まない。

「これで終わりですわ」

顔面に拳が突き刺さった状態で、端末を操作する。

『FINAL DRIVE!』

今度はバットを構え、ボムビットがバットを囲うように出現した。

「ライダーインパクト……」

怪人の脳天にバットを振り下ろしてから、今度は脇腹に向かって薙ぐ。

当たった瞬間、ボマー自身を巻き込む大爆発。

変身解除された怪人……山内がごろごろと転がってから気絶し、ボマーは多分あの爆発で死んだのだろう。

爆風から少し遠い所で、何も無い所から復活し……天を指さしていた。

——おーっ！ カブトのポーズだ！

「えっ！」

あれ自分は天国に行った的なポーズじゃないの!?

第十八話

ボマー……美咲は変身解除してから、大きな声で叫ぶ。

「蘇我高校の生徒に告げますわ。私はどんな手を使われても、全力で迎え撃ちますわ！」

観客として見ていた生徒の一人が、美咲に近付く。

「やるじゃないか。○×女子高生徒会長」

厳つい顔の男だ。

身体は大きく、俺より一回り大きい。

そんな男が、美咲の対面に立つ。

「貴方は……」

「俺は蘇我高校生徒会長の……足利明人（あしかがあきと）。蘇我高校の選んだ生徒を倒すとは、やるではないか」

純粹に美咲を褒め称える明人。

美咲は少し睨んで問う。

「前回の一年坊主と、今回山内さんを仕向けたのは貴方ですか？」

明人は目を閉じて答える。

「その質問については黙秘させてもらいたい。だが、二度も卑怯な手でお前に剣を向けてしまう事になったのは会長たる俺の責任でもある。詫びよう」

「詫びる必要はありませんわ。それより……私達の学校を支配下に置いて、どうするつもりですか？」

「蘇我高校は強者の集う場所。常に頂点で居続ける為に、俺達は他校を支配する。それ以外に理由はない」

理屈が通じない……それが蘇我高生のめんどくさい所。

「なら……私も同じですわ。貴方方が自分のやり方で頂点を目指すなら、私は正面から受けて立ちますわ」

「それがお前の答えか……」

明人は少し笑みを浮かべる。

「その心意気だけは褒めてやる。だが……」

『SWORD DRIVE READY?』

剣型の端末を取り付ける明人。

『COMPLETE』

天から降りてくる剣の柄を受け取ると、そこから全身が怪人の肉体へと変わっていく。

「はあッ！」

「変身ですわー！」

咄嗟に変身し、バットで上段斬りを防ぐボマー。

剣の怪人が問いかける。

「この俺の剣を前にしても、同じことが言えるか？」

「同じことを言いながら、その剣をへし折りますわ」

ボマーが怪人の剣を弾く。

「気合と力は十分のようだな」

「そうでしょうか？ ここでクライマックスにしますわよ？」

『FINAL DRIVE!』

「ライダーインパクト！」

ボムビットが回りを囲うバットを構え、それを怪人の脳天に振り下ろす。

『FINAL DRIVE!』

「……」

対して怪人は、その場から姿を消す。

「どいん……」

最初の一撃を外したボマー。

そこに見えない斬撃がいくつも叩き込まれる。

生身の人間なら即死級の大ダメージ。

「……」

ボマーの変身が解除されてしまう。

ボロボロになった美咲が、何とか食いしばって立っている。

「どうやら、今は俺の勝ちらしい」

剣を振るってから、変身を解く。

「六角美咲……お前のその勇気を見込んでもう一度勝負を挑みたい。

二週間後、蘇我高校に山内と共に来い。そこでこの戦いに決着をつける」

「望む……ところですよ。ケツチャコ……」

「バタツ……」。

「美咲ッ！」

美咲は気絶し、俺はすぐ様彼女に駆け出していた。

第十九話

美咲が倒れてから数時間後の夜八時。

俺はあの後すぐに目を覚ました山内と共に、彼女が眠るベッドの近くの椅子に座っていた。

「……」

山内も、そしてあれだけの攻撃を受けた美咲も、命に別状のあるダメージはない。

特に心配する事はないと言われたが、俺は取り敢えず起きるまで傍にいた事にした。

「ねえ、アンタ」

隣に座る山内に声を掛けられる。

俺の方が年上で、元とは言え教師だというのに、彼女の口の利き方は美咲に対するものと同じだ。

「取り敢えず……アンタ呼びやめてくれないかな……」

「じゃあなんて呼べばいい？ 会長の金魚の糞？」

ムカツ……。

「俺が好きでこいつと一緒にいると思うのか……？」

「違うの？」

「違いヤス」

「じゃあなんで一緒にいるの？」

「……」

言えない。

就職先を見つけてもらう代わりに、美咲に働かされてますなんて言えない。

恥ずかしすぎて……。

「とにかく！ 俺には福沢裕太っていうちゃんとした名前があるんだ！ だからせめて裕太さんと呼んで

「フクでいい？」

「うう……」

急にお腹が……。

「急に腹抱えてどうした？」

「その呼び方にはトラウマがあるからやめてくれ……
いててて……。」

※※※

「落ち着いた？」

「うん……」

あつたかいお湯飲んだら何とかなつた……。

「でもさ、裕太もこんな人と一緒だと疲れない？」

「そりゃあ疲れるけど……でも、なんだかんだ最近はいいつに救われた」

「救われた？」

「ああ……色々と」

決してコネで就職させてもらっただけではなく……ね。

「俺は美咲みたいに強くないし、度胸もない。でも……俺も彼女みたいに強い意思を持って生きてみたいって思えた」

そしたらまた来年こそ……教師になりたい。

自分の考えや経験を、ちゃんと生徒に伝えられる教師に。

「変わってるね、裕太も。あたしにはもう……」

何かを言いかける山内。

その時。

「んっ……んー……」

美咲が目を覚ました。

「ここは……どこですの？」

「病院だよ。剣の怪人にやられた後、救急車を呼んだんだ」

「そうですの……」

美咲は目を閉じる。

落ち込んでこそいないが、悔しそうな顔をしていた。

「二週間後って言ってたけど……どうする気なんだ？」

「戦うに決まっていますわ」

彼女の意思は固い。

だが……。

「勝てるのか？」

「今のままでは……恐らく無理ですの。なら方法は一つですわ」

「それは……？」

「それは……」

美咲は溜めてから、告げた。

「修行ですわ!!」

ガチャ。

「テメエらうるせえぞここどこだと思ってるんだ！」

「……」

バットタイミングだったな。

「うるさいですわ」

第二十話

数日後。

蘇我高校科学部部室。

「精が出ているみたいだな、遥先公」

「……」

明人の言葉に、返事はおろか、振り向きすらしない遥。

遥は今、培養器の前で……それに繋がれたパソコンを操作している。

培養器の中には、赤ん坊の姿が。

「その赤ん坊は何だ？」

「そうだな……二週間後の決戦の隠し玉、とでも言っておこう」

明人はその言葉に眉を潜める。

「そんな話は聞いていないし、それは俺が負けると思っているという事か？」

「勘違いするな。元々私は、お前達を利用する為に来たに過ぎない。お前達の勝ち負けなど……私にはどうでも良い事だ。もしお前が負ければ、その時はこいつを使ってでも美咲……いや、誰かが白状しなければ全てを殺すかな……」

光のない瞳で、遥は明人に告げた。

「先公、アンタが復讐とやらを成し遂げる為にここに来たのは知ってるさ。でも……俺はこれ以上、あいつらに卑怯な戦い方をさせたくない。正々堂々戦って勝ってこそ、他校を支配する価値がある。ここは俺達の学校だ……これ以上ここの生徒達をお前の卑怯なやり方に染めさせるな」

「……」

遥は黙っていた。

「ちいーっすー！」

そこに別の人物が現れる。

軽いノリの女の子の声。

「一体何の用だ……前田（まえだ）」

「別にいい？ 面白そうだから来ただけだよお」

ギャル風の女子生徒……前田は蘇我高校の中でも珍しい生徒と言える。

腕つぶしはそこそこ良いが、気まぐれで協調性がない。

統率や礼儀を重んじる明人が苦手なタイプだ。

「このベルトで怪人に変身出来るんだっけえ？」

前田が手にとったのは、ホースドライバー。

全てのベルトの原型たるアーミードライバーと同じく汎用性があるベルトで、馬と常に一心同体で戦う騎兵型の怪人になる事が出来る。

「この部長でもある副会長おから聞いたけどお、今六角美咲とかつて奴と戦ってるんでしょお？ やらせて欲しいなあ〜」

手を合わせてお願いされるが……明人は嘆息して。

「許可出来ん。あいつと山内には俺と俺が選んだ奴に戦ってもらおう。お前の出番はない」

「ケチねえ。でもお……そんなの私に関係ないからあ」

『HORSE DRIVE READY?』

「変身☆」

『COMPLETE』

背後から実体のない馬が走ってくる。

前田はジャンプしてからその馬に乗り込む。

「えへ☆」

馬が実体化し、前田の身体が女性騎士の姿へと変わる。

「悪いがそっちもその気なら……」

「足利」

変身しようとする明人を、遥が止める。

「面白い……前田、六角美咲を倒す自信があるのか？」

「分かんないけどお、ちよつと面白そうだなあつて」

「良いだろう。やれるだけやると良い」

「りよおかあい☆」

前田は変身解除してから、スキップしつつ部屋を出た。

「何てことをしてくれたんだ」

「私の役に立つなら、何でも利用する。それだけの話。それに……もし私の探す突然変異体が美咲ではなく、お前達の中にいるなら……私はお前達の生徒だろうと容赦なく殺す」

「……」

明人は拳を震わせる。

「どうやら……力づくでお前の野望を止めるしかないようだな」

『SWORD DRIVE READY?』

「……」

端末を取り付ける。

空から降りて来た剣の柄を握り、そこから明人の身体を怪人へと変化させた。

「それはこちらの台詞だ、足利」

遙も立ち上がる。

指揮官らしき帽子を被っている兵士……の形の端末が取り付けられたドライバーを着け、端末を操作。

『ROAD DRIVE READY?』

「変身」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

王者の証らしきマントが空から降り立ち、遙が纏う。

様々な勲章を付けた軍服が、そのマントから光を伸ばし遙の身体を覆う。

指揮官の怪人が……その場に姿を現す。

「さあ、始めようか」

第二十一話

先制は剣の怪人。

武器を水平に構え、平突きで指揮官怪人の首元を狙う。

「遅い」

指揮官怪人が回避。

残像が残る程の速さだ。

「……」

「まだまだ……ッ！」

剣の怪人も負けじと指揮官怪人に立ち向かう。

だが……速さは及ばない。

「それがお前の限界か……」

悟ったかのように、指揮官怪人は端末を開く。

『WARRIORS DRIVE』

音声の後、何もない空間から実体のない兵士達が現れる。

剣の怪人に五体の兵士が切りかかり、怯まされてしまう。

「くっ……」

動けない明人に、遥は告げる。

「これで終わりだ」

『FINAL DRIVE!』

端末を操作した後、更に多数の兵士が出現。

剣の怪人へ一斉射撃し、そのまま指揮官怪人がトドメに大剣を振るった。

「ぐあッ！」

「……」

剣の怪人……明人は変身解除に追い込まれる。

「その身体では、しばらくくまともに戦う事は出来なそうだな」

「くっ……俺としたことが……」

「まあ良い。お前がいなくても、私の復讐に影響はない……。まずはあの女にボマーを消してもらおう」

遙は倒れた明人を放置したまま、パソコンに向き直った。

※※※

美咲が退院し、数日後の月曜日。

全員で仕事や学校を休み、俺達は森へ向かう。

「車の動きが重い……」

乗っている人数は俺、美咲、山内で三人の筈。

だがそれにしても重い……。

まるであともう一人分乗ってるかのよう。

「美咲、言っておくけど遠足で行くんじやないんだからな？」

荷物の積み過ぎを疑って言う。

「言い出しっぺは私ですからそんな事しませんわよ」

の割に水着を入れた袋を抱えている。

俺だって水着なんか持ってきてないぞ。

そんなな泳ぎたいのなら遠泳十キロの後ランニング十キロの刑に処す。

「会長、泳ぎで勝負する？」

「まだ私と争う気ですか？ 上等ですわ」

二人とも相変わらずだ。

「何系？ 水着勝負ならウチの出番っしょ！」

「……最後の声誰だ？」

俺と山内はそう眩かざるを得なかった。

明らかに知らない人の声ですもの……。

「優香（ゆうか）さん？」

「美咲っちお久！」

「いつの間に乗れ込んだんですの!？」

美咲の声の方向を見ると、彼女の隣に見知らぬ黒ギャルの姿があった。

彼女が優香というのだろう。

「美咲っちが来週から修行とか言ってたの聞いたんよ。面白そうだからついてきた系」

「あの……取り敢えず自己紹介良いかな……」

「ん？　ウチの事聞きたい系？　しゃーないなあ、兄ちゃん中々イケメンだしこの後ベッドでサービス

「しなくて良いからね？」

バレたら捕まるし。

第二十二話

「私が紹介しますわ。彼女は同級生の岸本優香(きしもとゆうか)さんですわ」

「美咲っちの友達系ね！ よろしこ！」

「貴女を友人にした覚えはありませんわ。このクソ〇ツチ」

「美咲っち冷たい」

「大体今から私達は修行に行きますのよ！ 遊びではないんですから、今からでも帰ってくださいな」

「嫌系」

「いい加減になさい！」

うるせえ……。

「裕太、私助手席座つても良い？」

「先輩を優先しなさい山内さん！ 私はこの人の隣は嫌ですの！」

「あ、ズルい系！ ウチが行く系！」

「どうぞどうぞ」

テメエらふざけんなよ!?

※※※

もう車を止めずに、黙って森の中まで移動。

車からキャンプ用の道具やらを取り出し、早速テントを設置した。

「よし、完成だ」

だが問題発生。

「俺一人だけ男なんだけど、どうしようか」

流星に女子高生と同じテントで寝るわけにもいかない……。

テントは一つしかないし……ここは。

「裕太、アンタレディーファーストという言葉知ってる？」

「俺の辞書にそんな言葉は存在しない」

「何て自分勝手な辞書なの!？」

「自分勝手という言葉もない」

なので。

「ここはそっち一人で代表者を出して、じゃんけんで決めないか？」

「男として恥ずかしくないの？ アンタ」
知らんな。

※※※

というわけで、山内とじゃんけんをする事に。

「……」

「……言っとくけど負けないう裕太」

「こっちこそ」

「任せましたわよ山内さん！」

「山内つち、頑張る系！」

「こんな男に負ける気ないから、大丈夫」

「もう話は済んだか？ じゃあ行くぞ」

ドキドキ……ドキドキ……。

「じゃらんけん！」

「ぽん!!」

両方ともグー……。

次はチョキで……。

「あいこでしょ！ あいこでしょ！ あいこでしょ！」

※※※

じゃんけんが始まり一時間……結局決着がつかずにいた。

「はあ……中々やるな」

「アンタもね……」

「早くしてくださいな……夕飯の準備とかもあるんですよ」

「ウチ眠くなってきた……美咲つち膝枕させる系……」

「か、勝手に寝ましたわね……」

本当に何しに来たんだろ……あの人。

「こうなったら腕つぶしで決めない？」

「は？ お前何言って

『FLAME THROWER DRIVE READY?』

「何変身しようとしてるんだ馬鹿！ 俺が死ぬだろ！」

「もうこれしか方法ないでしょ」

はあ……まったくこいつらは……。

「もういい！ 俺の負けで良いから殺すな！」

「やったあ！」

「やりましたわね！」

「ん？ 勝った系？」

女がいつぱいいるのも良い事ばかりじゃないな……。

第二十三話

「修行は明日からにするとして、今日の晩飯決めようぜ」

「夜は焼肉ですわ！」

謎ポーズと共に宣言する美咲。

「カレー系！」

「カレーがいい」

「俺も」

「……どうしてですの」

美咲が落ち込む。

「分かった分かった明日そうするから」

「アツハツハツハ！」

急に笑い出したな美咲……怖え。

「取り敢えず俺が森の外でスーパー見つけてくるから、お前達まきを集めてくれるか？」

「了解ですわ」

「分かった」

「おけ！」

※※※

取り敢えずカレーの材料を購入し、もう一度森へ。

「流石にあいつら三人でもまきはちゃんと集められたよな……」

物凄く心配だが、取り敢えず大丈夫である事を祈りたい。

もうすぐ夕方だし……。

「そこにいたのか」

「ん？ うわッ！」

俺は背後から切りかかられた。

かすりではあるが、少し傷を負う。

「誰だ……？」

振り向くと、そこには人がいた。

黒いフードを被り……顔を隠している。

「そんな事どうでも良いだろ？ 俺はお前の……福沢裕太の知らない

誰か。強いてそれに答えるならそんな所だ」

距離を詰め、もう一度剣を振るってくる。

「少しお前の顔が見たくなってな……会いに来てやったのさ」

「どういう事だ？ お前は俺を知ってるのか？」

「知っている……という言葉で表せる関係ではないかもな」

言葉の意味を察しようとしたが、まるでどういう関係か分からない。

「餞別だ……これを受け止めてみる」

刀を構える黒フード。

俺は避ける準備をする。

「はあっー」

だが……避け切れず。

刀が俺の首に近づく……その時。

「うわあああッ!!」

咄嗟に振るった俺の拳が、黒フードの身体を大きく吹き飛ばした。

「これがお前の力……面白いじゃないか」

黒フードは何とか立ち続けて笑う。

「え……」

自分の実力にも声も出なかった俺をよそに、黒フードは背を向けて立ち去る。

「また近いうちに会おう。じゃあな」

「……」

フードの下に潜む瞳が、少しだけ見えた気がした。

※※※

「何だったんだあいつ……」

蘇我高校の生徒かどうかは分からないが、俺を知っているような口ぶりだった。

だが俺はあんな黒フードの男と会った記憶はない。

それに声も、誰のものか分からない。

「それに……」

俺自身の事も、少し気になった。

俺は何か凄い力で、あの黒フードを吹き飛ばした。
まるで突然変異体のように……。

だが……俺が突然変異体なのはあり得ない。

何せ突然変異体なら使える筈のボマードライバーはあの時使えず、
俺は変身出来なかつた。

一体何が何だか……。

「……………」

俺の頭が痛み……同時に一つのイメージが浮かぶ。

「これは……」

俺が知らない場所で、急に倒れ……意識を失っている。

最後に見たのは……俺と同じ顔の男？

「はあっ……はあ……」

イメージはそこで終わる。

痛みも引き……俺は木にしがみついて息を荒くしていた。

「俺は……一体……」

「どうしましたの？」

いつの間にかいた美咲が声を掛けてくる。

「美咲……」

「楽になるまで少し待ちますわ」

近くでそう言ってくれる美咲。

「ああ……ありがとう。美咲にも優しい所あるんだな……」

「優しいと言いなさいな」

それは無理かな。

「聞こえてますわよ」

「何も言っていない!」

俺と美咲のいつも通りの感じの会話で落ち着き、テントを置いた河
原が見えてきたところで問いかける。

「美咲はさ、もし自分の記憶に迷いが生じたらどうするの？」

「どういう意味ですの？」

「どうやら俺……昔俺に似た誰かと顔を合わせて、そのまま倒れたら
しいんだ。でもそんな事した覚えはないし……それに……」

「？」

「いや、なんでもない。やっぱりこの質問も無かった事にして」

下を向く俺に、美咲は取り消した筈の質問への答えを告げた。

「私にとつて、過去の記憶は所詮自分の一部。大事なのは今の自分で
すわ。生徒会長として、ボマーとして、今の自分にすべき事を考える。
過去は今更変えられないのですから、今見てるものを大事にすればい
いのです」

言いながら手首を動かす。

「美咲……」

「大体貴方は、自分に自信がないように見えますわ。男ならもつと自
信をもつて、堂々と生きなさいな」

「う……うん……」

「そうでなければ、私のお供失格ですわよ」

それはいつそ失格にして欲しい。

「聞こえてますわよ」

「だから何も言っていない！」

第二十四話

取り敢えず到着し、まきがちゃんと集まっているのを確認。
やらかしそうな三馬鹿でも、まきを集めるくらいは出来ていてほつとした。

「そこはかたなく馬鹿にされているように感じますわ」

「気のせいだよ多分」

さつきから勘が良いなこいつ。

美咲のような勘の良いガキは嫌いだよ。

「あたし頭は悪くないよ?」

「何? ウチの事馬鹿にしてる系?」

訂正。

勘の良い奴しかいなかった。

その後全員で協力してカレーを作り、何とか一日目が終了。

テントの中で寝ている女子三人から少し離れた場所で、俺は横向きに寝ていた。

「石いてえ……」

せめてレジャーシート持つてくるべきだったな……。

※※※

次の日。

いよいよ修行開始だ。

「全員起きたか?」

「まだ起きてない系じゃん……裕太っちの股の

「やめいー!」

なんか逆に意識しちゃうじゃないか!

「美咲と山内は?」

「まだ起きてない系」

……じゃあ起きてんの優香だけなの?

何でこいつだけ起きてんだよ。

「起きるまで遊ぶ?」

「遠慮しとく」

何度でも言う。

俺の好みは清楚系のお姉さんだ。

「じゃあウチが着替えても同じこと言える系？」

「馬鹿やめろ何着替えようとしてんだ！」

「？ この下水着系」

ゑ……………？

「下着か何も着てないと思った系？ それに遊ぶって何考えてた系？」

あれ……………もしかして。

「裕太つち……………ウチよりドスケベ系？」

断じてねえよ！

「たつてる系」

「ゑ!？」

「嘘系」

「これ以上からかわないでくれ……………」

「嫌系」

……………もう嫌だこの人。

「……………取り敢えず皆を起こしてくれ」

「りよー！」

※※※※

「全員起きたか？」

「はーい……………」

「朝キツイ……………」

「おっすー！」

一番どうでも良い奴が一番元気だな。

「今から修行を始めるぞ。取り敢えず……………何かからすればいいんだろ……………」

てか何でコーチ俺なんだろ……………今考えても不思議だけど。

「あ、いいこと思いついた系」

「何？」

「うち、高二の頃……美咲っちと一緒にアイドル大会に参加した事あるんよ」

「アイドル大会？」

「そんなラブ○イブみたいな大会あるのか……」。

「その時やってた特訓やる系？」

「面白そうね。あたし賛成だよ優香」

「……」

「美咲さん？」

「あの特訓は……嫌ですわよ……」

「へ？」

「説明よりやる方が早い系。準備する系」

優香がどこかに向かつて歩こうとする。

だがすぐ足を止めた。

「河原に鉄骨ってある系？」

「ねえよ！」

てか何やる気だよ！

「困った系……鉄骨なきや鉄骨渡り出来ない系……」

「カイ○かこいつらは！」

「もう二度と鉄骨渡りは嫌ですわ……」

「お前まさか……」

「落ちて怪我した事ありますわ……」

怪我されても困るし却下だな。

第二十五話

中々修行方法が思いつかず……最終的に俺が決める事に。

「裕太さんは何かありませんの？」

「そうだなあ……」

俺的には思い出深いのはアレかな……。

「よし、じゃああれやってみるか」

※※※

崖を登り、森の奥を見通してから……俺は石を取り出す。

マジックペンで『裕太』と書き、そのまま石を森に向かって投げ飛ばす。

「とうっ！」

「……」

「……」

「これ……もしかして」

俺が修行と言われて思い浮かんだものの一つだ。

「いいか皆、今から森に向かって投げた石を探してもらおう。制限時間は無しで良いか。俺の所に先に持ってきた奴を勝ちとする……負けた奴は晩御飯抜きだぞ」

「……」

「……」

「晩御飯抜き……それはキツイね」

「なんだ美咲に優香。晩御飯抜きになりたくなければ頑張らないと……」

「いや、裕太さん。これ言っても良いのですの？」

「何？」

「このネタ……もう去年やりましたの」

……うそーん。

「会長に優香、あたしはやるよ。アンタらどうするの？」

「飯抜きは嫌系。やるよ」

「今日の夜こそ焼肉ですわ！」

「それじゃあよーい……どん！」

全員森へと駆けていく。

「さーて、飯の準備するか」

※※※

数分後。

優香は何とか、持ち前の運動神経で二人に追いついていた。

「ライダーと怪人って聞いたけど、大した事ない系じゃん？」

「……山内さん」

「うん」

二人は端末を取り出す。

「変身！」

ボマーと火炎放射器怪人へ変身する。

「あ！ズルい系！」

「フルバースト」

『ACCELERATE DRIVE』

二人は高速移動で姿を消す。

「……これじゃ勝てない系……」

「そうでもないかもよ」

「？」

聞き覚えのある声だ。

振り向くと、見覚えのある少女が石を握っていた。

「前田っち！」

「必死になって何か探してるの見てさ、多分これだと思ったんやけど
ちやう？」

「それ系それ系」

優香は前田から石を受け取る。

「相変わらず勘が良い系……でもどこで見つけた系？」

「ここに来た時に落ちてきたんよ。マジックで名前まで書かれてた
し」

「なるほど系。あざまる水産！」

「いいって事よー！」

「じゃね〜」

その場から立ち去る優香。

※※※

前田は優香が立ち去ったのを確認してから、ベルトを取り出す。

会話は全て聞いていた。

修行で石を探しているのも知っている。

あとは美咲と山内を探し、倒すのみ。

『HORSE DRIVE READY?』

「変く身☆」

『COMPLETE』

背後から実体のない馬が走ってくる。

前田はジャンプしてからその馬に乗り込む。

「てい☆」

馬が実体化し、前田の身体が女性騎士の姿へと変わる。

「よっ」

前田は一息ついてから、森の奥へと馬を走らせた。

第二十六話

ボマーと火炎放射器怪人は組み手をしながら、石を探し続けている。

「また腕を上げましたわね、山内さん」

「会長もね」

空中からボマーのライダーキックがさく裂。

火炎放射器怪人はそれを難なく回避。

「よつと……でも、まだあたしが落ち着いてる時は攻撃読まれっぱなしね」

「うるさいですわね……読まれないようにつてのが一番難しいんですよ。大体避けるなんて卑怯ですわ」

「はあ……会長。少しは攻撃の回避とかもちゃんとやらないといつか死ぬよ?」

「それは……気に入りませんのよ。売られた勝負はちゃんと買って、必ず勝つ。それが私の流儀ですわ」

ボマーは爆弾を投げる。

しかし木に当たって跳ね返り、ボマー自身に命中。

「……」

だがすぐに山内の背後で復活。

「それに私は爆発じゃ死にませんわ」

「……この人に学校任せて大丈夫なの?」

自分はこの人に負けはしたから仕方ないけど、凄く心配だ。

「とにかく、私は何があっても攻撃は避けませんわ。避ける以外の方
法で何とかしますの」

「まあ……その方が会長らしくて良いか……」

色々考えたが、それでも彼女はそのやり方で結果を出している。

今更自分がとやかく言いまくるわけにもいかない。

それに彼女なら何とかしてくれるだろう。

いざって時は人並外れた根性とメンタルで……。

「へえ、攻撃避けないのお？　ならこの攻撃も避けないよねえ？」
「！」

ボマーの背後に、騎兵の姿。

「志村後ろ！」

「はあッ！」

ボマーは咄嗟に、バットで攻撃を受け止め……そして押し返した。
「私は確かに避けませんが、簡単に攻撃を当てるなんて百年早いですわ」

「へえ、確かに凄い根性だねえ」

「……」

「どうしたのお？」

「いや、その喋り方……凄く知ってる人を思い出すからやめて欲しいんですの……」

「誰の事お……？　あ？　もしかして優香ちゃんの事？」

「貴方知り合いましたの!？」

「中学の時からズツ友だお」

「どうりでテンションが似てるわけですわ……」

「あ、今から倒すけどお、いいよねえ？　答えは聞いてないよお？」

「まるでリユウタロスみたいないない回しですわね……ならこっちは、最初からクライマックスですわ！」

バットを構え、騎兵怪人目掛けて駆け出す。

「うおりゃあッ！」

「あんッ！」

見事に一撃ヒット。

「流石あ、美咲ちゃんつをいねえ」

「調子狂うから戦う時くらいその喋り方やめなさいの！」

「おっと、そんな事言っつていいのお？」

騎兵怪人は端末を取り出す。

「知ってるう？　ギャルってケータイ打つのめっちゃ早いんだよお？」

『FINAL DRIVE!』

「これでえ……どお？」

光を纏いながら駆け出す騎兵。

「危ない！」

ボマーの前に、突如影が現れる。

あれは……。

「ぬあつ！」

「……へえ、また止めに来たのお……？ 会長お」

変身が解けた剣の怪人……足利明人が、ボロボロの身体でボマーを庇うように立っていた。

「これ以上……お前の好きなようにはさせない」

第二十七話

「会長やっぱ面白おい……でもお、そんな身体でえ……どうする気い？」

「例え身体がボロボロだろうと……俺は蘇我高校の生徒会長に登り詰めた男だ。ハンデがある程度で勝ちを譲るわけにはいかないな」

何とか立ち続ける明人。

「何をしているんです、足利さん！」

「お前は逃げる。こいつは俺が止める」

「でも逃げるわけには！」

「忘れるな!! お前は俺が倒す……そしてお前の学校を貫う。だから、お前の根性とやらを俺に見せてみる。俺にビビらなかつた他校生は、お前が初めてなんだ……そんなお前を、こんなふざけた奴に倒させてたまるか！」

『SWORD DRIVE READY?』

端末を操作し、明人がベルトに取り付ける。

『COMPLETE』

空から降ってくる剣の柄を掴み、そこから怪人の身体へと変化していく。

「行け、六角美咲。強くなったお前を倒すのを、楽しみにしている」

「……分かりましたわ」

美咲は拳を震わせる。

「行きますわよ、山内さん」

「ええ」

『ACCELERATE DRIVE』

「……」

ボマーと火炎放射器怪人は、高速で移動し、姿を消す。

「あの時は逃がしたが、もうそうはいかんぞ」

「私もかあなあり強いから、会長じゃ勝てないかもよお?」

※※※

スタートから二時間後。

「裕太っちゅー!」

「?」

「見つけた系〜!」

遠くから石を持って走って走ってくる優香の姿。

「お、とつてきたか。二人は?」

「二人は森の奥行つたつきり見てない系」

「そうか……まあすぐ戻ってくるだろ」

石を取り敢えず確認。

「確かにこれだな。この勝負、優香の勝ち!」

「やった系!」

と話をしていると……その奥から、必死に逃げて来たと思しき二人の姿が。

「遅いぞ二人とも。お前達二人とも負けたぞ」

「……何の話ですの?」

「いや、石探しの修行してただろ」

「……あ」

あ、じゃねえよ。

「とにかく、二人とも飯抜きだぞ」

「しまったああああああああああ!!」

「夜は焼肉……」

「焼きマシユマロ……」

ガシッ。

「なんだ? 俺の脚なんか掴んで」

「うるうる……うるうる……」

ガチ泣きかよ……。

「まーいいじゃん。焼肉は皆で食べる系で!」

「まあ優香が今回勝者だし、それなら文句ないな……。良いよ、皆で食べようぜ」

「!」

二人は一緒に飛び跳ねる。

「でも石探しの事を忘れる程の事態ってなんなんだ……？」

「あ、野生児の股の棒が

「多分違うから話さなくてよろしい」

この黒ギヤル……。

「あ、実はこういう事があつたんですの」

かくかくしかじか。

「なんだって！」

第二十八話

「え〜いっ♡」

「はあっ……ぬんっ！」

騎兵の攻撃を、剣の怪人は何とか受け止め……弾き返す。

騎兵は少し距離を取る。

「大怪我してるって割に、中々やるねえ」

「……お前程度など、ハンデがあるくらいが十分だ」

剣の怪人が構えなおす。

強烈な痛みはあるが、変身しているおかげか……多少誤魔化されている。

「会長おって凄く面白いけどお……飽きちゃったかな。もうこれで終わりい！」

『FINAL DRIVE!』

馬の頭部に光が集まる。

「やらせるか……」

『FINAL DRIVE!』

剣の怪人は姿を消す。

今まさに突撃しようとしている騎兵が動揺する。

「しまっ……」

眩く頃には遅かった。

見えない斬撃が何度も叩き込まれ、システムが騎兵の攻撃を解除してしまおう。

「とどめだ」

怯んで動けない騎兵に、すかさず斬撃を叩き込む。

騎兵は、剣の怪人の一撃で変身が解かれ、ごろごろと転がっていく。

「……俺の勝ちだ」

ソードドライバーが自動的に変身を解除する。

無理が祟ったのか……明人の身体を変身前よりも凄まじい痛みが襲う。

「……………」

声も出せない程の痛み。

何とか意識だけでもとどめようとするが、それすら明人の身体は許さない。

「……………」

明人はそのまま……気絶してしまった。

※※※

石探しから次の日。

例の騎兵怪人の襲撃に備えていたが特に何も起こらず。

次の特訓を開始しようとしていた。

「さてと、あの騎兵怪人も来ない事ですし次の特訓をしますわよ」

美咲がガッツポーズでそう告げてから、俺を一瞥する。

多分ネタを出せと言いたいのだろう。

「もうレパートリーが……………」

「あれでネタ切れですか?」

「いや、まああるにはあるんだけど……………」

牛乳配達とか手で畑耕すとか、木から出るハチの攻撃避けるとか……………」

「竜の玉系統しかないや」

「…………裕太さんに頼るのはダメみたいですよ……………」

てか俺を頼るな。

※※※

数分くらい考えたが、やはり出ない。

美咲は突然こう言います。

「特訓の内容が思いつかないなら仕方ありませんわね。今日は川で遊びますわよ!」

「賛成!」

この人達大丈夫かな…………特訓と張りきった割にいきなり遊びだしたし…………。

「裕太さんも着替えますのよ」

「俺も!」

しかもご丁寧に俺の海パンまで……。

「お父様のですわ」

「人のかよー!」

人の海パンとか絶対履きたくないんだけど。

「良いのですの? 気分転換も特訓の一つですわ。思いつかないのなら、一旦リフレッシュしてから考える。それが大事ですよ」

「まあ……確かに」

俺の好きな竜の玉の仙人もそう言ってたしな。

取り敢えず着替えた。

皆はまだテントの中だ。

「終わったよ」

まず出てきたのは山内。

無難に赤と黒のビキニ姿だ。

「おー……」

「そんなに似合ってる?」

「いいと思うよ」

「……ありがとう」

少し照れる山内。

「次はウチ!」

「うわあッ!」

これは……マイクロビキニという奴だろうか。

肌が結構露出していて……その……。

「たってる系」

「だからたつてねえ!」

流石にギャルの水着じゃ興奮しねえ! 驚いただけだ驚いただけ。

「私も着替え終わりましたの」

最後に美咲。

紫と白のレオタード姿。

眼鏡を外しているからか、美少女度が上がっている……。

「に、似合ってるな」

「もつと褒めなさいな」

「……」

「なんですの？」

「いや、ぶっちゃけると年下の水着姿より……遥先生みたいな大人で清楚な奴をだな……」

敵側なのがあればけど、正直見た目だけならタイプだから悲しい……。

「じゃあ遥先生とやらに会えたら、貴方がロリコンと伝えておきますわね」

なんだと……。

「そんな事したら、オレハクサムヲムツコ

げん

こつ

「やれるもんならやってみなさいな」

「無理ですすみませんでした」

第二十九話

「俺泳ぎ苦手なんだよなあ……」

「つべこべ言わずに水に入りますの」

「はい……」

まだ今の季節だと少々冷たいな。

「大体貴方も身体を鍛えなさいな。それだから生徒達に舐められるのですわ」

「うるさいな」

大体あいつら普通の不良のレベル超えてるから無理だろ……。
でも……。

「……」

「まだ悩んでますの？」

「あ……ああ。まあな」

「……ライダーキック！」

「うわあっ！」

美咲が急に回し蹴りで、水を飛ばしてきた。

「水の掛け合いなんて久々ですわ」

「やったな？」

俺は全力で拳を振るって吹き飛ばす。

「きやあッ！ やりましたわね！」

今回ののは普通だ。

……やっぱり、あの時は偶然だったのだろう。

「もう考えるのはやめた。美咲、俺と勝負だ！」

「望む所ですわ！」

※※※

「てて……」

明人と戦った場所よりも少し遠くで、前田は目を覚ます。

まだ身体が痛む……それに。

「日付変わってるう……」

どうやら、そこそこ長い間眠っていたらしい。

「まったく……女の子にも容赦ないんだからあ……」

スカートのエを掃い、立ち上がる。

身体は痛むが、骨折の類はしていない。

変身すれば恐らく誤魔化せるものだろう。

「……」

ベルトから端末を取り外す。

『HORSE DRIVE READY?』

「変身☆」

『COMPLETE』

背後から実体のない馬が走ってくる。

前田はジャンプしてからその馬に乗り込む。

「てい☆」

馬が実体化し、前田の身体が女性騎士の姿へと変わる。

「美咲ちゃんだけでも倒して帰るんだから」

※※※

夕方。

川から上がり、着替えようとしていたその時……。

「みつけたー!」

川沿いの崖の上から、軽いノリの女の声。

声の主は騎兵の姿をしている。

「貴女は!」

まだ水着姿の美咲が遠目で彼女を見る。

崖からなんと、そこそここちら側まで距離があるというのに河原まで飛び越え、美咲との距離を詰めた。

「まだ勝負ついてなかったし、戦ってもいいよね?」

「悪いですが、私も明人さんとの約束がありますの! 貴女の為に時間を割いてる暇ありませんわ!」

さつきまで思い切り遊んでた奴の言うセリフかこれ……。

「へえ、そんな事言っちゃうんだあ。でもお、勝つのは私!」

何かに気付いた優香が、騎兵を見て眩く。

「その声……前田っち？」

「そうだよ優香ちゃん。待っててえ、美咲ちゃん倒しちゃうから」
「舐められては困りますわ！」

『BOMER DRIVE READY?』

美咲は端末を閉じ、顔の左側まで移動させて構える。

「変身ですわ！」

端末をベルトに取り付ける。

『COMPLETE』

上空から降ってくる爆弾を掴み、爆風が起こる。

そこから仮面ライダーボマーが現れた。

「行きますわよ！」

バットを構え、ボマーは駆け出す。

第三十話

両者の実力はほぼ互角。

両者一步も譲らない戦いを繰り広げ、既に十分ほど経過している。

まだお互いの手の内を晒す様子はない。

「まだまだねえ……それじゃあ明人ちゃんには勝てないんじゃない？」

騎兵怪人は勢いよく剣を振るい、ボマーを吹き飛ばす。

「私は確かに無事だけどお、明人ちゃんはその状態で私を倒したのよお？」

まだ続ける騎兵怪人。

「でも美咲ちゃんはあ、まだ私に一撃しか当てられてないじゃん？ それで勝てるのお？」

ボマーの動揺を誘う気だろう。

だが……ボマーにそれは通用しない。

「私は確かに、一度彼に負けましたわ。ですが……あの人は私を一目置いていた。恐らく私なら明人さんに勝てるかも知れないと、彼自身が信じているからですわ」

「へえ？ だからあ？」

「やる前から諦めて、勝負を投げ出す程……私は弱くありませんの。今は勝てなくても、次こそは勝ってみせますわ！」

ボムビットを飛ばすボマー。

ボマーの思いが込められた、渾身の六発が勢いよく、騎兵怪人の馬へ命中。

「すごい度胸ねえ」

爆風で吹き飛ばされた騎兵が……馬と共に立ち上がる。

「でもお、それはこれを受け止めてから言っただけじゃないなあ」

「また来ますわね」

騎兵怪人は端末を取り出す。

『FINAL DRIVE!』

「いっくよ〜！」

騎兵怪人は、馬の頭に光を纏わせて突進する。

ボマーはベルトから端末を外して操作。

「その突進、打ち破ってみせますわ」

『FINAL DRIVE!』

脚にボムビットを纏わせる。

「はあくっ！」

騎兵怪人がボマーへ迫る。

「ライダー……タイフーン！」

先の水の掛け合いで見せたような、鮮やかな回し蹴りが放たれた。

「きやあッ！」

ボマーが起こした爆発の中から、変身が解除された前田が勢いよく吹き飛ばされる。

ゴロゴロと河原を転がるが、まだ気絶までしていない。

爆炎から少し離れた位置で、相変わらず一度死んだボマーが……天を指さす構えをとった。

「へえ……結構やるじゃん……だけど今度こそ……」

端末を取り出し、再変身しようとする。

「もうやめる系……」

優香が前田の前に立ちふさがった。

「何してんの？ 優香ちゃん……邪魔」

「友達同士で争うところ……見たくない系……」

「……」

前田はベルトに手を掛けてから問いかける。

端末を取り出そうとしているようにも……ベルトそのものを外そうとしているようにも見えた。

「優香ちゃんなら、ここで私が変身しても止める？」

「止める系……当たり前じゃん……」

少し間を置いてから、笑って……。

「……もういいよ」

ベルトを外す前田。

「ちよつとだけ楽しむつもりだったけど、はしやぎすぎちゃったあ。

でもやっぱり、私には優香ちゃんの方が大切だし、そう言うならやめる！」

「前田つち……」

「え……」

遠くで聞いていたボマーがバットを落とす。

多分……再変身してもぶちのめす気満々だったのだろう。

「てか最初から優香に説得させれば邪魔されなくて済んだのか？」

「私は……こんなふざけた奴の為に力を使いましたの……？」

怒りで拳を震わせるボマー。

ボマーが変身を解除し、美咲になった彼女が前田に向かって。

「屈辱ですわー！」

爆弾投げ。

しかし運悪く、優香の背中で爆発する事なく跳ね返り……美咲の所へ転がってくる。

「あ……」

大爆発。

「どうしてこうなるんですのおおおおおおッ!!」

それはこつちが聞きたいよ。

第三十一話

戦いの後……。

流石に前田一人に夜道を歩かせるのも難なので、俺は彼女の家まで車で送る事になった。

「……」

「なんかあ、ごめんねえ?」

「あ……うん。大丈夫だから」

そういえばこいつは気付いてるんだろうか。

俺が蘇我高校を突然辞めた、あの福沢裕太だって事を。

「そういえばさあ……キミフクだよねえ?」

「うぐっ……」

その渾名は……。

「うわあっ! あぶなあい……」

「すまん、急にお腹が……」

「えへへ……やっぱりおもしろおい」

「これだから蘇我高校の生徒は……」

俺みたいな新米をすぐからかうし嫌いだ……。

「私はもうちよつとフクと一緒にいたかったのになあ……。顔もそこそこ良いんだし……。高校に戻ってきたら付き合わなあい?」

「いえ戻る気ないんで結構です。それにガキに興味ない」

「たつてるう」

「たつてない」

「嘘だよお!」

「……」

なんで俺に関わる女は皆股間をいじってくるんだか……。

「そんな事より、なんで美咲と戦おうと思ったんだ? 他の奴みたい
に果たし状とかもないみたいだし、何か理由があるのか?」

「ないよお」

「え?」

「私も喧嘩好きだけどお、支配とかそおいうの別にどうでも良いしい。それに友達のお香ちゃんに止められたらあ、戦うのやめちゃうよお」

「とどのつまり……」

「暇を持て余したあ」

「お前の」

「遊びい」

「……こいつ以外にもこんな奴がいるのだろうか。」

「でもお、いくら何でも生徒会長は堅すぎる気がするのよねえ」

「足利明人だっけか？」

俺も話した事はないが、蘇我高校の生徒の中でも……統率や喧嘩相手に対する礼儀を兼ね備え、彼に憧れて蘇我高校に入るヤンキーも多
いと聞く。

実際あの戦いの時に、彼を間近で見てそう感じた。

「あの人お、他の人が喧嘩する時にも、やたらそういうのに厳しくてえ

……嫌になっちゃうのよお……」

「……」

俺的には少しでもそういうのがいないとキツイんだけどなあ……。

明人がいなかったらどうなってたんだろ。

「そんなの好きで良いじゃんねえ」

「少なくともそれに俺を巻き込まないでくれ……」

俺の胃腸に負荷が掛かる。

「そういえばあ、なんでフクは美咲ちゃんと一緒なのお？　もしかして
付き合ってるっ？」

「な、んなわけねえだろ！　俺はガキに興奮しないつつただろ！」

「あ？　ヤリモク？　美咲ちゃん可愛いそお……」

「こいつ……」

やっぱり蘇我高校の生徒は嫌いだ……。

「ん……？」

飲酒検問だ。

俺は車を止める。

「ちよっとお兄さん良いかな？」

「はい」

「こんな真夜中に女子高生なんか連れてどこ行くの？　ちよつと君怪しいから署まで来てくれない？」

「……丁重にお断りする」

もうやだ。

※※※

あくたくらしい朝が来た。

「邪魔者もいなくなった事ですし、今日からまた張り切りますわよ！」

「だね」「おつす！」

三人とも気合十分だな。

「裕太さん、何かいい修行方法ありませんの？」

「俺に質問するな」

どうせ竜の玉関連の修行しか頭に浮かばないし。

「あ、なら裕太さんも一緒にやれる特訓がありますわよ」

「なにそれ」

「私も淀子さんに勝つ為に、たまにやってる奴ですわ」

「美咲っち、まだ淀っちに勝つ気だった系？」

「当たり前ですわ。いつか倒しますわ」

「淀子って……あの浅井淀子？　それに勝つ為の特訓って……」

「多分アレ系でしょ。分かる分かる」

優香は分かっていたらしい。

「それは」

「それは……」

「それは……」

美咲は間をおいてから。

「次の話に入ってから言いますわ」

メタいな。

第三十二話

「鬼ごっこですわ」

「は？」

なんて？

「鬼ごっこですわ」

「何が？」

「だから特訓ですの」

「え……？」

ふざけてんのか？

「ふざけてませんわよ」

「いやいや、何言つて……」

「まあ聞けば分かりますわよ」

「ホントか？」

怪しいな。

「取り敢えず、ルールは一つ。目つぶしと股間への攻撃以外何でもありで、鬼を倒せば終わりですの。鬼は逆に、逃げてる人を倒しますの」
「へ……？　つまりどういう事？」

「それ以外なら、何をしても良い系。爆発物を置いても、ナイフで刺しても良い系！」

「怖いよ！」

やはり俺の想像力が足りなかったらしい。

「てかこれ考えたのは……浅井淀子だよね？」

「そうですわ」

生きてるうちに会いたくないな。

ワンチャン蘇我高校の生徒が可愛く見えてくるレベルかも知れない。
い。

「その通りですわ」

やっぱそうみたい。

「てか思ったんだけどさ、これお前たちの事だからまた元ネタか何かあるの？」

「知らないですわ」

まあ良いか。

「それじゃあ鬼決めますわよ。と言っても、じゃんけん以外ですわ」
「まだあの時の事があるからな。」

「ウノで決めない?」

「何で持ってるの……」

「こういうのやりたかったからノリノリで……」

まさか。

「うるさいわねえ。あたし中学の時なんて友達いなかったのよ!」

「まだ何も言っていないし……」

しかもそこまで考えてない……。

「とにかく好都合ですわ。ウノで負けた人を鬼にしますわよ」

気合十分の美咲。

「じゃあやろつか」

山内がカードのシャッフルを始める。

見た感じ……かなり手慣れているように見えた。

「じゃあゲームを……」

「待つて欲しいですの。こういうのを始める前にやるべき事がありますわ」

「何それ」

美咲と優香が手を挙げる。

俺と山内もそれに倣って真似をした。

「盟約に誓って（アツシエンテ）!!」

ノゲノ○かよ!

※※※

「どうしてですのお!」

負けたのは美咲だ。

まあでも良かった。

俺が鬼だったら誰もタッチ出来ずに終わってた所だ。

「しゃー!」

因みに一位は山内。

中々強かった。

「てか強いな山内」

「鍛えてるからね。いきがるだけの半端な強さじゃ、あたしに勝てないよ」

「ぐぬぬ……いつかウノでも貴女に勝ってみせますわ」

「へえ、じゃあもう一度」

「やり始めるなしまえ馬鹿！」

「「そんなあ！」」

こいつらホントに何しに来たんだ……。

※※※

というわけで……鬼ごっこという名のデスマッチが開幕。

「つか、俺相手に変身したりしねえよな……？」

アクセル使われたら終わりだし。

「うわあッ！」

俺は何かに吹き飛ばされる。

「なんだ……？」

「私ですわ」

ボマーではない、変身していない六角美咲が近くでバットを構えて立っている。

「変身してなかったから良かったけど……バットも無しだろ……」

「何しても良いんですのよ。何なら変身しても」

「やめて」

死んでしまいます。

「私のお供なのに弱すぎては困りますわ。だから今この場で鍛えますわよ」

「んな無茶苦茶な」

「私がやると言ったらやりますの！ ほら構えなさいな！」

「ど、どうなっても知らないからな！」

十中八九俺が負けそうな気はするけど。

「行きますの！」

バットを構えた美咲が俺に襲い掛かる。

「ていつー！」

「ぐあつー！」

俺は躲せずに吹き飛ばされてしまう。

「ああッ……」

「目を閉じては相手の動きが見えませんか！　しっかりと相手の動きを見て、受け止めるんですの！」

そんな度胸があるのはお前だけだよ！

「もう一度行きますわよ！」

「ねえ、これ誰の特訓!?!」

俺鍛える必要がある!?!

「つべこべ言わずに受け止めますの！　気合ですわ！」

「気合じゃ無理だあああッ！」

その時、不思議な事が起こった。

「……！」

頭の中に……一つの声が聞こえた。

『あの女を……殺せ』

その言葉が聞こえてすぐ……何故か俺の意識が閉じてしまった。

※※※

突如、電源が抜けたように項垂れる裕太。

「……」

それを見た美咲が動きを止め、声を掛けた。

「どうしましたの？　裕太さん？」

「……狩野遥の仲間と断定。お前を排除する」

裕太の口からそう声が漏れる。

「え？　うわあつー！」

美咲の腹に、重い拳が入った。

何とか意識を保ち、バットを構えなおす。

「どういう事か分かりませんが、やっとやる気になったようですわね」

口から垂れた唾を左腕の袖で拭い、もう一度駆け出した。

「たあッ！　ていつー！」

全て見切られ、攻撃を避けられる。

「避けてはいけませんのよ！ ちゃんと受け止めなさいな！」

攻撃を避ける裕太に、美咲は何度もバットを振るう。

「この程度か……」

裕太は美咲のバットを蹴り上げ、手から離させる。

「そんな……」

美咲は少し動揺する。

「終わりだ」

裕太はそう告げて、美咲の首を手でつかんで地面に叩きつけた。

第三十三話

「か……はっ……」

「……」

段々と締め付ける力が強くなっていく。

頭から血が引き、寒気が支配する。

美咲は何とかしようとしますが、身体に力が入らない。

「会長！」

それを見かけた山内が近付き、火炎放射器怪人へと変身する。

『COMPLETE』

「お前もか……」

美咲の首から手を離し、火炎放射器怪人に相対した。

「フルバースト」

高速移動し、裕太の背後に回る。

威力を弱めて、うなじを軽く叩く。

「くっ……」

裕太を気絶させる事に成功し、変身を解く。

「大丈夫？ 会長」

「借りが出来てしまいましたわね」

「そうね」

「山内さん」

「何？」

「何故私から距離を取りますの？」

「え？ だって、アンタ鬼でしょ？ この隙にタッチとか

「そんな卑怯な事しませんの！」

※※※

「うう……」

うなじが痛む……。

確か俺は、鬼ごっこで美咲と遭遇して……。

「起きましたのね」

「……」

俺は上体を起こす。

「鬼ごっこはどうなったんだ？」

「私が裕太さん以外を全員タッチして終わりましたわよ」

「そうか……ん？ 俺以外？」

そういえば。

「俺はどうして寝てたんだ？」

「覚えてないんですの？」

「え？」

「項垂れたと思ったたら急に私の腹に拳をぶち当てて、私を殺す気で暴れだしたんですのよ？」

「そ、そうなの？」

思い出そうとしてみるが、そんな記憶はない。

急に意識が閉じてからの記憶がない。

「すまない、思い出せない……」

取り敢えず美咲に頭を下げる。

「良いですよ。結果死ななかつた事ですし」

「……」

俺は黙り込む。

黒フードに会ってから、俺は自分が分からなくなり始めた。

そして今も、俺が知らない間に美咲を殺しかけていた。

気にするなと美咲に何度も言われたが、今回ばかりは出来そうなものい。

「私なら大丈夫ですの。もし次暴れだしたら、私が力づくで止めますわ」

自信満々な顔で、俺にそう告げる。

「ああ、そうしてくれ」

「さあ、夕飯の支度をしますわよ。また買い出しを頼みますわ」

「え、あ、うん」

俺は言われるがまま立ち上がる。

そのまま車まで向かおうとするが、一旦美咲に呼び止められた。

「これだけは言わせなさい」

「な、何？」

口元を少し緩める美咲。

「やれば出来るじゃないですよ」

「ほ、褒められても困るな……」

※※※

結局あの力もしばらく発現せず……修行の日々が続く。

美咲と明人の戦いから丁度二週間後。

ついに約束の日がやってきた。

「……いよいよ決着の時ですわね」

蘇我高校。

懐かしいような、もう二度と来なくなかったような、複雑な気分です。いつぱいな学校の門を再び潜る。

また胃痛に襲われそうになるが、美咲が肩に手を乗せて来た。

「私がいいますわ。もつと堂々としてなさいの」

「お、おう」

「へー、ここが蘇我高校ねえ」

「ウチも初めて来た系」

「優香も来てたのか」

「もう関わった以上、ウチも部外者じゃない系じゃん？」

「そう……なのか？」

「細かい事気にしちやダメ系ダメ系」

「ようフク」

「ギクツ！」

「女連れか？ 観客席はあっちだぜひっひっひっひっ……」

「裕太つち大丈夫系？」

「やっぱり無理系だなこれは」

俺の前に立ち、その生徒に美咲が問う。

「控室はありませんの？」

「お前が仮面ライダーだっけか。あっちだぜ」

「分かりましたわ。山内さん行きますわよ」

「ええ」

美咲は山内と共に、控室に向かう。

「負けなるよ、美咲！」

ギロツ！

「ううう……」

生徒に睨まれた。

第三十四話

生徒の指し示した方に向かい、俺と優香は体育館の観客席に。

——蘇我高校！ 蘇我高校！ 蘇我高校！

山内戦の時と違い、今度はこちら側が完全アウェイ。

「蘇我高系！ 蘇我高系！」

「冗談でも便乗しないでやれ……」

縁起でもない。

「さて、相手はどういう奴が来るんだ？」

「これに書いてある系じゃん」

どうやら優香がどこかで選手表みたいなものを貰ったらしい。

見せてもらおうと。

「あれ……？」

○×女子高側には、美咲と山内の名が書かれている。

だが蘇我高校の選手名に、足利明人の名がどこにもない。

怪我が治らなかったのだろうか……しかし。

「あの……」

勇気を出して前の席の生徒に声を掛ける。

「なんだよ」

「明人はいないのか？」

「明人さんなら行方不明だよ。だから狩野遙先公が選んだ名前の奴

が、○×女子高の代表二人を纏めて相手するみたいだぜ」

生徒はそう告げて前へ向き直った。

確かに蘇我高校側に書かれている人物の名は一つのみ。

その名前は。

「ヴィーダ？」

少なくとも日本人の名前ではなさそうだ。

それにこの学校に外国人がいた記憶もない。

俺が辞めた後に転校でもしてきたのだろうか。

「おっ、そろそろ始まる系！」

優香に言われ、俺もフィールドを見る。

体育館の入場口から、美咲と山内……そして。

「あれがヴィーダ？」

アッシュブラウンの髪に、水色の瞳。

制服姿ではなく、水色のワンピースを着た……女子高生でもなく、幼女。

年齢を高く見積もっても、小学校高学年くらいだろう。

どこことなく、雰囲気は遥に似ている。

——おい、子供？

——誰のだよ。

——あんなのが俺達の代表？

——ふざけてんのか！

流石の蘇我高サイドからも、ブーイングの嵐。

「静かに」

フィールドにもう一人現れる。

科学部顧問……狩野遥だ。

※※※

「ヴィーダを見た目だけで判断されては困るな。悪いがこいつは、お前達の誰よりも強い」

遥は光のない眼でそう言い切る。

観客席からのブーイングが止み、遥が少し離れた位置へと移動した。

「変身用意！」

審判の指示に、美咲と山内、そしてヴィーダが従い……ベルトを着する。

美咲は爆弾の紋章型の端末がついたボマードライバー。

山内は火炎放射器の端末のフレイムシャワードライバー。

そしてヴィーダは……少し二人とベルトの形が違う。

黒い武骨なバツクル。

そしてその右側面に、何かの差し込み口らしきものがある。

実際ヴィーダが、そこに差し込んで使うのであろう……奇抜な槍の

形をしたアイテムを握っていた。

二人が試合開始前に会話していた。

「二対二の筈……聞いてませんわよ」

「まあ良いじゃない。これで勝てば終わりよ」

「二対一は気乗りしませんの」

あくまで平等な条件での勝負を好む美咲は、少し不満げな表情。

しかしヴィーダは違う。

あんな幼い子供の見た目をしていながら、二人を真剣な眼差しで見つめる。

「行きますわよ山内さん」

「分かってる」

二人は端末を取り出し、DRIVEボタンをクリック。

『BOMER DRIVE READY?』『FLAME THROWER DRIVE READY?』

美咲は端末を閉じてから、右手を顔の左側で構える。

山内は静かに端末だけ閉じてから言う。

「二変身（ですわ）！」

二人は端末を取り付ける。

山内を炎のエフェクトが包み、美咲の頭上から爆弾が一つ降ってくる。

美咲は爆弾を右手で握り潰し、爆風が生まれた。

炎と爆風の中から、二人の戦士が現れる。

火炎放射器怪人、そして仮面ライダーボマー。

「ヴィーダ……マモノテキ、ヤッツケル」

片言の日本語で、ベルトのスイッチらしきものを起動するヴィーダ。

『GUNGNIR ON』

バックルの中から、待機音が流れる。

ヴィーダは一度目を閉じてから、槍型のアイテムを上投げて、もう一度キヤッチ。

「ヘンシン」

挿入口に差し込む。

『CHANGE』

どこからともなく、上空から魔法陣が出現し……そこからアイテムと同じ形をした槍が現れる。

ヴィーダはその柄に向かって手を伸ばし、掴み取った。

「……」

ヴィーダの姿が、掴んだ手の部分から変わっていく。

水色と白を基調としたライダースーツに、水色の複眼の顔。

美咲とは違うが、怪人というよりは仮面ライダーより姿だ。

「ヴィーダ……グングニル。カメンライダーグングニル」

ヴィーダも片言で、自分の戦士としての名を名乗る。

第三十五話

「グングニル……いい名ですの。私は仮面ライダーボマー。戦わせて貰いますわよ！」

互いに名乗り終えた後、審判が開始の合図を出す。

「始めー！」

グングニルが開始と同時に動き出した。

それも消えるように。

「ぐおっ……」

何と火炎放射器怪人を、手持ちの槍も使わずに素手……それも左拳でダウンさせた。

「山内さんー！」

『ACCELERATOR DRIVE』

ボマーは奥の手の筈のアクセルドライブまで使用し、グングニルに相對する。

グングニルも超加速でそれと互角にやり合う。

どちらの動きも、俺達の眼には止まらない。

「コレデ、オワリ」

『GUNGNIR FINAL DRIVE』

姿を現したグングニルが、魔法陣を上空へ。

そこから無数の槍が放たれる。

「させませんのー！」

ボムビットで迎え撃つ。

だが数本が残り、ボマーの身体を霞めた。

「くっ……」

腕を押さえるボマー。

「スゴイネ」

「馬鹿にされては困りますわ……」

バットを構え直す。

さあ来いと言わんばかりに、予告ホームランの構えを取る。

「オモシロイ……シヨウブ！」

グングニルが再び超加速。

ボマーはグングニルの動きに視線を集中する。

「集中……集中ですわ！」

ボマーの近くで、空気が震えた。

「はあッ！」

攻撃を見切り、ボマーは大きく吹き飛ばす。

超加速で姿を消していたグングニルが、ごろごろとフィールドを転がる。

「特訓の成果ですの！」

なのかな？

反射神経を鍛える訓練をした覚えはないんだけど……。

「ナカナカ……ヤルネ」

グングニルが立ち上がる。

見た感じ、まだまだ余裕そうだ。

「デモ、ヴィーダ、マダホンキチガウ」

「良いですわよ。本気とやらを見せなさいの」

ボマーがバットを構えつつ挑発する。

「イイヨ……」

そう告げたグングニル。

すると……その身体が五つに分裂。

高速移動で分身を作ったのだろうか。

「これは……」

『GUNGNIR FINAL DRIVE』

上空にグングニルの数だけ魔法陣が出現。

先の攻撃と同じように、そこから無数の槍がボマー目掛けて射出される。

「流石に無理ですわ！」

ボマーが呟く。

咄嗟にボムビットを出現させ、爆発させる。

爆発に巻き込まれたボマーが、爆風から少し離れた場所でも出現し

た。

突然変異体としての能力。

「ソレガ……ノウリヨク……」

「私に攻撃を回避させるなんて、貴女中々やりますわね」

ボマーの戦闘スタイルは、相手の攻撃を回避せず、全て受け止めて弾き、その上で倒す事で相手に強さを認めさせるというもの。

実際火炎放射器怪人との戦いでは、そのやり方もあって、山内との和解に成功した。

確かに初めてだ。

その戦い方を決して曲げなかったボマーに、回避行動をとらせた人物は。

「認めますわ。今の貴女は私より強いと……でもだからこそ、私は今ここで貴女を超えてみせますわ!」

「?」

グングニルは首を傾げる。

ボマーは武器を構え直し、今度は自ら駆け出す。

「今度はこつちから行きますわよ!」

「シヨウブ……」

「はあッ!」

頭上に向かって、バットを振り下ろすボマー。

「オソイ……」

超高速で……グングニルがその攻撃を回避する。

『ACCELERATOR DRIVE』

そこで咄嗟に、ボマーは端末を操作した。

「これなら!」

人間の常識を超えた速度で移動し、グングニルの脇腹に一撃を浴びせる。

「ウワッ!」

グングニルが吹き飛ばされた。

「これで二撃目……ですわ」

バットを構えなおし、ボマーはもう一度立ち上がるグングニルに向

き直る。

「もう一度分身でもしてみなさいな」

「……ッ！」

高速移動で分身するグングニル。

先と同じように、ボマーへと必殺技を放つ。

『GUNGNIR FINAL DRIVE』

ボマーは一歩も動かない。

意識を集中させ、バットを構える。

「全て受け止めて弾きますわ」

あの無茶な槍の弾幕に対し、そう宣言。

槍が魔法陣から一斉射出される。

「はあッ！」

今度のボマーは全て見切り、バットを高速で動かして受け止めた。

意地でも回避しようとしないうボマーは、気合だけであの攻撃を耐え

てみせる。

「これで……どうですか？」

ボマーは構え直す。

どんだん来いと言わんばかりの気合を感じる。

「ナカナカヤルネ……ナラ、コレハドウ？」

グングニルが取り出したのは、玩具の銃だ。

「そんな玩具の銃で、私を倒す気ですか？」

「……」

構わず胸に向かって発砲するグングニル。

ボマーは避けずに立っていたが……。

「あ……れ？」

ボマーの胸には、実際の銃で撃たれたのと同じ穴が空き……そこから血が流れた。

第三十六話

「美咲！」

「美咲っちー！」

観客席から思わず叫ぶ。

「コレ、ヴィーダノホンキ。ヴィーダノウリヨク」

グングニルの能力は多分、触れたものに殺傷能力を与える……と
いったところか。

それなら、コルクの弾が物理法則等を無視して美咲の胸を貫く事も
納得がいく。

「コレデ……オワリ。オマエ、シヌ」

ボマーを油断させ、その隙について殺害する気だったのだろう。

「私の負け……ですわ。貴女の力は、私の予想を遥かに超えていた
……二対一にも関わらず負けて悔しいですわ」

変身が解除される前に、端末を取り出すボマー。

どうする気なのだろうか。

『EXPLOSION DRIVE』

朱色の光を纏ったボマーが、最後の力を振り絞り駆け出す。

「ですが死ぬわけにはいきませんの。いつか貴女を超える為、ここは
一度引き分けて終わらせますわ」

グングニルにしがみつき、カウントダウンが始まる。

『3、2、1』

周囲の景色が白く輝く。

『EXPLOSION TIME』

その瞬間、ボマーのボムビットによる爆破を超えた爆風が空間を支
配した。

グングニルの変身が解除され、ヴィーダに戻された彼女が場外へ吹
き飛ばされる。

ボマーはあの爆発に飲み込まれた。

「……」

爆発が収まった頃、ステージの中央に……倒れた美咲の姿があった。

ヴィーダと美咲、二人の状態を見た審判が、美咲に軍配を上げる。

「システム解除！ 勝者、六角美咲チーム！」

「よし！」

「やった系！」

他の生徒の目も憚らず、俺と優香がガッツポーズ。

美咲も何とか身体に力を入れて、立ち上がる。

「……何とか、倒す事だけは出来ましたの」

美咲としては認めがたい……辛勝ではあるが、これでやっと終わった。

長い戦いが……。

「なに？ 終わったの？」

山内も起き上がり、美咲の肩を借りる。

「終わりましたわよ。勝ったとは言えませんが……」

「どうでも良いわよ。過程は見れてないけど、勝ったんでしょ？」

「……ええ」

美咲はヴィーダを一瞥してから近付く。

「私はあれで勝ったなんて思ってませんわ。次こそは貴女の全てを打ち破ってみせますわ」

「ミサキ……」

ヴィーダも美咲の手をとる。

——いい戦いだっただぞ！

——美咲！ 美咲！

——ヴィーダ！ ヴィーダ！

「ふざけるな！」

その一声で、場の空気に変化した。

声の主は……狩野遥。

ベルトを着けて、フィールドに現れる。

「……」

美咲を睨みつける遥。

美咲はそれに対して呟く。

「私もあの勝ち方に、納得はしてませんわよ。今はこうするしかありませんでしたが、次こそは必ず真正面から全て

「そんな事はどうでも良い……ヴィーダ！ 何故負けた！ お前に与えた力なら、必ず六角美咲を倒せた筈だ！」

あの時俺を震え上がらせた、冷静沈着で残忍そうな科学者の姿はない。

そこにあるのは、何とというか……子供を叱る母親のようにも見え

た。

「ママ……ゴメン」

「もういい……下がってなさい。そいつは私が殺す。私の仇と思える奴は全て殺す。誰にも邪魔はさせない！」

『ROAD DRIVE READY?』

「変身!!」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

王者の証らしきマントが空から降り立ち、遥が纏う。

様々な勲章を付けた軍服が、そのマントから光を伸ばし遥の身体を覆う。

指揮官の怪人が……その場に姿を現す。

第三十七話

「はあああああッ!」

「変身ですわ!」

『COMPLETE』

ボマーも変身して迎え撃つ。

剣による攻撃をバットで受け止め、弾き返す。

「かなり重いですが、さつきに比べれば大した事ありませんわね」

「黙れ黙れ黙れ!」

端末を操作する指揮官。

『WARRIORS TRIPLE DRIVE』

沢山の実体のない兵士達が、ボマー目掛けて駆け出していく。

「ボムビット!」

六つのボムビットを飛ばし、兵士達の前へと着弾させ爆発。

兵士は全て無に帰した。

「……………いつ……………」

目を丸くする指揮官。

「私は頂点を目指す者。半端な強さで倒そうとするなんて甘いですわ」

「私が…………半端? 違う。違う違う違う! 私があいつの仇を討つ!

お前はその為に死ななければならぬ!」

「来るなら来なさい。私が真正面から破壊しますわ」

ボマーがバットを構える。

指揮官も剣を構え、叫びながら立ち向かう。

「はあああああッ! せいッ!」

指揮官が振るう連続剣を、ボマーはバットで受け止めて弾く。

最後の全力刺突も受け止めて押し出し、隙を作る。

「そこですわ!」

ボマーがバットを使って、指揮官の腹へと突き刺す。

指揮官が大きく吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「何故だ…………何故私の攻撃が通用しない……………」

上体を起こしながら呟く指揮官。

「そんな筈が……そんな筈ない！」

剣を手に、もう一度地を蹴った。

「終わらせませすわ。この戦いを……」

ボマーが端末を取り出し、ボタンをクリック。

『FINAL DRIVE!』

ボムビットをバットの周囲に展開し、野球選手の如く構える。

「うおおおおおおおッ！」

ボマーに近づく直前で、指揮官も端末を取り出してボタンを押す。

『FINAL DRIVE!』

兵士達が指揮官の前に出現し、一斉射撃。

同時に指揮官も大剣を振り下ろそうとするが。

「ライダーインパクト！」

大きく振られたバットが、ボマー自身を巻き込みそうな程強い爆炎

と共に、全てを吹き飛ばす。

指揮官は変身解除され、フィールドにもう一度叩きつけられる。

「ママー！」

近くで見ていたヴィーダが、指揮官……遥へ近づく。

「……」

ボマーも変身解除。

「どけー！」

「ワツ……」

自分の身体を持ち上げた遥は、ヴィーダを払いのけて口を開く。

「こんな事があったてまるか……私は負けるわけには……」

「その負けは、きつと貴女をより強くしてくれますわ」

「は……」

美咲が呟く。

「人は負ける度にまた強くなれますの。負けて負けて負け続けて、そして人は簡単に負けない力を手に入れる」

「負けが、私を強くするだど？ ふざけるな！ 私は失敗した。私があいつの傍にいなかったせいで、あいつを守れなかった！ 失敗する

度強くなる？ 一度の失敗で、人は多くを失う事だってあるんだぞ
！」

「ならその失敗を、決して否定してはいけませんわ！」

「……！」

「貴女がその人の為に戦えたのなら、貴女は既にその失敗から学べて
いますの。何故私達の学校を狙うのか、それは分かりませんわ。でも
もし、私に挑む事で貴女に得があるというなら、私は何度でも相手に
なりますわ」

「……」

遥は涙を流す。

近くにいたヴィーダが、頭を撫でて慰める。

「六角美咲……」

遥が何かを伝えようとした。

しかしその時……。

「！」

突如、フィールドの明かりが消える。

第三十八話

「停電か？」

「裕太つち離れちやダメ系！」

優香に掴まれる。

「ここで終わりだぜ？ 狩野遥あ！」

聞き覚えのある声。

そして何かが突き刺さる音が響く。

「ぐっ……」

遥の呻き声まで聞こえた所で、ようやく電源が回復する。

フィールドに新しく人が増えていた。

言うまでもなく……俺にこの前切りかかった黒フードの男だ。

何かのスイッチを握っている。

「最後の悪あがきの為にこんなスイッチまで用意してたみたいだが……残念。こんな雑魚共じゃ俺の相手にならない」

「裕太つち、周り見る系！」

俺は黒フードと優香の言葉で、周りの状況に気付く。

観客だった生徒達が全員、ベルトを着けていないのに、アーミーや他の怪人に変えられていた。

そして全員理性を失っている。

原理は不明だが、あのスイッチが関係しているのだろうか。

「うわあッ！」

「取り敢えず逃げる系！」

考える暇もなく、俺は優香と共に会場外へと逃げた。

※※※

「ママ……！ オキテヨ！ ママッ！」

ヴィーダは、血を流して倒れる遥を揺すっていた。

「貴方何者ですか？」

美咲が黒フードを睨みつけて問いかける。

「さあな、お前との関係性を語るなら他人……つてどこまでしか俺も分かんねえ。俺には名前すらねえからな」

「ヴィーダ……ママキズツケタオマエ……ユルサナイ！」

『GUNGNIRON』

バックルの中から、待機音が流れる。

ヴィーダは一度目を閉じてから、槍型のアイテムを上投げ、もう一度キャッチ。

「ヘンシン！」

挿入口に差し込む。

『CHANGE』

どこからともなく、上空から魔法陣が出現し……そこからアイテムと同じ形をした槍が現れる。

ヴィーダはその柄に向かって手を伸ばし、掴み取った。

「……」

その姿を仮面ライダーグングニルへと変える。

美咲も共闘しようとするが、

「テラダスナー！」

そう言われて止められる。

「悪いねえお嬢ちゃん、可哀想だけどお前もこれからママと同じ目に遭うんだぞ？」

「ユルサナイ！」

黒フードは生身の状態で攻撃を回避。

その状態でフードの中からベルトを取り出す。

紋章は拳……いやメリケンサックだ。

『SMASH DRIVE READY?』

「変身」

メリケンサックを着けた怪人の姿へと変わり、グングニルへ右ストレート。

回避に失敗したグングニルが、そのパンチを受けて吹き飛ばされる。

「ウワアッ！」

地面へと叩きつけられるグングニル。

「ヴィーダ、アキラメナイ……」

「ガキの癖に根性あるねえ。そういうの嫌いじゃないぜ？」
「サツク怪人が地を蹴って、グングニルに追い打ちをかける。」

第三十九話

その戦力差は、圧倒的と言わざるを得なかった。

グングニルの十八番である分身からの槍攻撃も全て妨害し、サツク怪人はグングニルを追いつめる。

「…………ドウシテ…………ママノタメニマケチャイケナイノニ…………」

グングニルが、ボマーに倒された時の遙と同じように立ち上がる。

「負けちゃいけない…………か。いやいや、ここで負ける方が賢明だと思
うぜ？ どの道あの傷じゃ無事で済まない。だから親子揃ってあの
世で仲良くしな」

サツク怪人が端末を操作する。

『FINAL DRIVE!』

「これで決まりだな」

「ヴィーダ…………アキラメナイ…………」

槍を構えなおすグングニル。

だが満身創痍と言った所だ。

もう見ていられなくなった美咲が変身し、

「はあッ！」

「ぐっ…………！」

サツク怪人が放った特大の気功弾を防ぐ。

「ボマー…………」

「ヴィーダさんにこれ以上攻撃させませんわ。まだ私はヴィーダさん
を超えられていませんもの」

「なんだ？ お前も死にたいのか？」

「違いますわ。貴方を倒すつもりです」

予告ホームランの構えをとるボマーを、サツク怪人が笑う。

「くくく…………俺を倒す？ 冗談キツイな」

「冗談などではありませんわ」

「だとしたら…………馬鹿なのか？」

「ムカツ…………その一言で余計倒したくなりましたわね」

「馬鹿は馬鹿だろ？ お馬鹿さん」

「馬鹿馬鹿うるさいですわね。今すぐ倒してあげますわ！」

ボマーは勢いよく地を蹴った。

「ウェイ！」

「言葉の雰囲気通りの単細胞だな。その程度の攻撃が当たるとでも？」

『ACCELERATOR DRIVE』

グングニルに対してやった攻撃と同じものを放つ。

しかし避けられる。

「俺はあの小僧程甘くねえぞ」

「この……」

「む？」

どこからともなく、銃弾が放たれる。

グングニルだ。

ボマーを殺しかけた、あの能力でエアガンを強化し、銃弾を放った。

「良い不意打ちだな。だが無意味だぜ？」

サツク怪人は言いながら、拳で銃弾を受け止めている。

「どうすれば良いんですの……」

気合で勝ちたいのは山々だが、これでは勝機が見えない。

攻撃を当てる以前の問題だ。

「これを……」

遙の声。

まだ微かに、意識を残していた。

「これを使えば、ボマーを強化出来る……」

遙の手に握られていたのは、一枚のカード。

紫と水色の配色のボマーがそこに描かれ、何かを読み取る用のバーコードが描かれている。

「これは……」

「頼むぞ……私の代わりに……」

今度こそ意識を失う。

「遙さん……貴女を死なせはしませんわ。貴女にやる事があるのな

ら、生きてそれを果たしなさいな」

ボマーがカードを受け取ろうとするのを、サツク怪人が邪魔しに入る。

「サセナイー！」

だがグングニルはサツク怪人に弾丸を当てて阻止した。

「今ここで貴方を倒しますわ」

『SCAN DRIVE』

端末を使い、そのカードを読み取る。

『COMPLETE HYDRO DRIVE READY?』

両腕を腰の高さまで広げ、全身に力を込めて叫ぶ。

「超変身ですわー！」

水色の光が包み、ボマーの姿がカードの中と同じに変形する。

朱色の炎は青く変わり、身体のうちちに水色の紋様。

そして、首に水色のマフラーが出現する。

「これが……新しい力……」

名付けるなら、仮面ライダーボマー……ハイドロフォームと言った所だろうか。

「遙、行くよ」

まだその場にいた山内が遙を背負って退避しようとする。

「させるかよ」

サツク怪人の拳から気功弾が放たれるが、ハイドロボマーはそれに気付き、アクセルドライブ時と同等の速度で移動して防ぐ。

「こいつ……」

「目的を果たしたいなら、私を倒してから行きなさいな」

もう一度バットを構え直す。

第四十話

「なっちまったもんは仕方ねえな……ぶちのめすまでだ」

サック怪人の方から、ハイドロボマー目掛けて駆け出した。

「……」

ハイドロボマーが青い炎を纏った掌で、サック怪人の拳を受け止める。

「なにっ……!」

「はあッ!」

左脇腹に蹴りを入れ、仰け反らせた。

「ここからですわ」

『HYDRO ACCELERATOR DRIVE』

通常時のアクセルドライブを超える加速で、ハイドロボマーは何度もサック怪人の身体へバットを叩きつける。

サック怪人が怯んだ所で、端末のボタンを押す。

『FINAL DRIVE!』

バットの周りを、水色に変色したボムビットが集結。

「ハイドロインパクト!」

怯んだサック怪人に、強くバットを叩きつける。

ライダーインパクトを超える爆発は、フィールド全体を覆う程の爆風を起こした。

「ぬあッ!」

地面に叩きつけられ、サック怪人の変身が解ける。

「まだやりますの?」

黒フードはすぐさま立ち上がり、背を向けた。

「どうやら、今のお前相手では分が悪いみてえだな。あばよ」

煙幕を起こし、その場から姿を消す黒フード。

「マテー!」

グングニルが叫ぶが、もう遅かった。

「……」

同時にハイドロボマーのハイドロフォームが終わる。

『HYDRO END』

二人はまだ変身を解かずに会話する。

「逃げられましたわね」

「ママ……」

ヴィーダが下を向く。

「恐らく戦うチャンスはいつか来ますわ。まずは遥さんが無事である事を祈りますわよ」

「ウン……」

「それに、ここに長居するのは危険みたいですよ」

観客席には未だに、理性を失って暴れている怪人達がウヨウヨしている。

逃げるか無茶を承知で倒すか……。

だがボマーの性格上、その二択なら迷わず後者を選ぶ。

「戦いますわよ。ヴィーダさん」

「ミサキ……」

「まずは全員倒して帰るんですの。そして遥さんに会いに行きますわよ」

「ウン！」

ボマーとグングニルは武器を構え、観客席に向かって走っていく。

「最初から飛ばしますわよ！」

敵の直前で端末を開き、アクセルドライブを発動。

『ACCELERATOR DRIVE』

ボマーとグングニルが加速し、バットと槍で怪人達を勢いよく倒していく。

「はあッ！」

「ヤアッ！」

※※※

やっと会場出口付近。

体力に限界が近付いていたが、何とか踏ん張り……最後の力を出し切る。

「必殺技行きますわよ」

「ウン！」

ボマーは端末を取り出してボタンを押し、グングニルは銃型のアイテムを変身用とは違うスロットに差し込む。

『FINAL DRIVE!』『GUNGNIR FINAL DRIVE』

ボマーの周囲をボムビットが覆い、グングニルは上空に魔法陣を出現させる。

「ライダーインパクト！」

ボマーはバットを迫る怪人達に叩きつけ、グングニルも魔法陣から槍を射出した。

怪人達は勢いよく吹き飛び、そのまま倒れていく。

「これで終わり……ですか？」

「デモ……」

妙な事に気付く、普通この怪人化は……気絶以前に変身者が深刻なダメージを受ければ勝手に解除される筈なのだ。

しかし怪人達は気絶しても、人間体に戻らない。

ベルトを着けずに変身しているせいなのかは分からないが……今のままでは彼らを元の姿に戻す事が出来ないらしい。

「遥さんに聞いてみるしかありませんわね」

ボマーとグングニルは変身を解き、取り敢えず脱出を選ぶ。

※※※

優香を先に逃がし、俺は怪人達を何とか追い払いながら、優香や山内と合流した。

山内は俺との合流前に救急車を呼び、遥を病院まで搬送させた。

まだ来ていないのは、美咲とヴィーダだったのだが……。

「来たか」

こちらに向かつて、走ってくる二人の姿。

近付くと同時に息を切らし、俺に報告する。

「怪人達が元に戻りませんわ」

「何だって！」

美咲の性格上、恐らく怪人達を倒しながら出てくるだろうとは想像

していたが、倒しても人間体に戻らないというのは……。

「こうなった以上、遥さんに生きて貰って事情を聞くしかありませんわ。今は退きますわよ」

「お、おう」

俺達は駐車場まで走っていく。

『上手く……いったか』

脳裏に声が聞こえる。

河原で俺が意識を失った時と同じ……。

「……ッ！ 今は気にしてる場合じゃない」

何とか頭を横に振って誤魔化する。

「まだ終わらないのか……」

狩野遥という教師が科学部でベルトを作り出し、それを俺が盗み出した事から始まったこの戦い。

美咲が蘇我高校から挑まれた勝負に全て勝利し、このまま終わると思っていた。

だけど……今の俺達は気付かなかった。

何故この戦いが始まったのか。

そして……隠された真実を。

《第一章 完》

第二章 第四十一話

死にはしなかったが、予断を許さない状況には変わりない。
今の狩野遥の状態だ。

美咲達の防衛によって緊急搬送され、そこで応急処置の後の手術で、何とか一命をとりとめる事に成功した。

しかし傷は深く、この後回復するかどうかもよく分からない。
最悪このまま死んでしまう事も……。

代表戦が終わって数時間後の夜八時。

俺、美咲、山内、優香の四人は遥の病室の外にいた。

まだ解散出来ない理由の一つ。

遥の娘……のような存在であるヴィーダの今後だ。

「誰が預かるのよ」

「ウチの家じゃ預かるの難しい系……」

「優香には流石に預けられないわね」

「何故系？」

「自分で考えなさい」

「それじゃ分かんない系」

優香の所が無しになった所で、山内が俺と美咲の方を向く。

「裕太とか会長の所はダメなの？」

「俺は一人暮らしだけど……色々と問題があるだろ」

あんな幼女と二人きりで暮らしてたら犯罪者だと思われる。

「私の家も難しいですわ」

「じゃあ……」

全員で山内の顔を見る。

「ヴェエツ？　なんであたし？」

「だってもうそれくらいしか選択肢ないし。それに何かダメな事情ある？」

「別がないけど」

「だったら頼むよ」

「ナニソレイミワカンナイ」

そんな真〇ちゃんみたいな事言われても。

「とにかく頼むよ！ な！」

「……はあ」

※※※

半ば強制的に決まってしまったので、取り敢えず挨拶に。

「ヴィーダ」

「……」

ヴィーダはまだ、遙が眠るベッドの前で落ち込んでいる。

「遥さんが治るまでの間、私と一緒にいてもらうから……よろしくね」

「……」

——うう、どうしたらいいのよ。

山内は子供の扱いは得意か苦手かと言われたら苦手な方だ。

こういう時、どう声を掛けたらいいのか……。

「ねえ、ママの事は好き？」

「スキダヨ」

「そっか」

「ヴィーダ、ミンナトチガウ。ツクラレタニンゲン。ママハヴィーダ

ヲドウグトシカミテナイイツテタ」

あの扱いを見れば、大体の人が分かる。

でも……。

「ダケド、ヴィーダ……ママスキ。ダツテ……ホントハ、トツテモヤサ

シイ。ヴィーダ、ワカル」

「ヴィーダ……」

「キミ、ナマエハ？」

「山内……」

そこで止まる。

下の名前は……あまり好きじゃない。

「シタノナマエハ？」

ヴィーダに首を傾げられる。

自分の知人にも、下の名前を自ら明かした事はない。
わざわざ聞かれたのも、恐らく今回が初めての事だ。

「……」

山内は少し俯いて考えてから、ヴィーダに自分の名前を告げた。

「成音（なりね）。山内成音」

「ナリネ、ママ、スキ？」

「あたしは……」

山内は自分の母親を思い出す。

○×女子高に入るまで、山内は名門の私立中学に通うエリートだった。
た。

生徒会長にも就任し、有名私立高校に特待生として入学出来そうにもなっていた。

でもそこまでの道は、全て母親が決めたもの。

中二の時くらいから、山内は成績不振から母親に叱られるようになり、母親の決めた事をこなすのが嫌になった。

元々人と争う事があまり好きではなかったから、余計にそう思ってしまったのだ。

山内は母親の決めた道から外れる事を選び、けじめとして家を出ていく事にした。

今では父親からの仕送りを受け取りながら、学校近くのマンションで一人暮らしをしている。

○×女子高は学校の特性上、学年一位を取らなければ大学への推薦入試を受けられない。

元々私立中学でエリートだった山内には簡単な話だが、恐らく三年後に母親が決めた大学に入る事はまずないだろう。

「あたしは、母さんの事が苦手かな」

ヴィーダは遥の為に美咲と戦う事を躊躇わなかったし、遥が倒された時は、母親の為に美咲と協力して戦う事を選んだ。

山内なら、多分母親が困っていても助けようとは思えない。

自分が一番苦しかったのに、母親は叱るだけで何もなかったのだ

から。

「ナリネノママハ、ヤサシクナカッタ？」

「……覚えてない」

嫌だった事なら、沢山思い出せる。

母親には遊んで貰った記憶すらない。

貰ったものと言えば、この名前と毎日の食事くらい。

食事すら、母親に従わなければ食べさせて貰えない日もあった。

「ごめんね、なんかヴィーダを慰めるつもりで来たのに」

「ナグサメル？ ヴィーダヲ？」

「うん」

「……ウレシイ」

「え？」

「コレツテ、トモダチ？」

ヴィーダが大きく開けて首を傾げる。

「友達……」

「ヴィーダ、ナリネ、トモダチ！」

そう言って握手を求めた。

「そうね、トモダチ！」

山内はその手を握る。

第四十二話

数分後、ヴィーダと山内……成音が病室から出てくる。成音とヴィーダは友達というよりかは、姉妹のように手を繋いでいた。

「じゃあ、あたしはヴィーダ連れて帰るから」

「頼むよ、成音」「頼みますわ、成音さん」

「き、聞いてたの?」

「いやほらだって、この小説始まって一章終わっても下の名前分かんなかったわけだから、ついな……」

「私も知りませんでしたわ」

「はあ……本当は知られたくなかったんだけどね」

成音が諦め気味に嘆息する。

「ヴィーダ、ナリネ、トモダチ!」

嬉しそうにぴよんぴよん跳ねるヴィーダ。

「友達……私も友達になれますの?」

「ミサキ、トモダチカナ?」

「何で疑問形ですの!?!」

「イツカ、ヴィーダ、タオス!」

「わ、私も今度こそ正攻法で倒しますわよ!」

「テメエらうるせえぞここどこだと思ってるんだ!」

先生に怒られてしまった。

てか……前美咲が入院した時も思ったけどこの先生口悪すぎる。ろ。

「ねえねえヴィーダっち、ウチは?」

「ユウカ、ビッチ!」

「ヴィーダっち……割と増せてる系?」

「?」

ヴィーダが目丸くして首を傾げる。

恐らく遙が何らかの方法で、言葉とかを教えたのだろうと推測する

が、だとすると……何教えてんだろう……。

それはまあさておき。

「ヴィーダ、俺は？」

「ユウター！」

最初は嬉しそうに飛び跳ねていたが、少しばかり俺を見てから、何故か成音の後ろに隠れてしまう。

「ど、どうしたのヴィーダ」

「ヴィーダ、ユウター、キライ……」

「ゑ!？」

なんでなんで！

「ど、どうして？」

近付こうとするが、拒否されてしまう。

「うーん……」

「あれですわ、裕太さんの本性がロリコンだとバレたのですわ」

「それは断じてないだろ」

ヴィーダがマセテいるとしてもだ。

「す、好かれるように頑張るよ！俺は怖くないからね！」

「……」

「信用されてませんの」

「酷いよお！」

※※※

成音、ヴィーダ、優香と別れ、俺と美咲は帰り道を車で進む。

「取り敢えず、ヴィーダさんの引き取り手が見つかって良かったですわね」

「そうだな……」

「元気がありませんわね。ヴィーダさんに嫌われた事を気にしてるんですの？」

「それもある。でもそれよりは……」

美咲から聞いた話によれば、怪人化した蘇我高校の生徒達は倒しても怪人化が解けなかったらしい。

今の俺に、蘇我高校の生徒に対する情などないつもりだが、人間に

戻れないのは少し可哀想だと思っ自分がある。

「怪人化した生徒達、どうすれば良いんだろうな……」

美咲がいつものように、俺に考えを告げた。

「こうなった以上、戻す方法が見つかるまで戦うしかありませんわ」

「確かに、遥先生が起きるまではそうするしかないか」

「ええ」

そういえば、まだ皆に対し『あのこと』を告げてないと思い、美咲にバレない程度に言ってみる。

「そういえば美咲」

「なんですか？」

「これからはもしかしたら、俺もお前の力になれるかも知れない。だから、もしピンチだったら俺を頼っていいぞ」

「……何の話かさっぱりですわ。どういう事か教えなさいな」

「その時まで内緒だな」

もししくつたら恥ずかしいし。

「私に隠し事とは良い度胸ですわね。取り敢えずボコボコにしますわよ」

「おい今運転ち

「変身ですわ」

「やめろッ！」

取り敢えず変身だけは阻止した。

第四十三話

身体に重みがある。

まるで数日間、身体をピクリとも動かさなかったかのような倦怠感。

足利明人はそれを感じながら、見知らぬ場所で目を覚ます。

「ここは……？」

何かの研究所……のようだ。

自分が眠っていたのはカプセルのような狭い空間。

そして、その周りに無数の配線……。

いや……違う。

「教室？」

そう、蘇我高校の科学部のような……何かの教室のようにも思える。

だが蘇我高校ではない……はずだ。

「目が覚めたようだね」

青い髪に赤い瞳の……白衣を纏った女性に声を掛けられる。

「アンタは誰だ？」

「そうだね……君の知らない誰かと答えておくよ」

そう言いながら、青髪の女はソードドライバーを明人に手渡す。

「これは君のだろ？ 返すよ」

「……」

明人は何かを疑いながらも受け取る。

「ここに連れて来たのはアンタか？」

「そうだよ。君と、君のそのベルトを調べていたのさ。気絶している所を誘拐して悪かったとは思ってるけど、君は多分……僕が誘ってもついてこなかっただろうからさ」

今のところ身体に、何かおかしな点があるというのではない。

だが本当に調べただけなら、このまま返して貰える筈だ。

「どこに行く気だい？」

「俺は帰る。生徒会長が長い間席を開けるわけにはいかない。それに、俺には約束がある」

「六角美咲と戦う事か？」

「……！ それも知っているのか？」

「狩野遙に関わる人物は、ほぼ全て調べさせて貰ったよ。仮面ライダーボマー……だっけか。それと戦う約束をしているんだらう？」

「ああ……」

「心配はいらない、戦えるさ。ただし……僕の配下としてね」

それを聞いて、明人は女に襲い掛かろうとする。

「プライド故に言う事を聞く気になれない。僕と同じか……やれ」
掃除用具入れのロッカーから、怪人が飛び出す。

拳にサックを付けた、サック怪人とでも言うべきだろうか。

『SWORD DRIVE READY?』

明人は剣の柄を取り、剣の怪人へ。

サック怪人の拳を剣で受け止め、弾き返す。

「お前を、止める……」

サック怪人が、今度は蹴りを繰り出す。

それを腕で受け止め、剣で薙ぎ吹き飛ばした。

「ぐあッ……」

「その程度か！」

残像が出来る程に加速し、サック怪人へと斬撃を叩き込む。

「これで終わりだ」

『FINAL DRIVE!』

トップスピードまで加速し、もう一度光の速さで斬りつけようとする明人。

しかし。

「……ぐっ……」

『悪いが、俺のお袋の仲間を殺そうってんなら止めるぜ……』

頭の中に声が聞こえ、手足が固まる。

まるで他人に操られているかのように、自分で制御が出来ない。

「誰だ……」

『お前の知らない誰かで、目の前の女の息子みたいなもん……つて答えておくぜ』

サツク怪人が嘆息して、変身を解く。

サツク怪人の中身は、暑苦しそうな黒フードを被った男。

「お前が……俺の弟……」

「ふざけるな……誰がお前などと……」

『おっと、お喋りの時間は終わりだぜ?』

明人の意識が閉じる。

代わりに明人の中にある、もう一つの人格が表へ。

「そうだな兄貴……俺はお袋の願いを叶える為に生まれた。力になるぜ」

ニヤリと笑って、変身を解く。

「遥……。僕は必ず君を超えてみせる。君の大切なものを手に掛けた以上、僕は君以上の存在になってみせる……」

第四十四話

某月某日。

何だかんだで、数週間ぶりの学校だ。

「修行の為とは言え、生徒会長が数週間も学校を休むとは……」

「まあ良いじゃない。真面目過ぎても禿げるわよ」

「そう系」

「ついてきてたんですの？」

「なに？ 不満？」

「不満系？」

「そうじゃないですの。私は今まで一人で登校してましたので、こういうのに慣れないんですわ」

友達らしい友達もいなかったし。

「本当に困るつすよねえ……そんな生徒会長じゃ……」

校門前で、腕を組んで立っていたのは……二年生の副会長だ。

「何か用？ 副会長」

「もうその呼び方やめてくれないかい？ もう生徒会の仕事してないし……いや、この人が最近してないせいでやらされてたか」

美咲にニヤケながら嫌味を言う。

「会長が戦わなかったら、今頃この学校はあいつらのものになってたのよ？ 分かってるの？」

「山内ちゃんも変わったねえ。何なら私達の眼を覚まさせてくれたのは山内ちゃんなのに」

「……」

「もう会長には任せておけないっすね。任期満了までにクビになっちゃうんじゃないんすか？」

「アンタねえ！」

「やめなさい」

美咲が拳を止める。

「彼女達が離れる原因を作ったのは私ですわ。だから、私がいつか皆

さんが帰って来られるように尽力すべきですの。誰の力も借りませんわよ」

「会長……」

成音は拳を下ろす。

「行きますわよ」

「……」

美咲達が離れてから、副会長は静かに呟いた。

「ムカつくつす……」

※※※

五時間目までの授業を終え、六時間目は全校集会。

美咲達生徒は体育館に集まり、開始を待つ。

「……」

生徒会に話が出来ないとすると、教師陣のみが知る話なのだろう。

やがてざわざわしている生徒達に静まるようにする指示が出る。

「静かに」

その言葉に全員が従ったのは数分後。

校長がステージに上がり、マイクの前に立つ。

「お前らが静かになるまで五分掛かったぞ」

うざい教師がよくやるアレ。

「私がいっ静かにしなかつたんですか何時何分何秒地球が何回回った日？」

「二時四十七分三十二秒地球が二百億回回転した六月十七日。これで良いか？」

「回転数適当過ぎですちゃんと答えてください」

「……全校集会を始めろぞ」

「無視ですかつまんね」

金髪碧眼の若い校長先生が、青い瞳を潜め……先の言葉を無視して告げた。

「今日からうちの高校に、新しい教師が入る事になった。んじゃ、挨拶頼むぞ」

「はい」

青い髪に赤い瞳、白衣を纏った若い女性教師。

「皆さんこんにちは、僕の名は戸間董（とますみれ）です。よろしくお願ひします」

「こいつは本校の理科系を担当すつから、お前ら分かんねえところは面倒見てやれ」

一礼する董。

美咲を見て少し笑みを浮かべてから、口をもう一度開く。

「僕はここに来るまで、ある研究をしていました。それは人間の進化の研究です。最近になって、人類の中の数千分の一の確率で、新たな可能性を持った人間が生まれる事が明らかになっています」

ざわつく全校生徒。

「僕がここに来たのは科学を教える事もそうですが、君達のような未来を背負う若者に、この研究の面白さを伝えられたらとも思っています」

全校生徒を見回す。

「もし僕とそれについて語りたいたいという者がいれば、是非話しましょう。きっと退屈はしませんから」

口元を少し釣り上げてから、董はその場から去っていく。

第四十五話

「へえ、新任教師……。どんな人？」

俺は美咲の部屋で、彼女と話をしていた。

煎餅をよく噛んでから飲み込むと、それを見て美咲が告げた。

「戸間董先生。元科学者で、人間の進化の研究をしていた……。と言つてましたわ」

「進化……。それって突然変異体の事か？」

突然変異体は、美咲やもしかしたら俺のように、その董という教師の言葉を借りるなら、新たな可能性を秘めた者達。

もしかすると、同じような研究をしていたという遥とも何らかの関係があるかも知れない。

「もしそうなら、少し調べてみる必要がありますわね」

「そうだな」

美咲が思い出したように言う。

「しかし困りましたわね……。あの傷とはいえ、未だに目覚めないなんて」

「……」

狩野遥の容態は、あの戦いの日以降変わっていない。

悪化こそしていないが、逆に回復もしていないのだ。

ヴィーダも成音と共に、あれから何度も見舞いに行っているが、それを聞いては辛い顔をするヴィーダを、成音が何とか慰めている状態。

今のままでは、この戦いを終わらせる事は出来ない。

「今のままじゃ、動機が分からないんだよな……」

美咲に伝えようとはしていたが、それは見事に阻まれてしまった。

あの黒フードによって……。

「……」

「どうしましたの？」

俺の頭に、また一つのイメージが浮かぶ。

暗い空の下、黒フードを被った男が、若い……。高校生くらいの男を

殺害する瞬間。

「何で……俺がこんな記憶を……」

人が大怪我をする所や、殺されかける所なら、何度も見てきた。でも、本当に息の根を止めた場面なんて……。

「また何か思い出したんですの?」

「あ、ああ。でも大した事じゃない」

虚勢を張って誤魔化す。

「今日はもう帰るよ。またな」

「ええ……」

少し心配した顔で見る美咲に対して笑顔を見せ、俺は部屋をあとにする。

『お前は逃げられない』

どこからか、そんな声が聞こえた。

※※※

○×女子高の空き教室。

戸間董が作業をしている最中、一人の生徒がそこにやってくる。

「あの、ちよつといいですか?」

「君は……」

董が振り向くと、その生徒が答えた。

「蒲生(がもう)と言うつす。一応この学校の生徒会副会長つす。よろしくつす」

「副会長……、つまり生徒会のナンバー2だね?」

「うつす」

何やら、その称号に不満げな様子。

「生徒会の仕事に不満でも?」

「それもあるつす。でも仕事というよりかは……」

「会長は確か、六角美咲……という名だったかな?」

「は、はいつす」

董はある程度の事情を何も聴かず察した上で、問いかける。

「君はその人をどう思うんだい?」

「私は……」

「ここには誰もいない。正直な気持ちを言うんだ。僕ならそれに応えてあげられる」

「私は……正直あの人にはついていけない。あの方は無茶苦茶です。とてもリーダーなんかには向かないくらい。そう思うのに、私はあの人を超えられない。それが……」

「君の悩みか。よくわかった」

董は立ち上がり、蒲生に近付く。

「君は僕の話聞いていたかな？」

「あの話……っすよね？」

「そうだ。進化に関する研究の面白さを伝える……それが僕のやりたい事さ」

「……」

「でも僕が本当にしたいのは、その先。君にその研究の協力者になって欲しい。もしなってくれれば、六角美咲を消せるかも知れない」

「いいっすよ……」

董は蒲生の返事に笑ってから、耳元で囁く。

「じゃあ……君も僕の仲間だ」

第四十六話

同日夜中……蘇我高校。

未だに怪人の姿から人間に戻れず、理性を失って暴れ続ける生徒達が、警察の手によって交代で監視されている。

「何でこんな地獄のような役目を押し付けられなきやいけないんだ……」

「誰がやったんだよこんな事」

怪人達の動きが夜になり静まり始めた所で、愚痴りだす警察官。

今のところ死人はいないが、終わりの見えない観察に気が狂いそう
だ。

「お勤めご苦労っす」

女の声。

警官二人の前に、○×女子高副会長の蒲生が現れる。

「お嬢ちゃんこの学校の生徒じゃないよね？ それにこんな遅い時間にどうしたの？」

「もう夜も遅いし、親も心配するから帰った方が……」

「私なら心配いらないつす。それより警官さん達こそ帰った方が良
いつすよ」

「？」

麻酔弾が込められた銃を放ち、警官二人を眠らせた。

「行くつすよ」

ブレザーの中に隠していたベルトを取り出し、腰に装着。

『ガスドライバー！』

マインドコントロールガスと書かれたガジェットを、ドライバーの横に差し込み、指を鳴らす。

「変身」

『ガスドライブ！ マインドコントロール！ アヤツール!!』

全身黄色の、ガスの如くもやっとした外見の怪人へと姿を変える蒲
生。

そのまま歩いて、校舎内へ。

暴れ続けるアーミー軍団や、他の有象無象の怪人の前に姿を現し、ガス怪人はマインドコントロール能力を使う。

「ウギャアアア！」

人の言葉も話さず、完全な怪人と化した生徒達が叫ぶ。

だが数秒後に突然叫ぶのをやめ、統率のとれた行動でガス怪人の所へ集う。

「これから私に従ってもらおうつす。必ず会長……いや、六角美咲とその仲間を倒すつすよ」

「ミサキ……こんな姿ノままにしタあいつ……ゆるサナイ」

怪人が片言で、恨みの言葉を吐き出す。

「なら、やれるつすよね？」

「とウゼンだ」

「いい返事つすね。アンタらには期待してゐるつすよ」

——六角美咲……これでアンタの時代も終わりつす。精々苦しんで消えてくたせえ。

怪人の姿を解いた蒲生が、口元に笑みを浮かべた。

※※※

次の日。

俺と美咲はカフェで、生徒会の仕事を進めていた。

「今までやれなかった分がありますから、どんどん手を動かしますわよ」

「はいはい……」

いくら書いても終わらない。

流石に量が多すぎる。

「てか成音に頼めば良いじゃん」

「成音さんに任せるわけにはいきませんわ。私の仕事なんですから」
ならお前だけでやれよ。

「貴方は私の一部みたいなもんですわ」

「勝手に俺をお前の一部扱いしないでくれ」

お供設定解ける日はいつなんだろう。

「死ぬまで有効ですわよ」

「えー……」

こいつが政治家とかになったら、その仕事も任せられたりするんだろうか……。

「きゃあああッ！」

外から悲鳴。

それに気付いた俺と美咲が、素早く頼んだものを平らげて外に出る。

あ、ちゃんとお金も置いて行ってね。

「出ましたわね……」

「ウウウ……」

理性を失ったアーミーが、美咲を見て呻き、襲い掛かる。

「私に挑む気ですわね」

美咲は生身の状態でアーミーを蹴り飛ばし、怯んだ所でベルトを取り出す。

装着し、端末を操作。

『BOMER DRIVE READY?』

端末を掴んだ右手を顔の左側で構えてから叫ぶ。

「変身ですわ！」

端末をベルトに取り付ける。

上空から紫色の爆弾が美咲の手元に吸い込まれるように降り、美咲はそれを握り潰す。

爆風が巻き起こり、そこからボマーが現れる。

「貴方が、私の頂点への旅を終わらせる者ですか?」

バットを向けると、アーミーが人間らしからぬ叫び声で答えた。

「ウギヤアアア！」

「悪いですが、まだ終わらせませんわよ」

ボマーはそう告げて駆け出す。

第四十七話

暴走アーミーと殺陣を経験した故か、ボマーはそれ程苦勞せず
アーミーを圧倒する。

相手の一撃を軽々ガードしてから、端末を取り出して必殺技。

『FINAL DRIVE!』

そのままジャンプし、右脚にボムビットを集めてから叫ぶ。

「ライダーボムキック!」

久しぶりのライダーボムキック。

仮面ライダーらしい飛び蹴りで相手を吹き飛ばし、爆死したボマー
が遠くの位置で復活。

「爆発しても死なない能力、いつ見てもチートだな」

刃物で刺されても、自身の身体を爆破してしまえば問答無用で生き
返れるのだから。

「ウウウ……」

怪人はやはり人間体に戻らない。

ボマーがバットを向けて告げる。

「貴方達はいつか私達が戻しますわ。これ以上痛い目に遭いたくなく
れば、もう逃げなさいな」

「ギャアアアア!」

奇声を上げながら逃げ出す怪人。

ボマーはそれを確認して、変身を解く。

「仕方ない、家で続きをやりますわよ」

「ああ」

荷物を手に、車まで行こうとする。
だが。

「ウギャアアアアアアア!」

「ギャオオオ!」

さつきとは別個体の奴ら五体が、ボマーの前に現れる。

「まだいるんですの!?!」

目玉を飛び出しながら叫ぶ美咲。
彼女はもう一度変身し、駆け出す。

「とりゃあッ！」

バットで二体程纏めて吹き飛ばすボマー。
いくら数で責められても、アーミー程度では、今のボマーの相手にはならない。

「これ使いたかったけど、まだ出番無さそうだな」

バッグの中に隠しているものを見ながら、俺は呟く。

「おおおッ！」

ボマーが一体を吹き飛ばしてから、端末を取り出して操作。

『FINAL DRIVE!』

ボムビットがバットへ集まる。

「ライダーインパクト！」

ボマーの十八番、ライダーインパクト。

バットに纏わるボムビットと共に、強くアーミー二体へと叩きつける。

「おりゃあ！」

※※※

アーミーは吹き飛ばされてから、その場から逃げ出す。

ボマーはノーダメージ(?)で、アーミー五体を倒した。

「二回死にましたわ」

自分の技で二回死ぬのはパーフェクト勝ち判定で良いのだろうか。

「お疲れ様です」

「どうしましたの? なんか不服そうな顔してますが」

「いや、何でもないよ」

俺でもちよつとはカッコよく出るくらいいいだろう。

だからそれまで封印だ。

「怪しいですわ……」

「かなり昔にフランスに行った羊みみたいな顔しないでくれよ」

「何ですか? それ」

マジか知らない子とかもういるんだな。

「取り敢えず今度こそ家で書類を……」

「ウギャアア」

「しつこいのですの!」

次に出た五体も、ボマーは難なく倒しましたとき。

第四十八話

「なんで一日に三回も死なないといけないんですの……？」
「それより、あの怪人達蘇我高校の奴らだよな。理性が無くなっても、蘇我高校には今見張りがいるから簡単には出られない筈なんだけどな」

簡易的だけどバリケードも張ってみたいだし。

それでも見張る側からしたらたまったもんじゃないだろうが。

「つーか、この家にまで襲ってこないよな？」

流石に美咲の家族にまで迷惑は……。

ピンポーン♪

「……おい」

今の話してる途中に来られたら、俺がフラグ立てたみたいになっちゃうだろ。

「私が行ってきますわ」

「おう頼む」

美咲が一応ベルトを装着して、玄関まで向かう。

『BOMER DRIVE READY?』

「変身ですわ!」

仮面ライダーボマーへと姿を変え、扉を開ける。

「また来ましたわね! 私の家だけは破壊させませんわ!」

「……何してんの?」

「ミサキ、オバカ?」

「変身までしてノリノリ系じゃん?」

「み、皆さんお揃いでどうしましたの?」

ボマーは変身解除。

「取り敢えず集まるならここじゃないの? もう裕太いるっぽいし」

「今一応仕事中ですの」

「生徒会の? なんで裕太にもやらせてるわけ?」

「裕太さんは私の一部ですわ」

「ユウタ、ドレイ……カワイソウ」

ヴィーダは俺の気持ちを分かってくれろみたいだな。
何故か俺の事は嫌いみたいだけど。

「あたしもやるわ。だから裕太を解放してあげなよ」
「分かりましたわ」

成音が多少呆れ顔で、美咲宅へ上がる。

※※※

「流石に溜まりすぎね」

疲れてぐったりする成音。

「他のメンバーがいないんですから、仕方ないですの。まあ蒲生さんが少しやっていたみたいですが……」

「アンタ努力は惜しまないけど、人望はないに等しいからね」

「うるさいですわ」

「事実を言ったまでよ。もうちよつと誠意を見せないと、多分皆帰ってこないわよ」

「成音さんはどうする気ですの？」

「あたしは仕方ないからこれを機に書記に戻るわよ。元々やりたかったわけじゃないけど」

「？ 生徒会って立候補したり志願制だったりじゃないのか？」

少なくとも蘇我高校はそのシステムだった筈。

まあうちの生徒会は、腕っぷしが強くないとなれないけれど。

「私達の高校では、志願する事も出来ませんが、中学で生徒会長だった者は強制的に生徒会配属ですの。有無を言わさずに」

「まじかよ」

「私は志願しましたわ」

「でしようね」

動機が純粹かはさておき。

「ムズカシソウ……」

成音の隣で、じーつと書類を見ているヴィーダ。

「ヴィーダ、成音は今ちよつと忙しいから俺と遊ぶか」

「……イヤダ」

「だから何で！」

俺何もしてないよ！

「じゃあウチと遊ぶ系」

「ユウカ、ビッチ！」

「さ……流石にそれは傷付く系。まあ良いや」

優香と共に、部屋の外へ出るヴィーダ。

「変な遊び教えるなよ！」

それが心配だ。

「大丈夫系、まずナンパの仕方から！」

「大丈夫じゃない問題だ！」

俺からも優香ビッチと言わせてくれ。

第四十九話

俺も結局手伝い、何とか二時間程度で書類を全て書き終えた。

「はあ……終わった……」

既に腕が痛い。

教師時代でも、こんなに書類を書いた事が無かったのに。

「あたしも久々だから腕が……」

二人とももう腕がパンパンだ。

なのに美咲はそんな様子もなく、急に立ち上がった。

彼女は今日だけで三回も戦闘をしているというのに。

「美咲？」

「ちよつと外へ出てきますわ」

美咲はそう言っつて部屋を出る。

「最近増えたんだよな、あいつ一人で外出る事」

「そうなんだ」

彼女が仮面ライダーボマーとなって、一か月以上が過ぎた。

努力のかいもあり、蘇我高校と決着をつけ、何とか学校を守れはし

たが、戦いはまだ続いている。

「長い戦いに挑み続けて、副会長にまで責められて……俺だったら到

底耐えられないや」

「……」

成音も立ち上がる。

「成音？」

「あたしもちよつと出てくる」

「おう、気をつけてな」

俺は成音を見届けてから、その場で横になった。

※※※

裕太には初めて聞いた風に返したが、何をしているのか成音は知っていた。

美咲が最近一人になる理由を。

彼女はよく、近くの公園で身体を鍛えている。

木にサンドバッグを吊るして、攻撃を当てては跳ね返ったものを受け止めてを繰り返すという古典的な方法。

「会長……」

成音はヴィーダとの戦いを思い出す。

あの時、主に戦ったのはボマーのみで、成音は最初の攻撃で戦闘不能に追いやられてしまった。

あの修行中は、まだボマーと互角くらいかとも思っていたのに、あの決戦で……自分と美咲のレベル差というものを思い知らされたようにも感じる。

「……」

自分は、美咲のやり方に反抗して生徒会を出た。

あの時蘇我高校の生徒と戦うと言い出した事が出ていくキツカケだったが、そうなる前から彼女の強引で大胆過ぎる仕事ぶりが気に入らなかった。

仕事ぶりもそうだが、何より自分が生徒会長だった時と比べてしまった。

成音は母親に言われるがままにやり続け、やりたくなくても仕方ないと思いつけながらやっていった。

だが美咲は何事に対して常に一生懸命で、自分の目的の為ならどんな努力も無茶も惜しまない。

低レベルの学校に入ったというのに、そこに見合わない程場違いな努力家だった彼女。

もう二度と努力をしないと決めていたのもあって、成音はがむしやらに頑張る人間を見るのが嫌になっていたのかも知れない。

そして蘇我高校の生徒に頼まれて戦いはしたが、結局美咲に勝つ事は出来なかった。

努力していても所詮は底辺だと思っていた。

だから彼女を凹ませてやろうと考えていたのに。

今はかつて自分が見下し、尚且つ見るのも嫌だった相手に対して劣等感を抱いている。

「あたしだって……」

こんな事思ったのは初めてだ。

誰かに置いて行かれる事が悔しいと思った事は。

「ナリネー！」

いつの間にかいたヴィーダが、成音に対して飛びついた。

「ヴィーダ……」

よしよしと頭を撫でる。

「優香はどうしたの？」

「ユウタノトコ、イッタ」

「そっか」

何かに気付いたヴィーダが、上目遣いで成音を見た。

「ナリネ、ダイジヨウブ？」

「大丈夫よ」

「ミサキ……イル」

ヴィーダが美咲を指さす。

今はランニングをしている美咲を見つつ、成音はヴィーダに問う。

「ヴィーダは、あたしの事どう思う？」

「？」

「ほら、あたしヴィーダとは一度戦ってるけど……すぐ負けちゃったし。弱つちいとか思ってるかなって」

「ナリネ……」

ヴィーダが少し落ち込んだ顔をする。

「ナリネ、ゴメン……」

「良いのよ。あたしが弱いのは事実。だから、もつと強くなりたい」

「ヴィーダモ……」

「え？」

「ヴィーダモ、モットツヨクナル。モウママガキズツクノハイヤダ。ダカラ……」

ヴィーダが手を差し出す。

「イッシヨニ、ツヨクナロ！」

ヴィーダがいつものようにぴよんぴよんと跳ねて言う。

成音は微笑んで。

「うん」

と返してあげた。

第五十話

その次の日から、成音はヴィーダと共に特訓を始めた。

「ナリネ、トツクン！」

ヴィーダが笑顔で、校門の近くで手を振っている。

「待っててくれたの？」

「ウン！」

嬉しそうに手を繋ぐ。

「イコー！」

そして強引に引つ張っていく。

「ちよつ、ちよつとヴィーダ？」

※※※

まずは街をランニング。

ジャージに着替え、ヴィーダと共に走る。

「エーイ！」

成音もそこそこ走りに自信はあるが、ヴィーダはそれ以上。

あつという間にヴィーダを置いていく。

「ハヤクハヤク！」

ぴよんぴよんと飛び跳ねて呼ぶヴィーダ。

「待ってよ〜！」

成音は何とか追いかける。

「ナリネ、マダマダ」

「はあ……速いわねヴィーダ」

「ヴィーダ、カケツコトクイ！」

エツヘンと腕を組む。

「ま、まだまだ！ 次の勝負では負けないわよ！」

※※※

次の特訓は崖登り。

取り敢えず崖がある所まで移動したのだが。

「ひえ〜……」

ヴィーダがやろうと言いだしたものの、成音は少し恐怖する。
あまり高い所や不安定な所は得意じゃない。

「ナリネ、ダイジョウブ！」

ヴィーダは恐怖一つなく、崖を登っていく。

「大丈夫かなあ……」

不安げな顔をしながらも、成音は崖を登り始める。

「ひっ……」

少し登った所で、足場がザクつと音を立てて崩れた。

慌てて登ろうとするが、それが仇になり。

手を離してはまった。

「うわあああああッ！」

真つ逆さまに転落。

地面に激突する前に、

「ヘンシン！」

既に登り終えていたヴィーダが変身して、成音を助けに行く。

「ありがとう……」

心臓がバクバクだ。

グングニルが成音を優しく立たせてから、変身を解く。

「コワカッタ？」

「う……うん」

でも美咲なら、こんな崖でも躊躇わず登るんだろうなあ……と少し
落ち込む。

「ダイジョウブ！ モットガンバル！」

両腕でガッツポーズをするヴィーダ。

「そうね。まだまだ！」

成音は諦めず、もう一度登り始める。

※※※

「オフロー！ オフロー！」

その数時間後。

結局一日目は、ヴィーダに一つも勝つ事が出来なかった。

全身クタクタで部屋に戻り、まだ元気そうなヴィーダを先に入れて

から、扉の鍵を閉める。

「はあ……まだこの程度かあ」

脱力し、椅子に腰を預けて天井を見る。

今日特訓した感じでは、まだ全然美咲やヴィーダに追いつけるイメージがない。

美咲でさえハイドロフォームや、グングニルとの戦いで使って自爆が無ければヴィーダに勝てないのだから、美咲よりも実力が劣る成音がそう簡単に肩を並べられるわけがない。

分かっている。分かっている……意識せずにはいられない。

「ナリネ」

風呂に入ろうと、タオルを準備していたヴィーダに声を掛けられる。

「ヴィーダ……」

「アシタモガンバロウ！」

ヴィーダにそう言われ、成音も笑顔で頷く。

「ナリネモオフロ、ハイロ！」

「え？ あたしも？」

「アライツコ！」

「はいはい」

「ヤッター！」

第五十一話

「特訓が始まり一週間と少し。

ヴィーダとの差はまだ開きっぱなしのままだが、少しずつ自分を鍛える事が出来た気がする。

今日はお互い変身して、組み手をしようとしていた。

「今日は負けないわよ、ヴィーダ」

成音は意気込みながら端末を取り出す。

ヴィーダとの戦いは経験したが、こうして組み手をするのは初めてだ。

——大丈夫。あたしは会長が戦う所を一度見た。だからあの時よりも戦える筈。

「ナリネ、イクヨ」

スイッチを押す。

『GUNGNIRON』

バックルの中から、待機音が流れる。

ヴィーダは一度目を閉じてから、槍型のアイテムを上投げて、もう一度キヤッチ。

「ヘンシンー！」

挿入口に差し込む。

『CHANGE』

ヴィーダはその姿を、仮面ライダーグングニルへと変える。

白銀と水色で構成された、槍使いのライダーがその水色の複眼で成音を見据えた。

「あたしも」

端末を操作し、閉じる。

『FLAME THROWER DRIVE READY?』

「変身」

端末を取り付ける。

『COMPLETE』

上空から現れた火柱に飲み込まれる山内。
火炎放射器を模した、炎の怪人へとその姿を変えた。

「イクヨ」

グングニルが左拳を握り、素早く移動して火炎放射器怪人の喉元を狙う。

あの時……決戦の時と同じ攻撃だ。

——落ち着いて避けないと……!!

美咲と同じように集中し、攻撃を予測する。

しかし火炎放射器に向けた時には、もう遅かった。

「ッー」

成音は攻撃を見切れず、そのまま命中してしまう。

急所を狙われた成音はシステムに守られたが、変身が解けてしまった。

「くっ……」

成音は地面に拳を叩きつける。

何が足りない……。

美咲はどんなに早い敵も、躲すどころか正面から吹き飛ばしていた。

同じようにやろうとしたのに、攻撃がどこから来るのかさえ分からなかった。

「ナリネ……」

「やっぱり……」

自分には無理なのだろうか。

母親のレールから外れた自分では、常に努力し続ける美咲には追いつけないのだろうか。

「アキラメチャダメー」

グングニルが叫ぶ。

「ヴィーダ……」

「キットデキル！ ツヨイキモチガアルナリネナラ！」

武器を構えなおすグングニル。

「強い……気持ち……」

言われた言葉を噛みしめる。

『FLAME THROWER DRIVE READY?』

もう一度端末を操作し、構えた。

そして、自分の心に強く言い聞かせる。

——あたしは強くなりたい。いつか会長に勝ちたい！

「変身！」

『COMPLETE』

火炎放射器怪人へともう一度変身する。

「行くよヴィーダー！」

全身の炎を燃やし、もう一度グングニルに立ち向かおうとする。

「狩野遥の道具……みツけタ……」

「！」

何者かの声。

声の方を向くと、そこには。

「……ギャアアアアッ!!」

蘇我高校にいた怪人達が、集団を組んで自分達の前に立っていた。

第五十二話

「ヴィーダ、ヤル……」

グングニルが槍を構えて立ち向かおうとする。

しかし火炎放射器怪人が止めた。

「ナリネ？」

「あたし一人でやる」

「デモ……」

「あたしだって、一人で戦える！」

——会長は最初に果たし状を受け取った時、あたし達に見捨てられても一人で戦いに行つた。あたしにもそれくらいの強い気持ちがないきや、追いつけない！

火炎放射器怪人は全身から炎を滾らせて、怪人達へと向かつていく。

「はあッ！」

炎の拳で、アーミーを一人倒す。

今の火炎放射器怪人でも、アーミー程度ならもう余裕だ。

「その程度!?!」

全身から炎を放出し、焼き尽くす。

「グギャア！」

炙られて苦しそうにしている怪人に、キックで追い打ちをかける。

「はあッ！」

「ウオアア！」

蹴られた所を押さえ、悶え苦しむアーミー。

「いける……あたしも会長みたいに戦える！」

『FINAL DRIVE!』

全身の放射口から炎を放出し、ジェットエンジンの要領で三体で固まっている怪人達へ突撃する。

「うおおおおおおおッ!!」

「グアアアア！」

怪人達はボーリングのピンのように倒れ、気絶した。

「あたし、強い……このままー」

その勢いで残りを倒そうとする火炎放射器怪人。

だが……。

「凶二乗るナ」

残っていたアーミーに斬りつけられる。

「ぎゃあッー」

火炎放射器怪人は地面へと叩きつけられ、残ったアーミーに銃口を向けられる。

「……」

咄嗟に転がって回避するが、その先に別のアーミーの姿が。

「ぐあッー」

剣で斬りつけられ、火炎放射器怪人は大きく吹き飛ばされる。

まるでビーチバレーのボールのように回され、何度も斬りつけられていく。

「くっ……」

「これデ……終ワリダ」

端末なしで、どこからか音が聞こえる。

『FINAL DRIVE!』

自分を斬り付けた四体全員が、剣を高く掲げて振り下ろす。

そこから光が放たれる。

「しまっ……」

受け止めるどころか避ける事すら叶わない。

「ぎゃあああッー」

強制的に火炎放射器怪人……成音は変身解除に追い込まれた。

「くっ……」

「中々頑張ったガ……無駄だったよウだな」

胸倉を掴まれ、剣の先を向けられる。

「まズは才前カラ殺しテやる」

——あたし……このまま死んじゃうの？

成音は目を閉じる。

※※※

数か月前。

「どういう事？ 卒業後は私の決めた学校に行く筈よ？ こんな低レベルの高校に行くなんて」

「……」

「何か言ったらどうなの？」

「これ」

あたしは、この前父さんと一緒に書いてもらった書類を見せる。

アパートの部屋番号と、自分の名前が書かれた紙。

「さようなら」

「待ちなさい成音、こんなの聞いてないわよー！」

「アンタなんか母親と思った事ない。だから答える必要なんてない」
「……！」

「もう二度と、会いたくない」

※※※

母さんは誰の目から見ても毒親だし、今でも大嫌いだ。

だけど成音は、そんな母親から逃げる選択肢を選んできました。

もし成音が美咲なら、違う道を選んだ筈だ。

あの時には戻れなくても、やり直す道を選べるなら選びたい。

だからまだ、死にたくない……。

「グギャアアアア！」

断末魔が上がる。

だがその声の主は成音ではなく、アーミーの方だ。

「ヴィーダ、ヤツパリミテラレナイ。ヴィーダカラトモダチウバウヤツ……ユルサナイ！」

グングニルが槍を構え、怒りを露わにする。

第五十三話

「わざわざ、先に死に二来たノか」

アーミーの一人が、グングニルに切っ先を向けた。

「シナナイ。ヴィーダハ、オマエタチヲオシテナリネトカエルノ！」

「ほウ……面白い」

グングニルは消えるような速さで、移動する。

「ぐあッ！」

次に現れた瞬間、近くにいたアーミーを吹き飛ばした。

「ヴィーダ……」

成音はヴィーダの姿を見て、もう一度立ち上がる。

「……」

端末を取り出して、ボタンを押す。

『FLAME THROWER DRIVE READY?』

端末を閉じる。

「変身！」

ベルトに装着した。

『COMPLETE』

天から降り注いだ火柱が、成音の身体を火炎放射器怪人へと変える。

もう一度アーミーへ相対した。

「はあッ！」

火柱で焼き尽くし、動きを止める。

ステップしてから距離を詰め、怯むアーミーへと拳を叩きつけた。

「テイツー！」

グングニルも負けず劣らず、槍を回す。

グングニルに襲い掛かるアーミーはバタバタとなぎ倒されていく。

「これなら……」

『FINAL DRIVE!』

もう一度剣を高く掲げる。

「マケナイ！」

『GUNGNIR FINAL DRIVE!』

上空に魔法陣を出現させ、アーミー目掛けて槍を放つ。

「グアッ!」

大きく怪人を吹き飛ばし、気絶させる。

「ナリネ!」

「分かった!」

グングニルが火炎放射器怪人へ呼びかけた。

ベルトから端末を取り出して操作し、構える。

『FINAL DRIVE!』

全身から炎を迸る火炎放射器怪人。

そのままジェット機の要領で、残りのアーミーへと飛び出す。

「はあああああッ!!」

火だるまと化した火炎放射器怪人が、アーミーへと激突。

「グアアアアッ!」

爆発を起こして、アーミー達を大きく吹き飛ばして気絶させる。

※※※

怪人達をその場で寝かせ、成音とヴィーダはその場から離れた。

「あれで良かったのかな」

実を言うと、その場を離れるまでに少し悩んだ。

警察に通報すべきか、それとも蘇我高校まで運ぶべきか。

数秒くらいでどっちも危険と判断し、元に戻す方法が分かるまで戦い続けるしかないという結論に至った。

「次こそあたし一人でもやれるように……」

「ナリネ」

頑張らないと、と呟こうとした口をヴィーダが成音の腕を掴んで止める。

「ヴィーダ?」

「ナリネ、ムリハメッ!」

「でも……」

あの時、殺されそうになった時は凄く怖かった。
美咲なら、あの場でも何とかして乗り切る筈だ。

でも自分は怯えるだけで、ヴィーダに助けられてしまった。

ヴィーダは、そんな成音の気持ちを受け止めて言う。

「ヴィーダ、ナリネスキ。ナリネイナクナルノヤダ。ダカラ、ムリハメツ！」

「ヴィーダ……ごめん」

俯いて、ヴィーダに謝罪する。

母親に値する人物を傷付けられ、失うかも知れなかったヴィーダには軽率な発言だった。

申し訳ない気持ちにもなったが、同時に嬉しかった。

こんなに関心する事を心配してくれる人は、彼女が初めてだったから。

「あたしはあたしのペースで強くなる。それで良いんだよね？」

ヴィーダの目を見て言う。

ヴィーダは笑顔で「ウン！」と頷く。

「ヴィーダ、ナリネ、トモダチ！」

嬉しそうに跳ねて、成音に言うヴィーダ。

成音も微笑んでから、

「あたしも、ヴィーダと友達！」

そう返す。

二人で手を繋ぎ、会話しながらマンションへと帰る。

第五十四話

ガス怪人……蒲生は校長室で、帰還した怪人から話を聞いていた。

「狩野遥の人形と、山内ちゃんに負けたっすか」

「はい……」

ボロボロになった怪人達は、申し訳なきように話す。

「申し訳ありません」

「はあ、この体たらくでどう六角美咲を倒すんすか？ 蘇我高校の生徒の癖に情けないっす」

「そうだな」

どこからか聞き覚えのない声が聞こえる。

「誰っすか？」

「まさかすぐに俺に後輩が出来るなんてな。よう」

現れたのは、足利明人。

だが様子がおかしい。

恐らく……。

「アンタは明人じゃないっすね？ 一体誰なんすか？」

「俺はこいつの身体をちよいと借りてる、ただのあの人の家族さ」

「そうっすか。それで、その家族がここに何の用っすか？」

「面白そうだし俺にも仕切らせてくれよ」

「嫌っすね。六角美咲を倒すのはこの私っす」

「つれねえな。でもそこまで言うって事は、自信があるんだよな？」

明人がベルトから剣型の端末を取り出す。

『ガスドライバー！』

ポイズンガスと書かれたガジェットを、ドライバーの横に差し込み、指を鳴らす。

「変身」

『ガスドライブ！ ポイズン！ クルシーム!!』

紫色のガス怪人へと姿を変える蒲生。

『SWORD DRIVE READY?』

端末を取り付け、降ってくる剣の柄を取り、そのままガス怪人へと

斬りかかる剣の怪人。

ガスでバリアを作り、弾くガス怪人。

「中々やるじゃねえか」

「明人と比べたら大した事ないっすね」

「これでも最近この身体に放り込まれたばかりなんだ。無茶言うな」

弾かれた剣の怪人が、もう一度構えなおす。

「はあッ！」

剣の怪人が姿を消し、現れた場所でガス怪人を薙ぎ払う。

やはり明人と比べると遅い。

「口は達者だが、俺を倒せないようなら、お前は俺や六角美咲よりも弱い事になるな」

「なんだと……」

「あいつは新しい力を手に入れている。今の俺じゃ到底倒せねえ。もしあいつに勝ちたいのなら、俺くらい倒してもらわねえとな」

「アンタ程度、すぐに倒すっす」

挑発に乗って、そう反論するガス怪人。

笑みを浮かべながら剣の怪人は言う。

「やってみな」

剣の怪人がもう一度駆け出そうとする。

しかし。

「ぐっ……何をする、お前……」

剣の怪人の動きが止まる。

彼の中にいる明人が、精神力で妨害していた。

『や……めろお……』

「俺に抗ってやがる……ッ！」

『俺はお前にも董にも屈しない！』

明人と人格が切り替わる。

『何だと……』

「お前、六角美咲と戦うつもりなんだろう」

「そうっす。私があいつを……」

「六角美咲を倒すのはこの俺だ！ お前にも、こいつにもやらせない

！ 俺がお前達を止める！」

『FINAL DRIVE!』

端末を操作し、閉じて再びセット。

剣の怪人が構えつつ、姿を消す。

「どこっすー！」

「はあッ！」

ガス怪人を斬りつけ、大きく吹き飛ばす。

「ぐあッ！」

蒲生の変身が解け、地面へと叩きつけられる。

「……」

「流石だね。足利明人……君は確かに強い。だけど僕の計画に必要なのは君ではなく、君の肉体だよ」

どこからか現れた董が、何かのスイッチを押す。

「ぐッ……」

明人が苦しみだし、悶える。

「戻ってくるんだ」

『おうよ』

「待て……ッ！」

明人の声が届く事はなく、身体を再びあの人格に奪われてしまう。

「今の僕には蒲生も必要だ。こんな醜い争いを、僕に見せないでくれないか？」

「……」

「これからは彼と協力して進めたまえ。君一人では荷が重かろう？」

笑みを浮かべながら言う董に、蒲生は不満そうに答える。

「……ういっす」

「では、よろしく頼んだよ」

董が立ち去っていく。

「そういう事だ。よろしくな」

「……」

明人に握手を求められるが、蒲生は断る。

——見てろ六角美咲、足利明人もいつか出し抜いて……お前を倒

すつす。

第五十五話

次の日の放課後。

「そんな事があつたんですの?」

「ええ。まだ身体が痛むけど、大丈夫よ」

美咲、成音、優香の三人で下校していた。

「にしても今の話凄い系じゃん? 最初成音っち一人で挑もうとしてたなんて」

「そ、そう?」

「美咲っちの真似系?」

「ち、違うわよ! 誰が会長の真似なんか……」

言えない。実は思い切り会長の真似しようとしていたとか。

「貴女も頂点の道を歩き始めた、って事ですわね」

「あ、アンタなんか目標にしないわよ!」

「悪いですがその座を譲る気はありませんわよ」

「人の話聞いて!」

——やっぱこの人目標にするのは間違いかも……。

「取り敢えず祝勝祝いするじゃん? ヴィーダっちも誘う系?」

「唐突ね優香」

「こういうのは思い立った時にやるのが普通系」

「勢いだけは凄いわよね二人とも」

「だけって何系? 馬鹿にしてる系?」

「いや、だってあたしには真似出来ないし」

「ナリネ!」

校門から声が聞こえる。

「ヴィーダ!」

「ミンナモイル!」

「ヴィーダさん、久しぶりですわね。最近まで成音さんとどうしてたんですの?」

「ナリネ、ヴィーダトトツク」

「ああああ！ ダメダメヴィーダ！」

「ナンデ？」

「な、何でも良いから会長にはめっただよ！ めっ！」

特訓してる事だけは絶対に知られたくない。

いつの間にか美咲を追い越していた的な感じにしたい。

「何ですか？ 何を隠してますの？」

「あー、実は今までヴィーダと会長の悪口言ってたのよ」

「はい……？」

「だってアンタ悪口言われても仕方ない人じゃない？」

「なあんですってえ!？」

白目を剥きながら、どこからか取り出した爆弾を投げる。

成音には当たらず、校門で跳ね返り、美咲に激突。

「……爆弾くらいちゃんと当てられるようになりなさいよ」

もう避けようという気すら起きなくなっていた。

「どうしてですのおー！」

「知らないよー！」

※※※

「やっと終わった」

仕事を終え、俺は家まで帰ろうとしていた。

「ん？ 通知か」

俺達のグループトークだ。

写真が投稿されたという通知が沢山ある。

『今日の写真ですの』

あいつら……俺を呼ばずに寿司屋でパーティしてたのか。

仲間が俺一人だけ男つてのも辛いもんがあるな。

「てか……俺の悪口言われてないよな……」

あり得そうだから困る。

「まあ良いか、俺も早く帰って飯を……」

「まだいましたのね」

聞き覚えのある声。

「なんだいたのか美咲……いつから？」

「悪口言っていないよな、から聞いてましたわ」
しまった。

「いやほら、女子会ってそんなイメージが」
「まったく……どいつもこいつも私に悪口を……。そんなに私は悪口
言われるような人間ですか？」

うーん、既に言いたい事があり過ぎるのは確かかな。
「貴方もそんな事を言うなら、これは渡せませんわね」
「？」

美咲が袋から取り出したのは、なんとも美味しそうな寿司の詰め合
わせ。

恐らくパーティをした寿司屋で、テイクアウトでもしたのだろう。

「そ、それを俺に！」

丁度良いものを食べたいと思っていた所だ。

手が伸びてしまう。

「先の失言を詫びなさいな」

こいつう……。

「ゴメンナサイミサキサンワタシニスシヲオメグミクダサイ」

「よろしい」

「やったあ！」

俺は寿司を受け取る。

「その代わり、今から私の家に来なさいな」

「いや、もう家に帰った」

「来てくださいな？　そして私を手伝いなさい」

これは断れないパターンだ……もう既に受け取っちゃったし仕方
ない。

「はひ……」

第五十六話

俺は美咲の家まで直行。

部屋で寿司を頂いてから、俺と美咲は仕事を始めた。
それから数時間後。

「ふう……………」

大量の書類を何とか書き終え、夜十一時に。

俺の身体が、睡魔に屈そうとしていた。

「……………」

そういえば美咲の声が聞こえない、と思つて目をこすつて美咲を見る。

すると。

「すー……………すー……………」

先に書類を終わらせていた美咲が、気持ちよさそうに寝息を立てていた。

眼鏡を外すのも忘れて。

「このままだったら凄く可愛いんだよな」

普段は荒々しく負けず嫌いな彼女も、寝ている時だけは凄く可愛く見える。

初対面の時も思ったけど、黙つていれば美人なんだよな…………。

「ふぁー……………そろそろ帰るか」

俺も帰ろうと部屋を出ようとする。

だが疲れて身体がふらつき、

「えっ……………」

俺は美咲にのしかかる形で倒れてしまった。

「……………いてて。あ」

ヤバいと気付き、上体を起こす。

自分がのしかかった証拠だけでも消そうと逃げようとするが、その前に美咲が目を開く。

「……………何事ですの……………」

「オ……ワタ」

バツチリ見られた。

そして当然、こう言われた。

「どういうつもりですか?」

やべえ、殺される。

どう言い訳すれば良いんだコレ。

「おはようございます」

※※※

殴られた。

当然だ。

「いてえなおい……」

「まったく、別にここで寝ても良かったんですが、人に襲い掛かるのは感心しませんわね」

美咲が腕を組みながら言う。

「いや寝ても良かったのかよ」

なら早く言つてよ。

……あ?? いやいや色々まずいだろ。

「取り敢えず終わってますのね」

「おう」

「どうしますの? 寝ていきますの? それとも、また性欲をぶつける気ですか?」

「だから痴情のもつれじゃねえよ」

間違つてもこいつに手は出さねえ。

「取り敢えず枕だけ貸しますから、寝ていきなさいな」

「いや別に家帰るけど……」

「構いませんが、明日私に付き合ってもらおう都合上早く起きてもらいますわよ」

「え、明日休日なのにまだなんかやるの?」

「私とお買い物ですわ」

「買い物……? 何で急に?」

「最近修行や生徒会の仕事で忙しかったですし、気分転換に行こうと

思ったのですわ」

「へえ……でもそれなら俺いると邪魔な気が……」

「あら、私と出掛けるのが不満ですか？」

美咲が半目でこちらを見る。

やらかした後だから断り辛い。

「わ、分かったよ。取り敢えずもう寝よう。眠いし」

「それで良いんですよ。私も寝ますわ」

眼鏡を外す美咲。

そのままベッドに上がり、横になる。

「くかー……くかー……」

「の○太？」

「見た目で判断しないで欲しいですよ」

起きてたのかよ。

第五十七話

朝。

出かける前に、俺はリビングで美咲と朝食を頂いていた。

「人ん家で飯食わしてもらうのなんて久しぶりだな」

美咲の母親と父親も対面で食べている。

自分の家族ではないが、こういう家族みんなで食べる的なシチュエーションも久しぶりだ。

まあ……もう自分の家族で同じ事は出来ないが。

「美味しい？ 裕太くん」

「はい、とても」

美咲の母親に感想を告げる。

そういえば美咲の母親を見るのも初めてだ。

美咲に似て美人だし、大人の魅力がある。

もし手を出すならこつちだな。

「今邪な事考えました？」

「そんな事考えてねえし」

バレたか。

「そういえば二人とも、昨日は激しかったな」

美咲の父親が笑みを浮かべながら俺達に言う。

「もしかしてこれか？」

指で輪っかを作ってそこに指を入れる父親に、俺と美咲は味噌汁を吹き出す。

「違いますー！」「違いますわー！」

「またまた、隠さなくても良いんだぞハハハ……」

てかこの親何で成人男性に未成年襲わせようとしてんだ……。

「俺達も若いころは」

※※※

一時間後。

俺達は外に出ていた。

「んで、買い物ってどこ行くんだよ」

「普通にショッピングモールですの」

俺は未だにスーツ姿だが、美咲は一応着替えていた。
髪型こそ同じだが、中々お洒落な服を着ている。

何度でも言うが、こいつは言動行動が残念なだけで美人なんだと思
わされる。

「どうしましたのそんなにジロジロ見て」

「な、何でもないよ」

「言っておきますが、私は犯される気はありませんのよ」

「だから襲わねえって言ってんだろ！」

※※※

取り敢えずショッピングモールへ。

「取り敢えずまずは、新しいライダーグッズを見に行きますわよ」

「え!？」

いきなりだな。

まずここは服とかじゃないの……？

「ほらほら行きますわよ」

「はあ……」

俺ライダー分かんねえんだけどなあ。

「あ、これですわ」

どうやら今年の新しいライダーの変身ベルトらしい。

スタンプのようなものを押して、変身するとかなんとか。

「映画での先行登場がカッコよかったですわ。セイバーも良いです
が、こちらも中々……」

「そ、そうか」

ライダーの世界は俺には中々難しい。

「あ、眼鏡のお姉ちゃん！ 男連れてる！」

子供の一人で美咲を指さして言う。

「あらどうしましたの?」

「ねえねえ、リバイスの変身やってよ！」

「良いですわ。映画とテレビでラーニング済みですよ！」

美咲はベルト無しのエアで変身のポーズを行う。

「変身ですわー！」

別ライダーの変身でもすわ付けるのか。

「すごいすごいー！」

子供がぱちぱちと手を叩く。

「私にかかればこんなもんですわ」

「でも毎回思うけど、ですわは変だよ」

「……」

俺が言いたかった事を言いやがったな……。

第五十八話

まだ落ち込んでいる様子の美咲。

「……」

「いや、あれは俺も変だと思っぞ」

「つい出てしまうんですの」

「てかお前ん家って別にお嬢様とかそういうの無さそうなのに、喋り方そうなの？」

前から気になってたけど。

「私はいずれ頂点に立つ者ですわ。高貴な振る舞いや言葉遣いを身に付けていて当然ですわ」

高貴ってのはとてもお前に似合わない言葉だな。

「聞こえてますわよ」

「あれ俺口に出してた？」

心読まれたか。

「次はどうするんだ？」

「ゲーセンにでも行きますわ」

次はまさかのゲーセンか。

「浅井家にプロゲーマーがいますから、その人に勝つ為に修行してますのよ」

「また浅井家か」

「今はライダーとして強くなる修行も大事ですが、浅井家に勝つ事は私のライフワークですよ」

「ライフワークねえ」

考えてみれば俺にはないなあ。

「貴方のライフワークは私のお供でいる事ですよね？」

「だから何でそうなる！」

それだけは嫌だと何度言ったら。

「まずはウォーミングアップにガンバライジングでもやりますわ」

「聞けよ俺の話！」

そのままゲーセンに入っていく。

※※※

数分後。

「負けましたわ……」

「お前スロット弱くね？」

二回くらいしていたが、見てた感じスロットで外れ引いてる感が凄すぎた。

「これでは早い攻撃で隙が出てしまいますわね。もっと訓練しなくては」

「得意の遊びながら修行か？」

「そんな所ですわ。相手がどんなチートを使おうとも、それを見抜ければ勝機はあります。そして答えは意外な所にありますのよ」

「なるほどな。んで……次は太鼓ゲー？」

「あの人の得意分野の一つですわ。貴方もやります？」

「俺も？　じゃあまあ良いけど」

正直言つて俺の実力は下手の横好きレベルだ。

普通すらフルコン取れないし。

人に自慢出きるようなものではない。

「そろそろ曲始まるぞ」

「待ちなさいな」

何故か美咲が服のポケットから音叉を取り出す。

どうやら玩具のようだが。

「何してんの？」

「勝つ為のおまじないみたいなのですわ」

太鼓が置かれた台に、音叉の先をちよんと付けてから、自分のおでこに先を向ける。

そして目を閉じた。

「……」

眼を開け、音叉を持っていた手を軽く払う。

「はあッ！」

「それがおまじないか？　美咲」

「違いますわ」

「え？」

「今の私は美咲じゃないですわ。美咲鬼（みさき）さんとお呼びなさいな。明日夢」

「誰だよ」

なんかのスイッチが入ったみたいだな。

「私、鍛えてますから……負けませんわよ」

独特なポーズをとって、太鼓バチを握る。

第五十九話

「どうしてですのおお！」

「勝った……」

俺と美咲……いや美咲鬼さんは、お互い難易度鬼でプレイした。のだが、スコアは三戦とも俺の勝利で終わってしまった。

「もう一度……もう一度勝負ですわ！」

「まだやるのか？」

もう既に腕が痛い。

「当たり前ですわ。私は勝つまで戦うんですの。負けたままで放置するのは私の流儀に反しますわ！」

「わ、分かったよ」

美咲鬼さんの気合に負けて、俺はもう一度コインを入れる。

再び三曲終了後。

「今回は私の勝ちですわね」

「嘘だろ……」

今度は俺のスコアを大きく超えてしまった。

さっきのようなミスも殆どなく、隙のない立ち回りで俺に三連勝。

俺の腕の痛みを考慮しても、この成長は意外だ。

「私はやればやる程に伸びますわ」

「そうみたいだね」

ただしスロットには適用されない模様。

「次は別ので勝負しますわよ！」

「えー！ もう既に腕が……」

「良いから行きますわよ！」

「話を聞いてくれ！」

※※※

他のゲームで何戦かしたが、最終的に美咲が勝つ展開が続き。

昼飯を食べ、他にもいくつか店を回って……帰路へ。

「てか買ったものにあんまり女の子らしいもの見当たらないな」

「大きなお世話ですよ」

新ライダーの変身ベルトに、ソフビ、あと火薬の原料の一部っぽいものを購入。

これ警察に言っても良いんだらうけど、多分そんな事をしようとしたら間違いなくしばかれる。

「私は化粧もおしゃれも興味ありませんわ。ちゃんとすっぴんで勝負しますの」

「そ、そうか」

まあこいつの顔面ならそもそも化粧なんて要らないか。

「さ、家に帰ったら今度は走り込みますわよ」

「今日暑いけどやるのか?」

てか俺もやるのか?

「当たり前ですよ。ある人が言っていましたわ。男も女も、度胸と愛嬌の両方を兼ね備えた者が人生を制すって」

「確かに凄いけど、誰が言ってたの? それ」

「それは秘密ですよ。でも私の大切な人ですわ」

「へえ……」

彼氏とかだったら驚くけどな。

「……! 美咲、危ない!」

「えっ……うわあっ!」

人気のない所で、俺と美咲は何者かに襲撃された。

美咲は咄嗟に拳を受け止めるが吹き飛ばされ、何とか体勢を立て直す。

隣に立っていた俺が、美咲に拳を振るった者の正体を捉えた。

「お前は……」

あの黒フードが変身していたサック怪人。

「貴方、あの時の黒フードさんですわね?」

「……殺す」

サック怪人は静かに呟いてから、美咲に拳を振るう。

「あくまで答える気はありませんのね」

今度は何とか拳を受け止め、美咲は蹴りで押し出す。

『BOMBER DRIVE READY?』

「変身ですわ!」

『COMPLETE』

空から降る爆弾を、美咲は握り潰す。

そこから現れたのは、爆弾の形の顔をした仮面ライダー……ボマー。

「戦う前に言いますわ。今の私はかーなり強いですわ!」

第六十話

「貴方の実力は覚えてますわ。だから最初から飛ばしていきますわよ」

『SCAN DRIVE』

端末を使い、そのカードを読み取る。

『COMPLETE HYDRO DRIVE READY?』

両腕を腰の高さまで広げ、全身に力を込めて叫ぶ。

「超変身ですわ!」

ボマーがハイドロフォームへと変わる。

「……」

サック怪人も拳を構えなおしてから、ボマー目掛けて勢いよく駆け出す。

姿が見えなくなる程の加速。

『HYDRO ACCELERATOR DRIVE』

ハイドロボマーも、サック怪人と同じく超加速。

二人が互いに攻撃を放った所で、現れては消え、現れては消え、を繰り返す。

再び二人が止まって構えなおした所で、サック怪人が息を切らした。

「もう息切れですか? なら終わらせませすわ!」

『FINAL DRIVE!』

ボマーのバットに、ボムビットが集まる。

「ハイドロインパクト!」

ライダーインパクトの強化版、ハイドロインパクト。

水色のボムビットを、サック怪人の腹に向かって叩きつける。

「はあッ!」

「ぐおっ!」

自身すら巻き込みかねない大爆発の中から、サック怪人だけが吹き飛ばされる。

サック怪人の変身が解け、人間の黒フードへ。
ボマーは……。

「こっちはすわ」

自身の能力で復活した後、変身解除。

「さあ、黒フードさん……正体を現しなさいな」

ゆっくりと歩いて近づく美咲。

しかし。

「美咲気をつけろ！」

「え？」

俺が叫んだ後、黒フードが再変身して立ち上がる。

美咲も変身しようと端末を取り出すが、妨害されてしまう。

「排除する……！」

そして首を掴んで地面へと叩きつけ、絞める。

「くっ……かはっ……」

「美咲！……ッ！」

痛みと共に、俺の頭にイメージが浮かぶ。

俺が河原で、美咲の首を絞めつけようとしていた光景。

紛れもなく、蘇我高校との決戦前の特訓時のものだ。

あの時俺は意識が途切れて知らなかった……だが。

「今はこんな事考えてる場合じゃ……！」

頭を振って、自分が背負っていたバッグを開く。

俺は美咲達に内緒にしていたそれを取り出した。

「……」

サック怪人が、美咲の首を絞めながら俺を見る。

俺は取り出したもの……赤紫の刀身に黒い柄の刀の形をした端末

が取り付けられたベルトを装着して言う。

「お前に……美咲は殺させないぜ」

「裕太さん……それは……」

端末を取り出して操作し、眼を閉じた。

『ムラマサー！』

息を吸い、腹から声を出す。

「変身！」

『御意……出陣！ ムラマサ……仮面ライダームラマサ！』

上から刀の形をした光が降り注ぎ、腰の辺りで制止する。

柄を掴んで抜刀すると実体化し、そこから身体が変化していく。

俺の姿はそのまま、仮面ライダームラマサへ。

「うおおッ！」

変身するや否や、手にした刀でサック怪人に斬りかかる。

サック怪人は咄嗟に美咲の首から手を離し、拳のサックで防御。

「……」

サック怪人が無言で弾く。

「けほっ……こほっ……裕太さん……」

「あとは俺に任せておけよ。美咲」

俺は刀を構えて、サック怪人を睨む。

第六十一話

「はあッ！」

俺は自分の姿が消える程の速さで、サツク怪人との距離を詰める。見えた辺りで上段斬りを行い、サツク怪人の顔面に傷を負わせた。

「ぐッ！」

「……！」

手が震える。

これが今の自分の力。

今なら、何でも出来る気がする。

「まだ行くぜ！」

もう一度地を蹴って、サツク怪人に何度も斬りかかった。

サツク怪人をかなり押せている。

「くっ……！」

「もう終わりか？　ならこれで終わりにしてやるぜ！」

俺は端末を操作。

『最終撃！』

「ライダースラッシュ！」

俺は全速力で、サツク怪人に斬りかかる。

剣の怪人の必殺技に類似しているが、それよりも速く。

「おりゃあー！」

トドメは全力の薙ぎ払い。

サツク怪人の腹を斬りつけて、大きく吹き飛ばす。

大ダメージを負ったサツク怪人は変身解除しながら転がり、仰向けに倒れる。

「ぐあッ！」

「……！」

俺は一応変身を解かず、そのままトドメを刺そうとする。

だが黒フードが煙幕で目をくらまし、その場から逃走。

「逃げられちゃったか……ったく」

少し様子を見る。

隠れていない事を確認してから、俺は変身を解いた。

「……」

分が悪いかもとさえ思ったが、相手を撤退させる事が出来た。

「美咲、勝ったぞー！」

「やりましたわね……」

美咲が近くの柱にもたれかかりながら、俺にサムズアップする。

※※※

戦いの後、今度こそ美咲の家に向かい。

部屋の中で美咲に話しかけられた。

「あのベルトの事だったんですね。力になれるかもとは」

「そうだよ」

「何故隠してたんですね？」

「だってもしかしたらお前の事だし、一人で戦いそうな気もしたからよ。だったら必要ないなら良いのかなって」

「そういう事でしたのね。というかそれより、それはどこで手に入れたんですね？」

「あー、あの決戦の日に見つけた」

「逃げてる途中で、ですか？」

「そう。俺科学部に隠れたんだけど、その中にこれがあったさ。取り敢えずこれをつかっさらってきた感じだ」

黒フードや怪人がどこに潜んでいるかわからない以上、護身も必要だと思いきり盗んだが、結局会わずじまいで、自分に使えるのか判明しないままあの日は終わってしまった。

「何にせよ、これで戦力が増えましたわね」

「ああ」

この力があれば、俺もやっと美咲の役に立てる。

「でも最強の座は渡しませんわよ」

「なーにが最強だよ。思い切り殺されかけただろ」

「う、うるさいですわー！」

爆弾を投げつけられる。

俺に当たらず床に跳ね返り、ギャグ漫画のように美咲だけに激突し

てから爆発。

「……」

「何故当たらないんですの……」

「知らないよ」

あと爆弾使う時にちゃんと自分が生き残れるように当てて欲しい。

第六十二話

黒フードは人気のない路地に隠れてから、董に連絡する。

「……俺だ」

『どうした？ 息が荒いぞ』

「すまない、任務を失敗した」

『そうか』

荒い息を吐く黒フード。

『君ならあの二人を倒せると思ったんだけど、少し期待外れだったね』

「……すまない」

静かに黒フードはこう返す。

『君は僕に尽くす為に生まれた。僕の命令すらまともにこなせないよ
うなら、君に存在価値がない事は分かってるよね？』

「……」

黒フードは唾を飲み込む。

『でも安心したまえ。僕も君をすぐ殺したりはしないさ。君は僕の大事な作品だ。期待に応えてくれるなら、僕も君を見捨てたりしない』
「ああ」

黒フードは少し落ち込んだ声で返事する。

『流石に一人で二人を相手させるのは荷が重かっただろうし、あの二人と合流したまえ』

「明人や蒲生とか？」

『ああ。それなら君でも、二人を倒せる筈だ』

※※※

命令通り蘇我高校へ向かう。

怪人達が守護する廊下を歩き、二人がいる場所までたどり着く。

「ここか」

校長室の扉を開ける。

「また誰か来たんすか？」

「よう兄貴、来たのか」

不満そうな蒲生と、歓迎する明人。

黒フードは目深にフードを被り続けたまま、黙って入室。

「そのフード取れないんすか？ 礼儀とかないんすか？」

黒フードの態度にイラついている蒲生が、黒フードに指摘する。

「……お前にそれを命令する権限などない筈だ」

「ムカつくつすね。その態度」

「……」

黒フードは蒲生に背を向ける。

背を向けたまま言う。

「お前達二人の力を借りに来た。董からの命令だ」

「……はあ？」

「ここの生徒達では、もうライダー達に太刀打ち出来ん。六角美咲や

福沢裕太と戦ったが、二人とも俺を倒した」

「福沢裕太？ 何のことだよ兄貴」

「あいつも仮面ライダーに変身した。それも一切の強化なしで、俺を

圧倒した」

黒フードはまだ傷になっている部分を押さえる。

それを見た明人が言う。

「兄貴が弱いだけで、福沢裕太の方が強いだけなんじゃない？」

「……」

弟の言葉に、黒フードは少し目を細める。

「俺さ、お袋から聞いたんだけど……兄貴って出来損ないなんだろう？」

「それは……」

「人工突然変異体として作られたけど、完璧に力も使いこなせない半

端者。それが兄貴の正体だって聞いた」

自然に生まれてくる突然変異体は、基本的に自分の能力に自覚がな

くとも、制限なしで力を使用する事が出来る。

黒フードはそんな突然変異体を人工的に生み出す研究で作られた

一号機。

突然変異体のDNAを元に生み出されたが、結果的に失敗作として

生み出されてしまった。

結果、力を自分の意思で使用出来ない。

「しかもその上福沢裕太なんかに負けるなんてさ。兄貴、こいつはともかく、俺はアンタと組みたくねえよ」

「俺も別にお前と組みたいわけじゃない。董に頼まれて仕方なくだ」

黒フードが鋭い目で、明人を睨みつける。

「そこまで言うなら頼まん。俺は一人でも戦う」

外へ向かおうとする黒フード。

「へえ、出来んの?」

「……」

明人の挑発を無視し、黒フードは校長室をあとにする。

※※※

出てすぐに黒フードはサックドライバーを装着する。

『SMASH DRIVE READY?』

「変身」

サック怪人へと変わる黒フード。

その時。

「……ッ!」

一つの光景が見えた。

体育館のような場所で、誰かと二人で外の廊下を歩く二人の女性を見ている。

片方は狩野遙、もう片方は戸間董。

「俺は董さんがいれば頑張れる。そんな気がするんだ」

近くに立つ男が放ったその声と共に、光景はそこで消える。

「これは……」

誰かの記憶だろうか。

しかし……誰のものなのか分からない。

自分の記憶でない事は確かだ。

「今は気にしている場合ではない」

今は董の為に、戦って勝つ事だけをイメージするべきだ。

自分にそう言い聞かせ、サック怪人は歩き出す。

第六十三話

美咲宅。

既に裕太は帰宅し、美咲は夕食を食べてから休もうとしていた。

「うわあッ！」

「な、なんだこいつは！」

一階から両親の声。

「また誰か来ましたの？」

少し不満げに呟いてから、美咲はボマードライバーを装着。

『BOMER DRIVE READY?』

端末を閉じてから、顔の左側で構える。

「変身ですわ！」

『COMPLETE』

窓から外へ着地。

門の前で待つサック怪人に、ボマーは言う。

「また私とやりに来たんですの？ さっきは油断しましたけれど、もうやられたりしませんわよ」

バットの先を向ける。

「対象を確認……任務を遂行する」

サック怪人は拳を構えた。

※※※

ボマーが地を蹴って、サック怪人へと攻撃を叩き込む。

「はあッ！」

サック怪人はすんでの所で回避。

『SMASH WAVE DRIVE』

端末を操作し、拳から光を放つ。

ボマー目掛けてまっすぐに飛んでいく。

「ていッ！」

ボマーは掌で受け止めて握り潰す。

「この程度ですの？」

「……ッ！」

ハイドロフォームでないならあるいは、そう思っていたが、ボマーの実力はサック怪人を上回っていた。

やはりあの時、ムラマサに目をくれず殺すべきだったかも知れない。

「……ッ！」

少し後悔するが、ボマーが一人でいる今しか倒せるチャンスはない。

サック怪人は拳を握り、地を蹴った。

「ここでお前を殺してやる……」

拳をボマーに向かって振るい、当てようとする。

しかし。

「……ッ！」

痛みと共に、頭の中にイメージが浮かぶ。

これは記憶……だろうか。

どこかで眠っていた凄い量の情報が、起き上がったかのようにサック怪人の脳を支配する。

どの記憶にも、何故か美咲の顔がある。

「馬鹿な、こんな事があり得るわけが……」

もう『あいつ』は自分の中にいない筈。

なのに、拳が動かない。

「動け……動けよ」

董の為に戦う。

それが黒フードの生まれた意味。

なのに今の黒フードはもういない筈の奴の記憶に、動きを止められている。

「どうしましたの？ 私は受け止める気でいますのよ？」

まるで友達を手に掛けようとしているかのように、拳が動かない。

こいつは知らない。死のうが構わない。

そう言い聞かせているのに、サック怪人の拳は止まらなかったまま。

「くそ……ッ！」

そう呟いて、黒フードは変身を解く。

「黒フードさん……？」

ボマーが近付こうとする。

それに黒フードは見切りをつけてから、煙幕弾を投げて撤退する。

「やはり今のままでは……！」

折角のチャンスだが、それを逃すしか方法はなかった。

第六十四話

あれから数時間、人気のない場所で朝まで眠り。

『君か。僕の命令は予定通り』

「教えてくれ」

黒フードは起きてすぐに、董に問いかけた。

『どうした？ そんなに動揺した声をして……君らしくもない』

「聞きたい事は沢山ある。何故俺の身体の中に、いない筈の福沢裕太の記憶がある？ 何故俺の頭に、知らない誰かの記憶が見える？ 答えろ……答えてくれ！ このままでは董の期待に応えられない！」

『そうか……やはりそうみたいだね』

何かを察したように笑う董。

「何がおかしいんだ……」

『君がそれを聞いてどうするんだい？ 君は僕の子供とは言ったが、同時に君は僕の発明品ではない。道具である君がそれを知って、どうするつもりなんだい？』

「しかし」

『僕に逆らうのかい？ それは君の存在意義に反する行いだと思うけど？』

「……」

『言っただろう？ 利用価値がある以上、子供である君を簡単に殺したりはしないと』

「俺は……」

『死ぬのは怖いだろう？ それなら結果を残したまえ』

黒フードは、生まれた時から董に尽くさなければと考えて生きてきた。

プログラムされた結果そういう思考回路になったと言われてからも、彼が董に対し抱く気持ちは変わらない。

だから……黒フードは恐れている。

自分のミスで、彼女に捨てられて死ぬ事を。

『それに君には感謝しているんだ。僕の為に生まれる事を選んだ君に』

「え……？」

——生まれる事を……選んだ？

『もうこのくらいでいいかな？ では、今度こそしくじらずに任務をこなしたまえよ』

「……」

通信はそこで途切れる。

「……」

今の黒フードには、どうしたらいいか分からない。

このまま美咲に立ち向かった所で、自分の中に未だ残る福沢裕太としての自分が、拳を止めてしまうだろう。

「こんな所にいましたのね」

私服姿の六角美咲が、黒フードの前に現れる。

まだ朝早いというのに。

「わざわざ殺されに来たのか？」

「私は今でも、貴方と戦う準備は出来てますわ」

ボマードライバーを取り出す美咲。

「悪いが、今の俺はそのような気分ではない。放っておいてくれ」

そこで唐突に、お腹の音が鳴る。

そういえば、昨日から何も食べていない。

「腹減ってますの？」

「気にするな」

「気にしますわ。貴方は私がいつか倒す相手。その時に、悩んだままの貴方を倒したくはありませんわ」

「……」

「とにかく、何かしら食べに行きますわよ」

美咲は黒フードの手を握って、無理矢理引っ張っていく。

「お、おい……」

敵である自分に殺されるかも知れない。

そんな事すら考えず、美咲は走っていく。

でも何故だろう。

黒フードも不思議と、嫌な感じはしなかった。

※※※

美咲が連れて行ったのは、行きつけのカフェ。

取り敢えずモーニングセットを二つ注文し、黒フードと共に食事していた。

「美味しいのですの?」

「……ああ」

長い間何も食べてなかったのだろう。

黒フードはかなりの勢いで、サンドイッチを平らげている。

フードは被ったまままで表情は見えないが。

「フード……取りませんか?」

「俺の顔を見たら、恐らくお前は驚く。それでも良いのか?」

「私元カレに超イケメンがいますのよ。今更驚いたりなんて」

黒フードは辺りを見回してから、フードを外す。

驚かない……そう言ったが。

そこにある顔は、それを出来なくするものだった。

「……え?」

「これが……俺の素顔だ」

黒フードの顔は、福沢裕太と同じものだった。

第六十五話

俺は朝起きてすぐに、病院に向かった。

昨日の晩、成音から連絡を貰ったからだ。

どうやら……狩野遙が昏睡状態から目覚めたらしい。

「まだ来ないか」

美咲にも連絡したが、まだ返信がない。

成音とヴィーダ、そして優香が集合してから、俺達は遙の病室に全員で入室した。

「失礼します」

「全員揃って来たのか……六角美咲は？」

「実は連絡がつかなくて。取り敢えず、話す事は何とか出来そうですね」

俺達は近くの椅子に座る。

「ママ、オキテル……！」

「良かったね、ヴィーダ」

嬉しそうにしているヴィーダに、成音が微笑む。

遙はバツが悪そうに顔を逸らす。

「感動の再会って感じ……ではない系かな」

優香も二人の様子を見て判断する。

「聞きたい事がいくつかあります。何故、蘇我高校の生徒に○×女子高を支配させようとしたんですか？」

遙は目を閉じてから言う。

「私が蘇我高校の生徒を使って、他校を支配しようとした理由……それはある突然変異体を探す為だ」

「突然変異体を？」

「ああ。私はその突然変異体に、自分の幼馴染を殺された」

※※※

一方、美咲は裕太顔の黒フードから話を聞いていた。

「俺はある人に、狩野遙の幼馴染の殺害を指示された。そして……俺は命令通りこの手にかけた」

「……」

罪悪感に満ちた表情をしている彼に、美咲は掛けるべき言葉を探すが見つからない。

※※※

「死体を見た時、彼の身体にはどう見ても突然変異体が能力を使用したものとみられる痕跡が見つかった。死亡したのは私の地元である滋賀、そして風の噂で聞いた『滋賀にいる超人的戦闘能力を持つ少女』という情報を頼りに、滋賀にある高校を調べるつもりだった」

「その少女が美咲だと思ったんですね？」

「いや、少し違う。まずそもそもの能力が違うしな。それでも邪魔する以上無視しておけないのは事実だったが、その噂の少女でない事に気付いたのは、あの黒フードに襲われてからだな」

※※※

「狩野遥が復讐の道を選んだのなら、それは俺の責任だ。責められて当然だし、お前の敵になるのも必然だ」

「貴方……」

「この顔も、福沢裕太と入れ替わり、狩野遥やそれに協力する者を殺す為に得たものだ。だから、俺はその為にしか存在出来ない」

黒フードは俯く。

昨日の昼まで、処刑人のような雰囲気を漂わせて戦っていたのに。

今は何かに怯えているようだった。

「その生き方に、貴方は満足してますの？」

「満足……どうだろうな。分からない。俺は自分の意思で今まで戦い続けてきた。だがこれも作られた感情なのだとしたら、それは自分の意思と言えないのかも知れない」

「……」

「だから満足したとしても、それが俺の本当の意思かなんて分かるわけがない」

「要するに、満足はしてませんかよね？」

「え？」

「自分の生き方に満足しているなら、そんな迷いのある顔で答えませ

んわ」

「だが俺は……」

「戦いから逃げているわけじゃありませんの。ですが、私も今の貴方とは戦えない。迷いのある貴方を倒しても、それは私が貴方に勝った事になりませんわ」

「……」

「貴方はどうしたいんですの?」

「俺は……」

「答えなど出させるわけがないだろう?」

不意に聞こえた男の声、そして飛んでくるボムビット。

「危ないですわ!」

美咲は黒フードを突き飛ばしてから、ボムビットを受ける。

周りの客がそれに気づき、悲鳴を上げて逃げ出す。

「……」

爆死した美咲はその場で蘇生。

無傷の美咲が、声の主に目を向けた。

「何者ですの?」

「さあな……。どこかで会った事あるような気もするが」

「あれは……」

声の主は……美咲も驚きを隠せなかった。

ボムビットが飛んできた時点で察するべきだったが、そこにいたのは。

所々配色が変わった、黒い仮面ライダーボマーだった。

第六十六話

「兄貴よお……何で殺すべき相手と仲良く飯なんて食ってんだ？」

「それは……」

「私が無理矢理連れて来た」

「お嬢ちゃんには聞いてねえ。俺は兄貴と話をしてんだよ」

黒いボマーに軽くあしらわれる美咲。

「兄貴、俺達はお袋の命令通り動けばいい。兄貴の意思なんて、お袋にとっちゃどうでも良いもんなんだ」

「……」

「俺達はお袋に作られたんだよ。だからそれ以上になる事は出来ない」

「……ッ」

「お袋の意思だけあれば良いんだ。ましてや人を殺したアンタに、自分の意思で生きる事が許されているとでも？」

黒フードは黙って俯く。

「まあでも……そんな兄貴の苦しみもそろそろ終わりだ。俺が完成すれば、蒲生も明人の中のあいつも、アンタも廃棄だ」

「俺が……廃棄」

黒フードは手を震わせている。

美咲は拳を握って、黒いボマーに言う。

「蒲生さんに明人さんの中の奴？ 貴方達、二人に何をしたんですの!？」

美咲の怒りに対し、黒いボマーが笑う。

両腕を広げて、挑発するように。

「俺が教えずともすぐ分かる事だし、それに俺が完成すれば二人とも消されるんだ。無駄な事を俺にさせるなよ」

「貴方の態度ムカつきますわね。ちよつとボコボコにさせてくださいなー」

「やめろ美咲、お前の敵う相手じゃない」

「私がやると言ったらやりますの。勝てるか勝てないかじゃありません

んわ。私の仲間とライバルに手を出した罪は重いですわ」

ボマードライバーを装着し、端末を取り出す。

「アンタも来いよ兄貴。どうせボマー一人じゃ俺に勝てない」
「……」

黒フードもドライバーを装着。

「変身（ですわ）！」

『COMPLETE』

美咲は仮面ライダーボマーへ、黒フードはサック怪人へと変身する。

「表に出なさいな」

「そうしよう」

※※※

ボマー達は外へ。

「はあ、兄貴を脅すのが目的だったのに……まさか兄貴と戦う羽目になるとはなあ」

サック怪人に指さす黒いボマー。

「貴方が戦う必要はありませんの。こいつは私の仲間とライバルを侮辱した……それだけで私が戦う理由は十分ですわ」

「言うねえ……なら望み通り一対一にしてやるよ」

黒いボマーがその場から消え、ボマーの背後へ。

「ぐあッ！」

サック怪人の腹に向かって拳を叩き込み、変身を解除させた。

「なんですって……」

「見えなかっただろ？　これが俺の実力さ」

「けほっ……」

「アンタも思い知っただろ？　未完成の時点で、俺はアンタより上。つまりもうアンタは必要ないのさ」

黒いボマーが黒フードを蹴り飛ばす。

「この……ッ！」

ボマーはボムビットを飛ばす。

「へえ、ボムビットか。俺もそれ出来るって事忘れてない？」

ボマーのボムビットよりも多い、十二本のボムビットがボマーのものを相殺。

そして残りがボマーを襲う。

「きやあッー」

ボマーは死亡し、美咲として復元。

「羨ましいねえ。俺にもその能力があれば、もっと派手にやるんだけどな……」

「な、なんて強きですの……」

「さてさて、もう少し遊びたい所だが……これ以上は命令違反になっちゃまう。悪いが帰らせてもらおう」

「ま、待ちなさいの……」

「兄貴。せいぜい残り少ない人生を楽しむんだな」

ボムビットを美咲達の方にばら撒き、爆風に紛れて黒いボマーは消えていく。

「……」

美咲は黒いボマーが去っていった爆風の奥を見据えていた。

第六十七話

病室。

まだ遙の話は続いている。

「私の幼馴染を殺した犯人が、あの黒フードに依頼した者か、あの黒フード自身なのは間違いないだろう。だが幼馴染を殺すだけに飽き足らず、私や私の発明品まで破壊しようとするとはな……」

「犯人の正体に、心当たりはありますか？」

「今の所はない。そもそも突然変異体自体、かなり希少なんだ。滋賀で多く発見されているとは言え、そう簡単に見つかるわけがない」「そうですか……」

やはりあの黒フードから直接聞くしかないのだろう。

「犯人が分からないなら、まずはあの怪人達だけでも何とかするしかないわね」

「そうだな」

「遙先生、蘇我高校の生徒達を元に戻す方法はありますか？」

「勿論ある。黒フード達が先手を打っていない事が前提ではあるが、科学部の部室には元に戻す為のワクチンが用意してある筈だ」

「ワクチンですか？」

「ああ。あの怪人化はスイッチだけのものではなく、私が決戦前に学校中に撒いたガスが影響している」

「ガス……」

遙が言う。

「そもそもお前達に、怪人化の仕組みを説明していなかったな。私が作ってきたベルトには、学校中に撒いたガスと同じ成分が入っている。突然変異体の因子が含まれたガスがな。そのガスを体内に取り込む事で、人の姿を怪人に変えつつ、突然変異体と同等の身体能力を得る。ボマードライバーやグングニルドライバーは因子の活性化が目的で、少し特殊だがな」

「なるほど……いやあのすみません」

「なんだ？」

「ガス自体に突然変異体の因子が含まれているのは分かったんですが、ガスが無くても突然変異体と同等の身体能力は得られるんですか？」

「そうだな。その通りだ。本来あのベルトを作るのに、怪人化するガスなど不要だ」

「じゃあ何で怪人化するガスなんてものを……？」

遥は目を閉じる。

「人に言うのは少し恥ずかしいが……自分が戦っている理由を忘れな
い為だ。私の幼馴染がライダーや怪人という類のものが好きでな。
怪人達を見る事で、自分が戦う理由を忘れないようにしていた」

「そうですか……」

「六角美咲はあの姿になってすぐに、仮面ライダーを名乗ったそうだな」

「はい」

「私の幼馴染が生きていたら、良き友になっていただろうに」

泣きそうなのを堪えながら言う。

「話が逸れてしまったな。科学部の部室に保管されたワクチンには、
ガスを中和する効果がある。そのガスを生徒に向かって放射すれば、
怪人化した生徒達を元に戻せる筈だ」

「ヴィーダ、ヤル！」

話を聞いていたヴィーダが立ち上がり、遥にそう告げた。

「……」

しかし遥は返事せず、ヴィーダにはバツが悪そうに目を逸らし
ている。

「ママ……」

「……遥さん」

「……」

「どうしてヴィーダの目を見て、話してあげないんですか？」

「……！」

「ヴィーダは遥さんの事を嫌っていない。むしろ、もう傷つきたくな

いと思っっているんですよ」

「今の私に……ヴィーダの目を見て話してあげる資格はない」

「遥さん……!」

その時だ。

「グギャアアツ!」

病室内に、怪人が侵入する。

「皆、来たぞ!」

第六十八話

数は四体。

全てアーミーだ。

「対象……狩野はルかとその製作物を発けん。速やかニ排除すル」
アーミーの一体が武器を構えながらそう告げる。

「まずいな、思っていたよりガスが効いていたようだな」

冷静に言う遥。

「ベルトを使って変身するなら、ベルトが仮の脳になる事によって守られる。しかもこの操られ様は……ガスドライバーまで持っていたか
れたか」

「トニカクトメル！」

ヴィーダがグングニルドライバーを装着して、アーミー達の前へ。

『GUNGNIR ON』

俺もムラマサドライバーを着けて、ヴィーダの隣に。

湧きあがる力を感じてから笑みを浮かべ、敵に向かって告げる。

「雑魚が何人来ようと、俺には勝てねえぜ」

「裕太……？」

「行くぜヴィーダ」

俺は端末を取り出して、ボタンを押す。

『ムラマサ！』

ヴィーダが槍型のガジェット、俺は閉じた端末をそれぞれ構えてから叫ぶ。

「ヘンシンー！」「変身！」

それぞれ取り付ける。

『CHANGE』『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

ヴィーダが仮面ライダーグングニル、俺が仮面ライダームラマサへと変身し、武器を構える。

「まさか、そんな筈は……」

「行くぜ！」

仮面の下で歯を剥き出しながら、俺は素早くアーミーとの距離を詰めて一体斬りつける。

「ハアッ！」

グングニルも同じく、姿を消しながらアーミーを一体なぎ倒す。

勢いに乗ってもう一体も倒し、

「セヤッ！」

「グギヤアッ！」

あと一体。

「これで終わりだぜ」

端末を取り出して、ボタンを押す。

『最終撃！』

「ライダースラッシュ！」

俺は素早く最後の怪人との距離を詰め、何度もアーミーを斬りつけた。

アーミーはそのまま気絶し、倒れる。

「ふう……」

俺は息を吐いてから、変身を解く。

その様子を見ていた成音が、訝しげに問いかける。

「ねえ、裕太……」

「怪我でもしたか？ 成音」

「違うわ……その、戦ってる時……性格違く無かった？」

「え？」

俺は首を傾げる。

俺自身、特に違和感のようなものは感じなかったが……。

「そんな事ないと思うぞ」

「そ、そう？」

「とにかく、もう相手側にバレちゃったみたいだし……早く止めに行こうぜ」

「え、ええ」

成音がグングニルに目を向けて問う。

「ヴィーダ、ここの見張りを頼んでも大丈夫？」

「ヴィーダ、ミハリ？」

「うん。怪人達はあたしと裕太で元に戻すから、ヴィーダは遥さんを守って」

「ウン！ ヴィーダ、マママモル！」

グングニルが元気よく頭を縦に振る。

「じゃあ、早く行こう」

「分かったわ」

俺と成音はベルトを手にしながら、病室の外へと飛び出していく。

第六十九話

あれから数分。

遙は二人が病室から出てから、少しばかり考えていた。

「……」

「どうした系?」

それを見ていた優香が問いかけてくる。

「いや、きつきの戦闘での裕太の姿に少し疑問があつてな……」

ライダー用、怪人用のベルト問わず、両方に備わっている特徴がある。

それは怪人化ガスの副作用で脳が上手く作動しなくなる代わりに、ベルトが脳の肩代わりをするという機能だ。

これのおかげで、怪人化した状態でも思考をコントロールする事が出来る。

だがこの機能を使った時、一つの疑問が生まれてしまう。

「……」

変身者が二重人格の場合、どのような事が起こるかである。

勿論遙はそれを想定して作っている筈もないので、どうなるかなど分からなかったが、あの性格の変わりようはもう一つ人格があると思えない。

「岸本優香、少し聞いても良いか?」

「何系?」

「福沢裕太は、あんな性格になる時があるのか?」

遙の問いかけに対し、優香が少し思い出しながら答える。

「分からない系かな。でもウチの前ではあんな喋り方今までしてなかった系」

「そうなのか……」

「あ、でも……そもそも裕太っちはちよつと謎が多い系」

「どういう所がだ?」

「急に記憶があいまいになったり、ある時なんて美咲っちに襲い掛かった系」

「……」

遥は話から推測する。

「裕太と一緒にいる時、ヴィーダはどういう反応をしていた？」

「あー、なんかよく分からないけど嫌いとか言ってた系。初対面だったのによく分からない系」

「……」

「どうした系？」

「それが本当なら、少しまずいかも知れんな……」

※※※

同時刻、蘇我高校。

準備を整えた蒲生と明人が、怪人化した生徒達を連れてそれぞれの目的地に向かおうとしていた。

蒲生は総員で病院内を襲撃。

明人は六角美咲を真正面から倒す。

「そろそろお袋の願いが叶うんだな」

「……ちっ」

「おいおい、拗ねるなよ。六角美咲は俺が倒してやるからよ」

「うるさいっす。それが嫌だって言ってるっすよね？」

美咲を取られ、少々へそを曲げている蒲生。

美咲を賭けてじゃんけんで決めたのだが、負けてしまったのだ。

だがまだ諦めていない。

「すぐに狩野遥を始末してそっちに行くっす。私が行くまで倒しちやダメっすよ」

「無理だな。俺はお前より強いからな」

「……お前ホント嫌いつす」

二人が会話をしている途中だったその時。

「そこまでだ」

蒲生達の前から男の声が聞こえる。

福沢裕太と、山内成音。

二人がドライバーを手にした状態で、立ち塞がった。

第七十話

「アンタが福沢裕太つか。黒フードの奴から聞いてたより随分弱そうっすね」

「な、なんだとお!」

最近の高校生は大人をなめ腐り過ぎな奴が多すぎる……。

「で、何しに来たんすか」

「アンタ達に言うわけないじゃないの」

「山内ちゃん、美咲なんかといっても良い事ないっすよ。今からでもこちら側に……」

「副会長。会長を倒したいなら、まずあたしを倒しなさい。あたしは会長に勝つまで、誰にも負ける気はないから」

フレイムシャワードライバーを装着する成音。

「私と戦う気つか?」

『ガストドライバー!』

ガストドライバーを取り付けながら、蒲生はシリンダー型の変身ガジェットを取り出す。

「んじや、俺はお前とだな……福沢裕太」

「その話し方、お前はまさか……」

「? どっかで会った事あるか?」

明人がベルトを装着する。

何かに操られている明人の喋り口調があ那时的黒フードに似ているが、まさかそんな事はない筈だ。

「まあ良い……」

俺も静かにベルトを取り付ける。

脳の中がかき混ぜられるような感覚に少し襲われてから、俺はこう呟く。

「俺がお前を倒すぜ」

「そこなくっちゃな」

全員で変身の構えをとる。

「『変身！』」

『COMPLUTE』『御意……出陣、仮面ライダームラマサ！』『ガ
ストライブ！ クルシーム！』

「しゃあ、行くぜー！」

俺は刀を構えて、明人との距離を詰める。

「はあッ！」

頭を狙って上から斬りかかるが、剣の怪人は軽々と受け止める。

「……！」

「おいおい、その程度か？ 倒すんじゃないかったのか？」

「こ、これでー！」

限界まで加速し、何度も剣を叩き込む。

「単調過ぎてつまんねえな……」

「こいつ……」

「お前にお手本見せてやるよ。明人から盗んだ剣技を」

今度は明人が姿を消し、俺に迫る。

「くッ！」

何発か剣撃を受け止め、ダメージを最小限に抑える。

技を終えた明人が俺の背後に現れ、顔だけ向けながら言う。

「真似するのに苦労したぜ。まさかこの俺様が人間の技を真似にする
のに苦労するなんてな」

俺につけた傷を見る。

「へえ、何度か受け止めたのか。でも、それくらいしてくれなきゃこつ
ちとしても期待外れが過ぎる。もう一度掛かってきな」

※※※

火炎放射器怪人の方も、かなり相手のペースに飲まれていた。

得意の火炎放射をほぼ高压ガスで防がれ、近距離攻撃も難なく防が
れてしまっている。

やがて体力が尽き掛けたが、相手にその様子はない。

「っ、強いわね……」

「この程度っすか？ 私を阻んで、美咲の所に行かせないつもりだつ
たんすよね？」

ガス怪人が火炎放射器怪人を睨む。

「そんな半端な覚悟で、私に挑まないで欲しいです。美咲に勝つ為に、私はこの道を選んだんですから」

苛立ちながら、ガス怪人は放射口を火炎放射器怪人に向ける。

「この道を選んだ……？ 何言ってるのよ。そんなんで会長を、六角美咲を倒せると思ってんの？」

「はあ？」

「あの人は目先の敵だけじゃない。過去のライバルも、未来のライバルも、全て見据えて努力している。そんな人が、ただ一人倒したら満足な人相手に負けるわけないじゃない！」

「説教すか？ 山内ちゃんが私に？」

「ええ、説教よ。アンタと、そして最近まで気付いてなかった私にね」
火炎放射器怪人は笑みを浮かべ、拳を握り直す。

ガス怪人は呆れた顔をする。

「まあ良いですよ。どれだけ周りが持ち上げようが、最後には実力が上な人が勝つです。だから山内ちゃん、悪いけどそこを退くです」

「——その必要はありませんわ」

成音の背後から声が聞こえる。

「か、会長！」

「美咲……」

美咲はキメ顔をしながら、自分に指をさしてポーズする。

「私、参上ですわ！」

第七十一話

火炎放射器怪人が問いかける。

「どうしてここが分かったのよ」

「あの黒フードさんが、ある程度の事を教えてくれたんですわ」

「黒フードが……なんで!？」

「そ、それはあとで説明しますわ。それより、今は二人を助けますわよ」

まるで正義のヒーローかのように現れた美咲に、ガス怪人が近づいていく。

「わざわざ殺されに来てくれるなんて、嬉しいっす」

「殺されに? 違いますわ……私がここにいるのは、ちゃんと私を認めてもらおう為ですよ」

「……まだそんな事言ってるんすか? やっぱりアンタはいつまで経っても成長しないんすね」

「ええ。どれだけ強くなっても、この考え方だけは変える気はありませんわ」

ボマードライバーを装着する。

「力が強いだけで、人に勝てるなんて大間違いですよ」

美咲の顔には少しばかり後悔の色がある。

「私は一度失敗しましたわ。だから貴女にも、成音さんにも辞められました。だからこそ、もう一度やり直しますの。何度失敗しても、私は認めてもらえるまで何度でも抗いますわ!」

「心意気だけは立派っすね。何度聞いてもホントに……。だが無意味っす」

高圧ガスで美咲を吹き飛ばす。

美咲は何とか受け身を取り、地面へと着地する。

「抗った所で無意味っす。もう私がアンタを認める事はないっすよ」

ガス怪人がゆっくり近づき、もう一度放射口を向ける。

「なら、良いですわ。別にそれでも……」

「なんすか?」

美咲は立ち上がる

「なら、逆にやってみせなさい。貴女が私より強い事を、私に認めさせてみせなさい。私は絶対に負けませんわ」

端末を取り出し、ボタンを押す。

『BOMER DRIVE READY?』

顔の左で構える。

「変身ですわ!」

端末を取り付けた。

『COMPLETE』

上から降ってくる爆弾を握り潰し、爆風からボマーとなって現れる。

「やっと会えたつすね、その姿」

「成音さん、ここは私一人でやりますわ」

「そういうと思ってたわ。会長」

火炎放射器怪人はそう告げて、その場を立ち去る。

「さあ、ショータイムですわ」

※※※

成音はその隙に、科学部の部室を探す。

「ギアアアッ!」

「はあッ!」

「グアッ!」

時々邪魔するアーミーを爆炎で吹き飛ばしつつ。

何とか数分を掛け、火炎放射器怪人は科学部の部室を見つけた。

「ここね」

鍵が掛かった扉を吹き飛ばし、一旦変身を解く。

「凄い部屋ね……」

中は理科室的な感じというよりかは、一つの実験施設のようにも見ええた。

培養器に沢山の試験管、電源コードにドライバー。

の割に一人も見張りのない。

恐らく彼ら自身、ここにあるものに価値はないと判断した故なのだろう。

「……」

培養器の近くには、何かの書類らしきものが置かれている。

そこに書かれているのは、ヴィーダの事だった。

『遺伝子改造による、突然変異体作成実験レポート』

「……」

中に書かれた内容は到底知識がない成音には理解出来ない。

が、恐らく人の倫理から外れた研究なのは容易に想像出来る。

でも……これが無かったら成音はヴィーダと出会い、成長出来なかったと思うと複雑な気持ちにはなるが。

「へえ」

成音が興味深く見ていたのは、ヴィーダの脳に備えられた能力だ。

人を脳波で識別可能……らしい。

要するに変装などをして、彼女には一切通用しないのだからか。

「……」

資料に全て目を通し、一応回収する。

他の資料もワクチンを探しながら、目を通す。

突然変異体の因子が含まれたガスに関する資料、そのガスを使った変身ベルトに関する資料、それに関連する様々な実験データ。

「ここら辺、あとで詳しく読んでみるべきだね」

片っ端から回収し続け、数分後。

「あつた……」

ワクチンと、丁度それが挿せる挿入口がついた銃を見つける。

第七十二話

「これで良いのかな」

取り敢えず挿入口にワクチンを差し込む。

効果音が鳴り、銃が光りだす。

その時。

「グギヤアッ！」

丁度良いタイミングで、アーミーがこちらに気付いて襲い掛かる。

「まったく、丁度良過ぎね」

成音は銃口を向ける。

「発射！」

『VACCINE CHARGE……FIRE!』

銃口から青い光が放たれ、アーミーを飲み込む。

「ウウ……ウオオオッ！」

悶えるアーミーを見ながら銃を下ろし、成音は祈る。

「お願い効いて……」

アーミーは成音の願いに呼応するように崩れ落ちた。

頭からゆっくり、アーミーは人間の姿を取り戻していく。

普通の男子生徒へと戻ったアーミーはその場で崩れ落ち、同時に洗脳も解かれる。

「はあッ……！……ここは……」

成音を見ながら、男子生徒は荒い息を吐く。

「アンタを助けておいたわよ」

「は……」

「ここは危険だから、今すぐ帰った方が良いわ」

銃と資料を手に、成音はそう告げて部屋を出て行った。

「俺……何してたんだ？」

※※※

ボマーはガス怪人を押し続け、何とかあともう少しの所まで追いつめていた。

「はあッ！」

「くっ……」

ガス怪人がボマーのバットで吹き飛ばされる。

壁に叩きつけられたガス怪人に、ボマーはバットの先端を向けた。

「どうしましたの？ 私に認めさせたいのでしょうか？ 自らの力を

……それとも、貴女の覚悟はその程度だったんですの？」

「うるせえっす！」

ガス怪人がボマーの挑発に乗りながらも立ち上がる。

「頂点に立つというのは、そんな生易しい道ではありませんわ！」

「私達に見放された分際で偉そうに！」

ガス怪人の拳を受け止め、ボマーも左拳を振るう。

「そう思うのなら、どんな手を使ってでも勝って認めさせなさいな。

頑固な私を認めさせられるなら、やってみなさいな！」

「くっ……あああッ！」

拳が乱れるガス怪人。

普通なら避けられるそれを、ボマーは敢えて受け止めていく。

「ふざけているんすか！」

「これが私ですの……。貴女に認めてもらう為に、私はどんな攻撃

だって当たりにいきますわよ！」

そう言いながら、ボマーは回し蹴りを放つ。

「貴女はただ拳を振るい続けるだけで良い。私は認めてもらえるまで

諦めませんわ」

「あああッ！」

ガス怪人はアンプル型のガジェットを取り出し、差し替える。

『ガストライブ！ コウアッ！ フキトープ！』

高圧ガスを放射口から放ち、ボマーを吹き飛ばそうとする。

ボマーは受け止め、抗いつつ進む。

「くっ……これでもダメなんすか……！」

ガス怪人はガスを止め、もう一度本気でボマーへ殴り掛かる。

「はあッ！ やあッ！ たあッ！」

「……」

ボマーは避けない。

黄色の複眼が、こちらを睨んでいるように見えた。

「なんで……なんで……」

「これで終わらせますの」

ボマーは端末を取り出し、ボタンを押す。

『FINAL DRIVE!』

取り付けてからジャンプし、右足をガス怪人へと向ける。

「ライダーボムキック!」

ボムビットが右脚を覆い、そのまま勢いよくガス怪人へと急降下。

「うわあああああッ!!」

爆風の中から変身解除された蒲生が吹き飛び、壁へ叩きつけられる。

蘇ったボマーが、遠くで天へと指をさす。

第七十三話

「お、俺は何を……」

「はやく行つて。ここは危険よ」

「お、おう」

火炎放射器怪人の方も順調だった。

銃の効果で怪人化と洗脳を解き、あともう少しという所まで来ていた。

「あとは会長達がいた所の奴らね」

銃を構えながら、火炎放射器怪人はもう一度駆けていく。

※※※

黒フードは美咲の家に行った。

福沢裕太の人格が残っているおかげか、初めて入った筈なのに懐かしさを感じる部屋の中で、黒フードは三角座りをしている。

これで良かったのか……そう考えながら。

「……」

美咲は……最早殺されて当然の生涯を歩んできた自分を守る為にも戦うと言って、自分から足利明人や洗脳された蒲生の事を聞き出して、全員救う事を約束して出て行った。

自分よりも遥かに高い戦闘能力の持ち主たる彼女の實力に、不足はない。

けど何より、敵である自分の事情や気持ちを気遣ってまで戦う理由が思い浮かばない。

あの時も、庇わず見殺しにしても良かったのに、自分の能力を使つて守った。

こんな人殺しを救う理由が、どこにあるのだろうか。

『あいつにそんな都合は関係ない』

「……お前、やっぱりまだいたのか」

福沢裕太の声に、一号がそう答える。

『自分の望みの為に本気で生きたいと思う奴がいるなら、例えそいつが悪だろうとそいつを応援するし、もし自分にとって気に入らない事

なら全力で立ち向かう。それが六角美咲だ』

「……」

『あいつは精一杯生きようとしてる奴の味方なんだ。お前をそういう奴だと思ったからこそ、お前も救おうとしてるんじゃないか?』

「俺はあいつやお前を殺そうとしていたのにか?」

『あいつはむしろ、そういうのを相手にすると燃えるタチだ。だから俺が止めた。あいつや……お前を守る為にな』

「俺を守る? どういう事だ?」

『それは……』

一号の頭が少し痛む。

「うっ……」

『どうやら、もう俺もここに永くいられないみたいだな』

一号の中から、福沢裕太の記憶が消えていく。

元々不完全な存在だった脳波が、ゆっくりと自分の中から消えようとしているのだ。

「……」

『悔しいな。もしお前が美咲に手を出す選択をしたとしても、もう止めてやる事が出来ないのか』

「福沢裕太……」

『もし董と生きる選択肢を選びたいのなら、美咲を信じてみる。そして一緒に戦うんだ』

「……良いのか? 人殺しの俺が、幸福になる道を選んでも……誰かに救ってもらう道を選んでも」

『俺には分からない。けど、もし選ぶのなら……その人生を使って償う事も必要かも知れないな』

「償い……か」

『大丈夫だ。俺がいなくても美咲がいる。美咲なら、お前と一緒にその方法を考えてくれる筈だ……じゃあな』

そう言い残し、福沢裕太は一号の中から消えていく。

第七十四話

「ああッ！」

「おいおい……俺の動きで学習出来たのかと思えば、てんでダメじゃねえか。どうやら強いのはドライバーだけみてえだな」

「野郎……」

俺はあれから一撃も与えられていない。

相手の攻撃を受け止めるどころか躲す事も出来ていない。

このままでは……。

「私が相手になりますわ」

「美咲！」

つい先ほどガス怪人を倒したボマーが、バットを剣の怪人に向けながら立っていた。

「初めましてだな、六角美咲」

「明人さん……」

「おいおい、こいつの名前を出すなよ。俺には二号っていうれっきとした名前……じゃねえけど番号があんだよ」

「……」

「最近俺の兄貴が世話になったみたいじゃねえか」

「兄弟というのは……あの黒フードさんの事ですか？」

「そうだ。そのこのムラマサにも勝てねえ……弱っちい出来損ないの兄貴の事さ」

「出来損ない……」

ボマーはバットを握る手を震わせる。

「なんだ？ あいつを馬鹿にされて怒ってんのか？」

「ええ……怒ってますわ。明人さんの身体を勝手に使っている事、それに黒フードさんを馬鹿にした事に」

剣の怪人はやれやれと笑いながら言う。

「おいおい、あいつはお前の敵だった筈だろ？ なんで仲良くなっちゃってるわけ？」

「違いますわ。私は彼の敵として、彼の願いを尊重しただけですわ」

「んだと……？」

ボマーは顔を上に向ける。

「私は戦う相手には、常に本気でいて欲しい。迷いを全て捨てて、全力で立ち向かって欲しいんです。だからこそ、私は今の彼を守ります。貴方達に蒲生さんも明人さんも、そして黒フードさんも弄ばせませんわ」

バットを構え、戦闘態勢に入る。

「随分言うねえ。まあ、どうせお前じゃお袋には止められねえだろうがな」

剣の怪人が武器を構えた。

「良いぜ、こいつを倒す前に俺が遊んでやるよ」

※※※

一号は美咲の家から飛び出して、董のいる〇×女子高を目指す。

「……」

裕太が消えてから、自分に出来る償いを自分なりに考えた。

美咲はこうしている間にも、自分の為に命を懸けている。

だから、董と距離が近い関係の自分に出来る事をやろうと思った。

説得。

それが今の一号に出来る、最善の行動だ。

命令に背いたと思われるれば、殺される事もあり得るが、今はそれを考えている場合ではない。

むしろ美咲のように言うなら、殺される状況になろうとも生きて帰るくらいの度胸は必要だろう。

だから、一号は生きて帰る。

自分の願いを叶えつつ、美咲の為に出来る事をする。

一号はフードの下の瞳を窄めながら、目的地への足を早める。

第七十五話

「裕太さん、貴方も行きなさいな」

「す、すまん。あとは頼んだ」

変身を解いてから、裕太はその場を離れる。

「すぐに片を着けますわ」

『SCAN DRIVE』

ハイドロフォームのカードを取り出し、読み込ませる。

『COMPLETE HYDRO DRIVE READY?』

両腕を腰の高さまで広げ、全身に力を込めて叫ぶ。

「超変身ですわ!」

ボマーがハイドロフォームへと変わり、アクセルドライブを使う。

「はあッ!」

「ふっ……」

二人は姿を消しながら、バットと剣を振るう。

ハイドロボマーの実力は、剣の怪人以上の筈だが、剣の怪人もそれについてきている。

「くっ……」

「どうした、ハイドロフォームの力つてのはその程度か?」

剣の怪人が姿を消す。

「そこですわ!」

「ぬおッ!」

ハイドロボマーは見抜いてから、剣の怪人に向かってバットを振るって吹き飛ばす。

「お前も中々やるな」

「貴方だけは許せませんもの……とつとと蹴りをつけますわ」

ハイドロボマーがバットを回してからもう一度姿を消す。

「そうこなくちやな」

※※※

戸間董は一人、自室代わりにしている教室で研究を続けていた。

「さて……どうしたものか」

言うまでもなく、先に送った黒いボマー——通称仮面ライダーアトミックに変身した実験体の改良だ。

一号を一瞬にして気絶させ、ハイドロボマーもボムビットで爆破させはしたが、それはあくまでアトミックドライバーの性能に過ぎない。

三号の素体も突然変異体の遺伝子からコピーし作った点は、今行動中の一号や二号と変わらないが、この三号はその二体とはある点が決定的に違う。

天然で生まれる突然変異体が一つしか能力を持ってないのに対し、三号は最初から複数の能力を備えている。

だがどの能力もまだ実戦で使える程度ではない。

これで戦闘に勝てたとしても、それでは遥の研究品を盗んで勝っただけだ。

この三号を強化し、兵器運用が可能なレベルになれば、科学者として上の地位に立てる。

それで遥さえ消せば、自分は科学者として頂点に。

「董」

「……何だい。僕も忙しいんだよ、一号」

董は眉を潜めながら、教室に入ってきた一号を見る。

「僕は君に六角美咲を倒すよう指示したのに、君は彼女と仲良く朝食を食べていたそうだね。三号から聞いたよ」

「……」

「君は僕に従順で仕事人気質な所が取り柄だったのに、そんな裏切りをするなんてね。見損なっちゃよ」

「……」

一号は身体を震わせる。

「不服そうだね。僕の言った事が間違っているとも?」

「……董、もうやめにしないか?」

「何だど?」

「俺は董と一緒にいたい。けどこのまま誰かを傷付け続けたら、それ

も出来なくなる。だから……頼む。もうやめてくれ」

一号は床に頭をつけて土下座する。

「君は僕の望みを知ってるのだろう?」

「……ああ」

「なら何故こんな事をする。僕が狩野遙に負けるとでも? それともこの三号でも、六角美咲に負けるとでも?」

俺は知っている。

董が誰かの笑顔のための発明をしたと言った事を。

「ち、違う。俺は誰かの笑顔の為に研究に取り組む董が好きなんだ!

だからこんな事をやめてくれ! ……あれ」

——何故だ? 何故俺の口から、こんな言葉が?

「そうか、もうそこまで思い出せているんだね」

悪い笑みを浮かべる董。

「どういう事だ。俺は董の実験体として生み出された筈……。それに俺はそんな光景を一度も……」

「それは僕が君の記憶を消したからさ」

「消した? それはどういう事なんだ」

「一号、僕は前にこう言ったよね。僕の為に生まれる事を選んでくれた事を感謝している……と」

「ああ」

その言葉と、いくつもの言葉が引っかけかり、自分が何なのかが理解出来なくなっていた。

「君のしつこさに敬意を表して、特別に教えてあげよう。君の人格は僕が一から生み出した存在じゃない。君が僕に忠誠を誓うようにプログラムしたのは事実だが、それは君が元々持っていた感情を強くしたに過ぎない」

「……まさか」

「——そう。君は僕を好きで仕方なかったただの青年。僕が君の脳波を取り出し、記憶を消してその身体に入れたのさ」

第七十六話

「それが……俺？」

腑に落ちない内容だが、筋は通っている。

それならサック怪人に変身した時に見えた記憶も、自分の過去の記憶が蘇ったという事なのだろう。

「あのベルトは使用者の脳波を読み取り、変身中の仮の脳として機能する。何度も変身する事で情報が蓄積され、その中にある君の記憶が蘇ったのだろう」

董は続ける。

「これで分かっただろう？ 何故僕に酷い事を言われても、死ぬ事を強いられても、僕に尽くしたいと思ったのか。もし君の感性が普通なら、この場で抵抗して僕を殺す選択肢だって取れた筈だ。なのに何故出来ないのか……君自身が元々僕を好きだからなのさ。僕はただ、その感情を増幅しただけ」

「……だからどうした。それでも俺は董を止める。好きだからこそ、俺は董にこんな事をやめて欲しい」

「分かっているじゃないようだな。僕は今以上に君の感情を増幅出来る。そう、盲目になるくらい」

董が指を鳴らすと、教室に誰かが入ってくる。

ドアを蹴破ってから飛び上がり、黒フードに向かって飛び蹴りを当てた。

「ぐあッ！」

「ふふっ……」

「お前は……」

黒フードに飛び蹴りを当てたのは、福沢裕太。

しかし様子がおかしい。

歯を剥き出しにし、歪んだ笑みを浮かべている。

「二号、押さえろ」

「悪いが兄貴にはもう一度人形に戻ってもらうぜ？」

「ぐっ……ああっ……」

裕太が黒フードの腹をぐりぐりと足で抉る。

「まだ君を殺しはしないさ。ただし、次起きる時には……冷酷な人形に戻っているはずさ」

それが最後に聞こえた董の声だ。

※※※

戦いが始まって数分。

スペックこそハイドロボマーの下である剣の怪人に技量で対抗され、お互いダメージらしいダメージも与えられないまま、ハイドロフォームが切れてしまった。

「そんな……」

身体から水色のオーラが拡散し、ボマーへと戻ってしまう。

「よく頑張ったようだが、もう終わりみてえだな」

剣の怪人が端末を取り出し、操作する。

『FINAL DRIVE!』

端末を取り付けてから構え直し、切っ先をボマーへ向ける。

「一か八かですわ!」

ボマーも端末を操作し、アクセルドライブを発動。

『ACCELERATOR DRIVE』

それから必殺技をクリック。

『FINAL DRIVE!』

端末を取り付け、ボマーもバットを構える。

「はあッ!」「ふっ!」

互いに姿を消し、加速した空間の中で剣の怪人の斬撃を目視で防いでいく。

「これで終わらせませすわ!」

バットにボムビットを集め、剣の怪人へと思い切り叩きつける。

「ライダーインパクト!」

「ぬわあッ!」

自身をも巻き込む爆発で、剣の怪人を大きく吹き飛ばす。

剣の怪人は壁へと叩きつけられる……が、相手を倒すには至らな

い。

「こんなもんかよ。俺を倒すには足りなかったみてえだな」

与えたダメージは決して小さくはない筈だ……だが決定打にはなっていない。

『ACCELERE END』

「加速も切れたか。これで本当に終わりだな」

「諦めませんわ……!」

互いに武器を構えなおし、次の一撃に全てを賭けようとしたその時。

「……ッ! お前また……」

『や……めろ。六角美咲は俺の敵だ……お前如きが手を出すな!』

明人の人格が、剣の怪人の動きを止めた。

第七十七話

「くっ……ああッ……」

『六角美咲！ こいつは俺が止める……今のうちに仕留めろ！』
剣の怪人は明人の制止に抗おうとする。

「明人さん……！！ 分かりました！」

「くそ……動け！ 動け！」

端末を取り出し、操作し取り付ける。

「明人さん、今終わらせませす！」

『FINAL DRIVE！』

「ライダータイフーン！」

ボマーは脚にボムビットを纏いながら駆け出す。

「とりゃあああッ!!」

剣の怪人の頭に向かって、全力の回し蹴りを放つ。

怪人は爆風で大きく吹き飛び、強制的に変身が解ける。

「うわあッ！」

明人の姿に戻る怪人。

ボマーは蘇生するや否や変身を解いて近付く。

「明人さん！」

『六角美咲……』

何とかあの人格に抗いながら呟く明人。

「大丈夫ですよ!?!」

傷だらけの明人の身体に触れながら、美咲は問いかける。

「まさか、敵である筈の俺を助ける為に戦ってくれたとはな……」

「当たり前ですわ。私の戦うべき相手が苦しんでいる時に助けるなんて」

「だが、非常にお前らしい」

明人は笑う。

「六角美咲」

「……はい」

「悪かったな、あの時はお前との決着をつけられなくて」

「良いんですの。私はこうしてまた話せて、安心しましたわ」

「そうか……くっ……」

頭を押さえる明人。

「どうやら、これまでみたいだ」

「明人さん！」

「こいつをどうにかして、全てが終われば、またお前と戦う。約束だ」

震える小指をこちらに向ける。

「分かりましたわ」

美咲は喜んで小指を差し出してそれに応じる。

『感動の再会はそこまでにしてもらおうか』

明人の人格が入れ替わった。

「悪いが、今回は退かせてもらおうぜ」

気絶している蒲生を回収し、そのまま行こうとする。

「蒲生さんを返しなさいな！」

美咲はそう叫ぶが、明人に笑みを浮かべられ。

「無駄だ。こいつの洗脳は深い。今返した所で、お前を襲うのがオチ

だ」

「……ッ！」

「今回お前が勝てたのはラッキーだという事を忘れんなよ。それじゃ

あ」

そう言い残し、明人は窓ガラスを割ってどこかへ去っていく。

「……絶対諦めませんわ」

蒲生の事も、明人の事も。

絶対に二人を取り戻す。

『♪♪』

スマホから着信音が鳴る。

「成音さんですわね」

美咲はボタンを押し、通話に出る。

「もしもし」

『会長、こっちは何とか蘇我高校にいた怪人と病院に来た奴らにワク

チンを打ち終わって、元に戻せたんだけど、そっちはどう?』

「倒せはしましたが、逃げられてしまいましたわ。敵が何者かも分からず終いで」

『そう……そういえば、裕太はそっちにいないの?』

「私が逃がしたのですが、そこにもいないんですの?」

『うん。ここにはいないわ』

「そうですよ。帰る途中に探してみますわ」

『お願いね』

「はい」

終了ボタンを押す。

「裕太さんもしかして迷子に……」

「俺ならここにいますぞ」

「うわあッ!」

美咲の背後に、何食わぬ顔で裕太が立っていた。

第七十八話

「い……いるならいるって言いなさいな」

美咲が腕を組んでそう告げる。

「悪い悪い」

裕太は頭を搔きながら笑う。

「ところでそちらは大丈夫でしたの？ 成音さんが心配してましたわ」

「俺なら隠れてずっと見てたよ。逃げろとは言われたけど、流石にお前が倒れた時に何もしいわけにいかないしな」

「そうですの」

「怪人達は取り敢えず元に戻せたみたいだし、一旦遥先生の病室に戻ろうぜ」

「ええ」

裕太と共に、美咲は歩き出す。

※※※

それが起きたのは、校舎の外へ出てすぐだった。

「美咲！」

「うわあッ！」

音速で飛ぶ風の拳に吹き飛ばされ、美咲はごろごろと地面を転がる。

「……この攻撃は」

見覚えがある。

これは……。

「対象を……排除する」

聞き覚えのある声。

その声が聞こえた先にいるのは、サツク怪人だ。

「黒フードさん……」

「……」

黒フードの下から少しだけ覗いていた瞳も、完全に生気が無くな

り、光を失っている。

「俺はあの人の為に、殺す……六角美咲を殺す」

「ここは俺が……」

裕太はベルトほ取り出す。

「待ちなさいな！」

変身しようとした裕太を、美咲が止める。

「黒フードさんは私が助けますの」

「助けるって……こいつは敵なんだぞ！」

「分かってますわ！ けど、今の彼は自分の意思で戦っていない。私は彼自身の選択を尊重したいんですの！」

「あの人の意思のままに……」

虚ろな目で眩き続ける黒フードに、美咲はベルトを装着しながら言う。

「黒フードさん、貴方が自分の意思で立ち向かっていない事はその眼を見れば分かります。だから私が眼を覚ましてあげますの」

端末を取り出し、ボタンを押す。

『BOMER DRIVE READY?』

端末を閉じて、顔の左側で構える。

「変身ですわ！」

端末をベルトに取り付けた。

『COMPLETE』

上から降ってくる爆弾を右拳で握り潰し、爆風に飲み込まれる。

爆風の中で、仮面ライダーボマーへと姿を変えた。

『SMASH DRIVE READY?』

黒フードが端末を操作して構える。

「変身」

『COMPLETE』

黒フードも、サック怪人に変身する。

「貴方の運命は、私が変わえますわ！」

バットを突き出し、ボマーは駆け出す。

サック怪人も拳を握り、迎え撃つ。

「……！」

「はあっ！」

ボマーが振り下ろしたバットを、サック怪人は受け止める。

「！」

余った左拳でボマーの腹を貫き、その身体を大きく吹き飛ばす。

「前よりも強くなってますわね……けど、今のただ盲目な貴方に負けるわけにはいきませんわ！」

第七十九話

戦いはサック怪人が劣勢だ。

ハイドロフォームにすらなっていないボマーの動きに、サック怪人はついていけない。

しかし、サック怪人は何とかボマーの動きに合わせてようと奮闘している。

「はあッ！」

サック怪人の右ストレート。

それをボマーは左掌で受け止めてから、バットを上に向けて右拳で吹き飛ばす。

「くっ……」

サック怪人が受け身をとって体勢を立て直すと同時に、ボマーが投げたバットをキャッチ。

「排除……排除！」

サック怪人は機械の如く、もう一度立ち向かう。

「消す……お前を消す！」

「今の貴方に消されるわけにはいきませんの！」

サック怪人が大きく右拳を振るう。
すると。

「はあッ！」

今までのサック怪人の拳撃からは考えられない威力の攻撃が、今度はボマーの身体を大きく吹き飛ばす。

「……」

見覚え、いや俺が実際に経験した事だ。

あの黒フードに始めて会った時、俺はそいつを拳一つで大きく吹き飛ばした。

その力と同じ力だろうか。

「その拳、効きましたわ……もつとやりなさいな！」

ボマーはバットを構えなおしてもう一度立ち向かう。

「排除！……排除！」

ボマーにもう一度拳を振るい続けるサック怪人。
だが能力は使っていない。

「あの拳はどうしたんですの!?!」

ボマーの振るうバットを、サック怪人が受け止めた。

「削除！」

「ぎゃあー！」

ボマーの腹を蹴り飛ばす。

「……やはり貴方は出来損ないではありませんわ。やれば出来るじゃないですの」

「やれば……出来る……美咲……」

一瞬サック怪人の動きが固まる。

だがすぐに首を横にふり、大声を上げて立ち上がろうとしているボマーにのしかかった。

「ああああッ!!」

「私は貴方に言いましたわよね。洗脳されていたとしても、それなら洗脳された状態から認めさせてみせると」

「知らない！ 知らない！ 俺はあの人しか知らない！」

動けないボマーの顔を何度も殴りつける。

「貴方が知らなくても、私が覚えてますの！」

何度目かの所で、ボマーが拳を受け止めた。

「その人と共にいる事を選びたいと思う貴方を、その人の為でももう人を殺めたくないと言った貴方を、自分の願いの為に何が出来るかを考えようとした貴方がいた事を、私が覚えてますわ！」

ボマーはサック怪人に頭突きしながら起き上がる。

「だから思い出させてみせますの！」

『ACCELERATOR DRIVE』

ボマーが加速状態に入り、サック怪人へ消える速度で地を蹴った。

「はあッ！」

「くっ……ぐあッ！ あああッ！」

最後に回し蹴りで大きく吹き飛ばしてから、ボマーは端末を操作。

「これで終わりですわ」

『FINAL DRIVE!』

ボムビットがバットに集結。

ダウンしているサック怪人に向かって叩きつけるように、バットを振り下ろす。

「ライダーインパクト!」

物理法則とかを一切無視し、ボマーの方が逆に爆発に巻き込まれる。

サック怪人は吹き飛ばされ、地面を転がりながら、その身体を元に戻していく。

「くっ……ああっ……」

ゆっくりと立ち上がろうとする黒フードを、遠くで蘇ったボマーが見つめる。

「俺は……あの人しか、知らない……」

そのまま、黒フードは気絶した。

第八十話

倒れた黒フードに、変身を解いた美咲が近付く。

「黒フードさん……」

「美咲……」

その時だ。

「裕太」

「成音？ それにみんなも、ここに来たのか」

成音とヴィーダが、ベルトを装着して俺を見ている。

だが……何というか穏やかな雰囲気ではない。

「ど、どうしたんだよ。そんな顔で俺を見て」

「裕太、気を悪くしないで聞いて欲しい」

「は……はあ」

成音は言うのを躊躇ってから告げる。

「遙さんが言ってたの。もしかしたらあの日、裕太が遙さんを斬りつけたんじゃないかって」

しばらく俺は、成音の言っている事が理解できなかった。

「へ？ いや、どう考えても違うだろ。だって俺はあの時、優香と一緒にいただろ？」

「多分あの場に現れたのは、裕太であって裕太じゃない……そうですよね遙さん」

成音がスマホのスピーカーに向かって言う。

『ああ。優香からの話を聞いて考えてみたんだ。ヴィーダが何故、福沢裕太を避けているのか』

「ヴィーダの……一体どういう事ですか？」

『成音は私の説明と、蘇我高校から持ち帰った資料で既に知っているんだが、ヴィーダには脳波で個人を判別する能力が備わっているんだ。ヴィーダがお前を嫌いと言った理由には、きっとそれがあるのだろう』

「でもこんなのおかしいです！俺は観客席からずっと見てたんです

よ!?!」

あの日の記憶に偽りはない。

確かに俺の中から声が聞こえる事はあったし、俺の知らない記憶を、俺は断片的に思い出す事があった。

しかし……。

『まったく……今更気付くなんてな』

「……………」

※※※

頭を押さえる裕太。

「裕太!」

口元を緩めながら、彼は囁く。

『すつとしたぜ……ようやく表に出られる』

「アンタ……」

「そうだよお嬢ちゃん、俺が黒フードの正体さ」

「裕太……さん?」

遠目で見っていた美咲も、その様子に気付く。

「久しぶりだな六角美咲。俺だよ、あん時の黒フード」

「何言ってるんですの裕太さん……貴方が黒フードなんてそんな事……」

「おいおい、分かりやすかったと思うんだけどな。大体、あの黒フードの性格と俺の性格、太陽と月くらい違うだろ?」

両腕を広げながら言う裕太。

「あ、因みに言っとくけどよ。あの決勝の時までお前達と一緒にいた福沢裕太はあいつだぞ」

黒フードを指さす裕太。

「あいつがお前と戦うのを少々躊躇ったり、お前という事をあまり不快に感じたりしていないのも、あいつの中に少し残っていた福沢裕太がそう感じさせてたっつー事」

「でも、そんな事どうやって……」

「俺とあいつ、そして福沢裕太に関してはちよいと複雑な事情があるんだが、まずは俺の中の福沢裕太とこの場のお前らに、あの決戦の時

に何があつたかを一から説明してやるよ」

裕太は悪魔のような笑みを浮かべ、口を開き始める。

※※※

美咲に敗北した後、黒フード……二号は董に通信を入れた。

「俺だ」

『二号か。狩野遥の暗殺は成功したのか?』

「いや、まだ息があつた。しかもあのアマ、ハイドロフォームカードなんてもん隠してやがった。そのカードのせいで六角美咲にやられたよ」

『そうか……でもいくつか遥の研究品は盗めたのだろうか?』

「ああ。一番よさそうなのを手に入れた」

戦闘前に科学部の部室で盗んだアトミックドライバーに見ながら言う。

『それは楽しみだな。ところで、一号はまだ校舎内にいるのか?』

「ああ。その筈だ」

『ならプランを変えよう。君の能力と、君に与えた顔を使うんだ、あとは分かるよね?』

フードに隠された、中々整った福沢裕太の顔に触れる。

そして董が何をしたいのかも全て察した上で笑う。

「お袋も落ちる所まで落ちたな。遥だけじゃなく、巻き込まれただけのガキや自分の子供まで殺すつてのかい」

『そういう事になるね』

「お袋は科学者としては高得点でも、母親としては零点だな」

『失敗作を生かしておいた所で無意味だ。それに君が福沢裕太になる方が、怪しまれずに狩野遥を殺すチャンスを得られる。それに、狩野遥側に付きそうな人間も早めに排除する方が妥当だ』

「良いねえ、やっぱりお袋は最高だ」

二号は通信を切る。

第八十一話

丁度良いタイミングで、二号は科学部の部室からドライバーを盗んで逃げようとしていた福沢裕太……一号に遭遇した。

「お前は……」

「よう、久しぶりだな福沢裕太」

一号が鋭い目で二号を睨む。

「丁度お前を探してた」

笑みを浮かべながら、二号はサックドライバーを装着する。

「悪いけど俺はお前に構ってる暇はないんだ」

「へえ……そうか。でも悪いけど、そんなの聞いてないから」

『SMASH DRIVE READY?』

「変身」

『COMPLETE』

二号はサック怪人へと姿を変える。

「ならこいつで……」

一号がベルトを装着。

「俺とやるってのか……良いけど、暇つぶしくらいにはなってくれよ」

『ムラマサー!』

刀型の端末を取り出し、ボタンを押す。

端末を閉じてから、ポーズを決める。

「変身!」

『失敗!』

「え……うわっ!」

ベルトが一号の身体から弾けるように外れる。

「はあ……暇つぶしどころか、ベルトすら満足に使えないのか」

「くそ……」

「はあ、つまんね」

サック怪人は一号の背後に移動し、肘を一号のうなじに当てた。

「うっ……」

一号が気絶し、うつ伏せに倒れる。

「それじゃあ、仕事開始」

サック怪人は変身を解いてから、右手を一号に向ける。

自身に秘められた突然変異体としての能力を使う。

「福沢裕太の脳波は頂いたぜ」

福沢裕太の脳波を自分の脳内に取り込んでから、二号は自分の着ていた黒フードを脱いで、一号の身体に着せる。

「代わりにこいつでもやるか」

ムラマサドライバーを奪ってから、サックドライバーを代わりに渡す。

「んじゃ、残り少ない人生を楽しんでくれよ。兄貴」

二号は倒れている一号を見下ろして、そこから去る。

※※※

「これが、俺が入れ替わった経緯さ。納得したか？」

美咲と、何よりこの事を覚えていない福沢裕太自身に言う二号。

『おい……ちよつと待てよ。それなら俺は何なんだ、まるで自分の身体が無いみたいじゃないか！』

「よく気付いたな福沢裕太。その通りだ」

交互に人格を入れ替えながら喋る二号。

『え……』

「六角美咲、一号兄さんが殺したのは狩野遥の幼馴染だけじゃない。福沢裕太も……だ」

『どういう事だよ、俺が死んだってどういう……』

「言葉通りの意味だ。一号兄さんがお前を殺し、その死体から脳波を抽出し奪った。その奪った人格が、お前だ」

『……そんな』

青い顔をする福沢裕太。

絶望に満ちた表情だ。

二号の人格が変わった途端、笑みを浮かべてから言う。

「これでどんな馬鹿でも状況くらいは飲み込めただろ。明かさずに殺すつもりだったが仕方ないな」

二号はムラマサドライバーを装着。

「それにちまちま殺すより、派手な喧嘩の方が俺の性にも合うし、むしろバレて俺的にはラッキーだ」

『ムラマサ！』

「変身」

『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

二号は仮面ライダームラマサへ。

「そううまくはやらせませんわ」

美咲や成音もベルトを取り出し、戦おうとするが。

「ヴィーダガタタカウ！」

「ヴィーダ……」 「ヴィーダさん」

「フタリハテヲダサナイデ。アイツ……ママキズツケタヤツ……
ヴィーダ、タオス！」

ヴィーダが瞳孔を開きながら、グングニルドライバーを装着。

『GUNGNIR ON』

「ヘンシン！」

『CHANGE』

「少しは楽しませてくれよ？」

グングニルとムラマサが、互いに構える。

第八十二話

最初に動き出したのはグングニル。

右手の槍を構えながら、消えるような速度で移動する。

「セイツ！」

「気合十分だなあ、お嬢ちゃん。だがこの前の俺とは一味違うぜ！」

ムラマサの方が一枚上手だ。

高速移動も刀も、グングニルの槍捌き以上に扱いこなしている。

「ウワアツ！」

グングニルが斬撃で吹き飛ばされた。

「少しは腕を上げたようだが、俺の刀捌きには及ばねえな」

「マケナイ……マケタクナイ！」

グングニルは槍を構え直し、もう一度ムラマサに立ち向かう。

※※※

戦いが始まって数分が経つ。

しかし未だに、相手の優勢が続いている。

「ヴィーダ……」

戦う様子を一番心配そうに見ていたのは成音だ。

そわそわと落ち着かない様子を見せていたが、美咲がその腕に手を添える。

「今はヴィーダさんに任せますの。裕太さんにした事も許せませんが、ヴィーダさんは母親を殺されかけたのですから」

『今戦ってるのはヴィーダか？』

まだ通話中の遥が問う。

「ええ。遥さんの為に戦ってる」

『私の為に……か？ いや、今は理由は良い。状況はどうなんだ？』

「ヴィーダがおされてるわ。これじゃあとても勝てない」

『それなら、グングニル自体のスペックを上げるしかない』

「そんなのどうやって……」

『グングニルドライバーは、他のドライバーを取り付ける事でフォー

ムチエンジンが出来る』

「そんな機能があつたんですの?」

美咲はグングニルと戦つたあの時を思い出す。

しかし、その時にはその機能を使つている様子はなかつた。

『ああ。だが私のロードドライバーでは出来なかつた』

「どうして」

『恐らくあの時のヴィーダでは力不足だったのだろう。仮面ライダー用のベルトは非対応故、もし出来るとしたら……山内成音、フレイムシャワードライバーをヴィーダに渡せ』

「これを?」

『ああ。まだ他のドライバーを試していないが、今出来るとしたらそれしかない』

「……分かつた」

少し俯いてから、顔を上げる。

「ヴィーダ!」

成音の呼び声に、グングニルが振り向く。

「これを使つて!」

フレイムシャワードライバーの端末部分を、グングニルへ投げる。

「させるか!」

ムラマサが邪魔しようとするが、そこをヴィーダが何とか防ぎ、端末を受け取つた。

「ナリネ……アリガトウ!」

グングニルはドライバーの左側、槍型のガジェットを挿していない方に端末を挿入する。

少しばかり緊張しながら。

「……」

成音が祈る。

『フレイムシャシャシャ……』

「アッ……アアッ!」

だがそんな成音の期待に反して、ドライバーがバチバチと火花を立てて端末を吹き飛ばす。

「そんな！」

何とか立ち上がるグングニル。

「ふう、どうやら無理みてえだな」

安心したムラマサがもう一度斬りかかりに行く。

何とか槍で防ぎ、ムラマサを弾いた。

「ヴィーダニハ、ムリナノ……？」

グングニルが顔を下げる。

「ヴィーダ……」

『やはり無理なのか……』

成音と遙が諦めかける。

しかし。

「ヴィーダさん！」

「ミサキ……」

美咲がグングニルへ叫ぶ。

「無理かも知れないと考えてる場合ではありませんのよ！ 貴女は自分で自分の母親を傷付けた者を倒すと決めんですのよ！ それなら、出来ると信じなさいな！」

「……！」

グングニルがもう一度端末を拾う。

「デキルト……シンジル……！」

「ヴィーダ！ 頑張って！」

「成音さん……」

「ナリネ……」

二人の言葉を聞いたグングニルが、ムラマサを見る。

「ママヤユウタ、ミサキ……そしてナリネノタメニ、ヴィーダハオマエヲユルサナイ！」

端末を左側に差し込む。

『フレイルムシャワー！』

何とか負荷に耐え、グングニルは叫ぶ。

「ダイヘンシン！」

右手で槍を押し込んでから、斜め左上まで右腕を伸ばす。

『CHANGE FLAME THROWER』

グングニルが光に包まれ、姿が変わっていく。

白と水色中心だったカラーリングに、オレンジが加わり、複眼の色も赤く変わる。

左手に火炎放射器が握られ、背中にはブースター、そして槍の刃も発炎する。

「コレガ、アタラシイチカラ……」

第八十三話

「あれが……」

成音が驚いた眼で見る。

「あの変身が出来たのは、成音さんのおかげですわ」

「会長……」

「私の言葉だけでは、恐らく彼女には響きませんでしたわ。貴女がいてこそですわ」

両腕を広げるムラマサ。

「今度は出来たようだなお嬢ちゃん」

「ヴィーダ、オマエ……タオス！」

「やってみな」

ムラマサが姿を消してから、グングニルへ迫る。

「……がら空きだ！」

「ハアッ！」

槍を回転させながら、炎を生み出して防ぐ。

「コンドハヴィーダノバン！」

次はグングニルが高速移動で姿を消す。

速いだけじゃない。

槍とそれが纏う火炎の強烈な攻撃が、ムラマサを追いつめていく。

「ぐあっ……こいつは厄介だな」

ムラマサが攻撃を受けた所に触れてから言う。

「ハアッ！」

そのまま追い打ちをかける。

上空の魔法陣から数本の槍を放ち、ムラマサ目掛けて放つ。

「おわっ……！」

太刀打ち出来ずに、数本掠ってしまふ。

『どうやら出来たようだな』

「遥さん」

『六角美咲の言う通りだ。しかもフレイムシャワードライバーで、

ロードドライバーで想定されていた以上の戦いぶりを見せるとはな
「じゃあ、つまり……」

『非常に非科学的だが、山内成音とヴィーダ……お前達の絆が生み出したものに違いない』

※※※

ムラマサもデータにない戦闘を強いられたせいか次第に追い詰められ、あともう少しの所まで追いつめた。

「コレデ……キメル！」

槍型のガジェットを押し込み、必殺技を放つ。

『GUNGNIR FINAL DRIVE!』

「ライダーフレイムランス！」

魔法陣から大量の槍と炎が放たれる。

「ぐあああッ！」

ムラマサを大きく吹き飛ばし、強制的に変身を解いた。

「くっ……」

二号が笑みを浮かべながら立ち上がる。

「思っていたより、随分やるな」

「……トドメ……」

グングニルが槍を構えながら前に進む。

「おっと、俺を殺す気かい？ だがそうはいかねえぜ」

何とムラマサに再変身し、瞬間移動並みの速さで姿を消す。

「次は今みたいにはいかないぜ。六角美咲もそこのお嬢ちゃんも、この俺が葬ってやる」

最後にそれだけ言い残す。

「……ニゲラレタ」

グングニルは変身を解く。

「ヴィーダ」

成音がゆっくりとヴィーダに近付いた。

「ナリネ……ナリネー！」

ヴィーダが成音に飛びつく。

「凄かったよ、ヴィーダ」

成音もヴィーダをぎゅつと抱きしめる。

「ツギハカチタイ、ママニアヤマツテモラウマデタタカウ！」

「そうだね……」

一人だけ二号が先ほどまでいた場所を、美咲は寂しそうに見ている。

「裕太さん……」

第八十四話

○×女子高空教室。

「またゆつくり話せる日が来て嬉しいぜ。お袋」

「僕もだよ、と言いたい所だけど……君がそんなボロボロの状態に戻って来たのはしくじったせいだからだろうか？」

董が美しくも怖い笑みを浮かべる。

「悪いな。でもよ、この方が俺も楽しいんだ」

「君は本当に、言う事を聞かない奴だ」

「言いたきや言えよ。どうせ殺しちまえば同じなんだから」

「……」

「ところで兄貴はどうすんだ？」

「ああ、どうせ君が殺すのだろうか？ もう絞れるものは絞りつくした。

奴は廃棄だ。永遠に」

そう言つて、董は手元のボタンを押す。

「福沢裕太ももう必要ない。どうせ今は彼に動く程の意思はないのだから。今の内に処分を」

「おいおい、お袋。ちよつと待つてくれ」

「……」

「こいつなんだけだよ、ちよいと俺の玩具にさせてくれ。この通り」

「どういうつもりだ？」

「俺、ちよつと見てみたいもんがあんのさ」

そう言つて二号はニヤリと笑みを浮かべた。

※※※

あの後、気絶している一号を病院まで運んだ。

特に大きな怪我などもなく、少し時間が経ってから目覚めた。

「……」

美咲が戦ったおかげか、それとも何か起きたのかは分からないが、洗脳は解けていた。

「気が付きましたのね」

「六角美咲……。俺は、一体何を……」

一号が辺りを見回して問いかける。

「気にする必要はありませんの。貴方が貴方に戻ってくれた。それだけで十分ですわ」

「……お前と戦ったのか。あの人の命令で」

「命令かどうかは分かりませんが、私と戦ったのは確かですわ」

「そうか……」

一号は涙を流していた。

「一号……さん？」

「俺は今度こそ、完全に捨てられたのだな……」

何かを察したように、そう告げる。

「……」

「美咲……」

一号は美咲に顔を近づける。

「頼む……俺を殺せ」

「……」

「これ以上生きてても、俺はあの人の為にはもう生きられない。だからもう良いんだ……」

そう言つて大粒の涙を流す。

「……」

「美咲……俺の願いを聞き入れてくれるんじゃないのか？」

「聞き入れますわ。貴方は私のライバルと決めた人」

「なら……ッ！」

「それが貴方の本当に望む事なら、ですわ」

「……！」

美咲は外を見る。

「私も今は、どうすれば良いか分かりませんわ。貴方の願いを叶える事もそうですが、私も……共にいたいと願った者を失いましたもの」

「……」

一号は拳を握った。

「ですが絶対に、貴方にも裕太さんにも、笑顔でいてもらえるように尽

力しますわ。それが貴方のライバルで、裕太さんをお供に選んだ私の責任ですもの」

「美咲……」

「……」

——裕太さん、貴方をここに連れ戻すまで……私は戦い続けますの。

夜空を見ながら、美咲はそう心で呟く。

第八十五話

戦いの後、成音は美咲と別れてヴィーダと共に遙の病室へと向かった。

どうしても、二号を倒せずに逃がしてしまった事を謝りたい。そう告げて走っていくヴィーダを、何とか追いかける。

「会長は大丈夫かしら……」

美咲は病院まで一号を運んで行った。

優香もついていこうとしたが、美咲から一人にして欲しいと言われ、誰もついていかなかった。

恐らくこの病院のどこかの病室で、彼が美咲の近くで眠っていると思われるが、一号は敵側の人間。

油断は出来ない。

「ナリネ、ハイロ」

あくまで静かに、ヴィーダが病室の扉を開ける。

遙は扉が開くまで、何かの写真を見ていたようだ。

それに気付いた遙がヴィーダだと気付いた瞬間に、申し訳ない顔になった。

「……」

「ママ……」

成音はそれを静かに見守っていた。

「どうした？ お前がここに来る必要はない筈だ」

遙は敢えて突き放すような態度で、ヴィーダの目を見ずに言う。

「アルヨ」

それでもヴィーダはくじけずに、そう告げる。

「ヴィーダ、ママヲキズツケタヤツタオセナカッタ……。ソレ、ヴィーダガマダヨワイカラ」

「……」

「ママゴメンネ……ヴィーダ、ママノヤクニタチタイノニ……」

遙は息を吐いてから言う。

「お前がそうする必要はない」

「ナンデ？」

「お前は私の道具だった。けど、今はもう私の為に働く必要がなくなった。今のお前は自分の命さえ守ればそれでいい。わざわざ私の為に戦わなくても良いんだ。私なんかにも関わらず、その少女と家族のように暮らせばいい」

罪悪感に満ちた表情で、尚も突き放し続ける。

「イヤダヨ」

「……」

「タシカニナリネスキ、コレカラモイツシヨニタイ。ケドソレトオナジクライ、ヴィーダハママガスキ」

「……」

「ヴィーダ、コレカラモママモル。ダツテママハ、ヴィーダノママダカラ」

「私は母親じゃない！」

大きな声で、ヴィーダにそう告げる。

「お前はただ、私の卵細胞から生みだされただけの……人形だ。私の復讐心を満たす為の道具だったんだよ。だからお前にわざわざ危険な戦いを強いた！ そんな私が、お前の母親になれると思うか？」

そう言つて涙を流す。

ヴィーダも言葉を失う。

「なれるわよ」

そんな時に、成音がそう口にする。

「……」

「ナリネ……」

「遥さんがそうやって拒絶するのは、それを申し訳なく思うからでしょ？ 本当は自分が生み出したヴィーダの事を、娘のように思いたい。そうなんじゃないの？」

「違う……。復讐の為だ……。そうでなければ、生み出したりはしない……」

遥が扉が開くまで見ていた写真を、もう一度見て呟く。

「コノヒト……ママノダイジナヒト……。ママ、コノヒトノタメニ、

「ヴィーダウミダシタ？」

「……そうだ。だから」

「ジャアコノヒトハ、ヴィーダノパパダネ」

ヴィーダがそう言う。

「ナラ、ナオサラママノタメニタタカウノアキラメラレナイ。パパノタメニウマレタナラ、ヴィーダハソノタメニタタカイタイ。ダツテ、ヴィーダ、カゾクヤトモダチガダイジダカラ」

「ヴィーダ……」

遙が初めて、ヴィーダに目を向ける。

そしてくしゃくしゃの顔で、ヴィーダの頭を撫でた。

「ママノテ、アツタカイ」

「そうか……私は欲しかったんだな。あいつとの家族が……」

自分の気持ちを吐露する遙。

成音もその光景を見て、笑みを浮かべる。

「よかった」

第八十六話

面会が終わわり、遙と別れてから……成音はヴィーダを寝かしつけて、紅茶を飲みながら、和解の後の出来事を思い出していた。

※※※

少し成音と話がしたいと告げた遙の言葉に従い、ヴィーダが一度退出する。

成音が遙に近付くと、遙が少し笑みを浮かべてこう言った。

「お前が今まで、あの子の傍にいてくれたのか？」

「はい」

成音も少し照れながら答える。

「そうか」

遙が安心した顔で続けた。

「あの子は私の所にいた頃、飯と実験くらいしか与えられているものが無かったからな。私以外の所にいた方が、この子も幸せだと思っただ」

「……」

「どうした？ 暗い顔をして」

「ヴィーダには話した事あるんですが、私は母親が嫌で家を出て行った事があって。ヴィーダに母親が好きかどうか聞いたら、道具扱いされてても、本当は優しいのを知ってるから好きだって言っていて、まだ生まれたばかりなのに、私よりもちゃんと母親の気持ちを理解しているのが凄いなって思ってた……」

自分はヴィーダと違って、一切歩み寄る気が無かった。

自分の気持ちばかりを優先して、母親から逃げる事を選んだ。

「それが正しい判断だろうな。普通はダメな親からは、そうして逃げた方が良く。ヴィーダは何故か、そうしなかった。それをした所で、私以外の誰かからは責められる事もないし、私が責めても気にしなければそれでいいのに」

「……」

「私は、ヴィーダに感謝しなければいけないな。こんな母親の為に、命

を懸けて戦うあの子に」

遙はそう呟く。

「それに、今までお前達を利用していたというのものもある。相応の償いはするべきだろうな」

「……」

「山内成音、頼みがある。お前達の仲間として、共に戦ってもよいか？」

成音に目を向けて、そう問いかける。

「虫がいい話なのは分かっている。だが、これ以外に私に出来る償いなどない。頼む……」

遙は頭を下げた。

成音は少し考えてから伝える。

「分かりました。ただ、会長に聞いてみないと分からないので……返答は少し待ってください」

「本当か……」

遙が答えに対して口を開く。

「私はヴィーダの友達ですし、ヴィーダが守りたいって言うなら……遙さんも守らなきゃいけないって思うんです」

「……」

「その代わり、私からも頼みがあります」

「なんだ？」

「ヴィーダと、これからも一緒にいたいんです。ヴィーダがもし遙さんと一緒にいたいなら、そうするべきかんですけど、もしヴィーダの意思が変わらなければ、まだ一緒にいたいんです」

成音もお願いする。返答はすぐに返って来た。

「問題ない。私も、そうしようと思っていた所だ」

「遙さん……」

「まだ今の私では、母親らしく出来る自信はないが、ヴィーダも見た所、お前をかなり信用しているらしいな」

「そ、そんなことあるのかな……」

「うちの娘を頼んだぞ。山内成音」

「……はい！」

成音は遙の頼みに、そう答えた。

《第二章 完》

第三章 第八十七話

あれから数日が過ぎた。

「……」

美咲は自宅で一人、生徒会の仕事を粛々と進めている。

蒲生達は当然帰ってきておらず、成音が自分の仕事と、プラスアルファで引き受けてくれたが、それでも量が多い。

「全然終わりませんわね、裕太さん」

「思わずそう呟く美咲。」

しかし、返事が返ってくる様子はない。

それもその筈……。

「裕太さん……」

福沢裕太……正確にはその脳波は今、敵の手にある。

取り返したい気持ちはあるが、敵の正体も分からず、何も出来ずにいた。

「ダメですわ！ 私は裕太さんと一号さんを助けると決めたんですもの」

両頬を両手で叩き、顔を上げる。

特訓用に着ている体操着に目を付け、気分転換でランニングに行こうと、美咲は粛々と着替えた。

「今は出来る事をするのですわ……六角美咲！」

そう言い聞かせてから、美咲は部屋を出る。

※※※

丁度六角美咲が家を出たタイミングに、一号が門前にいた。

「一号さん!？」

「……」

明るく挨拶する美咲。

会うのはそこそこ久しぶりだ。何せあの出来事の後すぐに退院し、姿を見せなかったのだから。

勿論連絡などもなく、どこで何をしていたのかも全然分からない。
そんな一号は浮かない顔で問いかける。

「これからどこかに行くのか？」

「ええ。また特訓ですわ」

「そうか」

「一号さんも一緒にどうです？」

「一号は少々困惑している。」

「俺もか？」

「ええ。何か悩んでいるようにも見えましたし、動けばもしかしたら、
気持ちも整理出来ますわよ」

「……そうだな。分かった」

静かに頷くと、美咲が嬉しそうに門を開けて告げる。

「じゃあ決まりですわ！　まずは修行場所の公園まで競争しますわ
よ」

「いきなりか」

「最初から飛ばしていきますわよ！」

「ああ……」

「よいいドン！　ですわー！」

少しおかしな掛け声を聞いてから、美咲と共に一号も走り出す。

※※※

公園まで着いてから、ひとまずベンチで一旦休憩。

美咲が一号に飲み物を渡し、隣に座る。

「そういえば、まだあの時の礼を言っておらんな」
「？」

「暴走した俺を止めてくれた事の礼を、まだ言っていないと思ってな」

「一号はあの時、捨てられた事への悲しきで胸がいっぱいだった。」

「だが首を傾げていた美咲が笑い、答える。」

「良いんですよ。私は当然の事をしたままですわ」

「そうか……」

「それより、退院してから姿を見せませんでしたけど大丈夫でしたの
？」

「……何とかな」

退院後、一号はしばらく野宿をして過ごしていた。

福沢裕太の名義で入院していた為、加害者である自分がこれ以上彼に迷惑は掛けられないと、退院する時もまだ身体に痛みが残る状態であった。

美咲の家に向かったのは、礼を言い忘れた事を思い出したからだ。金も携帯食料もない為、食事もほぼとれていないが問題は……。

——ぐー……。

「どうやら大丈夫じゃなかったみたいですね」

美咲がそう問いかける。

「す、すまない」

「両親に頼んで、夕飯食べさせて貰えるか聞きますから、今日ばかりは甘えなさいな」

「あ……ああ」

美咲はそう言つてスマホを取り出す。

※※※

結局特訓を中断し、一号は美咲の家で夕食を頂いていた。

「心配したぞ裕太。随分店に顔出さない上に、連絡までしなかったからな」

「えつと……その……」

「どうやら福沢裕太は美咲の父に世話になっていたらしく、対応に困ってしまう。」

「実は裕太さん、今日まで入院してたんですよ。退院祝いうちで食べたいというから連れてきたのですわ」

「そ、そうなのか。大丈夫だったか？」

「あ、ああ」

「うちの娘に見舞いに来てもらえるなんて、お前も幸せ者だな」

「は、ははは……」

一号は何とか対応に困りながらも、久々にまともな食事を頂いた。

第八十八話

食べ終わってから美咲の部屋に行き、一号はベッドの上に座る美咲に告げる。

「実はあの時は言えなかったが、俺が何者なのか分かったんだ」

「本当ですか？」

「ああ。あの人……戸間董を好きで仕方なかった平凡な青年、らしい」
「なるほど、つまり貴方は元々普通の人げ……え、今戸間董って言いました？」

美咲が目を丸くして問いかける。

「ああ」

「戸間董って、私の学校に教師として赴任したあの……」

「そうだ。その人が、俺の生みの親だ」

「やはりそうだったんですね……あの方は少しばかり不思議な人とは思ってましたが、まさかそんな身近に犯人がいたなんて」
「……」

「董先生が遙さんの幼馴染や裕太さんを殺してまでしたかった事は、貴方に教えてくれなかったんですの？」

一号は少し黙り込む。

元々の配下である一号でも、そこまでは知らなかった。

彼女が自身の研究で名を立てたいのは態度で分かるが、その為に人を殺す理由がよく分からない。

それに、董は狩野遙と親友同士だったとも聞いている。

「俺にもそこまでは分からない。俺達を作った理由が研究の為なのは分かるが、何故人の命を奪わなければならないのか。それは分からない」
「い」

「そうですね……とところで、その人間としての記憶はどれくらい思い出せたんですの？」

「それも実は……結構曖昧だ」

曖昧、という表現方法すら怪しいが。

今のところ、自分が元々普通の人間だったという証拠証言は、董の発言とサックドライブー装着時に一度見えた記憶のみ。

董の言葉を聞く限り、自分は董に対し恋愛感情……もしくはそれに近い感情を抱いていたのは明らかだが、自分が本来どんな人間だったのかまでは分からない。

「うーん……なるほどです。貴方の記憶や、知っている情報に、董先生の考えを変えさせられる手掛かりがあればと思ったんですがね……」

「まだそこまで……考えてくれたんだな」

「当たり前です。例え貴方が諦めたって、私は諦めませんの」

「……」

「それに正体が分かれば、やれる事が一つ思いつきましたわ」

「なんだ？」

ベッドから立ち上がる美咲。

「私が直接説得しに行くんです」

「……無茶だ！ それに俺やお前をまだ殺さずに放置している事にも、何かしら考えがある筈だ」

「全て承知の上ですよ」

「だが……お前がライダーになったのも、狩野遙がああの行動をとったのも、俺の行動が招いた結果。これ以上お前が背負う必要は……」

「違いますわ」

「え……」

美咲は言う。

「蘇我高校との対決を受けたのも、ライダーになる事を決めたのも、全て私の意思です。だから私はこれからこの力を使い続けますわ」

「……」

一号は少しだけ笑顔を見せる。

「俺がこんな事を言うのは、おかしいかも知れない」

「……はい？」

「でも俺は、これに巻き込まれたのがお前で良かったと今なら思える。俺の願いが叶わなくとも、俺はお前が敵であった事を後悔はしない」

一号が少しばかり安心した顔で、美咲にそう告げる。

「一号さん……」

「お前に頼みがある。聞いてくれるか？」

「なんですか？」

本来敵である筈の美咲が自分の夢の為に行動を起こしてくれる事を、一号は心から感謝していた。

そんな美咲に対し、自分が出る事を少し考えていた。

これがその答え。

「俺が諦めていた願いを、叶えようとしてくれるお前の力になりたい」

「……」

「俺をお前の仲間にしてくれないか？」

「一号さんが、仲間には？」

「ああ」

恐らくは断られるかも知れない。

少し不安だったが、美咲は笑顔で手を差し出す。

「良いに決まっていますわ！」

「……」

予想外の答えに、少しばかり呆然とする。

「私も貴方に勝つ事が出来たら、友人同士になりたいと思っていた所ですの。だから貴方の方からそう言ってくれて嬉しいですわ」

「美咲……」

「これからよろしくお願いしますわ」

一号もそれを了承し、美咲の手を握る。

すると、もう一度握り方を変えてから、拳を何度か打ち付けた。

「これが……お前流の握手か？」

少しばかり困惑しながら問いかける。

「私の好きなあるヒーローの真似ですわ」

「そうなのか」

第八十九話

「はい号令」

「創立、灰、オリゴ糖ごさいました〜」

「つたくこいつらは……」

一号が仲間になった次の日。

取り敢えず仲間全員にその事を伝えてから、董の所に行こうとしていたのだが。

——まずい事になりましたわね。

そう心で呟きながら、昨日の会話を思い出す。

※※※

一号が仲間になって束の間、美咲は彼に忠告を受けた。

「すまんが美咲、この事は他の者達には伝えないようにした方が良い」
「どうしてですか?」

「当然だ。俺をきちんと理解しているのはお前だけだ。恐らく俺の言った事など、誰も信用しない。遥は特にな」

「……」

「それに董が実験体を使って遙やヴィーダ、そしてお前や俺を排除しようとしていたのは、自分がやっている事を誰にも知られない為だ。正体を知った時点で、彼女は恐らく容赦なくお前を消す。それでも本当に仲間に伝えるのか?」

「流石にそこまでのリスクに、皆さんを巻き込むわけにはいきませんわね……」

「勿論美咲、お前だってそうだ。お前が狙われたのは、お前にその力があると思われた故だ。恐らく真実を知らなかった、という事にしておけば逃げられる。そのベルトと引き換えにはなるが、お前は平穏な日々を取り戻せるかも知れない」

「……」 それだけはダメですわ! 例え危険な戦いでも、私はどんな手を使っても生きて帰りますわ!」

美咲の言葉に、一号は安心した顔を見せる。

「すまない……。本当にこの危険にお前を巻き込んで良いのか、もう一度確認していたのだ」

「今更この戦いから退けませんわ。私の仲間やライバル、それに大事なお供にまで手を出していた董先生を、これ以上野放しには出来ませんもの」

※※※

という会話を、就寝前に二人で交わした。

故に遥やヴィーダは愚か、成音や優香もこの事実を知らない。

「取り敢えず、まずは董先生を探さないとですわ」

「美咲っち！」

「うわあっ！」

急に優香に声を掛けられる。

「一緒に帰る系？」

「す、すみませんが今日は先生に用がありますの」

「誰先生系？」

「それは言えませんわ」

「ふーん、じゃあ何を聞く系？」

「もつと言えませんわ」

「ほうほう……。あ、分かった系」

——あれ、もしかしてバレ……。

「逆ナンの達人の三組担任に、ナンパの仕方聞く系？」

「ズゴーツ！」

昭和みたいなノリで倒れる美咲。

「それならウチの遊び相手紹介する系」

「だから違いますの！ 進路の話ですわ進路」

「でも優香っち未だに学年二位系じゃん？」

「うっ、そうですわね……」

学年一位を取れていない美咲では、今のところ推薦枠を貰えない。

「就職でもする系？」

「私が一般企業に収まる器だと思えますの？」

「おー、もしかして政治家にでもなる系？」

「私は総理大臣でも足りないくらいですわ」

「大きく出た系じゃん」

「とにかく、私は総理大臣より上に立つ為にどうすべきか進路相談に行きますから、先に成音さんと帰ってなさいな」

「おっ系！」

「今のはOKのKと系を掛けたギャグですか？」

「ギャグ説明したら面白くない系……」

「大丈夫ですわ。滑ってましたわ」

「大丈夫じゃない系！」

「とにかく行きますわ」

※※※

取り敢えず優香を撒き、職員室へ。

「失礼しますわ」

「なんだ六角。書類の提出期限なら延ばさないぞ」

「ほっといてくださいいな」

生徒会の顧問をあしらう。

「董先生はおりませんの？」

「戸間先生なら、多分四階の奥の部屋じゃないか？ あの空き教室で何かしてるみたいだけど、不気味で近付く気が失せるんだよな」

「分かりましたわ」

職員室を出る美咲。

言われた通り三階の奥の教室へと向かい、中を確認する。

「明人さん……」

明人が眠らされている。

裕太——二号や蒲生の姿はない。

それに肝心の董の姿も。

「いつか助けますわ」

「誰を助けるって？」

「……」

美咲は振り返る。

そこには、白衣を纏う戸間董の姿があった。

第九十話

「董先生……」

「ここに来たって事は、僕に何か用があるのだろうか？」

「ええ」

美咲は臆せず、董へ正直に回答する。

「立ち話も難だし、僕についてきたまえ」

董は口元に笑みを浮かべながら言う。

「分かりましたわ」

少し警戒しながらもそれを了承する美咲。

※※※

董の車に乗って数分。

美咲はカフェまで移動し、自分のコーヒーと美咲のミルクティーを注文。

店員が去るのを確認してから、口を開く。

「僕に自分から話しかけて来てくれたのは、君で二人目だよ。それも生徒会長。僕の話に興味を持ってくれたのかい？」

「……」

「恐らく違うよね。明らかに僕を警戒している。僕には何かある。今の君の顔から、君の心理を予測した」

董はすました顔で話し続ける。

「君が何故僕に近付いたのか、何となく想像がつく。誰から聞いたんだい？」

「……」

美咲は口を開かない。

「大方、一号だよ。彼以外ありえない」

「全部分かった、そうみたいですね」

「安心したまえ。今の僕は丸腰だ。周りの目もあるし、今は何もする気はない」

「……」

「それで？ 君は一体、僕にどういう目的で近付いたんだい？」
董が半目で問いかける。

「単刀直入に言いますわ。これ以上一号さん、蒲生さんや明人さん……それに裕太さんに手出ししないでいただきたいですわ。私なら誰からの挑戦も受けませんし、倒される覚悟もありますの」

「つまり、君を犠牲に他の者に手を付けるな……そう言いたいのかい？」

美咲の答えを待たずに、董が笑い出す。

「くくく……ははは……冗談は止したまえ」

急に怒りの表情を浮かべる董。

「僕は別に君を殺したくて戦っているわけじゃない。僕はただ、狩野遥が許せないから戦っている」

「……」

「君も、あの遥の生み出した実験動物も、狩野遥に関係しているから殺すだけ。それに狩野遥の発明品がこの世に存在しているのは、僕が正しく評価されない」

美咲は怒りを押さえながら話を聞き続ける。

「それは僕の失敗作として同じだ。僕の発明品は、僕が完璧と認めたもののみが残れば良い。失敗作にいつまでもこの世にいられては、僕の汚点になる」

「……」

「一号は、二号に任せてある。じきに彼も死ぬ運命を辿るだろう。それは君も例外ではないが……」

「どうやら、力づくで分からせるしかありませんわね」

美咲は立ち上がる。

「やれやれ、君の性格上こうなるとは思ったが……まあ、良いだろう。僕が君に力の差というものを教えてやろう」

※※※

店を出て、近くの路地裏まで移動する。

「ここなら誰もいないし、好都合だ」

「……」

美咲はボマードライバーを装着。

一方董は、車の中から取り出していたベルトを装着。

美咲の持つボマードライバーと同じく、端末を操作する形のものだが、武器や兵隊などの形はしておらず、シンプルな白い丸の形をしている。

美咲と董、両者ともに端末を取り出す。

『BOMER DRIVE READY?』

顔の左側で構える。

「変身ですわ」

『COMPLETE』

『DRIVE READY?』

「超化」

『COMPLETE』

董も端末を取り付ける……が。

「……」

「あれ、姿が変わってませんわ」

「心配はいらない」

董が何と、生身にも関わらず超高速で駆け出す。

そのままボマーとの距離を詰め、拳を腹に叩き入れる。

「ぐっ……」

「うん、まずまずの出来だね」

「それは……」

「これも僕の発明品さ」

董は笑みを浮かべながら両腕を広げる。

第九十一話

「仮面ライダーや怪人の姿に変わるの、どうやら後付けらしいから、これが自然な姿の筈さ」

「少し油断しましたわね……」

「それが分かった所で……今度こそ戦うとしよう」

董が素早く移動し、ボマーもそれに追いつく。

「はあッ！」

ボマーが最初に、董へとバットを振るう。

「……こんなもの」

しかしそう言って笑った董に回し蹴りされ、折られてしまった。

「そんな……」

折られたバットが再生するが、それを見て董はもう一度笑う。

「流石に再生するか、しかし何度打ち込んだところで……それじゃあ無駄だって分かったよね？」

「それならこれですわ」

ボマーはハイドロフォームカードを取り出す。

『SCAN DRIVE』

端末でカードを読み取る。

『COMPLETE HYDRO DRIVE READY?』

両腕を広げてから叫ぶ。

「超変身ですわ！」

ハイドロボマーとなってから、端末を操作する。

『HYDRO ACCELERATOR DRIVE』

目にも止まらぬ速さで加速し、董にもう一度バットを振るう。

「はあッ！」

今度は折れずに攻撃が命中する。

が、ダメージは入っていない。

「少しはやるみたいだけど、その程度みたいだね」

董は左拳でハイドロボマーを吹き飛ばす。

ハイドロボマーは地面へと叩きつけられた。

「さて、次は僕の番だ」

董の表情が変わる。

立ち上がるうとしたボマーに蹴りを入れてからよろけさせ、そこに流れるように拳と蹴りを叩きいれていく。

「ああッ……」

「どうだ？ 変身能力こそないが、遥の作ったものの比ではないだろう？」

「くっ……」

ボマーは膝をつく。

「話す元気すらない、みたいだね。じゃあこれで終わりにしてやろう」
端末を取り出し、ボタンを押す。

『FINAL DRIVE!』

董は笑みを浮かべ、宙に浮く。

「はあッ！」

ボマーに右足を向けて、そのまま急降下。

見事な飛び蹴りが、ボマーの身体へと突き刺さる。

「うわああッ！」

ボマー……美咲は強制的に変身を解除してしまう。

そのまま地面をごろごろ転がる。

「君の話は少し聞いたけどさ、頂点に立ちたいんだろ？ なのにそんな無様を晒すのかい？」

「……ッ！」

美咲は口元を歪めながら、拳を叩きつける。

「はあ……僕は遥を殺す為に、こんな奴で手を汚さなきゃいけないのか」

「こんな奴……」

「そう言われてもしょうがないよね。大口を叩く割に大した事なかったわけだし」

董は煽り続けた。

「悪いけど、今の君じゃあ僕が直接手を汚す価値はない。君はあとで

蒲生や明人が殺すさ」

「……」

「ああ、言っておくけど多分警察に僕らの悪事を説明した所で無駄だよ。突然変異体というのは希少だ。ごく限られた人間しか、その存在に気付いていないんだから」

「そんな事しませんわ……貴女は私が……」

「……はあ」

「董は飽きたと言わんばかりの表情を見せてから背を向けて、歩き出す。」

「また学校で会おう。あと何回会えるのか分からないけど」

「その背中を見て美咲に出来たのは、痛みに抗い、拳を握りしめる事だけだった。」

第九十二話

あのまま董は教室に戻り、蒲生に電話を掛ける。

『董先生、どうしたんすか?』

「少しまずい事になってね」

そう言いつつも、少し余裕のある笑みを浮かべた。

『え?』

「六角美咲に、僕が黒幕である事を知られてしまった」

『……』

「案ずる事はない。すぐに消す事が出来れば、何の問題もないからな」

『そうですね……その通りです』

董はピクリと眉を上げる。

「自信が無さそうな声だね。一度負けた事を気にしているのかい?」

『……』

「悪いけど君にそんな暇は与えられないな」

『それは……』

「代わりに君には最後のチャンスを与える。それすらこなせないよう

なら、君も一号と同じく廃棄だ」

『……』

「安心したまえ。僕も何もしないわけじゃない。少しばかり危険な方法だが、それでもやるかい?」

董が目をつけたのは、フラスコの中の薬品と、その隣に置かれたドライバー。

『私は六角美咲を倒したいです。その為なら死んでも……』

「良い返事だ」

董は不敵に笑い、通信を切る。

「遥……君はやはり凄い科学者だ。君がいなければ、どれも完成に至らなかった……でもね、科学者として頂点に立つべきなのは僕なんだ」

その為なら、どんな手も使う。

人の道を外れても、科学者として頂点に立とうとする。
それが自分……戸間董だ。

「なあ聞いて良いか？」

明人の身体の中にいる、もう一人の二号が董に問いかけた。

「……」

「こいつを蒲生に使うんだろ？ 何なんだこいつは」

そうやってフラスコを指さす。

「三号の肉体の製作過程で生まれた副産物……。蒲生には説明したが、非常に危険な代物だ」

「どんなもんなんだ？」

董は近くにある透明なボックスに目をつける。

そこには、元気に駆け回るマウスの姿が。

「これを見たまえ」

董が先のフラスコの中の液体をスポイトで吸い、ボックス内に垂らす。

マウスがそれを舐めると、たちまち身体に変化が起きた。

「これは……」

マウスの瞳が片方だけ色が変わり、右半身の筋肉が不自然に隆起する。

恐らく副作用だろう。

だがその肉体の変化で得る力は……。

「……こりやすげえな」

何と肉体が変化した実験用のマウスが、拳でガラスを破壊する。

そのままどこかへ飛び出していく様子を見ながら、董が言う。

「元々突然変異体でない生物の遺伝子を書き換え、尚且つ通常の突然変異体ではありえない力を使う事が出来る。ただし……」

動いていたマウスが突然行動を止め、苦しみだす。

そしてそのまま息絶え、二度と動かなくなった。

「大抵の者は、その膨大な力に耐え切れない」

董は死んだマウスを拾い上げ、即座にゴミ箱に捨てる。

「でも耐え切れるだけの力があるなら、これを使いこなせる」

薬品の力に置いてあるベルトを見て眩く。

明人の所持しているソードドライバーの正統進化型のドライバー。裕太の持つムラマサドライバーも、ソードドライバーの発展型だが、このドライバーはムラマサドライバーに入っている機能を除外した代わりに、ソードドライバーに元々備わっている能力を二倍以上に向上させている。

仮面ライダーへの変身と同じく突然変異体である事が必須条件だが、同時に人工物である事も条件となっている。

「面白れえ……」

二号は笑みを浮かべながら、薬品に目をつけた。

※※※

通信が切れてから、蒲生は自室で笑っていた。

「くく……ふふ……ははは……」

ここでしくじったらどうなるのかとか、董が今作ったものを使って自分がどうなるのかとか、そんな感情は今の蒲生にない。

洗脳の影響で、美咲への憎しみ以外の感情が、蒲生にとってどうでもよくなってしまうているからだ。

「美咲……。例えこの身体が壊れても、私はアンタを倒す。だから待っている……」

狂人のような笑い声が、自室に響く。

第九十三話

美咲に頼まれ、福沢裕太の代わりに美咲の父親の店で勤務を終えてから、一号は美咲の家へ訪れた。

彼女の部屋の扉を数回ノックしてから、ゆっくりと足を踏み入れる。

「……………」

そこにいたのは、身体中に包帯を巻いていた美咲の姿が。

「あ、おかえりですわ」

何事も無かったかのように、笑顔で一号を迎える彼女。

「…………その姿は…………」

「負けましたわ。手を汚す価値すらないと言われて、生き延びましたか……………」

悔しい感情を必死に押し殺して話す美咲。

「すまない…………俺がそばにいてやらなかったせいで…………」

「良いんですのよ。それにあの場においては、貴方も危険でしたわ」

「だが……………」

「大丈夫ですの。今回負けても、次勝てれば良いんですの。貴方は貴方の心配をすれば、それで良いんですの」

「……………」

美咲は痛みを堪えながら立ち上がる。

「貴方の言った通り、やはりあの人は危険ですわ」

「ああ……………」

本当なら、今すぐにでも彼女に戦いをやめて欲しい。

しかしもう、取り返しをつかない事を彼女はした。

彼女を守るなら、刺し違えてでも董を止めるしか…………。

「大丈夫ですの。私は絶対に死にませんわ」

「……………」

「これまでどんな戦いでも生きて帰れた。だから、今度だつて生きて帰れますわ。だから貴方は、今から董さんを取り戻せた後の日々を楽

しみにしていればそれで良いんですの」

美咲は一号の頭に手を乗せて言う。

まるで子供を撫でる母親のように。

「それに、諦めたくありませんもの」

美咲はそう言つて、窓の外を見る。

※※※

夜十一時。

二号は廃ビルの屋上の壁に身体を預け、月を見上げて笑みを浮かべていた。

「……」

光のない赤い瞳に、月の光が反射する。

丁度そのタイミングで、通信が入った。

言わずもがな、董からだ。

『僕だ』

「よう、何の用だ？」

『そろそろ君に、彼を処分して欲しい。でなければ、他の者に一号を倒させるよ』

「おいおい、まだこいつは目覚めてねえんだぞ」

やれやれと笑いながらそう言うが、董が重い声で言う。

『そうか……君もその程度』

諦められた声に、二号は眉を上げて気丈に答える。

「そこまで言われちゃあ仕方ねえな。少し荒療治になるが、何とかこいつを起こしてやるよ」

『それでいい……。頼んだよ』

通信が切れる。

「やれやれ、人使いが荒い奴だな……」

二号はムラマサドライブを装着した。

『ムラマサー！』

端末を操作し、構える。

「変身」

端末を取り付けた。

『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』
「さてと」

二号と裕太の精神を半分融合した状態にしてから、二号はもう一度笑う。

第九十四話

美咲はその先にあるものに、ただただ唾然としていた。

「あ、貴方は……」

「ああ、あれは二号じゃない。福沢裕太だ……」

黒いフードを身につけ、ベルトを装着している青年を見て、一号はそう告げる。

——裕太さん……どうして？

「一号、お前は俺が殺す……絶対に……！」

歯を剥き出して、裕太は一号に怒りを向けた。

その両目からは涙が流れている。

※※※

時間はそれより二日前に戻る。

遙の退院が決まり、美咲達は学校帰りに病院へと向かった。

「ママ、タイイン！ タイイン！」

ヴィーダが飛び跳ねながら、病院の敷地内へ。

それを見ていた成音が笑いながら言う。

「病院内は走っちゃダメよ！」

「ワカッテル！」

とは言いながらも、ヴィーダは飛び跳ね続ける。

「ヴィーダっち、嬉しそう系」

「そうですわね」

「それにしても、また随分怪我したわね会長」

先まで突っ込まれなかったが、成音が思い出したように言う。

「色々あったのですわ」

少し目を逸らしながら美咲は答える。

二人はまだ見逃してもらえる可能性がある。

だから話すわけにはいかない。

「会長？」

成音が疑いの眼を向けるが、美咲に話を逸らされた。

「それより、成音さんはヴィーダさんとは上手くいつてますの？」
「そうね。そこそこ仲良く暮らしてるわよ」

成音は遠くで跳ねるヴィーダに視線を向けた。

「成音さん、変わりましたわね」

美咲が穏やかに笑うと、成音が照れながら言う。

「そ、そう？ あたしはあたしよ。何も変わってないわ」

「あら、最初の貴女は少し嫌そうでしたわよ」

「そ、そんな事ないわよ！」

成音が急に恥ずかしそうに言う。

「照れてる系照れてる系」

「う、うるさいうるさいうるさい！」

※※※

着いた頃には退院の手続きが終わった遙が、私服姿で子供達を眺めていた。

「ママー！」

「……ヴィーダ」

自分に向かって飛ぶヴィーダを、遙が受け止める。

「ママア……」

嬉し涙を流すヴィーダ。

遙がよしよしとその頭を撫でてから、美咲達三人の姿を見て、穏やかな母親の表情から一人の科学者の顔に変わる。

「遙さん」

「私がこれからする事は決めている」

少しばかり俯くが、もう一度顔を上げた。

「あの子の為に、お前達や蘇我高校の生徒達を巻き込んで、ヴィーダを生み出してまでしたかった事。それを今度は、お前達を支える形で成し遂げたい」

「……」

「良いか？」

遙が少しばかり躊躇いながら、手を差し出す。

美咲は迷わずその手を握る。

「当たり前ですわ」

「六角美咲……」

「これから、よろしくお願いしますわ！」

美咲は笑顔で、遥にそう告げた。

第九十五話

その後、美咲達は遙と共に美咲宅へと向かう。

成音が蘇我高校から持ち出した資料を準備し、美咲達は全員で円を作って座り、遙が仕切り始める。

「では、今までの状況を整理するぞ」

次いで成音が、最初に言う。

「まずこの戦いが始まったキツカケは、遙さんの幼馴染が殺害された事よね？」

「ああ。司法解剖の結果でも、凶器が特定出来ず、自分で調べても現代兵器であの傷は到底生み出せないと思っただけだからな」

「それで……その犯人を探し出して罪を償わせる為に、遙さんは自分の技術を手に蘇我高校の教師になったわけね」

「そうだ」

少しばかり後悔の表情を浮かべる遙。

「次にだけど、会長はどんな経緯で仮面ライダーボマーになれたの？」

「あ、そう系そう系！ ウチもよく知らない系」

「確かにちゃんと話した事ありませんわね。私は……」

一号の肉体に入っていた裕太からボマードライバーを受け取り、アーミードライバーを使用していた蘇我高校の生徒を倒した所から全てが始まったと話す。

「なんか凄くヒーローチックね……話盛ってないわよね？」

「盛ってませんわよ！」

「話を戻すぞ。そこで私は蘇我高校の科学部にフレイムシャワードライバーを渡し、あの学校の生徒を利用するように頼んだ」

「それであたしに頼みに来たわけね」

成音が腕を組む。

「ああ、そういう事になるな」

「あの後、蘇我高校の生徒会長……足利明人が出て来たわよね」

「私はあの人に勝てませんでしたわ」

「ソードドライバーは旧式のドライバー故、ボマードライバー相手にあそこまで立ち回れるのは中々の実力と言える」

「この資料にもそう書かれてるわね。初期型だつて」

「その後三年の前田が、ホースドライバーを持ち出し、六角美咲に戦いを挑むが失敗。予定通り、蘇我高校との決戦で美咲と成音組とヴィーダが戦う事になった」

美咲達はあの時の事を思い出す。

あれは蘇我高校との決着をつける為の戦いだったが、同時に遙達を狙う者がいる事を知るキツカケにもなった。

「ハイドロフォームとなったボマーのおかげで、私達はどうかになつたが、あそこで蘇我高校の生徒達は私のせいで怪人化し……」

「裕太さんの人格が一号さんから抜き取られて二号さんの所へ」

美咲が少し俯きながら言う。

「その後、一号や二号を動かしている者によって蒲生や明人を洗脳され、美咲達はそれと戦った。二号によって、福沢裕太本人はすでに死んでいる事を伝えられる」

「ここまでが今まで起きた全てね」

成音が呟く。

「遙さん、相手の正体に何か心当たりはないの？」

「そうだな。私と同じくヴィーダのような人工突然変異体を作れて、尚且つ人の脳波を操作する事によって洗脳やスワップも思うがままに出来る。恐らく科学者で、尚且つ突然変異体の研究に従事している者だな」

美咲がその言葉に対して質問した。

「突然変異体の研究は、世間でどの程度知られているものなんですか？」

「そもそもの話、突然変異体の存在は希少だ。ある程度は遺伝もあるのだが、全てが全てそうでもない」

「つまり……」

「突然変異体の数の少なさ故に、都市伝説レベルでしか世間で存在が知られていない。だからこの研究をしている者は百にも満たない」

「逆に言えば、その中に必ず犯人がいるって事になるわね」

成音が冷静に言う。

「その中にいるとして、あとは動機だな。私の幼馴染や私の発明品、そして私自身を殺さなければならぬ程の動機が何なのか。そこまで分かれれば、大体犯人が絞れる」

「……」

美咲は遥の言葉を聞いて、董と話した時の事を思い出す。

彼女は狩野遥が許せないから戦っていると言っていた。

詳しく聞く事は出来なかったが、もし遥に何か思う所があるとしたら。

「遥さん」

「なんだ？」

「遥さんの友人という説はありませんの？」

名前は出さずに、抽象的に問いかけてみる。

「私の友人？」

「ええ。決してあり得なくはありませんの」

「会長にしては中々鋭い質問ね」

感心しながら美咲を見る成音。

「ウチも理解するの難しい系……」

「ヴィーダモ……」

「二人に関しては外に出てても良いのよ……？」

会話についていけない二人を見て呟く成音。

「友人で同じ研究をしている者なら心当たりがある」

「本当ですか？」

「ああ。高校時代からの友人、戸間董だ」

第九十六話

「戸間董……つてうちに赴任してきた教師と同じ名前ね」

成音が眼を細めて呟く。

「あいつが教師……どんな人物だった？」

「えっと、青髪に赤い瞳で……人間の進化の研究をしていると言ってたわね。数千分の一の確率で新たな可能性を持った人間が生まれるとか何とか」

「それなら、同一人物で間違いはないな」

「でも問題は、友人であるその人がどういう動機で遥さんを狙っているかよね？」

「分からない……少なくとも、私自身が直接彼女に何かした、という覚えはない。それに彼女は幼稚で負けず嫌いだが、私に勝ちたいからとそんな卑怯な手を使うような奴ではなかった筈だ」

やはり一号の言葉通りだ。

彼女が犯人だという事実を受け入れさせるのは、遥の言葉を聞く限り難しい。

今ここで正解だと答えたとしても、それが通る事はないだろう。

「うーん……昔はどういう事してたの？」

「昔か……」

少し遥は笑う。

「私も董も、突然変異体の存在を知る者という共通点で友人関係になった。お互い競い合ったりもしましたし、学生時代は普通に遊んでたりもした」

「最後に会った時は、どんな会話をしたの？」

「そうだな。もう半年以上前の話になるが、私はあいつの相談を受けた」

何とか思い出しながら遥は続ける。

「確か董に、私の研究資料をくれと頼まれたが……断ったんだ」

「……」

「その時のあいつは、思いつめた顔をしていた。何というか、あいつらしく無かった。だから余計渡せなかった。普段私に勝ちたいと言っていたあいつが、土下座してまで私にそうして欲しいと頼むのが、少し怖く感じた」

遥は俯いて言う。

「でもそうになると、それが原因でという可能性もあるわね」

成音が鋭い瞳で告げる。

「あの時のあいつは、恐らくスランプでおかしくなっていたんだ。私の言葉で冷静になってくれた筈なんだ……そんな事あるわけが……」

遥はあくまで董を信じようとする。

だが成音があくまで冷静な考えで、それに反論する。

「ならもし、そのおかしくなっていたのが嘘だったとしたら？」

「え？」

「こういう考え方はどう？ 董先生自身は遥さんの研究成果を使って、遥さん以上の評価が欲しいと望んでいた。遥さんを世間的には董先生の二番煎じにする事で、遥さんの研究を全て董先生の手柄にしようとしていた……」

「……」

「でもそれが出来なくて、まずは遥さんの心の支えである幼馴染を殺した。それでも心が折れていない……寧ろその復讐の為に研究を続けようと決心した遥さんを見た董先生が、遥さんや遥さんの発明品ごとこの世から抹消しようとしている……そう考えると、割と自然よね」

「しかし……」

「遥さん、もしその幼馴染の為に今まで戦ってきたのなら、友人相手でもちゃんと疑わなきやダメよ。そういうのは、視野を狭めるだけだから」

成音はあくまで厳しい言葉を投げる。

「それに、あたしはヴィーダに悲しんで欲しくないの。だから遥さんに死なれるわけにはいかないのよ」

「ナリネ……」

「そ、そうか……」

その言葉を聞いて、遙も少しばかり考えを改めたのか、表情が変わる。

「会長はどう思う?」

「わ、私ですの?」

「ええ。アンタの意見も聞いてみたいのよ」

「……」

美咲は黙り込んだ。

成音の考えこそ正解かどうかは分からないが、董がこの一連の事件の黒幕なのは、紛れもない事実。

ただ、このまま話が進んでしまえば間違いなく成音達も命を狙われる。

「私は結論を出すのは早いと思いますわ。他の可能性についても、探るべきだと思いますの」

「そう、分かったわ」

「では、今回はここでお開きにしますわよ」

「え、これで終わるの?」

「ええ。私も少し用事を思い出しましたし、キリも良いところで」

「それもそうね」

「取り敢えず、何か分かった事があれば報告しますわよ」

「ああ。私も少し考えてみよう」

遙が立ち上がる。

「遙さんはこれからどうするの?」

「取り敢えず一度、蘇我高校に戻ろうと思う」

「大丈夫なんですか?」

「あそこには実験機材やパソコンを置きっぱなしだからな。成音が資料を無事に持ち帰れたのを見るに、中は何もいじられてないのだろうか?」

「ええ。何も手が付けられて無かったわ」

「なら、これからの敵に対応出来るアイテムを作ろうと思う」

「対応出来るアイテムですか?」

「ああ。私はあの決戦の時にハイドロフォームカードを手渡したが、あれは本来ボマー用の強化アイテムではないんだ」

美咲はそう言われて少し考える。

「もしかして、黒いボマーの事ですか？」

「黒いボマー……まさかお前、見たのか？」

「ええ。私は前に、黒いボマーと会ったんですの」

「……こうしてはいられない」

遙が顔を青くして、美咲に告げた。

「あの黒いボマーは危険だ。もし敵側にあのドライバーを取られたのであれば、早急に対処せねばならんな」

第九十七話

遙はそう言い残し、急いで部屋をあとにした。

他の面子も敵の正体について考えてみると言い残し出て行き、美咲のみが残って、一号の帰りを待つ。

「……」

「ただいま」

仕事から帰った一号が、部屋に入ってから扉を閉める。

「おかえりですの」

「俺に用があると聞いた。用件はなんだ？」

「実は……」

美咲は一号に、成音達が真実に近付きつつある事と、黒いボマーの話をした。

「そうか」

「黒いボマーのドライバーが遙さんの最高傑作で、今の私達に到底敵わないのであれば、遙さんにだけでも、真実を伝えた方が良いと思いますわ」

「……確かにそうかも知れないな」

一号は俯きながらもそう告げる。

「でもその場合、貴方の存在をどう認めてもらうかですわね」

「いや、俺はあくまでお前個人の仲間という事にしておいた方が……」

「それでは、もし私が倒された時に貴方が疑われてしまいますわ」
「……」

「貴方が皆に受け入れて貰えない事を心配しているのは分かりますが、どうしても私達と行動する以上、お互いの信頼は必要ですわ」

「信頼……」

一号は静かに呟く。

「それに、貴方が犯した罪は……貴方自身が全て悪いわけではありませんの。その罪と向き合うと決めたなら、きつと遙さんも貴方の力になつてくれると思いますわ」

「……」

「大丈夫ですの。私が何とか説得出来るように頑張りますわ！」
そう意気込む美咲。

※※※

というわけで、美咲は遥を家へと呼び出す。

「私だけを呼ぶとは……珍しい事もあるものだな」

「あー、実は貴女に話す事が二つ程あるんですの」

「私に話す事？」

遥が眉を潜めた。

「実は私、遥さんを狙う人の正体を掴みましたの。というより、もう話して戦いましたわ」

「……！ それは誰なんだ！」

冷静さを失った遥が、美咲に迫りながら問いかける。

「昨日成音さんが推理していた内容は正しかったんですの。貴女の幼馴染や裕太さんを殺すように指示したのは、戸間董先生……」

「……そう、なのか」

遥はショックを受けたような顔をしてから、そう答えた。

恐らく彼女自身は、それを一番否定したかったのだろう。

「ある人から聞いて、私はその真実に辿り着いて戦いましたが、私は負けましたわ」

美咲はまだ痛む傷を押さえる。

「……」

「もう一つの要件は、そのある人を貴方に紹介する事ですわ」

美咲が真剣な顔でそう告げてから、扉の外で待っている筈の一号に入るように言う。

「……」

静かに一号が、美咲の部屋へと入って来た。

「お前……」

遥が一号を睨みつけるが、一号は肅々と両目を閉じて座る。

「一号さんが、私に教えてくれたんですの」

「……こいつを連れてきて、どうするつもりだ？」

「私達と共に戦いますの。成音さんや優香さん、ヴィーダさんを危険な目に遭わせずに戦う為にはこれしかありませんの」

「話にならないな。よりによって、そいつを仲間にしようなど」
そう言って立ち上がる遥。

「気持ちはこちらからですの。ですが今の彼は……」

「もう良い」

一号が止める。

「一号さん……」

「狩野遥」

「……」

一号が遥の名を呼ぶ。

「俺は決して、自分が許されるべき存在でない事は分かっているつもりだ。せめてもの償いとして、董は俺達が止める。だから……」

遥が一号に近付いて、腹に拳を叩きつける。

「……」

「殺す事を指示したのが董なのは分かった。決して……それを認めたくはないがな。だが、私は何よりお前が許せない。お前のせいで、私の大切なものが壊されたんだからな！」

遥は涙を流しながら、ロードドライバーを取り出す。

『ROAD DRIVE READY?』

「変身」

『COMPLETE』

端末を取り付け、遥は指揮官怪人へと変身する。

第九十八話

「……！」

一号も、咄嗟にサックドライバーを取り出す。

『SMASH DRIVE READY?』

「変身」

『COMPLETE』

その身体をサック怪人へと変えてから、窓を開けて外へと逃走。
「待てー！」

指揮官怪人も、窓から外へ。

そのままどこかへと移動していく。

「変身ですわー！」

『COMPLETE』

ボマーも、二人を追いかける。

※※※

屋根と屋根を移動しながら、二人は戦いを続ける。

ボマーは二人を追いかけていた。

「お前のせいだ。お前が殺したせいで、私は二度とあの子の顔を見られなくなっただんだ！」

指揮官怪人は兵を召喚して、サック怪人へと銃撃させる。

それを何とか回避したサック怪人が、顔を歪めていう。

「ああ……俺のせいさ。だからこそ生きてその罪を償う。美咲もそれを望んでくれているから」

「生きて罪を償う？ ふざけるな、そんな事をした所であの子は返ってこない。お前がするべき事は、私の為に今ここで死ぬ事だ！」

間合いを詰めて、指揮官怪人はサック怪人へと剣を振り下ろす。

何とか拳で剣を受け止める。

「……ッー！」

サック怪人は反論すべき言葉を失う。

彼女の怒りは尤もだ。

サツク怪人の願いなど、傍から見れば人殺しのわがままに過ぎない。

美咲がいくら許しても、大切な人を殺された者がそう簡単に許してくれるはずがなかった。

「やめなさいな！」

ボマーが間に入って、二人を弾く。

「私が諦めかけていた一号さんの願いを叶えると決めたんです。もし一号さんが生きる事を許さないというのなら、まず私を殺しなさいな」

「六角美咲……お前の考えは欲張り過ぎだ。私の願いとこいつの願いを両立するなど、どうすれば出来るというのだ！」

「それは私にも分かりませんの！　けど絶対にやりたい……やらなくちやいけないんですわ！」

ボマーはバットを下ろして言う。

「私に敵も味方もありませんの。全力で何かの為に一生懸命生きる人なら、皆仲間で、ライバルですの。だから幼馴染の為に手を尽くす遥さんも、董さんの近くで生きる為に董さんの考えを変えたいと足掻く一号さんも、どっちもかけがえのない仲間ですの！」

指揮官怪人が俯きながら、変身を解く。

やるせない顔で、こう言った。

「もう良い」

泣きそうなのを堪える遥。

「遥さん……」

「もう好きにすると良い。今の私じゃお前に勝てない。それにそいつを殺した所で、あいつは返ってこないしな」

「……」

「ボマー用のアイテムの開発に戻る。二度ともう、そいつを仲間にしようなどと言うんじゃないぞ」

遥はそう告げて、その場から去っていく。

「……」

美咲も変身を解く。

その後から、声が聞こえた。

「これで分かっただろ」

「……」

「皆が皆、お前のように強いわけじゃない。お前は確かに強いし、どんな困難が相手でも全力で立ち向かう事が出来る。俺はお前のそういう所に救われたが、大抵の奴にお前のような心はない。大切な者を殺した人を仲間として受け入れるなど、無理に決まっているんだ」

美咲は俯く。

「ひとまず帰ろう。あまり外に長居するのは危険だ」

「ええ……」

第九十九話

時間は経ち、夜遅くに。

一号は既に眠りににつき、美咲のみベランダに出て……外を眺めていた。

「……」

自分の欠点を言われたのは、これで二度目だ。

生徒会から出ていく時の成音も言っていた、自分の悪い癖。

自分が出来る事は、努力すれば他人も出来るようになると思いつむ癖。

そのせいで、生徒会がほぼ解散状態まで追い込まれたというのに。

「……私に出来る事は、他の誰かが簡単に出来る事じゃない。本当に、そうなんですの?」

それでも、ここまで美咲がその心意気で戦えてきたのは事実だ。

今やり方を曲げたら、多分遙や一号を笑顔に出来ない。

それに裕太も……帰ってこられない。

「二人が共に歩ける道は絶対ある筈ですの……ですから考えるんですわ!」

美咲は自分にそう言い聞かせる。

けど、迷いがまだ残っているのもまだ事実だった。

※※※

——裕太。裕太!

誰かが、俺を呼んでいる気がする。

聞き覚えのある女性の声。

「……ここは?」

辺りを見回す。

俺の実家のリビングだ。

両親が旅行中の事故で亡くなって、今はもう他人の住処となっている筈の。

俺の姿もスーツではなく、高校時代に着ていた詰襟。

「裕太、何ぼーっとしてんのよ。早く食べないと遅刻するよ」
声の方を向く。

テーブルに置かれているトーストやハムエッグを作ってくれたであらうその人は……。

「母さん？」

「どうしたのよ裕太。そんな目丸くして」

俺は思わず立ち上がり、その身体を抱きしめた。

「母さん……！」

「な、何なのよ一体……」

「また会えた……会えたよ」

「まったく……」

母さんも少し呆れながらも抱きしめ返す。

しかし。

「ん……違う」

「え？」

「アンタ……誰？」

抱きしめていた母さんが、俺を突き放しながら言う。

「裕太はもつと温かかった。なのに……アンタは誰なんだい？ 裕太

の顔をして、ホントの裕太をどこにやったんだい！」

「違う……。俺は裕太だ！ 俺は裕太なんだよ！」

「うるさい！ 裕太の顔をして、私に近付かないで！」

そう言われた瞬間……全てが俺の視界から遠ざかる。

母さんも何もかも消え去り、次に見えたのは。

「あれは……」

俺だ。

まだ蘇我高校に赴任する前で、大学を卒業してすぐの頃の俺。教師の心得、的な本を読みながら幸せそうに歩いている。

「……！」

その背後にゆっくりと近付くのは、黒いフードを被った男。

男は周りに人がいないのを確認してから、裕太の前に現れる。

「うわあッ！」

黒フードに驚いた俺が仰け反る。

だがそれが誰なのかを確認よりも早く、黒フードは拳で腹に穴を開けた。

「あああッ！」

腹を押さえながら、俺はゆっくりと崩れ落ちる。

そこで見えた。

その男が、俺と同じ顔をしているのを。

「これが、俺の最期……」

こんな事があったせいで、俺は自分を殺した奴の身体に入れられて、美咲達をこの件に巻き込んだ。

俺は……人間ではなくなってしまった。

「よう」

その様子を見て涙すら流しそうになった俺の前に、俺の姿をした男が現れる。

「お前は……」

第百話

「どうよ、お前の最期。あつけないよな」

二号が、その瞬間を見ながら嘲笑する。

「……」

「殴る元気もないか。まあ、そうだよな。理由あるとは言え殺されて、知らないうちに自分を殺した奴の味方してたなんて、誰も信じたくねえよな」

肩に手を乗せてくるが、俺はそれを払いのけた。

「はあ、しょうがねえ奴だなあ」

「お前に何が分かるんだよ……。俺はお前達と違う。お前達さえいなければ、俺は人間の教師として生きられた筈なんだ。奪ったお前達が偉そうにするな！」

二号に向かって拳を振るう。

が……当たる事なく避けられる。

「教師ねえ……だがお前、蘇我高校の教師になった事は後悔してるだろ？ なら逆に、俺達と関わらずに人間として教師になってたらどうなっただろうな」

「それは……」

二号の問いかけに、俺はどう返していいか困ってしまう。

「あのよ、何故俺がこんな事聞いたか分かるか？」

「……」

「確かにお前が死んだのは、俺のお袋や一号が、自分達の計画の為に前を必要としていたからだ」

二号は冷静に告げる。

「でも、逆に言えばお前が蘇我高校の教師にさえならなければ、お前は選ばれずに済んだ。どこかの知らない誰かが、お前の代わりに選ばれたかも知れないのにな」

「……」

「運が悪かったのもあるかも知れねえが、これは蘇我高校に入る事を

選んだお前のせいでもあるんだぜ？」

「うるさい……うるさい！」

凶星を突かれたような気がして、俺は地面に拳を叩きつける。

「そんなの、俺がどうにか出来るわけないだろ……どうしたら良かったんだ……」

「どうしたら、なんて考えた所で今更どうなるんだよ」

「……」

「お前は死んだ。お前を殺した奴の中に入れられて、今は俺の中にいる。出来るとすれば、俺と二人三脚で生きるか、美咲に期待してお前が助かる方に賭けるかだな」

「くっ……ううっ……」

その現実に対して、俺は泣く事しか出来ない。

「まあ、どちらにしてもお前が元の身体に戻れる事はないけどよ。でも、お前は正直兄貴の事どう思うんだよ」

「……」

「ここは俺の中だ。何を言おうが、俺以外の誰にも聞こえやしねえ」

「……許せないさ。俺を殺したお前や一号を、絶対に許せない」

涙を啜りながら答える。

「そうか。なら、お前を少しだけ自由にしてやるよ」

「え……」

「俺が殺されるのはゴメンだが、一号を俺の能力を使って殺してみろ。どうせあいつはもう用済みだしな」

「……」

「躊躇う理由はないだろ？ 俺もあいつもただの人形だ。どうせ殺した所で、人殺しにならない」

「……」

俺は俯く。

出来るわけがない。

した所で俺が生き返るわけでもなければ、むしろ美咲を悲しませるかも知れない。

出来ればこのまま何もしたくない。

けど……。

「そうやっていたい気持ちは分からなくもないが、お前に時間はないぞ。もし美咲がお前を助けられなかったり、お前がこの身体を動かす事を拒んだりしたら、お前は死ぬ。それに……どうせ生き延びた所でこの身体の寿命は短い」

「どういう事だ」

「この身体はあくまで人工物だし、それに成長促進させる為にヤク漬けにされた代物だ。そんなもんが長生き出来るとでも思ってたのか？」

「……」

「どうせ死ぬんだったらよ……せめて自分の仇くらいきちんとした方が良いんじゃないのか？」

「……」

「今だけはお前の味方でいてやる。お前の辛い気持ち、俺も一緒に背負ってやるからよ」

悪魔の囁きだ。

そんなの考えなくても分かる。

なのに……俺はその誘いに乗る事しか出来なかった。

「すまない……美咲。これがお前に対する裏切りなのは分かっているつもりだ。けど、俺の死が避けられないなら……せめて自分の仇だけでもちゃんととりたい。だからその為に、お前の理想を壊す事を許してくれ」

俺は二号の手をとる。

二号が俺に見えないように、口元に笑みを浮かべた。

第百一話

遙との交渉に失敗した次の日。

それが起きるまで、残り一時間と少し。

「一号さん、一緒に修行行きませんか？」

「ああ、そうだな」

特に嫌そうな様子もなく、粛々と準備をする一号。

「一号さん」

「……なんだ？」

「私はまだ諦めてませんの。二人が共に歩ける未来があると」

「……」

一号は何も答えない。

「一号さん……」

※※※

そのまま外に出て、美咲と一号はまず公園までランニング。

サンドバッグが吊るされた木の所まで移動し、まずはキック力を鍛える修行から始める。

「はあッ！　とうッ！」

ライダーになってからこの修行を始めたが、僅か一か月と少しで、サンドバッグが既にボロボロになっていた。

あちこち穴が空き、そうでない所にも傷がある。

「せいやっ！」

最後にカブトを意識した上段回し蹴りを放つてから、美咲は息を吐いて休憩。

「一号さんの番ですわよ」

「ああ」

座っていた一号が立ち上がり、サンドバッグの前に立つ。

「……はっ！」

美咲と比べると静かな掛け声を上げながら、軽く拳を振るう。

あの時のような力は発現せず、普通にサンドバッグが揺れる。

「……やはりあの力は使えないか」

そう呟いてから、今度は蹴りを放つ。

「やつ、とうっ！ はあッ！」

力こそ発現しなかったが、最後の一撃が、サンドバッグを多く揺るがした。

「……」

「中々よくなってますわ」

「そうか……」

落ち着いた声で、美咲にそう返す。

ベンチに座って、飲み物を飲んでから……一号は美咲に言う。

「美咲。俺はそろそろ、董を止めに行こうと思う」

「……」

美咲は真剣な眼差しで言葉を聞く。

「昨日の遥の態度を見て、俺のした事の重さを……より理解出来た気がする。だからこそ、俺は少しでも早く董を止めて、昔の俺が好きだった董に戻りたい」

「一号さん……」

「お前にも、もう迷惑は掛けられないしな」

一号が言う。

「私も、早く貴方や遥さん……皆に笑顔になって欲しい。それに、裕太さんも。皆、私の大切な仲間ですから」

「……」

「一号さんがもう行きたいと言うのであれば、私は喜んでそれについていきますわ」

美咲は笑顔でそう返す。

「……ありがとう」

一号も小さく笑って、そう答えた。

その時。

「美咲ー！」

一号が美咲を庇いながら、何者かが振るった斬撃を背中から受ける。

「……………」

一号は痛みにも悶えながらも振り返り、その姿を捉えた。

「ムラマサ……二号か」

刀を振り払ってから、荒い息を吐く仮面ライダームラマサの姿。変身を一度解いてから、フードを取ってその顔を見せる。

「くうっ……うううッ！」

美咲は涙を流してうなり続ける彼を見て、目を見開いた。

「あ、貴方は……」

「ああ、あれは二号じゃない。福沢裕太だ……」

一号はそう告げる。

——裕太さん……どうして？

「一号、お前は俺が殺す……絶対に……！」

歯を剥き出して、裕太は一号に怒りを向けた。

第百二話

「お前のせいで、俺が死んだ。俺の仇は、俺がとる……！」

譫言のように、涙を流して呟く裕太へ、美咲は言う。

「裕太さん、落ち着いてくださいな！」

「美咲、お前は下がっててくれ」

「しかし！」

「下がれよ！ 俺はこいつを殺さなきゃいけないんだ！」

あんなに苦しそうな顔をしているのは、初めて出会った時以来……いや、それ以上だ。

「……」

一号は葛藤しながらも、ベルトを取りだす。

「そうやって、お前はまた自分を作った奴の為に命を奪うのか……」

「……」

一号は俯きながら、端末を操作する。

裕太はそれを見て更に激怒する。

「……ふざけるな!!」

ムラマサドライバーのボタンを押し、端末を閉じる。

『ムラマサ！ 御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

「あああああああッ!!」

悲痛な叫び声を上げながら、ムラマサは一号目掛けて地を蹴った。

「……」

一号もサックドライバーを取り付けて変身する。

「変身」

『COMPLETE』

一号はサック怪人へと姿を変える。

「裕太さん、一号さん……」

「とつとと殺してやる……この人形が！」

ムラマサは消える程の速さで、サック怪人と距離を詰めていく。

「せやっ！」

荒々しい一太刀が、ムラマサから放たれる。

サツク怪人は難なく躲し、その刀を弾き飛ばす。

「お前とは戦えない。お前を傷付けければ、美咲が悲しむ」
「ならとつとと死ねよ！」

怒りと憎しみに感情を蝕まれたムラマサは、何度も刀を振るう。

「お前さえいなければ、お前が俺さえ選ばなければ！」

「……」

美咲もボマードライバーを取り出す。

「手を出すな美咲」

サツク怪人が何とか捌きながら、美咲を止める。

「これは俺が解決すべき問題だ。どうにかして裕太を止める。だからお前は下がっている」

「止める？ ふざけるな！ 俺は止まらない！ お前が死ぬまで、俺は止まらない！」

ムラマサの太刀が、ついに少しでもサツク怪人の腕を霞めた。

「……ッ！」

「やつと隙を見せたな……」

ムラマサが狂ったように笑う。

「覚悟しろよ」

「……」

サツク怪人は咄嗟に端末を操作する。

『WAVE DRIVE』

端末を取り付けて、拳から波動を放つ。

ムラマサを大きく吹き飛ばし、木へと激突させた。

「……」

「くっ……」

「もうやめよう。こんな事をして、お前は……」

「……黙れ黙れ！」

ムラマサはそう言って立ち上がる。

そして手から光を放つ。

それを何とか紙一重で回避してから、サツク怪人は目を見開く。

「これは……」

「ああ。二号の能力の一つ……脳波破壊だ」

第百三話

戦いが始まって数分。

脳波破壊も交えながら、ムラマサはサツク怪人をゆつくり追い詰めていく。

「…………ツ」

サツク怪人は変身前に負ったダメージもあり、満身創痍の状態。

ムラマサは追って攻撃し続ける。

「頼むよ。死んでくれよ…………何故死んでくれない！」

泣きそうな声を上げながら、ムラマサは攻撃を続ける。

「早く死ねって言ってんだよ！」

もう一太刀が命中。

「…………！」

美咲の足が動きかける。

しかしサツク怪人は尚も止めた。

「手出し無用だ…………美咲！」

「…………！」

美咲を見ていたサツク怪人の腕に、刀が突き刺さる。

「くうっ…………」

「…………」

サツク怪人の変身が解ける。

ダイレクトに刺さった刀が、一号の体力を奪い、その場に崩れ落ちた。

※※※

俺は自分で追いつめた一号を目にして、喜びを禁じえなかった。

「これで…………俺の復讐が果たせる」

こいつの脳波を破壊して、こいつの身体がぐちゃぐちゃになるまで、刀で突きさしてやりたい。

自分が狂い始めている事に気付きつつも、俺の頭は、一号を殺す事で一杯になっていた。

それ以外の事が眼に入らない程。

「終わりだ」一号……」

「……ッ」

「消えろ！」

俺は渾身の脳波破壊を、右手から放つ。

動けない一号へ、真っ直ぐと。

「……」

これでひとまず、一号の命は終わりだ。

そう思っていた。

だから……見えていなかった。

一号の前に現れる、美咲の姿が。

「……ッ！」

気付いた時には遅かった。

俺の放った脳波破壊は、美咲の身体へとダイレクトに命中し。

——彼女の脳波を……破壊した。

「……」

自分にも、はつきりと伝わった。

何か大事なものを壊してしまった……そんな手ごたえが。

最早人間の魂と言っているいい脳波を破壊された美咲が、力なくその場に倒れ、二度と動かなくなった。

「美咲……美咲！」

一号が刀を腕から何とか引き抜き、倒れた美咲へ声を掛ける。

「あ……ああ……」

俺が……殺した。

大事な仲間を……自分の手で。

『あーあ、これでお前も人殺しだな』

二号が他人事のように、俺の頭の中で呟く。

『まあ良いや。さっと一号を……っっておい聞いてんのか』

人殺し……その言葉が、俺の心を乱す。

「っ……あああああああああッ!!」

俺のせいで美咲が……美咲が死んだ。

「あああ……あああッ！」

『おい』

二号が呼ぶ声すら、俺の耳には入らない。

「……ッ！ うわああああああああああああああッ！」

俺の叫び声が、他に誰もいない公園一帯に響く。

一号がすぐに美咲を担いでその場をあとにしていたが、その姿が俺の瞳に映る事はなかった。

第四百四話

倒れた美咲の身体を、彼女の自宅まで運んでから、一号は蘇我高校の科学部部室にいる遥の下へと駆け付けた。

「お前の顔を見てる暇などない。今の私は忙しいんだ」

息を荒くして近付く一号に対して、遥は機嫌が悪そうにふるまうが、一号は構わず近付く。

「なんだ」

「美咲が……美咲が……」

一号は伝えようとして、その場に崩れ落ちる。

「美咲が……死んだ。福沢裕太に、脳波を破壊された……！」

「なんだと……」

遥が眼を見開く。

そのまま急ぎ足で、部室をあとにする。

※※※

遥以外の者にも、美咲の死が伝わるのにそう時間は掛からなかった。

山内成音や岸本優香、ヴィーダにも伝わり、皆が美咲の死体の前で、それぞれの胸の内を見せていた。

「美咲っち……」

「ミサキ……」

二人が泣いていた。

成音は少し離れた場所で、泣くのを堪えながら悔しそうにしている。

「どうして……どうしてなのよ。あたし、まだアンタを超えられてない。アンタが死んじゃったら、あたしは誰を目標に生きれば良いのよ！」

成音が叫ぶ。

そのまま近くで見っていた一号に近付き、

「ねえ……教えてよ。誰がこんな事するように指示したのよ」

「残念だが……お前達には言えない」

一号はそう告げる。

だが成音は、

「どうしてよ……アンタは敵側の人間だったんでしょ？ なら知らない筈はないわよね！ こんな事を裕太にやらせた黒幕は誰!? 言いなさい！」

胸倉を掴みながら言う。

一号は冷静に返答した。

「俺が誰かを答えれば、お前達は俺を信じたのか？」

「……！」

「美咲だけは俺を信じてくれた。だから美咲とだけ、協力していたんだ。お前達を今以上の危険に巻き込まない為に」

「ならアンタだけで戦えば良かったじゃない。何で会長を巻き込んだのよー！」

「あいつがそういう選択をしない事は、お前達が一番よく知っている筈だ」

一号の言葉に、成音は脱力する。

「美咲も、お前達を危険に巻き込みたくないと思っていたんだ。だから犯人の正体を美咲と遥にしか伝えていない。もしお前達が知れば、美咲と同じようにこれから狙われる事になるのだぞ」

気付く事が出来なかった。

思えば、何か隠し事をしているような感じではあった。

今の今まで、美咲が一号と親しくしていた事を知らなかった上に、一号も救う為にと一人で背負って戦っていた事も知らなかった。

もし気付いていたら、止められなくても協力くらいは出来たかも知れないのに。

「……会長」

その拳が美咲の部屋の床に叩きつけられる。

重い音が、部屋に響く。

第百五話

気付いた時には、俺は戸間董と名乗る女性の拠点にいた。恐らく、一号や俺の中にいる二号を作った者がいる拠点。その拠点は、美咲達の通う学校だ。

「……」

あの後、俺は涙が枯れるまで泣き続けた……と思う。

どこかで勝手に身体が動かなくなり、痺れを切らした二号が入れ替わって、ここまで移動したのだろう。

気付けば、董と名乗る女性の前にいた。

「久しぶりだね……いや、君の記憶では僕と今回初めて会った事になるのかな？ 福沢裕太」

「……」

こいつは一号に俺を殺させた者。

本来なら一号と同じように、殺して然るべき人間なのだろうが、今の俺にそんな元気はなかった。

自分自身を殺されたという事実に対する怒りで回りが見えなくなり、俺は自分の手で美咲を殺した。

俺のせいで、俺は大事な仲間を……。

「その顔はもしかして……六角美咲でも倒したか？」

「……」

「よくやってくれた。一号を逃したらしいが、君にしては大したものだ」

わざとらしく笑って、肩に手を乗せる。

が、それを俺は払いのけた。

「俺に触るな……！」

「可愛げがないねえ。あの一号でさえ、僕にデレデレで甘いのに」
椅子に座りながら、なんかのスイッチを取り出す。

そしてボタンを押した瞬間……。

「ぐっ……」

頭が痛みます。

「一応言っておくけど、僕は君の脳波もある程度改造してあるんだ。だから僕が望めば、君の脳波はいつでも改良出来る」

「……っ」

「そう怒らないでくれよ。僕は君の為に、ご褒美を用意しているんだ」

「ご褒美……」

俺は頭を押さえながら董を睨む。

「これだ」

董が近くにある培養器のベールを取る。

その中にあるのは……。

「俺……」

俺だ。

髪は白くなっているが、顔は俺そのものだ。

「君に似せた、三号の身体だ。一号や二号の寿命の弱点をある程度克服し、尚且つある程度の突然変異体の能力を使いこなせる。そして……このベルトもね」

黒いボマードライバーを手にしながら言う。

『おいおいお袋、そいつは俺のもんだろ？』

「……」

『はいはい』

董の尻に押された二号が、やれやれと両手を広げる。

「一号を殺せば、君にこの身体をやろう」

「……」

もう今の俺に、そんな選択をする余裕も無かった。

あんな事をした俺が、仲間の所に戻る事など出来ない。

なら、もういつそ死んだ方が良いのだろう。

「躊躇う理由があるのかい？ 君は教師になりたかったんだらう？」

「……」

「選択をしないのは勝手だが、自分の為に何が一番最善かを考えた方が良い。君に時間は残されていないのだから」

董が耳元で囁く。

第百六話

しばらくして、遥が美咲の身体を運んで蘇我高校へ向かった。

絶望に暮れていた成音達だったが、まだ復活する見込みがあるという。

まず第一に美咲の肉体自体には損傷がなく、美咲の魂たる脳波も、完全破壊には至っていない。

絶望的な状況には変わりないが、成音はそう告げた遥に任せた。

「ねえ」

「……」

ヴィーダと優香が帰ってから、美咲の部屋で目を閉じて座っている一号に声を掛ける。

一号が少し目を開けた。

「前にあたし、蘇我高校に攻めた時に……会長がアンタから色々聞いたっていう話を聞いたんだけどさ、アンタはいつから会長の味方をしてたのよ」

「……お前達が蘇我高校に向かった当日だ」

「やっぱり、その日だったのね」

「あいつは敵である俺を気に掛けて、わざわざ飯まで食べさせてくれた」

「……」

「戦うべき相手が悩みを抱えている状態では、例え倒しても勝った事にならない。そう言って、俺があの人と一緒にいられるようにすると言ってくれた」

それを聞いて、少しだけ笑う。

「いつも無茶苦茶な事ばかり言うあの人らしいわね」

「……俺はあの人と一緒にいる為に、あの子の頼む事なら何でもした。裕太や遥の幼馴染にまで手に掛けてな。だがそんな俺の為に、あいつは戦うと言ってくれた。だから俺も、あいつの努力を無駄にしない為に戦うと決めたんだ」

「……」

「あいつは、俺やお前達が共に歩ける道を探そうとしてもしていた。俺は反対したがな……。事実、遥や裕太は俺を受け入れるどころか、俺への憎しみをぶつけてきた」

一号は瞳を細めながら言う。

「人はやはり、憎む理由がある者と分かり合う事は出来ない。あいつは最後までそれが出来ると信じていたが、それは甘い考えだったようだな……………」

「確かにそうね…………でも、そうでもないと思うわ」

「……………」

成音は美咲とのこれまでを振り返りつつ話す。

「アンタは会長と関わる事で変わった。だから会長と一緒に戦えたんでしょ?」

「…………ああ」

「あたしもそう。会長と戦う事が無かったら、今でも会長とは分かり合えないままだった。だから一概にそうとも言えないわ」

「……………」

「一号、お願いがあるの」

真剣な眼差しで告げる。

「あたしに、アンタを作った人の事教えて」

「……………」

「危険な事くらいあたしにも分かる。けど、裕太に会長を倒させた原因を作ったそいつらを、あたしは絶対止めたいの」

「本当に良いのか」

「ええ」

一号は少し黙り込んでから、口を開く。

「俺にそれを実行させた犯人は……………」

※※※

一号から話を聞いた。

犯人が戸間董である事。

そして、ほぼ成音が想像した通りの理由で遥の殺害を企てている事も。

「やっぱり、そうなのね」

「勘が良いな」

「それでもないわよ」

そう答えてから、フレイムシャワードライバーを取り出す。

「やっぱりヴィーダや優香には黙ってた方が良いわよね？」

「片方は殺される対象に選ばれているが、もう片方は助かる余地がある。もし守りたいのであれば、お前も全力で戦うのだな」

「そのつもりよ」

「……」

「アンタはどうするの？」

「俺は戦いに挑む前に、狩野遥が言っていた復活する可能性に賭けてみるべきだと思う」

「……」

黙り込む成音。

「恐らく俺とお前だけでは、今の董達に太刀打ち出来ない。福沢裕太と二号のムラマサ、足利明人、それに……あの黒いボマー」

「そうね……確かにそうするべきかも知れないわ」

一号の意見に賛同したその時。

『〜♪』

丁度成音の携帯端末が鳴る。

狩野遥からだ。

「ちよっと出るわね……はい」

『成音、方法が一つだけ見つかったぞ』

第一百七話

そのまま成音は、遙からその方法を聞いた。
「そんな事が出来るの?」

『ああ……だがこれも限りなく賭けに近い。これが出来なければ、恐らくもう復活の可能性はないな』

遙の説明はこうだ。

美咲が戦ってきた人達のドライバーを集め、その中に蓄積された残留データの中から美咲の記憶を抽出してカード化し、美咲自身の脳波の情報が込められたボマードライバーで読み取る。

それを美咲に装着させ、情報で脳波を再構築する事で、美咲の脳波を蘇生させる……というもの。

『今から皆を、蘇我高校に集められるか?』

「やってみるわ」

※※※

仲間全員を蘇我高校の科学部に集め、同じ説明を優香とヴィーダ達にもする。

「マジ系!?!」

「ママホント?」

「ああ。賭けにはなるが、まずフレームシャワードライバーを使ってみようと思う」

遙は成音からフレームシャワードライバーを受け取り、ブランクカードが刺さったカードリーダーと接続する。

パソコンを操作し、エンターキーを押すと。

「これは……」

「どうなの?」

「成音の中にある美咲の記憶の一部が、カードに蓄積されたようだな」
遙が冷静な声で言う。

「だがこれだとやはりデータが足りんな」

「……」

「ヴィーダモ！」

グングニルドライバーを手渡す。

「ありがとう、ヴィーダ」

次はグングニルドライバーを接続し、データを転送。

「まだダメか」

かなりのデータを注入したが、まだ修復には至らない。

「他の回収したドライバーも試したが、まだ足りないな」

遙がパソコンを睨みながら言う。

「ウチ、前田つちにドライバー貸してもらえないか聞いてみる系！」

「その手があったわね」

※※※

ある程度時間が経過した後。

成音は優香と共に、前田の家へと向かう。

「まだ今日は家にいる筈系」

蘇我高校の生徒達は一応、あれからも普通に日常生活を送れている。

遙の判断で、科学部のみは無期限の活動中止となったが、それ以外に問題はない。

ヴィーダと約束した生徒達への謝罪も、ほとぼりが覚めてから全校生徒に対して行い、戦いが終わったら科学者に戻ると遙は決めているらしい。

「前田つち、優香系」

優香がインターホンを鳴らして、前田を呼ぶ。

ホースドライバーはあの後も、前田が預かっていた筈だ。

「どしたの〜？」

呼ばれてすぐに扉を開け、優香に眠そうな顔で問いかける。

「前田つち、ベルトまだ持ってる系？」

「持ってるよ〜」

「ベルトちよつと貸して欲しい系」

「どつたの急に」

「友達が大変系……それがないと困る系」

「うーん……よく分からないけど、優香ちゃんがそういうなら貸すよ」

「ほ、ホント系？」

「うん！ 優香ちゃん友達想いだし、信頼出来るじゃん」

「あざまる水産！」

優香は前田からベルトを受け取る。

「受け取れた系」

「最後までという会話してんのか全然分かんなかった……」

「気にしたら負け系」

第百八話

前田からホースドライバ―を受け取り、それも接続して記憶を注入。

「まだ足りないか……」

残り10パーセント。

しかし今の所、現実的に集められるドライバ―は集めきった状態だ。

「あとどれくらい必要なの？」

「恐らく残りの数字は……ただ単に戦闘した記憶があるだけでは不可能なのだろう。美咲と長い時間を共にし、尚且つ理解がある者……しかし」

今の裕太は敵側だ。

それに裕太が許可しても、二号が邪魔するのは目に見えている。

「……俺が説得に行く」

そう告げたのは。

「一号……」

「お前……」

成音が驚きの顔、遙が睨みながら呟く。

「美咲が死んだ原因を作ったのは、俺でもある。だから俺がやる」

「無理よ！ アンタじゃ裕太の怒りに油を注ぐだけ……」

「それでも、俺が説得する」

「……」

一号は意思を曲げない。

まるで美咲が話しているかのように、はつきりと意思を伝える。

「美咲は俺の為に戦おうとしてくれた。なら俺もその思いに答えた
い」

「一号……」

「今回の件で、俺は自分がやった事の重さを尚一層理解した。それに……美咲が死んだのはもとはと言えば俺のせいだ。もし生き返る可

能力が少しでもあるのなら、俺がその為に尽力する義務があると思う」

遥が少しばかり、その言葉に反応する。

それに気付いた一号が名を呼ぶ。

「狩野遥」

「……」

「俺は恐らく、一生お前に許して貰えない事は分かっている。福沢裕太にもな。だが美咲を必要としているのはどちらも同じだ。今回だけでいい、俺にやらせてくれ」

遥が立ち上がって問いかける。

「昨日は激情に駆られたあまり、お前に聞く事もしなかつたな。教えてくれ。お前は自分が殺した者の為に何が出来ると思うんだ」

しかしそう問われると、少しばかり俯いてこう答えた。

「……分からない」

「……」

「美咲も、俺の頭の中にいた裕太も、それは自分で考えるべき事だと言っていた。今の俺に、どう償えば良いのか分からない。だから、今は自分のすべき事をするだけだ」

「そうか」

遥はそう告げてから、もう一つ問いかける。

「その言葉に嘘はないんだな？」

「……ああ。今の命は美咲に拾ってもらったもの。美咲の為に使うのは当然の事だ」

一号の答えに、遥は言う。

「なら、私に証明してくれ。今のお前の覚悟を。言葉や覚悟に嘘はないと」

「ああ……」

「あたしも手伝うわ一号」

「……成音」

「ここまでアンタや会長が無理してくれたのに、あたしだけ何もしなわけにはいかないでしょ？」

「すまない……」

「礼は良いのよ。会長を生き返らせて、裕太も連れて帰る。絶対に成
功させるわよ！」

「……！」

一号が頷く。

第百九話

あの話の後。

知らない廃ビルの上で、俺は一人座り込んでいた。

「……」

『まったく、とんでもない番狂わせだ。正直お前が兄貴を無茶苦茶にする所を楽しみにしてたつてのに、とんだ邪魔が入るし、おまけに身体を交換条件に出されても動かないときたもんだ』

二号の愚痴る声が聞こえる。

そんな言葉に対して返す気分にはなれないが、何とか身体を取られないように自我だけはきちんと保つ。

『馬鹿じゃねえのお前』

「……」

痺れを切らした二号に罵倒される。

『良いか？ お前の大好きな六角美咲が死んで辛い気持ちも分かってやれねえ事もないが、そのまま動かなきゃお前はただ人を殺して終わっただけになるんだぞ。もう人一人殺してんだ。今更人形一つ壊す事の何が嫌なんだよ』

「……」

美咲がいなくなった今、復讐心などどうでも良い。

その復讐心で回りが見えなくなつて美咲が死んだ。

俺なんて……こいつと一緒に死ねばいいんだ。

『……はあ、最悪だ。いや？』

二号が何かに気付く。

『おい、一号来たぞ。今度こそやれよ』

二号が催促してから、その口を閉ざす。

彼の言う通り、扉を開けて男女が姿を現した。

俺と同じ顔をした青年一号と、山内成音。

「裕太……」

成音が小さな声で、俺の名を呟く。

※※※

突然現れた成音に、俺はどう声を掛けてあげべきか分からなかった。

謝罪も、言い訳も、全て意味がないと判断し、まずは自分が敵になって突き放すべきだと判断して、口を開く。

「俺に何の用だよ。その様子だと、もう知ってるんだろ」

「ええ」

俺の言葉に、成音は小さく返す。

そのまま、俺は成音に最後の要求をした。

「そいつを連れて、もうどっかに行ってくれ」

「……」

「頼む。もう二度と、俺に関わらないで欲しいんだ」

俺は頭を下げ、頼み込む。

「俺はお前達を傷付けたくない。これ以上俺の手で誰かが死ぬ所なんて見たくないんだよ……」

涙が流れる。

「出来ないわよ……」

成音が静かにそう返す。

「出来るわけないでしょ！　なんでアンタと関わらないって選択肢を選べるのよ！　会長が死んだのはアンタのせいじゃない！　アンタが自分を責める必要なんてどこにもないのよ！」

「俺のせいなんだよー！」

成音の言葉に、俺は大声で反論する。

「俺が回りを見てれば、あいつの言葉に惑わされなければ……美咲は死なずに済んだんだ。俺のせいだ……俺のせいなんだよ……」

「裕太……」

顔を床に擦りつけて泣く俺を、成音は見下ろす。

その時だ。

「アンタが倒さないなら、そいつは私の獲物っすよ」

その声と共に、蒲生が現れた。

百十話

「副会長！」

「蒲生……」

「お前私が殺す予定だった美咲を殺したんだから、一号譲るつすよ」
そう告げる蒲生の身体は、何かがおかしかった。

右半身の筋肉が不自然に隆起し、冷や汗をかいている。

「副会長、その身体……」

「ああ山内ちゃん、私強くなったんすよ」

右腕の血管を浮き出しながら、笑みを浮かべて言う。

「山内ちゃんも良かったら見てくつすよ」

※※※

「おいおい、もうあいつ飲んでったのか？」

「ああ。ついさつき一号を倒すと言ってたね」

遥が笑みを浮かべながら、明人の身体の二号にそう告げる。

遥の視線の先には、中身の薬品が飲み干されたフラスコが置かれていた。

「君も欲しいだろう？ 少しばかり待ってくれ」

董の言葉に、二号は両腕を広げて問う。

「てかあいつ大丈夫だったのかよ」

「そうだね……今の所はだけど」

董は怪しく笑む。

※※※

蒲生はソードドライバーに形が似たベルトを腰に装着する。

『アークソードドライバー！』

ベルトから起動音が聞こえる。

端末を取り出し、ボタンを押す。

『ARC SWORD DRIVE READY?』

端末を構えて、苦しみながらも呟く。

「変身……ッ！」

端末を取り付けると、ベルトから禍々しいオーラがあふれ出し。

負荷が掛かった機械音が鳴り響く。

『ARC……COMPLETE!』

そのまま禍々しいオーラが、蒲生の身体を包み込む。身体を蝕むかのように。

「くっ……あああああッ!」

蒲生の身体にも負荷が掛かり、悶え苦しみながらも、上空から降る剣の柄をとった。

「はあ……はあ……ッ!」

蒲生は剣の怪人……いや、剣の怪人・改とでも言うべき姿に変化し、その剣を構える。

荒い息を吐いてから、その口を開く。

「もう負ける気がしないっす……この力があれば……!」

裕太以外の二人がドライバーを取り出す。

『SMASH DRIVE READY?』『FLAME SHOWE R DRIVE READY?』

端末を構えてから、二人で叫ぶ。

「二変身!」

端末をベルトに取り付ける。

『COMPLETE』

それぞれ火炎放射器怪人と、サック怪人へと姿を変えてから、剣の怪人・改へと駆けだす。

「あああああッ!」

叫び声を上げながら、剣の怪人・改がサック怪人を狙う。

剣の怪人系列の特徴である超高速移動で距離を詰め、勢いよく吹き飛ばす。

「ぐあッ!」

サック怪人は鉄柵に叩きつけられる。

「……ぐっ……」

攻撃しながらも、身体への負担は大きく……苦しそうに呻く。

「あああああああッ!」

第百十一話

「副会長！」

火炎放射器怪人が地を蹴って、剣の怪人・改へと飛びつく。

苦しむ剣の怪人・改の姿を見ながら、説得を試みる。

「副会長、もうやめて！ このままだと……」

「山内ちゃんが言ったんでしょ？ それくらいの覚悟がなきゃ、美咲には勝てないって」

「……ッ！」

「私は絶対美咲より上に立つっす。この命を投げても、絶対に！」

剣の怪人・改が、勢いよく火炎放射器怪人を吹き飛ばす。

「うわあッ！」

「成音！」

俺はムラマサドライバーを取り出して、腰に装着する。

「変身！」

『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

仮面ライダームラマサへと姿を変えてから、俺は剣の怪人・改の前に立ち塞がった。

「……！」

「何するんすか？」

俺は剣の怪人・改を睨みつけて告げる。

「成音に手を出すな……！ これ以上美咲の仲間には手を出させない！」

剣の怪人・改の剣を弾く。

「分かったっすよ。なら……」

剣の怪人・改は姿を消して、サック怪人へと近づく。

「……！」

目にも止まらぬ速さで、サック怪人を集中狙いしてダメージを与えていく。

サック怪人はバレーボールのように宙へと浮かされる。

「あっ……」

「くっ……ぐあっ！」

「一号！」

火炎放射器怪人がサック怪人の所へと駆けようとするが、俺はその手を掴んで止める。

「何するのよ！」

「もうこれ以上戦うな！ お前を死なせるわけにはいかないんだ！」

「……！」

俺の必死な言葉に、火炎放射器怪人は目を見開いてから反論した。

「いい加減にしてよ！ 一号は自分の犯した罪の重さを理解して、生きてそれを償おうとしているのよ！」

「……！」

「アンタや遥の恨む気持ちを、全部受け止めて……必死に。それに、副会長をあれ以上戦わせるわけにはいかないでしょ！」

俺は俯く。

「会長はまだ死んでない。あたし達がここに来たのは、生き返らせるのにアンタの力が必要だから来たのよ」

「生き返る……？」

「なんだって？」

話を聞いた剣の怪人・改が、サック怪人への攻撃を止めて振り向く。「それなら話は早いっす。福沢裕太、その方法で六角美咲を生き返らせるっすよ」

剣の怪人・改が俺にそう要求した。

けど俺は、それに返事をせず。

「……」

「何黙り込んでるんすか？ 早くするっすよ。アンタも美咲を殺した事を後悔してた筈っすよ？」

「生き返ったとして、そしたらお前は美咲をどうする気だ」

「殺すっすよ。この力を使って」

「……なら」

俺は姿を消しながら、剣の怪人・改へと近づき。

その胴体に向かって切り払う。

「今はその要求は？めない」

第一百十二話

「裕太……」

火炎放射器怪人が、剣の怪人・改に斬りかかった俺に呟く。

「美咲が蘇るとしても、絶対殺させない。どうしてもやるといふなら、蘇らせる前にお前を止めてやる」

「私とやるんすか？ けど……」

剣の怪人・改が素早く俺に斬りかかり、吹き飛ばす。

「アンタの技量で、それが出来るんすか？」

「なら、ここで誓ってやる。技量がどうかじゃない。俺は刺し違えてもお前を止めてやる。それが美咲に対して、最後にしてやれる事だ！」

俺はもう一度立ち上がって、剣の怪人・改へと剣を振るう。

剣が躲され、空振るが、もう一度脇腹へ。

「！」

今度は剣の怪人・改が得物で受け止めた。

「こんなもんすか……」

「くっ……！」

「美咲のお供って割に、一番大した事ないっすね！」

剣の怪人・改が剣気で俺の刀を弾く。

「……！」

「誓いってのはどうしたんすか？ 所詮その程度の、ちっぽけなものなんすか？」

俺の言葉を責めながら、何度も剣を防御する俺に叩きつける。

「大人しく美咲の力を借りる方が賢明っすよ。雑魚がイキった所で、何の解決にもならないんすよ！」

強く弾き飛ばされる。

「殺した俺が……そんな事出来るわけないだろ。美咲を殺した俺に、美咲の力を借りる資格なんてない……」

「ふーん……大した根性っすね。けどこれで終わりっす」

剣の怪人・改が端末を操作して、ベルトに取り付ける。

『ARC FINAL DRIVE……!』

禍々しいオーラを迸らせる剣の怪人・改。

立っていた位置から姿を消し、俺の目の前に。

「はあッ！　とうッ！」

剣の怪人・改が剣を何度も俺を斬りつける。

「……ッ！」

最後の一撃で副作用が身体を襲いながらも、俺に強い一撃を叩きつけた。

「ぐあああッ！」

俺は大きく吹き飛ばされ、変身が解かれる。

「……ッ！」

「……うッ……」

剣の怪人・改が副作用で悶える。

俺も何とか立ち上がろうと、身体に力を入れようとした。

「美咲……」

立てない。

立ち上がって、もう一度戦いたいと思うのに……身体に力を入れる事すら出来ない。

俺は……ここで終わりなのか。

「あああああッ！」

既に火炎放射器怪人に再変身していた成音が、剣の怪人・改に向かってタツクル。

「どいつもこいつも……あの馬鹿の真似なんて醜い事を……」

実力差を分かっているながらも、全員が今出来る事をしようとしていた。

「……!」

サツク怪人も同じように立ち向かう。

「くうっ……!」

二人では歯が立たず、大きく吹き飛ばされる。

「だから言ったんすよ。大人しく諦めた方が良いつて……」

「……」

「もう戦える奴もいないみたいっすね。じゃあ、大人しく美咲を生き返らせてもらおうっす」

俺達が地べたで這う事しか出来なかったその時。

「ハアッ！」

一本の槍が、剣の怪人・改目掛けて真っ直ぐに飛ぶ。

咄嗟にそれを防いだ剣の怪人・改が、槍が飛んできた方向を見る。

「マダ、ヴィーダガイル！」

仮面ライダーグングニルへと変身していたヴィーダが、槍を構えつつ空を飛んでいた。

第百十三話

「ヴィーダー！」

成音が屋上に降り立ったグングニルを見て叫ぶ。

「ナリネ、ユウタ、イチゴウ、ダイジョウブ？」

「何とかね……」

「アトハヴィーダニマカセテ！」

ヴィーダがそう告げながら、槍を構える。

「ヴィーダ……」

裕太が申し訳なさそうに顔を地面につけながら言う。

「コノヒト……カラダアブナイ、タスケナキヤ！」

「まさか人形にまで心配されるとは思わなかったつすよ……」

「ヴィーダ、これ使って！」

成音がグングニルにフレイムシャワードライバーを手渡す。

「ナリネ、アリガトウ！」

『フレイムシャワー！』

端末から音声が鳴り、斜め左上に右腕を伸ばしてから叫ぶ。

「ダイヘンシンン！」

『CHANGE FLAME THROWER』

グングニルが光に包まれ、姿が変わっていく。

仮面ライダーグングニル フレイムシャワーフォームへとその姿を変えた。

「スグニ、オワラセル！」

火炎と共に姿を消したグングニル。

すぐに剣の怪人・改の背後に現れ、まず回し蹴りで吹き飛ばす。

「こりやまずいっすね……こつちも本気で……ぐっ……」

そこで剣の怪人・改の限界が訪れる。

変身解除までとはいってないが、明らかに身体への負荷で動けなくなっていた。

「まだ……倒されるわけにはいかないっす……美咲と戦うまでは……！」

「おいおい、俺に黙って出てった割にその程度かよ」
突如聞こえた一つの声。

「期待外れにも程があるってもんだ」

足利明人の身体に憑依しているもう一人の二号が、どこからか屋上に姿を現す。

※※※

「おい、使いこなせないならとっととそれ置いて帰んな」

「嫌つす。アンタには美咲の首も一号の首も渡さないっすよ」

「そう言うのは自由だけだよ」

明人二号は変身すらせずに、剣の怪人・改を蹴り飛ばし、ベルトごと吹き飛ばして変身解除させる。

「お前にそれが出来んのか？」

「あつ……ああつ！」

「ま、まだ俺もこの痛みになれちゃいないが……」

よく見ると、明人の身体も筋肉が不自然に隆起している。

『アークソードドライバー！』

ベルトを腰に装着してから端末を取り出して、立ち止まり。

俺に顔を向けた。

「おい俺」

『な……なんだよ……』

俺が押さえ込んでいた人格を何とか表に出して呟く。

「もうそいつの身体を自由に出来ねえみてえだし、こっちこいや」

『……確かに、もう潮時かも知んねえな』

「それに、俺はやっぱ一人の方が良いよな」

俺の身体を使い、二号は明人に向かって光を放つ。

俺の中から何かが抜け落ちる感覚。

その後、明人は目を輝かせて言う。

「これは……そうか。どうやら上手くいったみたいだな。変身」

明人は天高く手を掲げ、禍々しいオーラを放つ剣を受け取り。

剣の怪人・改へと姿を変えた。

第百十四話

「あの身体は俺のもんだ……サクツと全員殺してやるぜ」

二号が変身した剣の怪人・改は、蒲生が変身したそれよりも速くそして力強い動きを見せる。

フレイムシャワーフォームのグングニルに勝るとも劣らない動き。

「ミンナ、ハヤクミサキノトコロニイッテ！」

「でもそれじゃあヴィーダが！」

「ナリネ！」

グングニルが何とか顔だけ成音に向けて言う。

「ミンナデ、ワラツテカエル！」

「……！ 分かった！」

成音はグングニルからフレイムシャワードライバーを受け取り、再変身。

怪人としての力で蒲生を含めた三人を抱えながら走って逃げる。

「おいおい、逃がすわけねえだろツ！」

ゆっくりと逃げようとする成音達に剣気を飛ばす剣の怪人・改。

それを何とかグングニルが防ぐ。

「ミンナハ、ヴィーダガガモル。ヴィーダ、オマエニカツ！」

通常フォームに戻ったグングニルが、槍を構えなおして言う。

「……上等じゃねえか。やってみろよ」

剣の怪人・改が笑って、闇色の切っ先を向ける。

※※※

何とか力技で、成音は裕太や一号、そして蒲生と共に科学部の部室へ。

気絶している二人の姿を見た優香が心配そうに駆け寄る。

「裕太っち！ 一号っち！」

何とかその呼びかけで、二人は目を覚ます。

「……は……」

「そうか……俺は負けたのか」

その姿を見てから成音は遙にムラマサドライバーを渡す。

「遙さん、ムラマサドライバーです」

「成音、もしかして……」

「今ヴィーダが何とか二号を押さえてくれてる。早く生き返らせて助けに行かないと!」

「早速始めるぞ」

遙がムラマサドライバーをカードライターに接続し、美咲に関するデータを送信。

すると……。

「一〇〇%……これでいける筈だ!」

遙が両目を見開いて言う。

ブランクカードに『ALL WEAPON FOAM』と表示される。

「!」

成音と、俺も思わず反応する。

「美咲っち……」

優香も祈った。

「……」

一号も表情こそ変わっていないが、それでもどこか心配そうなそぶりをする。

「よし、行くぞ」

ボマードライバーを美咲の腰に装着し、スキヤンのボタンを押す。

『SCAN DRIVE』

「これでいける筈だ」

しかし。

『ERROR』

「……!」

読み取りに失敗する。

無機質なエラー音のみが、部屋に響く。

「嘘……系……」

優香がそう告げる。

「馬鹿な、これでもダメなのか……」

遙がその場で崩れ落ちる。

しかし……。

「成音?」

俺の近くで立っていた成音だけが、諦めずに美咲に近付いた。

「会長……いつもは皆に無理させる癖に、自分が生き返るのは無理だ……そう言うの?」

「成音……」

「帰ってきてよ会長! この場の誰よりも無茶苦茶で、負けず嫌いのアンタが、何で生き返る事の一つも出来ないのさ! それをやってこそそのアンタでしょ!」

「やめろ成音!」

「やめない!」

成音が大きな声で皆に言う。

「会長……!」

もう一度、成音はドライバーを取り出す。

第百十五話

……。

「誰かが、自分の名前を呼んだ気がして。」

美咲は何もない空間で、目を覚ました。

黒一色のその世界で……自分の身体だけがその時見えていた。

「……」

美咲は、裕太に脳波を破壊されて死んだ。

けど……今こうして目覚める事が出来た。

なら、今自分の身体を動かす事が出来れば……まだ戦う事が出来る筈だ。

「美咲」

手を伸ばそうとした美咲を呼び止める……男の声。

分からないわけがない。

自分の大切なお供で、けど自分を殺した相手。

福沢裕太のものだ。

「裕太さん、どうしてここに？」

自分の問いかけに対して、裕太は悲しげに言う。

「すまない……俺のせいでお前は……」

「裕太さんは悪くありませんの。ですから……」

止めようとした美咲に背を向けて、裕太はどこかへ歩き出す。

美咲は思わず手を伸ばして叫ぶ。

「どこへ行くんですの!?!」

「俺はお前と一緒にには戦えない。俺がお前という資格なんてないんだ」

「裕太さん……裕太さん！ 裕太さん!!」

黒い光に吞まれて消えた裕太を、美咲はもう一度追いかけてようとする。

しかし。

『もう放っておいてやれよ』

「この声は……」

聞き覚えのある声が聞こえた。

まるでレコーダー越しに聞く、周りに聞こえている自分の声。

でも、少し太い声。

「昔の……私」

振り向くと、あまり思い出さたくない自分の姿があった。

太っていて、自分だって彼氏を作って青春したいと誰よりも思っていたのに、何もせずにやさぐれていた頃の自分。

ソウジと出会い、変わる前の醜い自分。

『あいつは、お前の為を思って……お前といたいようにしようとしてる。お前だって分かるだろ?』

「分かりませんわよ! 私に裕太さんとまだいたい。裕太さんとやりたい事が、まだ沢山あるんですよ!」

『……そんな事言っつて、お前は人の人生にどれだけ重いもの背負わせてきたんだよ』

「……!」

昔の自分が言う事に、間違いはなかった。

生徒会の件も、遥と一号が和解出来なかった事もそうだ。

自分が出るからと、他人にまで同じレベルを押し付けてしまう癖。

今だって……恐らく目覚めたら美咲は裕太にそういう事をするのだろう。

『お前は……「ソウジ」みたいにはなれないんだよ』

「……」

美咲は光に吞まれる。

※※※

気付けば、美咲は見覚えのある場所にいた。

自分の中学の近くにある空き地。

「昔の私ですわ……」

元カレ……ソウジと出会う前の自分。

中学の制服を着た太った少女……昔の美咲が、スナック菓子を食べてながら学校のカッコいい男子を一瞥していた。

第一百十六話

間違いない。

あの日だ……自分の運命が変わったあの日。
この日の事は今でも覚えている。確か……。

「あ、二年のブタ女がこっち見てるぞー！」

「やめろよブタがうつるだろー！」

「馬鹿お前ら声がでけえよ……ハハハ……」

こういう奴らに向かって、昔の自分は。

「うるせえんだよ……私だって好きでこんな体型じゃねえんだよ。うつるのが嫌ならあっちいけよ！」

自分で火薬を込めた爆弾を思い切り投げる。

けど跳ね返っては……。

「うわあああッ！」

いつも自爆していた。

「ハハハ……バーカ！」

そして諦めず、バットでボコボコにして返り討ちにする。

それが、昔の美咲の日常だ。

「ごめんなさーい！」

「うわあああッ！」

「二度と悪口言いに来るんじゃないやねえ！ 次来たらぶつ殺すぞこの野郎！」

喧嘩の腕だけは、昔から良かった。

けど……ただひたすらに虚しかった。

「……つまんねえな」

別に、好きで喧嘩が強くなったわけじゃない。

自分を馬鹿にする気に入らない奴らをボコボコにしていたら、いつの間にか強くなっていたのだ。

本当は、普通の女の子みたいに恋愛がしたい。

けど……。

「何泣いてんだよ」

ソウジは笑みを浮かべながら、自分に近付いてきた。

「……」

「お前だよお前。なんか悲しい事でもあったのか？」

「なにヘラヘラしてんだよ」

最初彼を見た時は、イライラして仕方なかった。

自分に対して笑顔を向けてくる奴は大抵、馬鹿にしてくる奴と決まっていたから。

「お前も私を馬鹿にしてんのかコラ」

「……してるかもな」

「んだとコラ！」

バットを構えて、そいつに叩きつけようとした。

だがソウジは、

「へえ、中々やるんだなお前」

そう言いながら、バットを素手で受け止める。

「何で避けねえんだ。いてえだろ！」

「お前がどんだけキレてんのか気になった。だから受け止めたんだ」

急に真剣な顔で、そう告げた。

「それと勘違いするなよ。俺が笑ったのはお前の体型じゃない。そもそも体型を馬鹿にする奴なんて最低だ」

「なら何で笑ったんだよ」

「お前のその腐った根性を馬鹿にしたんだ」

「んだと……？」

「お前そもそも、その馬鹿にされてる原因を何とかしようとして一度でも考えた事あんのかよ」

そう問いかけるソウジに、目を逸らしながら美咲は言う。

「あつたさ。けど、何しても全然痩せられなかった。私には無理なんだよ。普通の女の子みたいに恋しようとかさ」

「ああ、そうかもな」

「お前、何が言いてえんだよ！」

「無理とか簡単に決めつける奴が、出来るわけがないと言いたいんだよ」

「……！」

「無理っていう言葉を言っただけだ。死ぬ前だけだ。まだ死にそうでもねえのに、それだけ力があるのに、無理なんて言葉を簡単に使うな」

ソウジは真剣な顔で、天に指を差しながらそう告げる。

「人間は変われる。何かの為に、人は変わる事が出来るんだ」

「……」

「俺の好きなヒーローの言葉だ。覚えておくと良いさ」

そう告げて、ソウジはどこかへと歩いていこうとした。

だがあの時の自分が、それを止める。

「おい」

「……」

「そこまで言うならよ、私を手伝ってくれよ」

「手伝う？」

「お前の言葉が嘘だったら、私はお前をぶっ飛ばす。だからこれから常にそばにいる。いつでもその面ぶっ飛ばせるようになる」

「……そうか。なら、こっちから提案しても良いか？」

ソウジが振り向いてから言う。

「俺のお供になれ」

「はあ？」

「俺がお前を手伝う代わりに、お前も俺を手伝え」

「どういう事だよ」

「じゃあ決まりだ」

「お、おい待てよ！ 私やるって言っただけぞ！ おい！」

第百十七話

ソウジの家は、家族経営の工場だ。
従業員は彼の両親のみで、他の社員は皆辞めていった。
ソウジはまだ十三歳の時から、殆ど学校を休んでまで工場を手伝っていたのだ。

「随分ボロい工場だな」

ついて来た美咲の第一印象。

「そう見えるよな。でもいつかは、ここをでっかくしてやりたい」

「は？ 無理だろ」

「無理か……何度も同じ事を親に言われたさ。だから俺が正しいと証明する為に、ここで親父やお袋を手伝ってる」

「……」

「取り敢えず、中に入ろうぜ」

ソウジにそう言われて、美咲は二人で工場内へ。

夜遅くまで、何かの作業をしていた二人が、ソウジの姿を見る。

「ただいま」

「おかえりソウジ。あら、その子は？」

「ああ……俺のお供。今日からここの世話になるから」

「だからまだ決めてねえっての」

「あらあら、そうなの？」

ソウジの母親が笑いながら言う。

しかし父親は。

「ソウジ……何度言えば分かるんだ。もうこの工場に誰が来ようと、すぐ辞めていく。ましてや女子中学生だ？ そんなの連れてきた所で、どうなるんだよ」

「やってみなきゃ分からないだろ親父」

「またそれか……勝手にしろ。くれぐれも怪我だけはさせるなよ」

「分かってるよ」

ソウジはそう言うってから振り向く。

「二人の許可も貰えた所で、今日からよろしくな」
「あ……ああ」

半ば強制的に、美咲はソウジのお供となった。

※※※

それからは毎日疲れる日々が始まった。

学校が終わってはソウジの家に立ち寄り、終業時間まで仕事を手伝い、そのままソウジと共に何かしら運動をする日々が続く。

その日はランニングだった。

「はあ……はあ……」

「もうへばったのか、早いな」

「うるせえ、仕事終わった後にこの距離走るとかあり得ねえんだよそもそも」

「無理じゃない事を証明しろって言ったのはそっちだろ？ ならやるしかないよな？」

「あーもうわーったよー！」

ぐちぐち言いながらも、美咲はソウジについていく。

そこからも長い距離を走り、取り敢えず工場前までたどり着いた。

「はあ……」

「やれば出来るじゃないか」

「そうみてえだな」

美咲はサムズアップする。

汗はかきまくっているが、ちよつとずつ身体が軽くなっていくのを感じていた。

「よし、もう一走りいくぞ」

「はあ？」

「流石に冗談だ」

「お、お前なあ……」

※※※

仮面ライダーが好きになったのも、その辺りだった。

時々ソウジの部屋にあがっては、一緒に見ていた。

「ヒーローってのはやっぱりすげえな……。無理かも知れなくても、最

後まで諦めずに立ち向かえるんだから」

美咲は思わずそう呟く。

「この世で一番強くなれるのは、無理かも知れないなんていう考えを捨てられた奴だけだ」

「……」

「別に迷っても良い。迷わずに強くなれる奴なんていないからな。けど、無理なんて考えに至る奴はいつまでたってもそのままだ」

「そうだな」

美咲は笑いながらそう言う。

「んじや、特訓行くぞ」

「お、もうそんな時間か」

「結構絞れてきたからな。今日からまた厳しめで行くぞ！」

「お、お手柔らかにな」

気付けば、これが美咲の日常になっていた。

第一百十八話

少しずつ体型が良くなり、自信がついてきて……美咲は少しずつ学校に通うようになってきた。

そんなある日の事。

「おうおう、少し脂が落ちてまずそうになったんじゃねえの？」

「でも豚は豚よね〜ハハハ」

チャラい男子生徒が女を連れながら、美咲を馬鹿にする。

「……」

「おい無視してんじやねえよコラ」

男子生徒の一人がつかみかかった。

美咲が睨みつけると、男子生徒は虚勢を張りながら問いかける。

「な……なんだよやる気か」

「相手になりてえならなつてやる。けど、それならはつきり言えや」

「んだと偉そうに……！」

拳が振るわれる。

美咲は持ち前の反射神経を使って、その拳を受け止めた。

「……どうすんだ？ やるのか……やらないのか？」

「良いぜこの野郎。勝負してやるよ」

※※※

美咲はその生徒と共に、路地裏へ。

持ち前の喧嘩の強さもあり、その生徒のみは難なく素手で倒す。

「……もつと歯ごたえが欲しいな」

「歯ごたえ……か。だったらこの人と勝負してみろよ」

そう言つて、どこからか現れた別の生徒が美咲の前に現れる。

自分以上の巨体で、かなり鍛えていると思しき男子生徒。

「先輩、この生意気な豚をお願いします」

「おう任せろよ」

「……」

美咲は拳を構えなおす。

「はあッ！」

そのまま地を蹴って駆け出すが……。

「あああッ！」

その巨体から放たれる拳を受け止める事は出来ず、無様に地面を転がった。

「くっ……」

美咲は立ち上がれずに悶絶する。

大男はもう一度拳を握って、美咲にゆっくりと近付いていく。

「なんだそれで終わりか？　なら遠慮なく……」

拳が振り下ろされる……その時。

「悪いが、こいつは俺のお供だ。傷つけられちゃ困るな」

ソウジがその拳を受け止め、蹴りを放つ。

「くっ……」

「こいつ……」

「痛い思いをしたくなければ去れ」

ソウジは美咲が倒した生徒を睨みつける。

「ひいつ……行きましよう先輩！」

「この野郎……！」

取り巻きも同じく逃げていくのを確認してから、美咲に目を向けた。

「……」

「大丈夫か？」

そして手を差し出す。

だが美咲はそれを取ることなく拒否。

「お前……なんで私を助けたりなんかしたんだよ。あんな奴、私なら何とか出来た」

「……」

何も答えないソウジに、美咲は不貞腐れながら答えた。

「ああそうかい。私には無理だっつーのか？　少しは認めてくれたと思っただのに、内心じゃまだ私の事馬鹿にしてんのかよ」

ソウジの答えを待たずに、美咲はその場から走り出す。

この時の美咲には、素直にありがとうと答える事が出来なかった。

第百十九話

あの後。

雨の降る空き地で、傘もささずに美咲は空を見上げていた。

「……………」
さっきのソウジの態度を思い出して、美咲は胸の内に悔しさを募らせていた。

あれだけ彼が要求するレベルに近付こうとして必死に努力したというのに、彼はまだ…………自分ではあの巨体の男一人倒す事すら出来ないと判断して助太刀した。

この時の美咲は、自分の薄っぺらなプライドを傷つけられた事をうじうじと気にする事しか出来ない。

「はあ……………」

結局、自分は努力しても…………誰かに舐められる運命は変わらない。

そう決めつけて、美咲は立ち上がって歩こうとした。

その時。

「……………」

ソウジが現れて、美咲に傘を差し出す。

美咲はプイッと顔を背けて言う。

「何の用だよ」

「何の用って…………お前馬鹿なのに風邪引く気か」

「馬鹿って…………やっぱり私の事なめてんだろ！」

「反論する余地もない程馬鹿だろお前は」

ソウジの冷静な返しに、美咲も頬を膨らませながらも何も言葉が出なかった。

「俺にも俺の責任つてもんがあんだよ」

「……………」

「お前は俺のお供だ。選んだ俺には、選んだ奴なりの義務がある。俺はお前を守る。絶対に」

「は……………」

美咲自身、嬉しいとも思っていた。

けど、この時は素直にそう答えられず。

「またそうやって、弱い奴扱いするのかよ」

「……強くなりたいんなら、まず自分のいる位置を理解する事も大事だ」

「……」

「自分の強さ、弱さ。それを理解した上で、人はようやく強くなる事が出来る。それすらせずに戦って、もし死にでもしたらどうする？ お前はお前の欲しいものを、お前自身のせいで逃す事になるんだぞ」

全部……間違ってる。

この言葉は、今の美咲にも受け継がれて、今の美咲自身の生き方に繋がっている。

けど、美咲自身にも……自分なりの考えがあった。

ソウジと共に過ごし、自分で見つけた今やりたい事。

「なら、私はどんな無茶でも生きて帰ってやる」

「……は？」

「お前前に言ったよな？ 無理なんて言葉は死ぬ前に言えって」

「……」

「だったら私は死ぬ前に立たされようが、そこを振り切って生き残ってやる。例え絶対死が避けられないとしても、それを乗り越えて先に進む。お前の言った言葉を超えてやる。お前に助けて貰わなくても、解決出来るくらいに強くなる」

「美咲……」

「だから次同じ事があっても、二度と助けるな。私のプライドが傷付く」

「……ふふ……ははは」

ソウジが笑う。

「何がおかしいんだよ！」

「いやあ、こんな大口叩く奴と、前まで無理無理言ってた奴と同一人物とは思えなくてさ」

「お前のせいだろ！」

「でも、そういうからには……これからは俺の特訓にへばらずついでこれるんだよな？」

「お、おう。勿論だ」

ソウジが告げる。

「決まりだ。また今日からいつもより厳しく行くぞ」

「おいおい今日雨だろ！」

「大丈夫だ。俺もお前も馬鹿だ。風邪なんて引かない！」

「さつきと言ってる事ちげえぞ！」

「知らんな！ 工場まで競争だ！」

「待てよ！」

第二百一十話

丁度、今の自分と同じくらいの体型まで痩せてきた頃の話。

一緒に仕事を手伝い、痩せる為の特訓を続けるうちに、美咲はソウジの事が段々好きになっていった。

中学三年生の初め辺り、美咲はソウジに告白した。

「お前は俺のお供だが、恋人には出来ない」

「何でだよ」

美咲の言葉に、ソウジが一瞬だけこもってから返す。

「恋人同士になったら、お互いを意識して加減をするようになるだろう？ それではお前の為にならない」

「……」

「話は終わりだ」

ソウジはどこか辛そうな顔でそう告げて、自室へと戻っていく。

美咲が何故、その時断られたのかを理解したのは……その後すぐの事だった。

何となく気まずい雰囲気の中、ソウジの工場の手伝いをしている時に、美咲はソウジと彼の父親の会話を聞いた。

「俺は近いうちにこの工場を売ろうと思っている」

最初に聞こえたのは、そんな声。

ソウジの父親のものだ。

「何を言ってるんだ父さん。美咲が来てから、何とか沢山作れて前より稼げるようになったんだ。諦めるのは早いぞ」

「けど、彼女やお前以外でまともな従業員と呼べる奴が他にいくついるんだ？」

「……！」

父親の言葉に、ソウジが言葉を失う。

常に理想の為に、途方のない努力を続けるソウジに現実を押し付けるように父親が告げる。

「お前の子供のような考えで様変わりする程、世の中は甘くない。従

業員がいなければ新しいものを作る事も困難だし、作れなければ売る事も出来ず、ここを維持する事もままならない。売るしかないんだ……」

「父さん……」

「もう気は済んだか？ 元々お前にそんな期待はしていない」

「待ってくれよ！」

いつね冷静なソウジが、あんなに声を上げて話すのは見た事が無い。

美咲でさえ、最初は本当にソウジの声なのか疑った。

「ソウジ……」

美咲は道具を手にしたまま、静かに呟く。

「俺が何とかしてみせる。だから待ってくれ！」

「……」

ソウジの父親は黙ったまま、どこかへ行ってしまった。

そこで理解した。

ソウジ自身も、本当はそれが無茶な夢である事を自覚していた。

それでもそんな無茶をどうにかしようかと抗い、戦った。

そこには誰かの犠牲があつてはならない。

そう思ったから、美咲の事を振ったのだ。

一人で戦い続ける為に。

けどそれなら、尚更諦めきれない。

「……」

ソウジを一人になどさせない。

ソウジがそんな無茶を叶えようと戦うなら、美咲も一緒に戦いたい。

そう思って、美咲はソウジを呼び止めた。

「ソウジ」

「……どうした？」

第二百二十一話

美咲は言う。

「この工場を守るのは、お前一人じゃなきやダメなのか？」

「……何の話だ？」

ソウジは何とか誤魔化そうとする。

「この工場をデカくしたい、それがお前の夢なんだろう？」

「ああ」

「なら、なんでその夢に私を頼ってくれねえんだよ」

「……お前の力を借りなくても、それくらい」

「ソウジ！」

美咲はソウジの後ろから抱きつく。

「私はお前がいたから、こうして目標に近付けた。自信を持って、お前を好きになれた。けどよ、お前の事を助けてくれる仲間がいるのかよ」

「……」

「だったら私とその仲間になりたい。私の為に一生懸命でいてくれたお前に、今度はお前の為に私が一生懸命やる番なんだよ」

自分の想いを、きちんと伝える。

「だから、これからもずっとそばにいてくれよ。私の彼氏としても、さ」

「……お前……また変わったな」

「え？」

「自分の事で泣いてばかりのお前が、今度は俺の心を支えようとしてくれてるんだからさ。本当に、変わったな」

「ま、まあ。私はいつかお前すら超えるつもりだからな」

「今回ばかりは、俺の負けだ」

ソウジが笑って、そう告げる。

「ほえ？ いや、なんか実感ねえけど。告白に勝ち負けもクソもあるのか？」

「さあな」

「あ、今適当な事言つたらー！」

「良いぞ。ついてくるならついてこい。だが、これは本当に非現実的な夢だぞ。誰にとっても」

「無理って言うのは、死ぬ前だけ……それがお前の生き方だろ？」

「ああ……その通りだ」

※※※

こうして、美咲とソウジは付き合う事になった。

学校と工場が両方休みの日は、恋人のように出かけた事もあるし、美咲の家に連れて来た事もある。

両親がいない、ある日の夜。

慣れない……というよりあまりした事のないキスをしてから、美咲はソウジに泊まるように言い。

数時間後……既に疲れて眠ったソウジを見て、ふと呟いた。

「こんな日々が、ずっと続けばいいな」

今の生活は、かつて美咲が抱いていた夢そのものだった。

普通の女の子のように、誰かと恋をしたい。

それに、ソウジとの関係はそれだけじゃない。

恋人であると同時に、その夢を支える立場。

いつかきつと大物になるであろう人を、こうして支えられる。

そしていつかは、二人で頂点に立つ。

勿論、自分がソウジより上に立つのは諦めていないが。

「……」

美咲はもう一度、あの時のように背中からソウジに抱き着く。

季節的に少し寒さを覚えていたが、ソウジの肌に触れればそんな事も忘れてしまう。

瞳を閉じて、もう一度祈る。

ずっと一緒に、いられますように……と。

第二百二十二話

美咲はあの日、確かにそう祈った。

けど結局、美咲の心からの祈りが叶う事はなく。

美咲の高校進学が決まり、卒業式を迎えてから、ソウジは美咲に呼ばれて学校の桜の木の下……ではなく、一年半以上も世話になった工場に呼び出された。

「……」

美咲は進学する予定の女子高の制服姿。

ソウジは、結局一度も着る事が無かった中学の制服姿。

彼は卒業式すら出席する事なく、初めて美咲に会った時の姿で、自分と向き合っていた。

まず彼は、少しばかり悲しげな眼をして自分の名を呼ぶ。

「美咲」

それも、あの時告白を断った時よりも辛そうに。

「今日で、お前は俺の彼女も……お供も卒業だ」

自分に別れを切り出した。

「……」

美咲にも、言われた理由は何となく理解出来た。

彼は自分を嫌ってなどいない事は、彼の眼を見れば明らかだ。

理由は違う所にあった。

「……」

ソウジと美咲の近くを、何人もの人が出入りするのが見える。

工場の中にある工具や機械……ソウジやソウジの家族と同じくらい、美咲が触れ合った代物を運び出していた。

ソウジの父親の判断で、工場は売られる事になった。

夢に描いていた、工場を再興する夢は散り、ソウジは職を探さなければならなくなったのだ。

「嫌だ。お前が行く場所なら私も行く！ 私を置いてって行くなんて許さねえぞ！」

ソウジは頭を横に振る。

「これ以上、お前から未来を奪えない。それに、今の俺がお前を手にする資格なんてない。お前には、俺より良い人に巡り合つて欲しいんだ」

そう言つて、ソウジが美咲に一つのを手渡す。

ソウジが好きなの、仮面ライダーカブトのストラップ。

ソウジが、いつも肌身離さず持っていたものだ。

「俺は多分、もうお前に会う事は出来ない筈だ。だけど、たまにはこれを握つて俺の事を思い出して欲しい」

笑顔でそう頼むソウジ。

けど、美咲は受け取りつつも一度俯いて呟く。

「……言うんじゃねえよ」

「美咲？」

「もう会えねえなんて言うんじゃねえよ！ 私にお前より上の男なんていねえよ！ もし今手に出来ねえってんなら、私が頂点に立つてお前もそこに連れてつてやるよ！ それなら文句ねえだろ！ お前、それまで別の女に私と同じ事するんじゃねえぞ！ 浮気なんかしたら、私が許さねえからな!？」

涙と鼻水が、自分の中から止まらなかった。

「頂点に立つんなら、そんなくしゃくしゃな顔じゃ出来ないぞ。もつと笑顔で、胸を張つて言えよ」

そう優しく告げるソウジの顔も、泣きそうなのを堪えているものだった。

しばらくして……美咲は手を振るソウジに見送られて、思い出深い工場をあとにした。

最後に、ソウジの声が聞こえた気がした。

『行つてくれ……美咲。頂点へ。お前は俺の……最高のお供なんだから』

第二百二十三話

「お願い……お願い……！ 帰ってきてよ……！」

『ERROR』

成音が何度も読み取らせるが、何度も失敗する。

無慈悲に失敗した時の音声が鳴るが、成音はそれでも続けた。

何回も続けた後、近くで見えていた優香があるものの存在に気付く。

「ちよつ。これ……何系？」

美咲の制服のポケットから、仮面ライダーのストラップが出てくる。

赤い外観に、青い瞳のカブト虫の仮面ライダー。

紐も本体も、そこそこ汚れているが、欠けている箇所は一つもない。

昔のものではあるが、相当大事にされていたのが分かる外観だ。

「ストラップ？」

美咲が大切にしていたと思われるストラップ。

成音はそれを、美咲の手に握らせてから端末にカードを読み取らせる。

『SCAN DRIVE』

「お願い……！」

成音は目を閉じて、強く祈る。

※※※

通常形態ではやはり歯が立たず、グングニルは満身創痍だった。

相手はまだ余裕の状態で、グングニルは何とか最後の力を振り絞って必殺技を発動する。

「コレデキメル！」

『GUNGNIR FINAL DRIVE！』

空に大量の魔法陣を出現させる。

剣の怪人・改も、端末を操作してボタンを押す。

『FINAL DRIVE！』

剣の怪人・改は禍々しい光を纏いながら消える。

通常の剣の怪人なら相手の前に出現し、目にも止まらぬ連続攻撃だ

が。

「……！」

何十にも分身した剣の怪人・改が、一斉にグングニルへ斬りかかる。魔法陣から槍が放たれる前にキャンセルされ、グングニルが剣の怪人・改に吹き飛ばされた。

「グアッ！」

鉄柵に叩きつけられ、変身が解けてしまうヴィーダ。

そんな彼女相手に剣の怪人・改が振り向き、告げる。

「腕を上げてると思いきや、とんだ期待外れだな」

「……」

ヴィーダは立ち上がれない。

もう、手足を動かす程の体力すら残っていない。

「どうやらもう動けねえみてえだし、少し待ってやるよ」

「ナニヲ……スルキ？」

剣の怪人・改が怪人の顔の下で笑う。

「そこで大人しく待っている。お前の友達や母親が、殺される所でも想像してな。キレれば嫌でも、無理に動くんじゃないやねえか？」

「……！」

ヴィーダは瞳を見開いて、身体を何とか動かそうとする。

だが……無理だ。

ヴィーダにそう告げた剣の怪人・改が、その場から飛び降りた。

「マテー！」

ヴィーダの言葉は届かない。

出来るのは、動かない身体に無理矢理力を込めようとする事のみ……。

「ヴィーダ、トモダチヤママ……モモリタイ……！」

まだ間に合う。

そう信じて、ヴィーダは少しずつ動かこうとする。

第二百二十四話

忘れられないし、忘れたくもない。

そんな思い出が自分の頭を過ぎった後、再び美咲は黒い空間に戻された。

再び一人になり、誰もいない空間の中で……ソウジと最後に会った時の事をもう一度思い出す。

「……」

美咲は、ソウジと約束した。

頂点に立てる程の女性になって、必ずソウジを迎えに行くと。

ソウジに頼らずとも、むしろ自分がソウジのように誰かを救える人間になると。

けど……今の美咲は。

「裕太さん……」

自分にとつて大切なお供の心を救えないどころか、自分の言葉で誰かに重圧を抱えさせてしまうという欠点がある。

ソウジに救われて、それからソウジの言葉を信じて、戦ってきたのに。

自分は彼を超えるどころか、彼と同じことすら出来ない。

「ソウジ……すまねえ」

普段の丁寧な口調から、昔の口調でソウジに詫びる。

涙を流し、下を向いて……地面に拳を叩きつけた。

「お前を助けるどころか、私は自分のお供すら笑顔に出来ねえ。私はやっぱり、全然変われてねえ。デブで、人のせいばかりにして、それで泣いてたあんとときの私と何も変われてねえんだ！」

結局、美咲が変える事が出来たものは体型のみだ。

『よう』

不意にそんな声が聞こえた。

ここには美咲以外、誰もいない。

返答など……ある筈が……。

「お前……」

「また泣いているのか、美咲」

あの時の……初めて会った時の制服姿のソウジが、自分の前に立っていた。

「ソウジ……」

「おい、俺の言った言葉忘れたわけじゃないだろ？ そんなくしゃくしゃな顔した奴が頂点に立てないって。だから笑ってみろよ」

ソウジがああの時のように、笑顔で自分にそう告げる。

美咲は……涙を流したまま言う。

「笑えるわけねえよ！」

「……」

「私は、やっぱりお前みたいにはなれなかった。お前より強くなりたかったのに、お前みたいにすらなれねえ。私は自分のお供すら……助けてやれねえ。それに……もう私死んじまったんだ。言ってただろ、死ぬ前に無理って言葉言えってさ。だから今言う。無理だ。私には無理なんだよ、頂点に立つなんて」

ああの時のように、弱音を吐く。

ソウジの返答は、偶然にもああの時と同じだ。

「ああ、そうかもな」

「……」

美咲はその言葉を受け入れようとした。

ああの時は反抗したが、今の状況的にはソウジの言葉が的を射ている。

ソウジからも、美咲は思いあがっていたように見えたのだろう。

「俺の言葉を、泣き言を言う為のものにしようとしているお前にはな

「……」

ソウジはああの時のように真っ直ぐな目で、美咲にそう告げた。

第二百二十五話

「俺はお前にそんな泣き言を言わせる為に、そう言ったわけじゃない」
「けど……」

「それどころか、お前は死すら振り切って進むって言った。今が、その時じゃないのか？」

「……」

ソウジの口調は、やはり厳しくも優しくかった。

「けど……今はそれが、美咲にとっては少し重圧に感じてしまう。でも……じゃあどうすりゃいいんだよ！ 例えここで生き返れたとして、私に何が出来るって言うんだよ！ 一号さんと遙さんを和解させる事も、裕太さんの心を救ってやる事も出来ねえ！ 私が何を言っても、皆その言葉に重さを感じちまう。それじゃあ意味がねえだろ！」

「本当に、皆がそうだったのか？」

「え……う？」

「見てみろよ」

ソウジが、外の様子を見せる。

「いや……実際には、今の覚醒しかかっている美咲が感じ取っているものなのだろう。」

成音と優香が自分を目覚めさせようと奮闘し、一号も目を閉じて祈る。

遙も、それと一緒に。

裕太だけは……まだ罪悪感に満ちた表情で何も出来ずにいた。

「皆……私を待っているのか？ けど、裕太さん……」

「お前に救えなかつたものは確かにあるかも知れない。でも、自分が救ったものの事を考え、それを誇りに思う権利はお前にはある。そして、自分が選んだお供は……どんな事があっても守り通さなきゃいけない。あんな辛そうな顔したお供放置して死ぬのは、俺ならしない出来ない」

「……」

「一つ教えてやる。お前は俺みたいにはなれない。それは事実だ。だが俺以上になる事は出来る。俺は自分の夢が死んで、お前の手を離さざるを得なかった。それでもお前は、最後の最後……いや今も俺の手を掴もうと戦ってくれている。お前のお供がお前から手を離そうつてんなら、お前はその根性で、お供の手を掴んでみろよ」

「ソウジ……」

ソウジが笑みを浮かべる。

美咲はそこで、ようやく気付く。

「私、ソウジと同じ事が出来なきや……誰も救えないってそう思い込んでた。私、馬鹿だ。馬鹿ですわ……」

「けど、それがお前の良いところだ。俺も、お前の馬鹿さに救われた一人だ」

「……」

「美咲、お前はその馬鹿のままが良い。馬鹿のまま永遠に進化しろ。そして、また会えた時に俺を驚かせてくれ」

涙を拭って、美咲は返す。

「馬鹿馬鹿うるさいですわね……」

「馬鹿は馬鹿だろ。これは褒めてんだよ」

「そう聞こえませんかよ」

「はは……」

「あははは……」

久しぶりに、二人で笑う。

そして決意は、固まった。

「ソウジ、私やりますわ。必ず裕太さんの手を掴み取る。だって、彼は私のお供ですから」

「それでこそ、俺のお供だ。行け、美咲。その手で、未来を掴み続けるんだ」

美咲は、一筋の光に手を伸ばし……そして拳を握る。

白い光に包まれ、ソウジも、自分の身体も、何もかもが見えなくなつた。

最後に、消えていくソウジに美咲は言う。

「いつか、貴方の手も掴んでみせますわ。必ず……！」

第二百二十六話

カードを読み取らせようとしたその時。

「……………」

ガラスが割れる音が、科学部の部室内に響く。

「二号……………」

「あ、あれ何系……………」

「ヴィーダ、負けたのか……………」

「安心しろ、あいつはまだ生かしてある。まずはお前達を殺して、あいつを怒らせてからだ」

「二号！」

一号がサツク怪人に变身しつつ飛び出す。

「はあッ！」

拳を振るったサツク怪人を、剣の怪人・改が一撃で变身解除に追い込む。

「兄貴如きが俺を止められるわけねえだろ」

「……………くつ。あああああッ！」

もう一度变身し直して、突撃する。

「はあッ！」

振るう拳は一つも当たらない。

「山内成音、早くしろ！」

「……………させるか！」

成音に向かって、剣の光を放たれる。
その時。

「うわあッ！」

美咲を中心に、大爆発が巻き起こる。

成音達は何とか剣の怪人・改の攻撃を浴びる事なく吹き飛び……………命をとりとめる。

「会長……………会長！」

爆風が収まる。

寝台の上から、美咲の肉体が消えていた。

「今度こそ……完全に終わったな」

剣の怪人・改が腕を組んで笑う。

「あら、私の能力をお忘れですか?」

仮面ライダーボマー。

紫の爆弾型の頭に、学生服を纏った不良のライダーが、剣の怪人・

改の背後に姿を現した。

「会長!」

「美咲たち……」

成音と優香が驚きの顔。

「美咲……」

裕太は呟きながら、その姿を目にする。

一号も表情こそ変えなかったが、どこか安心した顔になった。

「上手くいったのか」

遙も信じられないと言いたげな顔だ。

「……ミサキ……」

まだ屋上で地を這うヴィーダも、復活した美咲の脳波を読み取って笑う。

「ただいまですわ、皆さん」

※※※

「不完全とは言え、一度破壊した脳波が蘇るなんてな。面白い事もあるもんだ」

剣の怪人・改が振り向いてそう告げる。

「私一人の力じゃありませんの。私に蘇って欲しいと思う人がこれだけいたから、私はここに帰ってこられた。それに……」

美咲は目を閉じる。

そして息を吸ってから、目を開けて呟く。

「私はまだ死ねませんわ。裕太さんや一号さんを泣かせたまま死ぬなんて、そんな事出来ませんのよ」

「とんだ茶番だな。そいつらの命は、もう永くないんだぞ」

「私は諦めない。死んでも絶対諦めませんわ!」

ソウジが死ぬまで無理と決めないのなら、美咲は死んでも無理だと

は決めない。

死んで死んで、それでも……そこから絶対に蘇る。

それが、自分の強さだ。

「面白れえな……やっぱお前は面白れえ。けど、蘇ってすぐで悪いが……今回は脳波だけじゃなく命ごと奪わせてもらうぜ」

「……そんな事させませんわ。今の私の命は皆からいただいたもの、今回ばかりは無駄にするわけにはいきませんもの」

ボマーはあのカードを取り出し、スキヤンドライブのボタンを押す。

『SCAN DRIVE』

「これが、私と……私についてきた者の力ですのー！」

カードを読み取る。

『COMPLETE ALL WEAPON DRIVE READ Y?』

爆弾、火炎放射器、魔法の槍、騎兵、メリケンサック、そして……妖刀。

カードに込められた全ての力が、ボマーを取り囲む。

「ハイパー超変身ですわー！」

その声に呼応し、ボマーは青い炎に包まれる。

武器の光がボマーに集約され、新たな姿へと変化した。

「……」

爆弾の上の炎は赤くなり、全体的に青と白を中心とした色へと変化。

ライダースーツの上に纏う服も、学ランから……まるで社長や政治家が着ていそうなスーツへ。

頂点に立ちたい、そう願う美咲の理想を体現したような姿だ。

六本のボムビットは水色に、そしてバットが金色へ。

変わらない黄色の複眼で真っ直ぐ剣の怪人・改を見据えて言う。

「仮面ライダーオールウェポンボマー……それが今の私の名前ですわ」

第二百二十七話

剣の怪人・改が笑みを浮かべながら剣を構える。

「へっ……今度こそ期待して良いんだよね？」

「期待？ 何の事ですか？ 貴方がするべきは、私に倒される覚悟ですわ！」

「……上等だ！」

剣の怪人・改が姿を消しつつ、ボマーとの距離を詰める。

手にしている剣をボマーの脇腹に向かって振るう。

「……」

「遅いですわ！」

ボマーが金色のバットで防ぎきる。

「やるな……」

「せやあッ！」

防いでから弾き、剣の怪人・改の腹部を蹴り飛ばす。

怯んだ隙を見て、ボマーが呟く。

「ここから本領発揮ですわ」

金のバットの柄部分にあるスイッチを押す。

『ODIN LANCE!』

バットからの音声の後、ボマーの持つ金のバットが仮面ライダーグングニルの持つ槍へと変化する。

そして更にもう一度端末を操作し、取り付ける。

『WEAPON DRIVE ODIN LANCE』

背後のボムビットが形を変え、ボマーの左手へ。

変化したバットと同じく、グングニルの持つオーディンランスへ。

「はっ！」

ボマーは二本の槍を手に、剣の怪人・改に対する。

剣の怪人・改は早い動きを見切れず、二本の槍の猛攻に押し負けた。

「ぐあっ……」

「はっ！」

——ヴィーダさん、力を借りますわ。

『FINAL DRIVE!』

ボマーは左手の槍を上投げ、また形を変形させる。

ボムビットだったそれは、グングニルが展開するものに似た魔法陣の形に変化し、そこから数本の槍が射出された。

「くっ……」

剣の怪人・改がその威力に怯む。

あともう少しの所で、ボマーが最後の切り札を使用する。

「今度は、成音さんの力を借りますわ」

『SUMMON DRIVE FLAME SHOWER』

端末を操作した後、ボマーの背後のボムビットが変形し、火炎放射器怪人の形へ。

ボマーの武器も自動的に、火炎放射器怪人の武装に。

「あれが……」

成音はそれを見て驚く。

武器を変化、そしてその武器の必殺技を使うだけでなく、怪人そのものまで召喚しているボマーの強さには、驚かざるを得なかった。

「いきますわよ」

ボマーが端末を操作し、ベルトに取り付ける。

『FINAL DRIVE!』

怪人とボマーの持つ火炎放射器が、エネルギーを充填させた。

放射口から朱の光を放ちながら溜め、完了してから引き金を引く。

「はっー!」

二つの放射口から勢いよく、爆炎が放たれる。

剣の怪人・改に衝突と同時に大爆発を起こし、敵の身体を勢いよく吹き飛ばす。

剣の怪人・改は変身解除し、足利明人の身体に戻ってから、ロッカーに激突した。

第二百二十八話

足利明人の姿に戻った二号。

何とか意識を保ち、ボマーの姿を捉えて笑う。

「へっ……こいつはすげえや。今の俺じゃ、分が悪いつてもんだ……」

「さあ、明人さんの身体から出ていきなさいな」

ゆっくり近づいたボマーが、金のバットを向けて要求。

「無茶言うなよ。それはあの身体じゃなきや出来ねえし、まだそういうわけにはいかねえんでな」

二号はポケットから、煙幕弾を取り出す。

ボマーの前でばら撒き、煙に紛れて姿を消し、どこかへと消えた。

「六角美咲、お前も絶対いつか俺がこの手で倒す。それまでどこの誰にも殺されるなよ」

最後に聞こえた声だ。

丁度オールウェポンの効果が切れ、通常フォームを経ずに、六角美咲の姿へと戻る。

「……」

※※※

董が肉体の最終調整に入りだした頃、二号は明人の身体をボロボロにしながら入室した。

「その様子や蒲生がない所を見るに、美咲の仲間達に邪魔されたようだね」

「……お袋は何でもお見通しか」

床に座り込んで、歪んだ笑みを浮かべる。

「まさか、破壊した脳波を復活させるなんてな」

それを聞いた瞬間、董が眼を見開く。

「それは遥がやったのか？」

「ああ。六角美咲が生き返った上に、更に強くなりやがった。そのドライバーでも、もうキツいんじゃないやねえか？」

董専用のドライバーを指さす。

「もう……切札を使う時が来たというわけか」

董は培養器の中にいる肉体を一瞥してから告げた。

「予定より早い、君にこの肉体をあげよう」

「おいおい、そいつは一号を殺してから約束だった筈だろ？ 良いのかよ」

「……こう言っちゃ難けど、奇跡とは言え相手は一度破壊した脳波を復元する事が出来る。それに相手の戦力が今以上に上がってしまったのは非常に厄介だ」

「気持ちは分かるけどよ、焦ってもアンタの思い通りになるか分かんねえぞ」

董は内心動揺している。

六角美咲さえ消えれば、もう少し楽に遙達を追いつめられると確信していたが、まさか破壊した脳波を蘇らせてしまうとは想像もしていなかった。

だが。

「心配はいらない。繋ぎの策もきちんと用意してある」

董が机の上に置いてあるものに掛かった布を持ち上げる。

そこには蒲生や二号が使った、突然変異体の因子が大量に入った薬品数本と、量産化されたアークソードドライバーがある。

「もうそんなに作ったのか」

「ああ……量産化を急ぎ過ぎて多少オリジナルよりも劣る性能だが、戦力を削ぐには十分だろう」

「ただ、それを誰に使わせるんだよ。もう並大抵の奴じゃ、六角美咲には勝てないぜ」

「六角美咲を倒すのは君だ。まずはそれを支援する者達を倒す。例えば山内成音。一人でいる所でドライバーごと破壊すれば、遥の作った人形は強化能力を失う」

「大体それだって、倒せればの話だろ？ 倒せなきゃどうするんだ？」
「別にそれならそれでも構わん。この肉体を強化する時間稼ぎの役割も担っているのだからな」

董は続けながら、他に隠していたものを見せる。

そこには拘束されている〇×女子高の生徒達の姿が。

「ドライバーは彼女らに使ってもらおう。六角美咲を見放した、生徒会のメンバー達だ」

「おいおい、こいつら全員誘拐したのか？」

「万が一の時の為に、蒲生を使って誘拐させておいたのさ」

「よく学校にバレてないよな」

「木を隠すなら森の中……と言うだろう？」

「はあ、なるほどな」

「洗脳は済んでいる。あとはこの薬を投与するだけだ」

葦は悪魔のような笑みを浮かべて、薬を一瞥した。

第二百二十九話

あの戦いが終わった後、他の皆が美咲の活躍と復活を嬉しそうにしていた所で、俺は隙を見て蘇我高校を去った。

美咲は、俺を泣かせたまま死ぬなんてしたくないと言っていた。けど……俺は美咲に優しくしてもらう資格なんてない。美咲から離れなければ。

その思考だけを離さず、俺はどこかへと歩き出そうとする。

「どこに行くつもりですか?」

「……」

「待ちなさいな」

何も言わず、一瞥してから去ろうとした俺の腕を引っ張る。

「まさか、私に何も言わずどこかに消えるつもりでしたの?」

「……」

「裕太さん……、なんで私の顔を見てくれないんですの?」

近づく美咲から距離を取り、顔を横に向ける。

「やめてくれ……美咲」

「裕太さん……」

それでも諦めず歩み寄る美咲を、俺は押し返す。

「もうやめてくれよ! 俺はお前を殺した……。俺はお前に救われる資格も無ければ、一緒にいる資格もない。俺は感情に任せて行動したせいで、お前を殺した……。けじめだよ。だから、もう行かせてくれ……。ほつといてくれよ」

涙をこらえて、俺はそのまま歩こうとした。

しかし。

——パチン!

美咲はそんな俺の頬に、平手打ちをする。

「……」

「けじめ? これがですか?」

「美咲……?」

「私がどれだけ貴方を心配したと思ってるんですの!?!」

美咲が涙を堪えるような表情をしながら、そう叫ぶ。

「……ッ！」

「私には明人さんや蒲生さんが帰ってくる事も大事でしたわ。けど、何より貴方にここにいて欲しかったんですわ！ それなのに、いなくなる事がけじめだなんて勝手に勘違いしないで欲しいですわ！」

「……」

俯いた俺に、美咲が抱き着く。

心なしか……母親の温もりにも似たようなものを感じた。

「美咲……っ！」

母親の温もりを感じながらも、彼女は温もりの感じとは反対に、子供のように泣きそうになっていた。

いつもは年上である自分にも強気な態度をとっていた彼女が……今は普通の女の子のように泣きそうになっている。

「私……怯えてましたの。このまま貴方が、どこかに行ってしまうんじゃないかって。まだやりたい事が、沢山あるのに……」

「……怯える事なんてないだろ。俺は別に、何も出来てない。生徒会の仕事を手伝うくらいしか、俺はしてない。お前は一人で歩ける。だから……」

「……貴方は馬鹿ですわ。もうそれ以上のものを……私は貰ってますのよ。だから、貴方を離すなんて私には出来ませんわ……」

抱きしめる力が強くなる。

「私は……貴方といた時間を楽しいと感じていましたのよ」

「そう……なのか？」

「ええ……」

「……そう……か」

嗚咽で、上手く言葉が出ない。

俺は泣いていた。

泣くのを我慢している女の子に抱きしめられながら。

「私はまだ、貴方と一緒にいたい。貴方の夢を叶えたい。貴方を、死なせたくない……誰にも、それが無理だなんて……死んでも言わせませんわ」

「……」

俺は何とか、今も上手く動かない口で告げる。

「ありがとう……」

俺は感じた。

この後……俺がどうなるかは分からない。

美咲の尽力のおかげで生き残れるかも知れないし、力及ばず死ぬかも知れない。

けど……どんな結果になろうと、美咲が俺をお供に選んだ事だけは後悔しないと。

何せ彼女は、紛れもなく……いい意味でも悪い意味でも、俺の人生を破壊した爆弾だから。

「一緒に帰ろう、美咲」

「当たり前ですわ……だって」

「おう」

「私一人じゃ、生徒会の仕事の一つも片付きませんのよ」

「……は？」

「さあ、また手伝ってもらいますわよ！ 裕太さんがいれば、すぐに終わる気がしますわー！」

「……やっぱさっきのありがとう取り消しても良いか？」

「さあ今から家に行きますわよ！ ご飯もごちそうしますわ」

聞いてないし……。

さっきまでの感動を返せ……そう言いたいのには山々だが、俺はそれを口に出せなかった。

あの涙を堪える表情が、自分に対する感情を物語っていた気がしたから。

「待てよ、やるなんてまだ言っていないぞー！」

いつもの調子でそう返答しながら、俺は彼女の背中を追いかけた。

第三百三十話

その様子を、一号は陰から覗いていた。

美咲を追いかける裕太の姿を見て安堵した所に。

「アンタもやっぱり心配だったの？」

成音が声を掛けてきた。

「……ああ」

一号は少しばかり俯いて答える。

美咲と裕太が仲間同士の関係に戻れなかったのだとしたら、きっと自分のせいだと一号は思っていた。

仮にもし、二人が離れ離れになるようなら、どんな手を使っても説得する気で様子を見ていたのだ。

「俺には、その義務があると思ったから……」

「やらなきゃいけない……そう思ったわけね」

一号に向かって、口元に笑みを浮かべて言う成音。

「成音もそうなのか？」

「あたしは違うかな。少なくともやらなきゃいけないとか、そういう事じゃなくて……二人が一緒にいて欲しいって思ったのよ」

「……」

「アンタもそうなんですよ？ 義務とかそうじゃなくて、二人には一緒にいて欲しいって……」

「……分らない」

一号はそう答える。

前まで彼の中には、福沢裕太の脳波があった。

完全に自分の中から脳波が消滅した今でも、一号自身には福沢裕太の記憶の一部が朧気に残っている。

残った記憶の中にはどれも、笑っている美咲の顔があった。

脳波が無くなっても、一号の記憶にもそうやって残る程、裕太にとって美咲は大きな存在となっていたのが分かる。

だから、裕太にもう一度美咲の笑顔を見せてあげる事が、一号のすべき事だと思った。

「けど、不思議だ。俺も、あの光景が好きだ」

自分の中に、もう福沢裕太はいない。

だから本来あり得る筈はないが、一号も美咲の笑顔を見れて嬉しいと感じていた。

「アンタ自身が、そう感じてるんだと思うわよ」

「俺自身が？」

「ええ」

成音も笑みを浮かべて、仲良さげに歩き続ける二人の背中を見る。彼女に言われて、一号は改めて自分の気持ちを整理した。

そして答えた。

「成音」

「どうしたの？」

「俺に、董と一緒にいる事以外に叶えたい夢が増えた気がする」

一号はもう一度、美咲の笑顔を思い出す。

「あの光景を守りたい。その為なら、俺は命を賭ける」

それを聞いた成音が言う。

「良い夢ね……けど、命を賭けたら会長に怒られちゃうかもね。アンタの命も、会長にとっては死ぬ気で守りたいものの一つだろうし」

言われて、一号はあの時を思い出す。

自分を庇って、脳波を破壊された美咲の姿を。

そして、自分は死んでも裕太と一号の命を諦めないと言った彼女の姿を。

「訂正しよう。俺は生きる。生きてあの光景を絶対を守る。守るために死なない」

一号は改めて、成音にそう告げた。

第三百三十一話

美咲を追いかけ、俺は久しぶりに彼女の自宅を訪れた。帰って来た娘を嬉しそうに迎える両親の姿を見てから、俺は久しぶりに美咲の部屋へ。

美咲が先に扉を開け、俺も一緒に中に入る。

「変わってないな……この部屋も」

そして大量に詰まれた書類も。

「はいそこ書類ばかり見ない」

「お前ああは言ってたけど、ちゃんとやってたんだよな？」

「そうですねよ」

「それでまだこれだけあるんだよな？」

「はいですの」

「これ、提出期限はいつなんだ？」

「明日ですわ」

「……」

俺から言える事はたった一つだ。

「何でこうなったああああああ！」

「私一人じゃ手がつけられない上に死んでたんだから仕方ないじゃないですか！」

「うう……それもそうだな」

「とにかくやりますわよ！」

美咲が床を突き破りそうな勢いで、座布団へダイブ。

すぐ様ペンを取り出し、作業開始。

「はあ……」

俺も溜め息を吐きながら、久々に書類に手を付け始めた。

※※※

二時間後。

美咲も書類を終わらせ、俺も美咲から与えられた書類を何とか書き終える。

今日俺は蒲生と剣を交え、そして追いつめられたが、その時以上に

今の方が疲労感が半端ない。

美咲は俺に見せているいつもの余裕そうな顔だ。

「腹減ったな……」

「ご馳走すると言われた身で何だが、俺の口からそんな言葉が零れる。」

今日は色んな事があり過ぎた。

美咲の母親の作る料理は美味しいし、早く食べたい。

そんな事を考えていたが。

「きゃあああああッ!!」

一階からの悲鳴。

美咲の母親のものだ。

「行きますわよ!」

「ああ」

気付いた俺と美咲で一階へと駆け下りていく。

俺は念のためにムラマサドライバーを装着し、玄関へ。

そこには。

「どうしたんですの!?!」

「あ、あ、あれ……」

「……どうも」

美咲の母親が指さす先にいた人物は、俺と瓜二つの顔をした一号だ。

大方、ドツペルゲンガーとでも思ったのだろう。

「一号さん……」

美咲が半目で一号を見る。

「え? 誰? 裕太くんじゃないの?」

「……」

美咲の母親が困った目で、俺と一号を交互に見る。

まあ、そうなるか。

「私が説明しますわ」

美咲が母親にそう告げた。

※※※

複雑なことは話さず、取り敢えず俺と一号は偶然顔が似てるだけの者である事、一時期俺が行方不明になり、その時は一号を替え玉にしていた事などを母親だけでなく、俺の雇い主である美咲の父親にも説明。

「なるほどな……」

一号はバツが悪そうな顔で、俺の方を見ようとしなない。

取り敢えずその時は何も言わず、俺は美咲の父親にだけ目を向ける。

「よし、どっちもよく働いてくれてるし……二人とも俺が面倒を見てやる」

「えっ？」

俺と一号が同じ声でそう呟く。

「うち基本的に従業員少ないし、多い方が助かるし、賑やかだしな」

「いや、あの、おやっさん？」

「俺も……その……」

「じゃあそういう事で、明日からよろしくな。よし、飯にしよう！」

俺達の言葉を聞かず、食卓に向かう美咲の父親。

「……」

その対応を一番不安そうな顔で受け止めていたのは、案の定一号だ。

第三百三十二話

夕食後、俺は美咲にさっきの話をした。

「ええーっ!!」

美咲から目玉が飛び出しそうになっていた。

「……」

「裕太さんと一号さんが、明日から一緒に働く……なんですの?」

「ああ」

俺がそう返事すると、美咲が問いかけてくる。

「一応聞きますわよ。一号さんと一緒にでも問題ありませんの?」

「……」

聞かれて、少しばかり自信が無くなった。

さっきの場面で美咲の父親を責める事は出来なかったが、流石に自分が殺そうとした相手と普通に仕事するのは難しいだろう。

彼をこれ以上責めても仕方のない事は俺も分かっているつもりではあるが。

そして特に相手は、その事を気にしているようだし。

「私が上手く父さんに言いましたよ?」

「いや、良い」

「……?」

俺は頭を振るうと、美咲が首を傾げる。

「確かに俺は一号を恨んで殺そうとして、結果的にお前を一度殺した。お前が死んだのも、お前があいつを守りたかったからだろ?」

「ええ」

「お前はそんな俺をこれから仲間として受け入れてくれた。だから、お前の目に見えているあいつを、これから俺も理解してみるよ」
「裕太さん……分かりましたわ」

美咲が嬉しそうな顔で、俺にそう告げた。

※※※

けど、俺はそこで話を止めなかった。

純粹にさつきまでの出来事に対して、疑問を抱いていた事がある。

「まあでもそれはそれとしてよ」

「なんですか?」

「一号の奴、普通にここに来て飯食って、今外で寝てるわけだけど……」

「ええ」

「あいつ今ここに暮らしてるの?」

「ええ」

「ええ、じゃないだろ!」

「?」

「仮にもあいつ男だぞ。大丈夫なのか? その……同じ部屋で」

「何を気にしてるんですの?」

……。

「え?」

「私は別に男女一緒の部屋で寝ても気になりませんわ」

「な、なんで?」

「だって欲情されても、私が自衛すれば良いだけの話ですもの」

「そうですか……」

貞操観念とかどうなってるんだよ……。

と悩ませていると、美咲が急に腕を組んで半目で言い出す。

「大体貴方は逆に、女の子に対しての積極性が足りませんわ」

「な、なにをー!?!」

「それだからモテないんですわ」

「お前にだけは言われたくねえな」

「失礼な! 私の中学時代は……その、すごくモテモテでしたわ!」

「へえ、じゃあ彼氏はどれくらい出来たんだ?」

「それはセクハラですわ!」

「そりゃねえだろ!」

「じゃあ貴方は彼女出来た事あるんですの!?!」

「二十三歳童貞です!」

「童貞が許されるのは中学生までですわ」

「別に良いだろ！」
「というか元教師という立場的にそんな事言えねえし。」

第三百三十三話

久しぶりに美咲は裕太と軽口を叩き合った後、美咲のスマホから
フェイスフォンの着信音が鳴る。

というか、美咲がカスタムした着信音だ。

相手は狩野遥。

「もしもし」

美咲は端末のボタンを押して、耳に当てる。

『六角美咲、蒲生の治療とボマードライバーの調整終わったぞ』

「ありがとうございますわ」

『だがすまない。蒲生の中にあつた薬を中和する事には成功したんだ
が、洗脳までは何とも出来なかった』

「そうでしたの……」

『脳波を調べたら、ある種の記憶操作も行われていた。こう言つては
難だが、元に戻すのは中々困難を極めるだろうな』

遥が疲れた声でそう告げた。

「それなら、その状態からでも私を認めさせてみせますの」

『……』

「一号さんだつて、互いを理解し合う事で仲間になれましたもの。で
すから、絶対に無理なんて事はありませんわ」

『そうか。ただ、お前も生き返ったばかりなんだ。あまり無茶はする
なよ』

「私は無茶をした事など一度もありませんわ」

美咲は笑顔でそう告げる。

「他の誰かにとっては無茶でも、私には違いますもの」

『お前らしい答えだな』

「また目覚めたら、連絡お願いしますわね。私がいち早くお見舞い
に行きますわ」

『ああ、了解した』

遥がそう呟いてから、美咲が思い出したように問いかける。

「ところで、ドライバーの調整はどんな感じですか？」

『ああ、そっちの説明を忘れていたな』

『急ごしらえで用意したオールウェポンを改良して、ボマードライバー自体にも機能を一つ追加した』

「機能ですか？」

『ああ。これを作った当初にそんなところまで作る余裕はなかったが、お前が私に協力してくれている礼というか……』

「礼？」

『そうだな、お前は仮面ライダーなのにないものがあるだろ？』

「ないもの？」

美咲は少し考えた。

仮面ライダーボマーにはファイズをオマージュしたっぽい端末型のベルトがあるし、必殺技もバットをボムビットと共に叩きつけるライダーインパクトだけでなく、ちゃんとライダーボムキックという固有のライダーキックがある。

それに強化フォームもハイドロフォームと、ついさつきオールウェポンが追加された。

しかし……それでも足りないものがあった。

「あ、バイクですわ！」

『そうだ。バイクに変形する機能を追加した』

「おおー！」

美咲は大歓喜。

『あ、だがお前免許はあるのか？』

「……」

『持ってなかったんだな……？』

「はいですの……」

さつきとは一転し、がっくりと項垂れる。

『まあ戦闘時に使うくらいなら問題ないだろう。くれぐれも移動に使うなよ』

第三百三十四話

嬉しい知らせを聞いた次の日。

いよいよ、運命の出勤だ。

『おう、六角か。どうした？ 生徒会の資料の期限なら待つてやらんぞ』

「そう言われても待つてもらいますわよ先生。今緊急事態が起きてるので休みますわ」

『緊急事態だあ？ おばあちゃんでも助けてるのか？』

困っているおばあちゃんを助けるだけなら美咲でも簡単に出来る。けど……。

「そうですね。困っている二人のおばあちゃんを助けないといけませんわ。それも二人仲良くちゃんとやってくれるように……」

『どういふ状況だそれ……てか、終わってないからサボる為の言い訳に使うんじゃないやねえだろうな？ どうでも良いから早く来い』

「貴女の前で自爆テロしますわよ？」

『ひいっ！ すみませんでした！』

——許してくださいな先生。それくらい緊急事態なんですわ。

「二行つてきます」

同じ声、同じ容姿の二人のおばあちゃんが家を出ていく声が聞こえた。

美咲は見守りに備えて……変装の準備を始める。

「キャストオフですわ」

——CAST OFF！ CHANGE……UNDERWEAR。

そう脳内再生された音と共に、美咲は下着姿になった。

数分後に、変装完了。

いつもの眼鏡とは違う、度入りのサングラスを着け、服も多少ラフなものへ。

「……これなら問題ないですわ」

昔自分がヤンキーだった頃に着ていた奴だが、問題なく着れる。リバウンドしないように努力し続けたかいたったというものだ。

「よしっと……」

そのまま自転車に乗り、美咲の父親が経営する玩具屋へと進んだ。

※※※

到着後、まずは店の近くに隠れて……様子を確認する。

「いらつしやいませ」

朝からやってきた子連れの客に、裕太は元気よく、一号は肅々と挨拶をする。

二人とも同じ顔だが、態度はまるつきり違う。

「あれ、裕太くん双子だったの？ そっちは弟さんかお兄さん？」

「えーっと……」

子供の母親からの質問に、どう答えるべきか困る裕太。

「あーでもお母さん、よく言うじやないですか世の中には似たような顔の人が二、三人いるとかいないとか。それが偶然ここに来ちゃっただけですよ」

「そうなんですか？」

「そうそう。新人として入って来た時は驚いちやつて……」

何とか誤魔化す裕太。

だが別の子連れ客が現れ、裕太を指さして言う。

「あれ？ くらいかおのおじちゃんあかるくなつた……え？ ふえてるっ。」

一号を見て混乱する子供。

裕太は身体を震わせ……叫ぶ。

「おじちゃん→だど!? ふざけんじゃねえよお前、お兄ちゃんだろ才!!」

第三百三十五話

まあ取り敢えず、二人が喧嘩になる事はなく、きちんと仕事をこなした。続けた。

実を言うと、ちゃんと裕太や一号の仕事ぶりを見た経験はほぼないに等しい美咲だが、見ていて分かるのは……裕太はやや不器用だが、愛想があり、お母さんや子供の客に人気。

一号の方は、通りがかつた若い女性に好印象のようだ。

仕事の方も非の打ち所がないくらい完璧。

確か前に美咲が心配して聞いた時は、取り敢えず自分の中にある裕太の記憶を使って覚えたのだとか。

ただやはり問題はある。

「お、おい一号。ちよつとこれ運ぶの手伝ってくれよ」

「……別の人に頼んだ方が良い」

「いやんな事言ってる場合じゃないから！」

そう、やはり一号は裕太に対して距離をとっていた。

裕太の方は何とか過去の彼ではなく、今の彼を受け入れ、歩み寄ろうと努力をしてくれているが、一号の方は罪悪感故か……あまり会話をしようとしてくれない。

「うう……どうしましょ……」

そうこうしてるうちに、昼時に。

「おい裕太くとそれに……」

「あ、俺は一号です」

「じゃあいつちー、昼飯入って良いぞ」

美咲の父親にそう言われ、二人は休憩室へと向かった。

「はあ、昼休み中に進展があると良いのですが……」

※※※

美咲も取り敢えず休憩室近くに隠れる。

窓が開いている為、様子は取り敢えず見えた。

「……」

二人がもくもくと電子レンジで温め、食べようとしているのは、今日

朝から美咲の母親が作ってくれた弁当。

美咲は一人っ子故、あまり親が凄く張り切って飯を作る場面は見た事ない。

だが、今日の母親の作る様子は中々に張り切っていたのを覚えている。

「まだ距離取り続けてますわね……」

凄く距離が遠い。

裕太が少しずつ近付こうとしているが、それに伴って一号も距離を取る。

やがて裕太が頭を掻きむしり、痺れを切らして言う。

「なあお前、こんな事ずつと続ける気か？」

「……」

裕太の問いに、一号は答えようとしなない。

「確かにお前のせいで俺は死んだ。お前に俺の人生を奪われた事は許せないけど、俺はお前が美咲達を守ろうとしてんのを何回も見た。だから、今はお前に復讐しようなんて思っていない」

「……」

「お前にも色々あったんだろ？ よく分かんないけど……だったらむしろさ、俺が歩み寄ろうとしてんだからお前も……」

「俺は別に美咲達の為にしてるわけじゃない。俺は美咲の気持ちに救われた。だから俺も、その恩を返そうとしてるだけ。善意でお前達といるわけじゃない」

一号が自分に言い聞かせるようにそう告げる。

その言葉に、裕太が返す。

「……そういうめんどくさいの、もうやめたらどうだ？」

第三百三十六話

「……」

「なんというか、上手く話せないけど……元は敵だった自分を氣遣ってくれた事が嬉しいんじゃないのか？ だからそういう美咲が好きで一緒にいる。それでいいじゃないか」

「俺は……罪人だ。それに董のしている事が悪だと思いながら、彼女の指示だからという理由だけで、お前や遥の幼馴染を……。だから、俺が美咲にそんな甘えた感情を抱くなどあってはならない」

「あつてはならないんだろうけどさ、もう抱いちゃってんだからしょうがないだろ」

「……」

一号は俯く。

「それに、お前が美咲の為に戦ってくれるんなら……こつちとしても恨んだり出来ない。今の俺もお前と、立場は似たようなもんだしな」

「……ああ」

納得したように頷く一号。

「それに何よりよ、なんかそうやって変に距離取られると気持ち悪くて仕方がないんだよ。普段から仲良くしろとは言わないけど、仕事の時くらい協力する場面は協力しようぜ」

「……ああ」

もう一度頷く一号。

それから呟く。

「俺は自分の罪と向き合い、自分が奪ってきた命に対して償うと決めた。その為に協力してくれる美咲、そして一応は仲間と決めてくれた遥、そして今こうして歩み寄ろうとしているお前。俺はその人達の為に命を使う」

「一号……」

「だから戦いの時は、俺にも背中を預けてくれ。お前の為に、この命を使つてやる」

一号の眼差しに、裕太は笑みを浮かべて返す。

「馬鹿野郎。お前にも好きな奴はいるんだろ。だったらとつとけよ。美咲の為にもよ」

美咲はそれを見届けて、ゆっくり背を向けて去り始めた。

※※※

ところが。

「うわっ、なんだかすごいかつこうのおねえちゃんいるよ」

「しっ、見ちゃダメよ」

「完全に見ちゃダメなもの扱いされてますわ……」

それもその筈……。

いつもの割と清楚な恰好から一転、露出の高い派手な変装をしている。

胸の谷間なんかも見えて、男子からしたら注目の的。

まあ裕太にバレさえしなければよかったのだが、流星にやり過ぎたか。

「何してんだ美咲」

「ひっ……」

恐れていた事態が起きた。

さて、どう誤魔化すか。

「ミサキ？ ワッツ？ フーイズデイスネーム？」

「いやもう声でバレてるから」

グラスンを取る裕太。

「なんだよ見に来てたのかよ」

「そ、そうですね。貴方達二人とも危なそうでしたし」

「そ、それは分かるんだけど普通にくれば良いだろ。なんだその恰好」

「普段の私のイメージと違うものと考えたらこれしかなかつたんですのよー」

「あれ、もしかして……裕太くんの彼女？」

「違いますー！」

子供と一緒に来た母親に誤解されてしまった。

第三百三十七話

「まったく……」

裕太の彼女として扱われた事を不満に思いながら、美咲は更衣室を借りて普段着に。

眼鏡もいつもの奴を。

「あ、たまにくるおばちゃんだ!」

「お……おば?」

そう。

美咲もたまに店を見に来るのだが、子供達によくおばさん呼ばわりされる。

「ねえねえ、へんしんポーズみせてよ!」

「これは……Vバックルですわね」

子供から渡されたのは龍騎のベルト。

バックルの柄は……蟹。シザースの柄だ。

「よりもよってこれですの……?」

「なんかマズいのか?」

裕太が問いかける。

「このベルトの持ち主は……モンスターに頭から食べられて死んだんですわよ」

「そんなまどマギ三話みたいな事があったのか……」

「ねえねえはやくはやく!」

まあでも、この子はそんなシザースでも好きだと思ってくれたのだろう。

だからやるしかない。

「いきますわよ」

美咲はまず鏡の前に立ち、シザースのバックルを勢いよく前に突き出す。

右腕を大きく動かしてから前に突き出し、叫ぶ。

「変身ですわ!」

そしてバックルをベルトに挿入。

両拳を握ってから、そのまま勢いよく鏡にダイブ……出来なかった。

「ぎゃあああああッ!!」

鏡に頭をぶつけ、その勢いで鏡が倒れて割れてしまう。

「何やってんだ馬鹿……」

「いてて……」

「おねえちゃんおもしろーい!」

「もう龍騎ライダーの変身ポーズはしませんわ……」

「世界中どこに行つてもリアルに鏡に突撃するのはお前くらいじゃないか?」

「でもすごいね!」

「ら、ライダーになつて頂点を極めるのは興味深いですわ!」

シザースの台詞を叫ぶ美咲。

わーいと喜んでいる様子を見るに、余程好きなのだろう。

ライダー大投票でもランク外だったし、まあ……シザースもこれを見れば喜んでくれるんだろう。

「でもお姉ちゃんはナイトが好きですわね」

「べただね」

「ベタで悪いんですの!?! カッコいいんですわよナイト!」

「ダメだ、俺じゃ何も突つ込めない」

※※※

その子はリバイスドライバーとバイスタンプを購入し帰宅。

入口で裕太と共に見送る。

「じゃあね!」

「シザースの事、好きでいてあげてくださいですわ!」

「うん!」

「そうそう。こいつを馬鹿にしても、シザースの事は馬鹿にしちやダメだな」

「それどういう意味ですか?」

「いやほら、色んな所から圧が掛かりそうだしって爆弾を出すなしまえ馬鹿!」

「問答無用ですわ！」

爆弾を投げる。

近くの電柱で跳ね返り、美咲の所で大爆発。

「いって……」

裕太は吹き飛ばされたのみだが、美咲は……巻き込まれた。

「……」

「なんで……なんでこうなるんですのよお……」

第三百三十八話

結局何だかんだ美咲も残り続け、閉店時間が迫り。

裕太と一号、そして美咲や他の従業員と共に掃除をした後、裕太と一号はタイムカードを押してそのまま帰路へ。

「ひとまず、裕太さんと一号さんは問題なさそうですね」

「そうみたいだな」

「……」

裕太が一号に笑みを見せると、一号は少し目を逸らす。

「二人はこれからどうするつもりですか?」

「俺は久しぶりにマンションに帰るわ。冷蔵庫の中身とかヤバそうだしな」

「俺は美咲と共に帰る」

横目で一号を見る裕太。

「取り敢えず家に行くのは一号さんだけですね」

『〜♪』

着信音に設定しているフェイスフォンの音が鳴る。

相手は狩野遙。

「はいですわ」

『六角美咲、蒲生が目を覚ましたぞ』

「本当ですか?」

『ああ。だが案の定、私を見てすぐに襲い掛かった。ガスドライバーはこちらの手にあるから、もう抵抗は出来ないが……来てくれるか?』

「今から行きますわ」

美咲はそう呟いて通信を切る。

「蒲生さんが目覚めましたの。今から蘇我高校に行きますわ」

「俺も同行した方が良いか?」

一号が美咲にそう問う。

「いや、これは私と蒲生さんの問題ですの。私一人で解決させてくださいな」

「……分かった」

「大丈夫ですよ一号さん。私が心をぶつけければ、きつと……」
少しだけ自信を失くしそうになる。

けど、失くしたら……きつと凄く後悔する事になるだろう。
だから今は、やるしかない。

「行ってきますわ」

美咲は駆け足で、その場をあとにする。

※※※

科学部の部室の扉を開け、飛び込むようにして入った。

そこには、拘束された蒲生と……それを見張る狩野遥の姿があった。

「来ましたわ」

「ああ。少し手荒だが、こうしておく事を許してくれ」

遥が汗を掻きながらそう告げる。

「やっと来たっすね六角美咲」

蒲生が餌を見つけた肉食獣の如き顔で美咲を見る。

「久しぶりですわね、蒲生さん」

美咲は真剣な顔でそれを見つめるが、蒲生が唾を吐き捨ててから言う。

「何すかその顔、私を馬鹿にしてんすか？」

「……」

「まあそうっすよね。一度は倒したわけっすから。上から目線でも仕方ないっす」

美咲は少しだけ考え、遥に告げる。

「遥さん、蒲生さんにガスドライバーを渡してくださいな」

「な、何を言っている！」

「……」

美咲は遥に目だけ向ける。

遥がそれを察し、ドライバーを美咲に渡す。

「蒲生さん、これを手を表に出してくださいな」

「……」

拘束を解かれ、ドライバーを再び手にした蒲生が美咲を睨みつける。

美咲はそれに構わず、真剣な眼差しで見つめた。

第三百二十九話

美咲と蒲生は外に出て、お互い向き合う。

何の意図も伝えずに行動している美咲に対して苛立ちを感じた蒲生が、美咲に問いかけた。

「何のつもりっすか？ ドライバーまで渡して、表に出て……。まさか病み上がりの私をボコボコにしようとか、そういう魂胆っすか？」
「……ボコボコにされるのは、私の方かも知れませんか」

「はあ？」

蒲生の質問に対してそう回答してから、美咲はボマードライバーを装着。

端末になっている爆弾型のバックルを取り出して開き、『BOMER DRIVE』と書かれたボタンを押す。

『BOMER DRIVE READY?』

美咲は端末を閉じ、いつもの構えをして呟く。

「変身ですわ」

ゆっくりと、ベルトに端末を差し込む。

『COMPLETE』

音声の後、上から一つの爆弾が降りる。

それを握り潰し、その爆風を浴びて、美咲は仮面ライダーボマーへと姿を変えた。

「まさかアンタから戦いを挑んでくるとはね……。変身」

『ガスドライブ！ コウアツ！ フキトーブ！』

蒲生はガス怪人へと姿を変える。

「……」

ガス怪人は構えるが、ボマーはバットを落とす。

そして両腕を広げた。

「何の真似っすか？」

「私、まだちゃんと貴女に勝ってませんの。あの時、二号さんに連れ去られて……。まともに貴女と会話一つ出来なかった」

「する必要なんてないっすよ。むしろ……とつとと殺させるっす」

「出来なければ、まだ死ぬませんわね。尤も、出来ても死ぬ気はありませんの」

「ホントふざけてるっすね。わざと攻撃当たりに行く次は、攻撃しないから自分の事情話せて？」

「……」

「なめてんじやないっすよ。こっちはアンタ超える為に命まで懸けたっつのに」

「私はその理由を知る必要がありますわ」

「だから、それが分からないんすよ。知ってどうする気っすか。今更私はアンタを仲間だなんて思わないっすよ」

「貴女がそう思わなくとも、私はそう思ってる。それだけで十分ですわ」

ボマーの言葉に、ガス怪人は返すべきものを詰まらせる。

「……勝手っすね」

「もう言われ慣れましたわ。けど、それが私ですよ」

「……聞いて良いっすか？」

「なんですよ？」

「私が今から殴っても……その構え続ける気っすか？」

「……勿論ですわ」

ボマーが間髪入れずに答えた。

「なら、遠慮なく行くっす。この場でアンタを泣かせてやる……二度と頂点だのなんだの言えなくなるまで！」

ガス怪人はガスの勢いと共に、ボマー目掛けて飛び出していく。

右腕を引き絞り、ボマーの目の前で勢いよく突き出した。

第四百四十話

無言で殴り続けて、どれくらいの時が経っただろうか。

ガス怪人……蒲生は疲れる一方だが、ボマーにはそこまでダメージが通っていない。

気持ちを全て受け止めるまでは倒れない。

そう言っているようにも感じられる。

「はあ……はあ……」

「それで、終わりですか？」

「……ッ！」

ガス怪人は最後に、全力の一撃を叩き込み。

それでも倒れないボマーを見て、口を開いてしまった。

「アンタは、生徒会長としては言ってる事もやってる事も無茶苦茶です。学校を守る為に蘇我高校と戦おうとか言いだしたり、その為に学校を休んでまで修行しに行ったり。人に迷惑かけてばかりです。けど私達が協力なんかしなくても、アンタはほぼ一人の力でやりたい事をやってきた。私は誰かをつるまなきや、ろくに仕事なんて出来やしないのに……」

「……」

「私はアンタ以上の存在になりたかった。だからその為に、アンタを消すっす」

「それが、貴女が命を懸けた理由というわけですか？」

「……その通りっす」

ガス怪人がそう呟いてから、ボマーが返答する。

「どうして、叶えたい願いがあるのに命を捨てられるんですの？」

「……」

「貴女はその願いを、絶対に叶えたかったんじゃないんですの？ なのに……願いの為に死んだら、その後の世界を見る事すら叶わないんですよ」

「ふん……アンタがそれを言うんすか？」

「私は命を懸けた事なんて一度もありませんのよ」

ボマーの発言に、ガス怪人は言葉を詰まらせた。

「私は夢を叶えても絶対死にませんの。せつかく自分の夢がかなったのに、そんな世界で生きられないなんて勿体ないですわ」

「……」

「貴女は私が消えた後の世界で、やりたい事があつたのでしょうか？」

「なら、何故！」

「そうでもしなきゃ、絶対アンタなんて倒せないと思ったからっすよ！」

校庭に、ガス怪人の叫び声が響き渡る。

「本当は私だつて分かつてたつす。絶対にアンタなんかには勝てやしな
いって。けど、それなら命を懸けてもその可能性に賭けようと思った
だけっす」

「蒲生さん……」

「ああそうっすよ。私はそうでもしなきゃ絶対にアンタなんかには勝て
ない人間なんすよ。だから魂を売った。アンタの命を奪おうとした。
だから……薬に頼つて命を捨ててもやろうとした。それでも、私は
アンタには勝てないんすよ。何でも一人でこなす完璧なアンタには、
絶対に……」

「……」

「生徒会長として、アンタは不出来だけど。それでも、人間として強い
のは間違いなかった。こんな無茶苦茶な考えしてる癖に、なんで一人
で何でも解決出来るんだらうってそう思った……。だから、そうする
しかなかったっす」

そう告げて俯くガス怪人に、ボマーが言う。

「一人だったら、私はこうして貴女の前に立ててませんわ」

第四百四十一話

「私が戦えたのは、こうして生きているのは皆さんがいてくれたからでも、私は誰かをまとめ上げる事は得意じゃありませんの。私は一人でも戦えると思っていたのに、いつの間にか皆さんの存在がかけがえない……この戦いで得た財産になってましたわ」

「……勿論私も、とか言うんすよね？」

「その通りですわ。だって、今はこうしてお互いの事を話し合えている。だから、仲間ですよ。それに……」

ボマーが続ける。

「私、副会長である貴女に唯一勝てなかったものがありますわ」「なんすか」

ガス怪人は少し自分でも考えてみるが、思いつかない。

生徒会長としての仕事をした事はないし、美咲には人間的な強さで負けている。

群れなければ、自分は何一つこなす事が出来ない。

「私は貴女みたいに、誰かの心を掴む事が出来ませんでしたの」「……」

ガス怪人は少し黙り込む。

「今でこそ、私は成音さんと一緒にいますけど……貴女は戦わずとも、誰かの心に寄り添えて、それでいて人を笑わせるのが得意な優しい人でしたわ」

「私が？ 優しい？ はっ……何の事か分からないっすね」

ガス怪人……蒲生は、洗脳前の美咲に対する憎しみ以外の記憶がほぼ欠如している。

美咲の告げた言葉が、何一つ理解出来なかった。

自分が人を笑わせる事なんて、出来るわけがない。

「今の貴女は忘れているかも知れない……けど、私がそれを覚えてますの。貴女は、生徒会の人間……いや、誰かと一緒に生きられるという面では私より遥かに優れてますわ」

「……なんすか。そんな事を言っておけば、私が素直に嬉しいと言う

「とでも思ったんすか」

「思つてませんわ。私は事実を伝えただけ、それをどう受け取るかは貴女が決める事」

「……そうすか」

ガス怪人は、銃型の武器を構えなおす。

「なら、これが私の答えつす」

※※※

無抵抗のボマーに、今度は遠距離からガスを放射するガス怪人。

しかし……それでもボマーにはあまりダメージが通っていない。

「アンタから見て、私がどういう人間かは分かつたつす。けど、それだけじゃ私には不十分なんすよ」

「不十分……ですの」

「私には仲間なんて必要ないんすよ。ただアンタに勝つ事、それが今の私に必要な事。ただアンタを消したい。殺したい。それだけが、私の全てつす」

「……」

「所詮今の私はそんな存在なんすよ。もう元の私なんてどこにもいないんすよ」

蒲生が少しばかり諦めた顔でそう告げる。

「……私は、今の蒲生さんにもきつといいところがあるって信じてますわ」

第四百四十二話

「私は前の貴女と真の意味で仲間にはなれませんでしたわ。もう今の貴女には、前の貴女の良い所なんて残ってないかも知れない。でも、私は前の貴女とだけじゃない。今の貴女とだって仲間になりたいんですわ。だからせめて、いや違いますわね。まずは、今の貴女と仲間になって、貴女に元の心が戻ったら、もう一度元の貴女とも仲良くなりたい。そう思ってますわ」

ボマーの言葉に、ガス怪人は少し動揺する。

「……アンタ、本当にさっきから何言ってますか。私と真の意味で仲間になりたいとか……。私はアンタを殺そうとした。それを分かってんすか！」

「分かってますわ！　けど……そう思われていも仕方がない事をしたと、今の私も思ってますのよ」

「……」

「でも打ち解ける事を諦めたくはありませんの！　私は貴女を仲間だと思っている。だから今、私は貴女を理解している所ですの。こうして貴女の感情をぶつけてもらって、その答えを……私の頭で……」

「……」

無駄だ。

そう告げようとも思った。

だけど……美咲を殴り続けるのにも飽きてきた。

こうなったら、美咲と同じ手を使ってやろう。

そう思っ、バットを拾ってボマーに投げた。

「おい」

「……！」

「それを使うっす。もうサンドバッグにするのも飽きたし、そっちも殴ってくるっす」

「蒲生……さん？」

「アンタの言う理解するっつの、ちよつと真似してやるっす。ただし、私はアンタの全てを否定してやる。良いつすね？」

「……望むところですよわ」

ボマーはバットを構えなおす。

そのまま足を動かして、ダツと音を立てて地を蹴った。

「……」

ガス怪人は勿論避けず、バットの攻撃を銃で受けきる。

いつも美咲がやっているように。

「どうした？ 話してみるっす」

「良いんですの？ 私が貴女に抱いている感情は、この一撃だけでは絶対表現出来ませんの」

「……」

「さっきも言いましたけど、私は貴女が人に尊敬されてるのが羨ましかったですわ。私はこうして戦って話し合わなければ理解されないのに、貴女は違う。貴女は立ち振る舞いだけで、色んな人から尊敬されている。私はそこだけはどうしても貴女に勝てない。頂点に立つ為には、そういう立ち振る舞いも必要だというのに」

ボマーはバットを素早く動かしながらそう答える。

感情を乗せて、重い一撃を入れ続けた。

「私は第一印象が悪いと、常々言われますの。ですから、貴女のように立ち振る舞いでも頂点に立ちたいとそう思ってますのよ」

ボマーはバットをもう一度構える。

「それに、昔の貴女は人の心に寄り添う事も得意でしたわね」

ボマーのバットは休まず動き続けた。

「不器用な私には、そんな事出来ませんでしたけど……貴女は違いますの。生徒会の人達は、貴女には心を開いてくれる。それに、私は見ましたのよ。生徒会の人達は、生徒会を抜けても貴女と一緒にいましたし、貴女がいなくなつた事を心配していた。心配や尊敬してくれる人は数じゃない……その人がどれだけ自分を見てくれるかが大事だと分かっているわ、私は貴女のそういう所には勝てませんでしたわ」

「……」

ガス怪人は返すべき言葉を失う。

「畜生……全部否定してやろうと思ったのに。アンタは、アンタには……それ以外の不満はないんすか！」

「……」

「そうやって綺麗な言葉だけ使って、自分だけ逃げようとしてんすか？ アンタだってあるんだろ……不満が！」

「不満は確かにありますの。けど、自分にならないものは自分の努力で手に入れるしかないですの。だから私は、いつか貴女のそういう所も上回れるようになりたいですの」

ボマーは端末を取り出す。

「それが、私が貴女に抱いている気持ちですの！」

『FINAL DRIVE!』

ボマーがバットにボムビットを集め、そのまま勢いよく地面を蹴る。

ガス怪人の前で勢いよくスイングし、その身体を大きく吹き飛ばす。

「ライダーインパクト！」

「ぐあっ！」

ボマーが爆発に巻き込まれる。

ガス怪人は地面を転がり、ボマーは死んでから蘇生。

「これで……終わりですの……」

第四百四十三話

ボマーはもう一度構えを止め、バットを捨てようとした。
しかしガス怪人が止める。

「もう良いっす。もううんざりっすよ」

「蒲生さん……」

「こんなやりとり……長く続けた所で、元の自分に戻る事はないし、私はアンタとつるむ気はないっす。そんな事を期待してたようにも見えるっすけど、それなら時間の無駄っす」

ガス怪人は変身を解く。

「……」

ボマーも変身を解き、六角美咲の姿へ。

「残念だったっすね。あの時拘束さえ解かなければ、てかドライバーさえ渡さなきゃ……仲間には出来なくとも情報源にはなれた筈っすけど」

蒲生はそう告げる。

去ろうとしたその時、美咲が叫ぶ。

「待ってくださいいな」

「……」

もう、なんだ……などと言葉を発する事さえ億劫になっていた。

「今日の所は引き分け……そうしますわ。けど、絶対にいつか決着をつけて……互いに仲間になれるよう努力しますわ。だから、蒲生さんさえ良ければいつでも戦いますわ」

美咲の言葉に、蒲生は苛立ちながら返す。

「……勝手に言ってるっす。私はもう、アンタみたいな奴と関わりたくなくなっただっすよ」

「そうですね……けど、私をまた消したくなったらまた

「もううるさいっすね。戦わないっす。絶対に……もう二度と」

蒲生はそう吐き捨てて、今度こそその場をあとにする。

美咲の声が聞こえないくらい離れるまで、美咲は何も言わなかった。

「……それでも、私はまた戦えると信じてますわ」

蒲生に聞こえた空耳か、それとも美咲本人が発していたのかはもう距離が遠くて分からない。

相変わらずしつこい奴だと、蒲生は頭を掻きむしる。

※※※

帰り道……。

蒲生はただ一人、自分のした事を後悔しながら歩いていった。

美咲みたいな無茶苦茶な人間を消し、超える事が出来れば、あの無茶苦茶になった生徒会を自分が上手く立て直せる。

そう信じて、董に魂を売った結末は最悪だった。

相手の心を折る事はままならず、ただただ、彼女の人間としての心の強さを思い知らされ、ついに蒲生が折れざるを得なかった。

「畜生……」

悔しい。

ああ言って去る以外に、もう自分には何も出来ないという事実がとも悔しい。

仮にあの後美咲が倒されるとしても、もうそこに自分はいない。

自分の力で彼女を倒す事は、不可能なのだ。

「蒲生……」

聞き覚えのある声。

忘れもしない。

「何の用すか？ 皆」

振り向くと、美咲と成音を除く、生徒会のメンバーだった者達全員がその場に立っていた。

ある時、董に頼まれて誘拐した者達……。

洗脳されているのだろう。

全員の瞳が死んでおり、腰にはアークソードドライバーが。

「……こんなことに使われるなんて、思わなかったすよ」

自分に誘拐させた者達に、自分を襲わせる。

董が何を考えているかは知らないが、取り敢えず……用済みになったと判断されたのは事実。

「蒲生、排除する……」

「そうっすか。なら死んでもらうっす」

全員がドライバーを操作して、その姿を怪人に変えた。

※※※

同時刻。

足利明人は、時々来る強烈な身体の痛みに耐えながら……○×女子
高から逃走していた。

「……ッ！」

戸間董に植え付けられた人格に乗っ取られた時に飲んだ薬の影響
なのは言わずもがなだが、かなりの激痛だ。

あの男は副作用に耐えながらも、この身体で戦っていたが、今の明
人では到底やれそうにない。

「六角……美咲……」

口から言葉を零す。

今逃げて向かっているのは、六角美咲の所だ。

つい先ほど、あの男の人格は完全に明人の身体から抜けた。

別の身体に移動したその男を倒そうとしたが、身体の痛みで力が出
せず敗北し、命からがら逃走し、今に至る。

敵の正体を知った上で逃げた以上、命の保証はないが、確か六角美
咲も敵が董である事を知っていた筈だ。

「……ッ」

痛みは止まらない。

けど、美咲にもう一度会うまでは倒れられないと……明人は何とか
身体に力を入れて歩き続ける。

《第三章 終わり》

第四章 第四百四十四話

生徒会メンバーの一人、後藤(ごとう)が生徒会室で……白髪でスーツ姿の男性に頭を下げつつ報告した。

「蒲生を取り逃しました、すみません……松永(まつなが)先生」

「おいおい、新生徒会がそんなんで良いのかよ。後藤新生徒会長さんよ」

「……」

顔を上げた後藤が、光のない瞳で……白髪男で松永を名乗る二号を見据える。

董によつて感情を強化される形で、彼女に従っていた一号や二号、蒲生は本来の人格をある程度残していたが、後藤達はほぼ雑と言つていいレベルの洗脳しか施してない故か、本来の人格が完全に死んでいく。

恐らく洗脳を解くのも簡単だが、別にそれで良い。

今やっている事は、二号の肉体を完全強化する為の時間稼ぎに過ぎないのだから。

「良いか……お前達に倒してもらうのは三人。蒲生に山内成音、そして六角美咲。今の六角美咲は、最高戦力と言つても差し支えない存在だ。蒲生如きで苦戦しているようじゃ、勝つ事は出来ねえぞ」

「……」

強引に洗脳した場合、元々戦闘力が高い者でもかなり弱体化する。

蒲生ですら倒せないというのは、十分あり得る話だ。

「まあ良い。次は期待しているぞ」

「はい」

二号はそう告げてから、生徒会室を退出した。

まだやるべき事は終わっていない。

時間稼ぎに使うものは、他にもある。

「しかし、松永先生か……いい響きだな」

そう言いながら少し笑う。

明人の身体にある二号と脳波を融合した際に、実を言うと、もう既に失った筈の過去の記憶をある程度思い出している。

まず、自分の名前が『松永秀奈（まつなが しゅうな）』という名である事。

それと、自分が戸間董に接触して人体実験を受けた理由。

そして……一番思い出さたくない事柄。

「……」

今の……福沢裕太を模した身体の手足を見て、少しばかり自分の現状に安心する。

そう。

二号……松永秀奈は、元々女性だった。

別に女性である事自体が嫌だったわけじゃないし、それでいじめを受けていたわけでもない。

むしろ、自分は身内で誰よりも強い存在だ。

けど限界は存在した。

今の身体では、今以上に強くなれない。

ある時、それが自分の中の恐怖になった。

勿論自分が女性である事が悪いわけじゃない。

女性だって、強い者は沢山いる。

けど、自分が男性だったらもつと強くなれるのに、という気持ちが消える事がなく……結局、秀奈は董の人体実験を受ける時も男性の身体が欲しいと念を押していた。

この記憶だけは、本当に思い出さなくなかった。

全て忘れて、これからの一生を強い男として過ごせればどれだけ幸せだった事か。

「……」

二号は溜め息を吐きかけたが止め、過去に蓋をして董の所へと向かう。

もう少しで夢が叶うのだ。

過去の記憶に心を痛める暇など、今の二号にはない。

第四百四十五話

美咲が去ってから、俺と一号は二人でマンションに向かっていた。俺は良いと言ったのだが、もし董からの襲撃があつたら危険だという理由でついてきている。

距離感問題は解決し、二人並んで歩いていたら特に話す事もない。そろそろ久しぶりの自室に戻る……そんな時。

「裕太、聞いても良いか？」

一号が真顔で俺にそう声を掛けてきた。

「お、おう。何でも聞いて良いぞ」

少しは成長したのかなと心の中で感心しつつ、どういふ質問が来るのか待っていた。

「——お前は美咲の事が好きなのか？」

「(せき)！」

予想の斜め上の質問が来てむせた。

「うえっ……いやお前、確かに質問して良いとは言ったけどよ……ふざけるにしたってそりやないぜ」

「本気だ」

「ですよね……」

そんな真顔で冗談だとか言うわけねえや。

「俺は董の事が好きで、その為に罪を犯した。お前が美咲と共にいるのは、そしてあの時離れようとしていたのは、美咲の事が好きだから……そうなのか？」

「いや、恋愛感情は間違っても抱いてねえよ。大体俺は年上のお姉さんが好みのタイプだし、あいつは体型良いけど所詮ガキんちよだし、性格もバブみのバの字もねえし、それに無茶苦茶で上から目線で……年上に対する礼儀もないし……。だから全っ然好きじゃねえ！」

「そうか」

特に引いたりもせず、ただ一言そう告げる一号。

「でもよ、まあ好きっちゃ好きさ。恋愛感情とかじゃなく、ちゃんと友情的な意味だよ」

「……」

「それにあいつ、俺と会ってから俺がいねえと生徒会の仕事も一緒に出来ねえとか言い出してよ。ホントは俺がいなくても事足りる癖に……」

「確かに一応生徒会の仕事をしていたが、進みはあまり良いようには見えなかった。美咲はあの時裕太がいらないから人手が足りないと言っていたが……」

「何で俺がいなくなったただけで進みが悪くなるのかまるで理解出来ない」

「……」

一号が急に黙り込む。

「なんだよ、なんか俺おかしい事言ったか？」

「なんでもない。だが、少しばかりお前も敏感になるべきだと思っただけだ」

「は、はあ？」

何を言いたいのかさっぱりよく分からん。

「いずれ気付ける日が来る。まあ、相手次第というものもあるだろうが」

「お、おい。それじゃよく分かんないだろ？」

返答を求めてそう告げる。

その時。

ガシツという掴まれる感覚を、右脚に覚えた。

「ん？ あ……」

振り向くとそこには、荒い息を吐き続けて俺の脚を掴む足利明人の姿が。

「お前……福沢裕太……か？」

明人が何とかかすれた声でそう問いかける。

第四百四十六話

「明人……！」

俺は咄嗟に手を伸ばそうとするが、一号に掴まれる。

「……」

「な、なんだよ」

「足利明人の中には二号がいた筈だ。罨の可能性もあるぞ」

そう言われて、手を引つ込める。

代わりに一号が近付いて、明人に告げた。

「ひとまず助けてやる。ただし、ベルトを渡してからだ」

「……」

明人は何とか身体に力を入れて、二本のベルトを渡す。

ソードドライバーと、アークソードドライバー。

「……」

それを確認してから、一号は俺に頷き。

俺は手を伸ばして、明人を立ち上げてから背負う。

「ひとまず俺の部屋に連れていこう」

「ああ」

※※※

久しぶりの自分の部屋。

今ではかなり懐かしく感じるし、今日は久々にゆっくり休めると思っていた。

勿論今回は、そんな感動を口にする時間もなく……せつせと明人を布団に寝かせ。

俺と一号で観察を続けていた。

「今のところ出てこないな」

「……ああ」

一、二時間経つても……まだ二号の人格が出てくる気配はない。

ひとまず明人の容態を何とかすべきだと、スマホを取り出す。

「取り敢えず、遥先生に連絡をとろう。まだ確か蘇我高校にいた筈」

俺は番号を入力し、遥先生に連絡を入れた。

『私だ。何の用だ?』

「実は今、俺のところ足利明人が来て。一応二号の奴が入ってる可能性があるので、俺の部屋の中で寝かせてるんですが、この苦しそうにしてるのは……」

『ああ、間違はなく蒲生も服用していた薬の副作用だろう。二号の奴も、アークソードドライバーを使っていたし、薬の効果なのは間違いない』

「取り敢えずどうすれば……」

『今から明人を蘇我高校まで運べるか?』

「運びます」

俺はそう頷く。

しかし。

「ダメだ」

苦しそうな顔をしながら、それを拒否する。

「このくらい、俺は克服してやる。そして強くなってる……」

「無茶を言うな。蒲生も死にかけの所だったんだぞ」

一号が冷静に諭す。

「これが克服出来ないようなら、俺は六角美咲に顔向け出来ん……」

大きな力を得る事には、代償がつきものだ。それを忘れるな」

明人は一号にそう反論する。

「……」

一号は黙ってしまふ。

「けどお前が死んだら、美咲がどれだけ悲しむか分かるだろ!」

あの時の美咲の泣き顔を思い出す。

もう彼女にあんな思いはさせたくない――。

「分かるさ。だから……克服する」

「……!」

「俺はただのあいつの仲間にいる気はない。いつかあいつを倒す者として、強くならなければいけない」

「……お前」

「俺はあの男に乗っ取られていた時も、きちんと見ていた。あいつが

新しい力を手に入れるのを……。

だから俺も強くなる。あいつが一度死んで強くなったのなら、俺も同じくらいの事をしなければあいつに負けてしまう」

明人は鋭い瞳でそう告げる。

美咲に勝るとも劣らないその気迫に、俺は圧されてしまった。

第四百四十七話

俺は反論を諦めて、遙に告げる。

「すみません、彼自身に拒否されてしまいました」

『……。しかしその状態の危険性はお前も分かる筈だ。もし彼が危なそうなら、その時は無理にでも連れてくるんだ』

「分かりました」

遙が通信を切る。

※※※

「良いのかよ、足利明人を野放しにして。あいつは多分、あの薬を克服出来るだろう?」

「今は適当に泳がせておくさ。君を完成させられれば、もう負ける心配をする必要はないし……それに」

「なんだ?」

「もし彼が薬の効果を克服し、僕に襲い掛かってくるようなら……君が乗っ取っても良いんだ。違うかい?」

「おいおい。あの薬、そこそこ痛い思いしたんだからもう二度とやりたくないぜ」

二号の言葉に、董が笑みを返す。

そして思い出したようにこう呟く。

「そうだ、時間稼ぎの準備に必要なものが完成した」

「お、どれどれ?」

「これだ」

董が見せたのは、蘇我高校の生徒達や成音達が使う怪人変身用のベルトだ。

一見、そこまでの違いはないように見えるが……。

「使ってみてからのお楽しみ、と言いたいのか?」

「その通りだ」

「……ふっ」

二号はそう笑う。

※※※

『諸事情あって、今は裕太のマンションにいる。心配しないでくれ』
午後十時。

美咲はベッドの上でそのメッセージを確認して、一人考え込んでいた。

——次もし会う事が出来たら、何を話すべきですか？

ついさつきまで、美咲は蒲生とお互いの思いをぶつけあっていた所。

けど蒲生にうんざりと言われ、二度と戦いたくないとまで言われてしまった。

だが美咲ははつきり、相手に伝える事は出来た。

次に会う事が出来れば、今度こそ仲間になりたいと。

でも……どうすれば。何を伝えれば良いのか。

美咲には分からない。

「……」

美咲には分かる。

絶対にはいつか出来る……と。

はつきりと自分の想いを伝えあい、互いを現状以上に理解し、互いの良いところも悪いところも少しでも理解出来れば、絶対にあの洗脳された蒲生とも仲間になれる。

でも問題は、方法だ。

方法が分からなければ、折角の確信も無意味となる。

届きそうな所にそれはあるのに、何故か……届かない。

まるで星のように。

『〜♪』

フェイスフォン柄のカバーを着けているスマホに、着信音が入る。

通話相手は、岸本優香。

「優香さん……う？」

こんな時間に何の用だろうか。

美咲は少し気になりつつも、通話開始ボタンをタップ。

耳に当ててから、美咲は告げる。

「もしもし優香さん？」

『よっ、美咲っち！』

彼女の声は、この時間帯には似つかわしくない……元気なものだった。

第四百四十八話

「どうしましたの？　こんな時間に」

『こんな時間で……まだ夜十時系じゃん』

「凄く元気ですわね」

『ウチはいつだって元気系。美咲っちもそうっしょ？』

「私はそうでもないかもですわね」

『？　どうした系？　体調でも悪い系？』

優香が心配そうに聞いてくる。

今悩んでる事を聞いても仕方無い気がするし、少しだけ気になっ
ている事を質問する事にした。

「優香さんは、ある日突然私や成音さん達の前に現れましたけど、なん
で危険な戦いなのにまだついてこられるんですの？　それも、戦う力
もないのに」

『……』

「別に、足手まといだとか言うつもりはありませんのよ。けど、何とな
く気になるんですの。死ぬかも知れない戦いに、こうして貴女はつい
てきてくれる。私が死にかけていたのも、ちゃんと見ていた筈なの
に」

優香を心配してそう告げる美咲。

しかし。

『何言ってる系！　美咲っちや、もしかしたらウチの友達が戦ってる
かも知れないのに、ウチがそれを見捨てられるわけない系』
「……」

『ウチは、ただ見てる事しか出来ない系。けど……ちゃんこの戦い
から日常に戻る事を祈るのがウチの役目だと思ってる系。だって、
ウチと美咲っちは昔から友達系……そうでしょ？』

「そうですわよね」

『それに、美咲っちが死んだの……ウチ凄く辛かった系。淀っちや
初っち、江代っちや和泉っち達になんていえば良いのか分からかった
し、生き返らなかつたらこれからずっと美咲っちがいなくなった事を

引きずって生きなきやいけないと思った系』

優香は止まらず続けた。

『ウチは、そんな事になるのは嫌系。ウチは友達と馬鹿な事やってる時が一番楽しい系だから、この戦いが終わったら、また二年の時みたいに淀つち達と遊びたい系。それまでは、せめて戦いを見守らせて欲しい系。ウチは何も出来ないかもだけど、せめて美咲つちが折れそうな時は支える系』

『忘れちゃダメ系。美咲つちと戦った成音つちも、離れそうになった裕太つちも、成音つちや遥つちの為に一生懸命なヴィーダつちも、美咲つちのそういう真つ直ぐ突き進む姿勢が好きでついてきている系。蒲生つちも……いつかきつと美咲つちの良さを分かってくれる系』

「え?」

美咲は驚く。

蒲生の話など一度もしていないのに。

『ウチは美咲つちの友達系。美咲つちが他の誰かに相談出来ないのなら、ウチが相談聞く系』

「……優香さん、ありがとうございますわ」

美咲も口元に笑みを浮かべる。

『それに、ウチも諦めてない系。ウチも出来れば、戦いに参加したい系』

「え?」

『なーんてね。でも美咲つちを支える方法は何かしら考えたい系。それだけは分かって欲しい系』

「……」

『んじゃ、そろそろ寝る系』

「はい、おやすみなさい」

『おやすみちゃん』

優香が通話を切る。

美咲はそのまま横になって、眼を閉じた。

第四百四十九話

「……」

通話が終わってから、優香は珍しく……少し落ち込んだ顔になる。さつき美咲に言われた言葉が、少しだけ気になっているのだ。

戦えないのに、何故ついてこられるのか。

答えはさつきも言った通り、美咲を支える為。

けど……実際彼女にそれは必要なかった。

彼女には、守りたいと思う者がいて、それが必然的に彼女の心の支えとなっている。

何度折れても、自分の力なしに立ち上がっていた。

「……っ」

少しばかり声を出しながら、横に転がり……机の上に置かれているものを見る。

ホースドライバー。

美咲の復活の為に、前田から借りたものだ。

返却するかどうかも彼女に聞いたが、どちらでもいいと言われ、少し迷っている。

「あれを使えば、ウチも戦える系？」

それが一番、直接的に彼女を支えられる手段だ。

もうこれ以上の戦力が必要かは分からないが、少ないよりかは多い方が戦いを有利に進められる筈。

お世辞にも頭が良くない優香に出来る事と言ったら、それくらい……。

「ウチには、無理系」

少しだけ手を伸ばそうとしてから、それに気付いて項垂れる。

美咲達の戦いの過酷さは、見ている自分も分かっているつもりだ。

最悪美咲のように、命を落とす事だつてある。

もしかしたら、間違つて自分が命を奪ってしまう事も。

友達の為とはいえ、そこまでの覚悟を背負つて戦う事など……：自分出来ないだろう。

「……どうしたら良い系?」

優香は迷い続け……朝まで眠りにつけなかった。

※※※

次の日の朝。

「うー……」

美咲と成音、そして優香の三人で登校していたが……優香は眠そうにしていた。

「どうしましたの?」

「ん? 実はあの後眠れなくて……」

優香は眠い目をこすって歩く。

「貴女も悩み事ですか?」

「んーまあそんなところ」

「優香でも悩む事あるんだ」

「成音うち中々酷い事言う系……」

「今日は全校集会ですよ。色々な事があって今更知りましたけど」

「大丈夫大丈夫、寝れば良い系……」

「そういう問題じゃありませんのよ?」

三人で話しながら歩いていったその時。

一人の女子生徒が立ち塞がる。

「ん?」

「貴女は……」

「平井(ひらい)?」

美咲と成音が眩く。

生徒会のメンバーの一人で、成音の同級生。

しかし……様子がおかしい。

瞳に光がなく、操られているかのように生氣を失っている。

そして右半身の筋肉が不自然な動きをしていた。

あの時の蒲生のように。

「六角美咲に山内成音、貴女二人を排除します」

そう言って、アークソードドライバーを取り出す平井。

『アークソードドライバー！』

腰に取り付けてから端末を取り出し、操作して端末を閉じた。

『ARC SWORD DRIVE READY?』

「変身……」

『ARC COMPLETE』

禍々しい光が平井を包み、上空から同じく禍々しい輝きの剣が現れる。

それを掴むと同時、平井の身体が剣の怪人・改へと変化した。

「私がやりますわ」

二人に下がるように指示し、美咲はボマードドライバーを取り出す。端末を操作し、閉じて構える。

『BOMER DRIVE READY?』

「変身！」

そう叫んでから、端末をベルトに取り付けた。

上から紫色の爆弾が降り、それを握り潰して爆風を生み出す。

その爆風の中から、一人の戦士が現れる。

仮面ライダーボマー。

「キバって行きますわ！」

第百五十話

成音は遠くから、ボマーと剣の怪人・改の戦いを観察していた。ボマーの動きは、もう有象無象を寄せ付けない立ち回り。

回避を使わずにバットや腕による防御が中心のスタイルは相変わらずだが、ハイドロボマーの力はおろか、アクセルドライブなどを使わずとも、平然と戦っていた。

剣の怪人・改の平井が完全に押されている。

洗脳されている以上、戦闘経験がない一般人よりは強いはずだが、例えるならゲームのコンピュータを相手にしているかのように、限られたパターンで戦っていた。

勿論同等の実力であれば、剣の怪人・改は間違いなく勝つ事が出来る。

しかし知識と経験、そして臨機応変さが備わった今のボマーには当然ほぼ全ての攻撃が見切られている。

「うえいッー」

「かはっ……」

ボマーがバットで、大きく剣の怪人・改を仰け反らせる。

そのまま勢いよく地を蹴って、剣の怪人・改の胸部へと突きを入れた。

大きく吹き飛ばされた剣の怪人・改は最初、壊れた機械のように倒れたが、その後すぐに……機械のような人間味のない滑らかな動きで立ち上がる……が。

「くうっ……ああッー」

薬の副作用が、平井を襲う。

腕を押さえて苦しみだし、動けずにいた。

「その辺にしなさいな。貴女死にますわよ」

ボマーが冷静に諭すが、洗脳されている平井にその声は届かない。

息を切らして、それでも足を前に動かして。

「滅ぼす事が任務。それは出来ない」

機械のように感情が欠落した声……だが確かに彼女が負っている苦痛を感じられる声で、剣の怪人・改が告げる。

苦しみながらも端末を取り出し、ボタンを押して技を発動。

『ARC FINAL DRIVE!』

取り付けた瞬間、禍々しいオーラが剣の怪人・改を包む。

苦しみながらも剣を握り、構える。

「……!」

ボマーも同じく端末を取り出してボタンを押す。

そして端末を取り付ける。

『FINAL DRIVE!』

脚にボムビットを集結させてから飛び上がり、右足の裏を剣の怪人・改に向けてから勢いよく急降下。

「ライダーボムキック!」

ボマーが叫びながら、剣の怪人・改へとライダーキック。

剣の怪人・改も、痛みを訴える身体にむちかかって、必殺技で受け止めようとしますがボマーには通用せず、爆風で勢いよく吹き飛ばされて変身解除。

平井は宙を舞ってから、地面へと勢いよく衝突。

爆死したボマーが別の場所で復活し、変身を解く。

「くっ……ううっ! ああああッ!」

「平井!」

気絶しながらも副作用で悶絶している彼女の所へ、成音が近付く。

第百五十一話

成音は状態を確認してからすぐにスマホを取り出し、狩野遥へと連絡を入れる。

「遥さん、薬を飲んだ人が！」

『なんだと』

遥がそう言いながらも、冷静に指示を出す。

『とにかくそいつを今すぐ蘇我高校まで運んでくれ』

「はい！」

通信を切ってから、成音は平井を背負おうとする。

「待って、ウチがやる系」

それを止める優香。

「優香？」

「優香さん？」

二人がその優香を見て呟く。

「ウチが運ぶから、二人はこんな事をした人を探して欲しい系」

「……」

成音は一号からの話で、誰がやったかを把握している。

それは美咲も同じ。

二人は何となく察した。

今まで戦いに参加する気配のないものが、蒲生と違って無理矢理洗脳されている。

という事は、もしかしたら他の生徒が被害を受けている可能性も……。

「嫌な予感がするわね」

成音がそう呟くと、美咲がこう言葉を返す。

「私が行きますわ。だから成音さんは優香さんと一緒に……」

「美咲っち」

優香が名を呼んでから、首を横に振る。

意地でも一人で行く、そう言いたいのだろうか。

「危険だということは分かっていますわよね？」

「美咲っち達の方が、もつと危険な筈系……。これくらいの危険、ウチが背負う系」

執念のようなものを、優香の瞳から感じる。

「今回ばかりは任せるわよ」

「成音さん？」

「……良いから、行くわよ」

「わわっ、引っ張らないで欲しいですよー！」

美咲の腕を引っ張って歩き出す。

どうせ止めても、美咲は応じないだろう。

だが成音は気付いていた。

恐らく……夜眠れなかつた事と関係しているのだろう。

聞きたい気もするが、今は起きているかも知れない問題を解決する方が先だ。

「ウチもウチの努めを果たす系」

優香も平井を背負ってから、駆け足で蘇我高校へ向かう。

※※※

既に登校時間は過ぎた状態。

美咲と成音が○×女子高に到着した時には既に、校舎内に誰もいなかった。

普通に全校集会が始まっている、とかなら勿論問題ないのだが……。

「一応ベルトは着けたまま入りますわよ」

「分かってるわよ」

美咲と成音は慎重に扉を開けると、そこには全校生徒の姿がある。

案の定、そこにいる全員様子がおかしく、扉が開いた瞬間こちらを見てベルトを取り出す。

「やはりですわね」

「おいおい、遅刻はいけないな。六角美咲生徒会長さん……いや、六角美咲元生徒会長さんよ」

美咲の前に、黒フードを着けた男が現れる。

二号……だろうか。

「また貴方達の仕業ですね！」

「ああ……そうさ」

二号と思しき人物がフードを取る。

白い髪に、赤い瞳。

顔は福沢裕太そのものだが、完全に髪から色素が抜けていたそれは……少しばかり異質な感じを醸し出していた。

第百五十二話

白髪の裕太の姿をしている二号を見つめていると、二号がふざけた態度でこう返す。

「ああこれか……どうだ？ イケてるだろ？ お前の大好きな裕太が、痛々しく白髪に染めたって思うと」

「貴方と裕太さんでは月と鼈ですわ」

受け取り方によっては馬鹿にしているような気が……と成音は心の中で呟く。

怒る美咲をよりも少しだけ前に出て、二号に対して笑みを浮かべて告げた。

「平井を洗脳したの、アンタ達なんですよ？ それに他の生徒達も」

「正確に言えば、こいつらは洗脳じゃないがな。ただ少しだけ、人工脳波で身体を乗っ取っただけだ」

「へえ……でも、こんな雑な洗脳であたし達に挑むって事は、アンタの作り主は相当焦ってるみたいね」

「……バレちゃあ仕方ねえな」

二号も少しだけ弱った顔を見せるが、すぐに笑みを取り戻す。

「だが、まだ俺達が負けるとも決まったわけじゃねえ。流石のお前達でもこの数相手は少し荷が重いんじゃないか？」

「……」

口を開き終えた二号の隣に、美咲と成音にとっては見覚えのある少女が現れる。

「後藤さん！」

「後藤！」

「ああ……紹介が遅れたな。こいつがお前に代わる新しい生徒会長だ」

後藤の様子も、平井と同じだ。

瞳から光が消え、右半身の筋肉が薬の副作用で不自然に隆起している。

そして腰には、アークソードドライバーが。

「六角美咲を排除……それが新しい生徒会の方針」

後藤が静かにそう呟く。

「後藤さん、今日を覚えてあげますわ」

美咲は端末を操作してから閉じる。

「変身ですわ!」

『COMPLETE』

爆弾を握り潰し、爆風を浴びて仮面ライダーボマーへ。

「どうやらやる気は十分みてえだな。一旦ずらかるぞ」

「……」

二号が指を鳴らすと、後藤と共にどこかへ消えてしまう。

「待ちなさい! 逃げるんですの!?!」

と言うや否や、体育館に立つ他の生徒達もベルトを取り出して装着する。

全員が端末を操作して、口を開く。

「六角美咲……山内成音を……排除する……」

同じくらいの声質で、生徒達がそう呟きながら変身。

アーミーや火炎放射器怪人、騎兵怪人やサツク怪人。

様々な種類の怪人に変身する生徒達。

「やるしかないですわね」

「あたしも手伝うわ」

そう言って、フレイムシャワードライバーを装着する成音。

『FLAME SHOWER DRIVE READY?』

端末を閉じてから、静かに呟く。

「変身」

ベルトに端末を取り付ける。

『COMPLETE』

炎に包まれる成音。

その身体を火炎放射器怪人へと変えてから、銃口を敵に向けた。

第百五十三話

戦いから数十分。

「よいしょ……ころしょ……」

何とか平井を背負って、優香は蘇我高校の科学部部室へと到着。ベッドに寝かせてから、白衣の姿で待つ遙に目を向ける。

「遙っち、運んできた系」

「ああご苦労。あとは任せろ」

遙はそのまま道具を準備し始めた。

優香はすぐには出ずに、その様子を見届ける。

それに気付いた遙が、優香に声を掛けた。

「どうした？ 見ても楽しいものでもないぞ」

「いや、遙っちに少し聞きたい事がある系」

「私に聞きたい事？」

遙は少し困惑しながら、

「私に男の扱いを問われてもな」

「違う系」

「……違うのか？」

「いや、ウチの事どう思ってる系？」

「昔ながらのギャル、か？」

「そうじゃなくて……ウチが気にしてるのは、美咲っち達や遙っちみたいに何の役にも立ててない事系」

「……」

遙の表情が真剣なものへと変わる。

「みんなそれぞれ戦う力持ってるのに、ウチだけこうして見てる事しか出来ない系。ウチはもう仲間が傷付く所は見たくないし、美咲っちみたいに死んじゃう所なんて絶対に見たくない系。でも……ウチが戦ったら、ウチが誰かを傷付けてしまうかも知れない系。ウチは、どうしたら良いのかなって……」

「それこそ……私に聞かれても困る」

遥が静かにそう告げた。

「私はお前達という時間はそこまで長くないし、お前の事も上辺だけしか知らない。それに、私も現状に決して満足はしていない」

「満足してない？」

「ああ。元々私の個人的な復讐だったのに、その為に多くの者を巻き込む結果となってしまうた。今でもその者達に謝るところか、巻き込まれる者は増える一方だ。しかし今の私の力では、直接戦いに行く事は出来ない。こうして後方支援しか出来ない事が、少し悔しい。本当は今すぐにでも、自分の力で董に罪を償わせたいというのに」

下を向く遥。

「けどそれが無かったら美咲たち達も満足に戦えなかったし、生き返る事も無かった系。それに……友達を巻き込んだ事は許せないけど、好きな人の為に戦いたいという気持ちはウチも否定出来ない系」

思わず手を止める遥に、優香が言う。

「遥っちは自分が思うような悪い人じゃない系。好きな人を想えて、その為に行動出来て、でもちゃんと間違えたら苦しむ事が出来る……とっても優しい人系。ヴィーダっち見てれば分かる系」

「まったく……お前達は本当にお世辞が上手いな。皆同じような事を私に言う」

「美咲っちも成音っちもハッキリものを言う人系。絶対そんな事ない系」

そこで優香は気付く。

「あれ？」

「どうした」

「なんか相談したいのはウチだったのに、なんか遥っちの悩みに答えちゃった系……」

「ああ、そういう話だったな」

遥が半目でそう答える。

「うう……なんかウチ人の悩み聞くとついそっち答えちゃう系……」

優香が頭を抱えた。

しかし。

「それだ」

「え？」

「それでいいんじゃないか？ お前がこの戦いの役に立てる方法……だと思っただが」

「これが？」

「ああ。お前は見た所、人間を観察する能力に長けている。それに困っている者を放っておけない優しさがある。戦う力がなくとも、それはお前にしか出来ない事なのではないか？」

遥が珍しく優しい笑みを浮かべて答える。

「でも、それをするなら美咲っちの方が説得力あるっていうか……」

「確かにそうだな……だが彼女は一人しかいないし、美咲の意見は強い者から見た視点での言葉が多い。こう言っては難だが、この前までの私と一号、そして福沢裕太と一号のように、彼女一人の努力だけでは中々難しい場合もある」

そうして美咲一人で頑張り過ぎた結果、美咲は一度死んでしまった。

あんな事は……もう。

「お前は確かに、最前線に立って戦う覚悟も無ければ、私のように後方支援も難しい立場だ。何かの為とは言え、人を傷付ける事に対して消極的でもある。けど、それで良い気がする。美咲とは違う切り口で、誰かの心を救う事が出来るんじゃないか？」

「……」

優香は少し黙り込む。

「変わりたいと思う心は素晴らしいかも知れない。けど、それは変わる前に持っていた良さを失う事もある。私に言えるのはそれだけだ」

遥は道具の準備に戻りながら、最後にこう告げる。

「だが今のままでは、美咲達が身体に負う傷だけはどうにも出来ないし、相手を追いつめる戦力になれないのは確かだ。どっちが自分に相応しいか、少し考えてみると良い」

第百五十四話

数こそ多かったが、そこまで問題はなかった。

あの洗脳されていた平井よりも劣る、人工脳波で乗っ取られた生徒達はどんどんボマーと火炎放射器怪人の手によって変身解除され、少しずつ数を減らしていく。

『FINAL DRIVE!』

ボマーと火炎放射器怪人が二人で端末を操作して、ベルトに取り付ける。

束になって襲い掛かる生徒達目掛けて、必殺技を放つ。

「ライダータイフーン!」

広範囲回し蹴りのライダータイフーン。

そして火炎放射器怪人の爆炎放出。

向かってくる怪人達を一網打尽にし、周囲の生徒達の変身を解いていく。

「一旦距離を取りますわよ」

残った生徒達を体育館外におびき寄せてから、ボマーは普段使用を禁じている技を使う。

「成音さん離れてくださいいな!」

「分かったわ」

火炎放射器怪人が距離をとる。

ボマーはゾンビのように向かってくる怪人達に飛び込みながら端末を操作し、ベルトに取り付けた。

『EXPLOSION DRIVE』

ボマーが白い光に包まれながら、ボムビットと共に怪人達の群れへと突っ込み、大爆発で怪人達を四方八方へ吹き飛ばす。

ボマーは残った怪人達から距離を置いた場所で蘇生し、もう一度バットを構えた。

「あともう少しですわ!」

そう思っていたのも束の間。

ボマーの前に、三体の剣の怪人・改の姿が。

「えっ……うわあっ！」

ボマーが大きく吹き飛ばされる。

「会長！」

ボマーに叫んだ火炎放射器怪人も、同じく剣の怪人・改に囲まれた。

「何よこれ……」

「山内成音、排除」

聞き覚えのある声。

剣の怪人・改に変身している者は全員恐らく、生徒会の面々だ。

「なんのこれしき……生徒会のナンバーワンの私がここで倒れるわけにはいきませんわ！」

もう一度立ち上がってから、バットを構えなおす。

苦戦しながらも、何とか剣の怪人・改の猛攻に対応しようとしている。

「あ、あたしも！」

端末を取り出して、ボタンを押す。

『FLAME WAVE DRIVE』

ベルトに取り付け直してから、拳を思い切り地面へと叩きつけた。

「はあッ！」

拳から炎が、波を描くように放出され……自分の周囲を大きく吹き飛ばす。

「くうっ！」

意外にも、剣の怪人・改の実力は二号が使っていた時よりも低く、ボマーの奮闘であともう少しで倒せるという所まで追いつめる。

「さあ、これで終わりですわ！ 私が眼を覚まさせてあげますの」

ボマーが端末を操作しようとしたその時。

「！ 会長！」

「ぐあッ！」

そこに、何かが降り注いだ。

ボマーのボムビットにも似ていた、黒いダイナマイト型の。

「……」

「も、もしかして……」

ボマーが少し離れた場所で復活してから、飛んできた方を見る。
火炎放射器怪人も同じように。

「黒いボマー……ですわ」

ボマーの目線の先には。

黒と赤系統の色で構成された、ボマーの黒版とも言える存在がいた。

「この姿で会うのは久しぶりだな。六角美咲」

第百五十五話

そう告げて、黒いボマー……二号がゆっくりと地上に舞い降りる。倒れている生徒達を見て、静かに呟く。

「やはり適当な洗脳と、失敗作の脳波で乗っ取っただけじゃこんなもんか……」

溜め息を吐いて、ボマーを一瞥。

「皆を元に戻しなさいな」

「俺は別にそれでも良いんだが、あいつがうるせえし無理だな」

黒いボマーが、ボマーに向かって右手を向ける。

「まあでも、前の身体と比べて随分楽しいな……これは」

するとボマーの身体が急に動かなくなり、そのまま黒いボマーの意思でゆっくりと持ち上げられた。

「次はこれか？」

ある程度の高さまで持ち上げてから、指を鳴らす。

ボマーの身体が発火を開始した。

「な、なんですのこれは！」

「会長！」

「し、仕方ありませんわね」

ボマーはやむを得ず端末を操作。

『EXPLOSION DRIVE』

白い光に包まれて自爆し、何とか焼死を回避。

少し離れた位置で復活する。

「なんて力ですの……」

「悪いが時間稼ぎにはまだ足りないんでね。少し失礼させてもらおうぜ」

黒いボマーが少しだけ俯きながら、両腕を広げて力を解放する。

周囲の生徒全員が光に包まれて、黒いボマー自身も光に包み込んでから、どこかへ消えていく。

そこには最初から何もなかったかのように、ボマーと火炎放射器怪人以外の人がいなくなった。

「消えましたわ……」

※※※

二号は自分達を別の場所に避難させてから、董に通信を入れる。

『どうやらダメだったみたいだね』

「だから言っただろ？ 焦ってこんな奴ら使ったところで、時間稼ぎにすらならねえって」

生徒達を一瞥して言う。

『そうでもないさ。今から全員改造は無理だけど、後藤くんだけでも何とか……』

「薬の投与量でも増やすつもりか？」

『そんな所だ。ま、少しでも投与の仕方間違えると死ぬし……結構難しいんだけどね。あとは彼女のアークソードドライバーをオリジナルと同等の能力に改良し直す。それで何とかなるだろう』

「それは良いけどよ、お袋が焦ってるのは敵側にバレバレだったぜ」
『……』

董の口が止まる。

「なあお袋、いざとなれば……俺を完全に自由にしてくれて良いんだぜ？」

『……』

ボタンのようなものを手元でいじる音が、スピーカー越しに聞こえた。

「脅しか？」

『君を完全に自由にするのは危険過ぎるからね。君の欲は分かるが、君は僕の実験に乗った段階で僕のモルモットである事を忘れない方がいい』

「へいへい……」

二号はそう返事する。

返事しつつも、今の状況がただただつまらなくて仕方がない。

『六角美咲と山内成音は学校を一旦離れたようだ。後藤をその後向かわせるから、君の能力でそこにいる生徒達を回復させてくれないか？』

「簡単に言うねえ」

笑みを浮かべつつそう告げる。

『何の為に、しくじった君にその身体を与えたと思っているんだい?』
「またも脅しに掛かる。」

二号は仕方ないなと少し笑ってから答えた。

「……わーっただよ」

『分かれば良いんだ』

そう言っつて、通信を切る。

「あいつもそろそろおしまいかな?」

二号……松永秀奈は思う。

彼女はそろそろ利用価値が無くなる……と。

松永秀奈としての記憶を取り戻した今、忠誠心は一切残っていない。

多重能力者かつ男の身体を手に入れている以上、彼女に用はないと言っつても差し支えない。

肉体改造をしてもえなくなるといふデメリットはあるが、それなら自分の戦闘能力でカバーすればよいのだ。

彼女の命令を聞かずとも、彼女が自分を操る手段さえ破壊してしまえば済む話。

「……」

秀奈は静かに笑みを浮かべて、空を見上げた。

第一百五十六話

美咲と成音は学校中を探したが、生徒や教師はおろか、董の姿を見る事も出来なかった。

一度切り上げて、美咲達は優香と遥が待つ蘇我高校へと向かう。

「遥さん！」

「平井！」

成音はすぐさま平井の近くへ。

美咲の表情から緊急性を察した優香が、遥が問う前に美咲へと聞く。

「何があった系？」

「生徒達が皆操られてましたわ」

「そんな……」

優香がそう声を漏らす。

遥は冷静な顔で言う。

「他の生徒も、平井と同じ状態なのか？」

「生徒会のメンバーは洗脳、他の生徒達は脳波で乗っ取りに分けられてますわね」

「そうか……」

「平井さんはどうですか？」

「ああ、それなら心配ない。洗脳が雑だったおかげで、完全に元に戻す事が出来た」

遥が平井を見て告げる。

「他の奴らも大体同じなら、恐らく同じ要領でいける筈だ」

元に戻せなかった蒲生とは違い、あの粗雑な洗脳や脳波による乗っ取りなら希望がある。

しかし。

「でも、事態はそう簡単じゃないわ」

成音の言う事も尤もだ。

あの洗脳も全て、黒いボマーや二号の新しい身体をチューンナップする為の時間稼ぎとは言っていたが、それをする前の段階から、黒い

ボマーの戦闘能力はこちらの力を遥かに凌駕している。

「あの黒いボマーを何とかしないとね」

成音が呟くと、遙が腕を組んで答えた。

「それなら心配ない。オールウエポンの能力があれば、黒いボマー……仮面ライダーアトミックの単体スペックを完全に上回れるし、実を言うと、オールウエポンの能力はまだ伸びしろがある」

遙の言葉に、美咲が首を傾げる。

「今回お前を復活させるのに、ドライバーから六角美咲の記憶を抽出して作ったのがそのカードだが、他のドライバーの保有者からドライバーを借りる事でアップデート出来る」

パソコンの画面を操作して美咲に見せる。

「そうなんですの?」

「ああ。恐らくだが、蒲生や足利明人をこちら側につけられれば、もつとドライバーの性能を上げられる筈だ」

「なるほど……」

難易度は高いはずだが、美咲は言う。

「よし、やってみせますわ!」

「明人はともかく、副会長がアンタに味方してくれるかどうか分からないわよ」

「……なれますわよ、絶対」

美咲は少しだけ自信なきげな声で答えた。

「会長?」

「なれるって信じない人には、絶対成功はありませんの。ですから、今は前向きに考えるべきですわ」

「アンタにしては自信なきげね」

「一度失敗したから、かもしれないわね。けど、私は諦める気はありませんのよ。絶対に蒲生さんも仲間に見せますの。私が諦めたら、一生それは出来ませんからね」

自分にも言い聞かせるように、美咲はそう告げた。

第百五十七話

「それに、今の状況は私にとって度し難すぎますのよ」
真剣な表情でそう告げる美咲。

「そうね。学校の皆があいつらの手下っていうのは
「それもあります、他に心配すべき事がありますの」
「？」

首を傾げて、成音は美咲の言いたい事を考えてみる。
しかし思いつかない。

美咲はこう見えて、敵のした事に対して怒った事はあまりない。
むしろ、自分の目的を押し通すスタイルを取っていた筈だ。

そんな彼女が、相手のやった事にキレるとはどういう事なのだろう
か。

「私が心配……いや激怒している事、それは……」

「それは？」

「それは……」

「——私の許可なく、勝手に誰かを生徒会長にするなんて許すわけあ
りませんわー！」

「はあ？」

「……」

遙と成音が二人とも、啞然とする。

「二号さんは生徒会長という職を舐め切ってますわ。生徒会長は誰か
一人の意思で勝手に決めていいものではありませんのよ。それをあ
の人の一声で決めてしまうなんて、絶対に許される事ではありません
わよー！」

「いや……そんな事言ってる場合？」

「言ってる場合ですわ！ 今まで董先生や二号さんがやった事も腹が
立ちますが、今回ばかりは腸が煮えくり返りそうですわ！ 他の事を
許しても、それだけは私が絶対に許しませんわ！ いや！ ゆゑるゝ

しゝまゝせゝんゝわゝ!!」

「ええ……」

「流石美咲っち！」

「いや流石にツツコミなさいよ」

「おのれ二号……私を馬鹿にするとうなるか思い知らせてやりますわ」

美咲が鋭い眼でそう告げた。

そして、高く笑う。

「こんな奴が生徒会長なのに、お前達の学校は大丈夫だったのか？」

「まあ一応ね……」

遙に心配され、成音が呆れ顔で答える。

「何が問題ですよ！ 私はただ、生徒会が抱える問題をきちんと解決しようとしてましたわ！」

「でも流石に蘇我高校の果たし状を読んで戦うって言うのはダメよ」

その結果として、色々なものを救うチャンスが与えられたわけだが、あれのみをピックアップするなら、とても生徒会長の所業とは思えない。

「生徒会長になれるのは、私のように何からも逃げずに立ち向かえる人だけですわ！」

「そうじゃなくて、余計な問題増やすなって言ってるのよ」

「勝負を挑まれて受ける事のどこが問題ですよ!? 全く意味が分かりませんわ！」

「はあ……もう良いわよ。アンタにそれ説明しても理解出来ないでしょ」

「成音さん地味に今私を馬鹿にしましたわね？」

「馬鹿にするわよ流石に」

「流石にとってどういう事ですよ!? 私は至って真剣に」

「あーもううるさいうるさいうるさい！」

成音がそう叫ぶ。

第百五十八話

落ち着いた後、蘇我高校の部室に仲間を全員呼ぶ事になり。
まず成音が呼んだヴィーダが真っ先に到着。

「ナリネー！」

ヴィーダはまるで子犬のように、成音の身体へ飛びこむ。

「ダイジョウブダツタ？」

「うん、何とかね」

成音も反射的に頭を撫でる。

美咲は裕太と一号を呼んだが、諸事情で来られないという連絡が入った。

「裕太さんと一号さんは来れないみたいですよわね」

「ああ。彼らは今、足利明人の監視をしているようだからな」

「え？」

「言い忘れていたな。実は足利明人は董の所から逃走して、今は裕太の部屋で眠っているようなんだ。薬の副作用に苦しんでいるにも関わらず、彼は治療を拒否している。まだ董達が何かを仕掛けた可能性が高い故、監視をしてもらっているのだが……」

「……ッ！」

「お、おい！」

遙の話の途中で、美咲は部室の外へ走り出す。

「まったく……」

遙が腕を組みながら言う。

「会長、明人の事も気にしてたみたいだしね」

成音は仕方ないかと言わんばかりの顔でそう呟く。

※※※

裕太の部屋に到着するや否や、勢いよく扉を開けて明人に近付く。

「明人さんー！」

「……み、さき……」

明人が何とか、美咲の手をとる。

その右腕の筋肉は不自然に隆起し、片目も赤へと変化していた。

「まだ生きてましたわね……」

「当たり前だ。この副作用を乗り越えて、俺は更に強くなってみせる。あいつがこんな状態の俺の身体を使いこなしたようにな……」

明人は何とか笑みを作って言う。

「蒲生さんも明人さんも……どうしてそこまでして……」

「お前が強くなったのも、俺はずっと見ていた。お前が一度死んで強くなるのなら、俺も同じような事をしなければ意味がないからな。薬に頼っているというのは少し罪悪感があるが、この戦いについていく為ならば、少しでも戦力として通用する方が良い」

「……」

裕太が告げる。

「ずっとこの様子だ。何とか説得してくれないか？」

「明人さんが望まないのに、それは出来ませんわ。明人さんは薬の副作用に打ち勝って、力を振るい続けた二号さんに勝ちたい。そうでしょう？」

「そうだ」

明人が静かに告げてから続ける。

「だが安心してくれ。お前と戦う時にこの力を使う気はない。戦いが終わったら、この力を捨てるつもりだ」

「分かりましたわ。ただこれだけは約束してくださいな」

「なんだ？」

「私は命を捨ててまで、それに拘る事だけは避けて欲しいと思っすの。危険だと思ったら、すぐに治療を受けてくださいな。私に勝つ為だけに死ぬのは許しませんわよ」

「……ああ」

第百五十九話

「それにしても、何の為にそんな事を……」

遥がそう呟きながら考える。

「あたしが何となく二号に、焦ってるのかどうか聞いたら動揺してたし、時間稼ぎだとも言ってたわ」

「うむ……そうか」

画面に向き直ってから言う。

「もしかすると、これは早急に手を打つべきかも知れんな」

「と言うと？」

「オールウェポンの強化が出来る事が敵側の想定外だと仮定しても、オールウェポンと二号は一度戦っている。董も私と同じ、高度な技術を持つ科学者だ。剣の怪人・改のベルトや人工突然変異体をあれだけの精度で作れるのを見れば分かると思うがな」

「……」

「つまり、相手もその時の戦闘データを元に何か手をうってくる筈だ。恐らくこうしている間にも、強化は進んでいる筈だ」

「それなら、早く叩く方が無難ね」

「ああ……だが強化が不十分と言いなながらも、相手の突然変異体としての能力も手強い。ベルトの能力はともかく、装着者の性能まで未知数となるとな……」

遥が少し頭を抱える。

「成音っち、頼みがある系」

「優香？」

優香がいつにもなく真剣な顔で、こう頼んできた。

「ウチが、ウチが戦えば……戦力差を少しでも埋められない系？」

※※※

優香の発言に、最初は少し驚く。

だが返答するのは早かった。

「な、何言ってるのよ。優香が戦うって、そんなのどうやって?」「手ならある系」

そう言ってから続ける。

「ウチの家に、前田っちから借りたベルトがある系。それを使えばウチも戦える系……」

その様子を見る遥。

それに気付いた優香が、遥を見てから頷く。

「遥っちにも言われた系。ウチが戦わないからこそ、誰かに寄り添う事も出来るかもって。けど、やっぱりそれじゃダメ系……。時間が経てば経つ程、美咲っち達が危なくなるっていうのに、ウチが直接何も出来ないなんてダメ系」

「けど優香、アンタに誰かと戦う覚悟はあるの?」

「……」

優香は俯く。

「それに、戦いに参加したら今までみたいにはいなくなる。相手に命を狙われる事だつてあるかも知れないのよ」

「それは皆も同じ系。なのに、ウチだけ安全な場所にいるなんて……やっぱりウチには出来ない……」

「……」

成音も、見ていた遥も返す言葉に詰まってしまう。

「ダツタラ、ヴィーダガソノネガイテツダウ!」

「え?」

優香がヴィーダを見る。

「ユウカノキモチ、ヴィーダニモツタワツタ。ユウカモタタカウナラ、ヴィーダガソレテツダウ!」

「ヴィーダっち、良い系?」

「ウン! ユウカ、トモダチ。トモダチガトモダチマモルノ……アタリマエケイ!」

優香の喋り方を少しばかり真似して、ヴィーダが笑顔で言う。

「ありがとう系」

優香は感謝する。

「やっぱりウチも戦う。皆の力になる為に」

「本当に良いのね？」

成音の問いかけに、優香は迷わず答える。

「うん」

「分かった……だけど、無理はしないでね。本当に無理なら、あたしや
ヴィーダに任せて逃げなさい」

「分かってる系」

調子よく答える優香。

第百六十話

明人が再び眠ってから、美咲は裕太を見て言う。

「それにしても……目の隈が凄いですわね裕太さん」

「ま、まあ寝ずに監視してたからな……」

歩こうとしていたがよろけている。

「やべ……頭がいてえ……」

「大丈夫ですか？ 少し横になりなさいな」

「お、おうすまん」

裕太は目を閉じてすぐに、眠りにつく。

まるで○太並みの速さだ。

「どうやら、かなり疲れがたまっていたらしいな」

「一号さんは大丈夫ですか？」

「俺は問題ない。二日くらい寝なかつた事があるくらいだからな」

一号は平気なそぶりです、冷蔵庫を開く。

「こ、これは……」

そして中身を見た一号が固まる。

絶望とも言える表情を浮かべた状態で。

「どうしましたの？」

「見ろ……」

一号に呼ばれた美咲が近くで、冷蔵庫の中身を見た。

「……」

酷い有様だ。

冷蔵庫内の食材の殆どが腐っている。

それもその筈……裕太は長らく敵の手の内にあつた。

しばらく家に帰っていなかつた故、溜まっていたものが……。

「参ったな……これでは飯の支度が出来んな」

「確かにこれでは難しいですわね」

「ああ。参ったな」

一号の腹からは大きな音が。

「昨日の夜も何も食べてないし、このままでは飢え死にだ」
「音鳴らしながらそんな真面目な顔しないで欲しいですの」

※※※

一号が冷蔵庫を閉じて、何も持たずに外へ出ようとする。

「どこへ行きますの？」

「この近くに雑草が生えていないか調べに行く」

「……へ？」

「いや、食材探しに……」

「何故雑草ですの？」

「外で寝起きしていた時の必需品だ。醤油をつけて食べれば割と美味しい」

「流石に他の人が食べるものがそれではまずいですわね……」

美咲は財布の中身を確認してから、スマホで仲間に連絡する。

そして裕太のエコバッグを借りて、靴を履く。

「私がい物に行きますから、一号さんは家で待ってなさいな」

「お前、夕飯の買い物なんて出来るのか？」

「貴方は何を言ってますの？」

「お前の普段の行動を見るに料理が出来そうには見えんからな」

「どいつもこいつも私を生活力ないとか言うのやめなさいな」

少なくとも雑草をご馳走しようと考えた者に言われるとは思わなかった。

「これでもある人に認められるくらいには美味しく作れますわよ」

「ある人？ それは誰だ？」

「言うわけありませんわ！」

ソウジとの思い出はまだ話さずに胸にしまっておきたい。

「まったく……三人とも待ってなさいな。私が最高の料理をご馳走しますわよ」

美咲はそう告げて、部屋を飛び出す。

第百六十一話

『諸事情で今日は戻れそうにありませんので、そこにいる皆さんで作戦会議をよろしくお願いしますわ』

美咲との個チャに、成音宛に送られたメッセージの内容だ。

「ナリネ、ドウシタ？」

「会長、今日はもうここに来れないって」

「ホント系？」

「理由は分からないけど気になるわね」

もしかすると、また一人で敵側の人間を黙って説得に行こうとか考えているのではないかと……と。

「董先生の件とかもあるし、今回ばかりはちゃんと話してもらわないと」

成音は美咲に通話。

『はい、もしもし』

「アンタ何してんのよ。アンタ私達に内緒で、また敵側の人間説得しようとか考えてないわよね？」

『……はあ？』

美咲が困惑した声で話す。

「とぼけないでよね。大体アンタがああやってぼかす時は……」

『ただの買い物ですわ。裕太さん家の夕飯の』

『……はあ？』

『だから買い物ですわ。あの人の前の件のせいで、冷蔵庫の食材全て腐らせたましたのよ。ついでに夕飯も作るつもりなので、今日は戻れませんわ』

「あ、そう」

どうやら早とちりだったようだ。

『何か作戦があれば、私に教えてくださいね。ではお願いしますわ』
通話が切れる。

「ミサキ、ナンダツテ？」

「裕太の家で、夕飯を作るんだって？」

「ついに美咲っち、裕太っちのハート掴みに行く系……!? いやでも明人っちや一号っちもいるしもしかして……」

「うん、取り敢えずその妄想はその辺でやめといた方が良いわね」
作戦会議に戻りたいところだが、まだ一つ問題がある。

「優香に聞きたいんだけどさ」

「何系？」

「そもそも会長に料理なんて出来るの？」

「一番心配だ。」

「こう言つては難だが、ヴィーダを除くと一番料理が出来なさそう。」

「あー、美咲っちなら料理得意系」

「ウエ!? アンタ舌は大丈夫？」

「流石に馬鹿にしすぎ系……ウチの友人に浅井淀子っていう子いるけど、その子に比べたら全然上手い系」

「浅井淀子って……え？ あの浅井淀子？ 伝説のカツアゲ女」

サラッととんでもない名前を聞いてしまった。

「そだよ。しかも美咲っちのライバル系」

「あんな空中浮遊とか気功波とか撃つっていう伝説がある人がライバルだなんて……」

「あ、でも美咲っちが料理極めてる理由は淀っちを毒殺する為だったらしい系？」

「は？ 毒殺？」

「まあ淀っちに毒効かないらしいけど」

「そういう問題じゃない……まあそれも凄いつていうか、え？ だけど。」

「あの人爆弾作るだけに飽き足らず、毒薬まで作った事あんの？」

「まあ美咲っちは勝つ為なら何でもする系だから……」

あの人相手に努力して勝つというのは難しいかも知れない。

流石に犯罪に手は染められないし。

「話を元に戻すぞ」

遥があきれ顔でそう告げる。

第百六十二話

幸い董側の襲撃を受ける事なく、美咲は何とか裕太の部屋まで帰還。

手を洗うや否や、すぐに料理を開始。

「お前料理出来たんだな」

一号が意外そうな顔でこちらを見る。

「当たり前ですわ。女の嗜みですもの」

手際よく材料を切り終えてから、次の工程へ。

「何か手伝う事はあるか？」

「では一緒に豆腐を切つて欲しいですの」

頼まれた一号が、パックに入った豆腐を手の上へ。

「……」

美咲がやっていたように、左手の上にある豆腐を切ろうとするが……。

「あ……」

左手の力加減が上手くいかず、「豆腐が崩壊。

「え？」

美咲が目を丸くして、一号の様子を見る。

「すまん……俺には難しいようだ」

「さては貴方氷川さん並みの不器用ですか？」

「……」

一号はバツが悪そうな顔で、目を背けた。

※※※

同時刻。

蘇我高校の体育館。

「じゃあ、特訓を始めるわよ優香」

「なんか改めてこの場に立つと緊張する系……」

ホースドライバーを家から持ってきた優香が、成音と相對していた。

次の日の攻め込みに備えて、一夜漬けではあるが、戦闘訓練をすることになった。

「取り敢えず、まずは変身ね」

「えーつと、こー系？」

優香はまずベルトから馬型の端末を取り出す。

「それでこー？」

『HORSE DRIVE READY?』

音声の後、優香は端末を閉じて構える。

「へ、変身系！」

端末をベルトに取り付けた。

『COMPLETE』

背後から走ってくる実体のない馬の上に、優香はジャンプして座る。

その姿を騎兵に変えた優香が、手探りではあるが、まずはそれっぽく構えてみた。

「で、出来た系」

「そこまでは大丈夫みたいね。変身」

『COMPLETE』

成音も火炎放射器怪人へ。

「それじゃ、いくわよ」

「おっ、おっす！」

まずは火炎放射器怪人が背中のブースターを使って、騎兵怪人へと突撃。

「えっ、いきなり系？ えーつと、えーつと！」

騎兵怪人は動揺しながら、咄嗟に回避。

しかし動きを読まれ、火炎放射器怪人に拳を叩きつけられる。

「い、いたい系……」

「ダメよそれじゃあ、相手に動きを読まれるわよ」

「攻撃を避けるって意外と難しい系……」

攻撃を避けるくらいなら、と思っていたが……それは大きな間違いだったらしい。

「相手に読まれているか読まれてないかで、生きるか死ぬか決まる時もあるのよ。よく考えて戦いなさい」

「わ、分かった系！」

「騎兵怪人は立ち上がる。」

「次は優香からかかってきなさい」

「いく系！ うおおおおッ！」

騎兵の速さを活かした動きで、火炎放射器怪人との距離を詰める。剣を構え、火炎放射器怪人の胴体目掛けて振ろうとするが……。

「……！」

優香は、そこで少し躊躇。

その隙をついた火炎放射器怪人に、無慈悲にも反撃されてしまい、大きく吹き飛ばされた。

第百六十三話

「うわあッ！」

騎兵怪人は吹き飛ばされた勢いで変身解除し、優香の姿へ。

「……」

火炎放射器怪人も変身解除ボタンを押して変身を解き、優香に近づく。

「やっぱり躊躇したわね」

「ば、バレた系?」

「ええ」

「ごめん系……」

優香は少し俯いて答える。

「優香、今回は訓練だけど……相手はアンタみたいに優しい人ばかりじゃない。相手によっては命を奪われる事だってあるのよ」

成音が厳しくそう告げた。

「……」

「とにかく、今のままじゃ一緒に戦うのは難しいわね」

「成音っち」

「？」

優香が立ち上がりながら言う。

「ウチ、まだ諦めない系。ウチは誰かを傷付けるなんてしたくないけど、けど皆にだけそんな事させたくない系……だからまだ付き合ってくれる系?」

「優香……」

成音はもう一度優香に向き直る。

「分かったわ」

そう告げてから、端末を取り出す。

※※※

一時間が過ぎ。

優香は少しずつ精度を上げて、成音に攻撃を当てられるようになった

ていた。

「いく系！」

端末のボタンをクリック。

『FINAL DRIVE!』

騎兵怪人が端末をベルトに取り付ける。

馬が後ろ足を何度か擦ってから、火炎放射器怪人目掛けて突進。

馬の頭部に光が発生した。

「はあっ！」

火炎放射器怪人は咄嗟に躲す。

「……！」

騎兵怪人はそれに気付きながらも真っ直ぐ進み、少ししてから止まる。

必殺技が終わってから、互いに変身を解く。

「ま、また避けられた系……」

「そうね。けど、中々よくなってたわよ」

成音が優香にそう告げる。

「そ、そう系？」

「もう少し躊躇が無くなって、精度を上げれば戦力になれるわ」

「が、頑張る系」

成音がスマホを取り出して時間を見た。

「そろそろ休憩しよっか。あたしが夕飯の買い物行くわ」

「お、何か買ってくる系？」

優香が眼を光らせて言う。

「流石に調理する場所とか借りられないから総菜買う事になるけどね。何がいい？」

「ウチフライが食べたい系」

「へー、ギャルでも結構油ものとか食べたりするの？」

「いや、別に全員食べないわけじゃない系……」

「ほら、体型維持の為とか言いそうかなって」

「ウチは食事制限とかあまりしない系」

「そ、そうなのね」

※※※

そんな会話を交わしてから、成音はヴィーダや遙にもリクエストを聞きに行く。

「ヴィーダ、ハンバーグタベタイ」

「ハンバーグね。遙さんは？」

「ア○ヒスパードライ」

「え……酒飲むの？」

「ああ。多少酒入った方が、なんか集中出来るんだ」

「そういうタイプか……」

成音は遙の意外な面を知りながらもメモ。

「取り敢えず行ってくるわね」

「ああ、あと念のため平井にも何か買ってやれ」

「そうね。じゃあ行くわ」

そう告げて部室をあとにする。

第百六十四話

その日の夕飯は麻婆豆腐だ。

料理を作った美咲が最初に箸を入れ、口に運ぶ。

「んー！ やっぱりあの人流の麻婆豆腐は美味しいですわ！」

「あの人流？ なんだ前教えてくれなかった人か？」

数時間眠ってすつかり元気になった裕太が、麻婆豆腐を食べながら問う。

「その人ではありませんわよ。私とその人が好きなヒーローが作ったことのある麻婆豆腐ですわ」

「そうか。これも、そのヒーローが作ったやつ？」

裕太は別の皿に盛られた中華風冷奴を箸で掴んで聞く。

「そうですわ！ ヒロインの方が微妙と言っていました、私はその冷奴好きですわよ」

「ほへー……」

「というより、今回はそのヒーロー関連の料理メインにしていますわ」

「待って待って。聞きたいんだけどよ」

「なんですの？」

「ヒーロー番組で出てくる料理、ここまで忠実に再現出来るもんなの？」

一号も確かに聞いててそう思う。

「あー、サイトにレシピが載ってますの」

「え、ホントか？」

「ええ。この料理以外にもあと何品か」

「へー……って言いたいところだけど良いか？」

「はい？」

「それヒーロー番組なのか？ ホントに？」

「何言ってますの？ 仮面ライダーカブトは、特撮ヒーローもので教育番組、なおかつ料理番組ですわ」

「属性多いなおい……」

天に指をさしながら言う美咲に、裕太が返答。

「なあ美咲、聞いても良いか？」

「なんですか？ 一号さん」

「その人というのはお前の彼氏か？」

「……」

美咲が箸を落とす。

「えっ、いや、教えるわけじゃないですわ！ 私とその人の間に何もありませんわよ！」

そういう割には顔が赤い。

「顔が赤いぞ」

「……」

美咲は静かに爆弾を取り出す。

「おいやめろ俺の部屋吹き飛ばすつもりか」

裕太に止められる。

※※※

成音は丁度そのくらいに、店で買い物をしていた。

惣菜コーナーに向かって歩きながら、さっきの特訓を思い出す。

「……」

優香は予想以上に戦闘に適応してきたが、それでもかなり相手に対しての甘さを捨ててきていない。

そもそも敵を傷付ける事自体、彼女の性格上向いていないというものもあるし、まだ彼女が覚悟や容赦をするようなら、やはり明日の攻め込みに参加させるのは危険だ。

「あたし達で何とかするしかない」

あの後連絡をとったが、一号が明人の監視役、裕太と美咲が成音達と共に戦うらしい。

ヴィーダも合わせれば三人もライダーがいる以上、戦力に不足はないが、相手の強さも未知数だ。

戦力が多いに越した事はないが、それでも……。

「？」

パンコーナー近く。

成音の目の前で、黒フードの人物が現れる。

それも一号や二号が着ていた見慣れたデザインの。

「でもあれ女の人、っぽいわね」

明らかに一号や二号より背が低く、体つきの女性だと分かる。

その人はパンコーナーで菓子パンを手にし、そのまま外に向かって走り去ろうとした。

「えっ」

勿論店員さんもそれを見ていた。

「きゃっ！ 万引きよお！ 追っかけて誰か！」

店員さんの何人かが黒フードの女に立ち向かうが、黒フードは喧嘩殺法で軽々撃退して店外に向かって逃走。

「仕方ないわね」

成音はそう呟いてから、その女を追いかける。

第百六十五話

勿論警察も駆け付けたが、黒フードの女の逃げ足の速さに追いつける者はおらず。

代わりに成音が追いかけて続け、追手が見えなくなった辺りで黒フードが足を止める。

「さあ、もう逃げられないわよ」

「それはこっちの台詞ですよ、山内ちゃん」

黒フードが顔を晒す。

正体は……。

「副会長……？」

遙に治療を受けてから姿を消した、○×女子高生徒会副会長の蒲生だ。

蒲生はベルトを腰につけてから言う。

「山内ちゃん、悪いけど大人しくついてくるっす」

「それはこっちの台詞よ。万引きなんてして……」

「仕方ないっしょ。今の生徒達見りや分かると思うけど、私と山内ちゃんと美咲……今標的にされてる。家にいたらいつ狙われるか分からないし、外で逃げ回りながら生きるしかないんすよ。まあ、それはさておいて、今から私と一緒にくるっす」

「だから、いかないってば」

「悪いけど、山内ちゃんに拒否権はないっす……変身」

蒲生がガス怪人へと姿を変えてから、成音がベルトを取り出す暇も与えずに拳を腹に叩きつける。

「くっ……」

成音はガス怪人の前で崩れ落ち、ガス怪人に抱えられた。

「捕獲完了っす」

時間差で追ってきた警察に対しても、ガスの放射口を向ける。

「痛い目見たくなきや、ここから去るっす」

「撃てー！」

警官たちが銃を発射するが、ガス怪人は全て吹き飛ばす。

「こつちには人質がいるつてのに、野蛮な警察つすね」

蒲生はニヤリと笑みを浮かべてから、ガスチェンジ。

『ガスドライブ！ スイミン！ ネムール！』

催眠ガスを放射し、吹き飛ばされて仰向けに倒れる警官たちを眠らせてから逃走。

「ま、こんなもんすか」

※※※

食べ終わってからすぐに、美咲と裕太は二人とも眠りにつき。

元々眠りの浅い一号は目を開けて、身体を壁に預けていた。

一号だけでなく、足利明人もまだ目を開けている。

彼に聞こうとしていた事を思い出し、一号は明人に問いかけた。

「足利明人、お前に聞きたい事がある」

「……なんだ？」

明人は一号を見た時も、何の反応も示さなかった。

明人にそれほどの余裕が無かったのか、あるいは……そう思っただけ告げる。

「お前は俺が、あの時対峙した黒フードの男だと気付いているのか？」

「……気付いていた。お前の声や仕草で分かる。どういう経緯で仲間になったのかまでは知らんが、お前があの黒フードなのは間違いないと思っただけ」

明人は静かな声でそう答える。

「なら何故、俺とそう落ち着いて会話が出来る？ その態度はどう考えても普通ではない……」

「馬鹿者。あの時のお前など恨むに値しない」

第百六十六話

「俺が敵と認めるのは、何に恐れる事もなく真っ直ぐに生きる事が出来る者だけだ。あの時のお前にそれ程の価値はなかった」

「……そうか」

一号は下を向いた。

「今のお前はどうかなんだ？」

「……」

「自分の意思で、何かを決めて戦う事が出来るのか？」

「自信を持って答える事は出来ない。だが、今美咲や裕太の為に戦っているのは自分の意思だ。もう二度と、こいつらに涙を流させない。それがこの二人の命を一度奪った俺に出来る贖罪……」

「……」

明人がそれを聞き終えてから言う。

「それでは、まだ足りんな」

「……」

「六角美咲を見てみる」

そう言われて、裕太と二人で眠る美咲の姿を見る。

「あいつは義務感に駆られて戦っていない。どんな戦いでも、積極的に自分から突っ込んでいく。それが例え、自分の関わるべきでない戦いであろうとな。他者と戦う事に関して積極的だからこそ、俺はあいつを好敵手と認めているし、俺も自分が強くなる為ならどんな事でもしたい」

美咲のそんな行動に、一号は何度も救われた。

正義の為に行動していないからこそ、そもそも美咲自身は一号に対して恨みは抱いていなかったし、むしろ本気の自分と戦う為に敵である自分を本気で助けようとしていた。

そしてだからこそ他人を頼る事を厭い続け、誰よりも傷付く。

そんな彼女を放っておかず、または超える為に、様々な理由で彼女の近くには人が集まる。

「……俺は」

「お前にもある筈だ。誰かや状況に課せられた義務ではなく、自分で望んで戦う理由が」

「……ああ」

忘れてなどいない。

忘れるわけがない。

一号が美咲と共に戦うのは、美咲が絶対に董を変えると約束してくれたから。

「俺は董といたい。それに協力してくれると言った美咲の仲間になった。だが……」

罪のある自分が、そんな理由で戦う事など許されないと、美咲以外の前ではそういう素振りをなるべく見せないようにしている。

「罪程度、俺にもある。数えきれない程な。だが俺はそれでも戦い続ける事を望む。やめたとて、どうせ消えはしないのだからな」

明人のその姿を見て、一号は気付く。

心の底は一号と同じだと。

でも……もし違いがあるとしたら、罪に対する向き合い方だろうか。

「……」

「もし俺に強さを認められたいなら、その気持ちを強くしてから俺と戦うんだな。とにかく、今のお前では……俺に好敵手として認めてもらうなど夢のまた夢だ」

厳しい言葉をぶつけてから、明人はそのまま目を閉じる。

「……」

一号も目を閉じてから、眠りにつく。
が……。

「げほっ……」

突然、そう咳込んで一号は目を覚ました。

最初に咳込んでから止まる事なくそれが続き、手で押さえる。

喉の痛みと、口の中の違和感に気付き、押さえた手をもう一度見た。

そこには……。

「……！」

自分が吐き出したと思しき血がついていた。

第百六十七話

蒲生は人目につかない所に隠れてから、ガスドライバーの能力で成音を洗脳しようと試みたが。

「……」

「やっぱり強い意志の持ち主を洗脳するのは無理みたいすね」

何度やつても、洗脳が上手くいかない。

あの時の怪人化した生徒はあくまでガスの影響で思考能力が麻痺していたから成功したが、何の影響も受けておらず、尚且つ強い意志を持つ者を洗脳下に置く事は出来ないみたいだ。

「参ったつすね」

命令であるとは言え、半ば自業自得によるものが起こした結果だが、蒲生は追われる身。

少しでも味方を増やし、○×女子高の生徒全員を洗脳下から解放した上で、自分を用済み扱いしている董達も叩き潰そうと考えていたが……これではまた逃げ続けなければならぬ。

「……」

疲れ果てた蒲生は諦めてから、近くの塀に身体を預けた。

不思議と昨日程、眠るときの不快感は覚えなかった。

適応……という事なのだろうか。

何となく目を閉じて、深くは眠らずに身を休める。

「どんだけこんな生活してりや良いんすかね？」

あれから家にも帰っていない。

董の配下だった時でさえ、我が家では多少の不信感を抱かれつつも、そこで寝起きする事は出来た。

昨日からである筈の逃げている時間が長く感じて、今では自分の部屋の景色すら懐かしく感じる。

「クソ……力が欲しいす……」

蒲生はあの薬を使っていた時の事を思い出す。

身体は物凄く痛かったし、実際死に至りそうになったが、圧倒的な

力を感じた。

痛みすら快感になるほどに。

あれを上手く自分の力に出来ていれば、美咲すら追い越せていたというのに。

結局そうはいかず、二号に先を越され、単純な力では美咲に劣ってしまった。

あそこで死にたくは無かったが、ここまで悔しく、そしてしんどい思いをするのなら、薬のせいであのまま目を覚まさない方が楽だったかも知れないとすら思う。

ガストライバーだけでは、美咲を倒す事も、今自分を始末しようとしている追手を倒す事すら出来ないのだから。

「……」

そして洗脳が使えないなら、美咲に頭を下げれば良いのでは……という思考が生まれそうになる自分が嫌になる。

確かに美咲の性格上、共闘を望めばしてくれそうだが、そんな事は蒲生自身のプライドが許さない。

自分はどんな方法を使っても、美咲の存在を消し、自分が美咲より上だと証明する為に洗脳される道を選んだ。

あいつの力だけは絶対に借りる気はない。

「けっ……」

爪を噛んで、蒲生はただこの状況を耐える事を選ぶ。

第百六十八話

科学部部室。

「ナリネ……オソイ……」

ヴィーダが先に敷いていたお布団の上で、ひもじい顔をして呟く。お使いを頼んで数時間が経ち、夜十時近くになるが、未だに成音は帰ってこない。

連絡すら来ない。

「ウチも腹減った系……」

優香も某漫画で爆死したヘタレのポーズで倒れている。

腹の音が喧しく響き続けているのが聞こえる。

遙も黙々と作業を続けていたが、集中力が切れてきている。

遙の身体もそろそろアルコールを欲している頃なのだろう。

「一応電話してみるか」

痺れを切らして、遙がスマホを取り出す。

電話帳を開いて、成音の番号に電話を掛けると……出て来たのは意外な相手だった。

『狩野遙っすか？ 久しぶりっすね』

「……お前は」

通話に出た相手は蒲生。

相変わらずの態度で電話に出てくる。

まさか蒲生が誘拐したというのか。

「お前が誘拐したのか？」

『そこまで心配しなくても、山内ちゃんならこっちで眠ってるだけっすよ。起きたらそのまま行かせるんでよろしくっす』

軽い口調でそう告げる蒲生。

しかし遙は油断せずに問い返す。

「何か企んでいる……という事はないな？ お前の洗脳は私では解けなかった。未だに董の配下として行動していてもおかしくはない筈だ」

蒲生は少々げんなりした声で答えてきた。

『正確にはさつきまで……というのが正しいです。なんせガスドライバーの洗脳能力が効果なかったんすよ』

「……」

それなら遙も信用出来なくはない。

ガスドライバーの洗脳機能はあくまで、ドライバーを使わず怪人化した者を脳を犯しているガスを操る事で、コントロール出来るようにするもの。

故にガスに犯されていない普通の人間を洗脳する事は不可能だ。

『悪いっすね。こっちも追われてる身なんすよ。ま、もう出来ればアంత達や董達に関わりたくないんで、適当に倒しちゃって欲しいっす。そんじゃ』

通話を切ろうとする蒲生。

「待て」

『なんすか?』

それならば、と遙が言う。

「もしその言葉を信用して欲しいなら、お前の持つガスドライバーを渡してくれ。それがあれば、大きな戦力になる」

しかし……。

『何の為に使うか、想像するのは簡単っすよ。どうせ、美咲の為に使うんすよね?』

真意を突かれて、遙は少しばかり弱る。

「……」

『断るっす。董に狙われている以上護身用にベルトが必要だし、わざわざ敵に塩送るような真似したくないっす』

蒲生は拒否した。

『用はそれだけっすよね? まあ、せいぜい頑張ってくださいっす』
そのまま通話が切れた。

第百六十九話

蒲生は通話を終えた後、爪を噛みながら成音を見て呟く。

「山内ちゃんも、美咲と戦った者は皆おかしくなってくつす。なんであんな奴についていこうと思うんすか……」

元はと言えば、生徒会を最初に辞めだしたのも彼女なのだ。

それを見て……蒲生も他のメンバーも生徒会を辞めた。

皆口にしなかっただけで、気持ちは皆同じだと思っていたのに、成音は美咲と戦った後、急に美咲と行動を共にするようになった。

あれだけ董の為に動いていた一号も、自分達を裏切って美咲の味方をしている。

美咲の敵だった者は美咲と戦う事で、美咲の味方になっていく。

「……」

蒲生にはとても理解の出来ない話だ。

彼女のやる気や向上心は確かに、凄まじいものがあるし、見習うべきものではあると思う。

だが一方で、他人まで彼女の価値観に巻き込もうとする。

そのせいで、生徒会に関係のない仕事にまで付き合わされた事が何度もあった。

去年は卒業した元会長がある程度ストッパーになってくれたが、副会長だった時から彼女の行動はそういう問題を孕んでいた。

けど……そんな事は彼女には一切関係ない。

ついていけないのなら、彼女は一人でも歩く。

多勢に無勢な状況でも、絶対に勝ちに来る。

自分の強さを認めさせようとしてくる。

そして、そうでなければ満足しない。

蒲生がどれだけ強くなるうとも、美咲は絶対にそれを超える。

そして、相手より正しい事を証明したとしても、彼女は自分の思いを曲げる事はない。

「強ければ、何だって良いんすか……」

「確かに、あの人は生徒会長としては零点よね」

「山内ちゃん……」

いつの間にか起きていた成音に言われる。

「あの人は学校を守ったけど、それはあの人の行動が結果的にそう
なっただけ。あの人は自分の為になにか動かない。自分のプライドの
為だけに生きてる」

成音は俯いて笑みを浮かべつつ告げる。

それに対して、蒲生は睨みながら反論した。

「そこまで思ってくれるなら、なんであんな人の為に戦えるんすか？」
「そうね……強いて言うなら、認めたくはないけどやるべき事をやろ
うとする気持ちの人がとは違い過ぎる点ね」

「……」

考えている事は、自分と同じというわけだ。

「そうよね。だからそれが悔しくて、何とか絶対にあの人を超え
なきゃって思うのよ。まあ……難しいなんてレベルじゃないんだろ
うけど」

「……」

成音も、美咲に対抗したいという気持ちは同じだった。

けど彼女と自分では、やはりやり方が違った。

「だから、あの人に死なれちゃ困るのよ。あたしも折角、あの人に負け
たおかげで色んな事にやる気を出そうって思えるようになったし」
「……」

成音が蒲生に顔を向けて頼む。

「副会長、お願いがあるの。会長に今だけは力を貸してくれない？」

第一百七十話

「……」

蒲生は黙り込むが、成音は続ける。

「あたしもアンタも、いつかはあの人を超えたいって気持ちは同じ。だから、協力して欲しいのよ」

「だから、あの人に力を貸すのだけはごめんだと何度言えば分かるんすか。それにもう、私はあいつと関わりたくないんすよ。めんどくさい……」

「副会长……」

成音が言う。

「正直副会长には、まだ仲間を思う気持ちとかそういうのちよつとは残ってると思ってた。だから会長だけを敵として狙ってるのかなって……でも、ホントにそんな気持ちもないのね」

「……」

蒲生は口を閉ざす。

すると成音は立ち上がって言う。

「ならあたしがやる。例えアンタがその気になっても、アンタには絶対に倒させない。もし手を出そうとしたら、あたしが全力でアンタを倒す」

「勝手にするっす。どうせもう戦う機会なんてない」

「……ッ！」

「良いから、もう仲間の所に帰るっすよ。山内ちゃんなら気持ちを理解してくれると思ったのに、やっぱりそうやって塩を送らせようとする……もううんざりっすよ」

「……」

成音は何も言わず、蒲生に背を向けてその場を去る。

蒲生はそれを見届けてから、もう一度瞳を閉じて身体を休めた。

※※※

成音はある程度まで離れてから、早歩きで蘇我高校に向かい始めた。

「……」

正直、そこまで期待はしていなかった。

洗脳が解けていない以上、前のような仲間や後輩に優しくかった蒲生の人格は彼女の心に残っていないだろうと思っていた。

それでも成音はあの頃から、生徒会の仕事は嫌いでも、蒲生の事は割と好きだった。

美咲に対する愚痴は聞いてくれたし、生徒会になくってはならない存在。

それが今では……あの様だ。

美咲の復讐心に溺れた挙句、美咲の事が嫌になって関わりたくないと思いつている。

もう頼つても無駄だ。

「山内成音……発見」

ふと聞こえたその声に、顔を上げる。

気付けば、成音は洗脳された生徒会メンバーに囲まれていた。

全員、アークソードドライバーを着けている状態の生徒会メンバー。

「……」

「排除する……」

一人だけかなり苦しそうな声で、そう告げたのは……新生徒会長と言われていた後藤。

筋肉の隆起があの時以上に酷く、身体に相当負荷が掛かっているのが分かる。

「後藤……」

『ARC SWORD DRIVE READY?』

全員が機械のように、端末を取り出してからボタンを押し。

閉じてから、ベルトに取り付ける。

『ARC COMPLETE』

禍々しいオーラが、彼女達の身を包む。

上空から同じような光を帯びた剣が降り、それを掴み取る。

生徒会メンバーは全員、剣の怪人・改へと姿を変えた。

「やるしかないわよね」

成音も覚悟を決めて、フレイムシヤワードライバーを腰に。
端末を取り出して、ボタンを押す。

『FLAME SHOWER DRIVE READY?』

端末を閉じてから構え、ベルトに端末を取り付ける。

『COMPLETE』

上から火柱を浴びて、成音は火炎放射器怪人へと姿を変えた。

「はあッ！」

火炎放射器怪人はそのまま地を蹴って駆け出す。

第七百七十一話

同時刻。

満を持して、美咲達が○×女子高前へと集結。
全員ベルトを着けて、遥との通信をオンにして、門の前へ。
「なんかあまり実感湧かないけど、もうこんだけ仲間いるんだな……」
俺は思わずそう漏らす。

最初は俺と美咲二人だけだったというのに、美咲の強さを認め
者、美咲の心意気に救われた者。

色んな理由で美咲についていく事を決めた者達が、こうして立っ
ている。

俺と美咲合わせて八人。

半分この場にいないが、それでも十分凄いことだ。

「まだ集まったのはこれだけですわね」

美咲は全員を見てそう呟く。

成音に関しては、遥から事情は聞いた。

蒲生に誘拐されたが、すぐに解放された……と。

『ああ……明人と一号も来ていないと聞いた』

明人もまだ万全な状態ではなく、一号は自分から明人の監視役をす
ると告げて俺の部屋に残った。

「というか、優香は戦うのか?」

「ウチもただ見てるだけってわけにはいかない系。一緒に戦う系」

緊張で震えながら立つ優香。

それをヴィーダがつついてから告げる。

「ダイジョウブ、ヴィーダ、ユウカ、マモル!」

美咲がその様子を見てから前を向く。

「私達だけでも戦いますわよ」

「ああ」

「ウン」

「おっ系」

それから美咲が告げる。

「さてと、戦う前に……ここには仮面ライダーが三人もいる事ですし、あれやりますわよ。裕太さん、ヴィーダさん」

「ン？」

「あれってなんだよあれって」

「仮面ライダーが三人揃ったら、あれしかないですわあれ」

「そういえば、仲間の仮面ライダーが三人きちんと揃うのは今回が初めてのことだ。」

「同時変身ですわ！」

「流石特撮女子……」

「ナンカオモシロソウ！」

「それじゃあ、行きますわよ」

「……」

ライダーでない優香は少し離れようとする。

「ほら、優香さんも一緒に！」

何故か怪人のベルトを使用している優香も共に参加。

『BOMER DRIVE READY?』『GUNGNIR ON』

『ムラマサ!』『HORSE DRIVE READY?』

ベルトを操作してから、それぞれ構える。

「変身ですわ!」「ヘンシン!」「変身!」「変身系!」

ヴィーダ以外が端末をベルトに取り付けて、ヴィーダは槍型のガジェットをグングニルドライバーに挿す。

『COMPLETE』『CHANGE』『御意! 出陣! 仮面ライダームラマサ!』

それぞれの変身過程の後、美咲は仮面ライダーボマー、ヴィーダが仮面ライダーグングニル、裕太は仮面ライダーダムラマサ、そして優香は騎兵怪人へと姿を変え。

それぞれ構える。

「これならいける気がしますわ!」

ボマーは左手で時計の針のような形を作ってから、そう言った。

第七十二話

「……」
身体を乗っ取られた生徒達が、変身前からまるでゾンビのようにゆっくりとこちらに迫る。

「皆さん、準備はよろしいですわね？」

ボマーがバットを手に、そう告げる。

全員が領いたのを確認してから、相手が怪人化するのを待つ。

「……」

生徒達が立ち止まってから一斉に怪人の姿へ。

「行きますわよー！」

ボマーがそう告げてから、四人で怪人達へと向かっていく。

怪人達もゆっくりと四人に向かう。

※※※

「ぐあッ！」

火炎放射器怪人は、剣の怪人・改の集団に苦戦していた。

「……」

火炎放射器怪人もボマー並みに戦闘経験は豊富だが、量産型かつ無理矢理洗脳された生徒達が扱う剣の怪人・改の数の多さをカバー出来る程ではない。

雑な量産をされたものとは言え、流石にフレイムシャワードライバーの性能でこの数を相手するのは無理だ。

「山内成音……排除……くっ……」

度重なる薬の服用で、かなりの負荷が掛かっている後藤が剣を向ける。

あまりの辛さに剣を落とすが、無理矢理力を込めて剣を取ろうと動く。

「もうやめなさいよー！」

火炎放射器怪人が後藤に叫ぶ。

しかし後藤に声が届く事はない。

「はい……じよ……」

その時。

「うわあッ！」

剣の怪人・改が、急に吹いた突風で吹き飛ばされる。

自然の風ではない……あれは。

「まったく……うるさいんすよアンタ達」

ガス怪人へと姿を変えていた蒲生が、あくびをしながらそう告げる。

「副会長！」

「うるさくて眠れやしないんすよ。喧嘩なら私を巻き込むんじゃないっすよ」

ガス怪人が剣の怪人・改の一人を殴り飛ばす。

ラフな戦い方で一人を圧倒し、地面へと叩きつける。

「はあ……そろそろ家に帰らせてもらおうっすよ」

「蒲生……排除……」

「違っすよ。排除されんのはアンタらの方っす」

地を蹴って、ガス怪人は他の剣の怪人・改へと立ち向かう。

※※※

ライダーが三人いるという事もあり、昨日よりも早く怪人達を倒せていた。

「いきますわよ！ ライダーボムキック！」

残り少ない敵に向かって、初のトリプルライダーキックを決める。

敵はボウリングのピンのように四方八方へ飛び、人間の姿へと戻った。

「す、すごい系……」

騎兵怪人に変身した優香も、ヴィーダに力を借りながらも何とか少しづつ戦っていたが。

「ひゃっ！」

「ユウカ！」

まだ自分一人で倒せた敵がない。

「ダイジョウブ？」

「ありがと系……」

騎兵怪人は自分の目の前で、グングニルに倒された生徒の姿を見て目を見開く。

「海北（かいほう） っち……」

自分の友人だ。

今自分に襲い掛かって来た相手の中には、自分の友人だった者もいると、この時やっと自覚させられた。

「……許せない系……」

そう呟いた後、ゲームのボスのように……現れる。

白い髪に黒いスーツを着た、福沢裕太に瓜二つの顔をした男。

第七十三話

二号は手をパチパチと叩きながら言う。

「すごいすごい、いない奴もいるみてえだけど、ライダーだけは全員揃ってやがる」

「今度は逃がしませんわよ」

ボマーが懐から、オールウェポンと書かれたカードを取り出す。

「まあまあそう焦るなよ。まだお前らに俺の変身、見せてないだろ？」

どこからか、黒いボマードライバーを取り出して装着。

端末を取り出し、ボタンを押す。

『BOMER DRIVE READY?』

ボマーが持つボマードライバーのそれよりも、少し重い音声と効果音が鳴ってから端末を閉じ。

「変身」

悪い笑みを浮かべてから、端末をベルトに取り付ける。

『COMPLETE……』

ボマーと同じように、上から一つの爆弾が降りてくる。

ただしボマーとは違う黒い爆弾。

二号はそれを掴み取ってから、ゆっくりと握り潰す。

黒い爆風をまき散らし、そこから一人の戦士が姿を現した。

「……」

黒いボマー……仮面ライダーアトミック。

ボマーを全体的に黒いカラーリングにした姿に、二本の光剣。

そして、背後に控えるボマーよりも多い十二本の黒いボムビット。

彼は光剣を構えてから、静かに呟く。

「さあ……派手に行こうぜ」

ボマーもそれを見届けてから、改めて端末を取り出す。

「望む所ですわ」

『SCAN DRIVE』

オールウェポンカードを読み取るボマー。

『ALL WEAPON DRIVE READY?』

ボマーは構えてから叫ぶ。

「ハイパー超変身ですわ!」

青い炎がボマーを包み、オールウェポンボマーへとその姿を変える。

青いスーツの下に、ピチピチのライダースーツを纏った、女社長のようにも、不良社員のようにも見えるその姿。

仮面ライダーオールウェポンボマーが、黄金のバットを構える。

「……!」

両者共に駆け出そうとしたその時。

優香……騎兵怪人が間に入ってアトミックに叫ぶ。

「なんで系……」

「あ?」

「なんで、そんな簡単に人の事を傷付けられる系?」

「……」

「ウチ分かんない系。ウチの友達あんなにしておいて、どうしてそんな平気でいられる系? 君には人の心がない系!?!」

アトミックは笑う。

「くく……ははは……」

「何がおかしい系?」

「そんな事知るかよ。傷つけたつつつても、俺がやったのはあくまで人工脳波をこいつらに植え付けてそれに操らせただけ。俺が直接手を下したわけじゃないし、悪いのは全部俺に指示してる奴だから」

「今回の事だけじゃない系。その前にも、人に人を殺させたり、ウチ……分かんない系。なんでそんな事、平然と出来る系?」

「はあ……」

溜め息を漏らしてから、口を開く。

「お前……ウザいな。ひよつとしてさ、今まで何かを犠牲にして目標を叶えようとした事が一度もないとか……そういう事言わねえよな?」

第七百七十四話

騎兵怪人はその言葉に少し後ずさる。

アトミックは構わず続けた。

「俺も、六角美咲も、ここにいる強い奴つてのは大体そうだ。強くなる為に、他を蹴落とし、いざって時には誰かを見限らなきゃいけない。全部を傷付けず守ろうなんて奴が、強さを手に入れられるわけがないだろ?」

「……」

ボマーも少し俯く。

「美咲っちは違う系! 美咲っちは本気で生きてる人、手が届かない事を辛いと感じてる人の事を見捨てる事はしない系! けど二号っちは……自分の事しか考えてない系。美咲っちと二号っちは違う系!」

「ああ……そうさ。俺は自分が強くなる事に人生の全てをかけて来た。だからここで、お前の目の前にいる。否定したいなら倒してみろよ」

「……分かった系」

「やめろ優香! お前の勝てる相手じゃ」

俺……仮面ライダームラマサが告げる前には、既に騎兵怪人は動き出していた。

ぎこちない構えで、アトミック目掛けて突進する。

「ウチが止める。友達に手を出し続ける二号っちを絶対許さない!」

「優香さん!」

騎兵怪人はそこで気付く。

アトミックのボムビットが勢いよく迫っていたことに。

「……!」

「せやあつ!」

ボマーは何とかアクセルドライブで騎兵怪人の前へ。

深手を負ったが、何とか騎兵怪人を守りつつ生き残る。

「美咲っち……」

「大丈夫ですか？ 優香さん」

「うん……」

「あの人は私が倒しますわ。だから少し下がっててくださいな」

「……ごめん」

騎兵怪人はやるせない声でそう告げて、後ろへ。

「友達友達って……まさかそこまでうぜえ奴がお前の仲間にいるとはな」

「……」

ボマーは何も返さず、そのまま地を蹴った。

「なんだよ無回答……つまんねえな」

金のバットを振るい、アトミックの光剣に相對する。

「私は友を傷付けられた事そのものに怒ってるわけではありませんの。それが出来ない程弱い存在だから、私はそれが出来る程強くなりたい。それまでは、自分を許す事なんて出来ない。だから戦いますの」

「……へえ」

互いを弾いてから、ボマーはバットを向けて告げる。

「まずは貴女を倒す。それから皆を救ってみせますわ！」

「そうだな……じゃあやってみろよ。皆を救ってみろよ。元生徒会長さんよ」

「ッー」

もう一度地を蹴って、ボマーはアトミックにバットを振り下ろす。

アトミックは難なく回避してから、背中のボムビットを放出。

ボマーを大きく吹き飛ばす。

「……！」

「さて、次はこっちから行くぜ」

アトミックが二本の光剣を手に、ボマー目掛けて駆け出す。

第七十五話

成音に代わって、劍の怪人・改数人相手に立ち回るガス怪人。

成音以上の戦闘スキルで、ベルトの性能が違い過ぎる彼女らとある程度互角に渡り合う。

「やっぱり……」

凄い、その一言に尽きる。

美咲と戦う事から逃げた彼女ではあるが、それでもそれまで美咲を倒す為に、相応の負荷を自分に掛けていた。

時には自分のプライドを捨ててまで。

実際、蒲生は美咲に勝てていないが、逆に成音は蒲生に勝てない。彼女は美咲に勝てていないし、美咲に勝つ為には今一つ足りない感性の持ち主だが、それでも美咲を否定しようと思死だった者が、雑な洗脳をされた者に大きな後れを取ることなどないのだ。

「……あーあ、こんな事させられるって分かってたらやんなかったっすよ。めんどくせえな！」

劍の怪人・改の一人を蹴っ飛ばして言う。

腹に重い一撃を喰らったそれはその場で崩れ落ち、更に顔面へと追いつ打ちを掛けた。

「はあ……」

「排除……排除……」

「アンタしつこいっすね。いい加減倒れるっす」

ガス攻撃で吹き飛ばすガス怪人。

「……ッ！」

成音はもう一度ドライバーを操作。

『FLAME SHOWER DRIVE READY?』

「変身ッ！」

『COMPLLETE』

火炎放射器怪人となって、劍の怪人・改の一体へとタックルしていく。

「はあッ！」

「くっ……」

剣の怪人・改はそのまま地面へと叩きつけられた。

「手伝ってくれるんすか？」

「手伝いなんてしてない。あたしも戦わなきゃ、アンタと同じになっちゃうって思っただけよ」

「どういう意味っすかそれは」

「あたしはアンタとは違う。アンタより弱いけど、あたしはアンタと違って自分の敵からは逃げない。まずそれが出来なきゃ、会長に勝てるわけがない！」

「あんなしつこい奴に勝とうとか、頭お花畑っすか？」

「じゃああんな無茶苦茶な人に負けたままで、アンタは悔しくないの？ 洗脳までされて、捨てられて、あの人にチャンスを与えられても結局折れなくて」

「……悔しいっすよ。でも、結局何してもあいつは折れないっす」

「折れないなら絶対に折る。そう信じなきゃ、あの人には勝てないわよ。そして、自分の大事なものだけは絶対に折らない。あたしはそう決めた。あの人に勝つ為に……。あの人だって絶対そうだから」

「山内ちゃん……」

「まずはこいつらを止めるわよ副会長。そうじゃなきゃ、会長には勝てない！」

「言い出しっぺだった山内ちゃんも随分変わったっすね。まったくあの女は……」

ガス怪人が火炎放射器怪人の隣に立つ。

「美咲に力を貸すのなんて死んでも御免すけど、山内ちゃんと組むのなら別に良いっすよ」

「副会長……」

「この戦いが終わったら、焼肉でも行くっすか？ 打倒美咲の同盟の儀式に」

「それ良い考えね。アンタの奢り？」

「割り勘っす。答えは聞いてないっすよ」

「まったく……いくわよ！」

もう一度二人で、地を蹴っていく。

第七百七十六話

オールウェポンの力そのものは、確かに圧倒的でアトミックを追いつめていつている。

だがアトミックはそれだけではない。

自分が持つ突然変異体としての能力を使い、ボマー相手に手数で対抗している。

『WEAPON DRIVE FLAME SHOWER』

ボムビットを火炎放射器に変化させ、遠距離から放たれる気功弾に對抗していく。

金のバットもスイッチで火炎放射器へと変形させ、二丁の火炎放射器で気功弾を相殺。

アトミックを爆炎で吹き飛ばす。

「くっ……」

「うえあつー」

怯んだアトミックへと飛び蹴りを放ち、至近距離ですぐさまボタンを押して武器を変える。

ムラマサの刀へとチェンジしてから、何度かアトミックの身体を斬りつけた。

「やるな……！ 流石最強の力……だがこれはどうだ！」

アトミックの手から光が放たれる。

一度見た事がある。

脳波破壊の光。

通常なら当たれば即死……だがこのフォームなら。

「……！」

光はボマーへの衝突と同時に消え、アトミックが仮面の下で笑みを浮かべる。

「流石に効かない設計か……」

「この力は皆の私に対する思いの形。そう簡単に壊す事など出来ませんわー！」

「……ッ！」

ボマーがアクセルドライブのボタンを押す。

『ACCELERATOR DRIVE』

超加速したボマーがアトミックと距離を詰める。

「ふっ……」

『ACCELERATOR DRIVE』

アトミックもアクセルドライブを使う。

何のフォームチェンジもなしに、今のボマーと同等の加速を見せる。

「はっ！」

誰の目でも追えない程加速してから、二人は何度も武器を交える。

ボマーはバットを変化させた刀、アトミックは二本の光剣。

「はあっ！」

アトミックは加速しながら、背中からボムビットを十二本。

手から火炎と水流を放つ。

「！」

『WEAPON DRIVE ODIN LANCE』

ボマーは咄嗟に刀をオーデインランスへと変えた。

長い槍を円状に回して攻撃を防ぎつつ進み、爆風の中から槍を振るう。

「セイハーツ！」

大きく槍を回してアトミックへ。

アトミックは咄嗟に大きく飛び、端末を操作。

「これで終わりですわ！」

『SUMMON DRIVE SMASH』

ボムビットがサック怪人へと姿を変える。

ボマーの武器もサック怪人のメリケンサックとなり、二人で同じ行動を取る。

『FINAL DRIVE！』

アトミックも端末を操作。

足にボムビットを纏わせ、そのまま大きく空中ジャンプ。

『FINAL DRIVE！』

ボマーもアトミック目掛けて大きな波動を作り……飛ばす。

「はあッ！」

「ライダーボムキック……なんてな！」

アトミックがボマー目掛けて飛び蹴りを放つ。

ボマーの放った波動はアトミックへと飛ぶ……筈だった。

「あッ……！」

しかしアトミックのボムビットがそれを防ぎ、アトミックが爆発に巻き込まれる。

ボマーが気付いた時には、アトミックの姿は爆風の中へと消えていた。

第七十七話

なんてことだ。

アトミックは自爆し、その姿は跡形もなくなった。

髪の毛の一本すら落ちてくるものはない。

「ここまでするつもりはなかったのに……」

変身が解けた美咲はそう呟く。

恐らく……彼は木っ端みじん、いや爆風で全て焼き払われたのだろう。

それ以外ありえない……。

「おっと、こりゃ嬉しいねえ。俺の死で罪悪感を覚えてくれるなんて」

「……ッ！」

美咲は声の方へ振り向く。

そこには。

「これが死ぬって感覚か。痛いし頭がクラクラするし、こんな躁り返してよく気が狂わねえな」

仮面ライダーアトミックが、余裕そうな構えでそう言っていた。

そうだ、恐らく彼は美咲と同じ能力を使った。

爆死でのみ蘇生が可能な、あの力を……。

「何故……」

「お前がそれを言うなよ。董がお前の能力を俺に付与させたってだけ。なんも不思議な事はねえだろ？」

美咲は一瞬言葉を失う。

だが何とかドライバーを操作して、変身しようとする。

「変身ですわー！」

『ERROR』

端末からそう音声が続いた。

よく見ると画面にはクールタイム云々の文字が。

オールウェポンの代償……なのだろうか。

「おやおや、変身も出来ねえみてえだな」

「……！」

「消化不良ではあるが、出直しな。今の状態のお前を殴っても意味はねえしよ」

「くっ……」

美咲が悔しそうにそう呟く。

「ここで引くわけにはいかない。でも……」

「交代だ美咲」

「ミサキ、コウタイ」

ムラマサとグングニルの二人が、そう告げて美咲の前へ。

「二人とも……」

「俺達が何とか時間を稼ぐ。そしたら今度こそ頼む」

ムラマサが顔を少しだけ後ろに向けて言う。

「裕太さん……」

「何分だ？ 何分で変身が出来るようになる？」

「えっと……五分ですわ」

「分かった」

会話を聞いていたアトミックが両腕を広げて、首を振る。

「お前達が次の遊び相手になるってか？」

「お前のせいで、俺は美咲を手にかけた。だから、お前を倒す為に役に立つ事が俺の贖罪だ」

「ちよつと責任転嫁が過ぎるな。後押ししたのは俺だが、やったのはお前だ。お前の心の弱さが、あいつを一度殺した」

「ああ。だから俺は俺自身も許さない。自分の身勝手で、俺や彼女を傷付けた俺の弱さを許さない。俺は美咲と共に、絶対お前を倒す」

「ヴィーダ、オマエ……キライ！ タオス！」

グングニルも槍を構えながらそう告げる。

「そうか。じゃあやってみな。どれだけ耐えられるか見てやるよ」

アトミックが右手に炎を生み出す。

「行くぞ、ヴィーダ！」

「ウン、ユウター！」

二人はそのまま、地を蹴り駆け出していく。

アトミックの手から、火炎弾が放たれた。

第七十八話

その後は美咲にとって耐えがたい時間が続いた。
戦う意思があるのに、美咲には何も出来ない。

ただ黙って、ムラマサ達が戦う様子を眺める事しか……。

「ウチも行く系……!」

近くで休んでいた優香が、もう一度ベルトを装着し直す。

「優香さん、大丈夫ですか?」

「このままここに座ってても、ウチがここに来た意味がなくなる系。

ウチも戦う系……」

やはり身体が震えている。

それでも何とか身体を動かす優香。

美咲はその手を止める。

「無茶はやめなさいな……。私だって戦いたい。けど、それで死んで
は意味がありませんわ!」

「……」

「あの攻撃を、恐れていますのね?」

優香がその言葉に頷く。

「ウチ、誰かの為なら戦えると思った系。でもやっぱり、ウチは傷付く
のも傷付けるのも苦手系……。ごめん、美咲っち。そんなんじや、美
咲っちの役には立てないよね……」

「……強いですわ。優香さん、貴女は本当に強い」

「えっ?」

「自分の弱さを克服しよう……戦おうとしていたんですわよね?」

「そう系。でも……」

「貴女が二号さんに私の事を一生懸命言ってくれた時、とても嬉しく
なりましたわ。それに……私の為に怒ってくれた事。戦いで強くな
かったとしても、誰かを思って自分の身を削れる貴女は強い人です
わ」

「美咲っち……」

「自分勝手な私には真似出来ない強さですの。時々しつこいですが、

貴女のそういう部分は好きですわ」

「……ッ！」

「これからも、その強さでいろいろな人の心を救うべきですわ。貴女の持つ本当の強さで」

※※※

優香は美咲の言葉で安心する。

遙が言っていた言葉は、間違っていないなかった。

昔からの友人である美咲が、今の自分に助けられていると言ってくれた事。

「美咲っち、ありがと系」

「貴女の友として、当然の事をしたまですわ。私は友の扱いでも、頂点に立つ者ですわ」

「でもごめん……ウチはやっぱり戦う系」

「え……」

「誰かの為に自分の身を削れるのがウチの強さなら、ウチはその強さも捨てたくない系。戦いで強くなくても、怖くても、ウチは美咲っちの力になりたい系。だから、ウチは行く系。二号っちや操られた子達を傷付ける為じゃなくて、美咲っちをもっと支えてあげられるようになる為に……」

優香の手から震えが消える。

誰が何と言おうと、優香は人を傷付けるのも自分が傷付くのも苦手だ。

けど……友達のために何も出来ないのは、もっと苦手だ。

自分の強さを捨てる気はない。

友達を傷付ける者が現れた時に止められる強さも欲しいだけだ。

もう二度と、美咲を死なせたりなどしない。

『HORSE DRIVE READY?』

「……変身系」

『COMPLÉTE』

優香はジャンプし、馬の形を模した光に飛び乗る。

優香は騎兵怪人へと姿を変えてから、武器を構えて駆け出す。

第七十九話

俺は何とかグングニルと共に、仮面ライダーアトミックを相手どつていた。

いや……俺は活躍しているという程は動けていない。

ほぼグングニルの手柄だ。

「ハッ、トウッ！」

魔法陣から槍を飛ばしながら、手持ちの槍を大きく振るうグングニル。

それでもアトミックは防ぎきる。

「フォームチェンジがないお前じゃやっぱり、歯ごたえがねえな」
つまらなそうにそう告げるアトミック。

「ウルサイ……ソレデモヴィーダガオマエタオス！」

怒りを魔法陣からの槍に乗せてぶつけるグングニル。

俺は何かアシストをしようと、刀を構えて前に出ていく。

「ふんっ！」

「くっ！」

アトミックの手から、気が放たれる。

俺はそれに大きく怯み、体勢を崩す。

アトミックはそこを逃さず、瞬間移動で俺との距離を詰め、追い打ちをかけていく。

光剣の薙ぎが、俺の脇腹へと流れ込む。

俺は焼けるような痛みを感じながら、地面へと叩きつけられた。

「……ッ！」

再び瞬間移動で俺の前に現れる。

「お前は手ごたえ以前の問題だ……レベルが違い過ぎて話にならねえ」

「はああッ！」

騎兵怪人がその隙を突いて突進。

勿論アトミックには当たらず、アトミックの手から放たれた爆発波で大きく吹き飛ばされる。

「はあ……つまんねえ。つまんねえつまんねえ」

アトミックがそう呟きながら、騎兵怪人の馬部分を蹴り飛ばす。

「てかさ、俺に時間掛けてて良いのか？ お前……友達が大事なんだろ？」

「どういう……意味系？」

「山内成音が何でまだ来ていないのかくらい、少しは考えたらどうなんだ？」

俺はその言葉にハツとする。

「しまっ……」

「ナリネ！」

「成音さん……！」

「成音っち……」

「さあどうするんだ？ 俺はもう帰っても良いんだぜ？ どうせ続けた所で俺には勝てねえんだ」

アトミックがそう問いかけてきた。

「俺が戦いを引き継ぐ」

低く通った男の声が、近くから聞こえる。

全員がその姿に目を当てた。

彼は……。

「明人さん……」

「待たせたな、六角美咲」

片方だけ赤い瞳に変化した、足利明人だ。

「その瞳……そうか。お前あの薬の力を自分のものに……」
「……」

明人は美咲に目を向ける。

「こいつは俺が倒す。お前が山内成音の所へ行け」

「身体は大丈夫なんですか？」

「分からない。だが今は、無性に戦いたくて仕方がない」

アークソードドライバーを手にそう呟く。

「……！ お願ひしますわ！」

美咲はそう告げて、ボマードライバーを操作する。

すると、その形がバイクへと変形した。

「行きますわよ……！」

美咲がそう呟いて、バイクと共にその場をあとにする。

「さて、こうして戦うのは初めてだな……アトミック」

明人が鋭い瞳で、アトミックを睨みつけた。

第百八十話

「そうだな。この前までそいつは俺の身体だったわけだし」

仮面の下で笑みを浮かべるアトミック。

「お前に好き放題やられたが、今日で汚名返上させてもらう。大人しく俺に斬られてもらおうか」

アークソードドライバーを操作する明人。

「……こいつは楽しめそうだ」

アトミックがそれを同じ顔のまま眺める。

『ARC SWORD DRIVE READY?』

「……」

何も言わず、端末を取り付けた。

『ARC COMPLETE……!』

その姿は、今までの剣の怪人・改とは別物だった。

元の意匠を残しながらも、複眼や若干さっぱり目のデザインから、怪人というよりはライダーに近いフォルム。

あれは……。

「まさか完成したのとやり合えるとはな……」

「……これが、今の俺の力」

明人……剣の怪人・改が力を肌で感じる。

手にした剣を構えてから、剣の怪人・改はその複眼でアトミックを見据えた。

「勝負だ、アトミック」

剣の怪人・改は地を蹴って、アトミック目掛けて飛んでいく。

※※※

何とか剣の怪人・改達を一体ずつ確実に二人で倒していた成音と蒲生。

だがそれにも限界が近付いていた。

二人は残り三体を目の前に、息を切らす。

「これ、いけるの……?」

「やるしかないっすよ。山内ちゃん……」

もう一度駆け出そうとしたその時。

「排除……排除！」

後藤が変身している一体が、禍々しいオーラと共に自分達目掛けて飛び込んでくる。

他の剣の怪人・改とは違う重い蹴りが、火炎放射器怪人の腹に突き刺さった。

「……ッ！」

次いでガス怪人の脇腹にも重い一撃を入れる。

「くっ……」

それでは止まらず、追い打ちが二人の身体へと立て続けに放たれていく。

最後は二人纏めて顔面を掴まれ、地面に引きずられてから、ブロック塀へと叩きつけられた。

「……なんて、力……」

変身解除された成音がそう呟く。

だが……。

「ぐあっ……ううっ……けほっけほっ……」

変身が勝手に解除され、後藤は血を吐き出して倒れる。

薬の副作用が、他の剣の怪人・改とは違う……このままでは。

「はい……じよ……」

それでも後藤はもう一度変身しようとする。

他の剣の怪人・改も全くそれを気にせず、二人に向かおうとしていた。

「ここまでつすか……」

蒲生が諦めた声でそう呟く。

「いいえ、まだ終わりませんわ！」

遠くから聞こえた声。

声の主はバイクと共に現れて、剣の怪人・改二体を軽く吹き飛ばす。ターンしてからメットを外し、剣の怪人・改を見て言う。

「倒れている仲間を無視するのは、生徒会として関心しませんわね」

第百八十一話

美咲はバイクをボマードライバーへと戻し、ベルトに取り付けてから二人に告げる。

「成音さん、蒲生さん……ここは私が何とかしますわ。早く遙さんの所に皆さんを連れていきなさいな」

「会長……分かったわー!」

もう一度火炎放射器怪人へと姿を変え、生徒を何人が抱えて立ち去る成音。

背中から爆炎をまき散らして、ジェットエンジンのような音を響かせた。

「蒲生さんも、逃げるか手伝うかをお願いしますわ」

「……は？ 何私に指図してんすか」

「……」

「私はやるつすよ、この二人を」

「戦う気ですか？ まだ」

「この時点で屈辱つすけど、一緒に戦えばただ助けられるよりはマシだと思っただけつすよ」

ガス怪人は拳を構える。

美咲が礼を言う。

「蒲生さん、ありがとうございますわ」

「勘違いしないで欲しいつす。私はアンタに借りなんて作られるのは御免つすし、それに……やっぱりここまでしてアンタを倒せないのは悔しいつす。だから、やっぱりその首また狙わせてもらおうつす」

ガス怪人の言葉に、美咲は笑みを浮かべる。

「良いですわよ。私はいつだって歓迎しますわ」

「アンタのそういう所が嫌いつす。でもそれがアンタらしい……」

吐き捨てるように、ガス怪人がそう答えた。

「排除……排除……」

二人の様子を見ながら、ゾンビのように剣の怪人・改二体が迫る。

美咲もシリアスな表情に直つてから、蒲生に告げた。

「でも私に勝ちたいのなら、まず自分の仲間くらいは救いなさいな」
「……まだあいつらの事、仲間だと思ってるんすか？」

「私は貴女に言った筈ですわ。成音さんだけじゃない、生徒会の皆も、
貴女も……」

「うるさいっすよ」

美咲はボマードライバーを取り出し、スクリーンにクールタイムが
無い事を確認してから変身ボタンを押す。

端末が音声で鳴る。

『BOMER DRIVE READY?』

それから左手で端末を閉じ、顔の左側に構え告げる。

「変身ですわー!」

そのまま端末を取り付けた。

『COMPLETE』

上から紫色の爆弾型の光が降る。

それを美咲は右手で握り潰し、爆風に包まれた。

その中から現れる。

爆弾頭に詰襟姿のヤンキーモーターの戦士……仮面ライダーボ
マー。

バットを構えてから、高らかに決め台詞を叫ぶ。

「ここからは私達のステージですわ!」

「私をそれに巻き込まないで欲しいっす」

動けない後藤以外の二人に向かって、そのまま駆け出していく。

ボマーはバット、ガス怪人は拳を構え、それを勢いよく剣の怪人・
改へと叩きつけていく。

「はあッ!」

第百八十二話

明人が変身した剣の怪人・改は、スペックこそボマーのオールウェポンに劣るが、明人自身の戦闘センスや身体能力で何とか互角にアトミックと渡り合う。

明人の使う超能力もいくつかは見切って剣で切り裂き、剣から闇色の波動を飛ばす。

勿論今までの剣の怪人・改のものは威力が全然違う。

アトミックに何とか命中し、剣の怪人・改は距離をとってから構えなおす。

アトミックは当たったところをさすってから眩く。

「お前はやっぱり俺を超えてくるか」

そう告げてから、光剣を構えて剣の怪人・改との距離を詰める。

「お前に負けるようでは、美咲に合わす顔がない。常に進化し続けるあいつに勝てるのは、同じく常に進化し続ける意志のあるものだ。俺はお前に身体の自由を奪われている間も、精神の中でも鍛錬を続けていた。いつかお前を、こうして斬る為にな」

「かっこいいねえ、なんかの主人公みたいだ。さしずめ俺は、お前に倒されるゲームのラスボスってどこか？」

剣の怪人・改の振るった剣が、アトミックを大きく吹き飛ばす。

「少なくとも、その呼称はお前には似合わない」

「……」

「俺にそう呼ばれたいなら、まだ足りない」

「言うねえ……じゃあ、それでも喰らってみるか？」

アトミックは攻撃を躲しながら端末を操作。

『INFINITY DRIVE』

アトミックの背後に、数えきれないほどのボムビットが出現する。

「こいつを喰らって生き延びたら、お前の言葉を認めてやるよ。今だけな」

そう告げた後、ボムビットが勢いよく放たれる。

「勝負……！」

アトミックが仮面の下で笑みを浮かべた後、剣の怪人・改が剣を構えた。

ボムビットは剣の怪人・改とほぼゼロ距離に。
すると……。

「……！」

剣の怪人・改が剣一本で、飛んでくるボムビット全てに斬撃を与えていく。

爆風の勢いすらも剣で防ぎきり、能力の文字通り無限に匹敵する数放たれたボムビットが、全て彼の剣に消えた。

※※※

「あれが足利明人……」

「アキト、スゴイ……」

近くで見ていた俺が、そう呟く。

そこで初めて、美咲が蘇我高校との決戦で本来戦う相手だった者の実力を再確認した。

今は味方側で心強いが、やはり彼自身も美咲と同じだ。

とても普通の身体能力の持ち主が、彼を相手にする事など出来ないし、突然変異体であっても厳しいだろう。

「これで良いのか？」

剣を下ろしてそう告げる剣の怪人・改。

アトミックがやれやれと言ってから呟く。

「今回ばかりは認めるしかないみてえだな。だが、まだ戦いは終わってねえぞ」

第百八十三話

ボマーはハイドロフォームを使って、剣の怪人・改と一対一の戦いに持ち込んでいた。

蒲生……ガス怪人も一対一で、生徒会メンバーが変身しているそれと戦う。

戦いの最中、ガス怪人が呟く。

「つたく、アンタもズルいっすよ。そうやって自分だけ強くなって、周りを置いていく。私はどんなに真面目にやっても、アンタの仕事ぶりには勝てやしない。これが恨まずにいられるかってんだ」

「恨まれ上等ですわ。それなら全部受け入れて、私が逆に認めさせてやりますもの」

「ふん、アンタを認めるのだけは御免って……何度言えば分かるんすか？」

ボマーとガス怪人が、同タイミングで拳を使って敵を怯ませる。

「そんなの……私が聞くわけじゃないですわ！」

ボマーは剣の怪人・改を大きく吹き飛ばしてから、端末を取り出す。

「私は私が勝つまで何度も戦いますわ。私の理屈が、私の理想が、世の絶対となるまで……私は何度だって抗いますわ！」

『FINAL DRIVE!』

剣の怪人・改の前で大きく飛び上がる。

右足を突き出し、ボムビットを脚の周囲に集めてから大きな声で技名を叫ぶ。

「ハイドロボムキック！」

青い爆風が、剣の怪人・改を吹き飛ばして変身を解除させる。

ボマーは少し離れた場所で蘇生し、それと同タイミングでガス怪人も必殺技を発動。

『ヒツサツドライブ！ 超フキトープ！』

ガス怪人の持つ銃から高圧のガスが放たれ、剣の怪人・改を吹き飛ばし変身解除。

生徒会メンバーはぐるぐると回転しながら宙を舞い、地面へと叩き

つけられた。

「これで……」

終わったと思ったその時……。

「いじよ……排除……貴方達二人を排除する……」

倒れていた筈の後藤が、再び立ち上がる。

既に筋肉の隆起がかなり進行し、かなりの痛みに耐えているせいか汗の量も凄まじい。

そして目から一筋の血が……とても身体が長くもちそうには思えない雰囲気だ。

「後藤さん……」

「変身……ッ！」

小さいが何とか絞り出した声でそう呟き、端末のボタンを押す。

『ARC SWORD DRIVE READY?』

重々しい音声と変身待機音が鳴り響く。

「はあッ……ぐっ……」

苦しみながらもベルトに取り付け、完了音が鳴る。

『ARC……COMPLETE』

空からゆつくりと、禍々しい光を纏う剣が舞い降りる。

後藤がその柄を手にとると、そこから彼女の身体が剣の怪人・改へと変貌した。

「うわあああああッ!!」

苦悶の声を上げながら、地を蹴ってボマー達に向かう剣の怪人・改。

ボマーとガス怪人も武器を構え、彼女目掛けて駆けていく。

第百八十四話

通常の剣の怪人・改よりも禍々しく、より怪人と呼べる見た目に近づいていた後藤。

しかしその力に後藤自身がついていけず、遂に負荷が掛かって崩れ落ちてしまう。

「……………ッ！ はい……………じよ……………」

「後藤さんー！」

先に成音に運んで欲しかったものだが、その時の彼女はまだあの二人に阻まれていた。

事ここに至っては、すぐに終わらせるしかない。

「蒲生さん、手を貸してくださいな」

「……………」

ボマーがガス怪人にそう頼む。

あまり人の力を借りて勝つのは、美咲的には避けたい方法だが、今は彼女の命が最優先だ。

「私が必殺技を当てますから、貴女は後藤さんの動きを止めてくださいな」

ボマーがそう頼むと、ガス怪人はこう返す。

「それは御免つすね」

「……………」

「おっと……………勘違いすんなつす。逆ならやつても良いつすよ」

ガス怪人は告げた。

「私が技を決めるつす……………あいつを倒すのは私つすよ」

「蒲生さん……………」

「最初に戦ったのは私つす。アンタに倒されちゃ、完全にアンタの手柄になっちゃうつすからね」

「本当に任せて大丈夫ですか?」

「あいつの攻撃パターンは大体分かったつす。でも私の速度じゃとても無理つすね……………美咲」

「なんですの?」

「不本意ですが、アンタの力を貸して欲しいです。アンタが動きを止めている時に、私があいつを撃つです」

ボマーがガス怪人に忠告する。

「なるほど……分かりましたわ。ですが私を扱うなら、失敗は許しませんわよ」

「少なくとも私は失敗する気なんて毛頭ないですよ」

ボマーが地を蹴って、姿を消しながら飛び出す。

崩れ落ちた剣の怪人・改も何とか立ち上がり、ハイドロボマー目掛けて加速する。

目まぐるしい速度で戦い続ける二人を見ながら、ガス怪人は必殺技の準備。

ベルトを操作し、銃を向けて……その時を待つ。

「失敗なんてする筈ないです。私はいつかアンタを消す。ここで失敗なんかしてたら、そんな事が出来るわけがないです」

「はあッ！」

やがてボマーの動きが止まり、剣の怪人・改を後ろから抱くように固定する。

『HYDRO END』

ボマーのハイドロフォームの時間が切れ、通常のボマーに戻った彼女が叫ぶ。

「今ですわ蒲生さん！」

「いじよ……排除……」

「いくつすよ……」

銃のトリガーを引く。

『ヒツサツドライブ！ 超フキトープ!!』

ガスの放射口を怯んで動けない剣の怪人・改に向け、そのまま勢いよく解き放つ。

その瞬間にボマーは即時に回避。

轟！ と音を立てて暴風が吹き荒れ、剣の怪人・改が吹き飛ばす。

「ぐあッ！」

剣の怪人・改……後藤の変身が解けて地面へと叩きつけられる。

ガス怪人がそれを見届けてから一息吐いて、その変身を解く。

第百八十五話

インフィニティドライブを躲した後、何度か剣を交え、明人はアトミックと距離をとる。

互いに端末を取り出してから、ボタンを押す。

『FINAL DRIVE!』『ARC FINAL DRIVE
……』

剣の怪人・改の全身に禍々しくも、若干明るい赤と黒のオーラが纏いつく。

アトミックはボマーよりも多いボムビットを脚に纏わせ、更に高く飛び上がった。

右足を前に突き出して、アトミックは技名を呟く。

「ライダーボムキック……なんてな」

アトミックはそのまま勢いよく掛け声と共に急降下。

「せやあッー」

アトミックのライダーボムキックに対し、剣の怪人・改も禍々しいオーラと共に姿を消して立ち向かう。

ある程度の位置まで近づいた所で、剣の怪人・改が分裂して姿を現し、アトミックへと攻撃を叩き込む。

「……ッー」

アトミックの蹴りと、剣の怪人・改の斬撃が衝突し……激しい爆風が巻き起こる。

剣の怪人・改は吹き飛ばされ、アトミックも死にこそしなかったが少しだけ距離を離された。

「お前じゃ、そう簡単には当たってくれねえか」

アトミックが光剣を構え直し、剣の怪人・改も黙して武器を構える。

もう一度アトミックが向かおうとしたその時、アトミックの持つ端末から着信音が鳴り響く。

「……なんだよ。今良いところなんだ」

アトミックは不服そうに話を聞き、不機嫌そうな態度で「わーっただよ」と呟く。

終了ボタンを押してから、

「ちっ、いいところだったのによ」

二号は指を鳴らして、光に吞まれ。

どこかへと姿を消した。

「……」

剣の怪人・改は先まで二号がいた場所を睨みつけてから、変身を解いた。

変身を解いた明人の所に、裕太とヴィーダ、そして優香が近付く。

「明人っち、助けてくれてありがと系！」

「アキト、アリガトウ！」

「礼には及ばん。それよりも奴を逃がしてしまったな」

「……」

「福沢裕太」

「はっ……はい……」

相手の態度に少し怯えた態度で答える裕太。

「怪我はないか？」

「あ、ああどうも……おかげさまで」

裕太は頭を搔いてそう答える。

※※※

俺はその後、すぐに蘇我高校にいる遙に通信を入れた。

成音と蒲生が交戦していた生徒達の治療をしていた彼女に事の経緯を説明した後、

「そうか、二号の奴を逃がしたのか……」

「……はい」

「急ですまないが、一度校内を確認して欲しい。董の存在が無い事を確認したら、拠点をそちらの体育館に移したい。そこにいる生徒を全員蘇我高校に移動させるのは恐らく無理があるから……」

「分かりました」

俺は指示に対してそう答えてから、全員で校舎内へ向かう。

第百八十六話

あの後戻って来た成音と共に三人で蘇我高校の部室へと生徒を送ってから、一旦美咲達は校舎の外へ出た。

立ち去ろうとする前、美咲は蒲生に無言でガストライバーを手渡される。

「ガストライバー……これを私に？」

「……これで良いっすよね？　じゃあ帰るっすよ」

そう告げて、蒲生はそのまま去っていかうとする。

「あの、蒲生さん」

「何すか？」

「これから貴女はどうするつもりですか？」

「……悔しいですけど、まだ今の私じゃアンタに勝てそうもないっす。少なくとも戦いでは。戦いで勝つ前に、まずアンタには生徒会長としての器で勝ってみせるっす。戦いで勝つのはその後にするっすよ」

「……！　生徒会長に、なるつもりですか？」

「この生徒会長の就任方法は、年に一度の体育祭で他の候補とバトルロワイヤル……っすよね？」

「ええ。私もそれで勝ち取りましたわ」

「何の話……？」

「ここでの生徒会長就任の仕方の話ですわ」

「そうっすよ成音ちゃん」

「ちよつと何言ってるか分からない……」

※※※

「とにかくっす。私は後で絶対アンタを負けさせてやるっす。だからそれまで、絶対死ぬんじゃないっすよ。どんな奴が相手だろうと……」

「当然ですわ」

「まあ、アンタは脳波を破壊されても他の奴らの力で蘇るような奴っす。万が一なんて事はないと思ってるっす」

「……」

「んじやあ、しばらくお別れっす。その首洗って、待ってるっすよ」
「貴女の首を逆に取りつもりで行きますわ」

「癪に障る奴っすね。まあそれもアンタらしい……それから成音ちゃん」

「何？ 副会長」

「もし成音ちゃんがこいつを倒せたら、私に教えるっすよ。そしたら成音ちゃんを倒しに行くっす」

「な、何でそうなるのよ」

「冗談っすよ。私が気に入らないのは、そのアホ眼鏡だけっすから」

「誰がアホ眼鏡ですって？」

「んじやあ、もう行くっす」

「ちよつと待ちなさいな！ そのまま逃げようっすってそうはいきませんわよー！」

「やーいやーいアホ眼鏡」

「木っ端みじんにしますわ！」

「まあまあ落ち着きなさいよ」

「落ちて着いてられせんわ！ 退きなさい成音さん！」

それも聞かず成音が背を向けた蒲生に叫ぶ。

「ちやんと今度焼肉に連れていきなさいよ！」

「焼肉？ 何の話ですの？」

「同盟に入ってるアンタには関係ないわ」

「何の同盟ですの!? 私は仲間外れですの？」

「なんでアンタを倒す同盟にアンタを入れるのよイミワカンナイ」

「どうでも良いから私も焼肉に誘いなさいな！」

「嫌よ！」

「それならこの爆弾で全て吹き飛ばしますわ！」

「あーもうめんどくさいわね！」

第百八十七話

生徒会メンバーの応急処置が完了した後、裕太達が○×女子高に董達の姿がない事を確認し、遥の車で生徒会メンバーと共に○×女子高まで移動。

到着後、体育館に生徒達を寝かせ、全員で協力して治療を行うことに。

「それにしても凄い量の配線ですわね」

「私も人生でここまでの人数を一気に診る事になるとは思わなかった。医者でもないのに」

ヘルメット型の機械を数人ずつ取り付け、洗脳に使われた人工脳波を一人一人抽出していきながらそう答える遥。

「こんな事の為に人工脳波を生み出すとは……あいつも随分落ちたな。いや、私も人の事は言えないが……」

「その脳波はどうしますの？」

「……調べた結果同一の脳波が検出された。ひとまず回収と融合をして凍結させる。あとの事はそれから考える……少し気の毒ではあるがな」

「……」

遥の瞳が前髪に隠れる。

ここまで、戸間董が差し向けた刺客と戦い続けたが、改めて彼女の倫理観が信じられないと言わんばかりの表情だ。

無理もない。

遥は董を友と信じていたのだ。

信じていたから、こうして今涙を流している。

「すまない美咲、今はあまり私の顔を見ないでくれ」

遥が首を下に向けて、美咲にそう頼む。

それを聞いた美咲が遥の方を見て言う。

「……隠す事はありませんのよ。私は分かっていますのよ」

「そういう問題ではない。ここで私が泣くのは筋違いだ。一番泣きたい者が私以外に二人もいるのに、どうして私が泣く事が許されるとい

うんだ」

「……許される許されないではありませんわ。友が悪人だと知った時、辛さや悲しさ、怒りがわくのは当然ですわ。確かに今は余裕なんて無いかも知れない。けど、辛い気持ちを抑え込んで、自ら潰れに行く事はありませんのよ」

「……」

「貴女は既に、私達と出会う前に無理をし続けていた。ここで泣いても、誰も責める権利はありませんのよ」

「美咲……」

そう呟いた瞬間、前髪に隠れた瞳から一筋の涙が流れていく。

ポケットから取り出したハンカチで顔を押しさえて、それでも声を殺して泣く。

「確かに前に罪を犯したかも知れない。それでも、皆さん本当に……それだけの事で自分の気持ちを諦めすぎですよ。罪なんて、誰でも等しく犯すものですのよ。私も……そうでしたのよ。でも、後ろめたい気持ちになるのも分かりますわ」

美咲は自分がそうだった時の事を思い出しながら言う。

「だから、私は自分の仲間が叶えたいと思った願いは全力で叶えますの。もし気持ちを表に出すのが後ろめたいなら、私に全部任せてくださいな。私は全て受け止めますの」

「……ッ」

「私、やりますわ。遥さんの願いも、きちんと叶えますの。その時笑えるように、今は泣いてくださいな」

「……ああ」

ハンカチを退けて泣き顔を見せながら、遥はそう返事する。

第百八十八話

一時間足らずで全員に必要な処置を施し終えてから、次は美咲からボマードライバーとガスドライバーを預かり、明人からはソードドライバーを預かる。

アークソードドライバーも一応預かろうとしたが、使っている端子の種類が違い断念した。

「……これは使えんな」

「やはりそうですのね……」

「まあ相手も董だ。敵をそう簡単に強化などさせてはくれまい。むしろ他二つを改造されなかつた事を有難く思う他ないな」

「……」

さつき泣いた事で吹っ切れたのか、今は董の事を話すときも無表情だ。

「とにかくもう時間がない。早急に取り掛かるから、適当に待っていてくれ」

「分かりましたわ」

※※※

皆が手分けして治療を行っていた時、俺とヴィーダは外で見張りをしていた。

「……」

「……」

なんとというか、気まずい雰囲気だ。

ヴィーダもさつきからチラチラと自分の事を見ている。

何か話したそうなオーラは出ているのだが、ヴィーダにしては珍しく行動に移そうとしていない。

「……はあ」

仕方ない。ここは年長者の俺が声を掛けてみるか。

「何か話したい事でもあるの？」

「エッ？ ト、トクニソンナコトナイケド……」

「なら何でそんなにチラチラ見るんだい？」

なんか違うな……これじゃ下手なナンパ師だ。

しかも相手が幼女だから周りから見れば更に誤解が……。

「……」

しかもヴィーダさん、そんな迷惑そうな顔で見ないでくれ。

そんな顔されたら余計誤解が生まれるだろ。

「アラテノナンパ？」

「いやお前どこでそんな言葉覚えた!？」

「ナリネガミテルテレビデソーイウノアツタ」

成音さんもこの子がいる時にそういうの見るなよ。

「はあ、そうじゃなくて。さつきから結構こつちを見てるから、話したい事でもあるのになって思っただけで、別に変な事は考えてないよ」

「ウワキデモナクテ？」

「だからちげえしどこで覚えた!?! てか浮気以前に誰とも付き合ってたねえー!」

「ミサキトラブラブ」

「ラブラブじゃない!」

成音にあとで言っておかないとな……。

「はあ、なんか……もう良いか。見張り続けようぜ」

「ネエ」

「ん？」

「ユウタハモトモトニンゲンダツタンダヨネ？」

「……ああ。そうだな。てか今も人間だと思いたいし、お前もそうだろう?」

「ヴィーダハ、ワカンナイ。ヴィーダハタタカウイガイマダナニモデキナイシ、ニンゲントハチガウ。ママヤナリネットハチガウヨ……」

「自分が戦闘マシーンだ……なんて思っていないよな?」

「オモツテルノカモ……」

「大丈夫だ。今そう思えなくても、ヴィーダは人間だ。今戦う事しか出来ないなら、終わってから色んな事が出来るようになるれば良いさ。お前は俺と違って、ちゃんと未来があるんだからさ」

「ミライガアル? ドウイウコト?」

「ヴィーダにも相談しようかなと思ってたけど……俺、死んじゃうらしいんだ。近いうちに」

第百八十九話

「シンジャウ……ノ？」

ヴィーダが俺に問いかける。

「……」

俺は声には出さずに頷く。

「どういう理由でそうなるのかも説明されたし、それでもそんなの一々理解なんかしてないけど、俺は死ぬらしい。誰かが生き残る方法でも探してくれない限り」

「ソナ……」

「まあ、それでも仕方ないよな。俺はあいつ……二号の言った通り馬鹿だし。蘇我高校がそういう高校だと知らずに選んで、結果それを理由に利用された馬鹿だから。まあそうなるのも仕方なかったと今なら思える」

「……」

ヴィーダは何も答えれずに俯いた。

「あーごめん。ヴィーダにこんな話しても分からないよな……。大丈夫、少なくともヴィーダのママ……遥先生がヴィーダにそう伝えてないって事はヴィーダにはちゃんと未来があるって事だと思う。だから戦うだけに生まれたとか言わないで、終わった後に何をしたいかを今からちよつとでも良いから考えてもいいと思うぜ」

「ダイジョウブジャナイヨ」

「え……？」

「ユウタガシンダラ、ミサキガカナシム。ソレダケハゼツタイダメ」

「……」

美咲が言ってくれた。

絶対に裕太や一号の事を死なせない……と。

でも少し不安な事がある。

一号の件だ。

彼は今日、体調不良を理由に戦いには参加しなかった。もしかしたら、そんな不安が俺の中で未だ残っている。

「ただ今だけは、彼女の言葉を信じて生き続けるしかない。」

「そうだな。俺は生きなくちゃいけないんだ。俺は今ある命を、あいつの為に使うって決めたんだから」

「……ウン！ ヴィーダダツテ、ママカラモラツタイノチヲ、ナリネヤママノタメニツカイタイ！」

「そうだな……。なあ、ヴィーダ」

「ン？」

「この前までは、俺の事嫌いとか言ってたけど……今はどう？ 好き？」

「その事を聞いた途端、再びヴィーダが申し訳ない顔に。」

「ゴメン……ユウタハワルクナイノニ……」

「良いんだ。これからは友達になれる？」

「ナレルヨ……ナレルニキマツテル！」

「おっ？ じゃあ」

「ウン！ ヴィーダ、ユウタ、トモダチ！」

お決まりのフレーズを口にして、握手を求めるヴィーダ。

その手を握り返して、俺は満面の笑みを見せる。

「成音と同じくらい、俺もヴィーダと仲良くなれる？」

「ソレハムリカナ。ソウナツタラウワキシテルツテミサキニイウヨ？」

「だからちげえよ」

「お楽しみの所悪いな二人とも」

そんな空気を破壊する奴の声が、姿より前に聞こえる。

「六角美咲に用がある、とつととそこをどきな」

俺と同じ顔をした悪魔が、俺達の前に立ち塞がった。

第百九十話

「さあどうした、早く呼んで来い。あいつならすぐすつ飛んでくるだろ?」

二号がニヤニヤと笑いながら俺にそう要求する。

「悪いけど、今はそういうわけにはいかない。どうしてもって言うなら俺が相手してやる」

「……もうお前達に興味はねえんだよ」

「ヴィーダ、オマエタオス!」

「……」

もう毛ほどの興味もないと言いたげに、それでも仕方なくアトミツクドライブを取り出す二号。

「はあ……めんどくせえな」

「ムーッ!」

ヴィーダが頬を膨らませながらグングニルドライブを腰に装着。

バックルからベルトが伸び、ヴィーダの腰を覆う。

「何としても死守するぞ」

「ウン! トイウカ、タオス!」

俺やヴィーダの気迫とは反対に、覇気のない表情で端末をボタンを押す二号。

『BOMBER DRIVE READY?』

「……変身」

右手で取り付け口にスライドさせ、音声で鳴る。

『COMPLETE』

本家のボマーよりも少し重々しい効果音、そして二号の上から落ちる爆弾。

最早いつもの動作すらせず、気だるそうに変身完了。

『GUNGNIR ON』『ムラマサ!』

「ヘンシン!」変身!」

ヴィーダが槍型のガジェットを取り付け、俺は左腕を斜め右上に伸ばしてから端末を取り付け口にスライドさせる。

『CHANGE』『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

ライダーが仮面ライダーグングニル、俺は仮面ライダームラマサへと姿を変えた。

「それじゃもう終わりで良いか？」

開始数秒すら経たずに、アトミックがドライバーを取り出してそう告げる。

『ACCELERATOR DRIVE』

『FINAL DRIVE！』

「舐めやがつて……！」

『最終撃！』

端末を押して構える俺をよそに、アトミックがノーモーションで真上に移動。

瞬間的に移動したアトミックへ刀を当てようと、俺は地上で構える。

「ライダーボムキック」

またも覇気がない声でそう呟く。

ボムビットと共に、俺の所へ右脚を伸ばして急降下。

それも視認出来ない程の速さで。

「……」

「うわあッ！」

俺は大きく吹き飛ばされ、その一撃で変身が解けてしまう。

「あとはお前か」

俺を倒してから、次はグングニルに目を向けた。

『FINAL DRIVE！』

「ライダーマケナイ！」

『GUNGNIR FINAL DRIVE』

アトミックの周囲を、魔法陣が囲む。

「撃たれるより速く動くだけだ」

アトミックがそう笑い、光の剣を構える。

「ライダーインパクト……」

ボマーと同じ技。

地を蹴ってボムビットを纏わせた剣を、無防備のグングニルへと叩きつけた。

「ハワアッ！」

グングニルも一撃で変身が解けてしまう。

「……行かせてもらうぜ」

「待て……」

俺は手を伸ばす……しかしそれも虚しく、アトミックの身体が体育館の扉に近付く。

しかし。

「……！」

衝撃波を放ちながら、剣の怪人・改がゆつくりと地面へ降り立つ。

ライダーっぽくも見える姿……あれは明人が変身したものだ。

「あーそうか、お前がいたか」

「……」

明人は剣を構えて、黙してアトミックへと向かっていく。

第百九十一話

「お見事だ」

バスケットボールを投げて、リングの中へと見事シュートした青年に、知的な雰囲気を漂わせる女性が拍手してそう告げた。

女性の名前は、戸間董。

自分とは学部の違いで、彼女の友人と共に大学内で知らないものはいないとか。

それはそうだ。

何せ、彼女は若干十九歳の身にして、何やら高度な研究をしている程の天才なのだから。

彼女のしている事など青年には理解出来ない世界だが、それが凄い事だけはよく分かる。

「……ありがとうございます」

青年は緊張した声で、董の称賛に対して礼を言う。

董のような人物に評価してもらえる事も嬉しかったし、何より彼女は美しかった。

まともに目を合わせる事も、青年のようなバスケット以外取り柄のない青年には厳しい事だ。

「またここに、見に来てても良いかい？」

「……え？」

「僕も最近スランプ気味でね、気分転換出来る何かが欲しいんだ。協力してもらえるか？」

「……」

青年は言葉も出ないぐらい嬉しくなり、下を向いて返すべき言葉を探す。

「やはり見られるのは恥ずかしいかい？ では残念だが、別の所へ

……」

「まっ、待って！」

青年は手を伸ばして止める。

「俺のバスケットで良ければ、是非……見てってください」

「げほっげほっ！」

一号は、咳き込みながら目を覚ました。まだ重い身体を少し持ち上げ、近くにある電話の子機まで手を伸ばす。

眠る前に出て行った明人は、美咲は……裕太は、どうなったのだろうか。

「はあ……はあ……」

少し動くのでさえ、息が切れて辛い。

もう生きられる時間がないというのが、それだけで一号の心に伝わってくる。

「董……」

さつきまで見ていた夢の中に、董がいた。

一号が人間だった時の記憶なのかは定かではないが、あの董の姿は、今までの一号の記憶の中にはなかった筈だ。

それに、自分が元々バスケットボールを嗜んでいた事も。

「……」

董といたい、そんな気持ちが今の自分の中で強くなっている気がする。

自分が死に近付いているからなのか……それは分からない。

けど、この身体でその願いを叶えるのはとても……。

それに明人には否定されたが、今の自分には罪を償う事が最優先だ。

裕太や美咲の為に出来る事をしなくては……。

「行かないと……ッ！」

一号はサックドライブを手にする。

このシステムは負傷がある程度軽減する機能が備わっている筈。ならば……この病に侵された身体もあるいは……。

『SMASH DRIVE READY?』

「……変身」

一号は構えてから、息を切らしつつそう呟く。

第百九十二話

いとも簡単に俺とヴィーダを倒したアトミックでも、やはり明人相手には少し手こずっていた。

明人の剣の怪人・改と仮面ライダーアトミックでは突然変異体としての能力の有無という明確な差があるが、明人の剣技は能力の無さを補うには十分なものだ。

「どうした……さつきより剣が雑だぞ」

「おっと、六角美咲と戦いた過ぎて焦りが出ちまったみてえだ」

仮面の下で笑みを浮かべるアトミック。

「何を企んでいる……」

「さあな、ただ一つ言えんのは、あいつの言う事聞かねえとならねえつてだけだ。俺の為にもな！」

やけに興奮した様子で、アトミックが手から火炎を放つ。

しかし明人はそれにも構わず、剣でそれを振り払い、そしてアトミックを斬りつける。

アトミックは何とかそれを回避し、構えなおす。

「戦いに集中しろ。六角美咲の所に行きたければな」

「ああ……そうさせてもらうぜ」

アトミックがそう呟いて、もう一度駆け出す。

明人ももう一度それに対して、地を蹴る。

※※※

「外が騒がしいですわね……」
「……」

美咲がそう呟くと、治療の手伝いをしていた成音が戸を少し開けて外を見る。

「あれは……!」

「どうしましたの?」

「明人と二号が……戦ってる」

「……! 遥さん!」

「もう少しだ、もう少し待ってくれ!」

遙がそう叫ぶ。

「明人さん……！」

※※※

調子を取り戻したアトミック。

今度こそ掌を返すように、明人の剣を見切り始める。

「やるな……」

「なーに、お前の受け売りだ。冷静になったら、お前の剣を見切れるようになっただけさ」

「……！」

明人の剣の速度が上がる。

最早人間の動きではなくなっていたが、アトミックは構わずそれに対処し続けた。

「今度はこれでも試してみるか……」

アトミックが端末を操作し、ボタンを押す。

そして端末を取り付けた。

『INFINITY DRIVE』

また無数のボムビットが出現する。

明人が既に見切った経験のある技。

「……！」

それでも明人は警戒を怠らない。

「こういう時でも警戒を怠らないか、でもだからこそお前は面白くて面倒な奴だ」

アトミックの背後にあるボムビットが一斉に放たれる。

明人は剣を構えて準備する……が。

「……か」

唐突にそう呟き、明人が背後に振り向く。

そこには明人の読み通り……瞬間移動したアトミックの姿が。

「バレたか……でもこれじゃあ見切って斬る事も出来ねえよな？」

「……！」

明人が動揺する。

何とかして回避しようと急降下を試みるがもう遅い。

ボムビットは放たれ、アトミックが動揺した明人を蹴り飛ばす。

「ここまでか……！」

死を覚悟する明人。

その前に……一つの影が。

影はボムビットを全て受け止めて、爆発に飲み込まれ消えていく。

「ぐあっ……」

地面へと叩きつけられる明人。

アトミックが明人に命中しなかったというのに、妙に嬉しそうな雰

囲気へ変わる。

まさかあれを受け止めた影は……。

「ふう、今度ばかりは流石に痛すぎましたわ……」

「……」

一つの声が、倒れる明人の近くから聞こえる。

明人の目の前に、彼女の姿があった。

「大丈夫ですか？ 明人さん」

「六角……美咲……」

第百九十三話

「待ちくたびれたぜ……俺の最高の敵」

アトミックがそう呟く。

「……良い響きですわね。そこまで褒めてくれたのは、貴方が初めてですわ」

「……ふっ」

「でも、それも今日で終わりですわ。貴方とは何度も戦いましたが、それもここで……終わらせますの」

「そうだな。お前はここで殺す。俺の全力で」

「いや、違いますわ。私が勝ちますの」

ボマードライバーをベルトから取り出す。

いきなりスキャンボタンを押し、『ALL WEAPON』と書かれたカードを読み取る。

『ALL WEAPON DRIVE READY?』

「ハイパー超変身ですわ!」

叫んでから、バックルに取り付ける。

『COMPLETE』

美咲の周囲を複数の武器が取り囲み、一周してから美咲に吸い込まれていく。

美咲はその姿を、仮面ライダーオールウェポンボマーへと変えていった。

「……」

ボマーは仮面の下で目を閉じる。

相手は今まで、何度も自分に立ちはだかった最強の敵。

その人物との最後の戦いだ。

絶対に勝つ。そう決めて、ボマーは叫ぶ。

「命、燃やしますわ!」

※※※

ボマーとアトミックは二人とも、消えるような速度で互いの距離を詰め、第一撃を当てようとバットを……光剣を振るう。

初撃は、互いの得物に防がれて終わる。

そこから放たれたボマーの連続攻撃を、アトミックがボマーをリスケットするかのようにわざと避けずに光剣で防ぐ。

ボマーもアトミックと攻防が入れ替わった後、アトミックの光剣をバットで防ぎ続ける。

「はあッ！」

火柱がアトミックの右手から放たれた。

ボマーは何とかバットで防ぎながら進んでいく。

瞬間移動並みの速度で再びアトミックの懐へ。

そして、バットの柄のボタンで武器を切り替える。

『SPECTER SWORD』

ムラマサの固有武器スペクターソードへと姿を変えたバットを、ボマーは振り下ろす。

「ふっ……」

アトミックは雷を生み出し、ボマーの脚へと叩きつける。

「ぐあッ！」

「はあッ！」

「ぐあああッ！」

光剣がボマーの腹をなぞった。

その勢いで吹き飛ばされ、地面に突き刺さる。

「まだですわ……」

すぐに起き上がるボマー。

スペクターソードを構え直し、ボタンで今度は違う武器に。

『FLAME SHOWER』

火炎放射器怪人の火炎放射器に変えてから、ボムビットの方も武器を変える。

『WEAPON DRIVE FLAME SHOWER』

左手に吸い込まれるように、ボムビットから変化した火炎放射器が回転しながらボマーの左手へ。

「……！」

二丁拳銃状態になったボマーが、アトミックに砲口を向ける。

第百九十四話

火炎放射器に持ち替えてから、互いに遠距離戦闘へとシフトし始める。

ボマーは火炎弾を砲口から、アトミックは手から炎を放ち、アクロバティックな動きで当てようと試みていた。

勿論、この戦闘に切り替わってからお互い1ダメージも与えられていない。

最初に攻撃を当てたのは、

「これならどうだ……?」

アトミックだ。

両手から反則級の出力の雷撃を放ち、ボマーの動きを封じた。

「くっ……」

「はあッ!」

そのままアトミックの手から火炎弾が放たれるが、今度は何とか回避する。

回避した上で、次はボマーの火炎放射器から火炎を放つ。

見事にアトミックへと命中し、武器を切り替える。

『SCHAITEL SCHLEEGER』

『WEAPON DRIVE METAL SWORD』

右手を基本の金色のバット『シャイテル・シュリーガー』、左手のボムビットを剣の怪人の武装『メタルソード』に変えて、構えなおす。

オールウェポンの特性は、記録している武器の模倣や必殺技による怪人呼び出しが出来るだけでない。

一つに記録している武器……正確にはその武器の力を持つドライバーの持ち主の身体能力が一部上乘せされる事。

そして二つ目に、ドライバーの持ち主が抱く美咲のイメージがそのままボマー自身の力として上乘せされる事。

今のボマーの武装は、美咲自身の力に明人の力を一部プラスした究極状態と言ってもよい。

「これが私の全力ですわ!」

「お前はすげえな……そんな風に慕ってくれる奴がいるなんてな。でも、そんななくても俺は俺自身の力でお前を叩き潰す」

黒い光を放ちながら、瞬間移動並みの速さでボマーとの距離を詰めていく。

ボマーも構えながら、身体に少しだけ力を込め、緑色の光を放つ。

「見えますわ……!」

「のあッ!」

アトミックの光剣の動きを見切り、ボマーはバットで受け止めてから、アトミックの腹を斬りつける。

「はあッ!」

そこから逆転していく。

両手の武器による連続斬りでダメージを与えていき、武器を交差させてから相手を十字に切り裂く。

「ぬあッ!」

「これで終わりにしますわ……!」

端末を操作し、バックルに取り付ける。

『FINAL DRIVE!』

金色の光と銀色の光を両方の武器に纏わせ、そのままアトミックとの距離を詰める。

「ライダーツインストリーム!!」

美咲が一番勝ちたいと思うライバルが読んでいた本に出てきていた感じの、二本の武器による十六連撃。

それっぽい感じでアトミックに叩きつけ、最後の一撃は銀色の剣による刺突。

見事にアトミックの脚を貫き、大ダメージを与え相手の変身を解除させた。

第百九十五話

変身が解けて、白い髪の福沢裕太の姿へと戻った二号が「馬鹿な……」と呟きながら地面に手を付けた。

「俺が負けた？ 嘘だ……こんなのあり得ねえ。あり得るわけねえよ」

いつもの余裕そうな態度を崩し、目の前の現実を否定しようとする口にする。

ボマーも必殺技の使用で強制的に美咲の姿へ戻る。

解除の後、ドライバーの液晶にブランクタイムが表示された。

「俺は何の為にここまでしたんだよ。俺はこの力でお前達を倒す為に、自分の身体を捨てて、お袋の犬になる真似までしたんだぞ！ なのに何故勝てない！ どうしてお前に負けたんだ！」

声を荒らげ、地面に拳を叩きつけた。

「一回の勝負の結果だけでは、何の意味もありませんのよ」

「……は？」

「何度も戦い、そして負け続ける……その先で勝利を掴む。私の勝利は、今までの戦いで積み重ねたものの勝利ですわ」

「……何度も戦って、負け続ける？ 抜かせ。お前は甘い。甘すぎる。お前は相手を殺さなかったからいいかも知れねえが……俺は違う。俺は負けた奴に二度とチャンスなんて与えねえ。負けた奴は、一生負けたまま死なせてやる。それが俺のやり方だ。そんな奴が相手でも、お前はそんな事言うのか？」

「……それでも、私はそう言い続けますわ。貴方に負けて腕を失っても、脚を失っても、例えこの命を奪われても……自分がもしもう一度動けるなら、私は何度だって勝ちに行きますわ！」

二号は笑う。

「ふふ……はは……」

「？」

「お前馬鹿だな。でも……すげえ根性あるんだな」

「その通りですわ。私もそれを誇りに思ってますの」

美咲も笑い返す。

「二号さん、お願いがありますの」

真面目な顔に戻り、頼み込む美咲。

「なんだよ」

「私と一緒に、董先生を止めて欲しいですわ」

二号が目を丸くする。

「俺と一緒に？ お前……正気か？」

「正気ですわ。私と貴方はもう敵じゃない。もう一度戦う事だってあるかも知れないけど、次戦う時は憎み合ったり何かを奪い合ったりする戦いじゃありませんの。きつと、仲間としてお互いを高め合う為に戦えますわ」

「仲間として……ねえ。もしそう出来たら、楽しいかもしんねえな」

「楽しいですわよ！ 絶対、ぜったい！ 勿論、次だって私は負けませんわよ！」

「そうか。まあ、俺だって次は勝たせてもらうけどよ」

「はいですの！ これからよろしくお願いしますわ」

「へへっ……」

二号は笑顔で握手を求める。

美咲も、それを笑顔で握り返そうと手を伸ばす。

「——だから、甘いっつってんだよ」

第百九十六話

急に二号は、その手で美咲につかみかかった。

「美咲！」

裕太が叫ぶ。

「チャンス与えてくれるんだろ？ だったらもつと遊ぼうぜ。どっちかが諦めるまでよ」

二号がそう言いながら美咲のポケットから取り出したのは、ハイドロフォームカード。

「待ちなさい……それをどうする気ですか？」

「こうするんだよー！」

美咲の腹を蹴り飛ばし、ドライバーを取り出す。

端末のボタンを押す。

『UPDATE DRIVE』

アップデート……つまり更新を意味する音声が入トミックドライバーから鳴る。

「これで俺は更なる高みへ行ける。お前が若干弱体化するのが残念だけれどな……」

笑みを浮かべて、カードを読み取る二号。

『COMPLETE』

アトミックへと姿を変えてから、水色の光に包まれ……眩く。

「ハイパー超変身……なんてな」

その眩きと同時に、まるで世界が止まったかのように……一瞬世界から音が消える。

後から遅れて爆風が巻き起こる。

変身の余波だけで、美咲達はその場から吹き飛ばされ……最初は目も開けられなかった。

やがて収まってから……その眼を開く。

そこにいたのは。

「……！」

仮面ライダーアトミック……なのだろうか。

だがその姿は、最早怪人と言われても納得出来るものだった。

「さあ……もつと遊ぼうぜ……」

※※※

ブランクタイムで変身出来ない美咲の前に、俺達三人が割り込む。

「ああ、そうか。あのフォームやった後は変身出来ないんだっけか」

アトミックが残念そうにそう呟く。

「……ならお前らをサンドバッグにして試させてもらおうぜ」

「こいつ……!」

怒りに任せて向かおうとした俺を、明人が止める。

「挑発に乗るな。俺が相手する」

「いやいや、三人纏めて来いよ。その方が俺も楽しいからよ」

「……!」

言葉の後、明人が変身し地を蹴って駆け出す。

「遅えんだよ」

剣の怪人・改の瞬間的な速度すら上回り、アトミックが明人の首を掴む。

『EXPLOSION DRIVE』

端末を操作し取り付ける。

だがあの機能は、自分ごと爆発する筈だ。

確かにアトミックにもあの能力はあるが……。

「はあッ!」

爆発したのは、右腕だけだ。

右腕と一緒に明人が弾け飛び、死にはしなかったものの大ダメージを受け変身解除。

「ぐあっ……」

「さあて、次はお前らか」

刀と槍を構える、俺とグングニル。

だが……。

「ぐっ……」

「エッ……」

俺とグングニルの意識にすら入らぬ間に、既に近付いていた事にも

気付かないまま俺とグングニルの腹には、奴の拳が突き刺さっていた。

それに、あの拳の振り方も……彼にとってはジャブに過ぎない。

それなのに……。

「うわあッ！」

俺達は、その一撃だけで変身が解けてしまった。

第百九十七話

「これが……こいつの真の力か」

戦いは五分足らずで、相手の勝利に終わった。

最早、勝てるか勝てないかの次元ではない。

明人を一撃で倒す程の力なのだ。

こんなもの……オールウェポンがあっても勝てるかどうか……。

「ふっ……」

笑みを仮面の下で浮かべたアトミッククが変身を解き、二号の姿へ。

「六角美咲、お前にチャンスをやろ。一週間だ。一週間で、お前達四人を俺と釣り合うくらいに強くするんだな」

「何を言ってますの……私はまだ貴方と戦っていませんのよ」

「分かるだろ。例えもう一度オールウェポンの力を使おうと、今の自分じゃ俺に勝てねえってさ」

「……ッ！」

あの美咲が、それを否定出来ずにいた。

「だから時間をやる。お互い少しでも楽しめるようにな」

「二号さん……」

「お前の真似をしてみただけさ。一度負けた奴にもチャンスをやろんだろ？ だから気まぐれに一度だけチャンスをやろ事にしたってだけだ」

二号が言う。

「ない知恵を絞るんでも、無駄な努力をするんでも良いぜ。一週間やるよ。ただし、それ以上は与えねえ。もしそれでも俺に勝てないようなら、お前ら全員皆殺しだ」

「……」

美咲は拳を握る。

そう告げて去ろうとする二号に対し、止めた。

「待ちなさいな」

「まだ何かあんのか？ 悪いけど延長ならしねえぞ」

「貴方は何がしたいんですの？ 貴方は負けた人にチャンスを与えな

いと言った。そんなの……何が楽しいんですの？ 競う相手がいな
い世界でも作るつもりですか？」

「多分そうだと思うぜ」

二号が笑みを浮かべ、そう答える。

「俺が欲しいのは、俺が全てのものに負けないっていう事実だ。自分
の事を弱いと言う奴さえいなくなれば、この世界はもつと楽しい。お
前も頂点に立ちたいんだろ？ なら……俺と同じじゃないのか
？」

「……違いますわ！ 頂点に立つても、人は常に上を目指し、進化する
もの！ 競い合う相手も、否定する人もいない世界では、それ以上の
進化なんて出来ませんわ！」

「その甘さが、今こうしてお前の首を絞めている……それに気付いて
んのか？」

「……ッ！」

「その甘さが無ければ、お前は俺の作戦通りに行く事は無かった。最
初から、全部この為にお前を騙したんだよ。お前は自分が強くなる為
に、敵でさえも戦ったら構わず仲間にするような奴だと知ってたから
な」

美咲は最早反論する言葉を失っていた。

いや、最早考えようとすらしなかった。

どう言い訳しようと、それが自分の負けた理由なのだから。

「……もし俺に勝ちたいなら、容赦なんてする必要はないぜ。そうで
もしなきや、お前は俺の足元にも及ばない」

そう告げて、二号がその場から姿を消した。

美咲はそれを見届けてから、思い切り拳を地面に叩きつける。

第百九十八話

「ほらよ、これで良いだろ?」

二号は董の研究所に戻つてすぐに、ハイドロフォームカードを董に見せる。

「……」

だが董は不満げな表情で対応する。

「僕は、君に何と言つたか覚えてるかい?」

「ああ……。ハイドロフォームカードを奪つた上で、オールウエポンのカードを破壊、その上であの場の全員を塵も残さず全員殺せ……。だったか?」

「そうだね。でも、君はその内の一つしか達成していない」

「お袋よお、俺がそんなつまんねえ事すると思うか?」

二号が笑みを浮かべて告げた言葉に、董は不快感を全面に出した表情で答えた。

「……はあ、君の願いを叶えてあげたんだから、これからは完璧にこなしてくれると思つていたんだがね。どうしてなんだい? 君は自分が強いという現実さえあればそれでいいのではないか?」

「ただただ力だけあつても、それが強いかどうかは試さなきゃ分かんねえだろうが。あいつらが無駄な努力をして、それでも俺が勝つ。それによつて、こいつの……。いや、俺の力が本物だつて事が分かる。お袋みたいな奴には一理解出来ねえと思うけどな」

「どういう意味かなそれは」

「分かつてる癖に……。アンタは心の中では負けを認めてる。だから自分一人の力じゃなくて、俺らを使って狩野遙を消そうとしてるんだろ? まともに研究したつて勝てねえから」

「……」

彼の……。いや彼女の言う事は事実だ。

だからこそ、董は耐え切れずに反論する。

「それは君とて同じだろう? 昔の肉体のままではあれ以上強くなる事が出来ないから、僕の力を借りたのではないのかい?」

「……ふっ」

「何がおかしい？ 君も僕も同じ穴の貉……そうじゃないのかい？」

「ああ、いやいや。そういう俺も言う資格無かったなって笑っただけだ」

「……君、人を舐めるのも大概にしたまえよ。誰のおかげで、自分の願いが叶ったと思っっているんだい？」

「だからアンタには感謝してるし、アンタの言う事を一部聞いてやってるだろ？ でも俺はつまんねえ勝ち方はしたくねえんだよ。安心しろ。俺は人の力借りた上で負けるなんてだせえ真似しねえよ」

「それで負けたら、どう責任を取るつもりだい？」

「……知らねえな。俺は別にアンタがどうなろうが知ったこっちゃねえからな」

董は完全に後悔する。

彼女にあの身体を与えたのは失敗だという事を。

でも……今なら。

「どうやら、僕が無理矢理にでも君を矯正するしかないみたいだね」
「……」

「悪いけど、君に一度痛い目を見てもらうよ。僕の勝利の為にね」

「能力使えば操作も妨害出来るって知ってるか？ って聞いてねえか」

「超化！」

『COMPLETE』

董の身体をオーラが包み、力を与えた。

「……良いぜ。やれるもんならやってみな」

ベルトを装着しようとしている二号に向かって超スピードで飛び出し、拳を勢いよく振るう董。

二号はそれを間一髪で回避し、端末を操作。

『BOMER DRIVE READY?』

「変身」

左拳を握りながら、端末をベルトに装着。

『COMPLETE』

「ふっ……」
「二号はその姿を、仮面ライダーアトミックへと変えた。」

第百九十九話

アトミックは一度も攻撃を仕掛けてこない。
が……寧ろ追いつめられているのは董だった。

相手は未だハイドロフォームを使用していない。

未使用の状態であれば、董が使用しているベルトはアトミックが持つそれと互角の筈なのに、太刀打ち出来なかった。

「はっ……」

董は息を切らす。

「どうした？ それで終わりか？ なら、大人しく諦めな」

アトミックが光剣を向けた。

董はそれに対して眩く。

「そうやって僕のプライドを傷付ける……。僕は誰かに命令されるのが嫌いなんだよ」

「馬鹿だなお袋は。俺の方が強いんだ。本来なら俺の命令をアンタが聞くのが筋の筈だろ」

「ほざいている。今すぐその口を利けなくしてやる」

「追いつめられている分際でイキってんじゃねえよ」

アトミックが一瞬にして距離を詰め、拳で董を勢いよく吹き飛ばした。

「お袋さ……さっきまでので全力？ だとしたら、残念だけど俺は半分も力出してねえぞ」

「……ッ！」

董は屈辱感に耐えかねて声を漏らす。

「良い顔だなそれ。もっとプライドへし折ったらそれよりすげえ顔になっったりするのかわ？」

「黙れ！」

飛び出し、董が拳をアトミックに振るう。

直後。

アトミックの前で見えない障壁が生まれ、拳は防がれる。

「はいはい。そんな攻撃良いからさ、もつと派手なの来いよ。ま……期待はしてねえけどな」

「くっ……うわああッ！」

叫びながら、次は蹴りを入れようとしたが。

「ぐあッ……」

距離を詰められた後拳を叩き入れられ悶絶する董。

「これで終わりだ」

『FINAL DRIVE!』

端末のボタンを押したアトミックがジャンプし、ボムビットを脚に集める。

「お前に負けるわけにはいかない……」

負けじと董も、最後の悪あがきをする。

端末を取り出し、ボタンを押す。

『FINAL DRIVE!』

董はゆつくりと宙に浮いてから、右足を前に出し。

「はああああッ！」

唸り声を上げながら、アトミック目掛けて飛び蹴りを放つ。

「ライダーボムキック……」

一方アトミックも、董目掛けてライダーボムキック。

ボムビットと共に、右足を前に出して急降下。

衝突するタイミングはほぼ同時……。

しかし。

「へっ……なーんてな」

ボムビットがアトミックの脚から離れ、放物線を描きながら、董の所へと飛ぶ。

飛び蹴りと見せかけたアトミックは地面に着地。

「うわああッ!!」

董はボムビットをダイレクトに浴びて、大ダメージを負う。

超化が切れ、地面へと叩きつけられた董に、アトミックは変身を解いて近づく。

「ざまあねえな」

笑みを浮かべてそう告げる二号。

董のプライドはほぼ破壊され、反論する言葉さえ見当たらない。ただ屈辱という言葉が、董の頭を支配し……身体中に痒さのような何かを覚える。

「でもこれで分かっただろ。お袋は、俺が何をしようと言えねえ。もうお袋なんて必要ねえんだよ」

「……」

命乞いをすべき場面かも知れない。

けど董には、それが出来なかった。

「まあ、それでもこの戦いはお袋が望んだ事だ。この戦いが終わるまでは生かしてやるよ。でも……」

董の懐から、脳波制御用のスイッチを取り出す。

二号の分だけではない、一号のも含めた全員分だ。

「ふんッ！」

二号はそれを全て破壊する。

「これで俺を縛れねえな。あとから作る事は出来ねえだろ？」

「……ッ！」

「じゃあな。一週間後を楽しみにそこでじっとしてな」

二号がそう告げて、その場から姿を消した。

第二百話

「なんてことだ……！」

遙が拳を机に叩きつけ、顔を青くする。

「すみません……私の力不足のせいでしたわ……」

「力不足……か。違うな六角美咲」

明人がそう美咲に告げた。

「明人さん？」

「あの時のお前は人が良すぎた。油断せず……相手の出方をきちんと伺えば、ハイドロフォームカードを奪われずに済んだ筈だ」

明人の言葉に、美咲はそう頷く。

「おい、今人を責めてる場合かよ。貴重な戦力を奪われたんだぞ！」

裕太がそう明人に叱責。

「ああ、そうだ。だからこそ言った」

「……！」

「良いか福沢裕太。戦力を失った今、もうこれ以上油断出来ない。次戦う予定の一週間……相手の性格上、それも嘘という事も大いにあり得るが、仮に一週間あるとして、その一週間でどれだけ実力を上げられる？ それに上げられたとして、今のような油断をされては、勝てるものも勝てなくなる」

「……」

明人の言う事は正論だ。

裕太は返すべき言葉を失い、俯く。

「勝てる方法はあるんですか？ 遙さん」

成音の問いかけに、遙は首を振る。

「オールウェポンでさえ、アップデートで対抗出来るのは……せいぜいハイドロフォーム未使用のアトミックのみ。ハイドロフォームを奪われては、もう勝ち目がないな。それに、強化フォームを新しく作るにしても……このメンバーの記憶や戦闘能力のデータを回収する方法ではオールウェポンと同じものしか作れない」

「……」

成音が落ち込む。

「ホウホウアルヨ、ミンナ」

意外にも、長く続きそうな沈黙を破ったのはヴィーダだ。

そう告げてから、美咲を見て言う。

「ソウデシヨ、ミサキ」

美咲はその言葉で、ヴィーダの言いたい事を察する。

「……それしかありませんわね。時間は限られてますけど、もうこれしか手段はありませんわね」

「ウン」

その方法は、どんなフォームチェンジにも勝ると……美咲は知っていた。

「特訓ですわ……皆さん」

ヴィーダの言葉を、美咲が代弁する形で告げた。

「残された時間で、一番効率よく強くなる方法はそれしかありませんわ」

「確かにその通りだ。だが……どう特訓するのかを決めているのか？」

明人の問いかけ。

美咲は少し迷うが、でもこれしか答えようが無かった。

「まだ、決めてませんの……」

「具体的な方法がないままでは、強化フォームを作る以上に不毛な時間を過ごす事になる。もう少し考えるべきだ」

美咲は言葉を失う。

「ヴィーダ、お前もそうだぞ。思いつきだけで勝てる程、相手の実力は甘くはなくなつた。第一……まだ誰もまともな一太刀すら入れられていない。それを考えた上で話すべきだ」

「ゴメン……」

ヴィーダが俯いたのを見て、成音が言う。

「あのさ、取り敢えず……今日はもう解散しない？ 皆疲れてるし、具体的な案を考えようにも難しいと思う。一応相手は時間を与えてく

れたんだから、今日の夜と明日一日を考える時間に充てようと思うんだけど良いかな？」

「……」

それが妥当だと言わんばかりに、明人は何も答えず目を閉じた。

「それもそうですわね」

「ナリネ、メイアン！」

美咲とヴィーダが同意した。

その後ひとまず解散となり、各々が勝つ方法とその為の特訓方法を考える事に。

第二百一話

俺は解散後、ひとまず自室に戻る事にした。

俺が負った傷は大した事はないが、疲労感が半端なく、少々車の運転をするのがきつかった。

車を降りてからエレベーターで自室がある階まで上り、歩いて扉を開ける。

一号に鍵を預けた故、勿論俺は持っていないし、鍵も開いていた。

「二号、ただいま……」

俺は多分今も寝ているであろう一号に声を掛ける。

だが、玄関で見たものに思わず目の色を変えた。

「……！」

一号が血を流して倒れていた。

誰かに刺された……という感じではない。

身体に外傷はなく、ベルトをした状態で口から血を吐いて倒れている。

「一号！ しっかりしろ、一号！」

幸い、浅くはあったが呼吸はまだしていた。

だが身体がやや冷たい……。

俺達は彼が風邪を引いたと聞いて、無理をせず休むよう告げて出て行った。

だが……どう考えてもこれは風邪なんかじゃない。

「急いで連れてかないと……」

俺は彼を背負って、来た道を走って引き返す。

※※※

車に乗せてから、俺は一号を遥の所へと運び。

寝台の上に寝かせてから、検査を行う。

「……」

「どうですか？」

遥の表情は険しく……俺の問いかけに対して、顔も向けずにこう告げた。

「この状態は厳しいな。もう一か月も持たないだろう……」

「そんな……」

「お前の方は、まだ何ともないのか？」

遥に問いかけられて、少しばかり自分も不安になる。

取り敢えず今の所は……。

「取り敢えず俺は大丈夫です」

「……。こいつはお前の使っている身体よりも前に作られた。お前の身体にも、もしかしたら近いうちに変化が来るかも知れない」

「……やっぱり、死ぬんですか？ こいつも……俺も……」

「そういう事になるかもな……」

遥が諦めた表情を浮かべる。

「美咲にこの事は伝えるつもりなのか？」

「……」

俺は少し迷ってから言う。

「あいつは俺達の寿命が短い事を知っていた。でも、絶対に俺を死なせないと言っていたんです。だから、この事を知ったら、絶対に優先順位を見失うかも知れない。自分で決めた事も守れないなど許せないって……」

「まあ、そうだろうな」

「だから、戦いが終わるまでは何としてもこの事は隠します。あいつの為にも……」

「……そうか」

遥が静かにそう答える。

間を開けてから、もう一度口を開く。

「私の知っている限り、どんな方法を使おうとも……今はその肉体の寿命を本来のそれより長くする事は出来ない。必死に探している美咲には悪いが、それが現実だ」

「……」

「ただ、今死なずに済む方法ならなくはない」

第二百二話

「今死なずに済む方法ですか？」

「ああ。問題を先送りにするだけに過ぎないし、解決出来るかどうかも分からないが、未来に賭ける方法だ」

「……」

「勿論、個人でこれを行うのは色々法律面で問題があるが、お前達の肉体の事を考えれば止むを得ん。私が提示する方法は、人体冷凍保存だ」

聞いた事のある方法だ。

確か数年前にも、癌で死期が迫っていた子供に対して処置を行ったとか何とか。

しかしあの技術は、まだ解凍後の肉体に対する影響などもあって、まだ一人の解凍も行われていない。

「冷凍保存……」

「この方法をやるには他にも問題があるがな。解凍方法もそうだが、そもそも私が生きている間に治療法が見つかるか。見つからなければ、最悪凍結されてそのままという可能性もあり得る」

「……」

「だから、それから美咲ともう一度会えるかどうかも分からない。慎重に選んでくれ。戦いが終わった後で残された時間をその身体で過ごすか、未来での再会に賭けるか」

俺はそう言われて、少し考えた。

董と生きる事を望む一号がどちらを選ぶか、絶対に俺や一号を死なせないと決めている美咲がどちらを選ぶか。

前までの俺なら、迷わず一つに絞れたかも知れない。

でも今は違う。

一つの判断で、俺は誰かを悲しませてしまう。

少なくとも、これを今決めるのは無理だ。

「すみません、今これを選ぶのは難しそうです」

「そう言うと思って、一つ提案がある」

「提案ですか？」

「お前の持つ脳波制御能力で、その肉体の中に一号の脳波を入れる。そうすれば、ひとまず一号の肉体だけを冷凍保存出来る」

「……」

確かに、合理的な判断だ。

だが……一つ問題もある。

「一号がそれで良いのか、確認してからでも大丈夫ですか？」

「……問題ない」

掠れた声が聞こえる。

一号のものだ。

「一号！」

「話は聞いていた。福沢裕太、俺の事は気にせず……お前が決めてくれ」

苦しそうな声で、何とか途切れ途切れの言葉を発する一号。

「けど……」

「良いんだ。時間が無いのだろうか？」

笑みを浮かべてそう答える。

「……分かった」

俺は色々思う事があるながらも、遥に告げた。

「遥先生、お願いします。冷凍保存の準備を……お願いします」

「……了解した。早速準備に取り掛かる」

「……」

「今から設備がある私の研究所に向かう。一日掛かるから、明日の夜にそこに来てくれ。あとでお前のスマホに位置データも送る」

遥はそう言ってから、体育館をあとにしようとする。

だが立ち止まって、俺に問いかけた。

「最後に一つ聞きたい。本当にお前は、美咲には戦いが終わるまで何も告げないつもりか？」

「……未来の話も、まず生き残らなければ意味がありません。だから、戦いが終わるまでは隠し通すつもりです」

「……そうか」

遙は今度こそ、そう残して去る。

第二百三話

遙が去ってから、俺は目を覚ました一号と会話していた。

「良かったのか一号、本当にこれで」

「……」

「俺の頼みを聞いたら、お前はもう董と会えないかも知れないんだぞ」

「……そっちこそ、もし俺が望む通りにしたら、お前の望みを全て絶つ事になるぞ」

「……」

俺はそう言われて何も返せなかった。

「俺は、自分で望んで……董の人形になった。そうなるとは知らなかったが、選んだのは俺だ。でもお前は違う。お前は董の人形の一体にさせられたんだ。考える時間すら与えられず、理不尽にも俺に殺されて」

「……」

「だから、せめて俺とお前のどちらかを選ぶなら……お前であるべきだ。俺は董の望みの為に生まれた人形だが、人間のお前には、お前を大切に思う仲間が沢山いるだろ」

一号は一度息を吐いてから続ける。

「……そいつらの為にも、お前は自分の未来を勝ち取るべきだ。それに俺の身体があれば、最悪その身体が死んでも、死ぬ前に脳波だけ保存しておく事が出来る。そういう贅沢な使い道だってあるぞ」

「……お前がお前なりに俺の事を考えてくれてんのは、その言葉で分かる。けど、仲間がいるのはお前もそうだぞ。せめてお前も生き残らせてやる……。美咲と一緒に、お前も生きろ」

「……裕太」

「だから、一緒に生き残ろうぜ。お前と董と一緒にいられる方法も、美咲はきつと考えようとしてくれる。俺も考える。お前だって、俺達の仲間なんだからな」

「……ははっ、ははは……」

「どうしたんだよ、急に笑ったりして」

「いや、あまり経たないうちにお前も変わったと思ったただけだ。お前が俺を倒しに来た出来事からまだあまり日が経っていないのに、もう昔の出来事のようにも思える。あの時のお前と今のお前は別人のようだと思うな」

「一号……」

「仲間……か。てつきりそう思ってくれてるのは美咲だけだと思っただが、お前もそうだったんだな」

「当たり前だろう？ つい二日前にそう言ったばかりだろ」

「……そういえばそうだったな」

「……」

「裕太、お前は知らないかも知れないが……俺はかなり前にお前から頼まれた事がある。董と生きる選択肢を選びたいなら、美咲と共に生きてみる。そして……自分の罪を償う為にも。お前は俺にそう言ってくれたんだ」

「……」

「俺の中には、まだお前の心が少し残っていたんだ。そいつが、俺にそう言ってくれた」

「そうだったのか……」

「だから、お前に俺の脳波を預ける。一緒に生き残り、美咲と共に生きよう。今度は二人一緒だ」

「……ああ。だけどその前に、一つやりたい事があるんだけど良いか？」

「なんだ？」

「美咲と二人きりで明日過ごしたい。もしかしたら、それが出来るのは明日で最後かも知れないからな」

第二百四話

俺は一号にそう告げてから、すぐに美咲の家へと向かった。

インターホンを鳴らすと、美咲ではなくおやつさんが出てきて、美咲なら今はいないと告げられ。

その後で公園に向かった時、彼女の姿があった。

「……」

もう始めてるのか、俺はそう心の中で呟いた。

明人に具体的な方法がないならやつても仕方ないと言われたし、成音にも今日と明日一日くらいは休もうと言われたにも関わらず、美咲だけは特訓を始めている。

「たあッ！」

サンドバッグに向かって、ライダーボムキックの構えで飛び蹴りを放つ。

木の枝と繋いでいたロープがブチッと切れ、大きな音を立てて、地面へとサンドバッグが叩きつけられた。

「はぁ……はぁ」

美咲は息を切らす。

頬についた汗を拭い、やや俯く。

俺はその場に拍手しながら近づいた。

「裕太さん？」

「よう」

「……どこから見えましたの？」

「ライダーキックしてたところからバッチリ見てた」

「そうですね」

「もしかしてまずかった……？」

「別に何も言ってませんわ」

その割には少し顔を赤らめていた。

そして何やら慌てた様子でサンドバッグを拾おうとしている所を、俺は呼び止める。

「なあ、美咲」

「なんですの?」

「明日久しぶりに俺と出掛けないか?」

「……! ど、どうして急に?」

「そういえばそうだ。」

俺……なんで最後に美咲と二人でいたいとか思ったんだろう。

確かに美咲は仲間だと思ってるし、俺の事を考えてくれてるのは嬉しかったけど、別に特に二人きりでいたいとか……。

というか、明日……最後に一人で遊ぶとかでも良かった筈だ。なんでもよりによってこんな危険物娘と一緒に思ったんだ……。

「あの……早く答えなさいな。男なら言うべき事はきっちり言いなさいな」

「うるせえ! 俺もなんでかよく分かんねえんだよ!」

「なんでかよく分からないのに来たんですの?」

「そうだ!」

「……はあ。まあ良いですわ。そこまで言うなら、私が貴方と出掛けて差し上げても良いですわ」

「お……おう」

「ただし条件がありますわ」

「条件?」

「ご飯奢りなさいな。あとツーサイドライバーとボルケーノバイスタンプを」

「おいおいご飯は良いとして何で玩具まで!?!」

「私を誘うならそれくらいすべきですわ」

「無茶苦茶だ……」

「どうしますの? 行きますの? 行きませんか?」

「やっぱやめようかな。」

でも、これが最後と考えるとどうしても断りづらい。

「なんでかは俺も分かんないけど。」

「分かったよ。行くよ行きますよ。だけど、俺の行きたい所にも付き合ってくれ」

「どんな所でも受けて立ちますわ。あ、ホテル連れていこうものなら

ぶっ飛ばしますわよ」

「自意識過剰過ぎてツッコミきれんわ！」

第二百五話

次の日の朝。

俺は一号の看病もしつつ朝食を食べてから、適当な私服に着替えて美咲宅へ。

ところが。

「……」

インターホンを押して、五分以上経つが……ドアが開く様子はない。

クソゲーのロードだつて五分はないぞ。

「もしかして今日に限って寝てるとかねえよな」

あいつが約束破るとは思えないけど……ここまで長いのは流石になんかあるな。

化粧とかはしないとか前言ってたし、なんだろ。

便秘か何か？

まあ何でも良いか。

流石にあと五分待つても来なかったら家に帰ってゲームでもやろう。

俺がスマホを見始めたところで、やっとドアが開き、彼女の声が。

「おはようございますわ」

「お前遅くないか……？」

「うるさいですわね。女の子の準備は時間掛かるものなんですわよ」

そう言いながら出てきた彼女の姿を見て、俺は驚いた。

何と彼女……確かに化粧こそしていないが割ときちんとした服で外に出て来た。

何というか、デートの時着そうな感じの服……。

あー、もう。説明難しくて語彙力消えたわ。

これは流石に時間掛かるわな。

「なんか凄い見えますわね。別に何もおかしくありませんわよ」

「別に見てねえよ」

そりゃそんな服でお出かけとか言われたらね。

適当な感じで決めた俺が馬鹿みたいになるじゃないか。

いや……もうどつちが馬鹿だか分かんねえな。

何ならこいつにも適当な感じで決めて欲しかった感あるぞ。

「ほら、早くしないと置いていきますわよ」

「……へいへい。っておい」

「どうしましたの?」

その服装で蟹股になってバイク乗るな。

てか……。

「お前無免許だったよな?」

「問題ありませんわ。ひとつ走り付き合いなさいな」

「やだー!」

事故りたくない。

「問答無用ですわ」

「ダレカタスケテ……」

※※※

無免許の割に中々上手い運転に驚かされたが、取り敢えずショッピングモールへ到着。

仮面ライダーを見ていた影響なのか?

「さ、着きましたわ」

「お前こんな運転どうやって?」

「実はもとか……いえ、昔ある人の運転をよく見てたんですわ
言い直しが気になったけど聞いてみるか。

「そいつはどんな奴なんだ?」

「今の私を創ってくれた人ですわ」

「もしかして、前話してくれた人?」

「そうですわね」

「……まさかとは思うけど、お前やそいつが中坊だった時か?」

「そうですわね」

おまわりさんこいつらです。

「もう流石に時効効きますわよね?」

「そういう問題じゃないだろ」

「さっ、ツーサイドドライバーとバイスタンプ奢って貰いますわよ」
「聞けよ俺の話」

第二百六話

そんなわけで、人の話をろくに聞きもしない無免許運転少女の仕様の如く後ろから歩いていたわけだが。

ただのお出かけに、何故かガチ装備で着ている少女の手にはその恰好に似つかわしくない仮面ライダーの変身ベルトとそれに使う感じのスタンプ。

「……次はどうしますの?」

「え?」

唐突に俺にそう振られ、困惑する。

「今回は貴方が誘ったんですわよ。まさかノープランとは言いませんわよね?」

そうだった。

なんか無茶苦茶な事ばかりで忘れかけてたけど、こんな無茶苦茶な事になったのは何故か残された一日をこいつと過ごす事を選択したせいだった。

要するに自業自得なわけだが。

帰って良いかな……?」

いや、でもそれ言ったら間違いなく怒って自爆しそうな気がするし。

「んじゃあ、服とか見に行く?」

「今適当に考えましたわね?」

間が長すぎてバレたか。

「はあ、貴方の事ですしそうだろうと思ってましたわ
いや俺の事馬鹿にしてんのか。

「それじゃあ一つ付き合っって欲しい場所がありますの」

※※※

そう言われて美咲と向かったのは、眼鏡屋だ。

ん……? 眼鏡屋?

「行きますわよ」

「あの……美咲さん」

「なんですの?」

「まさかこれまで奢らせる気じゃないよね?」

「いやそこまで考えてませんのよ」

「良かった」

度入りかなりの額するからな……眼鏡。

「そろそろこの眼鏡も変えようと思ってましたのよ」

「それいつから使ってた?」

「高校入学の前に買い替えて以来ですわね。そろそろ買い替え時だと思っただわ」

「なるほど?」

「一応お金貰ってますから、今日買い替える眼鏡探しますわよ」

「へいへい」

「あ、貴方もちゃんと選ぶの手伝うんですわよ」

「へ?」

「そうでないと来た意味がありませんわよ」

いや俺も選ぶの手伝うの……?

「俺こういうのあんま得意じゃないんだけど」

「何言ってますの? これが出来なきゃ貴方、彼女が出来た時に彼女の服を選ぶ事も出来ませんわよ」

「いや何で自分で決めないの? 何で彼氏に決めさせてんの?」

「貴方アホですか?」

「はあ!?!」

なんでアホ?

服くらい自分で選べよ。

「貴方は女心が分かる分らないの次元じゃないんですのね」

「うるせえこちとら童貞歴Ⅱ年齢だぞ」

「童貞でも分かる話な気がしますわよ」

「そうなのか?」

「……はあ、とにかく選びなさいな。貴方は女性の扱い方をちゃんと学ぶべきですわ」

「なんで年下のガキに女の扱い学ばにやならんのか」

「これが分からない。」

「うべこべ言わずにやりますわよね」
「はい」

第二百七話

そんなわけで眼鏡屋の中に。

視力測定とかをする前に、好きなデザインの眼鏡を探し始める。

「……」

「何か意見ありませんの？」

「いやこう言っちゃなんだけど、眼鏡の似合う似合わないどころか服の似合う似合わないもよく分かんねえんだよ」

「それを鍛える修行中ですよ。ちゃんと考えなさいな」

「はいはい……」

でもよく考えたら、俺はこの戦いで生き残れてもすぐに死ぬか、冷凍保存されてしばらくこの世界にはいない事になるんだよね……。

何というか、どっちにしても俺童貞のまま死にそうな気がしてならない。

果たしてこの修行も意味があるのか……。

「これとこれとかよさそうですわね」

早速美咲が自分で見つけたようだ。

俺が美咲の方を向くと、丁度彼女が眼鏡を外そうとしていた所だった。

「……」

やはり何度見ても、いや眼鏡を掛けていても思うけど……彼女は美人だ。

こういう時、やはり相手が普通の女の子ならドキツとするんだろうけど……。

いつもの素行で、フィルターが消える。

「何死んだ魚の眼でジロジロ見てますの？」

「いえ、何でもないです。早く着けてください」

※※※

一つ目は、いつもの丸いレンズの眼鏡ではなく四角い紫縁の眼鏡。

「どうですか？」

「違和感あるな」

「え？」

「なんつーか落ち着かない」

「じゃあこれはどうですか？」

次にもう一つ目の、縁なし眼鏡。

こちらと同じく落ち着かない。

「ダメだ」

「もしかして裕太さん、誰かが違う格好していると落ち着かないんですの？」

「そうなのかもな」

服ならまだいいけど、眼鏡はある意味そいつの顔の一部とも言えるし。

「仕方ないですわね……」

次に美咲が取り出したのは、美咲がいつも使っている眼鏡と同型のもの。

「これはどうですか？」

「……」

確かに落ち着く。

だけど……。

「美咲……」

「なんですの？」

「今の俺の言葉を聞いて、それ選んだのか？」

「えっ……確かにそうですわね」

「別に俺の意見聞かなくとも、好きな奴選べばよくないか？」

「……確かにそうですわね」

※※※

——えっ？ 私なんで裕太さんの気持ちに合わせたんですの？

私は私でちゃんと欲しいものがある筈なのに……。

※※※

「もしもし？ 美咲さん？」

「あつ、いえ。何でもありませんの。それより貴方、ちゃんと似合う奴を探しなさいな。落ち着かないからとかじゃなくて、私のイメチェン

に協力するんですわよ！」

「お前はまずその性格をイメチェンした方が良いと思うぞ」

「何か言いましたの？」

「そうやって爆弾取り出す癖をイメチェンしろっつってんだよ」

第二百八話

まあそんなわけでそれ以上の言い訳はなしで眼鏡を探し、何とか俺の中で暫定一位のものを選択。

美咲がその眼鏡を掛けた状態で俺の顔を見る。

「青縁……どうですかの？」

「似合ってると思うぞ」

選んだ理由は単純な話、俺の好きな色が青だからだ。

美咲の眼鏡がいつものじゃないと落ち着かない問題は解決していないが、俺の好きな色ならマシンな筈。

「それじゃあこれで眼鏡作りますわね」

「おう」

※※※

数時間程度で眼鏡が完成し、美咲はいつもの眼鏡姿で店の外へ。

時刻は午後二時。

「次行く所はどうすんの？」

「ホントに何も決めてませんのね……。まあ一応考えてますわよ」

そう言われて次に向かったのはゲームセンター。

前回太鼓ゲーや仮面ライダーのゲームで遊んだ店だ。

「ゲームセンターか」

「それじゃあ今回は裕太さんが遊ぶものを決めてくださいな」

「えっ、俺？」

「当たり前ですわ。流石にこれ以上は貴方が決めるべきですわよ」

「んーまあ、はい」

やっぱり一人で遊びに行った方が良かったのだろうか。

「……」

俺は取り敢えず遊ぶゲームを探して、美咲の前に出て歩く。

この前はよく見てなかったが、俺が高校生の時よりも、当たり前だが一つのジャンルのゲームにつきいくつものシリーズがある。

大学時代は勉強ばかりでゲーセンには顔を出さなかったが、俺が高校時代の全てを捧げたと言って良いあのゲームはあるのだろうか。

「……おっ」

見つけた。

俺が青春の殆どを捧げた格ゲーの筐体だ。

「このゲーム知ってますの？」

「ああ。俺の青春と言って良いくらいのゲームだ」

「そうですね……」

ナンバリングやタイトル画面こそ変わってはいたが、画面と筐体のコントローラーを見るとあの時の懐かしい記憶が蘇る。

学生時代、授業が終わるとよくゲーセンに行って遊んでいた。

あの頃は誰にも負けなくらい強かった自信がある。

「私とこれで勝負しますの？」

「えっ？ プレイ経験は？」

「ありませんわ。けど未経験のゲームでも、お供の貴方に負ける気はありませんわよ」

「言ったな？ 俺は昔こいつに全てを捧げてきたつもりだし、ニュービーに負けるつもりはないぞ」

「望むところですよ」

美咲がそう言って、筐体の対面へ。

俺はその席に座り、コインを入れる。

昔使っていたパスカードを読み込ませると、更新しますかの文字。

はいを押して、俺は真新しくも懐かしくも感じるキャラ選択画面を
押む。

昔よく使っていたキャラを迷わず選択し、俺は美咲との戦いに挑んだ。

第二百九話

美咲も中々筋が良く、俺が負けそうになった所がいくつもあった。だが何とか黒星を作らず、十戦目を終える。

「また負けましたわーッ！」

「よしッ！」

俺は年甲斐もなくガッツポーズを決めた。

昔勝った時と同じように。

「もう一戦やるか？」

「いえ……今回ばかりは負けを認めますわ……」

美咲ががっくりしながらそう呟く。

「なんだつまんないなあ……」

俺は少し調子に乗った態度で返す。

「でも次は負けませんわよ。いつまでもそんな態度させませんわよ！」

「悪いけどこれだけは負けるつもりはないぞ」

美咲と俺は笑みを浮かべてそう答えた。

その瞬間、ぐーと腹の音が鳴る。

「腹減ったな」

「そうですね」

「まあ見れば分かると思うが俺はノープランだ。お前何食べたい？」

堂々とノープランを宣言してから、美咲が腕を組んで告げる。

「久しぶりに大食いしたいですわね」

「大食いで……太ったら戦いづらくなるんじゃないか？」

「ふ、太ったりしないよう気を付けますわよ！」

「どっちなかにしろや……」

「う、うるさいですわ！」

美咲に背中を押される。

「お、おい！」

「早い時間帯に食べれば太りませんわ！ だから早く！」

「えーッ！ ちょつちよっ……」

※※※

美咲が一度行ってみたかったという大食い専門店で、今度は大食い勝負。

昔は大食いだったという美咲にはやはり勝てず、今日二度行った勝負は一勝一敗の引き分けとなった。

他に何かないかとも考えたが、もう夜七時。

そろそろ遥が提示したタイムリミットだ。

「ふーっ、明日から特訓をハードにしないとリバウンドしそうですわ」
妙に恐れているようだ。

まるで過去に一度激太りした事あるかのように。

「なんですの？ 私が太った所とか考えましたの？」

「いや何も言っただろねえだろ」

「ホントですの〜？」

「んまあ過去に激太りでもした事あるのかなとかは考えたけど……」

「ないないない！ ありませんわ！ それは違えますわ！ その記憶を絶版になさい！」

激しく動揺する美咲。

「はいはい……」

「まったく……こう見えても太らないようにちゃんとしてるんですのに……」

美咲は頬を膨らませてそうぼやく。

「ところで、この後どうするつもりですか？」

「家に帰るよ。明日から特訓で、しばらく帰れそうもないしな。それに、死んだら好きな事も出来ないかも知れないから、今日のうちにやりたい事をやっておくよ」

「そうですね」

「ああ」

何とかバレずに済みそうだ。

俺は悟られないように、彼女の家の近くで唐突にこう告げた。

「そろそろ解散しようか。明日から大変だろうし、お前も休んだ方が

「……待ってくださいな」

「……待ってくださいな」

第二百十話

「私、まだ聞いてませんわよ。貴方が何で今日私を誘ってくれたのか」
「……」

心の中を見ようとするような態度で、美咲は俺を見据える。
それでも何とか、最後まで誤魔化すのをやめない。

「戦いで生き残れるかどうかも分かんないし、もし死んだら今日が最後の自由時間だろ。その時間をお前と過ごすのに選んだ。それだけで十分だろ？」

「今日が最後……私がいる限りそんな事になんてさせませんわ。自分の身体が動く限り……いや、動かなくても、自分のしたい事に妥協なんてしませんわよ。私がそういう人なのは、裕太さんが知ってる筈ですわ」

「……」

普通の人がこう言ったら、間違いなく暴論だ。

だけど……彼女が言うと言得力があり過ぎる。

だって実際に、彼女は何度も死んだ。

本当に動かなくなった時も、仲間の力ありきとは言え、蘇った。

その時確信した。

彼女は死なない。そして、絶対に何があっても諦めない。

でも……今不安なのは彼女の事ではない。

自分自身。

「もしかして、寿命の事……気にしてますの？」
「……」

俺はそう言われて、凶星を突かれたような顔しか出来なかった。

何とか誤魔化そうとしたが、もう遅い。

「そうですね。でも、どうして急に？ 遙さんに、そう言われたんですの？」

「……それもある。けど……」

俺は諦めて、白状した。

これ以上、彼女に嘘を吐き続けるなど無理だった。

「昨日、一号が調子悪いつて言つて来なかつたら?」

「……」

「俺、解散してマンション戻った時に見たんだ。血を吐いて気絶していたあいつを」

「っ……………」

「遥先生の所に連れてつて、俺は先生から聞かされたよ。一号の寿命はあと一か月もないってさ」

「そんな……………」

「俺はお前がどういう奴か知ってる。死なせないと決めた俺や一号がそんな状況に立たされているって分かったら、お前は全力でそれを何とかしようとする。一週間後の戦いの準備すら放り出してな」

「……」

「これから一号の身体を冷凍保存するつもりだ。俺の身体に一号の脳波を入れてから、そうする事になってる」

「そう、ですね」

美咲はそう呟いてから逆に聞く。

「でも、裕太さんはどうするつもりですか? この戦いが終わった後……………」

「分からない。本当なら戦いが終わってから、お前と話し合つて決めるつもりだった」

「……」

「すまない。全部隠そうとして。でも……………」

もう一度言い訳しようとする前に、美咲が口を開く。

「私こそ、すまなかつたですわ。だって、二人がそんな目に遭っている事に……………私は気付く事が出来なかつた。本当なら貴方がそう告げる前に、気付くべきだった」

「……」

「二人とも、現状維持では時間がありませんのよね?」

「ああ……………」

「裕太さん、私からもお願いしますわ。冷凍保存を」

「……………」

第二百一十一話

「悔しいですけど、今の私じゃ……一年も持たない寿命を何とかしてあげるのには難しいですわ」

美咲は悔しそうに涙を流す。

「ごめん……」

「貴方の教師になりたいという夢、それに一号さんの董さんと共にいたいという夢、すぐに叶えたかったですわ」

「確かに……冷凍保存されて復活した後には、これまでと同じように生きられるかどうかなんて分からないしな」

「正式な手続きをするわけではなく、個人で行うわけだから失踪したとして扱われるかも知れない。」

後々の事を考えると……今の自分が辛くなる。

「でも私は、裕太さんに生きて欲しいですわ。裕太さんは、どう思いますの？　そういうリスクを背負っても、これから先も生きたいのです？」

「……」

辛いと思う。

でも……その時は。

「そう聞いてくれるなら、お前は絶対俺を支えようとするだろう？」

「当たり前ですわ」

「でも……それならお前があんまり歳取らないうちの方がよさそうだな。婆さんになつてから蘇っても、俺がお前の介護する事になりそうだし」

「確かにそうですね。では……十年以内、とかどうですか？」

「十年……」

さ

俺が今二十三歳、ただ十年経っても冷凍保存の影響で歳は取らない。

勿論精神的にも。

美咲は四月十九日生まれと聞いたから十八歳。

その十年後は二十八歳。

「その時は、お前は俺より大人になつてる事を祈るよ」

「それ、どういう意味ですか?」

「まあまあ、深く考えるなよ」

「いーえ! 貴方の事だから絶対馬鹿にしていますわ!」

「バレたか」

「まったく……」

美咲が頬を膨らませてから、急に「ところで……」と聞く。

「ん?」

「一号さんの身体を冷凍するのは、この後ですか?」

「ああ。今日中に遥先生の研究所でやるらしいから、この後行くつもりだ」

「……」

美咲は考え込んでから言う。

「決めましたわ。私も行きますわ」

「えっ?」

「私のお供は裕太さんだけじゃない。一号さんだって、貴方と同じくらい大切ですよ。脳波移動する前に、まずはそれを隠していた事をお説教ですわ」

「ま、まあ程々にな……」

「さあ、行きますわよ」

「お、おい待って!」

あいつは多分研究所がどこにあるのかも分からないにも関わらず、俺を置いてくように走っていく。

ついてこいと言わんばかりに。

十年後……蘇った後どんな人生を送れるか、不安はまだ沢山あるけど、今大切なのはこの後の戦いで生き残る事だ。

でも……。

「お前なら、その約束をどんな手を使っても守ろうとする。そうだろう? 美咲……」

今俺に出来るのは、ひたすら努力を続ける彼女を信じる事だけだ。

第二百十二話

俺と美咲は遥と一号がいる研究所に向かい、冷凍保存の準備が整うのを待っていた。

「裕太……」

掠れた声で、一号が俺と美咲を見て呟く。

俺は少し笑って告げた。

「悪い、バレちゃった」

「そうなる予感はしていたがな……。美咲は大丈夫なのか？」

「大丈夫なわけ、ありませんわ。もっと早く告げていれば、私は貴方の傍にずっといましたのに……」

「……そんな事したら、二号の奴に負けてしまう。お前は知るべきではなかったんだ」

「……」

美咲は拳を握る。

俺が肩に手をポンと置いてから一号に近付き、もう一度問いかける。

「一号、本当に良いんだな？ 俺と一緒に」

「……ああ。これから戦う時も、もう一度冷凍保存される時も、そして蘇る時も一緒に」

「……なんか、そう言われると心細くなくなるな」

「俺もそう思う」

そんな会話の後、遥に言われる。

「準備が整った。脳波を裕太の身体に入れてくれ」

「分かりました」

俺は返事をしてから、掌を一号に向ける。

あの時……一号の命を奪おうとした時と同じように。

でも今度はナイフの先のような殺意ではなく、暖かいお風呂やお布団のように、優しく包み込む雰囲気をイメージして向ける。

暖かいお布団の中に包むように、一号の脳波を優しく自分の中に包み込むイメージを頭に浮かべた。

『裕太……』

俺の手から光が放たれ、やがて俺の中に入った一号の声が聞こえる。

それと同時に、俺の中で何かが見えた。

一号が、これまで美咲や俺達と過ごした時間、それに……彼の過去。

「一号、いや……上杉健斗（うえすぎ けんと）で良いのか？ これで確信したよ。お前が悪い奴なんかじゃないってこと」

『……その名前で呼ばなくて良い。俺が罪を犯したのは事実だ』

「……」

『そんな俺でも、お前を支える事が出来て嬉しいぞ』

「……俺もだ」

※※※

遥が一号の身体に処置を行い、ものの一時間で冷凍処置を完了させる。

衰弱し、治療不可能とされた肉体はまるでマグロのように氷漬けにされ、カプセルの中に保存された。

遥が手袋を外して、保存室の扉を閉めて俺と美咲の前へ。

「えーっと、裕太か？」

「はい」

「終わったぞ」

「今、見ました」

「……」

遥が目を閉じる。

「あとは、仲間達の未来に賭ける他ないだろう」

「……」

「あの……遥さん」

美咲が口を開く。

「美咲？」

「私、頂点に立ちたい立ちたいと言ってる割に……具体的に何になりたいのか、言ってませんでしたわね」

「……」

「この場に、裕太さんもいる事ですし……私がついさつき決めた事を言いますの」

「ああ」

美咲は息を吸って告げる。

「私、科学者になりますの。この戦いが終わったら勉強して、遥さんや董さんくらい頭が良くなれるように勉強しますの。そしていつかは、裕太さんを助ける方法を見つけてますわ」

「美咲……」

「ですから遥さん、この戦いが終わったら……私のその夢に協力して欲しいですの。私に色々教えてくださいいな」

美咲は真剣な目で遥を見据えた。

遥も静かに笑みを浮かべてから答える。

「……当たり前だ」

「遥さん……ありがとうございますわ」

「ただし、この道に進むのは容易じゃないぞ」

「お供の為ですもの。どんな困難でも、乗り越える覚悟ですわ」

美咲の言葉に、遥はこくりと頷いた。

第二百十三話

美咲から家に来るように誘われ、研究所から遠い距離を車で移動中、俺の脳内で一号……健斗が話しかけてきた。

『裕太』

「なんだ？ 健斗」

『その名を呼ばんで良いと、さっき言ったばかりだろう？』

「でも本名分かったんだし、もう一号呼びじゃなくてもよくないか？」

『……好きにしてくれ』

「んじゃあ健斗、なんだ？」

『お前の記憶や心をさつき覗いた。勿論昨日今日の出来事も全てな』

「いきなりだな……んで、それがどうしたんだよ」

『お前やはり美咲の事が好きだな？』

キキーン!!

「つぶね。おい、変な事言うなよ。そんなわけないだろ？」

『まあ心を覗かなくとも、俺と融合する前の最後の一日に彼女との時間を選んだんだ。大体の人が察するだろうな』

「俺としてはそんなつもりないんだぞ。ただ……」

『なんだ？』

「俺も分かんないよ。てか、健斗はどうなんだよ。董さんとはどんな感じだったんだ？」

『……』

「なんだよ」

『それこそ、俺の口から言わせるな。見たいなら記憶を覗いてみろ』

「お前今口ないだ

『ほいっ』

「のわっ！」

身体の所有権を取られてしまった。

「ほら、今からやるんだな」

『危ない健斗、前見ろ前！』

「え？ うわあッ！」

健斗が急ブレーキで車を止める。

「ペーパードライバーだったな、俺」

『危ないから運転中に変わるのだけはやめろよな』

「分かった分かった」

健斗が引つ込んで俺と変わった。

「まったく……てかそれ言うなら、美咲も今日はおかしかったぞ」

『どういう事だ?』

「俺と遊ぶだけだったのにお洒落して、その上眼鏡まで選ばせて。なんか前までなら考えられないって言うか……」

『彼女もお前を好きという可能性が』

「いやでもないな」

それなら俺をこき使うわけないしな。

「てか……まだ寝てるな」

『そうだな』

あんな無茶苦茶な運転されても寝てるとか。

普段の戦いの時に見せる強さというか覇気を感じないというか……やっぱり寝顔も綺麗というか。

「……」

『どうした?』

「いや……なんつーかさ。俺達、俺が二十三で、お前が確か……」

『上杉健斗としては二十五歳だな』

「そうそう。んでこいつは十八だ……言いたい事は分かるよな?」

「……」

「俺ら、なんつーか情けないよな。いい歳して、女子高生に守ってもらえなきゃここまで来れなかったなんてさ」

『ああ……』

「俺達色々あるけど、正直この借りだけはどう返したらいいか分かんねえや」

『……俺もだ』

健斗が笑みを浮かべたような気がした。

「生き残ったら考えようぜ」

『ああ……』

そして俺はもう一度アクセルを踏もうとしたが。

「あのーすみません、お兄さん?」

「はい」

「さっきから一人で喋ってるの見えたし、そこにいるの女子高生だよ
ね?」

「……あ」

「ちよつと怪しいから署まで来てもらっていい?」

「なんでそーなるの?」

『任せた』

「逃げんな」

第二百十四話

車が自宅に到着しても、美咲は目を覚ましていない……。と、恐らく裕太は思っているだろう。

実を言うと、裕太と一号が何やら騒がしくしていた時には既に起きていて、どうにかして警察を撒いていた時も、寝たふりをしていた。結論から言うと……裕太はもしかしたら美咲の事が好きらしい。

それも何というか、異性として。

「……」

生き残ったら借りを返したい発言は、正直嬉しいと思う。

だけど、残念だが自分に対する好きという感情を受け取るのは難しい。

多分……多分だけど、美咲はまだ裕太の事を異性としては物足りないと思っている。

だって、ソウジと比べたら全然だし。

いや、待て。

ここで美咲の中で一つの疑問が浮かぶ。

私にはソウジがいる。

なんでソウジ以外の男の事を品定めし始めているのだろうか。

そもそもソウジが待っているんだから、本来なら品定めする必要があるはずだ。

これじゃあ完全に浮気したと思われても否定できないじゃないか！

私の感情さん黙りなさいな！ ソウジが好きという気持ちに逆らうな！ ソウジが好きという感情は常に正しい！ 私が裕太さんと間違いを犯す事はないですわ！

とか何とかやっていたその時。

「ついたのに起きないな……しょうがない」

え？ 何をするつもりですか？

私に確認も取らず何をするつもりですか？

薄目を開けて確認する。

すると……。

美咲はお姫様抱っこされていた。

「……！」

何してますの裕太さん!?

「いや、無理に起こすのはかわいそうだ」

だからって何故お姫様抱っこですかの!?

これなら無理にでも起こして欲しいですわ!

「それに、好きなら多少強引にいかないかな」

強引過ぎますわ!

「お前は気持ちに気付いて欲しくないのか?」

うん。そのせいで私気まずい想いしてますのよ。

想い? 違う思いですわ!

想いだとなんか好きな人に使ってるみたいじゃないですの!

作者が漢字変換でも間違えたんですの!?

「そうかも知れんな」

とうにかさつきから裕太さん私の心読んでますわよね?

なんで? あの時のソウジでもそんな事出来ませんわよ?

「好きだからだ」

どうしても私に好きになって欲しいんですの!?

「そうだ」

もうダメですわ。押しが強すぎますわ……。

※※※

謎に心が読める裕太と自室に赴き、ベッドに寝かされてから目を覚ましたフリをする。

「……裕太さん?」

「おう、おはよう」

「ここまで運んでくれましたの?」

「……超不本意だけどそうだ」

お姫様抱っここの件には触れずに問う。

「起こしてくれば歩きましたわよ?」

「いやそれがさ、お、俺は別に良いって言ったのに健斗の奴

「馬鹿が！ それを言っではダメだ！」

「一号さん……？ 貴方ですの？」

「へ……？」

「では裕太さんではなく、貴方がお姫様抱っこしたんですの？」

「なんでお姫様抱っこなのもバレてんだ!？」

「一号さん？ 私の心をもてあそ……いや、私の許可なく私に触れたんですわ。覚悟は出来てますわよね？」

「どうする？ 裕太？」

「大丈夫どうせ自爆する」

「当てるに決まっていますわ！」

ポイツ！ カンツ！ ドーン！

「……なんでこうなるんですのよ！ いつもいつも！」

「……失敗したな」

「失敗したね」

第二百十五話

「……」

結局、あの後は何もなくそのまま裕太と一号は眠った。しかし……美咲だけはベッドで目を開けたまま天井を見つめている。

心臓の音が、うるさい。

前までなら、裕太にそんな事をされた所で弄ばれたなんて思わなかったのに。

「私、やっぱりおかしいですわ」

多分、今まで無自覚だっただけで……美咲も裕太と同じだ。不本意だが、一緒にいるうちに……意識してしまっただのかも知れない。

けど、だとしてもその感情に素直になる事は出来ない。

だって、美咲には……迎えに行かなければならない人がいる。

ソウジは、多分今も……どこかで苦勞しているかも知れない。

頂点に立ち、それを救うと決めたのは美咲自身。

その約束を無かった事になって……。

「……」

美咲は裕太の顔を見る。

自分より年上なのに、赤ん坊のように無防備で……子供のようで。

異性としては全然物足りないはずだし、ソウジと比較にならない面が沢山ある。

だから不思議と、守らなければと思ってしまう。

放っておけないし、そんな彼が不器用にも自分の前からいなくなろうとした時は叱ったりもした。

最初は本当に、交換条件に自分のお供として……相応しい人間に育てようとしただけなのに。

生徒会の仕事をする人が欲しかっただけなのに。

今では消えたら悲しいなんて次元をとくに通り越して……。

「ごめんなさい、ソウジ」

少しだけ許して欲しい、そう心の中で呟く。

裕太の所に近付き、我慢出来なくなつて……美咲は裕太の口に、唇を近付けた。

あの時、別れようとした時、美咲は裕太に……何故誘つたのかと聞いた。

前日声を掛けられた時も、正直不思議に思った。

何故裕太の方から、自分を誘うのだろうと。

弟子扱いしていると思っている人を、どうして誘うのだろうと。

一方で、美咲は美咲で……自然に眼鏡選びを手伝わせたりした。

いつからそんな風に考えていたかなんて分からない。

でも今日やっと自覚させられた。

「んっ……んっ……」

舌を絡ませ、裕太の唾液を自分の中に運ぶようにキスをする。

恥ずかしくて、ソウジにも申し訳なくて、身体中が熱かった。

でも……なんというか気持ちよい。

ソウジにしたのと同じくらい、もしかしたらそれ以上に深い口づけをした後、美咲はゆつくりと頭を上げて、もう一度見下ろし……裕太の頭を撫でる。

「流石にこれ以上は、無理ですわね……」

美咲は罪悪感を抱きながら、ふと呟く。

その場から動く事が出来ず、美咲はしばらく裕太の寝顔を見る事になった。

第二百十六話

「起きろよ、美咲」

「……………」

あれからいつ寝たのかも覚えてない。

そろそろ秋も終わり冬だというのに身体中が熱いし、何より瞼が重い。

あれからまともに寝る事など出来なかった。

我に返った今だからこそ言いたい。

——なんであんな事したんですの私イイイイツ!!

昨日の夜…………いや多分ついさつきか？

美咲は迷った挙句、衝動的に裕太の唇を犯した。

裕太の事可愛いとか愛おしいとか思いながらやっちゃったのだ。

「あの…………美咲さん？」

やられた本人は、知らないらしい。

でも…………もう美咲としては恥ずかしさで一杯だ。

自爆したい…………自爆してこの場から消えたい…………。

いや、無理だ。

「もしもーし」

「ふんっ！」

「ぐおっ…………」

美咲の振るった拳が、裕太の腹に直撃。

「おわっ…………」

裕太が腹を押さえて悶絶してる様子を見て、美咲は慌てる。

「だ、大丈夫ですよ!？」

「いきなり殴るな馬鹿…………てかお前、今日は珍しく起きるの遅いな」

「う、うるさいですわね」

「夜更かしでもしてたのか？」

「し、してませんわよ…………それより」

「なんだ？」

「貴方は裕太さんと合ってますの？」

「おう」

「本当ですか？」

「おう」

「本当に本当ですか？」

「うるせえな、何回確認取るんだよ」

「だだだだだつて、私……私は……その……」

「な、なんだよ」

「何でもありませんわ！ それより、今日から特訓しなければですよー」

「それは良いけど、明人に言われた課題……見つけられたのか？」

「……」

しまった、昨日色々あり過ぎて忘れてた。

「見つけられて無いんだな」

「ゆ、裕太さんはどうなんですか？」

「勿論分からね」

「ダメじゃないですか！ 見損ないましたわ！」

「お前が言うな！ てか健斗はどうなんだ！」

「……」

「お前もかよ！」

「どうするんですの！ 貴方が遊びに誘ったせいで考える時間が！」

「いやお前もノリノリだっただろ！」

「仕方ないから今日中に課題を見つけてますわ！」

「無視すんな！」

※※※

二人で両親の作った朝飯を食べて、学校まで歩きで向かおうとする。

この歩いてる時間に……と思ったが。

「おつす美咲っちに裕太っち！ 昨日はお楽しみ系？」

厄介な奴が現れた。

「……なんでここにいますの？」

「ウチ二人がデートしてるの見てたから、二人で家に来てないかと

思ってた朝から張ってた系」

「ストーリーカードですの!?!」

「いや気になったからついてきただけ系。初つちと一緒に行ったけ

「今なんて言いましたの!?!」

「初つちと一緒け

「最悪ですわあああああアツ!!」

「よりによって一番見られたくない人に……。」

第二百十七話

これから特訓だというのに、最高戦力である美咲が落ち込みながら歩いていった。

「……」

「どうしてくれんだ優香さん……」

「う、ウチのせい系!？」

「友人なのにこいつのメンタル破壊するような事言ったらダメだろ」

「まさか破壊されるとは思わなかった系……」

初とか言う名前出て来たけど、そいつ関連の話題は美咲の前でしない方が良い事が分かった。

「初さんに知られた以上、あとで初さんは始末するしかありませんわね……」

うん……超逃げて初とやら。

「また自爆するのがオチ系」

「ほっときなさいな!」

あ、でも美咲がそこまで目の敵にしてるなら意外と強いのかも。
安心安心。

「初つちと美咲つち、いい加減仲良くして欲しい系……まあ今の関係の方が二人つぽいっちゃぽいけど」

「それは出来ませんわ。あの人に勝つのはライフワーク……出会った以上は戦い合うしかありませんわ」

「この調子系」

「……」

何度でも言うぞ？

俺はなんでこんな奴好きになったんだ？

「そういえば二号さんが差し向けた生徒達の中に、初さんと江代さんはいませんでしたわね」

「あー、あれ後で聞いたけど……あの日家族全員で風邪ひいて休んだらしい系。酷い高熱だったそう系」

「ちつ……ライダーとしてなら勝てると思ったのにですわ」

「いやそれで負けたら被害増えてたから結果オーライじゃないか？」

正直こいつに勝てない奴を、俺らが勝てるとも思えねえしな。

休んでもらって正解だ。

「不戦勝が一番腹立つんですわ！」

「しかもどうせ人工脳波でジャックされてたから戦えても本人じゃないし」

「……そういえばそうでしたわね」

はあ……ホントにこいつのお頭で俺達を治療出来るのか？

凄いい心配で、今日からずっと寝れなそうなんだけど。

『……』

黙ってないで何かフォローしてくれよ！

『俺も心配だ』

もうダメだ……おしまいだ。

まさかこの段階で後悔する事になるとはな……。

というか……。

「おいそろそろ学校着くぞ。何か考えたのか？」

俺も考えてないけど！

「私も思いつきませんわよ！」

そんな事を言っている間に門が見える。

「あー、着いちちゃったな」

「どうするんですの……明人さんにどう言い訳するんですの？」

「言い訳なんて会長が聞くわけないだろ」

「そうだよ言い訳なんて会ちよ

ん……？ 会長？

「よう」

「お……お前……」

「あ、貴方は！ いや、貴方達は……」

見覚えのある五人組。

そいつらは確か……。

「変身した私に呆気なくやられたモブ五人ですわ！」

「モブって言うんじゃないやねえよ眼鏡！」

第二百十八話

そう。倒した筈のモブ五人がこの学校に……。

「地の文でも俺達をdisるのやめろよ！」

「しようがないだろお前達の名前知らねえんだから！」

「というか……私でもショッカー戦闘員の中の人が誰かなんて聞かれても分からないですわ」

「くーっ！ 折角来てやったのに馬鹿にされるとは……」

「来てやった？ どういう意味ですか？ それは」

「俺が呼んだ」

その声と共に現れたのは明人だ。

後ろに、何人かの生徒を連れてきている。

覚えている者もいた。

確か……優香の友人の前田と、生徒会メンバー……あと。

「第二話で俺にボールをぶつけた奴と、俺を殴ったヤクザ？」

「だからなんで話数で説明するん!？」

「この方が分かりやすいだろ。だってそれ以外で俺以外の誰が分かるんだよ」

「うう……言い返せない。フクの癖に生意気だ！」

「裕太さん？」

「なんだよ」

「蘇我高校での貴方の地位……の○太と同格みたいですわね」

「分かっている事を言うな馬鹿」

「恥ずかしい。」

「それはそうと明人さん、何故蘇我高校の生徒達を？」

「今日からの特訓の為だ。分かっているとは思いますが、アトミックの強さは次元を超えている。俺の呼べる範囲で、手練れを用意した」

手練れであればある程、俺のトラウマに深く突き刺さるんだよなあ……。

「フク！ お前何ビビってんだよ」

「フクって呼ぶなフクって。しようがないだろ、お前らにされた仕打

ちのせいで、俺一時期飯も食えないくらいにだな」

「会長、早く戦わせて欲しいっす」

「聞けよ人の話！」

「もうやだここの生徒達。」

「まあ待て。ところで美咲と裕太……課題の方は見つかったのか？」

「それが……」

「……まあ想定内だ。俺がお前達の戦いぶりを見て、どう鍛えるべきかも昨日一日考えていた」

「あ、ありがとうございますわ」

「詳しい作戦は俺と成音で立てようと思うが、まずは前にお前やヴィーダが言っていた通り、フォームチェンジに頼らずとも独力である程度戦えるだけの力を付ける特訓をするぞ」

「了解ですわ」

少し経ってから、成音とヴィーダも現れた。

「ミンナオハヨ！」

「これで全員揃ったか」

明人がそれを確認して、コーチの如くその場を纏め始める。

「それではこれから、一週間後に備えて訓練を始める。それぞれの課題を彼らと共にこなそうと思う。まず人の組み合わせと課題だが……」

※※※

そうして特訓が始まろうとしていたその時、体育館にいた狩野遙は誰もいない事を確認し……自分の持つ荷物の中からロードドライバーを取り出して、それを見て呟く。

「もう彼女らに負担は掛けられないな」

第二百十九話

ヴィーダは成音とタツグを組んで特訓する事になった。

相手は蘇我高校生徒会の面々。

成音は恐らくアトミックと戦う事はないと思うが、その場でまた別の者と対峙する可能性は大いにあるだろう。

成音とヴィーダには二つの戦い方がある。

成音が火炎放射器怪人、ヴィーダが仮面ライダーグングニルとして二人で戦う手と、ヴィーダにフレイムシヤワードライバーを渡してフォームチェンジさせる方法。

それを今まで以上に上手く使い分けるのが、この特訓の趣旨だ。

「ヴィーダ、大丈夫そう?」

「ハンダン……ムズカシソウ」

「取り敢えずまずはやれるだけやってみようよ」

「ウン……」

ヴィーダがごくりと唾を飲み込む。

この特訓には、今まで成音一人でやってきた事を、ヴィーダも判断出来るようにするという目的がある。

確かにヴィーダは強いが、まだ他のメンバーに比べれば判断力に欠ける面があった。

それもその筈、ヴィーダは知識と力こそあるものの、経験があまりないのだ。

美咲や明人がずば抜けて強いのも、昔からの戦闘経験あつてのもの。

よって、もしヴィーダが経験を身に付ける事さえ出来れば……最強格の二人に並べるくらいの強さになるかも知れない。

——でもいきなり生徒会相手か……。ヴィーダはともかく、私はどこまでやれるのかな。

比較的普通(?)の県立女子高である○×女子高の生徒会と違い、蘇我高校の生徒会は学校の運営力があるのと同時に、喧嘩で強い者でなければ選ばれない……らしい。

無茶苦茶な選定だとも思うが、蘇我高校生徒会の面々の強さはある意味保証付きという事になる。

「始めても良いか？」

「ええ。あたしもヴィーダも準備OKよ」

「オツケーダヨ！」

「へっ、んじゃあ……行くぜ」

そう言っつて生徒会メンバー達はドライバーを腰に着ける。

○×女子高の生徒から回収した、量産型のドライバーだ。

それぞれ武器の形をしたバツクルの端末を取り出し、ボタンを押す。

そして構え、ベルトに取り付ける。

「いくよ、ヴィーダ」

「ウン！」

成音はベルトを取り出し、装着。

ヴィーダもバツクルを取り出し、腰に当てる。

ベルトが自動的に伸びて、ヴィーダの腰回りを覆う。

成音とヴィーダは変身用のボタンを押す。

『FLAME SHOWER DRIVE READY?』

『GUNGNIR ON』

ヴィーダが槍型のガジェットを投げてキャッチし、成音も端末を閉じてから構える。

「変身」「ヘンシン！」

成音はベルトに取り付け、ヴィーダは槍型のガジェットを差し込む。

『COMPLETE』『CHANGE』

成音は火炎放射器怪人へ、ヴィーダは仮面ライダーグングニルへとその姿を変えた。

第二百二十話

他の皆も特訓が始まった。

俺は……俺達は……。

「ふん……」

「やつほーフク！ あたし達が相手だよ」

なんで第三話のトラウマのほじくり返すんだよ明人さん……。

俺の胃が痛くなるだろ！

『落ち着け裕太。お前の胃痛は俺にとってもダメージだ』

「うるせえよ。てかお前もあの時俺の身体に入ってたんだから今更だろ」

『ああ……痛かった』

「痛くて悪かったな」

「おい。一人芝居してねえで早くしろよ」

「分かったようるせえな」

明人は遥から俺の中に一号……健斗がいる事を聞いたが、この二人にその説明はない。

多分だが、俺に与えられた作戦は人格を上手く使い分けて戦えという事なのだろう。

二号がこんな奴らとは違って良かった。

イライラするか胃が痛くなってたら戦いどころじゃない。

「お前ムラマサとして戦った事はないよな？」

『ああ……だが恐らくお前に動いてもらえれば感覚はつかめるはずだ』

「りよーかい」

「だからいつまで一人芝居してんだよ！」

「うるせえよ！」

「それお前だよ！」

そりゃそうだ。

そう呟いて、俺はベルトを取り出す。

相手も同じように、ベルトを装着する。

『ムラマサ！』

俺は右腕を斜め上に伸ばして叫ぶ。

「変身！」

端末をベルトに取り付ける。

『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

俺は上空からの刀の柄を取り、そこから段々と姿を変えていく。

福沢裕太から、仮面ライダームラマサへ。

変身が完了した後、俺は刀を構える。

「じゃあ！」

※※※

明人の相手は優香と前田だ。

自分自身の課題は複数の相手に対する対処力の向上。

あの時、明人はアトミックのボムビットを躲す事が出来なかった。

あれと同じ場面がもう一度来た時の為に、二人掛かりで来られた時の対処を見直せば、次に繋げると気付いたからだ。

「優香ちゃん、大丈夫う？」

「だ、大丈夫系。何回か戦った事ある系だから」

優香は大分緊張している。

「良いか。悪いが俺はお前達相手だろうと手加減をするつもりはないぞ」

「会長お、優香ちゃんを殺す気く？」

「……お前達が本気でやらないなら、そうなる可能性もあるかもな」

「……！」

「大丈夫だよ優香ちゃん。優香ちゃんは私が守る」

優香の戦いぶりはあまり見ていないが、成音からの話を聞く限りは、まだ判断力とか以前の問題だ。

彼女の性格を考えれば仕方ないかも知れないが、とにかく躊躇する事が多い。

今手加減するつもりはないと言ったのも、相手に覚悟させるつもり

だったが逆効果だったか。

「戦ってみるしかないか」

「……！」

「戦ってみるしかないか」

「……！」

「戦ってみるしかないか」

明人は端末を取り出し、ボタンを押す。

『ARC SWORD DRIVE READY?』

端末を取り付ける。

『ARC COMPLETE……!』

剣の柄を掴み、明人は剣の怪人・改……完成態へと変化した。

第二百二十一話

六角美咲は狩野遙が用意した仮想空間による特訓だ。

特訓内容は、ボマードライバーとオールウェポンを完璧に使いこなす、尚且つ戦い方に対する拘りを捨てさせる事……だそうだ。

「えーっと、これで良いんですの？」

寝台の上で、ゴーグルを着けながら呟く。

「ああ。そのまま寝てからリラククスして、『リンク・スタート』と呟いてくれ。それがダイブ開始コマンドになる」

「わ、分かりましたわ」

美咲は仰向けに寝転がる。

目を閉じて、リラククスさせてから……美咲は呟く。

「リンク・スタート」

そう呟くと、白一色の背景の後から現れる虹色のリングを通り抜ける。

仮想空間での五感が正常かどうかの確認作業の後、ログインが完了した。

そのまま美咲は、仮想空間へと降り立った。

「……ここが仮想空間ですね」

白一色の空間には、宙に0と1の水色の文字が浮かんでいた。

美咲はこの光景に見覚えがある。

……なんとというか、令和一作目の仮面ライダーの人工衛星の中がこんな感じだった気がした。

「遙さん」

『なんだ？』

「これ自作ですか？」

『何が言いたい？』

「いや、これ飛電インテリジェンス製の製品かなと思ひまして……」

『うちの姉さんがそのゴーグルと仮想空間を作った事があるんだ。その技術を応用しただけだ』

「貴女にお姉さんがいましたのね」

『まあ……彼女は半年前に捕まったがな』

「今は聞かないでおきますわ」

遙が咳払いをする。

『取り敢えず、今から私もボマーとしてダイブする。私の想定する戦い方を超えれば、美咲の特訓は成功だ』

「分かりましたわ」

美咲がそう呟いた後、仮想映像が途切れ。

しばらくしてから、遙が美咲の対面に現れる。

彼女もボマードライバーを取り付けた状態だ。

「遙さんと戦うなんて久しぶりですわね」

「……懐かしむのも良いが、この特訓の趣旨……ちやんと覚えているだろうか？」

「……はいですわ」

美咲の甘さが、二号のあの行動を許してしまった。

今まではその甘さが美咲の良さだったが、この戦いにそれは許されない。

「私は、あの二人を絶対に止めたい。だから、戦闘不能になるまで容赦はするな」

「……」

美咲はドライバーを取り出す。

遙も同じように、端末を取り出した。

両者ともボタンを押し、構える。

『BOMBER DRIVE READY?』

美咲はカブトゼクターを掴んだ時のような構え、遙は端末を前に突き出し。

「変身ですわー!」 「変身」

『COMPLETE』

端末を取り付けると同時、頭上に爆弾が出現。

それを美咲は拳で握り潰し、遙は手を伸ばしたまま留まる。

爆発の後、二人は仮面ライダーボマーへと姿を変えた。

第二百二十二話

量産型のベルトではあるが、手練れの生徒会メンバー達はそれもお構いなしに火炎放射器怪人を追いつめていく。

グングニルはスペック差や元々の身体能力でほぼ優位だが、数人相手にはやはりそこそこ苦戦している。

「ハアツ、ヤアツ！」

火炎放射器怪人を相手にしていた生徒会メンバーが、あるタイミン
グで一斉に移動。

全メンバーでグングニルを取り囲む。

「ナリネー！ ハヤク！」

「ダメよ！ ここじや届かないわ！」

「残念だったな。悪いが倒させてもらおうぜ」

『FINAL DRIVE！』

集団によるファイナルドライブ。

グングニルも何とか抗おうと、バックルを操作する。

『GUNGNIR FINAL DRIVE！』

槍を構えてから大きく飛び上がり、固まってる三体目掛けて槍を投
げる。

槍が分裂し、命中と同時に三体の怪人達が魔法陣に捕らえられた。
そこに向かってグングニルは飛び蹴りを放つ。

「ハアツ！」

ライダーランスキックとでも呼ぶべき飛び蹴りが、怪人達目掛けて
一直線。

しかし。

「甘い！」

成音が変わったのとは違う火炎放射器怪人が、砲口から火炎を放つ
てそれを阻止。

ダメージを受けたグングニルが体勢を崩し、技は失敗した。

「今のはフレイムシャワースタイルに出来たら防げた筈……」

成音はそう呟く。

生徒会の人達もそれを察し、成音とヴィーダに言う。

「判断が遅せえな。今のはヴィーダから言っていれば、もう少し早く対応出来た筈だぜ」

「ゴ、ゴメンナリネ……」

「どんまいどんまい！ 次上手くやろう次！」

「そう簡単には成功させないぜ」

生徒会のメンバーの一人が笑みを浮かべて、武器を構えなおす。

※※※

明人は目を閉じて、二人の動きを予測しながら動く。

「ちゅーか、会長お前より強くなってるう……まあ怪我してないし当たり前かあ」

「！」

そう呟く前田が変身する騎兵怪人の馬を斬りつけ、大きく吹き飛ばす。

後ろからその隙を取ろうとした優香の攻撃も防ぎ、馬の脚部分を蹴り付けた。

「攻撃が遅いぞ、岸本優香」

「ご、ごめん系」

そう呟く優香に向かって剣を振り下ろす。

「ひっ……！」

「口より先に、次の攻撃に対する予測をしろ。敵はお前の言葉を待ちはしないぞ」

寸止めで止めた剣をゆっくりと上げた所に、前田が近付く。

「大丈夫？ 優香ちゃん」

「大丈夫系……明人っち、もっと頑張る系」

「……良いか。俺達は命がけの戦いをする為にこうしている。この修行中でさえも、覚悟して挑め。二度は言わんぞ」

「は、はい系！」

「会長おやっぱかたあい……」

優香に返事され、前田にそう言われながら、明人は剣を構えなおす。

第二百二十三話

「ていつっ！ そらっつ！ せいやーっ！」

俺は刀を振るって、第三話で俺にダメージを与えた悪魔達二人に当てようとしていた。

「……ッ！」

だが案の定、刀が当たる事はない。

俺の剣は空気のみを切り裂き、目の前の二人には何の効果も無かった。

——中に二人いるとは言え、いきなり一対二はきつかったんじゃねえのか？

『裕太……俺に変われ』

「待ってくれ！」

「待つわけねえだろ」

「お前に言ってるねえよ！」

——待ってくれ。もう少し俺がやらないと、この後の戦いの時俺が置いて行かれちまう。

『しかし……このままではお前の体力が先に尽きるぞ』

「……ッ！」

「隙やり！」

女子生徒の放った槍が腹に突き刺さり、その勢いで吹き飛ばされ、変身が解けてしまう。

「くっ……」

俺は何とかもう一度立ち上がる。

「今度こそ、当ててやる……！」

ドライバーを操作し直し、もう一度変身し。

俺は刀を構えて、相手を見据えた。

※※※

変身してから、美咲は遥の変身するボマー相手に立ち向かっていく。自分なりの拘りを捨てずに戦う美咲と、理想的な立ち回りの遥。

経験こそ美咲の方が勝っていたが、遥のやり方に少々苦戦している面があった。

「自爆使いすぎは流石にズルですわよ！」

自爆能力の使用で中々近付く事が出来ず、何とか隙を見つけようと目を凝らす美咲。

「お前も同じ戦法が取れる筈だ」

「奥の手中の奥の手ですよ。最初は正々堂々、小細工なしで立ち向かいますわ！」

そう叫んでから、美咲は地を蹴って遥に接近。

もう一度自爆しようとする遥の腕にバットを振り下ろし、端末の操作を邪魔する。

「貰いましたわ！」

『ACCELERATOR DRIVE』

加速能力……アクセルドライブを使って遥にもう一度近付こうとした。

しかし。

「！」

遥は背中ボムビットを飛ばして妨害する。

何とかバットで全て切り伏せてから向かうが、既にオールウェポンを使い、遥は追い打ちをかけた。

二丁の火炎放射器で、爆炎を放つ。

「わ、私も……」

「遅いっ！」

美咲が取り出そうとした時には既に遅く、遥の持つ火炎放射器から放たれる火炎弾が行動の邪魔をする。

大きく吹き飛ばされ、地面に叩きつけられるや否や、素早く指を動かした遥が怪人召喚を使用した。

『SUMMON DRIVE SWORD』

ボムビットが剣の怪人へと変化し、二人とも素早い動きで姿を消す。

二人の斬撃が美咲の身体を何度も切り裂き、美咲は強制的に変身を

解かれてしまう。

「きゃっ……」

美咲は顔を上げて、オールウェポンボマーの姿を見る。

「あれが、ボマーの本気……」

ああいう風に戦えば、美咲の勝つ確率だつて上がるかも知れない。

けど……それは美咲の望む戦い方じゃない。

自分の戦い方で勝つてこそ、初めて勝利したと言える。

その為なら……。

「絶対倒しますわ、遥さん……私の戦い方で、正々堂々と！」

第二百二十四話

あつという間に一日目が終わり、体育館に合宿所の如く敷いた布団の上に殆どの者が泥のように眠る。

「ヴィーダ、ツカレタ……」

「俺もだー……」

「流石の私もですわ……」

『ライダー全員がこの様子では大丈夫なのか？』

「課題が中々厳しいんですわよ」

「美咲の課題なんだっけか」

「オールウェポンを完璧に使いこなす事……ですわね。でも、完璧に使いこなそうとすると身体への負荷も大きい上に、何とかというか卑怯にも思えるんですわ。ですから自分のやり方で倒したいんですのよ」

課題に真っ向から反抗してて草。

「とういかその……聞いても良いか？」

「なんですの？」

「お前って自爆した時どんな感じなんだ？ やっぱり痛いのか？」

「あの……一応ツツコませてくださいいな？」

「はい？」

「貴方私はどうなってると思ってますの？」

「どうなってる……とは？」

「私死んでますのよ？ 痛いに決まってるじゃないですよ」

「確かにそうだな……」

忘れてた。だってこいつすぐ復活するんだもん。

『確かにそうだな。重さを感じない』

同感だ。

「確かについていうことは今までそれ忘れてましたの？」

「はい忘れてました……てかおい爆弾投げるなよ？ そういうとこだぞ軽く見られる原因は」

「どういうとこだから説明しないと投げますわ」

「もう見飽きたからやめろ。てか自分の命を大事にしろ。まずそこか

ら始めるんだ」

「フウフゲンカ、メツ」

「夫婦じゃねえよ（じゃないですわ）!!」

「……」

「おい原因、目を逸らすんじゃない」

「あ、あたしが悪いとか言う気？」

「お前と住んでるんだから当たり前だ」

「なっ、何よ！ ヴィーダが寝てる時に見てたら起きちやったりするのよー」

「ナリネノミテルモノオモシロイヨ！ デモ、ハダカニナルシーントカハチヨットハズカシイカモ……」

「やっちまったな」

「あたしヴィーダが大きくなるまでラブドラマ見られないじゃないの……」

「想像も良いけどちゃんと恋愛すべきですわよ」

「女子高通ってる人に無茶言うわねアンタ。てかそういうアンタは恋愛した事あんの？」

「秘密ですわ」

「ないわね。アンタみたいな女がモテるわけないし」

「おい何だとお前！」

爆弾使わず素手で殴ろうとする美咲さん。

成音さんが流石にひらりと躲してから、何故か落つこととした爆弾に倒れる。

「あっ……うわあああッ!!」

「ねえ何なのこの人……」

しかも、さつき口調変わんなかったか？

「今すぐその発言を取り消しなさいな！」

だからそういう所なんだよな……。

第二百二十五話

狩野遙は別室で、楽しそうな声を聞きながら目を閉じていた。声は聞こえなくなり、静かになったのを確認してから目を開け……音を立てないように出発する。

体育館の外へ出る時、一度眠るヴィーダの顔を一瞥。恐らく、こうして見る事が出来るのも最後だろうから。

「ヴィーダ……」

ヴィーダが楽しそうにしている声が、一番自分的には嬉しく感じた。

ヴィーダは幼いころの自分の顔に似ている。

それは当たり前だ。

何故なら自分の卵細胞から作られた人造人間なのだから。

だけど……それは自分の娘と言うには少し違う存在だ。

もし仮に腹を痛めて産んだのなら、自分の復讐の為にあの子を可哀想な目にあわせたりはしなかっただろう。

それなのに、ヴィーダはそんな自分を母親として見てくれた。

ヴィーダという名前だって、戦神オーデインの子供……ヴィーダールからとったものだが、初めて彼女に名前をつけた時……彼女は嬉しそうにしてくれていた。

「あの子にこれ以上、苦勞はさせたくないな」

それが遙の本心だ。

自分の欲を満たす為に生まれた存在だと言うのに、今では彼女が……友に裏切られ、愛する人を殺された自分にとっては一番大事な存在だった。

そんな彼女は、裏切った友が作った者に挑もうとしている。

彼女の強さを、作った遙自身はよく知っている筈だ。

けど……もし死んだらと思うと……。

悔しいが、ハイドロフォームカードを手に入れたアトミックに勝つ事は遙の力では無理だ。

だが出来る事は一つある。

それは、あれ以上の強化をさせない事。

アトミック……二号自身にどれだけの頭脳があるかは不明だが、少なくとも自分で肉体改造を施すのは不可能な筈だ。

なら、董だけでも殺してしまえば……もう誰も二号の強化を出来なくなる。

その場合、もう二度とヴィーダの顔を見て話す事は出来なくなるが。

でもそれは……自分が本来受けるべき罰なのかも知れない。

ここまでは運が良かったのだ。

自分の敵だった筈の美咲の性格に救われ、今までやった事を許された気になってしまっていた。

アトミックがハイドロフォームを手に入れた時、そして今日……久しぶりに蘇我高校の生徒達を見た時、自分のした事の重さを再確認させられた。

だから罪を犯してでも、遥はこれ以上皆に負担を掛けるわけにはいかないのだ。

「さよなら」

遥は小さくそう呟いて、外へと歩き出す。

※※※

さよならと告げた遥の声。

それを、ヴィーダは聞いていた。

「ママ……」

そう呟きながら跳ね起きて、布団の近くに置いてあるグングニルドライバーと、成音の近くにあるフレイムシャワードライバーを手にして、他の皆を起こさないようにして遥を追いかける。

既に駐車場にあった車に乗り込んだ遥が、アクセルを踏んで学校の外へ。

ヴィーダはそれでも諦めずに走って追いかける。

「マッテ……マッテヨー」

ヴィーダは届かないと分かりながらも、そう叫びながら走りつつ、ベルトを取り付ける。

何故自分を置いていくのか、そう思いながら。

走りながら、ヴィーダは槍型のガジェットを取り付けて変身する。

「ヘンシンー！」

『CHANGE』

ヴィーダはその姿を仮面ライダーグングニルに変えてから、変身中に離されてしまった距離を、飛行形態になって追いかける。

第二百二十六話

誰も走らない道路を、やや俯きながら運転する遙。

董がどこにいるかは分からないが、まずは彼女がいた筈の研究所へ。

信号もお構いなしに、アクセルを踏み続け……進んでいたその時。

「!!」

突如、何者かが車の目の前に現れ……遙は急ハンドルでそれを回避。

電柱にぶつかる前に何とかブレーキで止めて、一応ロードドライブバーを装着し。

『COMPLETE』

変身してから外へ。

警察の検問の可能性もあるかも知れないが、今回ばかりはそうだとしても強行突破する。

無論殺してでも。

「死にたくなければそこをどけ。私は急いでいるんだ」

その言葉に対し返って来たのは……。

「ママ……」

自分の一番大切な者の、泣きそうな声。

「え……嘘だろ……」

「ママ、ナンデ？ ナンデヴィーダヲシンジテクレナイノ!?」

※※※

「……ヴィーダ」

「ヴィーダ、ゼツタイアイツニカツ！ パパヲコロサセタヤツモ、ママヲキズツケタヤツモ、ヴィーダガタオシテオコツテアゲル！」

「……良いんだ。ヴィーダがそうする必要はない。それに……完成したアトミックの強さは、設計した私が一番よく知っている。それをあの強さの者が使っている今、勝ち目はほぼないに等しい。それを董に強化などされてみる……それでもお前は倒せるのか？ 奴を……」

「デモ、ソノタメニママガヒトヲコロスナンテ……ダメダヨ。ソナ

コトシタラ、ソノヒトガパパヤユウタヲコロサセタノトオンナジニナルンダヨ！」

「倒せるのかと聞いてるんだ！」

遥はグングニルにそう叫ぶ。

「元々私は罪を犯した人間だ。そんな人間がいくら罪を重ねようと……罪人である事には変わりはないんだ。こんな事をしたって、あの子は喜ばない。分かってるさ。でも……お前を生み出さなければ、大勢の人を巻き込まなければ、その上で輩を止めなければ……私の気が済まなかった。私はそういう奴なんだ。自分の感情の為だけに、その子が何を欲しているかすら考えず……罪のない学生を巻き込んで、お前を作り出した……罪人なんだ」

「……ママ」

「……」

「ナンデソンナニ、ジブンガワルイッテキメツケルノ？ マエニモヴィーダ、イツタ。ママハクルシカッタカモシレナイケド、ヴィーダハパノカタキヲウツタメニウマレタ。デモソレダケジャナイヨ。ヴィーダハママノササエニナリタイ。ママガツライノハ、ヴィーダガイチバンワカッテルカラ。ダカラ……コレイジョウジブンノテヲヨゴサナイデ……。ママノツライキモチハ、ヴィーダモイツシヨニセオツテアゲルカラ」

「ダメだ！」

遥はそう叫ぶ。

「ヴィーダは、山内成音がいる。その優しさは彼女や、これから仲良くなる人間に使うべきだ」

「ママモイル！ ダカラ……コツカラサキハイカセナイ！」

グングニルは槍を構える。

それを見た遥が呟く。

「どうしても行かせないというのか？」

「ドウシテモ、ドウシテモダヨ！」

「……分かった。ヴィーダ」

「エ……」

「私は意地でも、お前達を守る為に手を汚す。その為なら、お前相手でも戦う」

遥は剣を取り出す。

グングニルも後ずさらずに、少し躊躇いながらだが槍を構えた。

「お前も私を止める気なら、全力でくるんだ。私は恐らくお前には勝てない。だが死ぬまで、私は……自分の償いを諦めない」

「……」

「はあっ！」

動かないグングニルに向かって、遥は地を蹴って駆け出す。

第二百二十七話

嫌な予感……それを感じて、成音は夜遅くに目を覚ました。
すぐ近くにいた筈の者の気配が、今はないのだ。

目を開けて、恐る恐る右隣を見る。

そこには自分が目を閉じる前まで、ヴィーダがすやすやと寝息を立てて寝ていた筈だ。

だが……そこには誰もいない。

勿論、彼女のグングニルドライバーも。

自分の布団の近くに置いていた、フレームシャワードライバーも無くなっている。

「どういう……こと?」

成音は動揺しながら跳ね起きた。

もしかしたら、戸間董や二号、その二人のどちらかが用意した者に攫われたのかも知れない。

成音は慌てて眠る美咲の所へ駆け寄り、揺すりながら叫ぶ。

「会長! ねえ起きて会長!」

「んー……なんですか? もう朝ですか?」

「いないの、いないのよヴィーダが!」

「なんですって……?」

美咲が眼鏡を掛けながら、成音を見てそう呟いた。

※※※

成音達の声を聞いて目を覚ました者や、同じく眠っていた蘇我高校の生徒達も起こして、学校内を搜索する。

すると……。

「遙先公もいねえぞ」

蘇我高校の生徒の一人がそれに気付く。

「という事は、二人ともどっかに……」

「とにかく、全員で手分けして外へ探しに行きますわよ。良いですわね?」

「ああ」

「おっ系」

「いーよ」

裕太や明人、優香や前田もそれに頷く。

「おい待てよ」

そう言ったのは、蘇我高校の生徒の一人だ。

「なんですか？」

「あの二人探しに行くってんなら、そうはさせないぜ」

「……」

「そうっすよ美咲さん。もし敵側に攫われていたとしたらどうするんすか。俺らまで捕まる可能性もある。そんな事があるかも知れないのに、あんな人の為にそんな危険行為させられないっすよ」

「……」

「大体さ、俺らがあの女に何されたのか分かってるよな？」

「あの女に化け物の姿から戻せなくさせられて、その上知らない奴から人殺しをさせられてたんだぞ。その原因作った奴をそんなリスク犯しても助けに行く？ アンタ何考えてるんだ」

「ちよつと、ヴィーダは何も悪い事してないでしょ！ ヴィーダの為に、お願いよ！ あたしの大事な家族……仲間なのよ！」

「そうですね。別に協力しろとは言ってませんの。私達だけでも、行かせて欲しいですわ」

「もし怪我でもして、貴重な特訓期間を潰す事になったらどうするんだ？」

「そ、それは……」

成音が呟く。

「今はそんな事を言っている場合じゃないだろ！」

裕太がそう叫んだ瞬間、生徒の一人が言う。

「そうすか。どうしても行くんすか？」

「そのつもりですわ。仲間が攫われてるのに、放っておけませんわ」

「なら俺らが止める。こっちは明人さんにわざわざ呼ばれて来てんだ。こっちの都合も考えて欲しいぜ」

話していた生徒二人がドライバーを装着する。

第二百二十八話

「待ちなさいな！ どういうつもりですか?!」

「どうって、ただお前達を止めるだけだぜ」

「美咲さんには悪いけど、俺ら……どうしてもアンタ達に戸間董と
かって奴を倒してもらいたいんだ。あいつは蘇我高校の面目が潰さ
れた原因でもあるからな」

「だったら……それがあたし達に対する態度なの!？」

「さつきから言っているだろ。リスクを犯してでも助けるべき相手
じゃねえって」

「アンタ達がその分強くなれば、問題ないっしょ」

そんな争いに対して、明人が珍しく叫ぶ。

「やめないかお前達」

「……ッ!」

「リスクがある事くらい、こいつらも分かっているやろうとしている。
それを邪魔する権利は誰にもないはずだ」

「けど明人さん、明人さんだって遙先公や戸間董のせいで酷い目に遭
わされたんすよ！ 俺らなんかよりよっぽどひどい目にあって、そん
な身体になつて……それなのに何で、そいつらの肩を持つんすか！

俺ら、明人さんの為にも……こいつらに戸間董達を倒して欲しいんす
よ!」

「なら何故そこまで威張る？ もしそこまでリスクを犯して欲しくな
いのなら、お前達がやれば良い。良いか？ 蘇我高校の面目が潰され
たのは、戸間董でも、彼女のせいで復讐の道を選んだ狩野遥でも、ま
してや戦いで負けたヴィーダのせいでもない。俺達の弱さだ。力と
賢さがあれば、蘇我高校を自分達の手で守る事が出来た筈だ。それを
しなかったのは、それをしようと努力しなかったのはお前達だ。俺が
お前達に特訓の手伝いを頼んだ時だって、死ぬ覚悟で自分達が戦うと
言う事も、行動する事も出来た筈だ。それすらせず、自分が傷付こう
という考えすらもたず、人に運命を委ねた分際で彼女らの行いを阻も
うとするなど……正気の沙汰ではないな」

「……」

「もう一度選ばせてやる。汚名返上したいのであれば、はつきり言っ
て今のこいつらに運命を任せるべきではない。必ず勝てる保障など
どこにもないのだからな」

「俺は……俺達は……」

「手が震えているぞ。どうしたんだ？ お前は……汚名返上したいの
だろうか？ ならば、簡単に答えを出せる筈だ」

明人の厳しい言葉に、生徒達がベルトを外す。

「お前達だけでも行け」

「明人さん……ありがとうございますわ」

「……」

美咲達と共に、成音は走っていく。

そのまま手分けして、学校の外へ。

明人はそれを見届けてから、生徒達に告げた。

「美咲達は行った。早く決めた方が良いで。あいつらに運命を委ねる
のか、それとも自分達が傷付く覚悟で戦うのか」

第二百二十九話

グングニルは追いつめられていた。

それもその筈、遙の攻撃を躲す事なく全て受け……反撃一つせずに遙が諦めるのを待つ。

「……ッ！」

遙の一撃に、グングニルは大きく吹き飛ばされ……背中から地面に叩きつけられる。

それでも……反撃はしない。

「戦え、戦わないなら……早くそこを退いてくれ！」

「ママ、アキラメル。ヴィーダガトオスノヲ、アキラメル！」

そう言つて、グングニルはもう一度立ち上がった。

槍を構えず、遙の放つ攻撃をもう一度受けようとする。

「いい加減にしろ……」

遙は拳を放つ。

だが。

「……ッ！」

その一撃は当てられなかった。

「そんな……ッ！ えいッ！」

遙はもう一度振るう。

だけど、当たらない。

「……！」

声を殺して、最後の一撃を振るう。

普通の人間に放てば、心臓を貫くであろう一撃。

それは……グングニルの胸の前で、止まる。

いや、止めたのは遙だ。

「出来ない……」

「……」

さつきまでは当てられたのに、遙にはもう拳を振るう事すら出来ず……ついには自ら変身を解除した。

「ダメだ。ダメな筈だ。私がヴィーダを生み出したのは、あの子を殺

した奴を、董を倒す為……。彼女がそれに逆らうなら、私は殺してでも止めるべきなんだ……。なのに、何故……。私には出来ない」

「……ママ」

「やめてくれ。その呼び方をするな……。身体が動かない。もう一度、もう一度ッ！」

そう呟きながらベルトを取り出し、装着する。

バックルから端末を取り出し、開こうとした。

しかし……。端末はポロリと自分の手元から落ちる。

ロードドライバーが、カシヤツと音を立てて地面に叩きつけられ、ココロと地面を転がっていく。

「……ッ！」

「……」

グングニルはそれに対し、無言でバックルを操作。変身を解除した。

遙が目を見開いて、それに対して告げる。

「何の真似だ……」

「ヴィーダ、ワカル。ママ……。モウタタカエナイ。ダツテ、ママモヴィーダノコト」

「……」

「ママニヴィーダオセナイ、ソレ……。ワカッテタ。ダカラ、ハンゲキシナカッタ」

「じゃあ……。私はどうすれば良い……。お前を倒せないなら、私はどうやって董を止めれば良い……。私のせいなんだ。こんな状況を生み出したのは、自分の弱さなんだ」

「ヴィーダ、ツヨクナル。ダツテ……。ヴィーダハソノタメニ、パパノカタキヲトルタメニウマレタカラ」

「……ヴィーダ」

そう呟き、抱き着いて涙を流そうとしたその時。

『……DRIVE READY?』

ドライバーの音が聞こえ、その方向を向く。
すると……。

既に剣の怪人・改へと変身していた何者かが、遥とヴィーダに剣を向けていた。

「お前達は……！」

第二百三十話

遙とヴィーダが見た剣の怪人・改は一人ではなく、集団だ。
その十数体。

誰が変身しているのかも分からないが、二号か董のどちらかが仕向けたのは明白だ。

「……ヴィーダ」

「ママ、サガツテテ」

ヴィーダがそう告げながら、もう一度バックルを腰に取り付ける。
成音から盗んできたフレイムシャワードライバーも取り付け、変身。

「ダイヘンシン」

『CHANGE FLAME SHOWER』

仮面ライダーグングニル フレイムシャワーフォームへと姿を変えて、ゾンビのようにゆっくりと向かってくる剣の怪人・改の集団へと歩いていく。

「ウギヤアツ！」

中にいるのは人なのか、それすら怪しい剣の怪人・改がグングニルへと剣を振るう。

「ハアツ！」

その剣を、手にしている槍で何とか受け止めるグングニル。

だが……。

「オモイ……ッ！」

グングニルは重そうに、これまた何とか弾き飛ばす。

○×女子高生徒会が使用していた量産型よりも、スペックが上がっているのか。

あるいは、オリジナルと同等の性能であるのか。

それに……。

「……！ ヴィーダ、脳波の正体は分かるか!？」

「マッテ！」

グングニルがそう叫んでから、武器を弾いた相手に追い打ちを掛け

ていく。

何とか一体目にファイナルドライブを放ち、燃える槍を強く叩きつけて吹き飛ばす。

「エイッ！」

吹き飛ばされた剣の怪人・改が変身解除される。

すると……。

「ナカミ……アノトキタオシタミンナトオナジ。ソレ、ホカノミンナモ……」

また不完全な、戦闘用の人工脳波が使われている可能性は遙も想定していた。

だが、問題は脳波の入れ物……肉体だ。

操られた一般人ではない。

というか……普通の人間ですらない。

ヴィーダや、裕太達董が作り出した肉体と同じ……人造物だ。

顔がないのだ。

頭こそあるが、目や鼻……口が存在しない。

見る為と呼吸する為の穴だけが顔に二つだけ存在している。

それが戦うためだけに生み出された事を、痛感させられる程醜い存在だった。

「董……なんて事を！」

「ママー！ ミンナヲタスケルヨ！」

「……ッ」

グングニルはそれに気付いてから、より激しく戦い始める。

「ハアッ！」

「ヴィーダ……」

同じ作られた人間として、思う所があるのだろう。

遙もヴィーダの気持ちを汲んで、倒れた身体を調べる。

「……」

心音が小さい。

それに、他の内臓も正しく機能していない。

肉体を生成する時に材料が足りていない証拠だ。

今救おうとしているヴィーダには酷な現実かも知れないが、この肉
体は……。

「死ぬ……」

「エ……」

「ヴィーダ、もう良い。こいつらにはもう死ぬ……ここは一旦退くぞ」

第二百三十一話

「ソナノデキナイヨ！」

「……！」

「ミサキダツテ、ユウタヤイチゴウノイノチアキラメテナイ！ ダカラヴィーダモ、コノヒトタチノイノチヲアキラメナイ！」

「ファイナルドライブを放とうとするグングニル。」

しかし、集団で襲い掛かる剣の怪人・改に腕を掴まれてそれを阻まれる。

「グエツ！ ギャア！」

何回か殴られ、吹き飛ばされるグングニル。

「誰か助けを……！」

遥は衝動的にスマホを取り出し、美咲に連絡する。

※※※

「遥さんからですわ！」

美咲は遥からの着信に応じる。

「はい！」

『美咲、今起きているか！』

「起きてますわよ！ 今貴女達を探して」

『悪いが助けてくれ！ 董の送り出した怪人の集団に囲まれた！ それもオリジナルと同等の性能……このままじゃヴィーダが！』

「分かりましたわ！」

美咲は着信を切る前に、別れようとした全員に告げる。

「皆さん、遥さんとヴィーダさんが襲われていますわ。このまま全員で行きますわよ！」

「ああ！」

裕太がそう返事を返したその時。

「！」

美咲に向かって、一直線に赤い光の刃が放たれる。

覚えがある。剣の怪人・改のものだ。

正面を見ると、剣の怪人・改の集団が……自分達を塞いでいた。

「ここにも来たのか……!」

「成音さん、貴女は下がってなさいな!」

美咲、裕太、明人、優香、前田の五人で同時に変身する。

「変身ですわ!」「変身」「変身系!」「変く身!」

それぞれの姿に変わり、武器を構えて向かっていく。

「ごめん皆……!」

成音はそう告げて、学校の方へと戻っていった。

※※※

殴られ続けたグングニルは、やがて変身も解けてしまう。

「早く、早く来れないのか!」

『こつちも剣の怪人達に阻まれましたわ!』

「一人でもいい、こつちにきてくれ! このままじゃヴィーダが!」

『……ッ! うわあッ!』

美咲が吹き飛ばされ、その衝撃で通話が切れる。

「美咲!」

遙もロードドライバーを使って変身、立ち向かう。

「ヴィーダ!」

何とか手にしている剣で、ヴィーダの身体を掴む剣の怪人・改を退ける。

「ママ……」

「ヴィーダ……。お前はママが絶対守る」

「ママ、ダメッ!」

ヴィーダの制止も振り切って、遙は剣の怪人・改へと向かっていく。

「はああッ!」

指揮官怪人の力は、自作の怪人の中では最高戦力。

だがやはりグングニルやアトミックといった仮面ライダーには基本スペックで勝つ事は出来ない。

ライダーと同等の実力を持つ剣の怪人・改に、指揮官怪人が太刀打ちできる筈もなかった。

「ぐっ……」

「ママ、ヤメテ……。ダメダヨ。ママガシンジャウ!」

「……死にたくないし、死ぬわけないだろ。あの子の仇、私は取るって決めたんだぞ」

遙は立ち上がる。

召喚した槍を構え、先を向けて告げた。

「送れるものなら送ってみせろ。私をあの子の所にな」

第二百三十二話

成音は戦線を離脱してから、急いで蘇我高校の生徒達の所へ向かった。

ドライバーを持っていない自分は戦えない。

今からヴィーダ達を助ける為には、やはり彼らの力がなんとしても必要だった。

「皆、まだ起きてる!？」

成音は蘇我高校の生徒達が眠っていた部屋に入っていく。

幸いまだ寝ておらず、何やら話し合いをしていたように見えた。

「何の用だ」

嫌そうに睨みつけてくる生徒達に、成音は土下座して頼み込む。

「お願いよ。あたし達に力を貸して！」

「あ？ お前達だけで十分じゃなかったのかよ」

「それが……今会長達の前に董の手先が現れて。アンタ達の力が必要なのよ！」

「ふん、それこそ死んでも御免だな」

「どうせ俺達に、狩野遥とあの小娘を助ける手伝いをしろっつーんすよね？」

「そうよ」

「だから、なんで俺達まであいつらを助けるのに命を掛けなくちゃいけないんだ？ それこそ、お前達に任せた意味がねえじゃねえか」

成音は拳を握る。

やはり、この人達は……心の底から彼女らを嫌っているのだと確信したから。

成音は諦めた表情で、その場の皆に告げる。

「……分かったわ。もう頼まない」

「……」

「でも、もしそうなら……もうあたしには関わらないで欲しい」

「あ？ どういう事だよ」

「アンタ達があたしの家族の事をそこまで言うなら、そんな態度を取

る人達に強くしてもらおうなんて思わない。あたしはアンタ達の為には戦わない」

「……」

蘇我高校の生徒達の何人かが成音を睨みつける。

「アンタ達は蘇我高校の生徒だから強いって思ってたけど、やっぱり明人の言う通りね。これまでだって、あたし達に頼らず、遙さんからベルトを借りて自分達で戦う事だって出来た筈よ。でもそれをしなかった。アンタ達は、自分のしたい事にすら命を懸けられない。そんな人達に、あたしの家族を任せたあたしが馬鹿だったわよ」

「なんだと……」

「プライドが傷付いた、とでも言うつもりなの？ 元々……あたし達にそれを頼んでる時点で、プライドなんてない癖に」

「くっ……」

「もう良いわ。こんな不毛な会話をしている間にも、皆は苦しんでいる。あたし……一人で戦う。アンタ達、とつとと帰りなさい。もう一度言うけど、あたしはアンタ達に強くしてもらわなきゃならない程弱くないんだから」

そう彼らに告げて、成音は行く。

本当に無意味な時間を過ごした……そう心の中で後悔しながら、校舎の外へもう一度走っていく。

耳を澄ませて、ヴィーダ達のいる場所に向かって。

第二百三十三話

ボマーは剣の怪人・改相手に、何とか途中まで通常フォームでやりあっていた。

だが思いの他ダメージが入らない上、相手の攻撃も中々重い。

二号が明人の身体を使って変身した剣の怪人・改とほぼ同等のスペック……なのだろうか。

「こうなれば……!」

『COMPLETE ALL WEAPON DRIVE READ Y?』

「ハイパー超変身!」

オールウェポンへと姿を変え、金のバットから剣の怪人の武器『メタルソード』に武器を変える。

『METAL SWORD』

そして端末で、ガス怪人の武器……ガス銃を呼び出す。

『WEAPON DRIVE GUS GUN』

「蒲生さん、力を貸してくださいな」

ガス銃からの高圧ガスで敵の動きを止めてから、右手の剣で敵を切り裂き、ダメージを与える。

しかし傷口は浅く、ダメージはあまり通っていない。

「やはり頑丈ですわね……ならッ!」

『FINAL DRIVE!』

端末のボタンを押してからベルトに戻し、剣の怪人・改複数体に向かってガス銃を放つ。

ガス銃の能力で圧縮された空気弾を放ち、敵を竜巻の中に閉じ込める。

そのまま某Φマークのライダーの如く、勢いよく敵を切り裂く。

「エアーカット!」

Φマークが出て、敵が灰に……なったりはしなかったが、斬った敵を変身解除へと追い込む。

そこでボマーも気付く、敵の正体に。

「な、なんですのこれは……」

のつぺらぼうで、人型をしているがとても人とは思えない外見の敵。

それが何なのかは分からないが、とにかく董達がまたいたずらに何かを弄んだ事だけは分かる。

「くっ……」

この人達も絶対に救う。

そう決めて、ボマーは武器をバットに戻してから端末を操作し、もう一度必殺技を放つ。

『FINAL DRIVE!』

通常フォームで言うライダーインパクトの構え。

だが集まるのはボムビットではなく、オールウェポンの力として含まれている全ての武器。

それがバットへと集まっていく。

視線を当てるべき相手へと向けてから、ボマーは一直線に駆け出し、バットを振りかぶる。

すると……バットを囲っていた武器が飛び出し、剣の怪人・改達を突き刺すように飛び出していく。

動きを止められた怪人達に、ボマーは勢いよく深紅の光を帯びたバットを叩きつけて叫ぶ。

「オールウェポインパクト!」

光が弾け飛び、大爆発を起こす。

ボマーの近くにいた剣の怪人・改達が問答無用で吹き飛ばされていく。

ボマーはその影響で身体を消し飛ばされてから蘇生し、もう一度バットを構えた。

第二百三十四話

成音は董作の劣化量産型のドライバーをいくつかバッグに入れて、何とかそれを引きずりながら走っていく。

一つ一つの重量は大した事はないが、やはり沢山あるとそこそこ重い。

何とか耳を澄ませて、戦闘が起こっているであろう場所へと駆けていく。

「あそこね」

成音がそう呟いてから、走る速度を上げる。

ズルズル音が大きくなるのを耳で感じながらも、成音は気にせず行く。

※※※

「ママ………！」

槍で剣の怪人・改を何とか薙ぎ払わんと戦う遥。

しかしロードドライバ―の性能ではまともなダメージを与える事は叶わず、ついに変身が解かれてしまう。

「ぐっ………」

首を掴まれ、苦しそうにする遥。

ヴィーダは立ち上がり、もう一度変身しようとする。

「ヴィーダー！」

ヴィーダを呼ぶ声が背後から聞こえる。

振り向くと……。

「ナリネー！」

大きなバッグを引きずって走ってくる、山内成音の姿があった。

「あたしも戦う。ヴィーダも一緒をお願い！」

「ウンー！」

成音がまず適当に一つのドライバーを取り出す。

剣の形。ソードドライバーだ。

それを腰で装着してから端末を取り出し、操作する。

『SWORD DRIVE READY?』

「変身！」

『COMPLETE』

剣のホログラム映像のようなものが宙から降り立ち、成音はそれを駆けながら掴む。

剣の怪人・改達の集団に向かっていきながら、その姿を剣の怪人へと変えた。

「はあッ！」

振り上げてから、成音は剣の怪人・改の一体を斬りつけようとし、寸での所で足を突き出す。

ダメージはないが何とか怯ませ、すかさず必殺技。

『FINAL DRIVE！』

成音が姿を消しながら、剣の怪人・改を素早く何度も斬りつける。
「……ッ！」

ダメージはやはりあまり通らず、剣の方がポツキリと。

剣が折れた事が変身が解け、ドライバーを投げ捨てて時間を稼ぎながら、もう一度戻って違うベルトを使う。

次は杖型の端末をしたロッドドライバー。

『ROD DRIVE READY？』

「変身！」

『COMPLETE』

すかさず次も必殺技。

『FINAL DRIVE！』

杖の先端に魔力のようなものを溜めてから、勢いよく放出する。

剣の怪人・改の前で大爆発を起こし、一体を変身解除へと追い込む。

「これで一体……！」

「ナリネ、スゴイ……！」

「状況によってドライバーを使い分けるとは、見事だ」

遙も成音の戦いぶりに感嘆を禁じえない。

「さあ、どんどん来なさい。あたしの家族は、あたしが絶対守る！」

成音は杖を構えて、まだ残る剣の怪人・改達を睨む。

第二百三十五話

「なあ、聞いて良いか？」

「なんだよ」

「山内成音の話聞いて、居ても立っても居られないって奴いるか？」

「はあ？ あんな女の言葉にイラついてんのか？ お前もちいせえ奴だな」

「ふん……だけど、ホントに小さいのはどっちなんだろうな」

「お前、どっちの味方するつもりなんだよ」

首を掴まれる生徒。

「確かにこの発言は、お前達に対する裏切りだったかも知れない。けど、明人さんや前田は、なんで狩野遥を助けようとするんだ？ なんで……自分が死ぬかも知れないと分かかってさ」

「……」

「俺らが……ビビりだって言いてえのか？」

「助けようとしなかったり、あくまで手伝いしかせず、自分達の手で戸間董とかいう奴を倒そうとしないという事実がそれを示してる。それとも……あいつらがもし死んだとしたら、俺達だけで何とか出来るのか？」

「……」

首を解放されてから、ベルトを着けて言う。

「俺は……やっぱり行くこうと思う。さっきの台詞、聞き捨て出来ないしな。それとも、お前達は自分で自分達の価値を下げるような真似をこれからも続けるのか？ 俺達蘇我高校は、そんなちっぽけな高校だってのか？」

その生徒はそう告げてから、外に向かって走っていく。

「私も行く」

「俺も……」

その生徒についていくように向かう者達。

残ったのは、さつきまで美咲や成音と言い合っていた一人のみ。

「……まったく、なんだってんだよ」

その生徒も、仕方ないと言いたげな顔でベルトを持って走り出す。

※※※

「くっ……」

ロッドドライバー、アックスドライバーを破壊され、残り一つ。ガンドライバーを装着し、ガンマンのようなガン怪人へと変身。何とか足元に拳銃を撃ってけん制し、その隙にもう一度ドライバーを操作。

『FINAL DRIVE!』

「うわあああッ!!」

成音は叫びながら、引き金を引いて強力な弾丸を放つ。

貫通こそしなかったが、動きが止まったその瞬間に飛び蹴りをかま
す。

「はあああッ!」

「ふんッ!」

だが、あともう少しの所でバックルを破壊され……変身が解ける。

「しまっ……」

「ナリネ!」

グングニルが成音の前に現れ、何とか追撃を防ぐ。

「ハアッ! ウワアッ!」

防御を弾かれ、グングニルと成音がドミノのように倒される。

「……ッ!」

もう終わりだ。

そう思ったが……。

「ふん」

小さな声共に、銃が一発撃たれる。

剣の怪人・改達はその音に釣られて、成音達を見逃す。

成音もその方向を向くとそこには……ガン怪人が立っていた。

「イキってた割に、銃の扱いはまだまだみたいだな」

そう告げたガン怪人は、向かって来た剣の怪人・改のベルトに銃を放つ。

バックルが破壊され、剣の怪人・改の変身が解ける。

「さあ、ドンドン来い」

「ちよつと、私もいるんだから私にも一人倒させなさいよ」

ガン怪人の隣には、斧の怪人に変身した女子生徒も。

「……」

その後ろから、量産型ではなくオリジナルのソードドライバーを使う剣の怪人まで現れる。

「もしかして……」

「ああ、まったくの不本意だがな」

第二百三十六話

「なんで……」

「あいつら、どうやら馬鹿にされたことを気にしたみてえだよ。あいつらだけが行って、俺だけ行かねえわけにもいかねえだろ」

「あそこまで言われちゃ、何もしないでいるなんて出来るかよ」

「そうよ！ 蘇我校生の強さ、見せるしかないよね！」

それを見た遥が、ボロボロの身体で……頭を下げて生徒達に言う。

「お前達……すまない」

「お前の謝罪なんて要らねえんだよ！」

「……ッ！」

「勘違いしてんじゃねえ。俺らはお前がいくら謝ろうが、お前を許したりはしねえ。俺は俺達のプライドを傷付けたこいつに、蘇我高魂を見せる為に来ただけだ。お前を助ける為になんて、来るわけねえだろ！」

「ああ……」

グングニルとも連携を取りながら、蘇我高校の生徒は何人かで束となって剣の怪人・改を倒していく。

「ミンナ……スゴイ」

正直馬力と言うなら、グングニルに勝てる者はいない。

ましてや量産型のドライバーだ。

だが連携力や戦闘技術は、まさに一流と言っても良いくらいの完璧な戦いぶり。

動きにも無駄がなく、本当に喧嘩のプロと言わんばかりの動き。

蘇我高校の生徒達が、この街の学生に恐れられているというのにも領けるレベルのものだ。

「おいヴィーダ、お前もだ！ 俺はお前を認めない。明人さんだけじゃない。俺らだって強くなって、いつかお前を一人でも倒せるくらいになってやる！」

「ミンナ……ノゾムトコロ、ダヨー！」

グングニルも元気に返事してから、蘇我高校の生徒達に続く。

フレイムシャワーの火力でゴリ押ししながら、一体ずつ倒していった。

蘇我高校の生徒達の加入で、何とか残り二体まで追い込む。

「これでやっと……残り二体ってどこか」

「トドメハヴィーダガ……」

「待て待てヴィーダ。ここは俺達がやる。いや、やらせろ」

「これも特訓だと思つて、よく見とけよ」

「行くぞお前ら！」

剣の怪人に変身している生徒が掛け声を上げて、他の量産怪人が手分けして二人の怪人を取り囲む。

それぞれの武器の特徴を活かして、確実にダメージを与えていく。

「グギャアッ！」

剣の怪人・改が声を上げる。

動きが困難な程ダメージを受けた剣の怪人・改二体相手に、剣の怪人がトドメを刺しに行く。

「行くぜ」

『FINAL DRIVE!』

剣の怪人が姿を消しながら、剣の怪人・改二体に向かって大ダメージを与えていく。

トドメは抜刀術。

ベルトを切り裂き、強制的に変身を解除させた。

「まあ、ざっとこんなもんよ」

剣の怪人が剣を地面に挿してからそう告げる。

第二百三十七話

戦いを続けていたボマー達。

しかし……。

『TIME OUT……TRANCE END』

ボマーのオールウェポンが切れ、強制的に変身が解けてしまう。

「えっ……うわあッ！」

ボマー——美咲が大きく吹き飛ばされ、地面へ叩きつけられる。

「しまった……」

「美咲！」

ムラマサが美咲を助けに向かう。

明人も何とか戦いを終わらせようと、剣を振るう速度を少し上げる。

優香と前田は……既に限界が近付いていた。

「……ッ！」

美咲は生身のままもう一度駆け出そうとする。

その時。

「お前がそこまでする必要はねえぜ」

聞き覚えのある声。

それと同時に、隕石の如く……火炎弾が空から剣の怪人・改達へと放たれる。

桁違いの威力のそれは剣の怪人・改を着弾と同時に飲み込み……一瞬にして消し炭に。

変身解除すらないまま、その姿を物言わぬ塵へと変えた。

「あいつも小物臭え割に、結構頑張るじゃねえか」

そう言いながら、二号が生身の状態で降り立つ。

「貴方……」

「おっと、あいつらの処分もしねえとな」

「させませんわよー！」

「おいおい、こいつらは戦う以外何も出来ねえ。それに適当に作られた身体だ。助けようとした所で手遅れだぜ」

「だからって……」

「おいおい、口動かす前に手動かした方が良いぜ」

「……！」

既に変身解除して倒れている人型も、火炎弾で焼き尽くす。

もう死んでいたのだろうか、それともそういう思考に至らなかったのか。

人型は指一つ動かす事なく、先に燃やされた彼らと同じ末路を辿った。

「にしても、あいつも酷い事をするよな。こんなにあつたらに命を作ってよ……。んまあ、あいつに道徳なんてもんを期待するだけ無駄か」

「……ッ！ 秀奈ああああッ!!」

そう言って武器を構えて駆け出したのは、ムラマサ……恐らく一号の人格だ。

二号の本名らしきものを叫びながら、刀を二号目掛けて振り下ろそうとする。

『COMPLETE』

二号はすかさずアトミックへと姿を変えた。

「お前……裕太じゃねえのか」

「俺はお前を許さない。悪戯に命を奪うお前を許さない！」

「お前がその言葉を吐く資格なんてねえだろ。お袋の命令つてのを免罪符に、お前は二つも命を奪った。俺はその数が増えただけ……お前も俺と同じだ！ 健斗！」

一号の本当の名を叫びながら、ムラマサの振り下ろした刀を掴んで蹴り飛ばす。

「……ああ。そうだ。俺はお前と同じだ。けど、俺はもう誰に何を言われても……絶対に命を奪わない。それを裕太と美咲に誓ったから！」

「面白れえ。良いぜ、戦ってやるよ。今度が楽しみだな」

「待て！」

ムラマサは追いかけてようとするが、瞬間移動でその場から姿を消

す。
「くっ……松永秀奈あああああッ!!」

第二百三十八話

そしてそいつは……勿論成音達の所にも現れた。

「！」

蘇我高校の生徒達が剣の怪人・改の集団を倒し終えた後、脳波感知能力を持つグングニルが、気配の方へと目を向ける。

どこからともなく、光の中から二号が現れ……ニヤリと笑みを浮かべた。

「オマエ……！」

グングニルが槍を構えて前に出ようとする。

「こつちにもいたな。可哀想な奴らが」

二号はグングニルにすら目もくれず、今にも死にそうな人型を見ながら歩く。

「お前が戸間董が作ったっていう人形か？」

剣の怪人がやや警戒しながら、二号に問いかける。

「その人形っていう言葉が、そのゴミクスや小娘と同じって意味だとしたら……違うな。俺をこいつらと一緒にされちゃ困るぜ」

「……」

「なんだその目……俺とやるか？ 勝てもしない喧嘩をして、余計に学校の評判でも落とすか？」

二号が興味もないと言わんばかりに、剣の怪人には目も向けない。

「そうか、お前も俺らを馬鹿にしてんだな」

「六角美咲や足利明人でも倒せねえ俺を、お前達がどう倒せるのか教えて欲しいぜ。とにかく……こいつらを消すのが先だ」

「マツテ、マサカオマエ……！」

「ああ……こうするさ」

「ダメ……ッ！」

グングニルの叫びも虚しく、二号が放った火炎で人型は激しく燃えていく。

抵抗一つなく消し炭になり、消し終えると同時に一息。

「小娘も、それに健斗も……馬鹿な奴だな。こんな奴ら、生かしておい

て何になるんだよ。こいつらは戦う為だけにしか生きられない。食事をすることも誰かを愛する事も出来ねえ。そんな奴ら生かしておくのが、こいつらの最善？ だとしたら……とんでもねえ馬鹿だな。戦う為だけに生まれた奴が戦えない状態で生きるのは死ぬよりも辛え。テメエらや俺とはちげえんだよ」

「ダカラツテ……コロシテイイリユウニナンテ……」

「なら今度戦う時、お前の手足を全部切り落として生かしてやるよ。その手足がなかったら、お前が生まれてきた目的も果たせねえ。そうだろ？」

「……！」

脅されたグングニルが握った槍を震わせる。

こいつを今すぐ倒したい……と心が抑えきれなくなっていた。

「おいお前……自分で仲間を焼き殺して何とも思わねえつてのか？」

「仲間って言葉だけは否定させて欲しいが……正直思ってるぜ。戦う為だけ生まれて、目的すら果たせずに死んで残念だったなってな」

「オマエツ！」

グングニルが二号にそう叫ぶ。

「オマエハユルサナイ！ イマココデ、ヴィーダガオマエヲオス！」
グングニルが左手をかざす。

変身していない二号を囲うように炎の魔法陣が出現する。

対して二号は瞬間移動は愚か、避けようとすらしらない。

ただ笑って立つのみ。

「ハアツ！」

もしかしたら殺してしまうかも知れない。

それすら考えず、グングニルは魔法陣から槍を放つ。

「変身するまでもねえな」

二号はそう告げて、自分に向かってくる槍を徒手空拳で防ぎきる。彼の身体から血が出るが、致命傷は一つもない。

血が流れ、一部が焦げた身体を……二号が指鳴らし一つで元に戻す。

「はっはっは……いてえいてえ。良かったな小娘。俺にダメージが

第二百三十九話

蘇我高校の生徒達の一部は、恐怖の感情。

一号……上杉健斗とヴィーダは怒り。

それぞれ、さっきの出来事に対して何かしらの感情を抱きながら

……朝四時。

全員で〇×女子高へと帰還した。

「……見たのか」

明人が、ヴィーダ達の助っ人に向かった蘇我高校の生徒達に問う。

「見ました。明人さん……」

「仮面ライダーアトミック……いやそれを扱う二号という者の強さは、俺達とは別格だ。いくら経験を積んだお前達でも勝てる相手ではない。だから、山内成音達に狩野遙やヴィーダを助けることを優先させた。それは分かったな？」

「はい……」

「俺、あいつがムカついて仕方ねえつすよ！ 仲間は簡単に殺すし、俺の事を戦いもしねえで弱えつてよ。俺、今度あいつと会ったら」

「殴るんすか？ 先輩」

「当たり前だろ！ あんなに言われたら、戦うなって言われてもな！」

「怖いっすよ。俺……もし自分が戦うって考えたら」

生徒の言葉に、ヴィーダが言う。

「オジケツイタノ？」

「ヴィーダ……？」

ヴィーダの言葉に、成音が動揺する。

「ミンナ、コロサレタ。ヴィーダ……スゴイオコツテル。ナノニ、ミンナハソウヤツテコワガルコトシカデキナイノ!？」

「ヴィーダ、落ち着いて！」

「ああそうさ！ 怖気づいたさ！ あんなの勝てっこないって思ってたあたり前だ！ 力だけはいっちょ前のお前でさえどうにか出来ねえのに、俺らがどうにか出来るわけねえだろ！」

「……」

それを聞いていた裕太……いや、一号が告げる。

「そこまで言うのか。ならばやはり、お前達は俺の特訓相手に相応しくないな」

『アンタ……』

「おいフク。お前調子乗んなよ。お前俺らより弱いくせに楯突くのか？」

蘇我高校の生徒が、裕太の身体に掴みかかった。

「離れろ……雑魚が」

「あん!？」

殴り掛かった生徒の拳を、一号が受け止める。

「あまり俺を怒らせるな」

「上等だコラ……お前なんてボコボコに」

「止せ」

明人が止める。

「その余力は特訓の時に使え。二度も言わすなよ」

「はい……」

「……」

一号は背を向けて、体育館の外へ。

「一号さん……」

美咲はその後で、彼を追いかける。

※※※

体育館から少し離れた場所に隠れて、健斗は拳を叩きつける。

『健斗……さっきのは』

「裕太。みなまで言うな。二号を恐れるような奴が、お前を強く出来るとは思えない。あんな奴と特訓した所で、俺達は勝てない」

『……健斗』

「美咲は……人殺しをした俺に対しても、仲間だと言ってくれた。だから、董が作ったあいつらも……俺の仲間なんだ。けど……けどっ！

董があいつさえ生まなければ……」

『……』

「俺……そんなのを見ても、董に対して怒る事も出来ない。二号に対

して怒りを抱けるのに、やっぱり董相手には……」

健斗は悔し涙を流す。

「それを見ていた美咲が……」

「一号さん、ですわよね？」

「……」

健斗にそう声を掛けた。

第二百四十話

「一号さん……相当、怒ってますのね」

「……おかしいと思うよな。誰かの指示とは言え人を殺した奴が、人殺しに対して怒りを抱くなど」

「別にそうは思いませんわ。貴方が変わった証拠。それに本当の貴方が優しく、愛する者の為に生きて、けど誰かの為に我慢が出来る人なのは……私が一番知ってますわ」

「我慢が出来る……か。さっきの言葉を聞いても、そんな事が言えるものなのだな」

「……」

美咲はそれに対しては答えず、問いかける。

「貴方は……知ってましたのね。二号さんの事」

「……ああ」

「聞いても、良いのですの？ 貴方と二号さんが、元々どういう関係なのか」

「……」

一号……健斗がこくりと頷く。

「俺と二号……松永秀奈は、幼馴染だった。幼稚園の時から仲……だったかな。上昇志向で、負けず嫌いのあいつが喧嘩を始めたら、俺が止めようとして、それでも出来ない。そんなのを、小学校くらいまで続けてた」

「中学の時くらいだったか、あいつは無謀な喧嘩をして負けて……プライドをズタズタにされて。その後から……あいつは誰と喧嘩しても、例え勝っても満足しなくなった」

「高校も大学も、不思議と俺はあいつと一緒にだった。俺は大学に入ってから董と会って、董の研究に協力する形で自分の身体を捨てた。恐らく……あいつもだ。記憶が戻った後、改めてあいつを見た時に既視感を感じた。性別や姿こそ違うが、あいつを松永秀奈だと認識出来た」

「そうでしたのね……」

「ああ。考えてみれば、多少のリスクを冒してでも強さを手に入れようとする行動も……あいつが松永秀奈ならあり得る話なんだ」

「……」

「それに、お前に対して言った誰も追いつけない強さが欲しいという気持ち。あれは恐れているんだ。誰かに負けて……弱いと罵られる事を」

美咲は黙って一号の話を聞いてから、問いかける。

「一号さん……二号さんが何を思って、ああしてあの人達を殺したのかは分かりますの？」

「……分からない。でも、あいつは負けた相手を二度と戦えなくするのに拘っていた。そういう事……なのかな」

「チガウ……フタリトモ」

そう言つて、ヴィーダが現れる。

「ヴィーダさん？」

「アイツ、イツテタ。タタカウタメダケニウマレタヤツヲ、タタカエナイジヨウタイデイカスナンテシヌヨリツライツテ」

「……」

美咲はその言葉に対して、二号を否定出来るものを見つけられない。自分も……もし本当に戦えない身体になったら、生きる意味などないと思うかも知れない。

その時、相手の意思に関わらず殺して欲しいと思うかも知れない……と感じたから。

「デモ、ソレハコロシテイイリユウニナンテナラナイ。ダカラヴィーダハゼツタイニゴウヲユルサナイ」

「俺もヴィーダと同じだ。どんな理由があっても、命を奪っていい理由にはならない。お前が人殺しの俺を仲間と思ってくれたように、俺もあいつらを助けたいと思ったから」

「そう……ですわね。けど、倒す為には強くなる必要がありますわ」

「だから蘇我高校の生徒達と共に……そう言うんだろ？」

美咲は凶星を突かれて、言葉が出なかった。

「俺も……それにヴィーダも、二号の強さは知っている。今のままじゃ勝てない事も分かるさ。けど……あいつらとの特訓で強くなれるとは思えない」

「一号さん……」

「ヴィーダも、ドウカン」

二人はそのままその場から去っていく。

美咲はその足を止める言葉を探そうとしたが、今は見つかりそうになかった。

第二百四十一話

「なんなんださっきの。フクにしては結構言ってたな」

剣の怪人に変身していた生徒が言う。

「でもよ……フクにしては変じやなかったか？ イキってるわけじゃなくて、アレはマジに聞こえたぜ」

「あたしがボールを投げまくったフクは……ああじやなかったわ」

「痴漢が来るーって言われて焦って追いかけてたフクじやなかったわよねアレ」

——蘇我高校の女子生徒達酷すぎるわね……裕太を何だと思ってるのかしら。

「今のあの人は、アンタ達の知ってる裕太じゃないわ」

「あ？ どういうこったよ」

「……そもそも、裕太のあの身体はあたし達と違う。戸間董によって造られたもの。そしてあの身体には……人格が二つある」

「人格が二つ……？」

「ええ。あの人は裕太じゃなくて……あたし達が一号って呼んでる人。戸間董の実験の被験者にして、本物の福沢裕太を殺した人。それに……戸間董の命令で、遥さんの大切な人を殺した人」

「ま、マジかよ……」

「じゃあ、俺らのパシ……先公だったあいつは……」

なんかまた可哀想な響きが聞こえたけど、空気にスルーね。

「裕太であって裕太じゃない……人造人間だったって事よ」

「……マジかよ」

「でも……それなら腑に落ちるな。ドライバーを盗んだわけも、狩野遥の計画を最初邪魔しようとしたわけも」

「……」

※※※

「ナンデ……ミンナコワガルノカナ……」

「……」

ヴィーダが分からないと言いたい顔で、健斗の方を見る。

「俺にも分かららん。ただ分かるのは、あいつらに任せた所で……何の成長にも繋がらないという事だけだ」

「イチゴウハ、ヴィーダノキモチワカッテクレル？」

「ああ……分かるさ。俺だって、あんなに簡単に命を奪うあいつを黙って見過ごせない。それに……俺はあいつが幼馴染だった事を思い出したんだ。あれ以上、あいつに罪を重ねさせたくない」

「ヴィーダモ、アイツトメタイ」

「ああ……」

健斗は俯きながらそう呟く。

『健斗……』

「なんだ、裕太」

『これからどうする気なんだ？ お前とヴィーダだけで』

「……何か別の方法を探すまでだ。幸いヴィーダはやる気だ。ヴィーダと共に特訓する……という手もあるのではないか？」

『そうだな……それもそうかも知れないな』

「大体、あいつらとの特訓は……お前にとっては苦痛な筈だ。お前はあいつらのせいで体調を崩していたではないか」

『……』

「お前の為にも、俺達だけで特訓する。ヴィーダ、組み手でもするぞ」
「ウン、ワカッタ」

健斗に対してヴィーダが左拳を握って答える。

朝六時。二号が告げた約束の日まで、三日と十数時間。

第二百四十二話

結局二人が戻らないまま、美咲は遥の所へ向かう。

だが当然と言えば当然か……遥自身、それどころじゃないと言わんばかりに疲労していた。

「美咲か……」

「特訓は、出来そうですか？ 無理なら強制は出来ませんわ」

「……そういうわけにもいかん。あの人型は恐らく……董が作った。確か、二号は董とは決別した筈だな？」

「そういう事を言ってたように聞こえましたわね」

「恐らく昨日の攻撃の意図は、自分に逆らった二号に戦わせない……というものだろうな。だとしたら、またあの人型を作られる可能性は大いにある。それを二号がまた処分する……という事もな」

「……」

「それをした私だから分かる。目的の為に悪戯に命を作り出すのは、目的の為に誰かを殺す事と同じくらい罪深い事だ。作られた命……それも思考を作り主の思い通りに変えたとして、その枷が外れば自然と欲望が生まれ、普通の人間と変わらない欲望が生まれる。ヴィーダや一号、そして二号がそうだったようにな。どんなに作り主がその性格をいじろうと、自分のしたい事の為に生きたいというのまでは変えられない。そして生き続ければ、他の欲が出てくる。だから、それすら度外視してこんな事を続ける董を、私は止めないとならない。ヴィーダや一号もそれを望んでいる……筈だ」

「そうですね……」

「だが、昨日の行動は些か自分勝手だった。すまなかった。私が傷付けた蘇我高校の生徒や、ヴィーダの顔を見ていたら居ても立っても居られなかったんだ」

「自分のしたい事があれば、誰にも相談せず一人でもやろうとする。

私は貴女よりもそういう生き方をしてきましたもの。私はそれを悪い事だとは思いませんわ」

「そうか……」

美咲の笑みに対して、遙も口元だけ笑顔を作って呟く。

「けど……ですわ。貴女は董さんを殺してでも止められればいいのか、それともこれからヴィーダさんと一緒にいたいのか。どちらなんですか?」

「……それは」

「少なくとも、貴女が進んで罪を犯すような真似をしない人間なのは確かですわ。貴女がそうしようとしたのは、仕方がなかったんですね」

「ああ」

「ヴィーダさんといいたいという気持ち……貴女はそれを優先すべきですの」

「けど、それでは……」

「本当にヴィーダさんが心配なら、私一人で戦う選択をしても良いですわ」

「……」

「その為の特訓ですもの。出来る事なら、私一人の力で二号さんを倒したいですわ」

「美咲……」

「じゃあ、取り敢えず話はここまでにして……いけそうですの? 私は今度こそ負けませんわよ」

「……」

「やっぱり、無理そうですね?」

「いや、私の為にそこまでしてくれるお前に……どう礼を言ったら良いか分からなくてな」

「私は誰かの為に何かをした事はありませんわよ。全部自己満足ですの」

「……そうか」

遙は一息ついてから言う。

「やるぞ。特訓を……絶対に勝つ為に」

「ありがとうございますわ」

第二百四十三話

特訓の開始時間が過ぎてても、ヴィーダ達は戻ってこない。

「まったく来ないな」

「あいつらなんてどうでも良いよ。どうせ作りもんなんだから、俺らと違って恐怖とかないんだろ」

「ちよつとそんな言い方はないでしょー!」

成音が昨日健斗に掴みかかった生徒に怒鳴りつける。

「残っている者達だけでも特訓を始めるぞ」

明人がそんな様子を気にも留めずにそう告げた。

「明人さん……あの二人がまだ」

「……お前達と特訓する気がない者呼んだ所で意味はない。それに……もし昨日の戦いで犠牲者が出たとしても、お前達は同じことを言えるのか?」

「……」

「そういう意味では、ヴィーダも正論だな。お前のように敵を目にしただけで戦意喪失するような者が、一体何を教えられると言うのだ?」

昨日の俺や山内成音の言葉、それにあいつとの出会いで、少しは良い刺激になったのではないかと思っただが、お前は違うようだな」

「明人さん……」

「もう良い。帰れ」

「え……でも」

「俺の見込み違いだった事を今詫びる。分かっただらさっさと帰るんだ」

「明人さん!」

「ちよつと、酷すぎるんじゃないんすか明人さん。明人さんだって、あの二人がいなければ無理だと言ってたじゃないすか!」

「昨日の話を忘れたのか? 俺は確かに事実として、お前達が戦って勝つのは不可能だと言った。だが特訓の手伝いの話を出した時、お前達は誰か一人でも彼女らに任せる事に異を唱えたか? それに気付かないお前達に、俺や山内成音が奮い立たせたというのに……こいつ

は全く成長していない。勝てもしない奴が戦うと吠えている方がまだマシだ」

「……ッ」

「他の者もそうだ。もし自分が戦うと考えたら怖いと思うなら、今すぐに帰れ。そんな奴が特訓を手伝う資格はない」

「……」

数人くらいが、体育館へと戻っていく。

残ったのは、ほんの数人だ。

「明人、良いの？ これで」

「会長お」

「俺は別に強制はしていない。半端な者があいつに立ち向かおうとしても意味はない。ただそれだけの事だ」

※※※

組み手を続ける健斗とグングニル。

スペックこそグングニルの方が上だが、健斗も負けじとそれに追いついていく。

ある程度の所で刀を収め、健斗はグングニルに問いかけた。

「一つ聞きたいんだが良いか」

「ドウシタノ？」

「俺は狩野遥の大事な人を殺し、裕太の命を奪った。董の命令とは言え、実行したのは俺なんだ。そんな俺が……あいつらの死に怒りを覚えた。お前はおかしいと思うか？ あと……俺の事は、大丈夫なのか？」

「……ワカンナイ。ヴィーダニハ、イチゴウガダレカヲキズツケルヨウニハミエナイシ、ジツサイソレヲミタワケジャナイカラ……。ケド、ヴィーダモソコハミサキトオナジ。ソレハイチゴウガカワレタツテコトダヨ」

「そうか……」

「コツチモキキタイ」

「なんだ？」

「イチゴウハ、ジブンガアイシテイタイテトタタカウノ……コワク

ナイノ？ モシカシタラ、タタカイニマキコマレテシヌコトダツテアルカモシレナイ。イチゴウハソレデモ……タタカウノ？」

「ああ……戦う。まだ美咲と裕太に対して、何も償えてないからな」

「ツグナイ……」

「でも、それだけじゃないかも知れない。俺がこうして戦おうとするのは……」

「？」

「いや、今は良いか。特訓を続けよう、ヴィーダ」

「ウン！」

第二百四十四話

予定を変更し、成音は優香や前田と組んで残った生徒達を相手する事に。

明人はその指示を出してからどこかへと向かった。

「まさか明人、そこまで厳しい人だったなんてね」

成音が戦いながらそう呟くと、前田が返す。

「仕方ないわよお。蘇我高校の生徒が何かに怖気づいたんだとしたらあ、名折れだもん」

「でもやっぱり、みんないた方が良い系なんじゃ……」

優香が心配そうにそう告げる。

「俺は明人さんの意見に賛成だぜ」

「あら、昨日はあたしがああ言うまでやろうとしなかった癖に」

「う、うるせえ！ てかアンタ一々一言余計なんだよ！」

「はあ？ あたしは事実を言ったまでよ」

「ま、まあまあ喧嘩はやめる系！」

「もお、喧嘩しないのお」

「行くぜ山内成音！ 蘇我高校の三年なめんなよ！」

剣の怪人が素早く火炎放射器怪人の成音を追いつめる。

「望むところよ」

成音も背中ブースターを展開。

旋回しながら飛び回り、高速の斬撃を何度も躲す。

相手の姿が見えた瞬間、火炎弾を地面に向かって放ち、爆炎でけん制。

そのまま相手に向かって火炎弾をもう一度放つ。

「はっ！」

「つぶね！」

剣の怪人は難なくそれを回避。

剣を構えなおしてから、瞬間移動並みの速度で成音と距離を詰め薙ぎ払う。

「ッ！」

斬撃が成音の脇腹へと命中し、成音は少し後ずさった。

「こいつでトドメだ！」

『FINAL DRIVE!』

剣の怪人は姿を消しながら、単発の威力が上がった連続攻撃を火炎放射器怪人にお見舞いする。

隙が出来た成音に対応は出来ず、全発命中。

変身が解け、火炎放射器怪人は成音の姿へと強制的に戻された。

「きゃっ！」

成音は地面へと叩きつけられる。

「へっ、どうだ」

「やるわね。けど……まだこれからよ」

成音はもう一度立ち上がり、フレームシャワードライバーを前に突き出しながら告げた。

「そうこなくっちゃな！」

剣の怪人が剣を構えながらそう答える。

※※※

ヴィーダ……仮面ライダーグングニルと健斗……仮面ライダームラマサの戦闘中。

二人の間に入り込むように、明人が剣の怪人・改に変身して現れた。

「……明人！」

「精が出るな。二人とも」

「アキト？」

「丁度良い機会だ。一号、それにヴィーダ。二人がかりで俺にかかってこい」

「……良いのか」

「ソレジャ、アキトガフリ」

「そうかどうかはやってみなければ分からない。とにかく……全力で来い」

明人が剣を構える。

グングニルとムラマサも気乗りしない表情を仮面の下で浮かべながら、武器を構えて駆け出す。

第二百四十五話

グングニルが槍を振り上げ、ムラマサも明人に向かって刀を突き出す。

「…………ちだ」

明人……剣の怪人・改が一瞬にして背後に移動する。

「くっ…………」

「仮面ライダーアトミックはこれより速く動ける。俺に当てられないようでは、あいつに当てる事など出来る可能性など皆無だな」

そう言いながらも、明人は瞬間移動並みの速度で移動し、グングニルとムラマサに一撃命中させる。

なんてことない、軽い右薙と左切り上げ。

だがそれだけで……グングニルとムラマサの二人を大きく吹き飛ばす。

「強い…………」

健斗が明人と初めて戦ったのは、董に捕らえられ、二号……松永秀奈のコピーされた人格を植え付けられてすぐの事。

サクク怪人として戦った健斗を、明人は確か……狩野遥の作ったドライバーの一号機たるソードライバーで圧倒していた。

二号の妨害が無ければ、あの時健斗は負けていた。

あの時から、健斗も自分自身を鍛え、そして元々二号が入っていた身体を手に入れ、ムラマサとして戦っているのに、剣の怪人・改として戦う彼はその倍は成長している。

「前に俺はお前に言ったな。自分のしたい事の為に戦えているのかと」

「…………！」

「あの時、二号に怒りを覚えたのはお前の意思か？ それとも……そうしなければならぬという義務感か？」

「さあな。少なくとも、俺は怒りを感じた。演技なんかじゃない。俺達を殺したらそれだけで死ぬものを作ったのに、それでも俺は董に対して怒れない。あるのはただ、彼女と一緒にいたいという気持ちだ」

け。止めたいとは思うのに、彼女に怒れない自分が分からない！」

刀を振るい、明人に当てようとした。

だが間一髪で躲される。

「それで良い。その気持ちがあれば、お前は成長したと言える。だが……」

「ぐあつー！」

ムラマサに明人の蹴りが命中し、大きく吹き飛ばされた。

「その気持ちを叶える為の実力が足りんな」

「どうして……」

「ハアアアッ!!」

迫ってくるグングニルの攻撃を、明人が掴む。

「お前達が俺や美咲、そしてもしかしたら山内成音にすら劣る理由を教えてやる。経験の不足だ。力や脳に植えられた知識だけに頼り、学びがない。だから経験だけは豊富な奴らに教えさせた」

「……」

「だがあいつらにも足りないものがある。それはお前達のように自分が戦いたいという強く熱い想いだ」

「オモイ……」

「強者が集まる蘇我高校。俺は過去に拘る気は毛頭ないが、今のあいつらを見てみると……その肩書を捨てるべきだと常々思う」

「……」

「俺の考えがおかしいのだろうか。今の時代……例え仲が違う事があつたとしても、話し合い一つで解決出来てしまうものもある。俺のように拳をぶつけ合い、戦い合った後にまた再戦を誓い、認め合う。そんな者は彼らから見れば古臭く感じるのかも知れない」

変身を解くと、明人があまり見せない涙を流す。

「俺は、六角美咲やお前達のように……戦う事で誰かに思いを伝えた者と会えて幸せだ。お前達なら、今の肩書だけの蘇我高校の生徒を変えられると思った。だが……それはお前達には厳しい事だったな」

明人は背を向けて、どこかへ去ろうとする。

「待ってくれ」

それを健斗が止めた。

「今あいつらはどこにいるんだ？」

「ヴィーダ、ヤツパリ……」

「……」

明人が振り向いて、その口を開く。

第二百四十六話

明人の指示で、体育館に戻った生徒達数名。

帰宅の準備を始めようとしている者、何もせず考え込んでいる者、そして今からでも戻ろうかと考えそわそわしている者。

今剣の怪人として戦っている生徒に対して恐れを口にした者……二年の小早川明憲（こばわかかわあきのり）は、二番目に該当していた。「……」

特訓の手伝いを明人に頼まれた時……明憲も勿論他の生徒達と同じく引き受けた。

単純にあの戦いを見せてくれた美咲の手伝いが出来るなら、と思っただが、狩野遙を見た時に……恐らく皆の心の中にもあつた気持ちが溢れそうになった。

蘇我高校の生徒を復讐の道具に使った拳句、一時は怪物から元の姿に戻れなくした彼女に対する怒りや辛み。

流星にそれを表に出したりはしなかったが、成音に救出を頼まれた時は拒否する側に回った。

美咲達が怪我をすれば狩野遙が自分達を利用した原因である戸間董を倒せなくなると思ったし、そもそも狩野遙など死ねばいいと思っていた。

戸間董がした事も最低だが、狩野遙が自分達にした事を考えれば、狩野遙を助ける理由などなくなる。

あの時だつて狩野遙を許したわけじゃない。

明人や成音の言葉で奮い立たせられたから、戦ったのみ。

美咲達が戦おうとしている白髪の福沢裕太のような男と対峙した瞬間、息をするように生き物を殺すあいつに恐怖を感じた。

明憲とて、喧嘩の経験はあつても、殺し合いの経験はない。

だから……自分が戦うかも知れないなんて考えたくない。

でも……。

「俺は……」

このまま弱い者扱いされるのだからって気に入らない。

それはきつと他の皆も同じだ。

私立高校である蘇我高校にも、一応受験のようなものは存在する。だが力こそ全てという古風な強者が揃うあの高校では、受験などただの飾り。

入ってから先輩達に力を試され、もし蘇我高校の生徒が持つ力として相応しくないと判断されれば、周りから陰口を叩かれ、自主退学させるを得なくなる。

自分にはそんな経験は無かったが、今は憧れの足利明人にそうさせられているようにも感じた。

「おい」

俺達が決断をする前に、一つの声。

福沢裕太のものだ。

だが恐らく……彼のではない。

彼の中にいる、もう一つの人格の方だろう。

振り向くとヴィーダと共に、彼が立っていた。

「なんだよ……フクの顔してる癖に偉そうな態度とりやがって。俺達に何か用かよ」

「用が無ければお前達の所になど来ない。あいつもお前達にはトラウマがあるしな」

「……」

「一応聞いてやる。本当にこのまま帰るつもりか？ お前達」

第二百四十七話

「だったら？ お前達、臆病者の俺らの指図受けるつもりないんだろ？」

「ああ……そうだ。お前達は自分の勝てる相手としか戦おうとしていない。だからそうやって勝てない相手から逃げようとする」

「んだと……！」

明憲は拳を握りながらそう呟く。

「だがお前達は既に俺達よりも多く経験を積み、尚且つその力を認められてここにいる。それは紛れもない事実だ」

「だからなんだってんだよ」

「俺達はその逆だ。勝てる力も、経験値も少ないのに、怒りだけで戦おうとしていた。それでは二号……松永秀奈に勝つ事など出来ない」

「……」

「頼む。お前達が今までの戦いで経験して得た強さ……それを分けて欲しい。俺達が今以上に強くなる為には、それが必要なんだ」

「俺達である必要ないだろ。あいつらだっただけまだいるんだしよ」

帰ろうとしていた生徒の一人が言う。

健斗はそれに対して返答出来なかったが、隣に立つヴィーダがそれに答える。

「イイノ？ ソレデ……」

「ヴィーダ……」

「ヴィーダダッタライヤダヨ。タトエジブナイガイノダレカガデキルコトダッタトシテモ、ヴィーダガソレヲヤリタイ。ダツテ、セツカクソレガデキルチカラガアルノニシナイノハモツタナインダモン！」

「もつたい……ない」

「良いか！ 俺らはお前らみてえな化け物とは違うんだよ！ ただの人が化け物を怖いって思っただけが悪いんだよ！」

「怖いと思う気持ちは誰も同じだ」

明人がそう告げて、体育館の入り口近くに現れる。

「お前達に足りないのは、自分から進んで戦いたいという気持ちと、恐

怖に対する克服だ」

「明人さん……」

「俺達は六角美咲に負け、強者ではなくなった。また強者に戻る為には、どんな相手でも自分が戦いたいという気持ちこそが重要だ。だが……お前達は力だけの者に勝てるだけの経験や技を持ちながら自分が戦いたいという思いすら放棄した」

明人が何度も伝えようとしていた事だ。

「この二人は実力が足りない事を自覚しながら、それでも自分より強い相手と戦おうとする意思を持つ事が出来る強者だ。つまり今のお前達と正反対の存在と言える。お前達でさえ、奴と戦っても勝てないのは事実だ。それは俺でも分かる。だが、そんなお前達が彼らのような力強さを手に入れようと思えば、俺達は再び強者に返り咲けるかも知れない」

生徒達が明人の言葉にざわめく。

「俺が今この場でお前達にして欲しい事は、こいつらに教える事だけではない。六角美咲達が何故、お前達に勝つ事が出来たのか……それを学ばせる為にここに連れてきた」

「明人さん……」

「それすらも拒否するようなら、本当に帰れ。強さを求めぬ蘇我高校の生徒など……いる資格などない」

「明人さん！」

生徒の一人が明人の名を呼ぶ。

「俺……やります！ あの化け物は倒せないけど、少しでもあいつに一矢報いたいです」

「わ、私もっす！」

「俺もー！」

その場にいた全員が奮起する。

それを見届けた明人が、指示を出した。

「全員校庭へ出る。特訓を再開するぞ」

第二百四十八話

青春ドラマの如く、体育館にいた生徒やヴィーダが校庭で特訓中の成音達の所へ駆けていく。

健斗はそれに向かってゆつくりと歩いていた。

『おい』

その途中、裕太が声を掛ける。

「裕太、すまん。お前の身体使ったままだったな」

『お前、意外と言う時は言うな』

感心した声でそう告げる裕太。

「……別に？　ただ、俺は明人に指摘された所を直すのに彼らが必要だと判断し直したまでだ」

『そっか』

「それより、今ならチャンスだぞ。お前もあいつらに一言、ビシツと言ってやったらどうだ？」

『お前良い事言うな。つまりお前のフリして言えば良いって事か？』

「……ふっ」

健斗がクールに笑い、裕太と入れ替わる。

「おいお前ら！　これからは俺を見習うんだぞ！　何せ俺は勇氣ある男だからな！」

——馬鹿！　そんな風に言ったら！

「あ？　お前……フクだろ？」

「ゑ？　違うよ？　俺……上杉健斗だよ」

「俺らに脅されてビビるならお前フクだろ。俺は健斗の勇氣は認めてもお前はへなちよこだと思っつからな？」

「へ……へなちよ」

「ああ？　なんか文句あつか？」

「な……ないです」

「んじゃ詫びの印に今からコーラ買ってこい」

「く……くそ……」

余計な事を言わなければ良かった……と健斗は心の中で後悔した。

※※※

昨日よりも限りなく互角の勝負を、美咲と遙は繰り広げていた。遙のやや卑怯にも見えるが合理的な戦法に対し、美咲は何とか工夫して正々堂々と挑んでいく。

趣旨をガン無視しているが、それでも美咲は無視したまま自分のスタイルで強くなっていた。

「なんて奴だ……」

遙はそう呟きながら、火炎放射器とオーディンランスを装備。

魔法陣から炎の槍を勢いよく飛ばし、美咲を狙う。

普通なら自爆すれば簡単に躲す事が出来るし、これを使えばそうでない相手であれば一網打尽、美咲と同じ蘇生能力があったとしても、復活後の隙を狙う事が出来る。

「そう来ましたわね」

『METAL SWORD』

『WEAPON DRIVE SPECTER SWORD』

美咲は右手に剣の怪人の剣、左手にスペクターソードを装備。

武器の特性を活かして素早く動き、高速で何本も飛んでくる槍をほぼ全て防ぎきる。

その時に出来た隙を突く遙に対しても、二本の剣で防御。

元ヤンなのが分かる鮮やかなキックで遙を吹き飛ばし、端末を操作。

『ACCELERATOR DRIVE』

『FINAL DRIVER!』

瞬間移動並みどころか目で追えない速さで、遙に対して高速の斬撃を何度も叩き込む美咲。

斬撃が止んでから、美咲はすぐ背後に現れた。

「ハイパーツインスラッシュ」

技名をかつこよく呟いた後、蓄積されたダメージが遙を吹き飛ばす。

第二百四十九話

その後何度か戦闘を行い、美咲と遙はログアウト。上体を起こしてから、美咲は眩く。

「しかし、生身の身体を動かせないとやっぱり戦ってる感があんまり出ませんわね」

「お前は身体能力云々より、まず戦い方に問題があるからな。と言つても……どうやら戦い方を変える気はないようだが」

「私はどんな相手でも正々堂々とやりたいんですわ」

「……（勝てない相手を毒殺する為に料理が上手くなった奴の言葉とは思えんな）」

「何か言いましたの？」

「何でもない。休憩しよう」

遙は咳払いしながらそう告げて、冷蔵庫に入っていたお酒の缶を取り出す。

「真昼間から酒ですの？」

「……これがあつた方が集中出来るんだ。お前の高校ならいそうだがな、飲酒経験者」

「まあいますわね」

美咲の返答を聞きながら、遙は早速一口。飲みながら、美咲に何かの缶を渡す。

お酒ではなく、ただのサイダーの缶だ。

「ありがとうございますわ」

プルタブを開けてから、口に入れる。

程よいシユワシユワ感と甘味が口いっぱい広がった。

「なあ」

ある程度飲んだ所で、遙が声を掛ける。

「どうしましたの？」

「私には、どうしたら良いか分からん」

「……何がですの？」

「さっきの話に戻るが、私は蘇我高校の生徒を復讐の道具にした事、そ

れにヴィーダを生み出した事を自分の罪と認識している。これ以上誰かに迷惑を掛けない為、私が全ての罪を背負って董を殺してでも止めようとした」

「そうですわね」

「けど……それは出来なかった。謝罪など必要ないとも言われたが……」

「そう考えるって事は、その後に来る言葉は予測出来ますわ。許して貰いたい、自分もきちんと謝りたい。そうですわよね？」

遙は首を縦に振るのを躊躇ったが、美咲の目を見てから縦に振る。

「そうですわね……私も人付き合いというのは得意ではありませんし、どう言えば良いか正直迷いますの」

「……」

少し考えてから、美咲は蒲生と戦った時の事を思い出す。

そして生徒会のメンバーに見限られ、辞められた時の事を。

「私も……仲間に見限られた事がありますわ」

「……」

「この前まで戦っていた剣の怪人・改達は、元生徒会の集まり。私は彼女らの感情を理解しないで……自分のやりたいようにやってきましたわ。私が蘇我高校と戦う事を選んだ時、ついに彼女達は私を完全に見限りましたの……」

「そんな事が……」

「私は今でも、彼女達がもう一度私を信じてくれる為にどうするべき考えてますわ。今の自分のまま……彼女達が私を受け入れてくれる方法を」

第二百五十話

「今の自分のまま……？ 馬鹿を言うな。私はお前が変わったと言われた人間性でさえ受け入れて貰えない。今のままを突き通した所で、相手に受け入れてもらう事など……」

「すぐには無理かも知れませんが。この特訓と同じです。この特訓の趣旨は私の戦い方を変える事かも知れませんが、戦い方をいくら変えた所で、癖や性格はいくらでも出ます。だから、私は何度負けても戦い方を変えなかった。自分のやり方だけで、私は貴女を倒そうとしたんですわ」

美咲は飲み物を空にしてから告げる。

「誰かの為に変わっても、それは相手に自分を認めてもらえた事にはなりません。貴女が今の貴女のままで、どうやって相手に認めてもらえるか。それを考えなさいな」

「……」

遥は少し俯く。

美咲はそれを確認しながらも、遥に告げた。

「そろそろ続きを始めますわよ。まだまだ、自分のやり方を極められてませんもの」

「ああ、そうだな」

遥はそう言いながらも、美咲に言われた事を考え続けた。

※※※

その頃、逆にヴィーダ達が休憩に。

成音と女子生徒数名が料理をしに向かってから、ヴィーダが自分と戦った相手である男子生徒に話しかける。

「アノ……ハナシイイ？」

「な、なんだ？」

嫌そうな顔はしていない……が、ちよつと意外そうな顔で反応された。

「ヴィーダハ、ソガコウコウノミンナニアヤマラナクチャイケナイコトガアル。ソウデシヨ？」

「……」

「ン？ ドウシタノ？」

「い、いや。ド直球で聞かれたから、少し反応に困ってな。まあ確かに……俺達は狩野遥やお前に思う事は沢山ある。今だってあんまりよくは思っていないしな」

「ソ、ソウダヨネ……」

「お、おい……あんまり目をうるうるさせるな。誤解されそうだからその見た目じゃ」

「ゴ、ゴメン」

「ところで、なんで急にそんな事聞くんのだ？」

「ヴィーダ、アノトキハマママノタメニイツシヨウケンメイタタカワナキヤツテバツカリデ、ミンナノコトカンガエテナカッタ。ダケドイマハイツシヨニトツクスルナカマ。ダカラ、モシミンナガヴィーダヲキニイラナイナラ、ワルイコトゼンブアヤマラナキヤツテ」

「お、お前なあ……それが昨日やついさつき俺達に吠えてた奴の態度かよ。ちよつと調子狂うぜ……」

「ン？」

「あーいや、分かんねえなら良いや。んで、そうだな。謝りたいねえ……。少なくとも俺はお前が謝る必要はあんまねえって思うけどな」

「ドウシテ？」

「あくまで俺の感想だけど、お前は遥の命令で戦わされてただけに過ぎない。逆らったら痛い目に遭ったのかも知れないし、責めるに責められないってのもあるな。けど、他の奴はどうか分からない。謝つても許してくれないかも知れないけど、お前はそうしないと気が済まないのか？」

「ウン……。ヴィーダハミンナトナカヨクシタイ」

「なるほどな……お前、そんなに小さいのに凄い心がでつかいんだな」

「ソ、ソウカナ？」

「ああ。俺は狩野遥を認めるのは難しくても、お前は割と好きになれそうだな」

「ホント？ イツカママモイツシヨニミトメテモラエルヨウニガンバ

ル！」

「お、おう。お、そろそろ飯出来るみたいだぞ」
「お待たせ！」

その声と共に、成音達が飯を運んでくる。

第二百五十一話

夜になり、特訓が終了。

遥はあの後何度も美咲と特訓を行いながら、支障が出ない範囲で色々考えていた。

自分の性格を無理に変えるのではなく、本来の自分のまま……彼らにどう接するべきか。

だが……。

「本来私は、あまり感情を表に出す事が少ないな……」

元々の性格が近寄りがたい雰囲気を生んでいる事に、今気付いてしまった。

遥自身、そもそも子供の頃から友人が少ない。

董と幼馴染くらいだろう、自分とよく話をしていた存在は。

逆に幼馴染は自分以外にも友達が沢山いて、かなり羨ましかった。

こんな状態の自分と関わる彼がよく分からないと思うくらいには。

「どうすれば……」

遥はそう考えながら、取り敢えず彼らの控え室に向かってみる事にする。

足が竦むが、それでも美咲ならこんな時でも堂々と自分の気持ちを押し通すと奮い立たせて歩く。

「ふうくはあ」

深呼吸して、ノックをしようとする。

その時。

「そこで何をしている」

偶然見ていた明人に声を掛けられた。

「足利明人……」

「何か用があつて来た、という顔だな」

「……ああ。その通りだ」

嘘を吐かず正直に答える。

「……足利明人、お前は私を恨んでいるか？ 私は一度、蘇我高校の生徒に卑怯な手口を使わせる事をお前に反対され、止めようとしたお前

を倒した。一番恨んでいるのは、お前だと思っている」

「……愚問だな。恨み辛みで戦う事を決めたりはせん。俺が気に入らないからお前を倒そうとし負けた。そして今は、自分の好敵手である六角美咲に協力している。それ以上でもそれ以下でもない」

「……」

「お前のしたい事を当ててやる。謝罪し許されに来た。そんな所か」

「ああ、そうだ。六角美咲に勧められてな。私はそもそも意味がないのだからする必要はないと言ったが、自分のしたい事であるというのまでは否定出来なかった。今の自分のまま謝罪しろとは言われたが、どうすれば良いかと思つて中々な……」

「……そうか。あいつに背中を押されて」

「教えてくれ足利明人、私はどう謝るべきだ。私には、どうしたら良いか分からん」

「六角美咲が教えなかった……いや教えられなかったものを、俺が教えられる道理などない。もし本当に謝りたいと思うなら、彼らの顔を見れば自然と言葉が出る筈だ。気持ちを伝えるとはそういう事だ。そこで立っているようでは、その迷いの気持ちは晴れんぞ。その扉を開けるのが、迷いを晴らす第一歩だ」

「厳しい言葉をぶつける明人。」

「……」

「遙は意を決して、ノックする。」

「誰だ？」

「蘇我高校の生徒にそう言われ、少しばかり心臓が跳ねる。」

「遙は何とか自分に大丈夫だと言いつけて名乗った。」

「狩野……遙だ」

第二百五十二話

「俺達に何の用だ」

やはり嫌そうな声が、扉の奥から聞こえる。

「話がある。中に入っても良いか」

「……好きにしろ」

そう言われてから、遙は恐る恐る扉を開けた。

そうするや否や、生徒達全員が遙に視線を向ける。

「……」

「そんで、話つてのはなんだよ」

生徒の一人が睨みつけながら問いかけた。

他の生徒達の顔を見て、許しを乞い辛いとやはり思ってしまうが、それではダメだと自分にもう一度言い聞かせてから言う。

「お前達には、すまない事をした」

「あ？」

「謝つて済む事でないのは、私も十分わかっている。だが……」

「だから、要らねえって言っただろう？ 俺達は絶対お前を許したりしねえってよ」

剣の怪人のベルトを引き取った生徒がそう問い返す。

「……ああ、そうだな。だがせめて、私の事は許さなくても良い。

ヴィーダは私の命令に従っただけだ。彼女の事は責めないでやって欲しい。私の事なら好きにしても良い。気が済むまで殴るなり、罵声を浴びせても良い。彼女だけは許してやって欲しい」

「……」

「俺はそれなら良いと思うぜ」

奥の方にいた生徒の一人が言う。

「あいつは、ヴィーダはこの女に命令された事であっても、皆に迷惑かけた事を謝ろうとした。それに自分だけじゃなくて、狩野遙の事だってちゃんと許して貰おうと頭を下げていた。俺はあいつを認めてる。だから……ヴィーダだけは許してやる」

「……！」

遥が顔を上げる。

「しかしな、アンタを許すかどうかは別の問題なんだ。アンタは自分の幼馴染の為に俺達を巻き込んだわけだが、それは自分の命を懸けられるだけの目的か？」

「ああ……当たり前だ。例えどんな罰を受けてでも、やらなければならぬと思った。だから非情に徹した」

「そうか……」

「おい、何が言いてえんだ」

「決まってるだろ。明人さんも言ってたけど、俺達は蘇我高校の生徒なんだ。もし気に入らない事があれば拳で語り合うのが筋ってものだろ」

「……けどよ、それでこいつを許しても良いのか？」

「謝罪で足りないのなら、それでもいいのではないか？」

遥の後ろで見ていた明人が言う。

「明人さん……」

「話し合いで納得が出来ないと言うなら、力を見せる事で証明する。それなら言い訳は出来ない」

「……」

遥はベルトを着ける。

「誰が行く？ 俺はやっても良いぜ」

「……」

剣の怪人のベルトを持つ生徒が手を挙げる。

「俺がやる」

「……」

「俺は絶対負けない。明人さんを傷付けたり、俺らをあんな目に遭わせたりしたこいつは、俺が必ず倒す」

そう告げてから、剣の怪人のベルトを着ける。

第二百五十三話

「遙と剣の怪人の生徒が外へ。」

他の生徒が見守る中、二人がベルトを操作して変身する。

『ROAD DRIVE READY?』『SWORD DRIVE READY?』

「変身」

『COMPLETE』

遙が指揮官怪人、生徒は剣の怪人へと姿を変えた。

お互い剣を構えてから素早く移動し、剣を交える。

「はっー」

蘇我高校の生徒も強いが、一度は明人を倒した経験のある遙はそれを上回った。

自分は幼馴染の為に、罪を犯す事も、命を懸ける事も決意した。

それだけは絶対に証明し、勝たなければならない。

そう言い聞かせて、遙は相手を最悪殺すつもりで剣を振るう。

「ママー」

恐らく脳波の状態を察知したヴィーダが、近くまで駆けてくる。

「待てヴィーダ」

「……！」

バックルを取り出した所で、決闘を提案した生徒が止めた。

「これは狩野遙の問題だ。お前が助太刀したら意味がなくなっちゃう」

「……」

ヴィーダがバックルをしまつてから心配そうに見てくる。

遙は大丈夫だの意味を込めて頷き、剣の怪人が振るう剣を弾く。

弾いてからベルトから端末を抜き、ボタンを押す。

『LANCE DRIVE』

ボタンを押してからベルトに差し込むと、音声の流れで槍が現れた。

右手の剣を投げ飛ばしてから槍を掴み、剣の怪人に向かって振る

う。

劍の怪人の肩に槍が刺さり、そのまま蹴とばして倒す。

「野郎……」

「これで終わりだ」

「そうはさせるかよー！」

今度は劍の怪人が咄嗟に劍を指揮官怪人の脚へ突き刺す。

体勢を崩した遙に向かって頭突きをかまし、拳を握って腹に右スト

レート。

遙は真つ直ぐ吹き飛んで地面へと叩きつけられる。

「くっ……」

「俺が終わらせてやるー！」

劍の怪人がベルトを操作した。

『FINAL DRIVE!』

劍を持っていない状態で、劍の怪人が姿を消す。

劍で攻撃する所を拳の連打に置き換えて、劍の怪人は指揮官怪人に拳を叩きつける。

最後の一撃の前に、指揮官怪人の脚から劍が抜き取られ、彼女の胸を薙ぎ払う。

遙はもう一度勢いよく吹き飛び、地面をごろごろと転がっていく。その途中で、変身が解けてしまう。

「ママ……ッ！」

今にも走り出しそうなヴィーダ。

だが生徒が止める。

「くっ……」

遙はもう一度変身しようとするが、劍の怪人が間合いを詰めた。

「ふんっ！」

劍を振り下ろそうとした所で、ヴィーダが目を閉じる。

遙は何とか戦おうと、拳を構えた。

脳天まであと少し、という所で……劍の怪人が劍を止め、変身を解く。

「……」

「何の……つもりだ？」
「俺の負けだ」

第二百五十四話

近くで見ている明人が目を閉じて頷く。

「自分が死んでも、俺達を利用してやるべき事をしようとした。変身が解けても逃げずにそう立ち向かったのは、そういう事なんだろう？」

「……」

遥は頷けず、俯いた。

「よっぽどの覚悟が無きや、そんな事出来ねえ……違うか？」

「……違わない、と言っても良いのか？」

「……」

「そうさ。私は許されないつもりで、罪を犯した。罪悪感に心が潰されそうになるのにも抗ってな。だが……どうしてだろうな。心のどこかで、お前達には謝罪すべきだと思っていた。それに……出来るなら許されたいと。都合のいい考え方だよな……」

「ああ。まったくもってその通りだ。けど、謝ったら許されたいと思うのは当たり前を考えだ。だからこの戦いにも手を出して、結果を出せた。力の強さを、意思の強さをお前は示した」

生徒が笑みを浮かべる。

「そこまでの覚悟があるんなら、例えば腕を斬られてもやるんだろ？ そんな奴に俺は勝てない」

「お前……」

「認めてやる。俺はお前の意思の強さに負けた。それに利用された。勝てなかったのは、俺の弱さだ」

「……」

「他の奴はどうだ？ 俺達が痛い思いをしたのは、こいつの強い意思を止められなかったからだ……心から認められる奴はいるか！」

何人かは、納得したくない……そんな表情をしていたが。

ゆっくりと……やがて全員が手を挙げた。

「狩野遥、俺達の負けだ」

その生徒が狩野遥の目を見て、そう告げる。

遥は俯いて、涙を流す。

「ママ……」

「あいつの罪は、許されないものだ。けど……その罪を加速させたのは、俺達の愚かさや弱さもある。それを認めなければ、俺達は最強の座に返り咲く事など出来ない」

「……」

明人はその場を立ち去る。

遥は改めて、全員に告げた。

「蘇我高校の生徒達、私の野望の為に前達を利用した事……改めて謝罪させてもらう。それに、お前達のやり方で許して貰った事に対しても……正直申し訳ないと思う。だから、一つ決めた事がある」

遥はヴィーダや生徒達の顔を見る。

「許してくれたお前達の為にも、私は全力で戸間董を倒す。私には何も出来ないが、それがせめてもの償いの方法だ。だから、それが叶うように協力してほしい。頼む……この通りだ」

そのまま地に頭を付けて土下座する。

剣の怪人に変身していた生徒は土下座した遥と同じ高さまでしゃがんでから、顔を上げさせて答えた。

「……当たり前だ」

遥はその言葉を聞いてから何度も、すまない……すまないと言いつける。

第二百五十五話

遙はあの後、一人控え室に戻り。

そこで待っていた美咲に声を掛けられる。

「上手くいったみたいですね」

「……そうみたいだな」

遙自身もあまり実感がないままだった。

彼ら自身の信念が無ければ、恐らく絶対許される事は無かつただろう。

「しかし……少し私にしては珍しく勢い任せな事を言ってしまったな」

「大丈夫ですの。私は貴女が強くしていますし、私が勝てれば実質貴女が倒したようなものですわ」

「いや、まだハイドロフォームのあいつを倒せると決まったわけではない。残念ながらその油断は捨てた方が良い」

美咲はその話を聞いて問いかける。

「そういえば、この特訓ではハイドロフォームのアトミックではなくボマーと戦ってますけど理由がありますの？」

「単純な話だ。アトミックの戦闘データは存在しない。そもそも変身出来る人物などいないからな」

「いない……そうなんですの？」

「ああ。董があとそこまで精巧な肉体を作れたと知って驚いたが、アトミックへの変身には突然変異体であると同時に、通常の突然変異体よりも強固な肉体を持つ必要がある。勿論……適合出来るのはほぼ人工物に限られるがな」

「ヴィーダさんではダメでしたの？」

「あいつにも一度試したが、肉体が負荷に耐え切れなかった。アトミック変身時にはオールウェポン使用時と同等の負荷が掛かる。お前がハイドロフォームやオールウェポン時に平気なのは、リミッターのおかげだ」

「なるほどですの……」

「だがまさか、自分達に使えないものに苦しめられる事になるとはな。いや……使えたか」

遥が目を閉じてそう告げた。
ヴィーダに負荷を掛ければ、いや新しく命を生み出せば出来ただろう。

出来もしない事なのは分かる。

それを見透かした美咲が、遥に言う。

「使えなかったですわ。使えていれば、ヴィーダさんはあんな風に貴女を守ったりしませんの」

「……だな」

「けど、あれが使える人がもう一人いれば……もう少し倒すのも現実的になりそうなものですわね」

「……」

遥はその言葉の意味を察して言う。

「まさか、お前が使おうなどとは考えていないよな？」

「ば、バレましたわ……ちよつと興味がありますのよ」

「やめておけ。あれは今から作るのはほぼ不可能に近い上に、お前が使えばヴィーダ以上に負荷が掛かる。それにお前らしくもない」

「そ、そうでしたわね。けど、あの黒いライダーのデザイン好きなんですわよね」

「まったく……こんな時にオタク心をさらけ出している場合か……」

「えへへ。それじゃあ、そろそろ寝ますわね。おやすみなさいな」

「ああ。また明日な」

美咲がそう告げて、部屋から立ち去る。

第二百五十六話

あれから数日が過ぎ、残された時間はあと一日。

それぞれの想いを胸に秘めながら、美咲達は最後の特訓に挑んでいた。

「変身ですわー!」

VR空間で、お互いに変身してから美咲は構える。

『COMPLETE ALL WEAPON DRIVE READ Y?』

遥はすぐさまオールウェポンカードを使って、ボマーオールウェポンの姿へ。

フォームチェンジ後早々遥はアクセルドライブで美咲との距離を詰め、エクスプロージョンドライブを使って自爆しようとした。

「落ち着きなさいな六角美咲……まだ使うべき時ではないですわ」

美咲はアクセルドライブを使わずに、空気の音や気を察知して避けようと試みる。

何度か挑戦しているが、そこは今まで上手くいっていない。

今回こそ……美咲は目を閉じて動きを読み取る。

後ろに回り込む音。そして爆発時に生まれる音。

美咲は振り向いて、防御の構えをとった。

「そこですわー!」

遥の自爆を、美咲はバットで何とか受け止める。

少し離れた場所で復活した遥の所まで駆け、美咲はバットを振り下ろす。

「もう一度自爆するつもりですわね」

遥は向かってくる美咲に向かって、自爆を選択しようとする。

ボマーの技で、自爆は確かに強い技だ。

使えば死ぬというリスクがあるが、美咲ならそれを無効化出来るのだから。

だが爆発時に強い打撃を与えれば、爆発を止める事が出来る事も最近知った。

『FINAL DRIVE!』

美咲はボマードライバーを操作しながら駆け、ベルトに差し込む。ボムビットがバットに集まり、遙に向かってそれを叩きつける。

「ライダーインパクト!」

自爆する前の遙に一撃を浴びせ、殺さない程度に相手を吹き飛ばす。

二号にも爆発からの蘇生能力がある事を考えると、爆発以外の方法で仕留めなければならない。

ある程度ダメージを与えてから、美咲はオールウェポンのカードを取り出す。

『COMPLETE ALL WEAPON DRIVE READ

Y?』

「ハイパー超変身ですわ!」

『METAL SWORD』

『WEAPON DRIVE FLAME SHOWER』

右手を剣の怪人の剣、そして左手に火炎放射器を装備。

対して遙は。

『ODIN LANCE』

『WEAPON DRIVE ODIN LANCE』

二本の槍を構え、美咲に向かって手を向ける。

多数の魔法陣が、美咲を囲う。

「これも受け止めてみせますわ」

このパターンの攻撃は何度も受けてきた。

そしてその度に、全て受け止めた。

美咲は槍の飛んでくる方向を、思考を加速させながら予測し、飛んできた槍を剣と火炎放射器で捌く。

「はあっ!」

攻撃を全て捌き終えてから、美咲は次が来る前に召喚を使う。

『SUMMON DRIVE SWORD MONSTER』

『FINAL DRIVE!』

剣の怪人と共に、必殺技を放つ。

姿を消しながら、遙に向かって二人で斬りつける。

最後の一発は、剣の怪人と共に抜刀の構えからの右薙。遙を変身解除へと追い込み、美咲の勝利。

「ふう、勝てましたわ！」

第二百五十七話

成音とヴィーダ、そして裕太と健斗……明人に優香。
他の戦士達も、戦いに向けて各々の課題を乗り越えていく。

「ヴィーダー！」

変身解除した成音がグングニルに向かって、フレイムシャワードライバーを投げる。

グングニルは阻止しようとする生徒達にタツクルしてからバックルを受け取り、ベルトに装着。

「ダイヘンシン！」

『CHANGE FLAME SHOWER』

フレイムシャワースタイルへと変化してから、グングニルは成音に近付こうとする生徒達の前へと現れ、成音も別のベルトを取り出して斧の怪人へ。

成音も別のベルトを使う練習をしているところだ。

あまり時間は取れなかったが、何とか実戦で使えるレベルまでは上がった。

『GUNGNIR FINAL DRIVE』

『FINAL DRIVE!』

成音は斧を何度か回してから、反対側に叩きつけ、そのまま振りかぶって生徒達へと振り下ろす。

地面が割れ、その時生まれた衝撃波で吹き飛ばされた彼らへ、グングニルが炎の槍を魔法陣から数発放つ。

貫かれた生徒達の変身が解かれ、地面へと叩きつけられる。

「よっしー！」

「ヤッターネー！」

成音とヴィーダが変身解除してからハイタッチ。

※※※

俺はどこどころ健斗にアシストしてもらいながら、仮面ライダームラマサとして戦っていた。

「はあッ！」

『もう少し早く振るんだ裕太!』

——ああ!

『FINAL DRIVE!』

相手をしていた生徒二人がベルトを操作してから、それぞれ武器を向ける。

『こつちも行くぞ』

「おう!」

『最終撃!』

俺は刀を構え、紫の光を纏ったそれと共に駆けながら叫ぶ。

「ライダースラッシュ!」

生徒二人に近付いた所で、姿を消しながら何度も斬りつける。

最後の十撃目は、激しい光と共に振り下ろす唐竹割。

生徒二人が紫の炎のような光に吹き飛ばされ、一人が変身解除。

もう一人の強面が変身している方が残り、俺に隙が出来てしまう。

『交代だ』

健斗が俺の中から現れ、俺の身体を操作。

振り下ろされた斧を防ぎつつ、脚で腹を蹴り飛ばす。

「もう一度だ」

『FINAL DRIVE!』

斧の怪人がもう一度ファイナルドライブ。

健斗は敢えてその場で構え、振り下ろされた斧を寸での所で回避。

隙が出来た彼に向かって、抜刀術で斬りつける。

「ぬおあつ!」

強面の生徒の変身を強制解除。

「ふん……」

健斗は呟きながら、変身を解いた。

※※※

優香と前田は何とか二人掛かりで、明人の動きに少しずつついていく。

最初は一太刀入れる事すら敵わなかったが、今では防がせることなら出来る。

「来い」

『FINAL DRIVE!』

優香と前田は馬に乗りながら剣を構え、突進していく。

『ARC FINAL DRIVE!』

明人も剣を構える。

優香と前田は突進しながら、素早く動く明人の剣を何とか防いでいく。

最後の一撃こそ防げなかったが、何とか変身解除まではせずに持ちこたえた。

「……中々やれるようになったな」

明人が二人を見て呟く。

優香は前田が差し出した手にタッチして、成長を喜ぶ。

そして……最後の特訓の日が終わった。

第二百五十八話

最終日の夕飯は……バーベキューだ。

途中成音達が買い物に出かけて準備をし、肉が焼けた所で美咲達が呼ばれる。

その場の全員に肉が行き渡った所で美咲がグラスを手に口を開く。「思えばここまで、色んな事がありましたわね。皆さんのおかげで、私達は一週間前より強くなれた気がしますの。明日の戦いでは、今までの修行で得たものを出し切りますわ！ その為のスタミナを、今付けますわ！ 今日皆さん存分に

「「かんぱーい!!」」

「人の話聞きなさいな!!」

美咲は爆弾を上空に投げつける。

しかし上空ではなく美咲の頭の上で爆発し、絶妙な爆発範囲で美咲のみを吹き飛ばす。

「ビルド四十六話の玄さんの気分ですわ……てか、シチュエーション丸パクリですわよね?」

真相は作者のみぞ知るところとここか?

「……」

明人ですらもう肉を食べるのに集中している。

味方は一人もいなかった。

「おいおめえら! 未成年なのに酒飲もうとしてんじゃねえ!」

「フク、もううちの教師じゃないのに説教とかうざーい」

「そーよー!」

「あーもう! 教師とかじゃなくて一人の大人としてだな」

「そんな事は良いからこれ飲みなつて」

「えっ、これ俺にくれんの?」

「フクにしては強くなった気がするし、ご褒美に買ってきたんだよ」

「上から目線なのが腹立つけど、まあ良いや。貰っとくわ」

『いや、よく考えたら未成年が酒買う事自体違法なんじゃ……』

「もうツツコむのめんどくさい」

裕太がそう言いながら酒に口をつけた。

「ナリネ、オカワリ！」

「よく食べるわねヴィーダ。はいどうぞ」

「ワイー！」

美咲もこの空気に懲りて、落ちた肉を拾い食べる。

爆発したせいで黒焦げになったお肉は……そこそこの苦さだ。

地面の土の味が良いアクセントに……なってる筈もなかった。

「成音さんお代わりですわ」

「会長の演説見事なスルーだったわね」

「煽ってますの？ 煽ってますの？」

「さあね」

「もう一度吹き飛ばしても良いんですわよ」

「また土の味がする黒焦げの肉食べたいならやれば？」

「ぐぬぬ……」

美咲は拳を握りながら爆弾をしまう。

「ほら、ステーキでも食べて元気出しなさい」

「はいですわ……」

美咲は成音からステーキを受け取る。

ナイフとフォークで切り分け、口の中へ。

肉の旨味が口いっぱい広がる。

「おいフク、そのステーキ美味そうだな。くれよ」

「いや、貰って来いよ」

「お前のからとった方が上手そうだ」

「どういう理屈だよ！」

「うるせえ！ 俺がよこせて言ったらよこすんだよ！」

「ダレカタスケター!!」

美咲はステーキを手に逃げ回る裕太を半目で見つめていた。

第二百五十九話

ある程度時間が過ぎ、お腹いっぱいになった生徒達が自室に戻り。俺は一人、残った酒を手に夜空を見ていた。

「……………ここまで長く感じたな。けど、もう明日なのか」

二号に明日戦おうと指定されたのが一週間くらい前。

だが実際には二か月くらい経ったんじゃないかとさえ思えてくる。

『今投稿日でも見ながら話してたのか？』

投稿日ってなんだ？

『いや、分からんなら良い』

「なんかよく分かんないけどよ、実際言われたのは一週間前なのに二か月くらい経ったように感じてよ」

「実際そうかもですわね」

「み、美咲いたのか」

「四行目の台詞の所からいましたわよ」

四行目……………？

※※※

謎会話から一転、真面目な話へ。

「健斗さんとお話してましたのね」

「ああ。一週間でこんな長く感じた事なんてないし、でももう明日で修行期間も終わるんだなってよ」

「……………私は短く感じましたわ。あの時、蘇我高校との決戦前に修行した時と同じですの。皆と努力したから、あつという間に感じましたのよ」

「……………なるほどな」

「本音を言うなら、あともう一週間くらいあっても足りないくらいですわ。まだ満足する出来ではありませんもの。けど本番は明日。身体を休めないといけませんわね」

「まるで大会前の奴の言葉だな」

「私は死ぬ気はありませんもの。それにこれ以上私の目の届く範囲で誰も殺させない。健斗さんやヴィーダさんもそれを望んでいる筈で

すわ」

『美咲……すまないな』

「お供や仲間の願いすら受け止められないなら、生徒会長なんて務まりようがありませんわ。それに……命をあんな風にされて怒るのは貴方やヴィーダさんだけではありませんのよ」

美咲はあの時の事を思い出したのかを手を震わす。

今この瞬間まで、俺自身……いや他の皆ももしかしたらあのおぎましい瞬間を考えないようにしていた。

けど、俺も思い出して手が震えた。

俺が明日戦うのは、俺達より戦うのに向いている生物ですらいとも簡単に殺せてましよう者。

健斗やヴィーダ達とは違う。

俺も前の蘇我高校の生徒数人と同じ。

怒りなんかより、恐怖の方が勝っている。

「美咲は、怖いから手を震わせてるのか？ それとも……怒ってるのか？」

「私はその両方……それと、今言うのもなんですがワクワクもありませんわ」

「強い奴と戦えるとワクワクするって奴か？」

「そうですわね。まあ、あんなことが起きてこれを言うのも不謹慎かもですがね」

「いや、そう思ってくれる奴がいて少しホッとした。少しくらい前向きな奴がいないと、俺みたいな小市民は不安になるし」

「いつまでも小市民気取りじゃ困りますわよ。貴方は私のお供なんですから」

「あれ、お前のお供は健斗じゃなかったっけ？」

『違うぞ』

「お前がツッコんでどうする」

「違いますわ」

「遅いぞ」

俺がそう呟いた後、美咲が急に口元に笑みを浮かべて……笑う。

「ははは……ははは……」

俺も、自然にそれにつられた。

「ははは……」

第二百六十話

そうして笑い合ってから、俺は言う。

「ありがとな、美咲」

「何がですか？」

「いやほら、もしかしたら俺に用は無かったかも知れないのに……来てくれてさ」

「私も何となく、一人でいたくなかっただけですわ」

「そっか」

しばらく空を見てから、美咲が聞く。

「裕太さん」

「な、なんだ？」

「この戦いが終わったら、貴方はその肉体を凍結させて……暫くお別れになるんですわよね」

「……ああ」

俺は俯いてそう呟く。

「す、すみませんですわ。こんな話、今すべきじゃありませんでしたわよね」

「いや、良いさ。気にすんなよ」

「私、今どうしたら良いか分からない事が一つだけありますの」

「……」

俺はそう言われて考えてみる。

いつだって自信満々で、自分のやり方を曲げない美咲が迷ってしま
う事。

「まさか、今更戦う事を迷ってる……とかじゃないよな？ さっき言
えなかったけどなんか引つかかる事があって」

「違いますわ！ 戦う理由なら大ありですよ！ もしそこを迷って
るなら前回に回しますわよ！」

「お、おう。意味分かんねえけど。で、なんだよ」

「それを今言おうとしてたんですよ！ でも、そういう気分じゃな
くなりましてわ」

「はあ？　なんでだよ」

「ここまで言って察せない相手に言っても無駄だからですわ」

「……………」

おかしい。

いつものこいつなら、ゴリ押しでも理解させるーとか抜かす筈……………。

「体重でも増えたか？」

カチャ……………。

「おい何で今ベルト着ける？」

「貴方をこの場で始末する為ですわ」

「落ち着け！　俺はお前のお供だぞ！」

「うるさいですわ！　変身ですわ！」

「や！　め！　ろ！」

※※※

何とか落ち着かせた。

「まったく……………本当に貴方って人は……………」

「いつも言うけど、まともから程遠いお前が言うべき台詞じゃねえぞ」

「……………あーもう、なんか貴方と将来の話なんてするんじゃありませんでしたわ」

「凍結されるまで生徒会の仕事手伝えって話ならお断りだぞ。それから復活してもお前の仕事は手伝わないしな」

「はあ……………」

「はあじゃねえ！　お前大人になっても俺をドラ○もんのようを使う気か！」

「もう良いですわ……………」

なんで呆れてんだ？　訳が分からないぞ……………。

「この話の続きは、戦いが終わってからにでもしますわ」

「お、おう」

「今日は寝ますわよ。貴方も酒ばかり飲んでないで寝なさいな」

「うるせえ。お前が話しかけた癖に」

「反論する気力も湧きませんわ」

「湧かれても困るわ。とつとと寝ろ」

そんな会話の後、俺の中にいた健斗が呟く。

『気付かぬとは愚かな』

「なんか言ったか？」

『いや……こつちの話だ』

第二百六十一話

残っていた酒を飲み干し、また一人になってから、俺はまた明日の戦いの事を考えていた。

何とかイメージトレーニングだけでも出来ないかなと健斗に話しかける。

もしかしたら美咲もそれくらいはするかも知れないし。

「なあ、健斗」

『なんだ？』

「明日の戦いのイメージしないか？」

『イメージ……そうだな。予め予測しておくのも大事な事だ』

「してみるか」

俺は健斗と一緒に明日の戦いを想像して、お互いの意識に考えた事を共有する。

まるでメールの文章を携帯で送り合うような感覚で。

便利なもので、イメージした結果を口で言い合うより客観的で分かりやすい。

何せ二つの意識が肉体の中で共存してるから、それを行き来させるなど簡単だ。

けど……だからこそ分かってしまう。

俺や健斗では、結局強くなり過ぎた美咲や明人にはついていけない。

ヴイダーにすら、ついていけないと。

それは、あの人型が襲って来た時に剣を交えた健斗がよく分かっている。

あの時よりちよつと強くなつたくらいで勝てる相手ではない。

結局、美咲達に全て任せるしかないのだ。

それすら出来なければ……。

『一つだけ、絶対に秀奈を倒せる方法があるぞ』

「本当か？」

『ああ』

健斗が俺に、その方法を共有させる。

俺はそれを見て……少しだけ健斗に怒った。

「ふざけんなよ……こんな方法、俺にやれってか？」

健斗が提示したのは、実に簡単な方法だ。

俺達を狙ってアトミックが攻撃する瞬間、健斗が脳波制御能力でアトミックの身体を乗っ取り、動けない二号に攻撃を当てるというもの。

確かにこれが上手くいけば、確実に勝つ事が出来る。

だがこれでは……。

『だが、確実に勝ちたいんだろう？』

「でもよ、この方法じゃ最悪お前は……」

『確実に勝てるって自信があれば、こんな方法など選ばずに済んだんだ。だが、いくら強くなるうと……俺に自信がつくことなんて無かった。俺には自信がない。俺も含めて全員が思う通りにいく未来を勝ち取れる自信がな』

「……」

健斗の感情が伝わってくる。

数日前に感じた怒り、それに董に対する愛情。

自分の思う未来を諦めなければならぬという悔しさ。

『残念だ。明人に認めて貰えたというのにな……』

「まだだ。まだ明日どうなるかなんて分からない。万が一を考えるのは、大事かもだけど……この未来じゃ、お前だけじゃない。仲間を想う美咲の気持ちも救えない。あいつの気持ちを踏みにじらない為には、絶対に生き残らなくちゃいけないんだ」

『裕太……』

「二人で生き残ろう。董や二号に勝って、いつの日か、俺やお前が望む未来を勝ち取る為に」

『ああ……そうだな』

健斗がそう呟く。

第二百六十二話

成音の近くにいたヴィーダ。

もう夜も遅い時間だと言うのに、眠れずに外を見ていた。

「ヴィーダ、そろそろ寝よ？」

「……ネムレナイ」

元氣のない声で、成音にそう呟き返す。

そんな彼女に、成音はゆっくりと近付いて……。

「へへっ、とりやあああ！」

「ワッ！ ナリネ！」

「こちよこちよこちよこちよ！ 不安で眠れない子はこうだー！」

「アハハハハヤメテツタラアハハハハハ」

ヴィーダが大笑いしながら成音に言う。

そうして落ち着かせてから、成音はヴィーダをぎゅーっとする。

「ヴィーダ、不安なのはあたしもよ。あたしは二号の眼中にないみただけど、あたしは絶対ヴィーダが危ない時は戦う。いや、そうじゃなくたって守る。だって、ヴィーダに死んでほしくないし」

「だからヴィーダは、不安にならなくて良いのよ。いざとなれば、あたしが守るから」

「デモ、ナリネ……ソレジャ……」

「あたしはね、会長にいつか勝つ為に今まで戦ってきたのよ。ヴィーダを守れないなら、あたしはここまで戦ってきた意味なんてないのよ」

「……」

「無理なんてしてないわよ。あたしは、あたしが今出来る事を精一杯やるだけ。ヴィーダを守るくらいなら、今もあたしだって出来るはず。それくらい、自信を持ったって大丈夫な筈よ」

最後にもう一押しする。

「大丈夫よ。ヴィーダもあたしも、みんなも絶対死なない。ヴィーダだって、生きているものをあんな風に扱うあいつや童を許せないでしょっ？」

「……！ ウン」

ヴィーダははつとした顔をしてから、思い出したように頷く。

「だったら、勝って思う存分許さないって言つてやろうよ。あたしも一緒に言いたい気分だし」

「ナリネモ？」

「そうよ。だってあたしも、あんなの見たらそう思うし」

「ナリネ……」

「だから今日はもう寝よ！ 勝つ為にはきちんと寝なきゃだよ！」

「ウン！」

ヴィーダが無邪気な笑顔で隣の布団へ。

成音の言葉が効いたのか、それとも相当疲れていたのか。

ヴィーダは布団に入つてすぐに半目になり、そのまま一瞬にして瞼を閉じ、可愛い寝息と共に就寝。

成音はそれを笑顔で見ながら、自分も目を閉じる。

「大丈夫、大丈夫」

自分にもそう言い聞かせた。

ヴィーダの不安を解いた自分が眠れなくては意味がない。

何とか成音は一人でそう言い聞かせて、何とか眠りにつく。

そして……決戦の日は、刻一刻と近付いてくる。

※※※

二号……松永秀奈は一人で、何も無い空き地に立っていた。

決戦の時間が近付くのを、今か今かと待ちわびている。

「……」

この力で、六角美咲を倒す。

そして……消す。

それが出来れば、もう自分を弱いと言える者など……いなくなる。早く、そんな世界が見たい。

第二百六十三話

次の日の朝。

朝食を済ませてから、美咲達四人は校門の前に立っていた。成音や優香も後から行こうと準備を進めている。

恐らく相手の方が、自分の近くまで転移させるか美咲達の前に現れるだろう。

それを待っているのだ。

「……」

美咲は震える拳を抑える。

大丈夫だ……絶対に勝てる。

自分にそう言い聞かせた。

そしていよいよ、その時が。

『待っていたぜ、お前ら。頼りの努力はちゃんとしてきたか?』

「ええ。完璧ですわ」

他の皆は分からない。

だが美咲だけは、きちんとそう告げた。

『ふん……そう言えるのはやっぱりお前だけか。六角美咲』

「……」

『まあ良いか。どっちにしても、もう俺が定めた時間は終わったんだ。遊んでもらうぜ』

そう言つて、二号は美咲達を転移させた。

自分がいる……空き地へ。

「最終決戦がこんな場所じゃ、物足りないか?」

二号が笑みを浮かべて美咲に問う。

「いえ。特撮とかではこういう場所で撮影する事がありますもの。まあ、もう少し砂漠っぽい場所が良かったと言いたいですがね」

「この場でそんなん言えるって事は、よっぽど自信があるみてえだな」

美咲は何とかして笑った。

「四人同時に相手をしてやる。それで俺は……誰にも負けない強さを手に入れた証明をしてやる」

二号が黒い爆弾型の端末を操作する。

『BOMER DRIVE READY?』

左拳を握りしめ、笑みを浮かべてから呟く。

「変身……」

ベルトに端末を取り付けた。

『COMPLETE』

空から黒い爆弾が降り……二号はそれを握り潰す。

美咲達すら吹き飛ばすような爆炎。

何とか衝撃に耐えながら、目を開けて相手の姿を捉える。

黒い爆弾型の頭、そして二号が変身しているのかと疑いたくなるくらい女性的な体つきをした黒い長ランの下にライダースーツの身体。

そして、手にしている二本のリボルケインを模したようなオレンジの光剣。

二号は……仮面ライダーアトミックへとその姿を変えた。

「ふっ……」

美咲が合図を出す。

「いきますわよ、皆さん」

「ああ」

「ウン」

「……」

美咲、裕太、明人は端末を操作し、ヴィーダはまずバックルを腰につける。

バックルからベルトが伸びて、ヴィーダの腰を覆う。

『BOMER DRIVE READY?』『GUNGNIRON』

『ムラマサー』『ARC SWORD DRIVE READY?』

美咲は顔に左側で構える。

ヴィーダは投げた槍型のガジェットを掴み。

裕太は左腕を斜め上に伸ばす。

明人はそのまま端末を取り付ける。

「変身ですわー!」「ダイヘンシン!」「変身!」

ヴィーダがフレイルムシャワードライバーを取り付ける。

『COMPLETE』『CHANGE FLAME SHOWER』『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』『ARC COMPLETE』

美咲が爆弾を握り潰し、ヴィーダは光に包まれて姿を変える。

裕太と明人は剣を手に、そこから段々と姿が変わった。

赤と黒の禍々しい見た目の、ライダーを模したような剣士……剣の怪人・改。

白い槍を模した紋章がついた頭に、青い槍を携えた戦士……仮面ライダーグングニル。

緑と赤の身体に、紫の刀を持つ戦士……仮面ライダームラマサ。

そして紫の爆弾頭に、紫の長ランとライダースーツの戦士……仮面ライダーボマー。

その四人がアトミックに向き合う。

「戦いの結末は、私達が決めますわ！」

バットを構えて、ボマーはそう言い放つ。

第二百六十四話

成音と優香、そして遙も準備を終え、ライダーや明人たちがいる場所へ向かおうと体育館を出る。

「行くぞ」

遙の声と共に、走り出す成音と優香。
だが。

『おーっと、邪魔しに来るのは知ってたぜ』

唐突に聞こえた二号の声。

それと同時に、揺れ始める地面。

まるで錬金術のように、砂が動いて何かを形作っていく。
人型だ。

ゾンビの如く沢山の人型が、成音達の道を阻む。

「またこのパターン？」

『こいつらなら、命もないし躊躇わずに壊せるだろ？ サポートした
いってんなら、早くやらねえとな』

「……まさか、アンタにこんな余裕があったとはね」

『どんな特訓をしたかは知らねえが、今の俺にこいつら四人相手は楽
勝過ぎる。少しはハンデをやらねえとな』

「相当舐められてる……みたいね」

「やるしかない」

「い、行く系！」

成音達がベルトを取り出してすぐに、後ろから声が聞こえる。

「俺達も手伝うぜ」

蘇我高校の生徒達。

体育館にいた皆だろう。

明人が持っていたソードドライバーを持つ生徒が先頭に出て、ベルトを操作。

『SWORD DRIVE READY?』

「俺をこけにしたあいつ、絶対一発ぶん殴ってやる」

『COMPLETE』

そう言つて、端末をベルトに装着。

剣の怪人へと姿を変え、荒々しく先陣を切る。

「うおおッ!!」

砂から作られた人型をどんだん斬っていく。

呆気にとられていた成音達も気を取り直し、ベルトを着ける。

「変身!」 「変身系!」

成音は劣化版のドライバーで火炎放射器怪人へ。

遙は指揮官怪人、優香も騎兵怪人へとその姿を変えた。

※※※

そんなやりとりの後、既に変身し終えた彼らは戦いを始めようとしていた。

「準備は終わり……掛かってこいよ。お前らのやってきたことが如何に無駄か、俺の力がどれ程か、しっかりその身に味合わせてやるよ」

アトミックが挑発する。

「言われなくても、そのつもりですわ!」

最初に攻撃を仕掛けたのはボマーだ。

単独で地を蹴ってアトミック目掛けて飛び込み、挨拶代わりのバット振り下ろし。

「ふん……」

アトミックは頭でバットを受け止める。

「なっ……」

「オールウェポン使えよ。そんですぐに楽になれよ」

頭で受け止めたアトミックが、そう言つてボマーの腹を蹴り飛ばす。

ボマーは勢いよく飛んで、地面に突き刺さる。

「……ッ!」

「ヤアッ!」

「!」

残る三人も、アトミック目掛けて武器を振るっていく。

「邪魔だぜ」

眼中にない、そう言わんばかりに、パンチ一発でムラマサが吹き飛

ばされる。

そしてグングニルフレイムシャワーフォームの突きと、明人の剣撃が無情にも受け止められた。

「おせえ……おせえおせえおせえよ!!」

グングニルを右足、明人を左足で蹴り飛ばすアトミック。

二人は勢いよく吹き飛び、地面を転がされた。

「ボムビットー!」

ボマーは背中中のボムビットを勢いよく飛ばす。

「……」

アトミックは見向きもせず、水色のバリアを使ってそれを弾く。

リフレクトの能力……だろうか。

ボマーに全て跳ね返り、その身体を弾き飛ばす。

「こういう武器ってのはこう使うんだよ」

アトミックはボマーよりも多い十二のボムビットで、明人とグングニルを狙う。

回避すら不可能な速度で飛ばされたそれは辛うじて彼らの命を奪わなかったが、再び大きく身体を転がされた。

「まだ本気出してねえって事、分かってんのか?」

第二百六十五話

「つ、強いですわ……」

「俺もやつとこいつの扱い方に慣れてきてな。真の力？　みたいなの？　ははっ……あん時はヤバかったけど、今なら負ける気がしねえ」

「……！」

明人が目を見開きながら駆けていく。

「人が話してる時くらい聞きやがれ！」

アトミックはそう怒りながら、剣を握り駆ける明人を蹴り怯ます。

そのまま明人の胸に拳を叩き込み、駆けだした地点まで吹き飛ばしていく。

「くっ……」

「そう簡単に負けてたまるかよ。俺が何の為にあいつに魂を売ったか、分かんなくなるだろうがよ！」

瞬間移動並みの速さでグングニルに近付き、見えない速さで何度も殴る。

低く飛んでからオーバーヘッドキックで地面へと叩きつけられ、岩に大きな穴が開く。

「ミ、ミエナイ……」

「見えてたまるかってんだ人形」

「ヴィーダ、ニンギョウ、チガウ！」

激昂したグングニルが、槍を手にアトミックへ立ち向かう。

「そうだな……お前は人形としての役目すら果たせてねえな。戦闘用に生み出されたお前が……人間の俺に勝てねえなんておかしいよなアツ！」

狂った笑みと共に、槍を掴んで開いた拳をグングニルへ叩きこむ。

「弱え弱え。巾着でも殴ってる気分だぜ」

まだ立ち上がれない二人に向かって、アトミックは煽る。

「おい、どうした？　もう終わりか？　冗談やめてくれよ。俺まだ本気出せてねえぞ。本気出してもねえのに、そんな反応してんじやねえよ。もっともっと、楽しませろよ！」

『INFINITY DRIVE』

大量のボムビットが、空間に現れる。

グングニル、ムラマサ、明人の三人目掛けて、それは勢いよく放たれた。

「早く動かねえと死んじまうぞ！ はっはっはっ！」

その間に、ボマーが割って入る。

落ちてくるボムビットを、何とか最高速度で動きながら、バットで斬っていく。

立ち上がった明人とグングニル、そしてムラマサもそれに参加し、何とか対処する。

最後のボムビットを処理したのはボマー。

唐竹割りで真つ二つに割り、その爆発で吹き飛んだ勢いを利用してアトミックへと体当たり。

アトミックに何とか一撃を与える。

「ッ！」

「やっとなつてとこか。だが全然足りねえぜ！」

アトミックが気功で弾く。

ボマーは吹き飛ばされながらカードを取り出し、そのままオールウエポンへと変化する。

『COMPLETE ALL WEAPON DRIVE READ Y?』

「ハイパー超変身ですわ！」

『WEAPON DRIVE METAL SWORD』

鉄の剣を召喚し、ボマーはもう一度立ち向かう。

「待ってたぜ……この時を！ 今度こそぶちのめす時を！」

アトミックもそれに対していく。

アトミックの光剣と、ボマーの金のバットと銀の剣。

二本ずつ持った得物が、互いに交差する。

第二百六十六話

あの激しい戦いをしながらも、砂の異形は更に数を増やし、成音達を追いつめる。

同じように追い詰められている美咲達と同じように……。

「キリがない、こんなの……!」

成音がそう呟く……が。

「諦めんじゃねえよ!」

剣の怪人に変身している生徒が叫ぶ。

「お前にとって、あいつらはこの程度の事で諦めていい奴だったんかよ……嫌がる俺達を煽ってでも、お前はヴィーダを助けようとしたんだろ! だったら、お前が諦めてんじゃねえよ! 俺達にデカイ口叩けんなら、こんな所で諦めてんじゃねえぞ!」

「アンタ……!」

『FINAL DRIVE!』

剣の怪人が剣を構えてから姿を消し、多数の砂の異形に剣を振るう。

最後の一撃は、その全てを両断する回転斬り。

砂の異形は爆散し、そのまま元の砂へと戻っていく。

「あたしも……!」

『FINAL DRIVE!』

成音も諦めずに立ち向かう。

いつもより頼りない、弱い火炎放射器から勢いよく炎をまき散らす。

砂の異形を焼き尽くし、爆散させる。

「はあッ!」

成音達は叫びながら、砂の異形を倒しつつ前へ進む。

※※※

オールウェポンに姿を変えてから、十秒も経たないうちに。

ボマーとアトミックは、光すらも置き去って二人だけで戦いを繰り広げていた。

「誰も自分を弱いと言ってくれない世界、それが貴方の欲する世界なんですの!?!」

「そうだぜ。俺はそんな世界に行きてえ。六角美咲……お前は俺の知る中で一番強い敵だ。自分の身体一つで、今こうして俺と剣を交えている。他の奴らを置き去りにしてな!」

「置き去りになんてしませんの! 私には私に挑戦するものを拒まない! 弱いと言われたら、強いと言って貰えるまで戦う。私が勝つても負けを認めないなら、認めてもらうまで戦う! 私が満足しないなら、私が満足するまで戦う! 誰も弱いと言ってくれない世界では、進化することなんて出来ませんわ!」

「もう十分なんだよそんな世界。第一印象で全てが決まっちゃう世界なら、俺より強い奴なんていなくなれば良いんだよ!」

アトミックの光剣がボマーに振り下ろされる。

ボマーは何とか受け止めて、回し蹴りをお見舞いした。

「そんな人間ばかりなら、何度だって証明すれば良い。証明して証明して、出来ないならもう一度強くなって証明して! 私は……そうして今ここに立ってますの!」

ボマーの渾身の突きを受け止めるアトミック。

アトミックの手から炎が放たれ、ボマーが勢いよく吹き飛ばされた。

「そんな人生、ここで終わらせてやる。もう二度と証明出来ねえようにしてやるよ」

ハイドロフォームカードを取り出すアトミック。

『UPDATE DRIVE』

『COMPLETE HYDRO DRIVE READY?』

「はあッ!」

ハイドロフォームカードを使ったアトミック。

姿を変えてから、光剣を構えて眩く。

「もう無駄話は終わりだ。お前と話してたら、余計に行きたくなっちゃったぜ」

第二百六十七話

ハイドロフォームへと姿を変えたアトミックは、やはり次元が違う。

動いただけで衝撃波を起こし、オールウェポンですらも追いつく事が出来ない。

「お前が俺に勝つのは無理だ」

ボマーだけを集中狙いして攻撃を当てながら、アトミックがそう告げる。

「そんなの……分かりませんわ！ 私は、貴方に……！」

「そういうセリフはよ……敵に攻撃を当ててから言うんだよ！」

「ぐあッ！」

アトミックの放った拳がボマーに突き刺さる。

ボマーは地面へと叩きつけられ、無残にも転がっていく。

「私には、無理……ですの？ この人に勝つ事は、やはり……」

※※※

その様子を、俺と健斗は見ていた。

美咲はああして戦っているのに、強くなった筈の俺は彼女の為に何もしてやれない。

しかも、美咲ですらあいつを倒す事は……。

『やるのか？ あれを』

——……！

俺は精神世界で、健斗と話す。

『こうなる事は分かった。例え強くなったとしても、あれは次元を超えているんだから。だから、もう良い。俺を犠牲にしてくれ』

「けど……」

『まだ躊躇うのか！ お前を取り囲む状況を見ろ！』

健斗がそう叫ぶ。

美咲のオールウェポンは、数分しか持たない。

けどそんな状況なのに、ハイドロフォームのアトミックには歯が立たない。

明人とグングニルは、大ダメージを受けて満身創痍。
戦おうにも、動けない。

今動けて、美咲を助けられるのは……。

『裕太忘れるな、お前は美咲が一番大事にしたい人だ。あいつはお前を愛している！ 人殺しの俺なんかの為に、あいつを見殺しにするなど……俺が許さん！』

「健斗……！」

『裕太、俺と違って……お前は愛されたんだ。だから、愛されたお前と、愛してくれる奴を……死なせてはダメなんだ』

健斗がそう言つて、交代する。

※※※

「これでやっと……俺の求めた世界が手に入る！ ハハハハッ!! 俺が永遠に最強であり続けられる世界！ 誰もが弱いと言わない世界！ 心が、痛まない世界！」

アトミックが端末を操作して、ベルトに取り付ける。

『FINAL DRIVE!』

ボムビットがアトミックを囲い、そしてアトミックの周囲が光に包まれる。

アトミックを中心に、ドーム状に爆風が広がっていく。

ボマーは、それに飲み込まれてようとしていた。

「諦めたく、ありませんの。私は、絶対に勝利を諦めたく……」

そう言ったボマーの前に、一つの黒い影が立ち塞がる。

「……！」

ムラマサだ。

「逃げろ、美咲！」

「裕太さん！」

「お前が出て来たところで、無駄なんだよ！ 纏めて消し飛ばしてやる！」

美咲は眩しきで、眼を閉じてしまう。

それが……彼との別れになるとも、知らずに。

第二百六十八話

砂の異形を倒し終え、成音達はそろそろ空き地に近付いていた。近づく前に、かなり大きな爆風の音が聞こえた事から間違いない。そう確信して、成音達が現場について見たものは。

「……！」

既にハイドロフォームへと姿を変えたアトミック。

満身創痍で戦えない明人とグングニル。

オールウェポンに変身しているボマー。

そして、消えたムラマサ。

「うそ……裕太っち、健斗っち……！」

※※※

ボマーが目を開ける。

何より先に、ボマーが見たものが一つある。

ムラマサの姿。

「裕太さん……！　嘘……ですわよね？　そんなはず……！」

ムラマサがいたところに、彼の姿はない。

それどころか、肉体も残っていない。

あつたのは、爆風でボロボロになったムラマサドライバーのみ。

「そんな……そんな！」

美咲は、守れなかったのだ。

死なせないと約束した彼を、死なせてしまった。

一号も……。

「美咲……ここだ！　俺はここにいる！」

聞こえたのは、一号の声。

アトミックの中からだ。

「お前……俺の中に……！」

「もう好きにはさせんぞ」

「この……！」

身動きが取れないアトミック。

「美咲……すまない。俺、裕太だけは死なせないつもりだった。なの

に、なのに……」

「私には、そんな力は無かったって事ですの？ 裕太さんを守れるだけの力さえも……」

「……！」

一号は悔しそうに唸る。

「早く、俺の身体から出ていけ！ 邪魔だ！」

「ベルトを破壊しろ美咲！ あいつの為に！」

「ぬうっ！」

ボマーは今は涙を堪えた。

自分の弱さに泣くのは、今じゃない。

裕太が守ってくれた命、それを守る為に。

今は……一号の望みを。

『SUMMON DRIVE SMASH』

一号が変身していた怪人、サック怪人が美咲の隣に現れる。

「……！」

「くっ……俺が負ける！」

「やれ、美咲！」

ボマーは黙して、ベルトをもう一度操作する。

サック怪人もエアで同じような動作。

『FINAL DRIVE！』

ボマーとサック怪人の拳に、水色の気功が溜まっていく。

二人の拳から勢いよく放たれ、重なり……大きな気弾となってアトミックのベルト目掛けて飛ぶ。

「こんなもの！」

アトミックが動こうとするが、一号が何とか気合で身体を止める。

ベルトに気弾が激突し、アトミックの身体が大きく吹き飛ばされた。

そのまま強制的に、変身が解けていく。

彼は……白い髪の裕太の姿へ戻っていった。

「馬鹿な……」

「やったぞ……裕太！」

ボマーもそのまま、強制的に変身が解けていく。
六角美咲の姿へと戻り、吹き飛ばした二号の所へ……疲れているの
も忘れて駆けていく。

第二百六十九話

壊れたベルトを握り潰しかねない程の強さで握る二号。

走って向かってきた美咲を、今度こそ本当に悔しそうな顔で見る。

美咲は目を閉じて、涙を堪えて言う。

「これで勝ったなんて、思ってませんわ。裕太さんや一号さんの協力がなければ、ベルトを壊すという選択をしなければ、私は生きてここにいませんでしたわ」

「……俺を慰めてるつもりか？ お前」

「私は、諦めてしまった。貴方という存在を前にして、もう無理だと諦めてしまった。それに……助けるべき人を死なせてしまった。貴方の意思の強さに、私は負けてしまったんですわ」

「……」

「今認めますの。私の負けですわ。貴方は、私に勝つ事を諦めさせた人……とても強い意思と力の持ち主ですわ」

二号は立ち上がる。

「ふぎけんじゃねえよ。戦う力まで奪われて、お前が生きた状態で終わった。俺は、どうやって本気のお前に勝てば良いんだよ」

「……」

「負けを認めんのは俺の方だ。お前を舐めて掛かったせいで、俺は自分の求める世界を掴めなかったんだ。だからよ……」

「待たせたね、松永秀奈」

二号が手を美咲に翳そうとした瞬間、声が聞こえる。

「お前……」

「おやおや、敵と一緒に仲良くお喋りとは……君も人の事を言えなくなったね。秀奈」

「……さあ、何のことを言ってるんだか分かんねえな」

戸間董……だが様子がおかしい。

「董先生……」

「美咲、少し彼女と話がある。どいてくれないか？」

「……嫌だと言ったら？」

「言わせない」

そう言つて董が、一瞬にして美咲との距離を詰めた。

視認出来ない程の速さで腹を殴り、悶絶させる。

よくよく腰回りを見ると、美咲と戦つた時に使つたベルトがある。

「くっ……」

「……お前、何する気だ？」

「僕はね、失敗作は処分する主義なんだ。だって、僕の汚点になるからね。だから……僕は今から君を処分するよ」

有無を言わせず、董は……。

「ぐおっ……い！」

二号の胸に、何もないところから生み出した刀を突き刺す。

どことなく似ている……いや、それはスペクターソードそのものだ。

二号は血を吐きながら倒れ……眩く。

「ははは……立場逆転つてわけか」

「元々君は僕の作り出した道具。立場なんてあると思つたのかい？」

「デメエ……」

董は突き刺した刀を引き抜く。

開いた穴から残つた血が、流れていく。

二号は……実に呆気なく死んでしまった。

「貴女……」

「そんな顔をする事はない。僕が殺したのはただの人形。この前君が戦つたのも、君が守れなかつたものも……ただの人形。僕の役に立てなかつた……人形なんだよ。役に立たない道具は廃棄する。そんな当たり前前の事をしただけだ」

『美咲、俺が変わってくれ』

「一号さん？」

『どうやらあいつが死ぬ前に俺をここに避難させたらしい。俺に喋らせてくれ』

「分かりましたわ」

『もし痛い思いをさせたら、すまない』

そう呟いてから、一号が表に。

立ち上がったから、董に告げる。

「董……君はそんな人じゃなかった。君は研究熱心で」

「その声、健斗か。ああ……熱心だったさ。熱心で、絶対その研究で成果を出したかった。だから君達を実験に使う事に対して何のためらいも無かった」

「ああ……俺もそれを分かっている君に協力した」

「なら何故僕を裏切った！ 僕を愛しているのなら、何故君はそうして僕に刃向かう！ 狩野遥もそうだ。僕の友達でありながら、僕への協力を拒んだ。何故誰も言う事を聞かない……？」

「董……俺は……」

「うるさい！ 君達が役に立ちさえすれば、僕はっ……」

董が苦しみます。

董の身体が、右腕の筋肉が隆起している。

恐らく……あの薬を使った影響だろう。

「こんな痛みを味合わずに済んだんだ……」

第二百七十話

「ああ……痛い。痛すぎる。全部君達のせいだ。君達が悪い。君達が役に立たないせいだ。僕は悪くない。僕は完璧なんだ。上手くないのは僕のせいじゃない」

謔言のように、自分を肯定しようとする董。

近くで見ていたのだろうか、遥が美咲の前に飛び出す。

「董！」

「……遥あ。今更僕に何の用だい？ 僕を裏切った君が、僕の前に出たらどうなるか分かってるよなあ？」

「もうやめろ……！ これ以上自分の目的の為に人の命を弄ぶな！」

「君は僕に命令を出来る立場かい？ 僕が今拳を振るえば、変身していない君の腹を貫いて殺す事が出来る。そう、君が大事にしていたあの小僧のように……君も死ぬんだ。まあ、どちらにしても君にはこれから死んでもらうけどね」

「……ヲダスナ」

「は？」

「ママニ……テヲ、ダスナ！」

グングニルが激情しながら、槍を董に向かって振り下ろす。

「人形が僕に命令しながら攻撃とは……。舐めているのかい？」

「ヴィーダ……ニンゲン！ ニンギョウジャナイ、ヴィーダハダイスキナママヲマモル！」

「何か一つの目的の為に生み出され、それを全うしようとして動く。それを人は人形と呼ぶ。人形風情が、僕の崇高な目的を邪魔するなどおこがましいな」

次に董は、グングニルが持つ槍と同じものを生み出す。

グングニルの脚にそれを突き刺し、顔を蹴とばして地面へ叩きつける。

「ヴィーダー！」

「ヴィーダっち！」

今度は成音と優香が駆けてくる。

「君達も、人形如きに感情を揺さぶられたって事か」

「その口を、閉じる系……」

「さもないと、あたし達はアンタを……」

「殺す……とでも言いたいのかい？ どうやって？ スペックの高いあの人形でさえ倒せない僕を、君達がどうやって倒すと言うのか教えて欲しいね」

「ヴィーダ、あたしがやるわ」

そう言つて成音はヴィーダのグングニルドライバーからフレイム
シャワードライバーを引き抜く。

ベルトを装着し、成音と優香は端末を操作する。

『FLAME SHOWER DRIVE READY?』

『HORSE DRIVER READY?』

「変身!」「変身系!」

『COMPLETE』

二人は同時にその姿を変え、成音は火炎放射器怪人へ、優香は騎兵
怪人へ。

そのまま董目掛けて駆け出していく。

「非常に無意味な行動だ。君達二人などこれで十分だ」

董が右足の先を勢いよく地面へ叩きつける。

それだけで地鳴りが起き、成音と優香の行く手を阻む。

吹き飛ばされた岩の激突で、二人は変身を解かれてしまった。

そして遙と美咲以外で唯一残った明人に目を向けて問いかける。

「無論……君も戦うんだろう?」

第二百七十一話

「……」

明人は無言で剣を構える。

董はそれを見て、笑みを浮かべた。

「そういえば……自分の計画に君の肉体を選んだのも、僕の汚点の一つになってしまったね。まあ尤も、一部は秀奈の自分勝手ではあるがね」

「御託は良い。そんなのは戦いの場において無意味だ。お前が勝てばどれだけ汚れた事をしていようがお前が正義だ」

「……」

「自分のしてきた事を無駄にしたくないなら、戦って勝てば良い。あとは俺を倒せば終わりのようなものだ」

「潔いじゃないか。そこまで言うって事は余程の自信があるって事なんだろう?」

「自信……違うな。俺は一度望まぬ形でお前の手下になった。この戦いでその過去を振り切る、それが俺のすべき事だと分かっているからそう言ったまでだ」

「良いね、もし僕が勝ったら……君の肉体を今度こそ有効活用させてもらおうよ」

董は次に剣の怪人・改の使う剣を生み出す。

見ていた遙が呟く。

「知っている武器を……自分の脳波から取り出して使えるのか」

「美咲にも見せた事が無かったけど、その通りさ。オールウェポンのようにはいかないが、元の威力を再現する事なら出来る」

「……」

二人は視線を合わせてから、消えるような速度で移動し、剣を振るう。

明人の方がやはり上手で、剣と剣がぶつかり合った時も董の剣の方が弾かれ、怯まされる。

「やはり君の剣相手ではそうなるか……なら!」

今度は剣の怪人・改の武器を火炎放射器に変えて空かさず放つ。
明人は手にしている剣でそれを防ぎながら、火炎放射器を一刀両断。

頭突きで董を大きく吹き飛ばし、剣をもう一度構える。

「やるね……今度はこれだ」

背後にグングニルが振るう武器……オーティンランスを何本か出現させ、そのまま真っ直ぐ明人へと飛ばす。

明人はそれを全て剣で防いでから駆け出す。

何度か剣を振るうが、今度は何度か防ぐ董。

「次は……」

ガス銃を召喚し、空気弾で動きを止め、隙を作る。

「やつと君にも隙が出来たね」

「……ッ！」

「これでトドメだ」

剣の怪人・改の武器に持ち替えてからそれを逆手に構え、超高速で明人を斬りつけた。

同時に空気が拡散し、明人が解放される。

明人の身体に大きな傷が入った後、大ダメージで変身が解けてしま
う。

「ぐあッ！」

「もう終わりか……まったくつまらないな」

董が呆れた顔でそう呟く。

「じゃあ、君を殺させてもらおうとするよ」

剣を遥の喉元に向けた董が、笑みを浮かべてそう告げる。

遥は覚悟を決めて、ロードドライバーを取り出す。

第二百七十二話

ベルトを着けながらも、遥は後ずさる。

無理だ。

明人でさえ勝てない相手に、遥が勝てるわけがない。

「美咲、すまない！」

そう呟き、健斗は美咲の身体を使って駆け出す。

変身すらせずに董の前に現れて、董に向かって体当たり。

言わずもがな、董には一のダメージすらない。

「何のつもりだい……健斗。変身すらせずに……」

「これ以上董の手を汚させない。董……俺は董が好きだ。董の願いなら何でも聞いてやる。だからせめて……もう誰も傷付けないでくれ！」

「ふん……君が僕を好きと思うなど当然だ。何をされてもそういう風を感じるように、僕が君を操作したんだからな」

「……そうだな。でも、だからこそ今なら思う。好きだから、好きな人が間違った道に進もうとしてるなら止めたい。それが俺のやるべき……違う。やりたいこと。そしてそれは、例え誰が否定してもやらなきゃいけない。それを美咲に教わったんだ」

『一号さん……』

「いきがるな。ベルトがない君が、どうやっても僕に勝てるわけがない」

「イチゴウー！」

ダメージがある程度回復したヴィーダが、少し遠くで叫ぶ。

振り向いた瞬間、美咲に向かって投げる。

健斗がそれを受け取った。

ムラマサドライブー。

「これは……」

「ヴィーダ、ドンナニスキナヒトニキラワレテモアキラメナカッタ！

ダカラ、イチゴウモー！」

「……ああ」

ムラマサドライブを着ける健斗。

「美咲」

『一号さん』

「俺はお前だけは死なせない。だからもし無理だと悟ったら、お前を守る為に戦いをやめる」

『……私の事は気にしなくて大丈夫ですわ』

「美咲？」

『いざとなれば、私が代わりますの。それに……私も皆さんの事を道具として扱う董さんが気に入りませんの。絶対に勝ちたいですわ』

「……分かった」

美咲はまだ、涙を堪えようとしているように感じる。

……仕方ない事だ。

「この戦いが終わったら、二人で泣こう」

『……三人だろ？』

「……？」

俺は突如として聞こえたその声に、辺りを見回す。

ここにいる誰の声でもない。

その声は……。

『裕太……なのか？』

『……』

裕太はそれに対して、何も返さない。

『俺がこんな形でいるって事は、俺は死んだんだな』

『……すまない。俺のせいだ。お前が死んだのは、俺のせいだ』

『……お前のせいじゃない。お前の作戦がなきゃ、こうしてお前や

……美咲にもう一度会えなかったんだ』

『裕太さん……』

『美咲、悪いな。俺……死んじまったよ』

『馬鹿……私なら別に、庇われなくなつて……』

『無茶言うな。俺の前だからって無理に強がるなよ』

『……』

美咲は俯いて、まだ涙を堪える。

それを見た裕太が、次は健斗の目を見つけて告げた。

『健斗』

『……』

『三人で、お前の気持ち……叶えるぞ』

『ああ』

健斗は目を開ける。

「作戦会議でも終わったのか？」

董の問いかけに、健斗は答える。

「ああ……そんな所だ」

ムラマサドライバーの端末を取り出す。

——貸してもらった美咲の身体、それに裕太が命を使って作ってくれたこの状況。無駄には出来ない。

端末を操作し、閉じる。

『ムラマサ！』

その音の後、健斗は裕太がやっていたポーズをとる。

頭の中で、美咲と裕太も同じポーズをとった。

そして三人で叫ぶ。

「変身!!」

端末を取り付ける。

『御意！ 出陣！ 仮面ライダームラマサ！』

上から降りてくる刀は……禍々しい妖刀の色では無かった。

綺麗に光る……白く刀身、それに明るい紫の輝き。

まるで美咲や裕太の願いのように綺麗だ。

健斗はそれを、手を高く伸ばして掴む。

手から腕へ、そして全身を巡り。

健斗の身体は、仮面ライダームラマサへとその姿を変えた。

三つの意識が一つに混ざる。

健斗は美咲が考えた台詞を、ポーズも交えて叫ぶ。

「董……董を止められるのはただ一人、俺だ！」

第二百七十三話

健斗が姿を消しながら、董との距離を詰める。

白い刀を勢いよく振り下ろそうとするが、彼女が生み出した剣の怪人・改の剣に阻まれた。

「君……真面目にやってる？ あんだけの台詞吐いておいて、あの明人よりも剣が軽い。本当に僕を止めるつもりがあるのかい？」

「……！」

明人とグングニルが間に割って入る。

二人がかりで董の剣を押し、隙を作ってから明人が攻撃を入れる。

「明人、ヴィーダ……！」

「ようやく見つけられたようだな、お前の本当にやりたい事」

「……ああ」

「なら、絶対に勝て。今だけは、相手を傷付ける事を恐れるな」

「……！」

健斗はもう一度駆け出す。

今度は左拳を握って、董の腹に向かって振るう。

無論、拳は董の剣に受け止められる。

「そんな拳、何度振るっても無駄……」

だが右脚が勝手に動き、董の脇腹に命中する。

動かしたのは、美咲だ。

『健斗さん、拳がダメなら蹴りですわ！ 当たるまで、何度だって振るえば当たりますわ！』

「美咲！」

『隙が出来た今がチャンスですわ！』

「ああ」

健斗は頷いてから、刀を構え直し、高速で移動する。

怯んだ董に、何度も刀を振るっていく。

「……！」

董もまた素早く移動し、もう一度刀を振り下ろす。

健斗の防御が間に合わない程速い剣筋、それを今度は裕太が防ぐ。

「裕太……」

『美咲をよろしくな、健斗。はあッ!』

裕太がその剣を弾いてから、健斗に交代する。
端末を操作しながら、健斗は呟く。

「これで決める……!」

『最終撃!』

白い刀を構え、健斗は大きな声で叫ぶ。

「ライダースラッシュ!」

白い光を纏い、董を何度も斬りつける。

最後の一撃は、ドライバーに向かって放たれた刺突。

董の意識ではもう回避不可能の筈だった。

しかし……。

「やるなあ、健斗」

董はその刀身を掴んだ。

力づくで刀身を折り、瞬間移動並みの速度でムラマサとの距離を詰め、拳を叩きつける。

ムラマサは大きくその身体を吹き飛ばし、地面へ。

「だけど、まだ俺に勝つのは無理みてえだな」

「その声……」

董の姿を見据える。

そこにいたのは……董では無かった。

だが健斗には見覚えのある姿だ。

金色の髪に、赤い瞳……それに黒いスカジャンに黒いズボン。

男のヤンキーを思わせるような姿だが、上半身を押し上げる膨らみが紛れもなく彼女が女性である事を理解させる。

あれは……。

「秀奈……」

健斗の幼馴染……松永秀奈。

「おいおい、死んだと思ってたのか? だとしたら心外だぜ」

何故かその場に現れた彼女は笑みを浮かべて、健斗にそう告げた。

第二百七十四話

『秀奈って……という事は二号さんですか?』

美咲が驚いた声でそう問いかける。

「……ああ。このベルトのせいで、この忌々しい姿に逆戻りしたみてえだな」

「……お前がそこにいるなら、話は早い。もうこの戦いを」

「終わりにしよう、とでも言うんだろ?」

「……」

秀奈が言う。

「六角美咲を出せ」

健斗はその言葉に対して、やや不服そうな振る舞いをしながらも交代する。

「二号さん……」

「まだ困るんだよ、こいつに負けてもらっちゃよ。俺まで死んじゃうからな」

『お前……! そこにいたのか! 邪魔だ! すぐ出ていけ!』

「テメエ一人で何も出来ねえ奴がほざいてんじやねえよ」

秀奈が何とかして葦を抑えこむ。

「私達は葦さんを殺すつもりはありませんの。ですから別に……」

「おいおい正気かよ。こいつを殺さねえとか頭湧いてんのか」

笑いながら言う。

「こいつは大人しくお前らの言う事を聞くようなタマじゃねえ。だから、今ここで決めなきやいけねえ。俺とこいつが死ぬか、お前達が死ぬか」

「……私に、貴方達を殺せと言うんですの?」

「そうするしかねえだろ? 大体お前も、こいつのせいで一回死んだんだよ。それくらいするべきだと思わねえか?」

「……」

「やれねえってか? なら……」

秀奈が素早く移動して、美咲との距離を詰める。

「俺がお前を殺す」

そう告げた秀奈の拳が、ムラマサの腹に深々と突き刺さった。

※※※

宙を回転しながら大きく吹き飛ばされるムラマサ。

地面に叩きつけられてから何とか立ち上がり、秀奈の姿を捉える。

「おい、早く戦えよ。俺はお前を殺すって言ったんだ。戦えよ……」

『美咲……！』

裕太の残留思念が交代して、拳を握って秀奈に振るう。

「その拳、福沢裕太か」

秀奈が笑みを浮かべて拳を掴む。

「この命を代えて守った奴を、みすみす殺させるわけねえだろ！」

「……そうだなあ、お前こいつの為に死んだんだよなあ？」

「……！」

「どうだよ、二回目の死を迎えた気分は。痛かったか？ 爆風に飲み

込まれて死ぬのは」

「……！」

「もう一回その状態で殺してやるよ。美咲も、健斗も纏めてな」

そう告げて、ムラマサの脇腹に蹴りを入れる。

そしてブレインドライバーの能力で剣の怪人・改の剣を生み出し、

視認出来ない剣捌きでムラマサを圧倒していく。

連続攻撃の最後の一撃は、顔面に向かって振り下ろされる一撃。

何とかそれを、咄嗟に交代した美咲が防ぐ。

「……！」

『美咲！』

「もう誰も殺させないし、私も死にませんわ！ 貴方達だって……」

「殺さなきゃ、俺が死ぬまで何度でも殺しにかかるだけだ」

ムラマサと距離を取った秀奈が、また笑みを浮かべる。

第二百七十五話

ムラマサと秀奈の戦いはまだ続いていった。

二人とも周りが視認出来ない速度で動きながら拳や剣を交わしている。

「お前のメンタルは尊敬するぜ。仲間を殺されても、俺やこいつを殺そうとしねえ。普通なら……こんな奴殺しても罰は当たんねえつてのによ」

美咲は目を閉じて後悔の表情を浮かべながら言う。

「裕太さんを守れなかったのは、私のせいですわ。貴方を殺したところで、あの人は帰ってきませんの……！」

「そうだな。こいつの魂のコピーは存在しない。福沢裕太は蘇我高校に潜入する為に利用されただけだからな。簡単に言えば使い捨て、俺ら以下の存在だったってわけだ」

「なん……ですって？」

「違うってことはないだろう？ 事実こいつも魂をいじられている。お前にボマードライバーを届ける事が出来たのも、無意識のうちに価値観を植え付けられていたからだ。それが無ければ、お前は今こうして戦ってねえよ」

美咲は攻撃を防ぎながら返す。

「複雑ですわね。貴方達がいなければ、私にこんな沢山の仲間が出来る事ありませんでしたし、裕太さんにも会えませんでしたわ。けど……裕太さんは貴方達に人生を狂わされた。それだけは腹立たしいですわ」

「使い捨てにも満たねえ奴に、こいつや俺が情けを掛けると思うか？ お前が守ろうとしたのはそういう存在だ。すぐにも死ぬような奴を助けてえ？ 死なせねえ？ ハッ……それこそ時間の浪費つて奴だ。俺に感謝しろ。お前はこれからの人生を自分の為だけに使えるぞ。俺達の屍を超えた先にな」

秀奈が素早く動いて剣を振り下ろす。

何とか美咲は、もう一度それを受け止める。

「貴女は一つ勘違いをしてますわ。私の人生は、全部私の為に使ってますのよ。これまでもこれからも。裕太さんの為に生きたのも、生きたいと思ったのも私の為！ 貴女達がいくら裕太さんを道具扱いしよう、私にとってあの人は……！」

そう言いながら端末を操作し、ベルトに取り付ける。

端末から、決め技の前振りが発せられた。

『最終撃！』

刀を持たないムラマサの右拳に、白いエネルギーが溜まっていく。両脚が熱を持ち、そのまま右拳を叩きつけようと飛び上がる。

秀奈に近づく前、相手に視認出来ない速度で接近してから、彼女の前で姿を現して叫ぶ。

「ライダーパンチ！」

白いエネルギーをそのまま相手へと叩きつける。

だが秀奈は見切り、それを受け止め……問う。

「あの人はなんだよ？ え？」

裕太自身にも言えなかつた事を、美咲は叫ぶ。

「あの人は……私が愛してる人ですよ！」

第二百七十六話

「愛してる人、なあ……。お前は強ええが男を見る目はねえみてえだな」

掴んだ拳を払い、剣を振るい吹き飛ばしてから秀奈が返答する。

「それで結構ですわ。私も自覚してる事ですの」

そう呟いてから、再び二人は消えるように動き出す。

秀奈が振るった拳を受け止め、ムラマサは何とか蹴とばす。

「道具をそこまで愛せるお前……寧ろ尊敬してやるぜ。良いぜ……六角美咲。今からお前をあいつのいる所まで送ってやる。それがお前の望みなんだろう？」

秀奈はそう言つて、ムラマサ目掛けてもう一度駆け出した。

駆けながら、秀奈はその姿を変えていく。

黒い爆弾型の頭に、黒い長ラン……。ベルトこそ違うが、アレは……。

『仮面ライダーアトミック……何故、またあの姿に！』

「くっ！」

アトミックが振るう剣の怪人・改の剣を両手で何とか受け止める。

「姿だけだけどな。テメエの本当の姿よりも、こいつの方が百倍マシだしな」

「マシ……。どういう意味ですか？」

「言つたら？ 弱いつて言われた、この世界は第一印象で全て決まっちゃう世界だつてよ」

アトミックは少しだけ俯いて、さっきの戦いで吐露しなかった事を話し始めた。

「俺を否定した奴は言った。女の俺に、自分は倒せない。俺はそいつと戦い、一度負けた。俺は行く先々でなめられた。腹立たしくて仕方なかったさ。けど自分の身体は……。女として、いや人間の俺の身体には限界がある。だから、こいつに魂を売つても自分の行きたい世界へ行くつて決めたんだ」

「秀奈さん……」

「それならお前でも分かるだろ。俺がどうしてお前に勝つ事に拘つた

か。二度とチャンスを与えないと言ったか。俺にもチャンスは与えて貰えなかった。だから、一度負けたらそこで終わりだ。お前が愛してる奴みてえに、戦いで負けた奴は二度と戦う権利を失う。お前みてえな奴は甘えんだよ」

「！」

美咲はアトミックの攻撃を受け止めながら考え続ける。

彼女は先ほどから、執拗に裕太を責め続けていた。

さっきの戦いでは、そんな様子一切なかったのに。

「秀奈さん、無駄ですわよ」

「いきなりなんだ？ 人格混ざって頭でもおかしくなったか？」

「貴女、私に殺して貰いたくて……わざと裕太さんの悪口を言ってるのね？」

「……どうしてそう思う」

「さっきの戦いの時に、そんな言葉は一切発していない。私を怒らせる事で、死のうとしてている。そうですわね？」

「半分正解で、半分不正解だ。単純な話だ。キレた方が、強くなんだろ？」

「……言った筈ですわ。私は裕太さんを愛している。誰がなんと云おうと、それを曲げる事はありませんわ！」

『美咲……』

「そうかい、そうかよ。なら代わりに俺がキレてやるよ」

「……！」

アトミックが身体を震わせる。

彼女はその姿を、ハイドロフォームの時の姿へ変えた。

「早く殺すつもりで戦えよ。俺はそれを待ってたんだよ」

第二百七十七話

アトミックハイドロフォームの姿となった秀奈。

本物と比べれば大した事はないが、それでも秀奈自身の戦闘技術……それと怒りが、確実に美咲達を追いつめていた。

「さっさと殺す気でやれよ！ テメエ死ぬぞ！」

「……もう余計、そんな事は出来ませんわ」

美咲は何かムラマサの拳一つで、様々な武器を生み出すアトミックに立ち向かう。

「貴女も、私や裕太さん達と同じ。自分の過去や弱さと向き合い、戦ってきたんですわ。私達と方法は違えど、自分の欲の為に、自分のプライドも犠牲にして」

「……！」

動揺するアトミック。

「何度でも言いますわ。あの時貴女が殺した人形さんもヴィーダさんも裕太さんも一号さんも、そして貴女も……董さんの為に作られた道具じゃない！ 皆必死に悩んで、それでも自分のしたい事の為に生きようとしていた！ 裕太さん達だって、死にたくもないのに悩んで、私の為に命を懸けてくれた！ 私が弱いから、そうする選択しかさせてあげられなかった。だから彼が救ってくれた命を、これから守るべき者を守る程強くなる為に使いますわ！ 貴女の心にも、向き合ってください」

「お前……！」

美咲がそう告げた瞬間、ムラマサの姿にも変化が現れる。

ブレインドライバーとは違うムラマサドライバーにはないはず。

なのだが、ムラマサはその姿を変えていく。

緑の長ランに、緑の爆弾型の頭、赤いライダースーツ。

そして……折れた筈の刀が再び再生する。

ムラマサの色合いをしたボマーとなつてから、その刀を構えた。

『美咲……』

裕太が告げ、中にいる一号が何も言わずにそれを見る。

「悩む人の心に寄り添い、自らの信念の為に戦い、壁があるなら何度でも『爆破』していく。それが、私……仮面ライダーボマーですよ！」
「誰の手の届かない強さを手に入れて、過去の弱い自分を『消し去る』。それが俺、仮面ライダーアトミックだ」

そう告げてから、アトミックがドライバーを操作した。

『FINAL DRIVE!』

音声と同時に、アトミックがゆつくりと宙を舞う。

背後に剣の怪人・改の剣を何本の出現させてから、ムラマサに向かって全て飛ばす。

「消え去れ！」

向かってくる剣を、ムラマサは全て刀で弾く。

だが、それでもアトミックは諦めない。

もう一度端末を操作する。

『FINAL DRIVE!』

出せない筈の黒いボムビットが、アトミックの周囲に出現した。

「ライダーボムキック……！ はあッ！」

宙に浮いた状態から、ムラマサに向かって急降下するアトミック。

重いキックが、ムラマサの腹目掛けて放たれる。

「くっ……！」

先にボムビットが、ムラマサの身体へと直撃していく。

裕太の命を奪ったそれを、美咲は何とか耐え忍ぶ。

「こんな所で、死ねませんわ！」

「はあああッ!!」

叫びながら放たれるキックに、ムラマサは刀で競り合う。

「終わりだアッ！」

「！」

『美咲……！ うおおおおッ!!』

何と裕太が、美咲の人格を押しつけて現れる。

刀でキックを押し返し、怯んだアトミックに一太刀浴びせた。

「テメエ……！」

『美咲、あとは頼む……』

「裕太さん……ありがとうございますわ！」

そう言つて、美咲は端末を操作する。

『最終撃！』

美咲はボタンを押してから、刀を構える。

刀にエネルギーを溜め、そのまま勢いよく飛び出す。

「ライダースラッシュ！」

ムラマサが刀をアトミックに向かって振るいに行く。

隙が出来たアトミックに何発か命中し、最後の一撃で突きを放つ。

「くっ！」

アトミックが反射的に放った拳が、ドライバーに命中してしまう。

命中したドライバーから、ビリビリと音が鳴り、技が中断させられ

た。

「まだですわ、私はここで終わりませんわ！」

『最終撃！』

壊れかけた端末をもう一度操作し、今度は飛び上がる。

だが飛び上がった瞬間、ドライバーが断末魔の如く稲光をまき散ら

し、完全に壊れてしまう。

刀が、消えていく。

そこから段々と力が抜けていくと思われたが、それでも美咲は諦め

ない。

「まだ、この力があればいけますわ！」

右脚を伸ばし、段々と力を失いつつある身体にむちかって、諦めず

に急降下。

『『ライダーキック!!』』

三人で、そう叫んでアトミックのベルトに直撃する。

「はあああああッ！」

美咲は叫びながら、そのままアトミックのドライバーを破壊。

アトミックは爆発しながら、戸間董の姿へと戻っていく。

「くっ……」

だがその時の董……いや秀奈の顔は、不思議と穏やかだった。

第二百七十八話

疲れ果て、荒い息を吐いて仰向けに倒れる秀奈に、美咲は手を伸ばす。

「秀奈さん」

「……」

秀奈は、何も言わずにその手をとる。

「やっと、話してくれましたわね。貴女の弱さ、貴女が何故戦うのか」「出来る事なら、そんな話せずに死にたかったぜ」

そう言いながらも、秀奈は笑う。

「元々この勝負はお前の勝ちだ。裕太を殺した償いに、お前に俺を殺してもらうつもりだったが、なんつーかつい……熱くなっちゃった。なんでかな、お前と話していると変な気持ちになる。なんかこう、つい気持ちをぶつけたくなっちゃう」

「……秀奈さん」

「ふう……にしても、最後まで俺を殺さなかったみてえだな。あんだけお前の彼氏を馬鹿にした俺をよ」

「言った筈ですわ。誰が道具と言おうと、私が裕太さんを愛する気持ち……って彼氏じゃありませんわー！」

「ふん……」

秀奈は軽く笑ってから言う。

「悪かったな、決着がつく前にお前の相棒を殺しちゃって」「……」

美咲はまだ、涙を堪える。

自分の中には裕太が残っている。

まだ泣く時ではない。

「俺がこいつごとと全て終わらせる。だから」
どこかへ向かおうとする秀奈を止める。

「そう思うのなら、死ぬ選択肢を取らないで欲しいですわ」

「お前……」

「貴女は強い人。だから、私一人の力でいつか貴女を倒せるくらい強

くなりたいんですの」

「……」

秀奈は俯いてから、もう一度笑う。

「お前、やっぱ馬鹿だな」

「馬鹿で結構ですわよ」

美咲も意地を張りながら笑う。

そうして全てが終わる……そう思っていたが。

「くっ……」

「秀奈さん？」

「どうやら、董の野郎はそうもいかねえみてえだ」

秀奈の人格から、董の人格に入れ替わる。

「僕をのけ者にして話を進めるとは良い度胸だ。殺す……こいつの人格も消してこの場にいる君達全員！」

最早冷静な判断が出来ない董が、美咲に掴みかかろうとする。

しかし。

『待てよ』

秀奈が何とか董を止めた。

「秀奈……また僕の邪魔を」

『六角美咲、残念だったな。どうやらお前の願いはどう足掻いても叶えられそうにねえ。この場で俺と董が死ぬくらいしか方法がねえぞ』

秀奈はそう言いながら、董の首に手をやる。

「こ、これは……！」

『へっ……俺と一緒に死んでもらうぜ。お袋』

「な、何を言う！ やめろ！ やめるんだ！ 僕はまだ死にたくない

！ 僕は絶対に歴史に名を残して

『テメエ一人の力で何も出来ねえ奴がほざくんじゃねえ。歴史に名を刻む？ テメエの名なんざせいぜい墓石に刻むくらいがちやうどい
いぜ』

「やめろ……やめろやめろ！ そうだ！ 君に新しい身体をやる！

それで良いだろ……だから、かはっ……やめろ！」

『あと、もう少しだ……くっ……』

異様な光景だ。

自分の首を絞めながら、嫌だ嫌だと叫び続ける董を……美咲達は止められずに見ていた。

「うっ……けほっ……こほっ……」

やがて、董が嗚咽し……そのまま窒息して命を絶った。

第二百七十九話

董が秀奈によって命を絶たれてすぐに、彼女の所に歩み寄ったのは……元親友の遥だった。

大きく目を開け、苦しそうに口を開ける、見るも無残な彼女の顔に触れ……目と口を閉じさせる。

首から手を離し、仰向けの状態で寝かせてから……遥は人になるべく悟られないよう、声を殺して泣き始めた。

『……』

一号……健斗も、自分の中で泣いているのを感じる。

美咲もまだ涙を堪えて、何とか呟く。

「これで、終わっただんですのね」

美咲は目を閉じる。

出来る事なら、彼女ともう一度戦いたかった。

自分が勝てるまで。

けど……そう考えているうちに、もう一つの別れが自分の中で近付いていた。

『美咲……』

自分の中で、何かが消える感覚がしている。

紛れもない……裕太の残留思念だ。

「もう、お別れですの?」

『……ああ。残念だがそうみたいだ』

『裕太……!』

一号が裕太に近付く。

『お前を死なせた事、消える前にもう一度……』

『……良いんだ』

『……』

『自分の命と同じくらい大切なものを、二つも守れたんだからな』

それでも、やはり足りなかったと感じているのか。

裕太は涙を流していた。

健斗も同じように。

『健斗』

『……』

『美咲の事、これからも頼んで良いか?』

『ああ……絶対にこれからも、美咲を守る』

『……』

裕太は笑ってから、今度は美咲を見る。

『美咲』

『……はいですの』

『お前、確か俺達の身体を救うために科学者になりたいんだつたよな』

『もう……そんなの良いですわ。貴方がいないなら、その夢は!』

『なら、見せてくれよ。俺に』

『え……?』

『俺を救うための力を、それ以外の誰かを救う為に使ってくれ』

『……そんなお願い、しないで欲しいですの。貴方をお願いされたら』

『……やるしかないじゃないですか』

『……俺もお前が好きだ。だから』

『え?』

『いや、なんでもない。ただの独り言だ』

『馬鹿……』

『お願いしても良いか、美咲……仮面ライダーボマー』

『……ええ。この戦いで得たもの、そして貴方が守ってくれたものを』

『無駄にしない為に、これからも頂点目指して戦いますの。私はこれ』

『からも、仮面ライダーボマーですわ』

『ああ……』

そう呟いた瞬間、裕太の残留思念が一気に消滅を始めた。

眩い光を発して、まるで頭の中から大事な何かが消えるように。

美咲はそれが終わってから、眼を開ける。

残った健斗と共に……美咲は空を見上げて大粒の涙を流して。

『うわあああああああああああッ!!』

二人で、声を荒らげて叫んだ。

第二百八十話

あの戦いから……実に一か月が過ぎた。

六角美咲はボマードライバーを装着して、ある戦いに赴こうとしている。

そう、前から約束していた足利明人との再戦だ。

その舞台は、蘇我高校ではなく○×女子高校。

今日行われている体育祭のオオトリだ。

「行つてきますわ、裕太さん」

心の中に、まだいる筈の裕太に対してそう告げて……眼鏡を掛ける。

前までの眼鏡ではなく、裕太が選んでくれた新しい眼鏡。

これを掛けていると、隣に彼がまだいてくれる気がする。

美咲はそれから、歩いて舞台の上へ。

明人も、反対側から現れる。

「……」

彼の腰には、既にソードドライバーの姿が。

彼を見る。

あの薬品の効果は消え、普通の人間へと戻り、二度と剣の怪人・改への変身は出来なくなつたが、それでも彼はあの時以上にこの日の為に修行を重ねたという。

それを言葉ではなく、雰囲気語っている。

「あまり戦いを見世物にするのは好きではないんだがな」

少し難しい顔をする明人に、美咲は笑って答える。

「私はこういうのも好きですわ」

「そうか」

戦う前の明人と言葉を交わす。

美咲がこの戦いを提案したのは一週間前。

裕太達への弔いがある程度済んだ頃の事だ。

明人はそれらの事には顔を出さず、蘇我高校生徒会長としての仕事を全うし続け、一週間前漸く、任期を満了した。

その後で、彼が美咲に会いに来たのだ。

※※※（一週間前）

「調子はどうだ？」

「……私は何とか大丈夫ですわ。けど……健斗さんはそうもいきませ
んわ」

あの後健斗は、ひとまず冷凍保存された身体を治療する方法が見つ
かるまで、脳波データを小型端末に入れて保存する事になった。

いざという時にはボマードライバーと通信し、美咲が変身した際に
脳波の入れ替えが用意に出来るようにプログラムを組む事で、もし再
びシステムを使う時が来ても戦えるようにした。

そして健斗は美咲が面倒を見る事になったのだが、彼の元気は無
かった。

一応ドライバーを着けた状態で交代すれば味わう程度ではあるが
食事も出来るようにした。

美咲はその上で食事に誘いもしたが、断られ。

まだ彼は、裕太や秀奈、そして董の死から立ち直れなかった。

「一号……上杉健斗と話がしたい。すまないが……」

「分かりましたわ」

美咲はボマードライバーを着ける。

美咲の身体を借りて、健斗の人格が表に出た。

「上杉健斗」

「……」

「お前は戦いで失ったものに対し、後悔している。そうだな？」

「……当たり前だ。当たり前前に決まってる。俺は何一つ助ける事が出
来なかった！俺は大切なものを死なせて生き残ってしまったんだ
！ いっその事、俺が死ねば良かったとさえ思う。人の命令で命を奪
い続けた俺が！」

声を荒らげて叫ぶ健斗を、明人が冷静に諭す。

「そう思うなら命を絶てば良い。簡単な話だ」

「……」

「出来ないなら、そこから立ち直る為にどうすれば良いか、考える事

だ」

「俺には……」

「忘れるな。失って悲しいのはお前だけじゃない。六角美咲も、お前と同じだ。だが彼らの為にやるべき事が分かっているから、大丈夫だと胸を張って言える。約束したのだろう？　美咲を守ると。お前にその気持ちはないのか？」

「……」

健斗は首を横に振る。

「なら、生きろ。自分のやりたい事をしているのなら、胸を張って生きろ」

「……」

涙を流しながら、今度は首を縦に振るう。

「すまないな、足利明人」

「……礼には及ばん」

明人が珍しく笑みを浮かべて、そう返答した。

ドライバーを外し、美咲の人格に再び交代する。

「明人さん……」

「さて、これからどうする？　任期满了はしたが、俺は卒業まで、蘇我高生達を導いていくつもりだ」

「私は……しばらく忙しくなりそうですわ。裕太さんが守ってくれたこの命を、これからは他の誰かの命を救う為に使いたい。その為に、まずは今から大学の受験勉強……とかですわね。今からやって、入れるかどうか分かりませんが」

「そうか」

少し残念そうな顔の明人。

「あ、でも……その前に一つ頼みがありますわ」

第二百八十一話

美咲と明人は互いに向かい合い、端末を取り出す。

「結構な人ね」

「オキヤクサン、イッパイ」

成音とヴィーダが、観客席からそう呟く。

「美咲つちも明人つちも頑張る系ー」

優香が成音達の隣からそう応援する。

『……』

健斗も、今は優香が預かっている端末から見届ける。

「これより……試合を始めますー」

舞台の真ん中に立つ審判が、そう告げた。

その合図と同時に、美咲と明人が変身する。

『BOMER DRIVE READY?』

『SWORD DRIVE READY?』

美咲が端末を構えて叫ぶ。

「変身ですわー」

二人は端末を取り付ける。

『COMPLETE』

その音と同時に、美咲の頭上からは爆弾、明人には剣が現れた。

美咲は爆弾を握り潰し、明人は剣を掴む。

仮面ライダーボマー、そして剣の怪人へとその姿を変える。

「いきますわー」

バットと剣を構え、二人は駆け出す。

※※※

一か月前から分かっていた事だが、明人は初めて戦った時よりも遙かに実力が上がっていた。

しかし、それは彼だけの話ではない。

美咲も負けじと、彼の剣捌きに対応していた。

周りの人間には、美咲達の動きが見えずにいる。

「す、すごい……」

「なんだあれ、全然見えねえぞ」

「はっ！」

「……！」

二人は武器をもう一度ぶつけあってから距離をとる。

互いを見合ってから、美咲は端末を操作した。

「これでいきますわ」

『ACCELERATOR DRIVE』

アクセルドライブ……ボマーは剣の怪人を上回る速度で加速し、剣の怪人に攻撃を当てようとする。

「そこだ！」

明人はバットの動きを見切り、防ぐ。

何度も当てようとするが、全て見切られてしまう。

「どうした、六角美咲。お前はその程度じゃない筈だ！」

今度は明人が高速移動し、ボマーに向かって剣を振るう。

美咲もそれに何とか対応しようとするが、途中から美咲も動きが見えなくなっていた。

「み、見えませんわ。私……さっきまで」

美咲は動揺する。

明人の剣が防げず、後ろから斬りつけられてしまう。

「……！」

ボマーは膝をつく。

「六角美咲……」

明人がそれを見下ろす。

「私は……」

この日になるまで何度も見ていた夢が、今になってフラッシュバックする。

裕太と過ごした楽しい日々。

夢の中では、まだ彼は生きている。

現実でも、時折生徒会の仕事をしている最中にその名を口にする時がある。

けど、その言葉に返答する者はいない。

彼は……心の中にいる。
そう信じている。

だが……自分の身の回りの現実が、残酷にも彼が死んだ事を告げている。

美咲も、無理していただけに過ぎないのだ。

『……戦うって決めたのは、お前だろ』

心の中に、声が聞こえた。

「裕太さん？」

消えた筈の彼の声。

美咲はそれを感じ取る。

『自分でやるって決めた戦いを放るなんて、お前らしくないだろ』

「……」

『俺との別れ、まだ受け入れられない……そうなんだな』

「当たり前……ですわ。貴方といた時間は……」

『……なんというか、ちよつとだけ嬉しい気がするよ』

「え？」

『俺みたいな奴の事、他の事が手が付かなくなるくらい、辛いつて感じてくれたんだろ？ そんな奴、お前くらいだぞ』

「そんなこと……」

『お前は馬鹿だな。先が思いやられる』

「そ、そこまで言わないで欲しいですわ！」

『はは……。まあそれはそれとしてよ。楽しみにしてたんだろ？ 明

人と戦うの』

「……ええ」

『なら、今くらいそれに集中してやれ。好きだろ、頂点を目指して戦う事。好きな事してる時くらい、俺みたいな奴の事なんて忘れろ？ 分かったな？』

「……」

美咲は、敢えて首を縦に振らず……笑みだけ浮かべた。

「どうやら、終わりのようだな」

美咲は振り下ろされた剣を掴む。

「いえ、まだこれからですわ！」

ボムビットを至近距離で飛ばして、明人を吹き飛ばす。

ボマーは再び動き出して、怯んだ明人に一撃を加えていく。

「裕太さん、貴方がそう言ってくれるなら……私はもう迷いませんわ
！」

第二百八十二話（最終回）

明人の剣捌きに、再び対応し始めるボマー。

先ほどとは違い、迷いを捨て……ただがむしやらにバットを振るい続ける。

「はあッ！」

明人も動きの違いを感じて、笑みを浮かべた。

そして、珍しく声を上げた。

「おおあああッ!!」

今まで見た事のない、明人の強い振り下ろし。

それをボマーはバットで何とか受け止める。

「くぬぬ……はあッ！」

そして、弾く。

「おりゃあー！」

明人の胸に、バットを突いていく。

怯んだところに、美咲は端末を操作する。

「これで終わりですわ！」

「……！」

明人も諦めずに端末を操作する。

両方とも、必殺技の体勢に入った。

『FINAL DRIVE!』

明人が剣を構えてから、姿を消してボマーへ近付いていく。

光を置き去る程の速さで振るわれた剣を、美咲は何とかバットで防ぎきる。

タイミングを見つけ、最後の一撃が放たれる前に飛び上がった。

ボムビットが脚の周りへ集まり、そのまま脚を伸ばして叫ぶ。

「ライダーボムキック！」

美咲は大きく叫びながら、急降下していく。

明人がそれに対して最後の抜刀術を放つ。

激突と同時に爆散し、二人は大きく離され、地面へと叩きつけられた。

「ぐあッ！」

「くっ……」

まだ、変身は解けていない。

ボマーも剣の怪人も、何とか相手を倒そうと抗い……這ってでも動く。

まず武器を取る。

そして、立ち上がった。

もう一度駆け出そうと、武器を構えてすぐに……。

剣の怪人が、ゆっくりとうつ伏せに倒れていった。

足利明人の姿へと強制的に戻り、それを見た審判が叫ぶ。

「変身解除！ 勝者、六角美咲！」

観客席から、大きな拍手が上がった。

美咲と何とか立ち上がった明人が、その様子を見て、笑みを浮かべる。

「私……勝てた。明人さんに、勝てましたわ！」

美咲は笑顔でそう叫ぶ。

「会長……」

「美咲っちー！」

「ミサキ！」

観客席の三人も、嬉しそうに美咲の名を呼んだ。

「やはり、あいつに力を与えているのは……福沢裕太か」

明人が確信したようにそう呟く。

美咲は観客席を一通り見た後、ある事に気付いた。

ソウジの姿だ。

ソウジが、こちらを見ていた。

「ソウジ……！」

美咲は人目も憚らず、走っていきこうとした。

だが、その前にソウジが振り向き、美咲は立ち止まる。

「……まだ、その時ではありませんわね」

美咲は……そう呟いて、誓う。

——ソウジ、貴方に会うのはまだ先になるかも知れないですわ。け

ど、貴方と同じくらい大事な人の願いを叶えたら、私は絶対貴方の所に行きますわ。

※※※

再び、時が過ぎた。

あの戦いが終わってから、美咲の勉強漬けの毎日が幕を上げた。

「あー……ダメですわ。この問題……」

生徒会室で仕事の息抜きに、試しにワークに書かれた問題を解こうとする。

だが……一問目から既に分からない。

頭を抱えていたその時、成音と優香が生徒会室へ。

「まーた勉強?」

「成音さんに優香さん……どうしましたの?」

「アンタがそんなのと睨めっこしてるのが面白くて、さっきからずっと見てたのよ」

「そう系そう系」

「ちよつ……ちよつと恥ずかしいからやめて欲しいですわ!」

「問題の一つでも解けばかつこよく見えるんじゃないの?」

「うう……勉強はやっぱり苦手ですのよ……」

「まあまあ、今日はこのくらいにして、今からご飯でも食べに行く系。美咲っちまた大食いでもどう系?」

「太らないように自粛してますのよ」

「どうせ後で痩せれば良い系」

「そういう問題では……」

「とにかく行く系行く系!」

美咲は優香に連れられて、成音と共に生徒会室をあとにする。

二人のペースに押されながら、美咲は三人で外へと向かっていく。

美咲は変身しなくても、これからも仮面ライダーボマーとして戦い続ける。

裕太の望みを叶えるだけじゃない。

その望みを、極上のものにして。

絶対に『頂点』へと辿り着いてみせる。

「頂点を目指す前に、まずは腹ごしらえですわ！」

「この後増えた体重を見て顔を青くするのは、また別の話である。」

【MASKED RIDER BOMBER FIN……】

キャラ設定（完成したら載せるもの）

キャラ設定1 六角美咲／仮面ライダーボマー

※六角美咲（ろっかく みさき）

※簡単なプロフィール（バトルガールハイスオール風）

学年 高校三年生

誕生日 4月19日

血液型 A型

部活 なし（生徒会長）

イメージCV 沢城みゆき

身長 164cm

胸囲 92cm

趣味1 自分を磨く事

趣味2 仮面ライダーを見る

趣味3 爆弾の作成

好きなもの ミルクティー

嫌いなもの ゴーヤ

将来の夢 頂点に立つ事（後に裕太からの願いを受け、人を救う科
学者になる事を誓う）

理想の人1 ソウジ（元彼氏）

理想の人2 天道総司／仮面ライダーカブト

理想の人3 将来の自分自身（そう言えるくらい強くなりたい）

休日の過ごし方 特訓や生徒会の仕事

ストレス発散法 変身ごっこをする

一番の思い出 ソウジと出会った事

好きな言葉 六つの大陸の角で、美しく咲く花

人には言えないヒミツ ソウジと会う前まで太っていた事を気に
している。

再び出会うまで太らないよう、日々食事管理を徹底している。

「貴方方……本当にこんなやり方で私達を支配して楽しいんですの

？」

「私は諦めない。死んでも絶対諦めませんわ！」

※キャラ概要

浅井三姉妹のバカな日常の登場人物で、この物語の主人公。

物語開始時点で十八歳。滋賀県立〇×女子高の三年三組所属の生徒会長。

中学時代はヤンキー、去年まで副生徒会長という経歴を持ち、将来は頂点に立つ事を目標としている。

元彼氏にソウジ、永遠のライバルに浅井家を持つ。

〇×女子高の生徒会に届いた果たし状での戦いを受けた時に福沢裕太と出会い、

戦いの最中受け取ったボマードライバーを使って、仮面ライダーボマーへと

変身する。

その件で教師を辞めざるを得なくなった裕太に対して父親の玩具屋の店員にする事

を頼み込む代わりに、美咲の生徒会の仕事や雑用などを手伝い、美咲

と共に強くなるお供に指名する。

※容姿

黒く長い髪を両サイドで三つ編みのお下げにし、紫の切れ長の瞳が特徴的の

整った容姿を持つ。

このヘアスタイルになったのは高校に入ってから。

紫色の縁の丸眼鏡を着用している。

赤いブレザーを着崩さずに着用し、左腕には生徒会長の腕章を常に着けている。

かなりの巨乳。リボンの色は黒。

服のセンスもそこそこで、清楚な色が多い。

中学時代はセーラー服を着用しており、痩せる前と後の時も両方も黒髪ロング。

※性格

自他共に厳しく、自分は頂点を目指すべき者だと信じている自信家で、

お嬢様口調で喋る割にかなり上から目線な喋り方が多い。

しかし尊敬する相手に対してはそれなりの敬意を払う。

お供に選んだ裕太に対しては厳しくも、彼の成長を見守っており、自分のお供に相応しい人間にしようとして動いている。

何だかんだ彼の事を心配し、消える事を選ぼうとした時は泣いて止めたり、

絶対に死なせないなどと考えるようになる。

その感情は後々、彼への恋愛感情へと変わっていく。

中学時代までは何をして自分には無理だと卑下する割に、太っている事を指摘されると爆弾を投げつけたり殴りかかったりするようなプライドの高い性格だった。

馬鹿にされると結構怒る点は今も昔もそこまで変わらない。

勝負に関しては彼女なりの拘りがあり、どんな手を使っても勝とうとする代わりに、自分が決めたルールは基本破らないようにしている。

また基本的に他人の助けを借りず、自分一人で戦う事を好む。

また自分が勝つまで戦う事を望む性格で、相手が負けを認めるまでは勝ちではない

と厳しい目で見ている。

善悪問わず一生懸命に生きる者の味方でありたいと思っているが、目的が違う場合は全力でぶつかり合う。

ソウジの影響で仮面ライダー好きではあるが、勧善懲悪にはそこまです興味はなく、基本的に正義の為には戦わないと告げている。

ともかく、良くも悪くもどんな時も自分のルールを優先しようとする人物。

ソウジの影響で仮面ライダーが好きで、一番好きな仮面ライダーはカブト。

だが玩具を買う割ににわかな部分がある。

元ヤンかつ超人である浅井家と度々喧嘩している事もあってか、一般的な

女子高生よりも身体能力は高く、ある程度の怪人なら変身せずに倒す事が出来る。

※突然変異体としての能力

彼女が持つ能力は『爆発による死からの蘇生』。

爆発で身体が吹き飛ばされるといいう限定的な場面のみに限られるが、

そこから蘇生する事が出来る。

この能力により、ボマーの自爆能力をほぼノーリスクで使用する事が出来る上、

ほぼ致命的な攻撃を受けた時に自爆する事で完全な死を回避出来る。

しかし身体を吹き飛ばされる痛みまでは失くせない事や、爆発前に死んでしまうと使えないという欠点がある。

※仮面ライダーボマー

※概要

この作品の主演（一号）ライダー。

突然変異体のみが変身出来る特殊な怪人であり、ボマードライバーを使用する。

作中では六角美咲が変身している。

本作に登場する仮面ライダーは怪人用ベルトの発展形が主であり、

ボマーの場合はアーミーの改造。

アーミーにボムビットと呼ばれる武器を装備させる事で、

遠近バランスの取れた戦闘が可能になった。

※変身方法

ベルトを腰に装着した後、ドライバーを取り出す。

端末の『CHANGE』と書かれたボタンをタップしてから、閉じた端末を

カプトゼクターを掴んだ時のように構えて「変身ですわ!」のコール。

その後端末をベルトの空白部に差し込む事で変身が完了する。

最初から強化フォームで行く場合は、変身前にスキヤンドライブでカードを

読み取ってからボタンを押す。

上から振ってくる爆弾型の立体映像を握り潰す事で姿が変わる。

※通常フォーム

※概要

通常変身から変身出来るフォーム。

時間制限なしで使用出来るが、ライダーシステム一号機という事もあり、

他ライダーに比べるとスペックが劣っている。

※容姿

紫色の爆弾のような頭に、頭頂部からは炎を思わせる模様がある。

胸部に赤いアーマーが着いた黒いライダースーツの上から、紫の長ランを

羽織る形で着用している。複眼の色は心夜作品の主人公の色である

黄色。下半身は白いタイツ。

※スペック

身長 175 cm

バスト 92 cm

パンチ力 2.75 t

キック力 4.95 t

ジャンプ力 20 m

走力 7.6秒(100m)(アクセルドライブ時0.76秒)

公式のライダーに比べると低めだが、中々の強さを誇る。

※アイテム

ボマードライバー

蘇我高校が製作した変身ベルト。

中心に爆弾のエンブレム型の端末があり、それを操作する事で変身可能。

必殺技もそれを使用して放つ。

突然変異体にしか使用する事が出来ない。

ボマー・セキュリガー

通常フォームの主武装。

見た目は普通の金属バットだが、岩を粉碎する程の強度を持つ。

ボムビット

ボマーのサブ武装。変身者の意思で自在に操作する事が出来、普段は変身者の背後に存在している。

必殺技の時にも使用する。

※通常フォーム時のドライバーの機能

EXPLSION (エクспロージョン)

所謂自爆技。爆発による死を回避出来る能力を持つ美咲のみ、死んで蘇る事で何度でも使用可能。

ACCELERATE (アクセラレート)

ベルトを媒介に思考と肉体を加速させる。通常の人間の肉体は、思考や肉体を急加速させると負荷が掛かってしまうが、

スーツによる防護と、美咲自身の意識をベルトへと移動させる事で、

それを防いでいる (つまり変身時は、ベルトが仮の脳になる)

所謂クロックアップ的な能力。

十秒経つと『ACCELE END』の音声の流れ、しばらく使用不可になる。

SCAN (スキャン)

他フォームに変身時に使用する。

ドライバーの読み取り部分にカードのバーコードを読み込む事で、ボマーを別のフォームへと変える。

BIKE (バイク) (第三章から)

ボマードライバーをボマー専用マシン『ビックバン』へと変形させる。

最高時速200km (アクセルドライブ時2000km)。

バイク搭乗時は、ハンドルの中心に備え付けられた操作盤で

他コマンドを使用出来る。

変身せずに使用する事も可能だが、最高時速は一般のバイク並みに抑えられてしまう。

FINAL (ファイナル)

下記の各種必殺技を発動出来る。

必殺技は変身者の意思で自在に変えられるが、基本ボムビットとの合わせ技になる。

※必殺技 (FINAL DRIVE ボタンを押す事で使用可能)

ライダーボムキック

ボムビットを脚に展開しながら、飛び上がってライダーキックを放つ。

トドメの際、敵は必ず大爆発する。

威力は9.5t。

ライダーインパクト

バットにボムビットを纏わせ、相手に二度叩きつける大技。

威力は12t。

ライダータイフーン

ボムビットを脚に展開しながら、相手に回し蹴りを放つ。

威力は7.5t。

※ハイドロフォーム

※概要

ハイドロフォームカードを使用して変身する、ボマーの中間フォーム。

五分間のみという時間制限があり、一度変身すると再変身出来るまで

三十分掛かる。ただし通常フォームへの再変身は可能。

通常フォームの時よりも全能力が上がっており、グングニルやムラマサとも互角に渡り合える。

四章途中から、カードを盗まれた為変身不可になる。

※容姿

頭の炎が水色に変化。スーツの一部が水色に変化し、水色のスパ―

クを発する

ようになる。

※スペック

身長 175cm

バスト 92cm

パンチ力 5.75t

キック力 7.95t

ジャンプ力 40m

走力 5.52秒(100m)(アクセルドライブ時0.552秒)

※強化アイテム

ハイドロフォームカード

ハイドロフォームへの変身に必要なカード。

五分間までという使用制限つきで、ボマーをハイドロフォームへと変える。

本来ボマーの強化が目的ではなく、仮面ライダーアトミックを完成させる

為のカードであるが、ボマーでも制限付きで使用出来るように設定されていた。

武器はボマーシユリーガーのまま、ドライバーの機能もほぼ変わらない。

※必殺技 (FINAL DRIVE ボタンを押す事で使用可能)

ハイドロボムキック

強化されたボムビットを脚に展開しながら、飛び上がってライダーキックを放つ。

ハイドロフォームへの強化で破壊力が上がっている。破壊力は17.5t。

ハイドロインパクト

バットにボムビットを纏わせ、相手に二度叩きつける大技。

こちらも強化の影響で破壊力が上がっている。破壊力は19t。

※オールウェポン

※概要

オールウェポンカードを使用して変身する、ボマーの最終フォーム。

五分間のみという時間制限と、時間切れで通常変身も三十分の間不可

となるデメリットがある。

カード内に含まれた、美咲への想いがそのまま力となっているフォームで、

美咲が使用した時のみ、そのカードの効果を発揮出来る。

※容姿

頭部の炎が赤く変化。

全体的に青いカラーリングになり、上着部分が制服から、

総理大臣などのトップを思わせるスーツ姿へと変化。

武器のバット『ボマー・シユリーガー』は、『シャイテル・シユリーガー』という

金色のものへ変化。

※スペック（武器変更などで変動する）

身長 175cm

バスト 92cm

パンチ力 9t

キック力 14t

ジャンプ力 50m

走力 4.8秒（100m）（アクセルドライブ時0.48秒）

※アイテム

オールウェポンカード

オールウェポンに変身する為に必要なカード。

カード内には今まで六角美咲と戦い、仲間として共に歩んだ者達の記憶が内包されており、想像通りの力をそのままボマーの力としている。

六角美咲の蘇生にも使われており、このカードの記憶で脳波の欠損部を復元、

復活している。

その特性上、六角美咲の変身するボマーにしか使う事が出来ない。
シャイテル・シユリーガー

最終フォーム専用武器。

金色のバットで、持ち手のボタンを押す事で別の武器に変更出来る。
る。

武器を変更すると、武器の元になったドライバーの持ち主の
戦闘能力を引き継げる。

ネオボムビット

ボマーのボムビットが進化したもの。

従来のボムビットよりも威力が上がった他、ボマードライバー
を操作する事で別の武器に変更が出来、

また、怪人召喚時にはボムビットが形状変化する事でボディを生
成、

内部エネルギーを使って技を放つ。

※追加されたドライバーの機能

WEAPON(ウエポン)

これとプラスで武器選択をすることで、ボムビットを武器に変形さ
せる。

シャイテル・シユリーガーの武器変更と同じで持ち主の戦闘力を引
き継げる。

SUMMON(サモン)

武器に対応した怪人やライダーを召喚させ、その後FINALDR
IVEボタンで

怪人やライダーと同じ技を放つ事が出来る。

ただし、これを使ったファイナルドライブはドライバー内の全エネ
ルギーを消費する為、

これを使用した瞬間強制変身解除されてしまう。

※必殺技(FINAL DRIVE ボタンを押す事で使用可能)
デュアルドライブ

サモンドライブからの必殺技。

どんな技でも共通してこの名称になる。トン数は技により変動。

ライダーツインストリーム
シャイテル・シユリーガーと剣の怪人のメタルソードによる技。
二本の武器を相手に叩きつける十六連撃。

キャラ設定2 福沢裕太（ネタバレ有り）

※福沢裕太（ふくざわ ゆうた）

※簡単なプロフィール（バトルガールハイスクール風）

学年 なし（新任教師↓玩具屋店員）

誕生日 2月3日

血液型 O型

部活 なし

イメージCV 梶裕貴

身長 171cm

胸囲 なし

趣味1 アニメや漫画鑑賞

趣味2 ゲーム（格ゲーが得意）

趣味3 バラエティ番組を見る

好きなもの ラーメン

嫌いなもの ピーマン

将来の夢 教師職に復職する事

理想の人1 狩野遙（彼女のような知的で大人な女性が好き）

理想の人2 アニメの主人公

理想の人3 高校時代の教師

休日の過ごし方 家でアニメやゲーム

ストレス発散法 裕太「そんなものあれば職場で苦労しない」

一番の思い出 高校の卒業旅行から帰った後、両親が事故死していた事

好きな言葉 一流教師

人には言えないヒミツ 高校時代の時、教師という仕事に憧れを抱いたが、そのキツカケとなった教師は現在収監されている。

だがそれはその教師の守りたい人を庇う為の行動だと分かっている為、

誰にも自分が教師になりたいと思つた理由を話さないと誓っている。

※キャラ概要

この物語の副主人公で、語り手。

物語開始時点で二十二歳。蘇我高校の教師だったが、ボマードライバーを持ち逃げし、美咲に渡してからは逃げるように辞めて、美咲の紹介で美咲の親の玩具屋の店員に。

その代わりに美咲のお供として、生徒会の仕事を手伝ったりするようになる。

実は彼本人の肉体は既に死んでいる。

脳波のみが採取され、改変されてからは人工突然変異体一号の身体を使っている。

その影響で記憶が一時的に消えたり、上杉健斗を改変した脳波である通称『一号』と入れ替わってしまうなどの弊害があった。

物語途中、二号の身体に入れ替わり、完全な人工突然変異体として仮面ライダムラマサに変身出来るようになる。

※容姿

赤がかった黒髪の短髪に、赤い瞳の意外と整った容姿。

教師時代はスーツ姿が多いが、私服姿の時間が長い。

今の彼は一号や二号の身体を使っているが、容姿は元々の彼のものが忠実に再現されている。

※性格

美咲とは反対にメンタルが弱く、蘇我高校の教員だった時代は生徒からの扱いが原因のストレスでお腹を壊してしまうほど。

女運もあまり良い方ではない（自他共に認めている）。

良くも悪くも一貫し、最早超人の域にいる美咲に対し、彼はあくまで平凡な人間であな一面が目立つ。

だがそれ故に美咲のような女の子が当たり前のように戦う事に疑問を抱いたり、最初は自分が責任を取って止めようとするなど、割と良識のある大人である一面がある。

※突然変異体としての能力

彼は生前突然変異体ではないが、一号時は『身体能力強化』、二号時は『脳波破壊』などの能力を持つ。一号の時は能力の発現がランダム

だった為、仮面ライダーへの変身条件を満たしていなかった。

※ムラマサ変身時のポーズ

ドライバーのCHANGEボタンクリック後に、左腕を斜め右上に伸ばすポーズをとってからドライバーを装填している。

※仮面ライダームラマサ

※概要

この作品の三号ライダー。

主な変身者は二号の身体を使用した福沢裕太。

他にも彼の身体の元の持ち主である二号（松永秀奈）や、

二号の身体に脳波を移した一号（上杉健斗）、

六角美咲の身体を使い、健斗や裕太の残留思念、六角美咲本人も変身する。

剣の怪人特有のスピードと、剣の怪人にはない一撃の重さが加わる事で、

超スピードと超火力という二物を実現させている。

※変身者による変身方法の違い

福沢裕太

ベルトを腰に装着した後、ドライバーを取り出す。

端末の『CHANGE』と書かれたボタンをタップしてから端末を閉じ、

ドライバーを取り出してからボタンを押し、

ドライバーを持っている右手をゆっくりと右脚近くへ。

空いた左腕を仮面ライダー一号のように斜め右上に伸ばしてから、ベルトにドライバーを挿入。

納刀されたスペクターソードを、ゆっくりと引き抜き変身完了。

二号（松永秀奈）憑依時

ベルトを腰に装着した後、ドライバーを取り出す。

端末の『CHANGE』と書かれたボタンをタップしてから端末を閉じ、

ドライバーのボタンを押してから、右腕を刀を振るうように斜め右へと振るう。

左手でL(Liarの意味。中の人が福沢裕太ではないという伏線)マークを作ってから、

左腕を斜め右上に伸ばし、ドライバーを挿入。

納刀されたスペクターソードを、抜刀術の如く激しく抜いて変身完了。

一号(上杉健斗)単独変身時

ベルトを腰に装着した後、ドライバーを取り出す。

端末の『CHANGE』と書かれたボタンをタップしてから端末を閉じ、

ドライバーを持つ右腕を下ろし、左手を胸に乗せる。

そのまま変身、と呟いてからドライバーを挿入。

納刀されたスペクターソードを抜いて、刃を敵側に見せて変身完了。

六角美咲変身時

最終決戦時、ベルトは既に装着されている為ドライバーを取り出す。

端末の『CHANGE』と書かれたボタンをタップしてから端末を閉じ、

左腕を裕太と同じく斜め右上に伸ばす。三人の意識で変身と叫んでから、

ドライバーを挿入。

納刀されたスペクターソードを抜いてから、予告ホームランのように構える。

ムラマサ&アトミックに出た一般生徒の変身時

既にベルト装着済み、ドライバーを取り出し、

端末の『CHANGE』と書かれたボタンをタップしてから端末を閉じ、

左拳を握って前に突き出してから、変身と叫んでドライバーを挿入。

納刀されたスペクターソードを抜いてから、勢いよく振り下ろす(ファイズ)

のスナップに似てる)。

※※※

※通常フォーム

※概要

通常変身から変身出来るフォーム。

ボマーよりも多少スペックが上がっている。

また剣の怪人特有のスピードと、剣の怪人にはない超火力を持つ。

※容姿

緑のスーツの下に赤いライダースーツ、緑の顔に赤の複眼など、

悪役っぽいデザインではあるが、同時に仮面ライダー一号を彷彿とさせる

出で立ちをしている。

※スペック

身長 180cm

パンチ力 5t

キック力 7t

ジャンプ力 30m

走力 3.8秒(100m)

※使用アイテム

ムラマサドライバー

ボマードライバーが盗まれた後、狩野遥が人間の耐用限界を計る為に

作られたライダーシステム二号機。

使用者を仮面ライダームラマサへと変身させる。

人間が使えるライダーシステムの中では最高性能だが、天然ものの突然変異体

が変身したのは、六角美咲のみ(上杉健斗憑依状態)。

またボマーと違い、実戦投入は本来想定されていなかった為、フォームチェンジ

などの拡張機能は存在しない。

※突然変異体の能力

二号の身体に秘められた能力は『脳波操作』。
人の魂に相当する脳波を『移動』または『破壊』する事が出来る。
これにより脳波の入れ替えなどが出来る。

脳波破壊をされた場合、その人間はそのまま凍結される。
脳波のない肉体は死を感じる事が出来ないがそこから生きる事も
出来ない。

※必殺技（最終撃ボタンを押して発動）

ライダースラッシュ

スペクターソードを構えてから、相手に向かって斬りつける六連
撃。

威力は13t。

ライダーパンチ

スペクターソードがない状態で技を発動すると出る技。

威力は10t。

※ボマーフォーム

※概要

美咲がイメージによって書き換えた姿。

所謂友情フォーム。

※容姿

ムラマサカラーの仮面ライダーボマー。

※スペック

身長 175cm

バスト 92cm

パンチ力 不明

キック力 不明

ジャンプ力 不明

走力 不明

※必殺技

ライダースラッシュ

スペクターソードを構えてから、相手に向かって斬りつける六連
撃。

威力は13t。

ライダーキック

上空へと飛び上がり、相手に向かって一直線に落下していく蹴り技。

美咲と裕太と健斗の心が一つになり放たれる。
威力は不明。

仮面ライダーグングニル&クリーチャーズ 学校の怪談!?

グングニル 第一話

この世界にはかつて、魔法使いがいたという話がある。

その者は指輪を用いて恐ろしい怪物と戦い、絶望を希望に変えていった。

今その魔法使いがいるのかどうかは分からない。

だが実際その出来事が起きてから数年後に、噂として人々の間に広まっている。

それは滋賀県の某所にある、とある女子高でも。

「魔法使い?」

「そうそう。カッコいいよねえ」

「私も見してみたいなあ」

噂話が生徒会室の外から聞こえる。

生徒会副会長にして二年生……山内成音（やまうち なりね）がス

マホを見ながら、ある者に対して問う。

「魔法使い……。ねえ会長、いると思う?」

「成音ちゃんにも、そういうのに興味を持つ心があったんすね」

「いやほら、写真とかもあるみたいだし、妙に現実味を帯びているって
いうか」

「ふーん……」

成音が話す相手は生徒会長。

三年生で、名は蒲生恵（がもう けい）。

二人は生徒会のナンバー1と2……というだけではなく、ある繋がりがあった。

「その魔法使って、あの元クソ会長とどっちが強いんすかね?」

「やめてよ会長。伝説の戦士と、うちの名誉会長比べるなんてナンセンスにも程があるわよ」

この学校を卒業した元生徒会長……そして三年間の生徒会生活で優秀な仕事ぶりで、名誉会長の二つ名を手に入れた少女『六角美咲(ろっかく みさき)』をライバル視している者達なのだ。

去年蒲生と成音は、怪人に変身して美咲と戦い、そして最終的に負けた。

いつか絶対彼女を超える事を約束し、二人は生徒会としての仕事も、身体的な強さも、そして頭脳も彼女を超えるべく努力している。

だが……彼女の仕事ぶりや戦いぶり、そして夢に対する姿勢を思い出す度を感じる。

あんな怪物にどう勝てば良いのかと。

「魔法使いに勝って欲しいわね」

「そうっすね」

二人とも意見は同じだ。

その魔法使いとやらの方が強くあつて欲しい。

もし逆だったら、勝ちの目はないし何より……。

(もしあいつの方が強かったら腹立つ)

これ以上奴の強さを見せつけられたら腹も立ってきってしまう。

だから絶対に魔法使いに勝って欲しい。

もし会えれば、あの名誉会長を引きずりだして戦わせたい。

そして日頃の恨みを晴らしてやる。

「あ、そういえば会長……目安箱になんか来てない？」

「そっういやーか月も確認するの忘れてたっすね」

「いや置いたばかりなのにもう忘れたの？」

「うるさいっすね。こっちも受験勉強が忙しいんすよ」

この人じゃ美咲に勝つの無理かも知れない。

そう成音は心で呟く。

「仕方ないわね」

成音は目安箱内を確認……すると。

「ん？」

「どうしたっすか？」

「これ……見てよ」

「なんすか？」

成音の絶望顔に、蒲生も箱の中を確認。

成音が見たもの……それは。

「全然入ってない……」

「そんな……」

成音と二人して、しよげる蒲生。

だが一件もないわけではない。

というか、一件入ってた。

「まともな意見だと良いけど」

「うちの学校にそんなの望めないっす」

恐る恐る開く。

すると……。

「なんすか……これ……」

「ん？」

目安箱の紙に書かれていた言葉は一つ。

『最近午後五時以降の学校に、人を攫う怪物が現れる。退治して欲しい』

い』

二人はそれを見て頭を抱える。

「怪物？」

グングニル 第二話

二人が頭を抱えるのも無理はない。

この学校で言う怪物は、比喻表現の場合が多いのだ。

何故なら喧嘩が強い生徒も多いし、それに去年の卒業生に美咲ですら恐れるぶつちぎりのヤバい奴が一人在籍していたらしいし。

「これ誰の事つすかね？」

「さあ……」

「でももしかしたら、これマジの怪物って可能性もあるつすよ」

「そんな事あるわけ……いや」

あり得ない事はない。

この学校は一度、人工脳波で操られた生徒と美咲達が戦う場所にも使われた。

その時に生徒が使っていたドライバーを回収し損ねて落としたという可能性もある。

落とした奴を拾って誰かが使っているのかも……。

「とにかく探してみるしかないわね」

「そうつすね。折角依頼が来たみたいだし」

「あ、でも会長。ドライバーはどうする気？」

「そういえば、そちらに返した筈つすね」

蒲生は笑みを浮かべて、返してくれとジェスチャーをする。

「分かったわよ。遥さんが了承するか分かんないけど」

成音が電話を掛けた。

「遥さん、ちよつと良い？」

※※※

そのまま学校を出て、成音達は遥の研究所へと向かった。

かつて蒲生が使っていたガストドライバーを回収しに来たのだ。

「成音、いらつしやい」

遥がそう出迎える。

「私もいるつす」

「……蒲生か。会うのは久しぶりか」

「その節はどーも、それより」

蒲生は遙に手を伸ばす。

「早くドライバー返して欲しいっす」

「そう焦るな。今の今まで調整をしていた所だ」

そう言いながら、ガストドライバーを渡す遥。

蒲生は笑みを浮かべながら受け取る。

「久しぶりっすね」

「何に使う気だ？」

「まっ、怪物退治ってとこっすよ。今から成音ちゃん家で作戦会議」

「ま、待ってよ。家にはヴィーダがいるのよ。ヴィーダに聞かれたら

……」

「むしろ良いじゃないっすか。彼女、美咲や足利明人の次に強いんすよね？ なら彼女がいてくれれば、最悪の事態が起こる可能性が低いつすよね？」

「それはそうだけど……」

正直あまりヴィーダをこの件に巻き込みたくない。

何故なら……。

※※※

数日前の朝。

二人分の朝ごはんを用意した成音に、ヴィーダが声を掛けてきた。

「ナリネ」

「どうしたのよ？」

「ヴィーダ、オテツダイ……ッテイウノヲシテミタイ」

「ん？ お手伝い？ 急になんで？」

成音が首を傾げて問う。

「アノタタカイ、オワツテカラ……ヴィーダハママノヤクニタテナクナツタ。ドライバーモツテルケド、ママヲオシタイヒトハイナイ。ダカラ、マエニママニイワレタミタイニ、ミンナノヤクニタテルコトシテミタイ」

「うーん、なるほどねえ……」

少しばかり頭を悩ませる。

確かにあの戦いの後で、これからヴィーダをどうしていくかは少し悩んだ。

彼女の存在は、色々複雑だ。

人工生命体である為戸籍もなく、戸籍を習得しようとするれば、違法な実験で生み出した狩野遥が捕まってしまう。

だが戸籍が習得できなければ、彼女は成音が養う必要が出てくる。そもそも戸籍が無ければ就職どころか学校教育すらも厳しい……。

「そうねえ、じゃあ……」

成音は辺りを見回して、何かヴィーダにも出来そうな事を探してみる。

まだ食器を準備出来ていない事に気付き、ヴィーダに頼む。

「食器をテーブルに並べてくれる？」

「ウンー！」

元気にそう告げたヴィーダ。

棚の位置的にヴィーダでも取れる筈だ。

まず棚を開き、二人分の食器を取り出す。

二枚お皿を重ねて右手に乗せ、次に左手でコップを……。

「ま、待ってそんなに一気に」

「ワアアアッ！」

案の定、ガチャガチャと音を立てて皿が割れてしまう。

「ヴィーダー！」

「イテテ……アッ……」

皿を見てヴィーダが目を見開く。

「大丈夫？」

「ウー……ゴメン……」

頭を掻くヴィーダ。

グングニル 第三話

時間が経ち、お昼。

成音は夕飯の買い物のお出かけをしようとするが、それを見たヴィーダに声を掛けられる。

「ナリネ、ヴィーダガイク！」

やる気満々の彼女。

これなら大丈夫かな、と思いヴィーダを信じて笑顔でバッグを渡す。

「はい、じゃあえっと

「イツテキマース！」

「あつ、ヴィーダ！ まだお金と買う物説明してないよ！」

「アツ……ゴメン」

ヴィーダが立ち止まる。

気を取り直して説明をして、お金とメモを渡す。

「イツテキマース！」

今度こそ出発するヴィーダ。

成音は見送ってから、心配になりながらもリビングに戻る。

そのままテレビを見て待っていると、一本の電話が。

「もしもし山内ですが……」

「あつ、すみません警察署の者なんです」

——えっ？ あたし何かしたっけ？ いやもしかして。

「な、なんですか？」

「不審な男と一緒にいた少女を保護したんですが、こちらは山内成音さんのお宅の電話番号でお間違いないですか？」

「えっ!？」

成音は慌てて電話を切って駆け出す。

急いで自転車に乗って警察署まで向かい、受付で名乗り。

ヴィーダがいるという所まで連れて行って貰った。

「ヴィーダ！」

「ナリネ！」

ヴィーダが成音を見て驚く。

「何してんのよヴィーダ、知らない人についてくなんて」

「オジサンオカシクレタシ、イイヒト」

まだそこら辺の認識は子供なんだなと思いつつも、取り敢えず質問する。

「お買い物は？」

「アツ……」

「お使いを頼んでいたんですか？」

警察官の人に問われ、成音が「はい」と答えた。

「お使いさせるのは良いけど、こういう常識的な事はちゃんと教えておいてくださいいね？」

「すみません……」

成音は頭を下げる。

その後は二人でお買い物に行き、何とか今日分の材料を揃え。

成音は帰宅するや否や料理の準備を始める。

「ナリネ……」

「またお手伝い？」

「ハツ……ウン」

若干申し訳なきような顔で言うヴィーダ。

既に今日二回程失敗しているが、他にやれそうな事は……。

「お風呂掃除、やってみる？」

「！……ウン！」

成音はヴィーダと共に湯船の近くへ。

泡の掛け方と擦り方を教え、取り敢えず最初は監視ありでやらせてみる。

しかし。

「アツ……」

何とブラシの方が折れてしまう……。

「……」

ヴィーダはしょんぼりとしながら、成音は「ダメだこりゃ」とフリー

ズした……。

※※※

とまあこんな感じで、現在彼女の中で空前のお手伝いブームが発生している。

下手にこの件に関わらせて、大怪我でもされたら大変だ。

「あの……すまない成音、ヴィーダなんだがな」

「はい？」

「ナリネ、カイツツタイジ？」

「あ……」

しまった。

来てたのか……。

「それから……」

「なんか面白い事してる系じゃん、成音っち」

「この人達が優香ちゃんと美咲ちゃんの新しいお友達？」

優香と……あと。

「アンタ誰？」

「次回名乗るから待ってて」

次回って何？

グングニル 第四話（とヴィーダのキャラ設定、グングニルのスペック等）

「私は和泉（いずみ）、優香ちゃんのお友達だよ」

「へ、へえなるほど……?」

あの男遊びしまくってる優香に、こんな友達いたの……?

「ホントにアンタの友達なの？ 優香」

耳に口を近付けて問う。

「ウチを疑ってる系?」

「だってアンタと全然タイプ違うっていうか……」

「正確にはウチの友達の一人と友達で、そこから仲良くなった系」

「それにしたって……」

成音が和泉を観察していると、あるものが見えた。

包丁だ……。

なんでポケットにしまってるの……? 護身用?

美咲の爆弾といい、この人の包丁といい、なんで凶器普通に常備し

てんのよ。

とにかく。

「ごめん、あれはアンタの友達だわ」

「何でそう判断した系?」

「怪物退治だなんて楽しそうだね」

和泉はふわふわした声でそう呟く。

成音は恐る恐る問いかけた。

「あの……和泉、さんに聞いても良い?」

「なーに?」

「どうして包丁を持つてるの?」

「……あーこれ? もし私の大事な人に手を出したら、すぐに懲らし

められるようにだよ?」

……。

怖い。

「和泉っちは親友の事大好き系だからねえ」

「親友が可哀想ね……」

「これで揃ったみたいっすね」

蒲生がそう呟いて場を纏める。

「良いっすか？ これは生徒会初の大仕事っす。何としても学校を騒がせてる怪人を探し出して、退治するっすよ」

「ウン！ ヴィーダガンバル！」

「ウチ、燃えて来た系！」

「皆で頑張ろうね！」

「……」

大丈夫かなこの人達で……。

「良いな……青春だな」

「これが？」

あ……そういえば。

「健斗は今どうしてるの？」

「あー、健斗なら今研究中の物を試す為に訓練室にいるし、何より今のあいつが直接この戦いに関わる方法はない。すまないな」

「あーいや、大丈夫よ」

健斗がいればまだ何とかなるかと思っただけど、その手は使えないみたいだ。

「それとヴィーダを戦わせるなら、これを試してもらいたい」

そう呟いて取り出したのは、ドライバーだ。

怪人用のドライバーだろうか。

使える武器や能力を示すエンブレムは、王冠。

ロードドライバーの進化系……だろうか。

「それはマスターロードドライバー。グングニルの強化用に作ったものだ」

「マスターロードドライバー……」

「ああ。この中には今までの研究成果を入れてある。元々はそれを防衛する為に作ったものなんだが、更に改良して変身機能を搭載した」

遙はそれを手渡す。

「恐らくまだヴィーダに、このドライバーは使えない。けど……お前がいれば使える。そんな気がする」

フレイルムシャワースタイルに変身した時の事を思い浮かべる成音。

あの時は成音との信頼関係を結ぶ事で変身出来た。

このドライバーを使うには、どうしたら良いのだろうか。

「分かりました。やります」

「ああ、頼むぞ」

成音はそのまま皆を追う。

そして蒲生の隣に立つ。

「行こう、会長」

「そうっすね、成音ちゃん」

そのまま二人で、学校に向かう。

グングニル 第五話

午後五時前、丁度部活が終わりそうな時間帯の学校に到着。部活に参加している生徒はまだ下校していない。夏なのでまだ明るい。

そして怪物退治に挑む戦士五人が、校門前に立った。

「よし、行くつすよ」

「そうね」

「行く系行く系！」

「学校なんて久しぶり〜」

「イックヨー！」

そう呟いて入っていく。

気分は探検隊だ。

その近くで……。

「ここが例の学校……よね？」

ある者も、この学校に近付こうとしていた。

※※※

ひとまず何人かで別れて行動する事に。

ヴィーダと成音、蒲生と優香と和泉という形で別れ、前者は理科室に向かう。

「ネエナリネ……」

「どうしたの？」

「ナンカソノ、サイキンカラマワリシテゴメン。コノオテツダイハセイコウサセルカラ！」

ヴィーダは張り切ってそう告げる。

でも何というか、自信満々という感じではない。

「ヴィーダ、そんなに焦らなくても大丈夫だよ？」

「エ？」

「あたしに言ってたじゃない。無理はダメだって。今のヴィーダはそういう状態」

「ソ、ソソナコト……」

ヴィーダは動揺する。

でも落ち着かせた。

「良いじゃない。ゆっくり出来るようになれば」

「あたしもそう。ゆっくりでも良いから、ヴィーダもあの人も超える。それと同じように、ヴィーダもゆっくりと出来る事を増やしてく。それに……」

成音は笑みを浮かべた。

「得意な事ならあるでしょ？ 今日かもしれない時は、それを役に立ててね」

「ナリネ……ウン！」

ヴィーダも満面の笑みだ。

「ン？」

だがすぐに歪む。

「どうしたの？」

「ナリネ、ナニカイル……」

ヴィーダは脳波を読み取ったのだろう。

その言葉通り、ヴィーダの背後から何者かに突進された。

間一髪で成音とヴィーダは回避、そして姿を捉える。

馬の怪人……のようだ。

だが優香の変身する騎兵ではない。

人のような二足歩行で歩く形態になってから、成音達に言う。

「バレちゃったみたいね。そこのおチビさんに……」

怪人にはベルトがついていない……という事は、あの蘇我高校との決戦のように変身用のガスを直接……？

いやそれにしては、まともな言語を話している。

「人攫いの怪物つてのはアンタ？」

「人攫い？ 随分と人間きの悪い言い方ね。アンタも私と同じ感じな癖に」

「はあ？ どういう意味よ」

「分かんない？ まあこの姿じゃ何が言いたいか分かんないか」

そう言つて怪物は、人間態へと変わった。

地味だが別に特筆すべき事もない、むしろ可愛らしい容姿。

そしてスーツにプリーツスカートを履いた姿。

彼女は……。

「え？ アンタ……舟生（ふにゆう）先生？」

「……」

舟生は口元を歪める。

「その名前の人は死んだわ」

そして。

「私はメガイラ……フアントムよ」

そう馬の姿に戻ってから告げた。

「フアントム？ それがアンタなの？」

聞いた事のない名前だ。

なんかの種族……なのだろうか。

「そう。舟生って人間は絶望して、私を生み出して死んだ。昔あった日食の時にね」

どの日食の時を言うかは分からないし、何故それで絶望して生まれたのかは分からない。

だが分かる事は一つ。

「要するに、アンタは人じゃないって事で良い？」

「まあ……そういう事ね」

「何が目的なの？」

「あの姿を見ても、私がしたい事が分からないのね」

「分からないわよ」

「そう。じゃあ教えてあげる」

もう一度人間態に。

そして彼女は自分の胸部に触れた。

「私はね……許せないのよ。自分より乳が大きい人が!!」

「……は？」

グングニル 第六話（十山内成音キャラ表）

何を言ってるだろうかこの人は。

「え？　なんか凄い目的がありそうに見えたのに……なに？　乳が大きい人が許せない？」

「そうよ。私はね、実はこの姿になっても人の時の心が残ってたのよ。私今年三十よ。なのに彼氏も出来なくて。それなのにこの学校の生徒達は彼氏持ち沢山いるし……。だから巨乳な生徒を誘拐して自分が一番巨乳って事になれば、この学校の男性教師が振り向いてくれるかもじゃない」

「……で？」

「だから誘拐したのよ。私の力を使って」

馬の姿に戻る。

「いや何くだらない事で騒ぎ起こしてんのよ。どうしても良いけど誘拐した人達は無事なのよね？」

「ま、まあね」

「良心が残って殺さなかったのまでは良かったけど、その企みもそこまでよ」

「だ、だまらっしゃい！　そっちだって、そのちっこいのより乳が小さい癖に」

「ムカ……」

「は？」

こいつは完全にヴィーダと成音を怒らせた。

「良いわよ……あたし決めた。絶対アンタを懲らしめる」

「ヴィーダモ……ヴィーダチッククナイ……！」

それは割と正解な気もするけど。

そう思いつつも、二人でドライバーを取り出して装着。

そして操作。

『GUNGNIR ON』『FLAME SHOWER DRIVE
READY?』

ヴィーダは槍型のアイテムを上に向けてからキャッチ、成音は右手を髪の近くに近付けてから叫ぶ。

「変身ー!」「ヘンシン!」

ヴィーダはアイテムを横に挿し、成音はドライバーをベルトに取り付ける。

『CHANGE』『COMPLETE』

ヴィーダは魔法陣を通って仮面ライダーグングニルに、そして成音は燃え盛る火炎放射器を手にして火炎放射器怪人へと姿を変えた。

「へえ、魔法使い以外にもいたんだね。そういう戦える奴」

「カメンライダー……グングニル!」

槍——オーディンランスを構えながら、そう告げるヴィーダ……仮面ライダーグングニル。

「すぐに終わらせるわ」

成音はそう呟いてから、突撃していく。

「ハアッ!」

グングニルは魔法陣を空中に出現させ、槍を何本かメガイラに飛ばしていく。

「ふん……」

メガイラは間一髪で躲す。

その隙について火炎放射するが、メガイラはそれすら回避。

馬のように動きが速い。

「さあて、私を倒せるかしら?」

※※※

数分が経過。

グングニルの放った槍はほぼ当たらず、メガイラの方が優勢。

成音の攻撃に至っては一撃も命中しない。

「ヤアッ! ハアッ!」

グングニルは魔法陣を空中に多重出現。

そこから無数の槍を飛ばすが、手持ちの武器で弾かれてしまう。

「その程度で私に挑もうなんて甘いわね」

そう言いながら突進する。

成音は見切れず、ボーリングのピンのように吹き飛ばされ、グングニルは何とか超スピードで回避。

「脚が速いのね、おちびちゃん」

「オチビ、チガウ！」

挑発に乗ってしまうグングニル。

「良いわよ、スピード勝負といこうじゃない」

「ノゾムトコロ……」

そう言っつて、二人は見えない速度で移動しながら戦い始めた。

グングニル 第七話（十岸本優香キャラ表）

残り三人は部屋を見回っていた。

優香と和泉は二人仲良く探していたが、蒲生は。

「何というか、あまり関わりのない面子だからか気まずさを覚えるな」
蒲生と優香達の間に関わりはあまりない。

最初は成音達についていくべきかと考えたが、それでは戦い慣れていない優香と和泉が危険だと判断し、このフォーメーション。

おかげで組んでから会話一つしてない。

「蒲生っち」

そうこうしているうちに相手の方から声を掛けてきた。

「なんすか？」

「なんか分かった系？」

「……手がかりも何も無いから分かんないすよ。そっちは？」

「ウチもさっぱり系」

「……良いっすか？ 私達別に遊びで来たわけじゃないんすよ？
ちゃんとやらないなら今からでも帰って欲しいっす」

蒲生はそう諭すが、優香は返した。

「友達が困ってるの、ウチは見捨てない系」

「……」

「例え役に立てなくても、ウチはただそれを見てるだけなんて嫌系」

優香の言葉に、蒲生は言う。

「私はアンタの友達になった覚えはないっす」

「じゃあ今からなる系。それに、美咲っちや成音っちと友達な時点で、
もうウチの友達系」

今凄く聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。

「そっすか」

「ウチと一緒に頑張る系！」

優香が手を差し出す。

「……ふん」

蒲生はそう呟きながら、でも笑顔を向けた。

「蒲生っちは進路とか決まってる系？」

「そこまで決まってる系？」

「へえ、じゃあウチと一緒に来るっていうのはどう系？」

優香が誘う。

「なんの仕事してるんすか？」

「ん？ 夜の店系」

「……」

「楽しい系よ！ 色んな男の人来る系だし！」

「私も優香ちゃんと同じ仕事！」

「どう系？ 一緒にやる系？」

「いえ結構っす」

まだ彼氏も出来てない状態なんだからやめてくれ。

「それより、成音っちは大丈夫系？」

「まだ連絡は来てないっすけどね」

そう言っていた時、携帯の着信音が流れる。

成音からだ。

「はいもしもし」

「会長、ついに怪人を見つけたわ。今ヴィーダが戦ってるから、応援に来てくれない？」

「分かったっす」

そう答えてからガストライバーを取り出し、腰に当てる。

『ガストライバー！』

自動的にベルトが伸び、蒲生の腰を覆う。

優香もホースドライバーを取り出し、腰に装着。

『HORSE DRIVE READY?』

「変身」「変身系！」

『ガストライブ！ フキトープ！』『COMPLETE』

蒲生の身体がガスが覆い、ガス怪人へと変化。

優香は後ろからやってくる馬の上に飛び乗り、騎兵へと変化。

和泉を乗せてそのまま部室を出ようとする。

しかし。

蒲生と優香の二人を、複雑な軌道を描いて放たれた弾丸が襲う。撃った者の正体は。

女だ。

デニムの上着に白いシャツ、そしてオレンジのスカート。

そして何より目を惹くのが、赤い手の形をしたバックルのベルト。

彼女は蒲生と優香を見て言った。

「そのままだよ、フアントム」

グングニル 第八話

そう言いながら、銃型のアイテムをしまい、指輪をつける。
「? 誰っすか?」

「ファントムに答える名前なんてないわ」

指輪をつけた右手を手の形をしたバッククルに翳す。

『DRIVER ON……NOW』
するとバッククルが変化。

両サイドのレバーのようなものを上下させ、音声が流れる。

『シャバドウビダッチヘンシーン シャバドウビダッチヘンシーン』
「変身」

そう呟いてから、左手の指輪をベルトの手形部分に翳す。

『CHANGE……NOW』

宝石を模した琥珀色の頭部、そして法衣を模した服。

魔法使いのような外見へと変化。

「もしかして、アンタが魔法使いっすか」
「……」

魔法使いはさっきの銃を構えてから、地を蹴って駆け出した。
走りながら、銃を剣型に変えて騎兵怪人と化した優香に襲い掛かる。

「ちよちよちよっ! ウチは化け物じゃない系!」

「とぼけても無駄よ!」

何とか手持ちの剣で、斬撃を受け止める優香。

だが戦い慣れしていない優香に、次の行動を選択するのは困難だった。
た。

「な、なにしてるの! 早く逃げて!」

騎兵怪人の後ろに乗る和泉に対してそう告げる魔法使い。

「あーもうしょうがないっすねえ」

蒲生がガス銃を魔法使いに向け、引き金を引く。

高圧のガスが、魔法使いの身体を吹き飛ばす。

「くっ……」

「私が相手するっすよ」

※※※

速度は互角。

火力戦闘力共に相手の方が上。

そう判断した成音は、変身を解除してから。

「ヴィーダ、これ使ってー」

フレイムシャワードライバーをグングニルにパス。

受け取りながら相手を蹴飛ばすグングニル。

「ナリネ、アリガトー」

そのままクリーチャースロットに、フレイムシャワードライバーを
装填。

『FLAME SHOWER』

もう一度キーを回す。

「ダイヘンシンー」

『CHANGE FLAME SHOWER』

グングニルの周囲に、火炎放射器怪人の身体を模した装甲が出現。

身体中に纏わりつくように、フレイムシャワースタイルへと変身し
ていく。

光槍……オーデインランスも朱の光を灯し、変身完了だ。

『BOOST DRIVE』

フレイムシャワードライバーを操作し、背中にブースターを展開。

そのまま飛行形態へ。

『FLAME SHOWER FINAL DRIVE』

爆炎をまき散らしながら、グングニルはメガイラに向けて突撃する。

周囲を槍が囲い、グングニルよりも先に槍が飛び出していく。

「や、やるわね」

メガイラは複雑な軌道を描いて飛ぶ槍を何とか躲す。

そしてグングニル本体も何とか回避。

しかし。

「エエエエイー」

グングニルも地面近くで旋回し、メガイラに直撃。
メガイラは大きく吹き飛ばされ、壁にぶち当たる。
グングニルは飛行形態から元の状態へ。

「ドウダー！」

グングニルがそう叫ぶ……が。

「まだよ……まだここで終わるわけじゃないじゃない。良いわ。もっと誘拐して、最後は全員消してやる。せいぜいその乳と最後の時間を過ごすのね、おちびさん！」

そう叫びながら逃走するメガイラ。

「マテ！」

グングニルはそう叫びながら追いかける。

「……！」

成音もそれを追う。

グングニル 第九話

一方蒲生と魔法使いの實力はほぼ互角だった。

「これならー！」

『EXPLOSION NOW』

接近する蒲生目掛けて、爆破魔法を使う魔法使い。

蒲生は爆破の中心目掛けてガス銃から空気砲を放ち、穴を開ける。

蒲生はその中心を通り抜け、飛び蹴りを放つ。

「はあッ！」

「中々やるわね」

「そっちこそやるつすね、魔法使い。だけどこれならどうつすか？」

ガスドライバーを操作。

ボタンを押す。

『コウアツ……フルバースト！』

全身から暴風が吹き荒れ、魔法使いの身体を吹き飛ばした。

「くうっ……！」

「もう終わりつすか？」

「まだよ」

レバーをもう一度操作、指輪を付け替え、魔法使いはベルトに手を翳す。

『HOLLY NOW』

魔法使いの手から光の波動が放たれる。

ガス怪人はガス銃で応戦するが、それすら破られ壁に激突。

同時に……。

「残りはここにいたみたいね」

優香と和泉の後ろに、怪人が現れた。

「わあッ！」

「びっくりした系！」

「しかも……魔法使いまで現れるとはね」

「え、またファントム？」

魔法使いが現れた怪物に目を向ける。

「貴女、こいつらの仲間？」

魔法使いが怪物に聞く。

「知らないわよこんな奴ら。それより、魔法使いがいるとは知らなかったわ。良い機会だし、アンタを潰しておく事にするわ」

すると蒲生すら無視して魔法使いへと攻撃を仕掛ける。

「どういう事!? じゃああのファントム達は一体……」

「ファントムじゃないわよ、あの子達は」

「え？」

「だから言ったのに……」

蒲生は呆れながら、ファントムの背中にガス銃を放つ。

「私達は人間っすよ。ついでにあそこの騎兵も、あとその黄髪の子も」

「そんな……」

「私達全員、その怪物目当てでやってきただけっす」

話を聞きながらも、魔法使いはファントムと戦い続ける。

「不意打ちとは卑怯な事するじゃない……」

「悪いけどこっちは生徒会としての手柄上げる為に戦いに来てんすよ。魔法使いに手柄横取りされるなんて結果だけは避けられないとなんすよ」

ガス銃を回す蒲生。

「優香先輩、来るっす」

和泉を乗せた状態で優香が現れる。

「いや、和泉先輩ちよつと離れた方が良いつすよ」

「あの怪物倒せば良いんだよね？」

「いや変身もせずに無理っすよ」

「これじゃ無理そう？」

「なんで包丁でいけると思ったのかだけ教えて欲しいっす」

「案外いけるかもよ」

微笑み怖いなあ……。

「いつまで漫才をしてる気よ！ こっちらからいくわよ！」

「いや、貴方の相手は私よ！」

『CHAIN NOW』

その音と共に、魔法使いが怪物を鎖で拘束。

「その人達がもし一般人なら、これ以上戦わせるわけにはいかない」

「くっ……魔法使い……ッ！ アンタに私の気持ち分かるの？ 乳

のサイズが普通なせいで爆乳に男を取られる私の気持ちが！」

「は、はあ!？」

あ、これはまずい事したかも知れない……。 B y 心夜

グングニル 第十話（十蒲生恵 キャラ表）

「な、何言ってるか分からないけど……これ以上貴方の悪事を見過ぐすわけにはいかない！　ここで倒す！」

指輪を付け替え、ベルトに手を翳す。

『EXPLOSION NOW』

爆風で怪物を吹き飛ばし、もう一度指輪を付け替える。

そしてベルトを操作。

『YES SPECIAL！ UNDERSTAND？』

魔法陣から爆炎を生み出し、メガイラを焼き尽くす。

「うわああッ！」

メガイラは大きく吹き飛ばされる。

だが……素早くその場から立ち去った。

「くっ……」

魔法使いは追いかけてしようとしたが、疲れからか変身が解けてしま
う。

「大丈夫すか、アンタ……」

蒲生が変身を解いてから手を差し出す。

「……」

「やるじゃないすか、魔法使い。アンタならもしかしたら……いや、今は良いっすね。立ってるっすか？」

「う、うん……」

魔法使いは蒲生の手を取って立ち上がる。

そして背負い、怪人を追いかける。

優香も一度変身を解いてから、和泉と共に蒲生達を追う。

※※※

背負い追いかけてながら蒲生は、魔法使いにいくつか質問する。

「そういえば魔法使い、名前はなんていうんすか？」

「私は……稲森真由（いなもりまゆ）。あとあの姿はメイジよ」

「なるほどっす。てか、魔法使いって呼ばれる存在はああいう怪物を

追ってるんすか？」

「そうね。奴らはファントム……魔力が高い人間が絶望する事によって生まれる怪物。そして私達魔法使いは、そのファントムを抑えこんで自分の力とする事で魔法を使えるようになった者なの」

「ふーん……」

蒲生は何となく理解する。

「ところで貴女達も変身していた気がするけど、あれは何？」

「このベルトで変身出来るんすよ」

蒲生は自分のガスドライバ―や優香のホースドライバ―を指さす。

「私達はあくまで普通の人間だから怪人にしかなれないっすけど、一部の人間は特別なベルトで仮面ライダーになる事が出来るっす。私のライバルや、今別の所にいる筈のヴィーダちゃんって子が……」

「ん？ ファントムの動きが止まったわ！」

話してる途中でファントムが止まる。

そして……。

※※※

飛行形態に変形したグングニルを足場に、成音はファントムに突撃する。

近付くや否や、メガイラにグングニルを躲させた。

だが成音は飛び上がり、メガイラに飛び蹴りを浴びせる。

メガイラは大きく吹き飛び、壁に激突。

「ふん……」

成音が腕を組んでメガイラを見下す。

丁度いた他の仲間も集合。

見覚えのない女性も一緒だが、これで役者は揃ったという感じだろうか。

「山内成音……」

「さあ、もう逃がさないわよ」

グングニルが成音の前に出る。

「オマエ、オワリ！」

「くっ……それで逃げ場を塞いだつもりか！」

グングニル達に剣を振るうメガイラ。

成音が吹き飛ばされてしまう。

「ナリネー！ ウワアッ！」

グングニルも吹き飛ばされて、変身が解けてしまった。

「ウウ……」

ヴィーダは地面に叩きつけられる。

優香達は、咄嗟に蒲生が変身したガス怪人のガス弾で攻撃を防いだ

ようだ。

「やるわね、蒲生」

「その声……薄々思ったんすけど、もしかして舟生先生すか？」

「よく気付いたわね。けど……」

「ファントム、舟生先生じゃないって事つすよね？」

「そう。私はメガイラ。舟生から生まれたファントムよ」

グングニル 第十一話

蒲生がメガイラを見据える。

「メガイラ……。アンタがどんな目的でうちの生徒を攫ってるかはどうでも良い。てか実際どうでも良い目的だったっす」

「どうでも良い言うな！」

「けど、私は生徒会長として自分の生徒を守るって決めてんすよ。前会長を超える為にね」

「魔法使いでも苦戦する私を、蒲生が倒すって言うの？」

「……真由さんとヴィーダちゃん除けば私が一番っすよ」

蒲生が口元に笑みを浮かべ、ガスドライバーを操作。

「変身」

『フキトーブー!』

ガス怪人へとその姿を変える蒲生。

メガイラも怪人態へ。

「はっー!」

蒲生はガス銃を手に、何発か引き金を引く。

圧縮された空気弾がメガイラ目掛けて勢いよく飛ぶ。

メガイラに一つ命中し、動きを止めた。

そこに向かって蒲生は近付いてから回し蹴り。

メガイラを大きく吹き飛ばす。

「ぬあッー!」

「さーて、もう終わりっすか?」

「良い気になるなよ。巨乳だからって調子に乗りやがって……」

メガイラの身体が変化していく。

怒りによって、変質しているのだろうか。

馬というより騎士のようなスタイリッシュな姿に変化し、剣を構えなおす。

そして更に素早い動きで、蒲生と距離を詰め。

右薙で蒲生を吹き飛ばし、一撃で変身解除に追い込む。

「くっ……」

「もう私は向かう所敵なしね。さあ……仮面ライダーに魔法使い。貴方達を消したらすぐに私の野望を叶えにいくわ」

「ライダーと真由を名指しするメガイラ。」

「ライダー……オマエヤツツケル……」

「ライダーがもう一度立ち上がる。」

そしてグングニルドライバーを取り付けた。

「私だって……まだ諦めない」

漸く回復した真由がライダーの隣に立つ。

魔法使いと仮面ライダー、二人が並び立ち……そして変身ポーズに。

『GUNGNIR ON』『DRIVER ON……NOW』

『シャバドウビダッチヘンシーン シャバドウビダッチヘンシーン』

「ライダーと真由がタイミングを合わせて叫ぶ。」

「ヘンシンー！」「変身！」

『CHANGE』『CHANGE……NOW』

「ライダーも真由も、魔法陣を通して変身する。」

「仮面ライダーグングニルと、魔法使いメイジ。」

「二人の戦士が変身するや否や、それぞれ武器を構えた。」

「イクヨ」

「ええー！」

「二人はそのまま駆け出していく。」

「だが激情態となったメガイラには、どちらの攻撃も紙一重の所で通用しない。」

「お互い一撃で吹き飛ばされてしまう。」

「ライダー、これを……」

「成音が残った力を振り絞って、グングニルに何かを渡す。」

「王冠のエンブレムが描かれたドライバー。」

「狩野遙が新しく作ったものだろうか。」

「ナリネ……」

「ライダー、ごめん……勝って……」

「ワカッタ……！」

グングニルはドライバーを手にしてから、スロットに入れる。その時点で、ヴィーダの中では一つの感情でいっぱいになった。成音を傷付ける敵を倒したい。

自分を頼ってくれた成音の気持ちに応えたい。

得意な戦いで、役に立ちたい。

『MASTER ROAD！』

だが……。

「ウワアッ！」

グングニルにそれは使えなかった。

ドライバーから稲妻を発し、グングニルはダメージを受ける。

「イテテ……」

「脅かせないでよおチビちゃん。アラサーの私の血圧上げる気？」

グングニル 第十二話

その後は、完全にメガイラのペースだった。
グングニルは何も出来ずに攻撃を受け続け、何度も試すが、新しい
ドライバーを使う事は出来ない。

ただ……彼女が痛みに喘ぐ声が続く。

「おチビの癖に、生意気よ！」

「ウワアッ！」

グングニルの変身が、再び解けてしまう。

「ヴィーダちゃん！」

真由……メイジがそう叫ぶ。

何とか手持ちの魔法で、メガイラの攻撃を防ぎ続ける。

「くっ……負けない。私の前では、もう誰も辛い思いをさせない。そ
うできや、私が魔法使いでいる意味なんて……」

※※※

ヴィーダは、もう一度立ち上がろうとしながら魔法使い……メイジ
の戦いぶりや言葉を見ていた。

「アノヒト……ツヨイ……ソレニ、ヒトノヤクニタテテル」

人と戦う力ですら……まともに使えない。

グングニルの力を、上手く使えていないのだ。

やはり自分は……他の皆みたいに、人を手伝うどころか、人の為に
戦う事すら出来ないのだろうか。

「……ッ！」

「ヴィーダちゃん！」

意外にも、自分を励まそうと声を掛けたのはメイジだ。

「そこにいる人達の為に、君は戦ってるの？」

「……ウン。ソウダヨ……デモ、ヴィーダノチカラジャ……」

「なら、自分を信じて！」

その言葉が、ヴィーダの心に刺さる。

「自分を信じない人が、どうして誰かの役に立てるの？ 弱い自分が

嫌なら、それを受け入れて、乗り越える！ その先で、強くなれるのよー！」

『EXPLOSION NOW!』

指輪を翳し、爆炎でメガイラを吹き飛ばす。

「ジブンヲ……シンジル……」

ヴィーダはマスターロードドライバーを手にする。

『得意な事ならある』

成音はそう言った。

ヴィーダが戦いを得意としている事を、成音は認めてくれている。なら、その言葉に答えたい。

真由が言ってくれたように、自分を信じたい。

※※※

「そろそろ終わりだ……魔法使い！」

剣から風を生み出し、メイジを勢いよく吹き飛ばす。

メイジは地面へと叩きつけられるが、まだ変身解除されていない。

「まだ……まだ……」

メイジはウィザードソードガンを構えなおす。

だが満身創痍なメイジの前に、少女は再び現れた。

「マユ、アリガトウ……」

「ヴィーダちゃん？」

グングニルドライバーのスイッチを押す。

『GUNGNIRON』

待機音が流れる。

「ヴィーダ、ミンナノヤクニタテルヨウニナル……ジブンモシンジル。マユミタイニナレルカワカラナイケド、マズハユツクリ、ナリネタチダケデモマモレルクライツヨクナル！」

『MASTER ROAD』

自分の得意な事を、人の役に立てたい。

その気持ちと共に、ドライバーをクリーチャースロットに取り付けた。

するとグングニルドライバー越しに、膨大な情報がヴィーダの中に

流れ込んだ。

「……ッ！」

遙がドライバー内に入れた研究成果と、今まで作ったドライバーやフォームのデータ。

そして……ヴィーダの中に足りなかったもの。

ヴィーダの脳波は、元々狩野遙の脳波をコピーしたもの。

そして狩野遙の記憶などを消去し、ある程度の知識や、戦闘の知識をインストールした。

それがヴィーダだ。

ならば、狩野遙オリジナルの脳波データが収められたそれを使えば……。

「凄い……これがママの知能……」

片言でしか話せなかったヴィーダが、狩野遙より高いがそれに似た感じの口調でそう呟く。

そしてグングニルキーを手に、叫んだ。

「変身！」

『CHANGE MASTER ROAD』

グングニル 第十三話（十 α ）

ヴィーダの肉体が仮面ライダーグングニルのものへと変化。だがそれだけではない。

変身するや否や、金色の光を纏う。

宙に浮かび、槍を構えて告げる。

「メガイラ、お前はヴィーダが倒す」

遙つぽい喋り方ながらも、ヴィーダらしい言葉遣い。

グングニルはそのまま、槍を構えて光の速さで突撃していく。

今のヴィーダの速さは、通常フォームの時の千倍。

一秒の壁すら破り、メガイラに何度も斬撃を与えていく。

「チビ……やるわね！」

メガイラも対抗しようとするが、グングニルの姿を捉えられない。

何とか集中してから、相手の動きを視認し、突きを放つ。

だが。

「ダメージが……入らないだツ！」

「今のヴィーダに、攻撃は効かない」

「くっ……くそツ！」

激状態となったメガイラが、本気の手で追いかける。

だがグングニルも飛行形態へと変化し、通常時の速さを超えて動く。

く。

そしてメガイラに何度も突撃。

「ぐあっ！」

メガイラは怯む。

そしてグングニルがその隙に、マスターロードドライバーのある機能を使用する。

『PROGRAM DRIVE』

そして金色のグングニルの上から、黒いローブが纏わるように現れた。

武器がオーティンランスから煌びやかな杖へと変化した。

「魔法使い……う？」

それを見たメイジが眩く。

「ぐっ……」

「これがマスターロードの力の神髄。新しい怪人やライダーの力を、このドライバーの機能を介して試作出来る。それで今、新しい怪人を生み出した」

「な、なんてものを作ったんすか……」

「す、凄い系……」

蒲生と優香がそれを見て眩く。

倒れているが意識だけはまだ残してる成音も心で眩く。

何と無茶苦茶な能力だと。

「これでも喰らえー！」

杖から膨大な魔力の波動を生み出す。

メガイラをそれで吹き飛ばし、倒れさせる。

『MASTER ROAD FINAL DRIVE！』

グングニルはドライバーを操作。

「真由、最後の攻撃……一緒をお願い！」

「わ、分かった！」

メイジもドライバーの両端を上下させてから、指輪を翳す。

『YES！ SPECIAL！ UNDERSTAND？』

メイジは魔法陣から炎を放つ。

そしてグングニルはオーティンランスを大きく回してから、上に掲げる。

「はあッ！」

グングニルの身体中から稲妻があふれ出し、天へと昇っていく。

やがて天上で雷の塊と化したそれよりも高く飛び、グングニルは槍の切っ先を突き出して雷の塊へと突っ込んでいく。

そのまま雷と、メイジが生み出した炎と共にメガイラへと突撃。

「そ、そんな……このまま……負け……」

動けないメガイラがそう眩く。

グングニルはそのまま、メガイラの身体を貫き、そして爆散。

爆風の中から滑るように現れ、振り向く。

メガイラは跡形もなく、そのまま消えていった。

「勝った……ヴィーダの……勝ち」

グングニルの変身が強制的に解け、そのままヴィーダは倒れた。

グングニル 第十四話（最終回）

その事件の二時間後。

ヴィーダは成音の家で、目を覚ます。

「ン……ンー」

「ヴィーダ、おはよ」

成音が微笑みながらそう呟く。

所々包帯が巻かれている。

「ナリネ？」

「ヴィーダ、よく頑張ったね」

そう言いながら抱き締める成音。

だがヴィーダは言う。

「ナンノコト？」

そしてその時点で成音も気付く。

ヴィーダがいつもの喋り方に戻っている事に。

「あれ？ ヴィーダ、いつもの喋り方に戻ってる？」

戦ってた時は遙を思い出させるような口調だったのに。

「ナンノコトダカワカンナイケド、カイブツハ？」

「ヴィーダとあの魔法使いが、倒してくれたんだよ」

「ヴィーダガ？」

「うん。ヴィーダがああ魔法使いさんの言葉を信じて戦ってくれたから、勝てたんだよ」

「ヴィーダ、ナリネノヤクニタテタ？」

「当たり前よ」

「ヤッター！」

成音の笑顔に、ヴィーダも満面の笑みで答えた。

「ヤッター！」

そしてマンションの中で夜だと言うのに、大声でそう叫ぶ。

「こ、こらヴィーダ！」

「その子が私達の中で一番強いなんて、やっぱりその状態じゃ何度見ても信じられないっすねえ」

近くで見えていた蒲生が、そう呟く。

「ホントにそう思うわよ。どんなに頑張っても、まだこの子に追いつけない。今までもそうだったのに、今回でそれをまた思い知らされた」

そしてヴィーダよりも強い美咲。

彼女らを超えられるのはいつの日になるのか。

そんな事を考えてしまう程に、あの力は凄かった。

「協力ありがとう、ヴィーダちゃん、それに蒲生さん達」

蒲生の隣に座っていた真由が、そう感謝を告げる。

「生徒会の仕事を果たすつもりが、魔法使いに活躍されちまうなんてね。いや、でもヴィーダちゃんが勝ってくれたからうちの手柄？」

「あ、でも待つて。誘拐された人達は？」

「それなら……あ、今私の協力先の刑事たちが監禁された場所を突き止めたみたい。中にいる人も全員無事よ」

「え……てことは」

「ごめんなさい……」

真由が申し訳なさそうに言う。

どうやら誘拐された人の救助の手柄は全て真由のものらしい。

「まあ引き分けって事で良いんじゃない？」

「とうか……勝負してるつもりとか無かったから……」

「あーもう、まだ私はあいつを超えられないっすね。腹立つっす」

「あいつ？」

「あーえつと、あたしと会長には永遠のライバルがいるのよ。ムカつくけどあたし達よりずっと強いライバル」

「な、なるほどね。それであんな事件に関わったのね」

「そう。もしあの人なら、一人で全部解決してのけた筈だ。なのに私達は……」

蒲生は落ち込む。

だが真由は告げた。

「君もヴィーダちゃんと同じだね。自信を失くしちゃダメよ。そうでなきや、希望は掴めない。自分で始めた事なんだから、諦めたり投げ

たりしなければきつと良い結果が掴める」

「真由さん……」

「私はこれからも皆を応援するよ。皆が希望を掴み取れるように」
「……ありがとうっす」

真由は笑みを浮かべた。

「皆、ご飯の支度が出来た系！」

優香がどこからか現れて、そう告げる。

「ヴィーダちゃんの好物がハンバーグって聞いたから、私作ったよ」
和泉も柔らかい声でそう言った。

それを聞いたヴィーダが嬉しそうに身体を跳ね上げてリビングへ走っていく。

「まったく……」

背伸びしても、まだ子供なのだとか成音は苦笑い。

「さて、あたしも疲れたし……今日は食べますか」

成音も立ち上がり、リビングに向かう。

そして食卓を囲んで、みんなでいただきますと告げてから食事が始まった。

色々と危険な目に遭ったし、何なら倒すべき敵も変な奴だったが、何だかんだ楽しかった気がする一日だった。

「ところでさく、オチはどうするの？」

そして食事中和泉がそう告げた。

「オチ？」

成音は意味が分からずそう呟く。

「そう系だったね。確かにこういう話の時に、オチなしで終わるのは面白くない系」

「えっと……優香達何言ってるの？」

イミワカンナイ。

「あ、そうだ。初ちゃん達ならこうしてたね」

そう言って和泉はどこからか笹を取り出してきた。

そして勢いよく振るう。

「笹は振ってもオチ……」

何かを言いかけたその時、筐から何か落ちる。

短冊だ。

そこにはこう書かれている。

『先輩といつまでもいられますように。あと姉妹や高校時代の知り合いに二度と会いませんように 浅井初（あざいはつ）』

それを見た和泉の目から、光が失われた。

そして口元だけが不自然な笑みを浮かべ、ポケットから包丁を取り出した。

「和泉さん？ どうしたの？」

「今すぐ帰らなきゃ……」

「え？」

「早く帰って初ちゃんの彼氏○さなきや初ちゃんが……」

「うわあああああ！ やめる系！ 和泉っち落ち着く系！」

「止めないでよ！」

そう言いながら暴走機関車のように包丁を手に外へ飛び出す和泉と、それに掴まる優香。

「誰か和泉っちを止めて系いいいい!!」

《終わり》

足利明人とアイドル剣士

足利明人とアイドル剣士 第一話（十明智兄妹のプロ
フ）

2023年3月某日。

滋賀県でも有名な剣術の道場である『明智（あけち）道場』。

その一室で、今日は門下生達による練習試合が行われている。

丁度今、その試合に決着が着こうとしていた。

「面！」

勢いよく振り下ろした竹刀が、相手の面に吸い込まれるように叩きこまれた。

「一本！」

旗が上がったのは、明智（あけち）と描かれた防具を身に付けている選手だ。

明智の防具の選手審判の合図の後竹刀を収め、面を外してから着席。

面に隠された素顔は、黒く長い髪に青い瞳の少女のものだった。

その選手の名は……明智秀未（あけち ひでみ）。

四月から高校生になる十五歳。

道場の名でもある明智という苗字が示す通り、秀未は師範の妹だ。

門下生という扱いではあるものの、無論明智の人間として他の門下生の模範として恥じぬ強さを有している。

今日の練習試合でも負けなしだ。

「……」

秀未は次の試合ではなく、自分達の近くで腕を組みながら試合を見ている青い和服姿の青年に目を向ける。

青年は黒い髪に青い瞳の整った顔で、選手達の試合を真っ直ぐ見つめている。

青年の名は明智三栄（あけち みつひで）。

若干二十二歳の一見華奢な青年だが、十年以上前にその才覚で、明智流の全てを収め、既に明智道場の師範を務めている者だ。

彼は秀未の兄。

そして、秀未が最も憧れている人物。

秀未も門下生の中では優秀な方とよく言われているが、三栄はとうにそんな次元を超えている。

三栄がもし生まれる時代を間違えていたら、負けなしの侍としての生を受けていたと思うくらいだ。

現に三栄は剣術道場の師範の枠に留まらず、学生の頃から警察の特別協力員として、犯罪者逮捕に協力している。

鍛えた剣の腕を、強くなる為だけでなく人の為を使う。

秀未にとつて彼は自慢の兄だ。

そしてそんな三栄がどんな状況でも、必ず携帯しているものがある。

剣術を愛する者にとつては命とも言える竹刀と、そしてもう一つ腰に提げている黒い鞘に納められた黒い柄の日本刀。

日本刀の方は、勿論模造刀などではない。

明智道場に代々伝わる、名刀『明智近影（あけちきんえい）』だ。

明智流の開祖の代に打たれたとされる刀で、代々明智流の師範に受け継がれているもの。

だが前師範……父から聞いた話によれば、あの刀で人が斬られた事はおろか、戦う為に抜かれた事すらないという。

警察に協力している兄の代になつても、それは変わらない。

刀など抜く前に、竹刀一つで片がつくと毎回自分に話している。

兄は前々から言っていた。

自分の夢は、この刀を抜くに足る人物に会う事だと。

だが秀未に言わせれば、そんな事が出来る人間などこの世に存在しない。

何故なら兄の剣術は既に人間業ではないのだから。

人間を超えた相手に会う事が出来なければ、兄に刀を抜かせるなど到底不可能だ。

しかしもし、欲を言って良いのならば、兄があの刀を振るって戦う所を見てみたい。

きつとどの代の師範よりも、格好よく振るう筈だ。

そして更に欲を言うのなら……。

「秀未」

「は、はい！」

「僕ばかり見ていた所で、勉強にはならんぞ。今は試合を見る事に集中するんだ」

「す、すみません師範！」

秀未は顔を赤らめながら、バツが悪そうに試合中の選手たちに向き直る。

いつもの悪い癖だ。

どうしても兄の方を見てしまう。

心が既に気付いているからだろう。

兄より強い選手など存在しない、だから兄だけを見ていたい。決して恋愛感情などではない、と思いたい。

そんな秀未の様子を見た他の門下生達が、秀未の姿を見てひそひそと話しているのが聞こえる。

「秀未ちゃん、また師範の事見てたね」

「実際いるもんなんだなく兄に惚れちゃうレベルのブラコンって」

「くう〜！俺も秀未ちゃんに見つめられてたいなく〜！」

「バツカ！声でけえよ！」

「その三人」

三栄の刃のような声に、三人が固まる。

「試合に集中出来ないなら、今日は帰っても良いんだぞ」

「す、すみません……」

三栄はその声を聞いてから、再び試合に向き直った。

そしてそれからすぐに試合に決着が着く。

再び秀未の試合になったのは、それから三試合後の話だった。

※※※

十一勝零敗。

今日の秀未の試合結果だ。

一度の黒星もなし。

「せいっー!」

秀未は兄と共に、帰っていく門下生を見送ってから、道場内で自主稽古を始めた。

それが秀未の日課だ。

少しでも兄の強さに近付き、兄と同じように戦えるようになりたい。

無理なのは兄の戦いぶりを見ていれば分かる。

それでも、秀未は諦めたくなかった。

跡取りには選ばれなかつたとは言え、自分も明智の人間だ。

明智の人間に生まれたからには強くなる義務がある。

素質があるかないかなど、全くもって秀未の努力を止める理由にはならない。

「せいー!」

秀未は勢いよく、竹刀を振り下ろす。

秀未一人だけの道場に、やや小さな風が生まれる。

小さいが大きな音を立てた風が、秀未の白い稽古服を揺らす。

そして一筋の汗が垂れ、秀未の頬をしたった。

「ふう……!」

一度息を吐く秀未。

既に竹刀を振り始めて二時間が経つ。

夜七時。

そろそろ夕食が出来る頃だろうか。

「秀未」

そう心の中で考えたタイミングで、三栄……兄が道場内へ。

感心したと言わんばかりに、口元に優しいな笑みを浮かべながら告げる。

「夕食の時間だ」

「はい、師範」

秀未もそれに答えた。

だが三栄は厳しい師範ではなく、兄として言う。

「もう稽古は終わりだ。その呼び方はしなくて良い」

秀未はその言葉に、緊張を崩して妹らしく告げた。

「はい、兄上」

足利明人とアイドル剣士 第二話

秀未は兄と共に、既に料理が並べられている食卓へと足を運んだ。
今日の夕食はカレーだ。

三栄と秀未の好物で、秀未に至ってはこの日をいつも心待ちにしていると言ってもよい。

「二二いただきます」

四人で手を合わせてからそう告げ、秀未はスプーンを手に取りカレーを口へ運ぶ。

明智家のカレーは中辛だ。

丁度良い辛さのルーが口の中に溶け、柔らかいお肉と共に踊っている。

三栄も口元に笑みを浮かべていた。

それを見ると、秀未はいつもこう思う。

——母上が作るようなカレーを、私も作れるようになりたい！と。

ただ残念ながら秀未の料理は兄以外の者には受けが悪い。

自分で作ったお弁当を他の門下生と共に食べた事があるが、食べた者はその後すぐに早退した。

兄には今の所そんな事は起きていないが、自分の料理の腕では母のカレーと同じものを作る事は出来ないだろうし、最悪の場合とんでもなくマズいものが出来る可能性がある。

それなら兄に食べさせる事はまだ出来ない。

今は作りたい欲望を抑え、このカレーの味を研究しようと言い聞かせ、秀未はカレーを食べ進める。

「今日の皆はどうだった？ 三栄」

父……元師範が三栄に問いかけた。

「皆非常によく成長していると感じられました。そろそろ昇段試験を受けようとしている者もいますし、あの調子で努力を続けて欲しいものです」

「そうか」

三栄は門下生達の前では厳しい態度を取るが、一人一人の実力をきちんと把握し、こうして見えない所で成果を報告している。

内心は色々不安もあるかも知れないが、兄は師範に就任した十二歳の頃から、ずっと立派な師だ。

家督を継げない以上、秀未は免許皆伝をしたら恐らく、平凡な剣道選手として生きるか、普通に就職して生きる事になるだろう。

ああして報告したり、門下生に厳しく指導したりしているのが自分だったら……と思う事もあるが、それを羨んでも仕方ないと気付いたのが最近だ。

兄は先に生まれたからというだけでなく、師範に相応しい実力を幼い頃に備えていた。

昔は兄も人間なのだから、自分も頑張れば追いつけると思っていたが、ある日を境にそう思わなくなった。

自分はどうかだろうか。

泣いてばかりで、剣の腕はその歳の兄になど到底及ばない。

そんな弱い自分には、その内明智家での居場所は無くなってしまっただろう。

「秀未は今日も無敗だったらしいじゃないか、よくやってるな」

「はい、お褒めいただき光栄です。父上」

「どうした？　あまり元気が無いように見えるが」

「あ、いえ。そんな事はありませんよ」

秀未はそう言いながら残ったカレーを食べ進める。

三栄がそれを気にして見ていたような気がして、食べ進めてから誤魔化す為に話題を変えた。

「そ、そうです兄上！　最近何か事件とかはありましたか？　明智近影を抜くべき相手には出会えましたか？」

「秀未、あまり軽々しく明智近影が抜かれるなど……」

「あ、す、すみません……」

父に怒られてしまった。

これは少し、兄がおかしいだけなのだ。

明智近影は、代々明智家の人間に引き継がれる明智家の宝。

その気になればどんな強固な鎧をも切り裂く力を持つ名刀ではあるが、仮に使われるとしたら、それは誰かから血が流れる事を意味する。

そんな事、ない方が本当は良いのだ。

父は兄が警察と共に戦う事に関しては、寧ろ良いと思ってくれているようだが、あまり刀を使って欲しくないとは思っているらしい。しかし兄は違う。

剣術だけでなく、剣そのものを愛する兄は言っていた。

剣は飾りじゃない。使われなければ生まれた意味を成さない。

だから使うべき相手が現れるのを心待ちにしている……と。

そんな夢を語っていたが、結局は現れずに十年近くが経っている。父には悪いが、兄の頑張る姿を見てみると、どうしても兄の夢を応援したくなる。

応援はしているが、結局今の所叶った事はない。

「結局会えてないな。まあ……それが良い事なのだろうけどな」

「三栄もいい加減、刀を抜くべき相手を探すなどよしなさい。明智流は人を守る事をモットーとした流派。もし人を傷付ける為に使ったその時は、例えお前であっても師範の資格はないと思え」

父が厳しい目でそう告げた。

だが三栄は動じず、真っ直ぐな目で父を見つめる。

それでも刀を抜くべき相手を探したい、そう言いたげな目で。

「もう二人とも、ご飯が冷めますよ」

見かねた母が場の緊張を解かんとそう告げた。

二人は見つめるのを止めて、食事に戻る。

秀未も安心して、もう一度カレーにスプーンを運ぶ。

※※※

食事が終わった後、秀未は皿を片付けた。

自室に戻る前に、食後の緑茶を飲む三栄に声を掛けてから自室に戻ろうとする。

その時。

『ピンポーン♪』

チャイムが鳴る。

秀未はすぐさま玄関前まで移動し、戸の前に立つ客人に「はい」と告げた。

「すみません滋賀署の者なんです。明智三栄さんはご在宅ですか？」

「兄に御用ですね。今鍵を開けますので、少々お待ちください」

鍵を開けると、スーツ姿の二人が戸を開いて中へ。

「こんばんは」

「こんばんは。今兄をお呼びしますのよ」

秀未は頭を下げてから、三栄を呼びに行く。

「兄上、警察の方がお見えになられています」

「分かった」

茶を飲み干してから立ち上がる兄。

兄は玄関まで歩いてから、応接室の戸を開きスーツの人達の中に。

秀未は耳を澄ませて、スーツの人達と三栄の会話を聞き始めた。

「今回はどうされました？」

三栄がスーツの人達に問いかける。

「はい、実は最近指名手配中の凶悪犯がしまして、警察公認の協力員である三栄さんにも依頼したくて来ました」

「こちらが今回の犯人です」

紙を置く音が聞こえる。

恐らく犯人の写真のようなものでも置いたのだろう。

「灰色の怪物？」

「そうなんです。特撮とかに出てくる感じの怪物が、被害者を灰化させていると通報があつて。警官隊を向かわせたりもしたのですが、残念ながら数人が殉職。これ以上刺激するのは危険だと判断が下りまして」

「なるほど……」

「三栄さん、今回の犯人……止められそうですか？」

スーツの人達が三栄に聞く。

「分かりました。やりましょう」

三栄は躊躇いなく答えた。

やはり自分の兄だ、と秀未は内心誇らしく思う。

だが……。

——私も兄上のように戦いたい。

自分も戦えれば、と秀未は思う。

今回に限った事ではない。

兄に仕事の依頼が来る度に、何度も思った事だ。

自分が協力出来れば、兄と同じ強さでなくても、例えその内明智の家に住られなくなっても、自分は明智の剣士だと誇りを持って生きられるのにと。

兄の背中を守るだけでも、自分はその資格を得られる筈だ。

「よし」

秀未は小さな声で呟く。

今度こそ三栄をお願いしよう、と秀未は決意する。

自分だって明智流をある程度極めている。

兄の足手まといになどならない筈だ。

秀未はそう心に決めて、戸を叩く。

「はい」

三栄が戸の奥で問いかける。

「秀未です、入っても大丈夫でしょうか？」

三栄は少し黙り込んでから、二人に確認を取る。

許可が取れたのか、少ししてから三栄は告げた。

「どうぞ」

三栄の合図の後、秀未は入室する。

「すみません、こちらは私の妹の

「刑事さん。兄の仕事、私にも任せていただけないでしょうか」

そして真つ直ぐな目で、刑事を見つめた。

足利明人とアイドル剣士 第三話

刑事達は目を丸くして、秀未を見る。

三栄だけが冷静に、秀未に告げた。

「どういうつもりだ、秀未」

三栄に目を向け、臆することなく続ける。

「言葉の通りです。今回の仕事、私にも手伝わせて欲しいんです。兄上の背中を、守らせていただけないでしょうか？」

頭を下げて頼み込む。

しかし、兄の返事は厳しかった。

「ならんぞ」

「しかし！」

秀未はそれでも、めげずに叫ぶ。

自分の兄に、目で意思を伝える。

「秀未、これは遊びじゃない。下手をすれば命を失う事になるんだ。そんな危険な事、僕は許可出来ない」

冷静にそう答えた三栄。

それでも秀未は諦めなかった。

「危険は兄上も同じ事です！ 私だって明智の人間です！ 足手まといになんてなりませんから、どうか私を！」

「つけあがるな」

三栄の言葉が、刃の如く秀未を突き刺す。

「本気で命を奪うかも知れない相手と戦った事が無い者が、憶測で判断するな。お前は余計な事を気にせずに、来月からの高校生活を心待ちにしていれば良い。お前に危険な事はやらせられない」

秀未は俯く。

そして三栄は、最後に告げた。

「部屋から出て行け。今日はもう休むんだ」

※※※

あの後秀未は、自室へと戻った。

分かっていた事なのに、予想より厳しい事を言われて、秀未は思わず涙を流していた。

「……」

でも、兄の言う事は正論だ。

自分は本気で命を奪う相手となんか戦った事はない。

これまで何度も勝てたのは、それが試合だと分かっていたからだ。けど兄は違う。

これまで何度も命を危険に曝して戦い、それでも刀を抜かず、竹刀一本だけで相手を止めてきた。

やったことのない人間が口出し出来るほど、兄は些末な事はしていない。

分かっている。

分かっている筈なのに……。

「出来ない……」

呟いた。

「諦めるなんて、出来ない」

そして、こう思った。

兄に言われたから、何だと言うのだ。

危険なのは、兄であつても、他の誰であつても変わらない筈。

なら……私も覚悟を持てれば良いだけの話。

ここで諦めたら、一生後悔する。

そう思えば、覚悟なんて簡単に出来る筈だ。

「兄上、すみません……けど、私は胸を張って生きたいんです」

秀未は夜遅い時間、一つ罪を犯した。

兄が持つ当主の証である名刀『明智近影』。

それを兄が眠る部屋から盗み出し、そのまま家を出た。

明智近影は、当主のみが帯刀を許される刀。

当然自分が抜けば、勘当は愚か、最悪警察に捕まる事だつてあり得る。

それでも、もう秀未は止まれない。

兄が許してくれないのなら、例え罪を犯しても一人で戦う。

どうせその内、明智の家には居られなくなる。
それが少し早まるだけの話だ。
犯人さえ止められれば、家を出る事になっても自分には証明出来る。

自分は明智の人間として、正義の為に戦った強き者だと。

それに、一度叶えたかった夢を叶える事は出来そうだ。

本物の日本刀で戦うという夢。

しかも憧れの明智近影だ。

これ以上の贅沢、恐らく存在しない。

絶対成功させて帰ろう。

そう意気込んで、秀未は家からかなり離れた場所で眠りについた。

その時……夢を見た。

自分が初めて、竹刀を握った日の事。

「お……重い」

七歳の時だったろうか。

小学校に入りたての頃で、兄……三栄は十四歳。

兄は既に免許皆伝し、明智近影を譲り受けた後だった。

「さあ、どこからでも打ち込んでこい」

兄が竹刀を構えてそう告げる。

この頃の秀未には、そんな兄の顔が意外にも見えたし、怖くも見え
た。

その時の三栄の顔は、秀未が知らない顔だったから。

それまで、父の指導の下で真っ直ぐな瞳で剣を振るう門下生としての
顔と、厳しくも優しい兄としての顔しか知らなかったから。

だからそこで、初めて自分の師範になる男の顔を見て、怖いとも意
外とも感じたのだ。

兄がこんな顔をする時もあるのかと。

「う……ううう」

その時に感じたプレッシャー。

そして、初めて持つ竹刀の重さ。

秀未は剣を振るうどころか、その時の空間と状況に押しつぶされそ

うだった。

兄はこんなものを毎日のように感じて振るい、自分を鍛えていたのかと。

自分には到底無理だ。

やったこともないのに、当時の秀未はそこで諦めそうになっていた。

けど、秀未はそんな時目を細めて兄の持つ竹刀を見た。

手入れはされている。

だが使い古され、既にボロボロの竹刀。

兄がどれだけの努力をしてきたか、見れば十分伝わる竹刀。

兄とて、弱音を吐いたり諦めかけたりした事が無かったわけではあるまい。

けど、それでも折れなかったからこそそうして自分の前に立っている。

対面すればプレッシャーを感じて当たり前だ。

きつと兄だつて、初めて竹刀を握り、誰かと対面した時はこう感じに違いない。

自分だつて兄と同じ血が流れている。

兄と同じ明智の血が流れている。

これから修行を積み、自分だつて兄と同じように戦えるかも知れない。

その時の秀未はそう思った。

「はあッ！」

秀未はそこで覚悟を決める。

そのまま竹刀を構える兄に、勢いよく竹刀を振り下ろす。

「メエンッ！」

三栄は直前まで防御しなかった。

だがあと少しで当たるといふ寸での所で竹刀を動かさず、秀未の面を防御。

そのまま籠手突きを繰り返す。

「籠手！」

秀未の負けだ。

籠手突きの間、秀未はその動きを必死に目で追おうとした。

けど出来なかった。

兄の動きは、人間業ではなかった。

「いい面だった。よくやったぞ」

妹の初めての攻撃に、兄が嬉しそうに小さく笑っていたのは、今でも忘れない。

けど……そこで兄に近付けるイメージが一気に無くなってしまったのも、忘れられない記憶だ。

それからずっと考えていた。

どうすれば兄に近付けるのか。

どうすれば、いつか明智の家を去る事になっても自分に自信を持てるのか。

それが出来ないなら、自分に生きる意味はあるのか……。

「……」

そこで、目が覚めた。

空には太陽が昇り、春の暖かくもまだ冷たさを残した風が自分を包む。

竹刀を杖代わりにして立ち上がり、眠い目を擦る。

目標は灰色の怪物。

恐らく兄たちはもう起きている。

今頃血眼になって、兄達は明智近影を探しているだろう。

今日を逃してしまえば、何も出来ずにただ勘当を受け入れるしかない。

それだけは……それだけは決して出来ない。

必ず犯人をこの手で倒し、その上で受け入れる。

または倒せずに、殺されて死ぬのも良いだろう。

私は、明智の人間は強い人間でなければならぬ。

怪人すら倒せないくらい弱いなら、死んで当たり前だ。

秀未は深呼吸をしてから、道場からより離れた場所へと駆け出す。

足利明人とアイドル剣士 第四話（十足利明人プロ フ）

秀未は同じく兄の部屋にあった、犯人の特徴やこれまでの記録が書かれた資料を取り出して確認する。

怪人の人相名前共に不明。

だが犯人が狙う被害者の特徴は分かっているらしい。

犯人が狙っているのは、とある学校出身の生徒だ。

秀未も名前だけが聞いた事がある。

『私立蘇我高校』。

滋賀のある地に建つ、選りすぐりの不良が揃うという高校。

入学試験もペーパーテストではなく、全国各地から揃う不良数百人の内、入試戦争と称された喧嘩で生き残った上位百人しか入れないとされる、まさに選ばれた不良の為の高校。

ある意味高偏差値の私立高校の入試以上に危険が伴い、腕つぶしが中途半端なものはその試験で落とされるし、何なら命を落としかねない。

秀未が来月通う予定の『県立〇×女子高』も数年前は不良女子の巣窟……などと呼ばれていたが、活発な生徒会によってまともな女子高に生まれ変わったと聞いているし、蘇我高校の生徒みたいに危ない生徒はいないと思う。

蘇我高校の生徒会長……恐らく番長的な存在を倒したとされる仮面ライダーがいたとも言われているが、入学説明会を見に行った感じそんな空気は感じなかった。

しかし怪人なるものが街に蔓延っているという話を聞く感じ、一概に都市伝説とも割り切れない。

怪人がいるなら、どこかにそれを倒すヒーローがいそうなものだが。

まあ考えていても仕方ない。

ヒーローは待っていて来るものじゃない。

兄のように自ら進んで悪と戦う事で、初めて世の中は平和になる。秀未もそういう風に悪と立ち向かいたい。

とは言え今回の相手は、そんな不良の巣窟の関係者を狙う者。気を引き締め、決して油断しないように挑む必要がある。

「蘇我高校の関係者に出会えば早いんだけど……」

秀未は呟く。

呟きはしたが、そういうたられればの話が簡単に現実になる事例なんて少ない。

それで実現するのなんて余程運が良いか、悪いかのどっちか……。「ぐあっー」「……！」

そんな事を考えている途中、秀未は何か当たって弾かれる。物凄く何か堅い物に弾かれた感触。

秀未は尻を摩ってから、その場で少し見上げる。

「すまない、大丈夫か？」

そこそこの背丈の筋肉質な男が、自分に手を伸ばしていた。間違いなく、自分を弾いた物の正体だろう。

自分とした事が、考え事をして走っていたせいで人にぶつかってしまつたらしい。

「ごちんこそ、失礼しました」

軽く礼をし、立ち去ろうとしたその時。

男はこう言つて引き止めた。

「すまないが、少し聞いても良いか？」

「はい」

秀未はやや焦る気持ちを抑えて、質問に答えるだけならと冷静になる。

男が自分の返事を聞いて告げた。

「明智道場を探しているのだが、あの建物で間違いないか？」

もう既にかなり遠くにある明智道場を指さす男。

「間違いありません」

「そうか。かたじけない」

男は軽く礼をして、そのまま去ろうとする。

だが偶然は自分が思っているよりも簡単に起きた。

「ぬわあああッ！」

すぐ近くで悲鳴。

声の方を見ると、灰色の怪物が触手のようなもので人を襲っていた。

それが人の口の中に入るや否や、青い炎に包まれながら人が灰化していく。

警察の人が言っていた通りだ。

あれに間違いない。

「生まれ！ 止まらないと撃つぞ！」

その後すぐにパトカーが到着し、中から銃を持った警官が二名現れる。

だが怪人はそんな指示聞きもせず、警官にゆっくりと近付いていく。

警官の放つ弾丸は、怪人の身体を通さない。

ダメージを与えることなく役目を終えた弾丸が、コロリと地面に落下。

警官は後ずさって逃げようとする。

その警官と怪人の間に、秀未は割り込むように突撃。

怪人を蹴り飛ばし、怯んだ隙に拳を握って警官に告げる。

「早くこの場から離れてください！」

「それはこちらの台詞だ！ 何なんだ君は、そんな刀持って！」

「私は明智流師範代の、明智秀未です！」

真っ赤な嘘を叫ぶ秀未。

「明智……まさか三栄君の！」

「私は兄の代理で来ました。どうか早く逃げてください！」

「は、はい！」

警官がパトカーに乗って逃げていく。

秀未はそれを確認してから、怪人を睨む。

「何人もの人の命を奪ったようだが、それもここまでだ。私が成敗す

る！」

兄が言いそうな台詞を真似て、秀未は告げた。

「……」

だが秀未の予想とは裏腹に、怪人は興味の無さそうな素振りを見せている。

不覚にも秀未は、それに対して腹が立ってしまふ。

「私の力見せてやる。行くぞッ！」

秀未は拳を握って、怪人に勢いよく振るう。

真つ直ぐに放たれた正拳突きが、怪人の腹へと突き刺さる。

が、先みたいな手応えは無かった。

「……」

「ば……馬鹿な」

「邪魔だ」

今度は怪人が、秀未のおでこを指で弾く。

秀未のパンチとは対照的に、物凄い勢いで地面に激突。

「ぐわあッ！」

アスファルトが削れ、自分の着ている和服がボロボロになる。

背中と腕には、既に傷が出来ていた。

「いっ……」

こんな怪我、今まで稽古や試合でした事が無かった。

当たり前だ。

稽古や試合の相手は、本気で殺すつもりで剣を振るっていない。

だがあの怪人は、躊躇いなく誰かを殺す事が出来る。

そんな相手に、試合に強い程度の自分の常識が通用するわけがない。

「ならば……」

そこまで考えてから、秀未は刀の柄に手をやった。

自分の拳ではダメージが通らない。

やはり刀を使わなければ、怪人を止める事など出来ない。

秀未は刀を抜こうとする。

「……」

だが、秀未はそこで止まってしまう。
抜けない。

何故だ。

父や兄に怒られ、勘当される覚悟ならとうに出来ている筈だ。
最悪怪人を傷付ける覚悟も、とうに出来ている筈だ。
なのに振るうどころか、刀を抜く事さえ出来ない。

秀未は焦った。

そして、自分に何度も言い聞かせた。

自分には抜ける。

抜ける筈だと。

だが、手が震えたまま言う事を聞かない。

無意識ではあるが、多分心が気付いてしまった。

人を傷付けて戦うなど、そう簡単に出来る事ではない。

今まで試合という遊びでしか剣を抜かなかった自分に、いきなりそんな事が出来る筈がないと。

「あ……ああ」

情けない声が自分から漏れる。

秀未は不覚にも後ずさってしまう。

それもあの警官たちよりも情けなく。

そして、目を閉じてしまう。

敵に怯えて目を閉じるのは、命取りであるという試合においても大事な事すら忘れて。

「グギャアー」

怪人の叫び声が聞こえる。

それに気付き、秀未はゆっくりと目を開く。

すると……。

灰色の怪人とは別の、剣を得物にしている怪人。

いや、剣が得物というよりかは、剣そのものの怪人。

剣の人形とも形容出来る、まさに剣の怪人が、灰色の怪人の身体を
スパッと切り裂いていた。

足利明人とアイドル剣士 第五話

「この少女の代わりに、今度は俺が相手をしてやる」

聞き覚えのある声が、剣の怪人から聞こえた。

さっきの男のものだ。

きつと、あの男が姿を変えたものなのだろう。

直感的にそう思う。

「まさか、こんな所でアンタに会えるなんてね。蘇我高校最強の元生徒会長……足利明人さん」

秀未は驚きつつも男の正体に納得する。

確かにあの男……明人の迫力は、只者な気がしなかった。

一般人からは感じない何かを感じた。

だが蘇我高校のレベルがあそこまで高いのかと、感嘆を禁じえなかった。

「嬉しいよ。まさかアンタの方から俺に殺されに来てくれるなんてさ」

「……どういう事だ」

明人は少し距離を取ってから構えつつ問う。

「俺もさー、元々蘇我高校の生徒だったんだよねー。それが仲間に酷い目に遭わされて死んでさー。でもそのおかげか知らねえけど、一度死んで目覚めたらこんな強い力手に入れられてさ。折角だから強い蘇我高校の奴ら殺しちまおうって寸法さ」

「……」

「アンタを狩れば、俺は弱くなんかないって証明出来る。なんせ、三年間生徒会長であり続けた男なんだからよ」

灰色の怪人は興奮を抑えられずに身構えている。

対し明人は至って冷静だ。

「お前がどんな思いでいるのか、そんな事は敢えて聞かん。だが……そんな覚悟で俺を倒そうと言うのなら、返り討ちにするまでだ」

姿勢を一切崩さず告げる明人。

怪人はそれを聞いてから、やや残念そうに振る舞う。

「あーあ。ホントに強い奴ってやつばそういうところあるよねー。弱者の戯言に興味ないって？ 元々中途半端な強さの奴が人の話聞いにくれるなんて思ってないけど、アンタまでそんな態度なのガツカリだよ」

拳を構えて狂ったように叫ぶ。

「なら拳で語ってやるよ。死んだ俺がどれだけ辛い思いをしたか、どんな思いで人を殺したかをよ！」

そして怪人は駆け出す。

目で追う事など出来そうにない速度で。

対して明人は、少しだけ構えを解いた。

まるで殴られるのを待つとでも言うかのように。

「殴られてやるってか？ 舐められたもんだな！」

怪人の拳が風を切って勢いよく明人の眉間へと突き出される。

明人は少しだけ吹き飛ばされながらも、殴られた所を少し押さえて相手に向き直った。

それを見た怪人が呟く。

「どうだ俺の拳。痛いだろ？ 同じ化け物になっても、一度死んで蘇った俺の方が強いのが分かるだろ？」

見えて恥ずかしくなる程の自己顕示。

だがそんな台詞にすぐに返答する事なく、明人は少し笑ってから何かをぼやく。

「あいつ、こんなのを戦闘中ずつと徹底してたのか……。全く大した女だ……。それは、最後には俺が負けるよな」

「あん？ 何言ってるやがんだ？ アンタ」

怪人がそう問いかける。

明人はそれに対し、少し笑みを残しながら答えた。

「こつちの話だ。それより、今のがお前の全力か？」

「けっ。すぐ倒したら面白くねえだろ？ でもどうだ？ 痛いだろ？」

蘇我高生の癖に小便漏らして逃げる奴なんかもいたっけな。アンタみたいな化け物は見慣れてるくせによ。情けないだろ？ なあ」

「ああ……情けないな」

明人がキツと相手を睨みつけるように、少し顔を歪ませて告げる。

「お前のその無意味な語りだな」

怪人はそれを聞いて、少し身体を震わせた。

「ん……だと?」

「先から自慢や自己顕示ばかり。そうでもしなければ、お前は強さを証明出来ないのか? いや、強さとはそもそも証明する必要があるのか?」

「……!」

明人の言葉に、怪人だけじゃない。

秀末も、少しばかり動揺する。

自分が今こうして明人に助けられている理由。

それは怪人を倒し、自分は明智の剣士として相応しい強さを持っていると、自分に自信を持ちたかったから。

そして、それが出来なかったから。

だが……あの怪人を見て気付く。

今の自分は、あの怪人と大して変わらない。

どうしようもない現実に絶望して、少しでもそれを誤魔化す為に、他人に迷惑を掛けてまで矮小な承認欲求を満たそうとしていた。

そんな中途半端な覚悟で、兄や、目の前で戦う明人のような肉体や心の強さなど持てる筈がなかったのだ。

「証明したいのなら、俺を倒して前に進め。余計な口など開いている間に、俺の剣はお前を何度でも斬る」

そう呟いてから、消えるように速く加速する明人。

そして灰色の怪人の身体を、何度も切り裂いていく。

まるで明人が分身してるかのような速さ。

怪人は防御も出来ずに、その斬撃に怯む。

「あ……ああ……」

灰色の怪人の姿が変貌していく。

怪人態から、人間の姿へ変わっていく。

そして明人の姿を見て、目を見開いている。

「もう良いだろう。手を引け。加減はここまでが限界だ」

明人も剣の怪人の姿から、人間の姿へと戻っていく。

それでも怪人の時に感じた迫力はそのままだった。

途轍もない威圧感に、怪人の男は少しの間動けなかった。

だが。

「けっ！」

すぐに表情を変えて立ち上がり、こう明人に告げる。

「アンタの言う事なんて誰が聞いてやるかってんだよ！ 覚えてろ、

今度会った時がお前の最後だからな！」

そして怪人の男は明人に背を向けて去っていく。

「ふん……」

明人は嘆息してから、秀未に目を向ける。

そして未だ尻餅についている彼女に、手を伸ばす。

「大丈夫か？」

秀未はすみませんと謝りながら手を取り、立ち上がる。

明人は表情を変えずに呟く。

「よくあそこまでやったな。思わず驚いた」

「……」

明人は恐らく、秀未の事を褒めたつもりなのだろう。

だが秀未には、全然嬉しいと感じなかった。

結局怪人相手に刀を抜く事は出来ず、逃げられてしまった。

これでは明智の家名に泥を塗っただけ。

兄の言う通りだった。

試合で強いだけの人間など、本当に相手を殺そうとしている者には

赤子同然だという事。

そして人と戦う……いや人を傷付ける覚悟などそう簡単には出来

ないという事。

完全に秀未が甘かった。

やはり自分には、あの怪人を倒す事など出来ないのだろうか……。

「……」

だが、ここで帰るわけにもいかない。

このままでは戦いから逃げたのと同じになる。

例え自分が死ぬとしても、刀が抜けないとしても、一度戦うと決めた相手から逃げるなど、明智の人間として決して許されない。

「お前、行くつもりか？」

立ち去ろうとする秀未に、明人はそう問いかけた。

足利明人とアイドル剣士 第六話

「決まっているじゃないですか。あの怪人を倒しに私はここに来たんです。手ぶらで帰るわけにはいきませんからね」

秀未の手は震えている。

それを何とか誤魔化して行こうとするが、明人には全て見通されていた。

「……次こそは、その刀を抜けるのか？ その震えている腕で、それが出来るのか？」

その言葉が重く心に突き刺さる。

「……」

黙り込む秀未。

そんな彼女に、明人は続けた。

「身の程を知ったのではないか？ だから足が竦み、腕が震える。次挑めば死ぬかも知れない。それを悟った。違うか？」

明人の言う通りだ。

秀未は既に恐怖で潰れそうだった。

けど諦めたくない心が、自分が逃げる事を拒絶している。

この状況から逃げるなど簡単だ。

このまま道場に帰り、すみませんでしたと謝れば良い。

勘当は免れないが、戦いで死ぬ事はない。

ただそれでは、ここまでした意味が無くなってしまう。

それだけは……秀未には絶対許せなかった。

「なら、諦めろと言うんですか？ 私には無理だから、諦めろと言うんですか？」

「……」

明人は何も言わない。

秀未は反論を続けた。

「私には、出来ません。私は例え死ぬとしても、あの怪人と戦う義務がある。逃げたくないんです。明智の人間として、逃げる事など許され

ない」

「お前……」

「強きなんて証明しなくて良い。貴方はそう言っていましたね。けど、証明しなくてはならない人間だっているんです。この私のように」

自分は兄や目の前の男のようには強くなれない。

それは先に悟った事。

だが兄のように強くなれなくても、明智の名を背負っている以上、秀未には強くなる義務がある。

そして、己が強さを証明出来ないのなら、明智の人間である意味がない。

兄と同じ家名を背負う事など、許されない。

いつか出て行かなければならないとしても、自分は明智であったと誇りを持って生きたい。

逃げた弱い自分のまま出て行くくらいなら、死んだ方が良い。

「もう放っておいてください」

秀未は涙を流す。

「あんな怪人に殺されてしまうくらい私が弱いなら、私に存在価値がないという事です。だから、もう良いんです」

秀未はそう告げて、今度こそ駆け出した。

明人は自分を止めない。

むしろ怪人が去った方に向かっていく秀未を、見送るように真っ直ぐ見据えていた。

※※※

灰色の怪人の青年は、足利明人が追って来ないかだけを気にしてただ駆けていた。

あの力があれば勝てると思ったが、どうやら足りないらしい。

「く……くそオ！ この力があれば楽勝だと思ったのによ！」

この力に目覚めてから、喧嘩はここまで負けなしかった。

蘇我高校の生徒はおろか、強者揃いである元生徒会のメンバーにすら負けなかった。

自分を負けさせたのは、今のところあの男のみ。

あのベルトの力もあるが、やはり三年間生徒会長の座に就いた彼は別格だ。

彼を避けていくのも手だが、それはそれで彼のプライドが許さない。

青年は、一度死んだ自分がこの力を手にして生き返った理由を、死ぬまで下っ端として過ごしたご褒美だと思っっている。

生前の青年は本来、蘇我高校に入れるような器では無かった。

入学試験の時も、パシリがいなくなるからという理由で仲間を守ってもらって生き残っただけ。

喧嘩は得意じゃないし、不良グループにだって入りたくなかった。

中学の時に目を付けられて、それから逃げるにも逃げられず、親にも教師にも相談出来ず、自分のやりたい事まで全部諦めさせられて言う事を聞かされた。

そうやって我慢我慢の日々を過ごしてきたのに、たまたま買った喧嘩で負けたのを全部自分のせいになされて、挙句殺された。

死ぬ前に声が聞こえた。

『あーあ、お前そんなだからパシリにしかねえんだよ。ザーコ』
今でも忘れられない。

そしてその声の後死んで、死んだ筈の脳にその声がもう一度響いて、青年は再生した。

灰色の怪人として。

生まれ変わった青年は真っ先に、自分をパシリにした不良グループのメンバーを皆殺しにした。

そして脳内に響くその声をかき消す為に、蘇我高校出身の生徒の中でも強い相手を殺すべく動いた。

だが何人殺しても、脳内からその声が消える事はない。

足利明人さえ狩れば、もしかしたら。

そう思ったが、この力を手に入れて初めて負けた。

脳内の声が更に強まったように感じる。

もっと力が、もっと力が欲しい。

「お困りのようですね」

青年は立ち止まる。

自分に声を掛けたのは、アタツシユケースを手にするスーツ姿の男性だ。

彼のスーツについた、『SMART BRAIN』と描かれたピンバッチが印象に残る。

「何だお前は」という目で見つめていた青年に対し、笑顔でスーツの男は告げた。

「ご心配なく。私は貴方達オルフェノクの味方ですよ」

「オル……フェノク？」

「人間としての死を経た貴方は、人間を超えた存在として生まれ変わった筈ですよ」

男は、青年に起きた事を知っているようだ。

オルフェノク……というのは恐らく、青年が変身している灰色の怪人の事だろう。

「オルフェノクである貴方なら、これを使える筈です」

男は青年にアタツシユケースを手渡す。

「これは？」

「説明書は中に入れてあります。では……」

男はそう告げてから、どこかへ行ってしまった。

青年はなんだよと思いつつも、安全を確認して座り込み、アタツシユケースを開ける。

中身は……。

「……なんだこれ」

特徴的な絵柄が描かれた取り外し可能なアイテムが付いた黒いガラケーに、それがすっぽり収まりそうな感じのベルトとバックル。

双眼鏡、デジカメに、奇抜な形の銃剣。

そして男が言っていた説明書……。

「どれどれ……」

青年は説明書を読み込む。

そこから分かった事がいくつかある。

このケースのアイテム……『カイザギア』はオルフェノクと呼ばれ

る種族が着装する為のパワースーツのようなものである事。

そして携帯のようなアイテムに特定の番号を打ち、ベルトに装填する事でそのスーツを纏えるという事。

青年は子供の頃特撮ヒーローものを見た経験が無いからなんとも言えないが、確かによく見ると特撮ヒーローが変身するのに使うベルトにも見える。

よく分からないが、これなら少しは自分も強くなれるかも知れない。

「……」

またご褒美が手に入った。

青年はそう確信し笑う。

そして青年は歩き出す。

面白そうな玩具を手に入れたのだ。

今はターゲットなどどうでも良い。

早くこれを使って、足利明人をいたぶってやりたい。

騒がれる程暴れれば、きっと足利明人も現れる筈だ。

そう期待して、どこかへと歩いていく。

足利明人とアイドル剣士 第七話

秀未が明人と別れてから、既に二時間以上が経過している。走っても走っても、あの怪人の姿は見当たらない。

そうこうしている内に、もしかしたら道場の人間が外まで自分を探しに来ているかも知れない。

見つければ、当然ここまでしてきた事が無駄になる。

それだけは避けなければならない。

秀未は血眼になって探し続ける。

「……！」

そして秀未が立ち止まったのは、それから更に時間が経ってからの事だ。

走っている内に、高速バスが出入りしているバスターミナルに着。

そこで騒ぎが起こっているのが、遠目で見ても分かっていた。

恐らくあの怪人の仕業。

秀未はそう確信してから、バスターミナルの建物内へと駆けていく。

「あああッ！」

予感は的中。

怪人は触手を伸ばして、今度はバスの運転手を襲っていた。

バスの運転手は叫びながら逃げていく。

そして、

「きゃあッ！」

逃げ遅れた一人の少女が、椅子に足を引っかけて転んでしまう。

自分と同じくらいの歳と思われる少女。

怪人は、その少女に目を向けてゆっくりと歩き出す。

最早蘇我高校出身の者ではなさそうな少女。

「やめて……やめてよ……！」

恐怖のあまり、痛む脚を押さえて少女は泣き出しそうになってい

る。

だが怪人は歩くのを止めない。

秀未はそれを見て、刀の柄に手を掛け、抜こうとする。

だが……。

「くっ……」

やはり自分には、出来ない。

それも今の自分の手は、さっきの戦いで刀を抜こうとした時より重く感じる。

相手を傷付けるかも知れないという恐怖はとうにない。

あの人外を傷付けるなど、恐らくこの刀でも出来はしない。

だが今度は、自分が死ぬかも知れないという恐怖が心にのしかかっている。

明人の言う通りだ。

誇りがどうだと強がっても、やはり死ぬのは怖い。

そこまで見透かして、彼は自分に行つたのだ。

「助けて……助けて……」

少女が力なく叫ぶ。

自分が抜かなければ、少女はこのまま死ぬ。

だが自分が困になれば、自分は死んでも、この少女を逃がす事は出来るかも知れない。

秀未は言い聞かせる。

このままで良いのかと。

自分は兄や明人のようには強くなれない。

それは紛れもない事実だ。

だが自らを誇れずに……違う。

勇気を持つて立ち向かう事も、誰かを救う為に恐怖を乗り越える事が出来ない者に、自らを誇る資格などない。

今ここでもう一度本気で覚悟を決めるんだ。

自分は例え勘当されても、明智の人間として誇りを持って生きていく。

それならば、今助けられる命を見捨てる事など許されない。

命を救う為なら、抜ける筈だ。

自分は兄と同じような覚悟を持てると、思い込む事が出来るなら。

「おおおおおおッ！」

秀未は叫ぶ。

そしてその声を聞いた怪人と、少女がこちらを見ていた。

秀未は重い手に鞭打って、ゆっくりと刀を抜いていく。

打たれてから、何百年も抜かれなかった刀身が、鞘から少しずつ見えってくる。

明智近影の刀身が、この場に姿を現した。

「お前……さっきの女……」

秀未は全ての恐怖を捨て去り、刀を構え、鞘を捨てる。

兄も見た事がない、明智近影の刀身はとても美しかった。

やや青い色をした刀身が、太陽に照らされて眩しく光る。

「はあ。刀はどうかやら抜けたみてえだな。だが、そんなんで俺を倒せるとでも？」

「……」

秀未は真っ直ぐ見つめながら、返すべき言葉を探す。

「倒せなくても、ここでお前相手に自分が全力を出せれば、今ここにいる人達を救えれば十分だ！」

「へえ……」

怪人は興味無さそうに聞いている。

だが秀未はそれすら気にせず続けた。

「私は……明智秀未。剣士だ」

秀未は言葉とは裏腹に、未だ不安を感じ続ける心に言い聞かせた。

確かに私は、本気で殺しに掛かる相手と戦った事はない。

だがそれは、かつての兄も同じだった。

兄と同じにはなれなくても、殺気に怯まず落ち着けば、少しは立ち回れる筈だと。

「そっか。じゃあ……取り敢えず殺すわ」

覇気もなく、そしてつまらない者と話す声でそう告げてから、灰色の怪人は駆け出す。

人間離れた速度に、人間離れた威力を持つ拳。恐れるなどという方が無理な話だ。

だが……兄はそれよりも速く強い竹刀を、いつも振るっていた筈だ。

それに比べれば、あんな拳などハエが止まるような速度でしかない。

「何ッー！」

秀未は刀で拳を防ぐ。

刃が敵の拳に触れたが、当然相手の拳に大きな傷が入る事はない。だが流石はどんな強固な鎧をも切り裂く剣、少しだけなら傷を入れられた。

そして人間相手なら有効と信じていた自分の攻撃が見切られた事に、怪人は酷く動揺していた。

「……！」

秀未はその動揺の隙を突いて、刀を振るう。

何の変哲もない左薙。

相手の脇に傷を負わせ、その上大きく吹き飛ばして、ガラスを割って建物の外へ。

「逃げるんだ」

「は、はいー！」

少女に対して、秀未はそう告げる。

走っていくのを確認してから、秀未は建物の外へ。

もう一度刀を構え、ゆっくりと身体を起こす怪人を睨む。

「くっ……ガキが調子に乗りやがって……！」

「……！」

相手の言葉には耳を貸さず、秀未は精神を集中する。

次の動きを予測して、秀未も突撃。

怪人はそれを見て、秀未にもう一度拳を振るう。

秀未は瞳を閉じて、より集中。

「そーー！」

拳の軌道を見切り、秀未は怪人の拳へと飛び乗る。

「なっ……！」

再び動揺した怪人の腕へ、秀未は全力で切っ先を突き刺す。
今度は奇跡的に、怪人の腕に大きなダメージを与えた。

「ぐあッ！」

痛みに悶えた怪人が、抑えてジタバタとする。

秀未は怪人が倒れる前に、反対へと飛ぶ。

そして追撃の構えを取る。

「明智流抜刀術……」

明智流の抜刀術。

秀未は納刀の構えを取ってから、目を見開いて叫ぶ。

「雷明（ライメイ）！」

秀未はそう叫びながら抜刀する。

雷の如く輝く刀身が、怪人の胴を狙う。

だがそれが……仇となった。

「舐めるな！」

「……！」

秀未は怪人に攻撃を見切られ、大きく吹き飛ばされる。

足利明人とアイドル剣士 第八話

「くっ……」

吹き飛ばされた秀未の手から、明智近影が転がっていく。

拾おうとしたが、一瞬にして距離を詰められて脚を掴まれた。

「ああッ！」

「よくやったけどよ、殺す気のないお前の剣じゃ、俺様は止められないぜ」

「……！」

「明智……今思い出したけど、お前アレか。あの剣術道場の人間か」

怪人がゲスな笑みを浮かべたように見えた。

「そうかそうか、すげえ剣術使う奴らって聞いたけど、こんなに弱かったんだな……ハハハ……」

怪人は笑う。

秀未の中で怒りと……そして悔しさがこみ上げる。

奴が笑ったのは、秀未の事だけじゃないだろう。

兄や父、そしてその前の代の師範まで笑っているのだろう。

自分のせいだ。

自分の気持ちの為に、勝てもしない戦いをしたせいで、兄達まで笑いにされてしまった。

……完全に自分のせいだ。

「でもありがとよ。これで自信がついたよ。最強と呼ばれてる明智の剣士すらこうして捻れる力が付いたんだからな」

「……」

秀未は泣きそうだった。

そして……心の中で詫びた。

——申し訳ありません、兄上……私のせいで、兄上達は笑いになってしまうました……」

そして秀未は、歯を食いしばった。

許せない、先の会話でより強くそう思った。

家族を馬鹿にしたこの男を、許したくない。

「さーて、じゃ、灰にしてやるか……いや、待てよ」

怪人は少し考える。

そして下衆な笑みを浮かべた……ように見えた。

「お前灰にしてやるには惜しいな。良い身体してるし、殺してから使ってやるよ」

その言葉に、秀未の身がゾクリとした。

具体的な事は言っていないが、その言葉に性的なニュアンスがありそうなのは、秀未でも理解出来た。

殺されてしまう上、死んだ後自分の身体を……。

そんな辱めを……。

「じゃあ……お前の心臓を軽く一刺ししてやるよ」

「……！」

怪人は拳を握る。

そして、それは自分に突き刺さる……咎だった。

「ごあッ！」

怪人の呻き声。

そして体勢を崩した怪人の背中には、大きな切り傷が。

間違いない。

怪人にこの傷を作れる者など。

「ふん……やつと来たか」

怪人はすぐにその顔に笑みを浮かべ、その者の名を呼んだ。

「足利明人！」

足利明人が、剣の怪人の姿で……秀未達の前に現れる。

※※※

「あ、明人さん！」

秀未の喉から、何とか声が出た。

「……無事のようなだ」

そう呟く明人。

呟いてから、今度は怪人に目を向ける。

「待ってたぜ、アンタの事をよ」

「手を引けない、というわけだな」

明人はそう問いかける。

そして答えを待たずに告げた。

「そうなら、もう容赦はしない。例えお前の命を絶つてでも、ここで止めるのみだ」

「命を絶つ？　はあ……悪いけど、絶たれんのはアンタだよ」

先ほど明人に切り刻まれた割には、随分と自信満々な態度の怪人。

明人は警戒しながら剣を構える。

怪人は青年の姿を取ってから、近くに置いていたアタッシュケースを開く。

そこにあるベルトのようなものを腰に巻いてから、携帯電話のようなアイテムを操作。

『STANDING BY』

待機音のようなものが流れ、青年は変身の構えを取る。

「変身」

携帯電話をベルトに差し込むと、電子音声が出た。

『COMPLETE』

青年の身体の上を、金色の線が走る。

そしてその線以外の部分の肉体と顔を、黒い鎧が包んでいく。

まるでその姿は、特撮ヒーローのようにも見えた。

「カイザ……これが新しい俺の力だ」

そう名乗る青年。

青年が変身したカイザは、携帯電話の上に取り付けられた小さな部品を取り出すと、手にしていた銃に填めた。

『READY』

電子音声と共に、銃から金色の光……刃のようにも見えるものが飛び出る。

それを逆手に構えたカイザが、明人へと斬りかかった。

「はアッ！」

「……」

明人は声すら上げず、剣で攻撃を見切って防いでいく。

「ハッ！ セイツ！ ヤアッ！」

キン、カン、ジジジと何度も刀身をぶつけ合った後、二人は競り合う。

「……」

「やっぱり流石蘇我高の生徒会長つてこつたな。それくらいはやるか……だが」

カイザは銃剣で強く弾いて、明人の体勢をやや崩す。

そしてわざと銃を明人の足元に放ち、集中を逸らした。

「こつちだぜ」

銃撃で生み出された煙の中から、カイザは蹴りの体勢のまま現れる。

明人は何とか剣で防ぐが、カイザは余裕だった。

ベルトの携帯の『ENTER』を押すカイザ。

『EXCEED CHARGE』

音声と共にベルトから、スーツの金色のラインに沿って、脚へと向かっていく。

脚に取り付けられた、双眼鏡のようなアイテムから、金色の光が放たれる。

槍の如く明人の身体を刺した光が、明人の動きを封じた。

「ふんッ！」

カイザは大きく飛び上がり、片足を突き出す。

足の裏から、黄金の光が放たれる。

「はあああッ！」

飛び上がったカイザは、明人の身体を刺した光に吸い込まれるように突き刺さった。

明人の身体をドリルのように穿とうとしている。

「くっ……」

だが明人は、寸での所で回避して隙が出来たカイザに斬りかかる……が。

「遅いぜ！」

ダメージを負った明人の隙を、反対にカイザが突く。

カイザの拳が、明人の胴に突き刺さり、大きくその身体を吹き飛ばした。
「ふん……」

足利明人とアイドル剣士 第九話

明人は、今自分と戦っているカイザの戦力を冷静に分析していた。だが少し剣を交えただけで分かった。

あのデバイスの性能は相当高い……と。

恐らく今の自分では、苦戦……どころか敗戦は免れない。

「……」

明人は自分の持ち物から、あるアイテムを取り出す。

ソードドライバーよりも遥かに光輝く、白銀の剣のエンブレムのバックル。

バックルではあるが、それ単体で変身するものではなく、ソードドライバーに取り付ける形式になっている。

蘇我高校を卒業して去った二年後に、狩野遥に貰ったもの。

確か名称は『エクスカリバーアップデーター』。

『君の力を最大限に発揮する為のガジェットだ』

同封された手紙にはそう書かれていた。

明人は受け取ってから、来たる六角美咲との戦いに備えて、その力を使った修行を行おうとした事もあった。

だが……結局変身は今の所叶っていない。

狩野遥にも連絡し、一度調べて貰った事もあるが、特に異常もなく。この変身を行うには、明人自身の強い心が必要だと告げられた。

そう言われてから、自分が変身を行えない理由を考え続け、何度も試したが出来なかった。

足りないものが何なのか、それだけが頭に残ったまま二年が経過して。

答えが見つからなかった明人は、この街に戻ってきた。

蘇我高校に入る為だけに引越してきた、この街に。

この街なら初心に帰れる、そういう理由もあったが、この変身を行う上で超えなければならぬ壁が一つあったのを思い出したからだ。

六角美咲だけではなく、自分にとっての好敵手はもう一人いた。

明智道場の師範……明智三栄。

入学試験の前、明人は三栄に挑んだ事があるが、全く歯が立たなかった。

今まで大人にすら負けた事が無かった自分が、同じ年の者に喧嘩で初めて惨敗を期したのだ。

だから、いつかは倒さなければと思った。

これから更なる強さを手に入れる為にも、いつかは絶対に超える必要があると思ったから。

まだ今の自分は、三栄に勝てるかどうかは分からない。

だがこの日まで、明人は毎日のように修行を積んだ。

今なら出来る……そう信じるしかない。

信じなければ、三栄と戦う前にあの男に負けてしまう。

「……！」

明人はベルトに取り付け、バックルにあるボタンを押すが……。

「ごあっ！」

バックルはソードドライバーから弾かれ、変身も解けて、自分も近くの鉄柱に叩きつけられた。

「おーおーおー、それなー!? アンタの新しい力か?」

カイザが明人を煽る。

変身していない状態の明人に向けて、カイザが銃剣の光弾を放つ。

ベルトの携帯電話も取り出して、コードを入力。

『BURST MODE』

携帯電話の上画面を傾け、まるで拳銃のような形に変形させ。

アンテナ部分からも光弾が放たれる。

銃剣と合わせ、二丁拳銃状態のカイザの光弾を、明人は何とか避けていく。

そして、避けながらも一度アイテムを拾う。

「くっ……頼むぞ」

バックルをもう一度ソードドライバーにはめ込み、ボタンを押す。

『ERROR』

その音声が無慈悲に流れ、明人は吹き飛ばされる。

「ぬあッ！」

地面に叩きつけられる明人。

もう一度手を伸ばそうとする。

それを見たカイザが、明人の手に光弾を放つ。

「くっ！」

手を貫通する光弾。

手の甲が無慈悲に焼け、それを見たカイザが眩く。

「いやー、もしかしたら負けちゃうかもなんて思ったけど、これなら楽勝そうっすね」

「……」

明人はカイザに目を向ける。

「分かっただろ？ 弱い奴の気持ち。俺はその立ち位置で辛い思いをして生きて、たった一度の失敗で殺されて死んだんだ」

追い打ちを掛けるように、カイザの銃撃が腕や脚を貫く。

「アンタにそれを分からせる事が出来て嬉しいよ……」

カイザは笑う。

だが明人は、それを否定する。

「ふん……これで分からせたつもりか」

「あ？」

「お前は……強くなかない。本当に強い者は、弱者をいたぶって笑わん。更なる強者を常に求め、前へと進む意志を持てる者だ……」

傍から見れば、苦し紛れの言葉だ。

だがカイザは、それを聞いて怒りを覚えたようだ。

「ちっ……やっぱムカつくなアンタ」

今度は頭を撃ち抜こうと、銃剣を自分に向けた。

「もうちよいいたぶってやろうかと思っただが、正直イライラする。早く死ね」

自分は……ここまでなのか。

明人は心の中で、そう思った。

自分は、三栄や強くなった美咲には勝てなかった。

あの戦いの時も、自分は何も出来てはいなかった……。

蘇我高校の元生徒会長、カイザが明人のそんな肩書を見てどう思ったかは分からない。

けど……今思えば、俺は本当の強者にはどう頑張っても追いつけない弱者。

背中を追いかける事しか、出来ない……。

「……」

明人は歯を食いしばる。

「覚悟出来た、そんな所？」

「……」

食いしばって、俺は思う。

ここで死ぬなど、やはり出来ない。

六角美咲なら、こういう時でも諦める道など選ばない。

諦めず、死んでも諦めないなどというだろう。

自分にはあんな能力は無いが、あの負けず嫌いを見習うくらいは出来る筈だ。

「ああ、覚悟は決めたぞ」

「あ？」

「絶対、ここで死なないという覚悟だ」

「ハッ……何馬鹿な事言っちゃってんだ。もう俺が一発撃ったら終わりなんだよ。ベルトとか取ろうにも、ちよつとでも指動かしたら殺すつもりだし、アンタ詰んでんだよ」

「俺の知る強者は、そんな詰みな状況でも諦めたりしない」

「へえ……なら、やってみろよ」

「ふん……」

明人は、一旦考えるのを止めた。

変身が解かれている自分と、スーツを纏う青年。

攻撃を回避する算段などするだけ無駄だ。

ならば、回避しなければ良い。

「……ッ！」

「野郎！」

宣言通り、動いた明人にカイザが光弾を放つ。
勢いよく放たれる光弾は、明人の急所を狙う。
何とか急所のみは外して、明人はベルトを取ろうと動く。
だが、思ったより辛い。

ミスをすれば死んでしまうし、出血が増えれば自分の体力も削れてしまう。

早くベルトだけでも、そう思ったその時……。

「！」

光の弾が止んだ。

先まで飛んできていた方向に目を向けると、あの少女の姿があった。

「明智……秀未……」

「明人さん、弾は私が受け止めます！」

足利明人とアイドル剣士 第十話（+α）

秀未が刀を構えつつ言う。

「私は、兄上や明人さんみたいな強い人の背中を追うしか出来ない。これからずっと……それは変わらないかも知れない。だけど、それで良いかも知れない。明人さんが言うように、私も強い人の背中を追い続けられ、私もいつか……」

「さっきまでブルブル震えてたくせに、いつちよ前に言うねえ……。調子良いっつーか、反吐が出るよ」

「それはお前を思い出してか？ 下衆……」

秀未が人が変わったように鋭い眼でそう呟く。

先ほどまでは見せなかった顔。

その姿は、まるで兄である三栄を見ているようだった。

「あ？」

カイザが秀未を威圧する。

が、秀未には通用しなかった。

「私の事は何とでも言うの良い。所詮お前に勝てない弱者……だが、兄達の事を侮辱した事は死んでも許す気はないぞ」

「ハッ……そうか。ならお前が死ねよ」

カイザは銃剣から弾丸を放つ。

秀未は何とか見切りながら、刀を振るっていく。

「明人さん！」

刀を振り続けながら、秀未は言う。

「二度も助けていただいて、ありがとうございます。そして、こんな無茶をしてすみません。けど……私はどうしても自分に胸を張りました。身が程知らずと言われても……どうしても」

明人は聞きながら、まずベルトを拾った。

「家の掟を破り、人を守れず守られてばかり、そしてこの後家に帰っても、きつと勘当されてしまう。そんな私に、強者になる資格なんてありませんよね。けど今だけは、その背中を追わせて欲しいです。そし

て、手伝わせてください」

ガジェットを拾い、告げた。

「資格など要らんさ」

「！」

「お前は今の自分から変わりたいと、自分に矢印を向けている。実力ではなく、強者になるのに相応しい精神を持っている。お前は、強者としての一步を踏み出せた。あとは……歩くだけだ」

明人はエクスカリバーアップデータをベルトに取り付ける。

「あとは任せろ、秀未」

秀未の言う通りだ。

俺はもしかしたら、これから先も三栄や美咲を超える事は出来ないかも知れない。

この後三栄に挑んだとしても、勝てないかも知れない。

結局……明人もカイザと変わらなかった。

数度の失敗で自信を失くして、その自信を埋めようと三栄との戦いで勝つ事で証明しようとしていた。

偉そうに言ったのに、自分がそれを分かっていたから、あの力を使えなかった。

だから、俺は追う。

今は例え弱者と罵られても良い。

憧れの人物を追いかけた先で、いつか追い越せば良い。

自分の道に、終わりはない。

戦いを歡びとし、強者に憧れ、努力を続ける限りは。

『UPDATE DRIVE』

明人は叫ぶ。

「変身ー」

『RIDE AWAKING』

再びボタンを押すと、明人の頭上に白銀の剣がゆつくりと舞い降りた。

明人がその剣を掴むと、身体が白銀のスーツに包まれ始める。

やがて明人は、白銀の剣を得物とする戦士……『仮面ライダーエク

スカリバー』へとその姿を変えた。

「……」

明人……エクスカリバーは長剣を構えて、告げた。

「ここからもう一度歩き出す。強者への道を……」

※※※

秀未が下がった後、新しい力に目覚めた足利明人。

白銀の長剣を構え、ゆつくりと歩き出す。

「仮面ライダー……か。その姿……」

カイザがそう呟く。

秀未も知っている。

四年前にこの街にいたという、仮面の戦士。

蘇我高校の生徒相手と、タイマンを張ったとか何とか。

明人やあの青年のような怪人がいるのだから、もしかしたらこの事件に関わる内に会うかも知れないと思っていたが、まさか明人がそうだったとは……。

「ふん……」

そう嘆息してから、明人は消えるような速度でカイザの背後に回る。

「なっ……のわっ！」

剣の怪人の時よりも素早い動きで、カイザに何度も斬撃を与えている。

「ちっ、いきなりかよ。けど……」

『EXCEED CHARGE』

デジカメ型のデバイスを拳に取り付けたカイザが、携帯のENTERを押す。

背後にいたエクスカリバーの胸部に、強く叩きつけられる。

が……ダメージはほぼ半減されてしまう。

「お、おい……」

『EXCEED CHARGE』

もう一度拳を叩きつけるカイザ、だが……エクスカリバーには傷一つつかない。

「くそ……！ くそ！ またこの流れかよ！」

何度叩きつけても、カイザの拳がエクスカリバーに届く事はない。俺の拳は強いんだ！ 俺を馬鹿にする奴らを殺せるくらい、強いんだ！ たかがそんな道具一つで強くなった奴なんか……なんで！」

「お前の拳に、本気で強者を目指す意志を感じられないからだ」
「なっ……」

「お前が本当に強くなりたいのなら、俺の身体は応えてやる。だが……そんな意志もない者の拳で傷付く程、この力は甘くない！」
「くっ……くそ……」

「倒されたくなければ、今の内に覚悟を決めろ」

その告げてから、エクスカリバーが姿を消して剣を叩き込み続ける。

カイザには攻撃を見る事が出来ない。

秀未には、微妙にだが見えている。

これは……どういう……。

「真の強者を目指す意志が無ければ、もう俺の剣閃を見る事は叶わない」

「この……ッ！」

「見れないのなら、お前は所詮その程度だったという事だ」

残酷にそう告げるエクスカリバー。

散々斬りつけた後、エクスカリバーはベルトを操作する。

「終わりだ」

『FINAL DRIVE！』

『AWAKE！』

エクスカリバーは姿を消し、四つに分裂する。

だがそれすらカイザには見えていないのか、全く違う方を向いていた。

見えない攻撃に、カイザはただ喰らう他無かった。

「はアッ！」

最後の一撃は、剣から放たれる白銀の光で吹き飛ばす一撃。

カイザのベルトは勢いよく吹き飛ばされ、変身が解除される。

青年は苦し紛れに、灰色の怪人の姿に変身して最後まで抗う。

「クソオオオオツ！」

だがエクスカリバーは、明人は攻撃しなかった。

怪人の身に、変化が始まっていた。

「な……………う？」

青年の身体が、砂で作られた人形が風で飛ばされた時のように、段々と灰と化して崩れていく。

「そんな……………まさか……………」

「あの力を振るうお前は確かに強かった。だが……………お前には過ぎた力だった。そういう事だ」

「ふぎけるな！ 力を持つてる奴に振り回されて死んで、そういう奴らに全員死んで欲しいと思っただけなのに、その何が悪い！」

青年は涙を流す。

「……………現実、非常だ」

足利明人とアイドル剣士 第十一話

「願い、努力しても、自分の望む物なんて手に入るかどうかは分からないし、そもそもその努力が自分に出来るのかどうかすら、やるまで分からない。努力すら出来ず死ぬ者もいる。ただ一つ言えるのは、現実と向き合わずに他人や周りの環境に八つ当たりをするような者に、望む物など手に入らないという事だ」

「なんだよ……なんだよそれ」

「お前が手に入れた力を、自分を高める為に使えば、お前が本当に欲しいものが手に入ったのではないか？」

「……」

「それとも、ここで死ぬ事が本望だったのか？」

「……ハハ……ハハハ……。アンタ、やっぱ俺じゃ理解なんて出来ねえや」

青年は笑いながら、涙を拭く。

「俺はアンタらみたい誰かの下とか御免だ。そのせいで死んだのに、誰かの下で満足なんて出来るわけねえだろ」

明人は、秀未を強者と認めてくれた。

けど……青年の気持ちは理解出来た。

本当は自分の憧れの人より強くありたい。

下なんかで満足したくない。

自分に自信を持ちたい。

青年は誰かの下だったというだけで一度命を失った。

自分なら、それでも歪まずにいられるだろうか。

「あーあ……最悪な人生だったな。最後の最後まで、俺は強者がマウント取る為の都合の良いザコのままです……ホントに……さいあく……」

青年は、そのまま物言わぬ灰へと姿を変えた。

明人がそれを確認してから、変身を解く。

「もし生まれ変わった時は、幸福の為に努力出来る強い人間になれる

事を、俺は祈っておく……」

目を閉じて、明人はそう呟いた。

※※※

明人の黙祷が終わった後、秀未は明人に近付く。

「……」

「ありがとうございます……」

そして、もう一度礼を言った。

「礼を言うのは、こつちもだ。お前の言葉で、俺も目が覚めた」

「そんな……私なんて明人さんに比べたら……」

「なら、比べる必要がないくらいまで腕を磨けば良い」

「え……」

秀未は思う。

自分に、そんな事が出来るのか、と。

だが明人は言う。

「お前は掟を破っても自分が強くなる事に拘り、その上戦いの中で大切な事に気付けた。あとはお前が、これからどう考えて進むかだ。もしそれがお前にとつて正しい道なら、結果はあとでついてくる。俺に負けた一人の少女は、そうして俺を倒したんだ」

「私が、その人のように……努力すればなれるのですか？」

「それは分からん。あいつの根性も考えも、俺の知る常識を逸脱していて、正直さつきも真似しようとして痛い目を見た」

自分の身体を見て、やれやれという顔をする明人。

そして真面目な顔に戻り、

「一つ助言をするなら、明智秀未。もう明智の人間だからという考えで強くなろうとするな。お前はお前だ。明智の人間すらも超える強者を目指して歩け。目標は高ければ高い程、道を進もうとする気持ちが強くなる。だから、そうやって生きてみる」

「……けど、私はこれから勘当される身。これ以上強くなる事は……」

出来ない。秀未がそう呟こうとする前に、一つの声が聞こえた。

「諦めるのか？」

明人の声ではない。

誰よりも愛しいと思う、厳しくも優しい響きのその声。

兄……三栄の声だ。

「あ……兄上!? どうしてここに……!」

秀未は動揺する。

三栄は至つて冷静に、秀未に告げた。

「どうしても何も、僕は全て見ていた。お前は完璧に盗んだつもりかも知れないが、自分の持ち物が盗まれて気付かないわけがない」

「それならどうして……」

「父には反対されるかも知れないが、僕はお前を試したかった。向上心が高く、負けず嫌いなお前が力を入れた時、どういう風に動くのか」

「……」

秀未はやや俯く。

それなら、きっと兄は思った筈。

「それなら、言わなくても分かってます。私には、この刀を振るう資格はまだない。私は兄上や、その明人さんの足元にも及ばない。私の力など……」

「確かに、お前の力は完全ではない」

三栄はそう告げる。

「試合で勝てるだけの強さでは、生死に関わる戦いを生き残れない。ましてや、それで満足しているなら尚更だ」

三栄が、秀未に言った言葉だ。

今回の戦いで、それは身に染みていた。

刀で傷付けてしまうかもと恐怖したり、死んでしまうかも知れないと恐怖したり、悔しいと思ってもそれを覆せない事に絶望したり。

そんな醜態を晒した自分など、褒められたものではないとよく分かる。

「……」

「だが、お前はそれでも自分がやれるだけの事をした。敵を倒す力だけが、生死に関わる戦いで必要なものではない。己の役割を果たし、敵を倒す力を持つ者の動きを学び、これから活かす。それも必要な

力だ。そしてお前は、最後にそれを果たす事が出来た」

秀未は顔を上げた。

「明智秀未、よく戦った」

三栄はそう、秀未を称賛する。

秀未はこの時ばかりは兄に対しての顔ではなく、師に対しての顔を
して深く頭を下げる。

「大変勿体ないお言葉にございます」

※※※

明人はそれを見届けてから、そのまま帰ろうとした。

だがそれを、三栄が止める。

「お前は確か、足利明人だな」

「……」

立ち止まった明人に、続けて言う。

「妹を守ってくれた事、礼を言う」

明人は振り向かず告げる。

「……それほどの強者なんだ。死ぬのは惜しい」

「お前もやはり、分かるのだな」

「ああ……分かるさ。お前が強者とは何かを教えてくださいましたからな」

今でも、明人は三栄の言葉を覚えている。

自分を倒した三栄が、明人に竹刀を向け言った言葉を。

『お前が強くなるように、お前がこれから戦う相手も
日々強くなる。今お前が僕を倒せた所で、その先で僕より強い相手に
当たればお前は負ける。お前や僕が目指す場所とは、元より存在しな
い領域だ。目標は大事だが、終点を自分で決めては強くはなれんぞ』
「秀未は最後に、存在しない終点を目指す決意をした。お前と同じよ
うにな」

「……」

「そいつはこれからも強くなる。そしていつか、またその刀で俺と戦
うように頼んでくれ」

明人は振り向いてそう頼む。

三栄は瞳を閉じて、少し笑んだ。

「構わない」

「……ふん」

明人も小さく笑む。

今度こそ、背を向けた。

そして……約束を交わす。

「またいつか、お前に挑みに来る。その時まで、その剣を鍛えておけよ」

再戦を誓った好敵手の言葉は、至って単純だ。

「言われるまでもない」

その言葉を聞き、明人は歩き出す。

明人はこれからも、自分の思う強者を目指す。

三栄、美咲、そして秀未のように。

明智秀未がこれからも精進して、三栄と交わした約束を守れば、いつか戦える日も来るだろう。

そう思えば、活力になる。

足利明人とアイドル剣士 第十二話

あの日から、数日の時が過ぎた。

第一発見者が兄である三栄、そして三栄も自分が出掛けた理由を警察の依頼をこなしに行くという嘘を吐いてくれたおかげで、この件はお咎めなし。

問題なく秀未と三栄は弟子と師範、そして妹と兄に戻った。

明人さんが言っていたいつか戦いたいという約束、秀未もそれを果たしたいと春休みの期間を修行に費やした。

今は……いくら思い出しても、あの強さに追いつけるイメージがない。

けど、背中を追えれば前に立てていた目標くらいは越せるかも知れないし、明人さんと並べるかも知れない。

そう信じるしか、自分に出来る事は無いのだから。

そして、そうしていたらいつの間にか春休みが終わっていた。

今日は入学式。

だが秀未のやる事は変わらない。

朝食前から、道場で一人竹刀を振るう。

強者と戦う事、命のやり取りをする事も意識しながら。

心臓が激しく跳ねる音がする。

あの戦いを経ても、まだ命のやり取りに身体がついていけないせいだろうか。

それもきつと慣れる。

身体と共に心が強くなれば。

「強くなるのは構わんが、人の命を奪う事だけは考えるなよ」

竹刀を振るう秀未に、近くを通った三栄が声を掛けた。

秀未は振る手を止めて、頭を下げる。

「おはようございます、兄上」

「あの日から精が出るな」

「いいえ、私は変わりません。明智の人間として、誇りを持てるように

なる。その為に、自分の知る強者達の背中を追う。心構えだけです」
「……それで良い」

三栄は笑みを浮かべる。

そして背中を向けてから告げた。

「朝食が出来ている。今日は入学式であろう？ 遅れるなよ」

「はいー」

秀未は大きな声で、兄の言葉に答える。

※※※

あの後道場を出て、秀未は入学式を迎えた。

他所の道場の人と試合する時と同じように、保護者席から兄が秀未の姿を見ていた。

兄が自分を見る、という光景は同じ。

だけど、不思議と緊張した。

校長の話聞いて、退場し終わった時は、初めて兄の前で誰かと試合して勝った時のような達成感を感じた気がする。

そしてクラスに戻ると、試合が終わって控え席に戻った時のように落ち着けた。

これから三年間を共にする学友達と馴染めるかどうか、そういう不安もあるが、それは始まってから考えれば良い。

今はただ……こうして落ち着いていたい。

「あれ……もしかして」

机に身体を預けていた秀未に、声を掛ける少女が一人。

聞き覚えのある声。

秀未が顔を上げて声の方を見ると、見覚えのある顔があった。

「お前は……」

「あの時のバスターミナルで、助けに来てくれた子……だよな？」

忘れもしない、あの日バスターミナルで秀未が逃がした少女。

あの時秀未は怪人を倒せなかったが、自分の行動で何とかあの場にいた命だけは守り通せたのだけは、秀未は誇りに思う事になっていたから。

けど、また会えるとは思っていなかった。

だからか、助けてくれた子と言われた時に、はいというのも照れくさくて。

「た……助けてはない。私は結局、怪人には勝てなかったしな」

秀未はそう答える。

だが少女は首を横に振るう。

「うん、良いの」

「あの時君が助けてくれたから、私はこうして生きてる。それだけで十分有難いよ」

少女は笑顔でそう言う。

秀未も不思議と、笑顔になっていた。

「そうか」

それ以上の言葉は、考えても思いつかなかった。

だが少女の方から、手を伸ばしてくれた。

「私、雪空真尋（ゆきざら まひろ）。よろしく!」

こういうのって結構、試合前に他の道場の人とやっても照れくさいのだが、秀未は無理矢理にでも笑って返す。

「明智……明智秀未。その……これから三年よろしく頼む」

「うんうん!」

秀未も手を握る。

そして真尋は言う。

「ねえねえ、その……秀未ちゃん」

「なんだ?」

もじもじしている真尋は、何とかこう告げた。

「秀未ちゃんはその、アイドルとか興味ない?」

「アイドル……? その、歌って踊るというアレか?」

「うん!」

秀未はあまりテレビを見ない方だが、アイドルの存在くらいは分かる。

あと……。

「すまないが、私には向いていないと思う……」

歌も踊りも未経験の自分が、いきなりアイドルなど出来るわけがな

いという事も分かっている。

オーディションを受けたら落選間違いなしだろう。

第一、・秀未自身自分をそんなに可愛いと思った事はない。

「んーと、やってみたいとも思っていない感じ?」

「そうは言っていないが、私に出来るとは思えないし、それに……私にはやるべき事が」

明人と交わした約束の為に、これから一生懸命特訓を続ける必要がある。

そんな自分がそれを放棄するなど……。

「今のアイドルは、選ばれてなるものじゃない。なって魅せる事が出来た者が、選ばれるものだよ!」

真尋がスマホの画面を見せる。

アマチュアアイドル。

確か最近流行り出したという、スポーツとして歌と踊りのパフォーマンスをするという競技。

芸能活動というよりかは、一種のスポーツという認識が強く、誰でも始められる上、大きな大会で良い成績を残せば芸能界へという話もあると聞いた。

確かにこれなら、なるだけなら可能だ……しかし。

「それでも、私にはやる事が……」

「なら、たまにでも良いよ。それでも、ダメかな?」

真尋は懇願する。

断れなさそうな雰囲気、中学の時までこんな誘いを受けた事が無かったから、正直困惑していた。

けど事件がキツカケとは言え、初めて対等に話せそうな友を作れる機会。

今まで修行漬けで休む暇を用意した事も無かったが、息抜き程度でも良いというのならば……。

「仕方ないな」

「ホント? 良いの!?!」

「息抜きで参加する程度であれば、別に良い。だが……私はこの十五

年剣のみしかやってこなかった身だ。お前と同じように出来るかは正直分からんぞ」

「私も自信は無いよ。だからまずは、自信を付けられるように頑張りたいの」

真尋の言葉は前向きだ。

剣の道とアイドル、ジャンルは違うが、上を目指す事への前向きな気持ちという点では変わらない。

真尋からも、意志の強さを感じた。

「二人じゃ不安だなんて思ったけど、私を助けてくれた秀未ちゃんが傍にいてくれれば、きつと勇気が湧いてくるかもって思ってた。だからその……私は秀未ちゃんとなら上手くいくって信じるから、秀未ちゃんも私となら上手くいくって信じて……くれる？ その押し付けっぽくなっちゃったけど」

真尋は照れた顔で言う。

「私がいる事でお前の役に立つなら、それは付き合う。それに……私は何も分からない。もしこれから始めるのだとしたら、お前だけが頼りだ。頼むぞ」

「勿論……」

真尋は手を引っ張る。

「さっ、行くよ」

「い、いきなりか」

「こういうのは勢いが大事なんだよ！ 早く行くよ！」

こうして、二人は友となった。

明智秀未、そして雪空真尋。

彼女ら二人が、アイドル『Rhododendron』として活動する日々は、また別の話……。